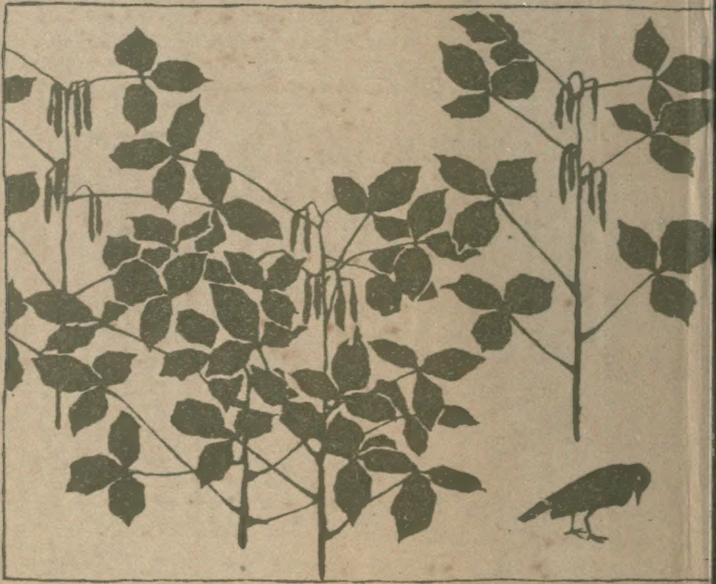
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03009 3637



明治四十五年二月四日印刷
明治四十五年二月七日發行
明治四十五年三月六日再版發行

三國志上卷
定價金八拾五錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

（岡山製本）

通俗三國志上卷　終

生を伴て新野に回り、仁義の兵を起して天下の民を救べし。孔明申けるは、某久く耕を樂み閑なるを好で尊命に從ひがたし。玄德頻りに涙を流して、先生もし出玉はずんば漢の天下は絶果なんと云て哭玉へば、孔明申けるは、將軍もし棄玉はずんば犬馬の勞を施べし。玄德大に喜び、關羽、張飛を召て金帛の禮物を獻り玉へば、孔明辭して更に不受。玄德再三これ大賢を聘する禮にあらず、但寸志の誠を表と申されければ、孔明つひに受納む。其夜は草堂に宿して、次の日諸葛均かへりければ、孔明付囑して申けるは、我劉皇叔三顧の恩を受て行ずんば叶まじ、汝この廬を守て自ら天の時を樂め、われ功成名遂ば又こゝに回べしと云ければ、諸葛均謹で領諾す。此時孔明年二十七。玄德同車すでに新野の城に回り玉ふ。實に周の文王非熊を夢見て渭水に出、太公望を得て同車して回り玉ひし昔の喜に異ならず。新野城に回てより後は、孔明と食する時は卓を共にし寢る時は床を同す、晝夜に天下の事を論じて心甚だ喜玉ふ。或日孔明計を議して、今曹操冀州に在て玄武池を作り舟手の勢を調練す、必ず江南を攻るの計ならん、密に人を遣して其虛實を窺しむべしと云ければ、玄德げにもとて即時に間者を遣さる。

州は沃野千里天府の地なり、漢の高祖この國に據て了に帝業を成玉へり、今太守劉璋才淺く智暗し、張魯北に在て民殷に國富と云ども智謀の人を不能用、みなよき君を得んことを願ふ、將軍は已に帝室の冑、信義四海に露れ英雄を尋ね用て賢を思ふこと渇せるが如し、若荊州、益州を得て其險阻に據、西は諸戎に和し南は夷越を撫し、外好を孫權に結び内政を修て天下の變を待、一人の上將に命じて荊州の兵を宛洛に向せ、將軍自ら益州の勢を引て秦川より出玉はば、百姓誰か簞食壺漿して將軍を迎ざらん、若如此ならば霸業可成漢室可興とて、乃ち童子を召て一軸の畫を正面に掛させて申けるは、此西蜀五十四州の圖なり、昔李熊と云もの公孫述に說て、西川の地は沃野千里民物康阜なりと云り、將軍霸業を成んとの御志あらば、北は天の時を曹操に讓り、南は地の利を孫權に讓り、將軍は人の和を占て先荊州を取て家とし、後に益州を取て都を建玉はば、鼎足の勢成て了には中原を圖べし。玄德これを聞て席を避て謝して曰、先生の言忽ち我茅塞を開き、雲霧を披て靑天を見るが如し、惟恨らくは荊州の劉表、益州の劉璋共に漢室の宗親なれば、我その國を奪に忍ず。孔明の曰、某天文を見るに劉表この世に久からじ、劉璋は立業君にあらず、後了には將軍の手に入んと、いまだ草廬を出ずして已に天下三分の計を定めければ、玄德かぎりなく喜て曰、われ名微に德薄と云ども、願くは先

みな大なる愆なるべし。玄德の曰、夫賢人は文武の業を學なし、方に身を立て道を當時に行ひ、名を後世に傳て父母の名を顯を以て孝とす、民を水火の中に拯ひ君を堯舜に致を以て忠とす、今先生經世の奇才を抱て老を山林に好み、空く一身を安くせんと思ひ玉ふは、恐くは忠孝の道に背べし、孔子だも猶國中を巡て世人を敎化し玉へり、願くは先生某が愚鹵を開て敎を示し玉はゞ萬幸なるべしとて再拜せられければ、孔明申けるは、將軍もし某が愚論を聞玉はんとならば當に中心を露べし、先將軍の御志を聞ん。玄德左右の人を退け前に趨で申されけるは、漢室傾頽して姦臣竊〻命主上蒙〻塵、われ不〻量〻力大義を天下に信んと思ふに、智術淺短なるを以て逆徒猖獗して今日に至る、然れども志いまだ已ず、先生いかなる計を用玉はん。孔明答て曰、董卓より以來豪傑幷起り、一州一郡を持て朝廷に背もの數を知ず、曹操は袁紹よりも弱く、名小に兵寡し、然れども却て袁紹を滅たるは、曹操天の時を得のみならず人の謀多き故なり、今百萬の勢を率ゐ天子を挿で諸侯を伐、これ眞に鋒を爭がたし、吳の孫灌は江東の地を保ち、已に三世を經て國險く民服す、賢能これに仕て其勢大なり、共に好を結とも戰ふ事を爲べからず、荆州は北の方漢水、沔水の險ありて利南海を盡、東は吳會に連り西は巴蜀に通じて、此眞に武を用るの地なり、よき主に非んば不〻能〻守、これ天將軍を資る所以なり、益

時ばかり立て全身倦疲玉ふ所に、孔明忽ち醒て詩を吟じて曰、

大夢誰先覺　平生我自知
草堂春睡足　窓外日遲々

吟じ了て身を飜し、童子を召て問て曰、曾て俗客の來るありや。答て曰、劉皇叔階下に在て久く待玉ふ。孔明急に起あがり、何ぞ早く知せざるぞと云て後堂へ入、衣を整へ冠を正して出迎ふ。玄德進で孔明を見玉ふに、身の長八尺、面は冠玉の如く頭に綸巾を戴き身に鶴氅を披て、眉には江山の秀を聚め、胸には天地の機を藏し、飄々然として當世の神仙なりければ、乃ち下拜して、漢室の鄙徒涿郡の愚夫、久く先生の大名を聞て雷の耳に轟が如し、向に兩度ここに來り賤名を文几に書せり、如何覽玉ふやと申されければ、孔明申けるは、南陽の田夫觸レ事疎懶なり、屢將軍の駕を枉玉ふに遇て感激の情に堪ずとて、賓主を分て坐しければ、童子茶を獻る。孔明が曰、さきに書簡の意を見て將軍の民を憂ひ國を恤玉ふの切なるを知、但恨らくは某年少く才疎にして政を治ること能はず、必ず下問を慢ん。玄德の曰、司馬徽、徐庶が言豈謬あらんや、先生ねがはくは某が鄙賤を棄ず曲て教を示玉へ。孔明が曰、司馬徽、徐庶は世の高士、某は一人の農夫なり、爭天下の政を譚ぜんや、將軍玉を棄て石を採玉ふは此

玄徳階下に孔明が午睡の覚るを待つ
下官
玄徳

孔明
童子

らん。玄德の曰、汝もし來らば必ず禮を失ふこと勿とて馬を進め玉ふ。已に臥龍岡近く成ければ步行して進み玉ふ所に、諸葛均飄然として出來れり。玄德禮をなして孔明家に在やと問玉へば諸葛均答て、昨日の暮に回り來れり、將軍ゆいて御對面候へと云すて、長揖して走り去ければ、張飛腹を立て申けるは、惡き奴が無禮かな、幸に今參合て伴て廬へ行べきに、何故に走り去たる、我追懸て生取んと鬪きけるを、玄德拖住て申されけるは、彼各有レ事、汝豈知んや、此回幸に孔明に遇ことを得たりとて柴の扉を敲玉へば、童子出て戶を排く。玄德の曰、又仙童を勞せしむ、我來れるを報じ玉へ。童子申けるは、先生家に居玉へども今草堂に晝寐して未レ起。玄德の曰、必ず驚しむべからず、關羽、張飛は門外にて相待とて只一人內へ入、其邊を見玉へば自然に風色幽雅なり。堂上には孔明几席の上に安臥しければ、階下に叉手して立玉ふ。關羽、張飛は久く門外に待居たるが、餘に退屈して竊に內の樣を伺見るに、玄德は階下に立て孔明はいまだ起ず。張飛大に怒て虎鬚倒に竪のぼり、關羽に向て申けるは、此先生は何とて右無禮なる、己は堂上に晝睡をして兄を階下に立しむ、我いま廬の後より火を付て、この先生が起るか起ぬかを見んとて走廻けるを、關羽推止れども不レ住。玄德は一時あまり立て堂上を見玉へば、孔明寐反して起んとせしが又壁に朝て睡れり。童子進て起さんとしけるを玄德又推とゞめ、已に二

玄德兩度まで孔明に遇ず、空く新野へ回られけるに、荏苒として今年も暮ぬ。明れば建安十三年、卜者に命じて吉日を擇せ、三日齋して身を清め、又孔明を尋んとし玉へば、關羽、張飛不㆑喜、諫て申けるは、浩る賤き人を尋んとて兩度すでに駕を枉玉へり、其禮甚だ過たり、某想に、孔明みだりに虚名を發て内に實學なき故に遁れ避て不㆑遇ならん、豈聞玉はずや聖人も毋㆓以㆑貴下㆑賤、毋㆓以㆑衆下㆑寡 と云り、何とて此人に惑され玉ふぞ。玄德の曰、關羽は春秋を讀で定て知べし、齊の景公、東郭の野人に逢んとて諸侯の身にて五度まで尋玉へり、況や我孔明ほどの大賢人を尋るをや、汝等みだりに言こと勿。關羽嘆じて申けるは、兄の賢人に遇玉ふは昔文王の太公望に逢玉ふが如し。張飛申けるは、いや〳〵我意と相違せり、我等三人天下に縱横して武藝を論ぜんに、誰ありてか肩を雙る者あらん、如何なれば一人の農夫を賢人なりとて心を惑し玉ふぞ、この度は自ら行玉ふに及ばず、某只一條の麻繩を以て忽に縛て來ん。玄德叱て申されけるは、昔周の文王西伯たりし時、天下を三分して其二を有つ、渭水に行て太公望に逢玉ふ時、太公望釣を垂て不㆑顧、文王その後に立て日暮まで去玉はざりければ、太公望その志を感じ、始て物語して了に周の世八百年を開けり、賢人をば如㆑此にこそ敬べきに、汝なんぞ無禮なる、我關羽を伴ひ行ん、汝必ず來ること勿れ。張飛が曰、兄ゆき玉はば我何ぞ跡に殘

の吟をなす。其詩に曰、

一夜北風寒　萬里彤雲厚　長空雪亂飄
改盡山川舊　仰面觀太虛　思是玉龍鬪
紛々鱗甲飛　頃刻遍宇宙　白髪老衰翁
盛感皇天祐　騎驢過小橋　獨嘆梅花瘦

玄徳この詩を聞て必ず臥龍先生ならんとて馬より下て禮をなし、先生寒を冒して無恙や、われ久く相待と云玉へば、彼翁驚て馬より下謹で回禮す。諸葛均後に在て申けるは、此は臥龍が岳父に黄承彦と云もの也。玄徳の曰、さきに吟じ玉へる詩は意味甚だ高妙なり、誰人が作たるぞ。黄承彦が曰、某さきに臥龍の家にて梁父の吟を多く見候ひしが、今橋を過るとて籬に梅の開たるに心付て、屹と存じ出し故に吟じて候。玄徳の曰、先生の婿いづくへか行たる。黄承彦が曰、某も此より行て尋んと欲す。玄徳相わかれて臥龍岡を出玉ふに、風雪滿天寒氣凛々たりしかば、心の中悒快として空く又新野に回り玉ふ。

○定三分孔明出茅廬

龍外に出たれば久く將軍を不可留、先御回候へ、他日行て回禮有んと玄德の曰、われ何ぞ先生の駕を枉玉ふことを望ん、數日の後われ又來るべし、願くは紙筆を借玉へ、書簡を遺して我慇懃の心を知しめん。諸葛均乃ち文房の四寶を具て獻りければ、玄德凍りたる筆を呵し、雲箋を展て書玉ふ。其書に曰、

漢左將軍宜城亭侯司隷校尉領豫州牧劉備、歲經兩番相謁、不遇空回、惆悵怏々不可言也。切念、備漢朝苗裔忝居皇叔、濫當典郡之階、職係將軍之列。伏覩、朝廷陵替、綱紀崩摧。當群雄亂國之時、惡黨欺君之日、備心肺俱酸、肝膽幾裂。雖有匡濟之忠誠、奈無經綸之妙策。仰啓、先生仁慈惻隱、忠義慨然、展呂望之良才、施子房之大器。備敬之如神明、望之如山斗。欲求一見而不可得、再容十日齋戒薰沐特拜尊顏。乞垂寛覽、鑒察幸甚。

建安十二年十二月吉日再拜

玄德書を遺して別れ玉へば、諸葛均門外まで送る。已に馬に乘玉ふ所に、童子籬の外より手を擧てさしまねき、老先生來れりと云ければ、玄德之を見るに、一人の老翁煖に頭巾を戴き狐の裘を披て驢馬にのり、葫蘆に酒を入て童子に持せ雪を踏で來りけるが、小橋を過て梁父

救二生靈于塗炭一兮、到處平夷。立二功名于金石一兮、拂レ袖而歸。

玄德堂に上て禮をなし、某久く先生を慕て拜會するに緣なし、向に徐庶が薦に因て敬で仙庄にきたると云ども、不レ遇空く回る、今又風雪を凌で此に來り、幸に尊顏を拜すと申されければ、彼人大に驚き答禮して申けるは、將軍は新野の劉皇叔、某が兄臥龍を御尋候なるか。玄德色を失て申されけるは、先生も亦臥龍にては無か。答て曰、臥龍が同腹の兄弟三人あり、一人は諸葛瑾、いま吳に仕て孫權が幕賓たり、第二は諸葛亮、これを臥龍と申、某は臥龍が弟諸葛均なり。玄德の曰、臥龍は何くに居玉ふぞ。諸葛均が曰、今朝博陵の崔州平誘引して出去り。玄德の曰、いづくへとて出玉ひしぞ。諸葛均の曰、或は小舟に乘て江湖の中に遊び、又は僧を尋て山林に入、朋友を村僻の中に訪、或は琴碁を洞府の間に樂み、往來無レ測、ゆく所を知がたし。玄德の曰、われ如レ此因緣薄して兩度まで賢人に遇ず。諸葛均席を設て茶を獻りければ、張飛申けるは、孔明が居ずんば坐して益なし、早く馬に乘て御回あるべし。玄德の曰、われ自ら此に來て一言を遺さで回るべきか、汝多く舌を搖こと勿とて諸葛均に向て、孔明は能六韜三略を諳じ、日に兵書を讀玉ふと聞しが實なるかと問玉へば、諸葛均答て知ずと申。張飛聲を荒らげて無用の長問答に吹雪いよ〳〵夥し、何とて早く回り玉はぬぞと云ければ、諸葛均申けるは、臥

二人謠了て手を拍て笑ひければ、玄德これは必ず臥龍先生なるべしとて、馬より下て內へ入玉ふに、二人卓に凭て對坐して酒をのみ居たりしが、上なる老人は面の色白して鬚長く、下なる者は貌古奇にして淸潔なりしかば、進で問て曰、それなるは臥龍先生にては無か。上なる老人答て申けるは、將軍は如何なる人ぞ、今なに事にか臥龍を尋玉へる。玄德の曰、我は漢の左將軍領豫州牧、新野城の劉備字玄德なり、今先生を尋るは世を濟ひ民を安ずるの道を問ん爲なり。老人申けるは、我等は皆臥龍にては候はず、臥龍の友にて此處に世を遁れたる者なり、我は潁州の石廣元、これは汝南の孟公威にて候。玄德喜て申されけるは、久く大名を聞て、今幸に見ることを得たり、願くは相伴て臥龍先生の盧に行ん。石廣元が曰、われ等は山林疎懶の隱者なれば、治レ國安レ民の心なし、世に出て益あるまじ、將軍早く臥龍を尋て御問候へ。玄德別て馬に打のり、臥龍岡に到て柴門を扣玉へば、內より童子出合たり。玄德問て曰、先生家にありや。答て曰、今堂上に在て書を讀候。玄德心喜び、內へ入て堂上を見玉へば、凭レ爐抱レ膝高らかに歌を謠ふ者あり。其歌に、

鳳翺二翔于萬里一兮、無レ玉不レ棲。吾困二守于一方一兮、非レ主不レ依。自耕二隴畝一兮、以待二天時一。
聊寄二傲于琴書一兮、吟二詠乎詩一。逢二明主于一朝一兮、更有二何遲一。展二經綸于天下一兮、開二創鎡基一。

関羽

玄徳關羽張飛と
倶に臥竜岡へ赴く
玄徳
張飛

廬近くなりて路の傍なる酒店を見れば、内にて高く歌を謡ものあり。玄徳馬を酒旗の下に住て聞玉へば、其歌に曰、

壮士高名尚未成、嗚呼久不遇陽春。君不見東海老叟辭荊榛、石橋壮士誰能伸、廣施三百六十鈞、風雅遂與文王親、八百諸侯不期會、黄龍負舟渉孟津、牧野一戰血漂杵、朝歌一旦誅紂君。又不見高陽酒徒起草中、長揖山中隆準公、高談大覇驚人耳、二女濯足何賢逢、入關馳騁誇雄辯、指麾衆將如轉蓬、更有何人堪繼踪。二人功績尚如此、至今誰肯論英雄。

又一人卓を撃て謡者あり、其歌に曰、

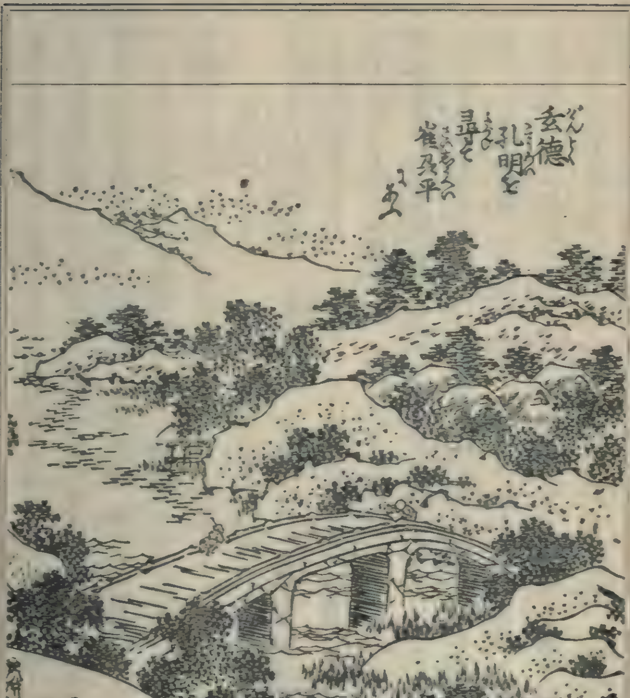
吾皇提劍淸寰宇　一定強秦四百載
桓靈未久火德衰　奸臣賊子調鼎鼐
青蛇飛下御座傍　又見妖虹降玉堂
群盗四方如蟻聚　奸雄萬里皆鷹揚
吾儕大嘯空拍手　悶來村店飲村酒
獨善其身盡日安　何須萬古名不朽

〇玄德風雪訪孔明

玄德空く新野に囘り、數日を經て人を遣し孔明を尋ねさせらるゝに、已に囘て家に在と申ければ、又馬を備て行んとし玉ふ。時に張飛すゝみ出、これ程に賤き田夫を只使を以て召寄せ玉へ、何とて自ら行んと宣ふぞと云ければ、玄德の曰、汝書を讀ざる故に禮を知ず、孟子云る事あり、齊景公田、招虞人以旌不至、將殺之、孔子曰、志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元、孔子奚取焉、取非其招不往也、いま賢人を見て其道を以せざるは、是內へ入んとして自ら其門を閉が如し、孔明は命世の大賢なり、豈召來らしむることを得んやとて、了に馬に乘て出玉ふ。建安十二年冬十二月の半なれば、寒氣甚く彤雲四方に布り。已に五里ばかり出玉ふに、朔風凜々として雪を吹こと頻に、山は玉を種たる如く、林は銀を粧に似たり。張飛申けるは、天寒く地凍て年月も移り去、いかなれば軍をもせずして無益の人を遠く尋玉ふぞ、先新野へ立囘て此大雪を避玉へ。玄德の曰、われ右するは孔明に慇懃の意を知しめん爲なり、汝寒氣を厭ば此より囘れ。張飛の曰、われは死ることをも怕ず、何ぞ寒氣を厭こと有ん、但益も無ことに心を苦玉ふを思ふ故なり。玄德の曰、汝必ず多言すること勿れ、唯われに從ひ來れとて、已に

四夷不足化して七雄となる、七雄不足化して秦漢となる、秦漢不足化して黄巾となる、黄巾不足化して曹操、孫權と將軍とになる、互に伎し奪て萬民を殺害す、是天理の常なり、往是今非、昔非今是いづれの日にしてか已んや、將軍いま孔明に逢て計を問んと欲し玉ふ、假令孔明天地を斡旋し乾坤を扭捏するの力ありとも、恐くは此亂を治ること能はじと云ければ、玄德謝して申されけるは、幸に先生の教を蒙る、孔明は何くへ行たる、知玉はずや。崔州平が曰、我も今孔明を尋んと欲す。玄德の曰、ねがはくは先生を伴て同く新野に回ん。崔州平が曰、某は山野の人、世の名利に意なし、他日再び相見せんとて、長揖して別去けり。玄德も馬に打のり玉へば、關羽申けるは、向に崔州平が云し事を尤と思し食か。玄德の曰、これ皆隱者の定れる言なり、我も固より能その理を知り、方に今亂極の時、聖人も危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱と云り、其理まことに當然なれども、如何せん漢室危して社稷崩んとす、民倒懸の急あり、我は是漢宗の宗親、況や諸將も力を竭して相佐く、亂を治め危を救ずして坐ら見て居べきか。關羽が曰、昔屈原が身を捨て楚の懷王を諫たりしは親族なるを以て也、兄の言この理に合へりとて、共に新野へぞ回ける。

州平と云もの也。玄徳の曰、久く先生の大名を聞り、暫く此に坐し玉へとて共に岩の間に坐し玉へば、關羽、張飛その傍に立。崔州平が曰、將軍いま孔明を尋玉ふは何故ぞ。玄徳の曰、今天下大に亂て盜賊蜂の如に起る、我孔明を尋るは治レ國安レ民の計を問ん爲なり。崔州平笑て申けるは、將軍亂を定んとの御志は尤よしと云ども、恨らくは治亂の道理を明玉はず。玄徳問て曰、ねがはくは治亂の道理を聞ん。崔州平が曰、將軍棄玉はずんば一言を說ん、古より以來治極る時は生レ亂、亂極る時は生レ治、寒盡れば暖、暖盡れば寒、四時の相傳るが如し、漢の高祖白蛇を斬て義兵を起し玉ひてより、秦の亂を定て治に入なり、哀帝、平帝の世に及まで二百餘年、太平日久し、時に王莽位を簒て天下大に亂る、是治より入レ亂なり、光武洛陽に中興して又漢の世を整ふ、是亂より入レ治なり、光武より今に至まで二百年、民安く國靜なりしに、近ごろ干戈競ひ起る、是治より入レ亂なり、方に今大亂の始て起れる時なれば、いまだ急には治るべからず、豈聞玉はずや、天生天殺何れの時か是盡ん、人是人非甚の日而休んと云り、久聞り、大道不レ足化して術となる、術不レ足化して德となる、德不レ足化して仁となる、仁不レ足化して儉となる、儉不レ足化して仁義となる、仁義不レ足化して三皇となる、三皇不レ足化して五帝となる、五帝不レ足化して三王となる、三王不レ足化して五覇となる、五覇不レ足化して四夷となる、


玄徳孔明を尋て崔州平にあふ

豫州牧新野皇叔劉備字玄德自ら來て先生に見んことを求と云玉へば、童子申けるは、我さほど長き名を覺ること能はず。玄德げにもと打笑て、新野の劉備來れりと云玉ふに、童子申けるは、先生は今朝早天に出たり。玄德の曰、何くへか行玉ひしぞ。童子申けるは、蹤蹟不定、いづくとも料がたし。玄德の曰、いつか歸玉ふべきぞ。童子申けるは、或は三五日或は十餘日、いつ回んも難知。玄德これを聞て力を失ひ、惆悵として立玉へば、張飛申けるは、孔明居ずんば早々に御回候へ。玄德の曰、われ暫く待て對面せん。關羽が曰、不如先御回ありて、重ねて使を以て尋ね聞せ、那後に來り玉へ。玄德この義に從ひ童子に向て申されけるは、先生回り玉はば新野の劉備きたれりと云傳へよとて、馬に乘て二里ばかり出玉へば、隆中の風景毎見羨からずと云こと無、山は不高秀雅に、水は不深清澄なり。地は狹けれども平に、林は小にして茂盛せり。松竹交翠、猿鶴の遊樂氣色、まことに浮世の外に思はれ、暫く馬を住玉ふ所に、忽ち神氣清爽にして眉目秀雅なる人、頭に逍遙烏巾を戴、身に青布の道服を披て藜の杖を携へ、山陰の小路より飄然として來ける。此必ず臥龍先生ならんとて馬より下て禮をなし、先生は孔明にては無かと問玉ふに、那人驚て申けるは、將軍は如何なる人ぞ。玄德の曰、われは新野の劉備字は玄德なり。那人申けるは、我は孔明にては候はず、乃ち孔明が友に博陵の崔

へり、樂毅は齊の七十餘城を攻落して、二人共に春秋の名人、功天下を蓋ふ、孔明自ら此に比するは甚だ以て過分ならん。司馬徽嘆じて申けるは、孔明なんぞ妄に比せん、我よく思ふに周の世八百年を興せし太公望、漢の天下四百年を創し張子房、この二人に比すべしとて、階を下て禮を展、すでに歸り去んとするに、玄德しばしと留玉へども肯て住ず、天を仰で大に笑ひ、雖臥龍得其主不得其時と云て飄然として去ければ、玄德嘆じて曰、これ實の隱君子なり、我速に孔明を尋んとて、次の日關羽、張飛と數十人を卒して隆中へ赴玉ふ。路すがら風景を詠て馬を進る所に、山の畔に人あつまり田を耕して謠ふを聞ば、其歌に曰、

蒼天如圓蓋　陸地如碁局　世人黑白分　往來爭榮辱
榮者自安々　辱者定碌々　南陽有隱君　高眠臥不足

玄德馬を住て、この歌は如何なる人の作りたるぞと問玉へば、農夫答て、これは臥龍先生の作なりと申す。玄德臥龍先生の棲は何くぞと問玉ふに、是より山の南に一帶の高き岡あるは臥龍岡なり、岡の前なる林の中に茅の廬の候こそ諸葛先生高臥の地にて候と敎ければ、玄德馬を進めて二三里ばかり來り、臥龍岡を望玉ふに、風景淸然として山川常に異なり。已に廬の前に到りて馬より下、自ら柴の戸を扣玉へば、內より一人の童子出たり。乃ち漢の左將軍宜城亭侯、領

れば、たとひ曹操なんどが囚へたればとて我子を召が如の人に非、老母が書簡と云は必ず曹操が所爲ならん、徐庶もし行ずんば其母無事なるべきに、行て對面せば母は必ず死候はん。玄德驚て其故を問玉へば、司馬徽申けるは、老母は貞烈の女なり、其子を見ることを羞べし。玄德の曰、徐庶わかれに臨て南陽の諸葛孔明を薦む、此いかなる人にて候ぞ。司馬徽笑て申けるは、己が去ならばさて有べきに、無用の言を吐出して又他人を苦めんとす。玄德の曰、先生いかなれば浩る事を云玉ふぞ。司馬徽が曰、孔明は瑯琊郡の人にて、博陵の崔州平、潁州の石廣元、汝南の孟公威、徐庶なんどを友として交ること甚深し、常に一處に在て學業を勵しけるが、何れも皆精純にして孔明殊に大略を得たり、晝夜相共に道を論じ、孔明自ら膝を抱て長吟し、汝等四人もし仕官して世に進まば、一州の刺史と成ん一郡の太守と成べしと申けるを、御邊は如何にと其志を問に、孔明只笑て答ず、是を以て其人を想見玉へ。玄德の曰、潁州いかなれば如レ此に賢人多く集るぞ。司馬徽が曰、昔殷馗と云し人よく天文に通ぜり、群星の潁州の分野に集るを見て、此地必ず賢人多かるべしと云り、今孔明が隆中に居、つねに好で梁父の吟をなし、自ら古の管仲、樂毅に比す、その才まことに測がたし。關羽側に在て申けるは、古の管仲は一たび天下を匡し九たび諸侯を合す、孔子も之を稱して 徴ニ管仲一吾其披レ髮左レ衽と宣

て行けれども早息絶て失たりしかば、大に聲を放て哀み哭き、昏絶して地に倒れ、久して後甦る。曹操この由を聞て人を遣して喪を扶、棺槨を具て許昌の南原に葬らしむ。其のち諸大將を集て南方に發向し、玄德を平んと議するに、荀彧申けるは、時いま極寒に迫て兵を出すべからず、姑く來春を相待、冀州に行て漳河の流を引、池を作て玄武池と名づけ、舟手の勢を調練して長く驅て大に進まば、天下席の如に捲て誰か能防ことを得んと諫しかば、曹操げにもと同じていまだ動ず。

〔玄德三顧二茅盧一〕

去ほどに玄德は徐庶に別て後、孔明を尋んと議せられける所に、一人の老翁峩き冠を戴て道貌常ならざるが來れりと報じければ、此必ず孔明ならんとて自ら出迎へ玉へば、水鏡先生司馬徽なり。急ぎ後堂に請じて上座を讓り、一度仙顏に別て後は軍務に暇なくして音問にも及ず、幸に光臨を得て不ㇾ堪ㇾ喜と申されければ、司馬徽が曰、近ごろ徐庶この處に在と承り候ひし程に、一見せん爲に參たり。玄德申されけるは、此比曹操その老母を囚ふ、老母書簡を馳て徐庶を召、これに因て都へ上れり。司馬徽が曰、これ曹操か計なり、徐庶が母は元來賢なる女な

るは、御邊は高明遠見の士、何とて身を屈して玄德に仕たるぞ。徐庶が曰、某幼より難を逃ん爲に江湖に遊で、偶新野に到り候へば、玄德に留られたり、老母幸に丞相の慈念を蒙て愧感甚だ深し。曹操が曰、御邊が老母在堂、朝夕これに仕て子たるの道を盡せ、我も亦淸き誨を聞ん。徐庶拜謝して退き、老母の前に出て堂下に再拜しければ、老母驚て申けるは、汝なにとて此に來れる。徐庶が曰、近ごろ新野に在て劉玄德に仕ふ、老母の招き玉へる書簡を見て夜を日に繼で馳來れり。老母大に怒り、色を變じて申けるは、汝世上を流浪すること二十餘年、儒業定めて日々に進んと常に喜しく思ひしに、今なにとて昔には劣たるぞ、汝幼より書を讀て、忠と孝とは二ながら全すること能はざるを知べし、又曹操は君を欺き上を僣る賊なるをも知べし、今玄德は帝室の冑、英才世を掩ひ仁義四海に溢る、天下誰か仰ざらん、我さきに汝が玄德に事ると聞て善君を得たりと悅しく思ひしに、何ぞ一紙の似文を見て眞僞をも詳にせず、明なるを棄て暗に向へるや、汝まことの匹夫なり、我なんの面目ありて汝に對面して先祖の名を玷さんや、天地の間いまより生たる甲斐なしと云ければ、徐庶本より孝心深き者なれば、老母の責を聞て理に服し、階の下にひれ伏て頭をも擡ずして居たりけるに、老母急に起て屛風の後へ入けり。良ありて人走り出、老母いま梁の間にて頸を縊玉へりと告ければ、徐庶駭き慌

雛は襄陽の龐統字は士元、伏龍は諸葛孔明なり。玄德これを聞て躍あがりて長嘆し、今日始て伏龍、鳳雛の疑を晴せり、不レ料き大賢人いま目の前に在んとは、御邊の教に非んば我無レ眼の人に同からんと申されければ、徐庶拜じ別れて飛が如くに去にけり。玄德は伏龍、鳳雛の事を聞て夢の初て醒るが如く、諸大將と新野に回り、禮物を用意して孔明を尋んと議せられける。

徐庶はいよ〳〵馬を早めて上りけるが、心の中に深く玄德の恩を感じ臥龍岡へ立よりければ、孔明對面して問て曰、御邊こゝに來るは何の爲ぞ。徐庶が曰、某は新野の劉玄德に仕たりしが曹操に老母を捕られて已ことを得ずして都へ上る、某別に臨で先生を玄德に薦、若召るゝことの有ば願くは辭することなく、平生の大才を展夙昔の所學を施し玉へ。孔明勃然として色を變じて申けるは、御邊は我を以て祭の犧に爲んとするかとて袖を拂て入ければ、徐庶心の中慚愧して爲べき樣なく、都を指て馳たりけり。孔明が祭の犧と云しは、昔莊子を用んとて招もの有しに、莊子その使に對して申けるは、子かの犧の牛を見ずや、常に錦繡を被せ芻菽を食しむと云ども、牽て太廟に享らるゝ時は孤犢と爲んことを欲しても不レ能、是位高にのぼり祿重を得るは好と云ども、臨レ事君の爲に命を棄ることを云る者なり。時に建安十二年冬十一月、徐庶すでに都に著ければ、曹操先荀彧、程昱を出して迎しむ。徐庶内に入て再拜しければ、曹操申け

んとて心よろこび、馬より下て待玉ふに、徐庶も近く成て馬より下。玄德の曰、御邊いま回り玉ふは必事の仔細あらん。徐庶が曰、心亂て痲の如く、一言を云殘せり、一人の大賢人、襄陽の二十里隆中と云ところにあり、君この人を尋玉へ。玄德の曰、御邊ねがはくは我ために招き來れ。徐庶が曰、この人は某が比の者に非ず、君自ら行て御遇候へ、召來すことは能はじ、若この人を得玉はゞ、周の太公望、漢の張子房が如し、經綸濟世の才天地を補ふ手段あり、常に自ら古の管仲、樂毅に身を比す、某が心には管仲、樂毅も中々この人には及ぶまじと存ずる也。玄德の曰、その人の才御邊に比せば如何ん。徐庶が曰、某をこの人に比せんは駑馬の麒麟に竝び、鴉の鳳皇に作が如し、眞に天下の一人なり。玄德喜て申されけるは、願くは賢人の名を聞ん。徐庶が曰、この人は瑯琊陽都の人にて、漢の司隸校尉諸葛豐が後胤なり、父諸葛珪字は子貢早世の後は叔父の諸葛玄に從ひ、其後弟諸葛均と兄弟倶に南陽に耕し、好で梁父の吟をなす、諸葛亮字は孔明と申者なり、屋の後に岡ありて臥龍岡と號す、此故に自ら臥龍先生と呼、眞に當世の大賢人なり、君早く駕を枉て對面し玉へ、若この人をだに得玉はゞ、天下を不得ことを憂玉ふな。玄德の曰、往日司馬徽が山庄に宿せし時、伏龍、鳳雛二人の内を一人得ば天下を定めんと云り、我その名を問ば好々とばかり答たりしが、若その人にては無か。徐庶が曰、鳳

曰、われ想に天下恐くは御邊に及ぶ者あらじ。徐庶が曰、某は樗櫟の散才にして物の用に立がたし、君宜く棟梁の才を尋玉へとて、諸大將に向て申けるは、願くは諸公よく君に仕て忠を盡し、名を後代に傳玉へ、某が始終を能せず半途にして出るに効玉ふな。諸大將も皆別に忍ず、玄德は涙雨の如く、又轡を双べて暫く送、御邊と別て我心割が如し、又漢の天下を扶て民を救んと思ふ心なしと云玉へば、徐庶が曰、君よく〳〵御身を保て某が再來るを待玉へ。玄德の曰、共に相わかれて後は互に天の一方、又いつ遇べきも知ずとて、不覺又十里送り玉ふ。徐庶馬を住め、君の右送り玉へるも御勞に存じ候へば此處にて別奉り、夜を日に繼で路を急ぎ、片時も早く老母に對面申んと云けれども、又十里送り玉ふ。諸大將馬を扣て何く迄送らせ玉ふとも御餘波は盡候まじ、此より歸り玉へと申ければ、玄德馬上にて徐庶が手を執、いま御邊に別ては我いかゞせんとて袖を掩て立玉ふ。徐庶は涙に咽でものをも云ず、相從ふ者共忙しく去ければ、玄德聲を放て哭玉ふを、孫乾等諫て申けるは、今は哭玉ひて何の詮もなし、速に回り玉へ。玄德馬を住て後影を遙に望み、徐庶去り、我いまより如何せんとて、遠き林に隔て後影も見えず成ければ、鞭を舉て、あの林を皆伐て棄よ、徐庶が後影を遮たるが憎にとぞ申されける。浩る所に徐庶俄に馬を反して來りければ、玄德こは如何に志改りて回る者やら

はゞ、曹操必ず老母を殺べし、然る時は徐庶いよ〳〵志を激して母の爲に仇を報ぜん。玄德の曰、人に其母を殺させて我その子を用ることは此に過たる不仁あらじ、もし徐庶を歸さずんば親子の道を絶なり、此に過たる不義あらじ、我たとひ一命を失ふとも不仁不義の事をせじとて、酒宴を設て徐庶を持なし、夜半の比にぞ及びける。徐庶申けるは、某老母が囚れたるを聞てより金波玉液も咽に入こと能はず。玄德の曰、われも御邊に別ては左右の手を失が如し、龍肝鳳髓も味を甘とせず。夜すでに明ければ諸大將も別を惜み、城外に酒肴を用意して餞行の禮を成。玄德徐庶と馬を双べて郭外の長亭に出、盃を取て申されけるは、我因緣薄して御邊と相交り道を聞こと能はず、御邊又新なる君に仕へて忠を盡し、老母に孝を全し玉へ。徐庶涙を流して申けるは、某才微に智淺して君の重恩を被りながら、不幸にして半途に別る、是老母の故なり、假令曹操に迫られ是非なくして仕ふとも、一生の間曹操が爲には計一をも施し候まじ、忠なきに非、某が本意に背けり。玄德の曰、われ御邊と別て後は長く浮世の望をやめ、遠く山林に遁て隱逸の身となるべし。徐庶自ら胸を指て申けるは、某が君に事て共に王霸の業を圖し者は此方寸を以て也、いま老母の囚に因て方寸みな亂る、假令こゝに住るとも益無るべし、然れば某を思し食棄て別に賢人を招き玉へ、何とて御心を冷灰となして甲斐なき事を宣ぞ。玄德の

以自孝道、却歸耕故園、免遭大禍。吾今命若懸絲、專候救濟、更不多囑。

徐庶見畢て流るゝ涙泉の如く、直に玄德に見えて申けるは、某は本潁州の徐庶字は元直と申もの也、難を遁ん爲に名を單福と更め、初め荊州の劉表賢を好と承て行て對面し、共に道を論じて無用の人なりと知候ひし故に遺書わかれを告、それより司馬徽が山庄に行て事の樣を語りしに、司馬徽叱て汝眼ありながら不知人、いま劉豫州こゝにあり、何ぞ此に仕ざると云り、此故に狂歌を市に謠て君に見えしに、幸に捨玉はず、恩を蒙ること身に餘れり、如何せん老母曹操に捕れて一命を失んとす、今書を送て某を招く、行ずんば叶まじ、某が本心君に仕て犬馬の勞を效ことを願はざるに非ず、唯老母の囚れたるを以て力を盡こと能はず、今しばらく御暇を乞請、老母が行末を見きはめて、若棄玉はずんば再び參るべしと涙を押て申ければ、玄德も涙を流して申されけるは、親子の道は天性也、必ず我を心に掛て恩愛の道に背玉ふな、老母に對面ありて後再び來り玉ふべし。徐庶拜謝して卽時に打立んとしけるを、玄德押とゞめ、今宵は語り明して餘波を惜み、早天に打出られよ、我も馬に乘て送んと云玉へば、徐庶乃ち住りけり。時に孫乾ひそかに玄德に見えて申けるは、徐庶は天下の奇才なり、久く此に在て御方の虛實を能知り、若曹操に仕へて大軍にて攻きたらば、何を以か防玉はん、只徐庶をこの處に住め置玉

て暗に向はじめて萬代の悪名を取んやとて、筆を地に投硯を取て曹操に打付ければ、曹操大に怒り早く斬て棄よとて引出しけるを、程昱諌て申けるは、老母が丞相を毀は自ら殺れん事を求て也、然るを丞相殺し玉はゞ不義の名を得玉ふべし、殊には徐庶これを聞ば、母の敵なりとて命を棄て彌々玄德を扶け丞相に恨を報ぜん、若老母を留め置時は、徐庶その身は玄德が方に在とも心は老母の所に在ん、然る時は玄德が爲にも心を盡して思ふ樣に力を出こと能ふまじ、某又一の計あり、徐庶を欺て招よせ申べし。曹操怒を飜して實にもと喜び、乃ち老母を放ければ、程昱甲斐々々しく持あつかひ、自ら事ること實の母の如くし、昔徐庶と友たりし時結交兄弟の約をなせり、然る時は我母なりとて親く悃に持なし、時々贈物なんどせしに每度文を遣す。老母も其志を感じて亦文を書て答ければ、程昱これを以て其筆跡を能々習似、一通の似文を作り使を仕立て徐庶が方へぞ送りける。使すでに新野に到りて徐庶を尋ければ、徐庶母の使と聞より急ぎ走り出て何事ぞと問に、使申けるは、某下郎なれば如何なる故も存ぜず、是に御文候とて出しければ、徐庶ひらき見るに、其書に曰、

近汝弟康喪、擧目無親、正悲悽之間、不期曹丞相使人賺到許昌、言汝背反、下於縲紲。賴程昱等力救、若得汝降、能免吾死。如書到日、可想劬勞之恩。星夜前來、

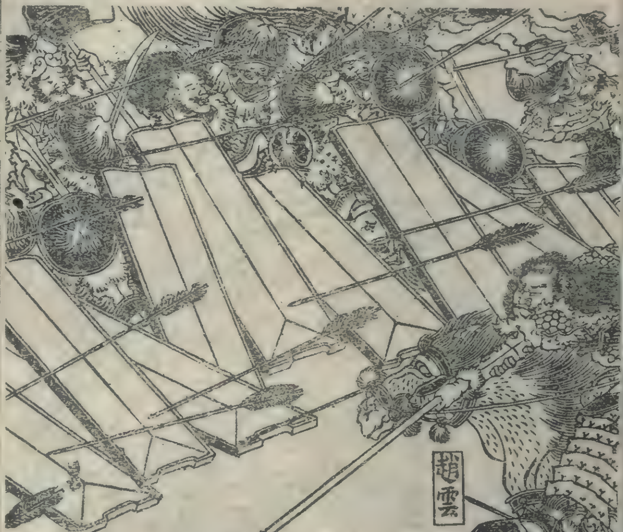
十分の内に一二を得が如し、爭か徐庶に及べき。曹操嘆じて申けるは、惜かな賢士玄德に仕へて必ず功を成べし。程昱が曰、徐庶すでに玄德に仕と申せども、丞相もし御方に用んと思し食ば、召來すこと甚だ易し。曹操が曰、いかなる故ぞ。程昱が曰、徐庶元より至て孝行なるが、幼して父を失ひ只一人の老母あり、近ごろ弟の徐康と云もの死して老母を養ふ人なし、若老母をこの處に呼寄、書簡を以て徐庶を招しめば、必ず夜を日に繼で來るべし。曹操然べしと喜び、卽時に人を遣して老母を召よせ、自ら持成て申けるは、近來汝が子の徐元直、天下の奇才にして新野の逆臣劉玄德に事ふ、是玉を泥に墮が如し、豈不惜や、願くは老母の方より書簡を送て此處へ招き寄よ、我天子に奏聞して必高官を授べしとて硯と紙とを與へければ、老母問て曰、劉玄德は如何なる人にて候ぞ。曹操が曰、沛郡の小輩叨に皇叔と稱して全く信義を知ず、外は君子の如にして内は小人なり。老母眼を怒して申けるは、汝なんぞ詐を云て我を欺ぞ、夫玄德は中山靖王の後胤漢の景帝の玄孫にして、堯舜の風を學び禹湯の德を懷く、況や身を屈して賢を招き、己を恭くして人を貴ぶ、世の黃童白叟樵牧までも其名を知ずと云ことなし、眞に當世の英雄なり、我子幸に此人に仕ふ、宜く其主を得たりと云つべし、汝は名を漢の丞相と云ども、實は漢の逆賊なり、却て玄德を逆臣と云は自ら心に恥べし、何ぞ我子を明なるを棄

通俗三國志 卷之十五

○徐庶薦諸葛孔明

曹仁、李典數箇度の合戰に打負、樊城をも玄德に取れて這々都へ逃のぼり、曹操に見えて地に拜伏し、事の樣を告ければ、曹操申けるは、勝負は武士の常なり、何ぞ毎々戰勝ことばかり有べき、如何なる人か玄德を扶て浩る計を用ひたるぞ。曹仁が曰、路にて承り候ひしが、單福と申者玄德が軍師として能計を成候。曹操申けるは、我つひに單福と云人を聞ず、御方の大將これを知たる者は無か。程昱傍に在て笑て申けるは、單福は某よく知り、此人少かりし時好で劍を使ひ、中平の末に人に賴れて仇を殺し、面に粉を塗髮を亂して走りけるが、奉行所に捕られ名を問ども答ず、此故に車の上に縛て市に出し、知ものは無かと尋しに、適知ものも憐で告ず、夜に入て友達共ひそかに解放ければ、此より名字を改め志を激して踈巾單衣にて世を廻り、名ある人を尋て學び習ひ、常に司馬徽が徒と相交る、乃ち潁上の人にて徐庶字は元直と云もの也、單福は更名にて候。曹操が曰、徐庶が才智汝に比せば如何ん。程昱が曰、某は

卸すて赤裸に成て都を指て迯上る、見苦かりける行裝なり。玄德勝軍を收て樊城に入玉へば、縣令劉泌城を出て相迎ふ。玄德法を出して民を安じ、劉泌は長沙の人にて同く漢室の宗親なれば、同宗の好を以て其家に入玉ふ。劉泌かぎりなく喜び、寇封と云ものを伴ひ酒宴を設て重く持成。玄德乃ち寇封に對面して如何なる人ぞと問玉ふに、劉泌答て申けるは、此は我甥にて候が、幼より父母を失ひし故に我養て子とせり、武藝殊絶れて本は寇氏の子にて候。玄德その人品尋常ならざるを見て乃ち養子にせんと云玉へば、劉泌喜て劉封と改め、玄德を拜して父とせしむ。關羽、張飛これを聞て申けるは、兄すでに男子あり、何故に此螟蛉を養玉ふぞ、後に必ず禍を生ぜん。玄德聽ず、われ子として育へば彼われを以て父とす、何の禍あらんと云玉へば、關羽、張飛甚だ喜ず。單福申けるは、此樊城は久く守る所に非、趙雲に千餘騎を付て此に留め、君は新野へ御回あるべしと勸ければ、玄德げにもとて兵を配て回り玉ふ。


趙雲

逃走る。單福長追なせそとて兵を收て回りければ、曹仁這々のがれ出、夥く人馬を失て後悔すれども及ず、今こそ李典が諫し言を信じて急に召よせて申けるは、玄德が軍中には必ず能者あらん、われ八門金鎖の陣を布、趙雲東南より打て入、西を打て出たるは常の人の知ところに非。李典が曰、某は只虛を窺て敵の樊城を取んことを怕るゝ也。曹仁が曰、試に敵陣へ夜討して若勝ことを得ば住るべし、若打負ば退て樊城を守らん。李典諫て曰、無用々々、必ず敵の用心あらん。曹仁が曰、もし御邊の如に物を疑はば軍はせまじきかとて、了に兵を備て打立けり。玄德は敵を追まくりて喜玉ふ所に、風一通吹過ければ、單福申けるは、是敵の夜討に來る警なり。玄德の曰、いかゞして防べき。單福が曰、某すでに計を定め置候とて、兵を手分して待居たり。案の如く其夜の二更に曹仁前に備へ李典後に備て玄德の陣へ攻入けるに、忽然として四方より火を懸ければ、扨は用心あるぞ、速に出よと鬩ところに、趙雲喊を作て打てかかる。曹仁散々に亂れて本陣をも打すて、北河の岸まで走て渡を求る所に、鼓を打鑼を鳴して張飛が勢打て出、大山の崩が如く喚き叫で蒐たりしかば、曹仁命を弃て戰ひ、李典に扶られて這々向の岸にのぼり、樊城を指て入んとすれば、城の内より鼓を鳴て關羽五百餘騎にて打って出、入みだれて時うつるまで戰ひけるが、曹仁が疲武者馬強なる生手にしたゝか討れ、甲盔を

李典槍を撚て馬を交へ、戰ひ十合ばかりにして叶ずして引退く。趙雲勝に乘て敵の備に突て入八方へ蒐立ければ、曹仁が先手の勢散々に亂れて後陣の勢と一手になる。李典退て曹仁に見え、趙雲が武勇中々あたり難しと云ければ、曹仁大に怒り、汝いまだ師を出ざる前に已に御方の兵に氣を落させ、今又陣を賣て引退く、速に斬て弃よと下知をなす。諸人哀で命を乞ければ、曹仁わづかに命を扶、後陣に殘し留て自ら一陣に進み、次の日陣を張て敵を待。單福この由を聞て山の上より望、玄德に向て申けるは、君敵の陣を知玉へるか。玄德の曰、いまだ知ず。單福が曰、今曹仁が備たるは八門金鎖の陣なり、尤よく布得たれども惜らくは主持する所を欠り、夫八門は休、生、傷、杜、景、死、驚、開なり、生門、景門、開門より入時は吉にして、傷門、驚門、休門より入時は傷を被り、杜門、死門より入時は必ず亡ぶ、今八門よく整と云ども中間いまだ全からず、若東南の角生門より討て入、西の景門より出る時は此陣忽に亂るべし。玄德限なく喜び、趙雲に五百餘騎を付て令を傳玉へば、趙雲槍を提げて五百餘騎喚て東南の角より斬て入に、本陣にも鼓を打て威を助く。趙雲直に中軍へ突て入ければ、曹仁北に走て敵を引。趙雲これを追ず西を指て討て出、又取て回して東南の角に出ければ、曹仁が兵大に亂れて上を下へ騷動す。これを見て玄德大勢を率して攻かゝり玉へば、討るゝ者數を知ず、我先にと

刀、われ御邊と急に推寄て玄德を手捕にせん。李典が曰、玄德は尋常の者に非、かる〴〵布戰ひ難し。曹仁が曰、御邊なにとて臆病なるぞ。李典が曰、兵法に知レ彼知レ己百戰百勝と云り、某が臆せるにあらず、玄德に勝こと能ざるを知故なり。曹仁が曰、御邊いかなれば我命に從はざるぞ、二心ある者ならん。李典が曰、某丞相に仕ること年久し、將軍なほ某が心を知玉はぬか。曹仁が曰、われ必ず行て玄德を擒にせん。李典が曰、將軍もし打出玉はば、某は此城を守るべし。曹仁勃然として甚だ怒て申けるは、御邊なにとて城に殘らんと云ぞ、必ず二心ならんとて二萬五千餘騎にて打起ければ、李典その疑を怕れ、已ことを得ずして相從ふ。此時玄德は新野城に入て勝軍の賀をなし玉ふに、單福申けるは、今曹仁大軍を領して樊城にあり、呂曠、呂翔が討れたるを聞ば必ず怒て自ら來ん。玄德の曰、いかゞして防ぐべきぞ。單福が曰、推量するに曹仁自ら寄來らば、樊城必ず空虛ならん、白河を隔と云ども攻とること掌の中にあり。玄德の曰、いかなる計ぞ。單福耳を附て密に計を低語ければ、玄德限りなく喜び、手分を定めて待玉ふ所に、曹仁白河に船をそろへ直ちに推よせ候と告きたりければ、單福申けるは、若敵の勢急に進まざる時は、御方いまだ其便を得ず、今敵こと〴〵く進み來る、我計成就せり、必ず曹仁を擒にすべしとて城を出て陣を取り、趙雲を眞先に進めければ、

曰、汝は漢に背く逆賊なり、早く馬より下て刀を受よ。玄德きゝもあへず趙雲出よと下知せられければ、趙雲槍を撚て蒐出二三合ほど戰ふに、呂曠なじかは敵すべき只一槍に突殺さる。呂翔これに膽を冷し、叶はじとや思けん敗軍を引て逃たりしに、路の傍より一手の勢打て出、眞先に進んだる大將手に青龍刀を提げ、關羽こゝに在て汝を待と名のり懸、追打に攻ければ、死する者數を知ず。呂翔は這々のがれて十里ばかり走りけるに、又一彪の軍馬路を遮り、我は燕人張飛なりと呼はる聲雷の如く、呂翔を馬より斬て落し、追立々々採だりしかば、初め五千餘騎と聞えし勢のこり少に打なされて樊城へ落てゆく。玄德は單福が兵を用る、皆法あるを見て限なく喜び、彌厚く敬ひ玉ふ。

徐庶定レ計取二樊城一

去ほどに打のこされたる兵樊城に逃かへり、呂曠、呂翔が討れたる由を告ければ、曹仁以ての外に周章し、李典を召て相議するに、李典申けるは、今二人の大將敵を欺く故に亡たり、只この城を固く守り都へ人を上せ、丞相の大軍を請て那後に攻かゝり玉へ。曹仁笑て申けるは、今二人の大將を討れたりと云ども、新野ほどの小城を丞相に告申んは、雞を割に焉ぞ用二牛

を知。玄德かぎりなく喜び、即時に單福を用て軍師とし、手下の勢を調練し玉へば、日を歴て能整ひけり。此時曹操は北國を平げて都に回り、常々荆州を攻んと思ふ心ありければ、先曹仁を大將として李典、呂曠、呂翔三人を副將とし、樊城に遣し置、猛虎の威をなして荆州襄陽を窺はしむ。呂曠、呂翔二人すゝみ出て曹仁に申けるは、今劉玄德新野の城に在て人馬をあつめ、都を攻んと志す、此方より推寄て速に打やぶらずんば、後に由々しき大事に及ばん、某二人久しく何の功をも立ず、若五千餘騎を借玉はば、打向て新野を蹴破り玄德が首を取て獻らん。曹仁好も申たりとて五千の勢を分與へければ、二人勇み喜て新野城へ發向す。この由先達て沙汰ありければ、玄德驚て單福と議せられけるに、單福申けるは、已に敵の勢よせ來る、境の內へ入しむべからず、關羽は一軍を引て左に備へ、敵の中路を截玉へ、張飛は一軍を引て右に備へ、敵の後を塞玉へ、趙雲は君を守護して面より迎へ玉ふべし、如此なる時は必ず敵の大將を生捕んとて、手配すでに定りければ、皆思ひ〳〵に打立。玄德は二千餘騎にて單福、趙雲を作ひ、三里ばかり出張し玉ふに、山際より烟嵐を捲て呂曠、呂翔が五千餘騎風擁して寄きたれり。玄德大音あげて、きたる者は何者ぞ我境を犯と呼はり玉ふに、呂曠すゝみ出て申けるは、我曹丞相の命を受、こゝに來て汝を擒にす。玄德の曰、われ如何なる罪かある。呂曠が

より下て立迎へ、城中に伴ひ來て如何なる人ぞと名を問に、答て申けるは、某は潁上の單福と云もの也、久く皇叔の賢人を招き玉ふと聞て仕ん爲に來りたり。玄德かぎりなく喜び、酒を勸め上賓の禮を以て持成玉ふに、單福申けるは、向に君の乘玉ひし馬を願くは一見致さんとて、鞍を卸して庭上に引出させ、此馬は千里の能あれども必ず主に祟を成候と云ければ、玄德の曰、われ辛き目に遭て檀溪を逃れ來れるは、必ず此馬にのる故なるべし。單福が曰、それは主を救へるなり、祟には非、然れども了に一度は祟を致べきなれば、此禍を除く法あり。玄德の曰、ねがはくは聞ん。單福が曰、いま此馬を暫く近習の人に借て乘せ、その人祟を受て後に君のり玉はば自ら禍なからん。玄德これを聞て心喜ず、人を喚で點レ湯よと云玉へば、單福申けるは、某久く君の賢人を求玉ふと承て、千里を不レ遠して此に來れり、然るに點レ湯よとは何とて客を逐立玉へるぞ。玄德の曰、汝われに仁義を教ずして、利レ己妨レ人ことを教ふ、此ゆゑに逐出なり。單福大に笑て申けるは、本より君の仁心ある由を聞及と云ども、某いまだ其實を見ず、今この一言を以て試る也。玄德謝して申されけるは、若仁心を論ぜば我なんぞ用ざらん、但軍を恤み民を愛せんことを欲、ねがはくは先生教よ。單福申けるは、某潁上より來るに道すがら人民の謠を聞ば、新野牧劉皇叔自レ到レ此民豐也と云り、某この故に君の德

超て辛き命を扶りたりとて玄徳の書簡を出しければ、劉表ひらき見て大に怒り、蔡瑁を召出し、汝いかなれば我弟を害せんとはしたるぞとて斬て棄よと下知すれば、蔡夫人しきりに哀て一命を乞。孫乾も若この人を殺玉はば、玄徳却てこの處へ來るまじと云ける故に、劉表わづかに命を饒し、嫡子劉琦を召出して、汝いそぎ新野へ行てこの罪を謝せよとて孫乾と共に遣しければ、玄徳喜て持成玉ふに、劉琦莽に涙を流す。驚て如何なる故ぞと問に、答て申けるは、繼母蔡夫人つねに某を害せんと謀る、如何して此難を逭るべき。玄徳の曰、惟ひとへに心を小て孝を盡し玉はば、自然に禍あるべからず。劉琦哀で止ず。次の日わかれて囘りければ、玄徳も馬に乘て遠く送り、若この馬の力に非んば我必ず泉下の人とならんとて、檀溪を渡たる事を語り玉ふ。劉琦申けるは、馬の力にあらず、叔父の洪福ある故なりとて相わかれ、涙を流して去ければ、玄徳城中へ囘んとするに、市の邊より一人葛の頭巾を戴き布衣を披て、高らかに歌を謠て來る者あり。怪て馬を留め暫く聞玉へば、其歌に曰、

天地反覆兮火欲レ殂　大厦將レ崩兮一木難レ扶

四海有レ賢兮欲レ投二明主一　聖主搜レ賢兮却不レ知レ吾

うたひ了て大に笑ひければ、玄徳心に此は司馬徽が云し伏龍鳳雛なるべしと思はれければ、馬

ん、宜く尋ね玉ふべし。玄徳又伏龍、鳳雛を問玉へば、司馬徽好々と云て大に笑ふ。時に童子走來て申けるは、只今一人の大將數百騎を率してこの家を取かこみ候。玄徳打驚き、急に出て窺ひ見れば趙雲なり。心喜び對面して何とて來れるぞと問玉へば、趙雲申けるは、某昨夜この鄕に來て尋ね奉るに、或人敎て、晩方に官ある人と覺たるが、馬に打のりて水鏡先生の家に入たりと申せし故に速に馳來れり、恐らくは此邊の鄕民共の害を成ことも候はん、新野へ御回あるべしと勸ければ、玄徳げにもとて司馬徽に別をなし、馬を早めて回り玉ふ。

○玄徳新野遇徐庶

玄徳馬を早めて二十里ばかり出玉ふに、一手の勢飛が如に馳きたりければ、驚て見玉ふに此張飛が尋ね來れる勢なり。暫ありて關羽が一軍又きたりしかば、共に檀溪を渡りたることを物語して、已に新野に回り諸大將を集めて、蔡瑁が殺んとしたる由を告玉ふに、孫乾申けるは、此事すて置べからず、早く書簡を以て蔡瑁が無禮を報じ玉へ。玄徳これに從ひ、孫乾を使として荊州へ遣さる。劉表對面して申けるは、我玄徳を招て襄陽にて持成しむるに何とて無禮なる、半酣にして逃れ去たるぞ。孫乾答て申けるは、蔡瑁計を設け兵を伏て討んとす、此故に檀溪を

玄德

趙雲數百騎を牽して玄徳を尋ぬ
趙雲
趙雲

聞ば、司馬徽問て申けるは、徐元直今いかゞして來れる。答て曰、荊州の劉表は善善惡惡人なりと聞し程に、此に仕んと思ひ行きて見えしに、曾て實なき事なり、此故に回り來れり。司馬徽が曰、善善惡惡は人の善なり、何ゆゑに仕へざるぞ。答て曰、善善しても不能用、惡惡ても不能去、われ此故に遺書して逃れ來れり。司馬徽叱て申けるは、方に今漢室衰て賢愚混雜、干戈日々に競起り禍亂始て生ず、汝王佐の才を懷き時を待て出べきに、美玉を以て石瓦とし、常に賣んとして却て辱を被る、此乃ち汝が過なり、然るを人の過に云なし、善善も不能用と云は豈謬ずや、古子貢が、有美玉于斯、韞匵而藏諸、求善價而沽諸と云は汝が事なり、英雄豪傑いま眼前にあり、何とて輕々しく劉表に見えたるぞと云ければ、先生の言まことに當然なりと云て出去り。玄德つく〴〵と此を聞て限なく喜び、必ず伏龍、鳳雛ならんと思ひ、夜の明るを待て司馬徽に昨夜こゝへ來りしは誰人ぞと問玉ふに、司馬徽答て曰、その人はよき主君を求めて他處へ參たり。玄德その名を問玉へば、司馬徽好々と云て大に笑ふ。玄德又伏龍、鳳雛は誰人ぞと問玉へば、司馬徽が曰、好々。玄德再拜して申されけるは、我不才なりと云ども願くは先生を新野に伴ひゆき、共に漢室を扶興べし。司馬徽が曰、某は山野閑散の人なれば世間に出て物の用に立ず、自ら某に十倍する人必ず將軍を扶奉

八九年間始欲衰　　至十三年無子遺
到頭天命有所歸　　泥中蟠龍向天飛

この歌は、建安の初より今日まで八九年なり、始欲衰ものは、建安八年太守劉表本の夫人を喪て家始て亂る、十三年無子遺とは、久からずして劉表逝去し、文武の官人零落して子孫長く滅べし、天命有所歸とは、將軍の身に歸する也。玄德大に驚て曰、われ爭か之に當ることを得ん。司馬徽が曰、いま天下の英才こと〴〵く此處に聚る、將軍これを用て大業を成玉へ。玄德の曰、ねがはくは其名を聞ん。司馬徽が曰、伏龍、鳳雛の內を一人得玉はゞ、天下は掌にあらん。玄德問て曰、伏龍、鳳雛とは如何なる人ぞ。司馬徽大に笑ひ手を拍て好々と云。總じてこの司馬徽は、善惡を分たず何事も皆好々と云り。或時人きたりて子の死たる由を告けるにも好々と答ければ、其妻これを諫て、人みな君の德を慕て來り告るに、如何なれば子の死たるを好々とは云玉ふぞと申ければ、司馬徽笑て、汝が言も亦好々と云り。玄德しきりに伏龍、鳳雛を問玉へば、司馬徽申けるは、今夜は此に一宿し玉へ、明日告申んとて、童子を召て酒食を獻らせければ、玄德すでに臥房に入玉へり。然れども司馬徽が云しことを心に思て肯て不能睡。夜いたく深たるに屋の後に馬の嘶音して、外より人の來れる體なりければ、怪て密に

を渡て來れる由を告玉ふに、司馬徽申けるは、われ將軍の氣色を見て已に知れり、今いかなる官職にて候ぞ。玄德の曰、左將軍宜城亭侯豫州の牧なり。司馬徽が曰、われ久く將軍の御名を聞り、如何なれば區々として形勢の路に奔走し玉ふぞ。玄德の曰、時の運不レ齊、命途多レ舛故なり。司馬徽が曰、いや〳〵將軍に相從ものよき人なきに依て也。玄德の曰、我不肖なれども、文には孫乾、糜竺、簡雍あり、武には關羽、張飛、趙雲あり、忠を盡して相佐く、人なしとは申まじ。司馬徽が曰、關羽、張飛、趙雲が徒は一騎當千の勇あれども權變の才にあらず、孫乾、糜竺、簡雍が如き者は皆白面の書生にて、尋レ章摘レ句腐れ儒者なり、經綸救レ世の士に非、豈王霸の業を成人ならんや。玄德の曰、われ身を屈して山谷の賢人を求、如何せん未レ得二其人一。司馬徽が曰、儒生俗士は當世の時務を知ず、時務を知ものを俊傑とせん。玄德の曰、誰をか俊傑と云べきぞ。司馬徽が曰、漢の高祖は張良、蕭何、韓信を得、光武の鄧禹、吳漢、馮異を得玉ひしが如き、よく王霸の基を開く、此を俊傑と申べし。玄德の曰、恐くは今の世に箇樣の人は候まじ。司馬徽が曰、聞玉はずや、孔子も十室之邑必有二忠信一と宣へり、何とて世に在まじきと云玉ふぞ。玄德の曰、われ愚昧にして不レ能レ知、ねがはくは教玉へ。司馬徽が曰、ちか比諸方にて小兒の歌を聞玉はずや、其歌の詞に曰、

る人ぞ。童子答て曰、この二人叔姪の間にて候、龐德公は字を山民と申て俺師父より少こと十歳、龐統は字を士元と云て俺師父より少こと五歳なり、常に往來して深く交る、此間も俺師父ひとり桑の葉を採て居たるに龐統きたり、共に木陰に坐して世間の盛衰を論じ、朝より暮に及ぶまで倦ことなし。玄德の曰、我は乃ち劉玄德なり、願くは汝が師父の家に伴ひ行。童子牛を進めて此方へ來り玉へと導ければ、玄德二里ばかり行て幽なる廬に到る。童子此廬にて候と云ければ、乃ち馬より下玉ふに、內にて琴を彈音きこゆ。馬を門外に縛ぎ立留て聞玉へば、俄に琴を彈止で內より老人立出、琴の調淸幽なりしに忽ち殺伐の響發れり、必ず英雄の武士ひそかに窺ふ者ならんと云ければ、玄德驚て之を見に、其人松形鶴骨にして氣宇凡ならず、年は五十ばかりと見えけるが顏色なほ童子の如なりければ、急に進て禮を施し玉ふに、司馬徽衣の濕たるを觀て申けるは、今日危を逃れて來れる人と見えたり、誰にて渡玉ふぞ。童子進で是は劉玄德にて候と云ければ、司馬徽驚て禮をなし、草堂に迎へて賓主を分つ。玄德その邊を見るに、架上に萬卷の詩書を積、窓外には松竹を植、琴を石床の下に横へて飄然たる淸氣まことに塵世の外なりしかば、偶この路に出て童子の敎に從ひ、幸に尊顏を拜すと申されければ、司馬徽笑て申けるは、今日いかなる難に遭玉ひしぞ、明に語り玉へ。玄德隱さず襄陽の事を語り、檀溪

びければ趙雲は新野へぞ歸りける。

○玄德到₂司馬徽山庄₁

去ほどに玄德は溪を渡て後、心の中酒に醉たる如く、この洪なる溪の流を一飛に越たるは天の祐かなと思ひ、只一騎南漳の邊に向て進み玉ふ。時に夕陽西に傾て、一人の童子牛の背に跨り笛を吹て來りければ、嗚呼わが生涯は此童にさへ及ばずとて暫く馬を留め、長嘆して羨しげにぞ見玉ひける。童子忽ち笛を吹やみ、玄德を熟と見て問て申けるは、將軍は黃巾の賊を平げたる劉玄德にて在さぬか。玄德大に驚て曰、汝は俚き鄕の童なるが、如何して我を知たるぞ。童子答て申けるは、俺は元來知ねども、俺つねに仕る師父平生客に物語して、世に劉備字は玄德と云者あり、身の長七尺五寸、手を垂れば膝を過、目を以て其耳を顧る、乃ち當世の英雄なりと云り、只今將軍の模樣を見るに、必ず是ならんと思ふ也。玄德の曰、汝が師父と云は如何なる人ぞ。童子答て曰、司馬徽字は德操、道號を水鏡先生と申、本は潁川の人なり。玄德の曰、いま何くに居玉ふぞ、常に交る友は無か。童子申けるは、襄陽の龐德公、龐統なんど云人常に親しく交り、あれに見えたる林の中に廬を構て住居をなす。玄德の曰、龐德公、龐統は如何な

に襄る。玄徳茫然として雲霧の中を行が如く、馬を住て跡を顧れば、蔡瑁溪を隔て、劉使君いかなれば走玉ふぞと呼はる。玄德の曰、われ汝と本より仇なし、何故に害せんとする。蔡瑁が曰、われ何ぞ害心あらん、必疑はせ玉ふなとて閑に弓に箭をはげしかば、玄德馬を進め南漳を望で去玉ふ。蔡瑁心に思ひけるは、此溪を易々と渡るは直事ならず、如何さま神明の扶ならんとて、了に城中に引回さんとするに、西の門より趙雲三百餘騎を引て尋來り、蔡瑁を見て問て曰、玄德は何くに居玉ふぞ。蔡瑁答て曰、玄德は向に坐席を起玉ひしが、何くへ行玉ふをも知ず。趙雲怪て蔡瑁が軍中を見るに疑は敷ことも無、前に檀溪の流大にして外に去べき路も無れば、彌心を惑して又問て申けるは、御邊今日の會に我君を請じて、何故に夥しく軍兵を集たるぞ。蔡瑁答て申けるは、今日は國中の武士を聚て獵をなす、我は荊州九郡の大將軍なり、豈用心の兵を備へざらんや。趙雲が曰、御邊わが君の去玉ひしを見ずや。蔡瑁が曰、向に只一騎西の門より出玉ふと聞り、我とゞめ奉らん爲に此まで來れども見え玉はず。趙雲心決せず、溪の邊に行て向を望めば、岸より西に一帶の水跡あり、不思議やこの流は舟ならでは渡るべしとも覺えぬ者をとて良久く立たりけるが、又引回しける時蔡瑁は已に城中へ入ぬ。此に依て門を戍ものに尋れば、只一騎西を指て去玉へりと答ふ。重ねて城中へ入んも伏勢や有んと危て、暮に及

玄德

玄徳的盧を踊らせて檀溪を跳る

樣々に持なす。已に三巡に至て文聘、王威きたりて趙雲を請じけれども、趙雲固く辭して玄德の後を離ず。再三に及ける時玄德後を顧て、苦かるまじ、暫く行て休息せよと申されければ、趙雲乃ち外へ出たり。蔡瑁これを見て事掌の中にありと思ひ、玄德の三百餘騎を遠く追退けて座中の體を見合居たり。玄德の今の命は風前の燈の滅んとするよりも猶危と見る所に、伊籍盃を把て玄德の前にゆき、屹と目加して衣を被更玉へと云ければ、玄德その意を省り、良ありて厠に行體にて後園に出玉へば、伊籍こゝに待うけて低語けるは、蔡瑁計を運し、君を殺んとて城外南東北三方には皆大勢を伏たり、只西の門ばかりいまだ兵を廻さず、早く此路より落させ玉へ、遲き時は叶まじ。玄德大に驚き、急に的盧の馬を引て後園を出、只一騎西の門より走り玉ふ。門を守る者共これは何くへ出玉ふぞと問に、玄德われ甚だ酒を過して勝がたしと云すて、飛が如に走り玉ふ。番の者共いそぎ蔡瑁に告ければ、蔡瑁急に馬を出し、五百餘騎にて追かくる。玄德二里ばかり行て前に大なる溪あり、檀溪と名づく。源湘江に通じて白波天に漲りければ、如何して渡んとて後を顧玉へば、敵軍すでに背にあり、とても逃れぬ所と思ひ、急に馬を馳て颯と打入玉ふに、水の勢盛にして鞍爪見えぬ程に成ければ、馬の頭をたゝき擧て、的盧々々今日われに祟をなすか、努力と云玉ふに、那馬忽ち水中より出て一躍三丈飛で西の岸

越に告て申けるは、我よく思ふに玄德は心根の畏しき世の梟雄なり、後必ず國の災を成ん、今日酒宴の席にて打殺し、早く災を除んと存ずる也。蒯越が曰、もし罪なきに殺さば恐くは諸人の望を失ん。蔡瑁が曰、我已に君の命を受たり、殺さでは叶まじ。蒯越が曰、もし君の命ならば爭か默止ことを得ん、先用意をし玉ふべし。蔡瑁申けるは、東の方峴山の路をば蔡和に五千餘騎を授て塞せたり、南の門外をば蔡仲に三千餘騎を付て守せたり、北の門をば蔡勳に三千餘騎を與て守せたれば、三方は已に如レ此、只西の門には前に檀溪の流ありて舟ならでは渡こと能ざるを以て、態と兵を指向ず、用意すでに如レ此に候へば、打泄ことは候まじ。蒯越が曰、われ趙雲を見るに劍を帶て玄德の背を離ず、この者は優たる大剛の者なり、恐くは敵すること能はじ。蔡瑁が曰、われ別に五百の精兵を城內に伏たり、何ほどの事か候はん。蒯越が曰、われ思ふに、玄德を只今殺しては必ず悔ること有ん、生取て君に獻るべし、趙雲は大剛の者なれば、萬一手に餘ることも有ん、只御方の大將文聘、王威に告知せ、外にて別に席を設け、趙雲を招て酒宴を致させ、其後に事を行はゞ掌を反よりも易からんとて急に用意をぞ仕たりける。玄德は常に的盧の馬に乘て甚だ愛せられ、此日州衙に到て馬を後園に繫せ、堂中に入て坐し玉へば、劉琦、劉琮その兩邊に著。國中の官人一々に禮を成てことぐ〵く列坐しければ、酒を勸て

ましたりと心喜び、此義まことに可然候はんとて、即時に使を馳て玄德を招かしむ。玄德は新野に回て後も劉表に疑はれたる事を心に思うて、人にも語らず怏々として御座ける所に、忽ち荊州より使ありて招きければ、孫乾怪で問て曰、君荊州より只一人あわたゞ布回らせ玉ひて、何とやらん無興氣に見え玉ふ、必ず事の仔細候はん、今又輕々しく打出玉はんこと甚だ不可然、恐くは詐の計あらん。玄德此に於て、劉表に疑はれ又蔡瑁が殺んとせし事を語られければ、關羽申けるは、兄もし自ら言の誤を思て劉表に心を置玉はば、劉表却て疑の心を生ぜん。玄德の曰、わが心も如此、いま使と共に行んと思なり。張飛申けるは、無用々々、襄陽の會に出玉ひて何の面白き事か有べき、願くは行玉ふこと勿れ。趙雲が曰、今行玉はずんば惡からん、某ねがはくは三百餘騎にて御供申ん。玄德この義可然とて趙雲を從へ、新野を八十里ばかり出玉へば、蔡瑁來て迎へ奉り謹で敬ひ重ず。玄德その慇懃なるを見て心を安じて進玉ふに、劉琦、劉琮兄弟、荊州の大將王粲、傅巽、文聘、鄧義、劉先、王威等を引て遠く迎へ、請じて館中に入ければ、趙雲三百餘騎にて四方を守り、自ら劍を帶て玄德の側に立。劉琦申けるは、某が父この間氣の病を受て今日の會に出ることを得ず、此故に尊叔を請じて禮を行はしむ。玄德の曰、われ其器に當ずと云ども、兄の命不可辭とて進んで主席に著玉ふ。蔡瑁は密に蒯

蛟龍豈是池中物　臥聽風雷飛上天

劉表これを見て以の外に怒り、此詩を以て彼が心を知に足り、我誓て殺べしと云けるが、いやいや我久く玄德と交れども、了に彼が詩を作たるを見ず、若は他人の計ならんかと省ければ、劍を拔て其詩を刮落し、馬に乘て回んとするに、蔡瑁申けるは、兵の用意すでに調たり、早く新野を攻て玄德を生取ん。劉表首を掉て急々には叶まじ、只心靖に圖べしとて城中へ入けれ ば、蔡瑁も回りけり。

○玄德躍馬跳檀溪

蔡瑁しきりに玄德を討んとすれども劉表敢て許さねば、又ひそかに蔡夫人と計を定め、劉表に見えて申けるは、近年打つゞき五穀熟して國中甚だ豐なるに、今年殊によく登たり、國中の地頭官吏を襄陽に聚て獵をなし、人馬を驅馳して調練せんと欲す、君早く御出ありて賓客を接待し玉へ。劉表が曰、われ近比氣の疾を得たれば輕々しく外に出ること能ず、二人の子を遣べし。蔡瑁が曰、いま國中の官吏を會す、劉琦、劉琮共に御年幼して恐くは禮を失ひ玉はん。劉表が曰、然らば新野に我弟の劉玄德あり、之を請じて禮を行しめよ。蔡瑁これを聞て仕す

とするの心あり、此人元來他人を芥の如に輕ず、今もし殺さずんば後必ず子孫の禍を成んと云ければ、劉表只首を掉て默然たり。蔡夫人事の決せざるを見て退て外に出、ひそかに蔡瑁を召て如何せんと議するに、蔡瑁申けるは、君いま玄德を疑ふ御心あり、この時に乘て我先客屋に押よせて玄德が頸を取、その後に告申ん、この者甚だ人に超たる志あれば、後必ず荊州を奪べし。蔡夫人この義しかるべしと同じければ、蔡瑁兵を揃て玄德の旅館へ寄んとす。伊籍は此由を傳聞、早く告知せて落さんと思ひければ、急ぎ客屋に行て玄德に低語けるは、蔡瑁この處へ押寄て潛に伐取んと計る、速に出て禍を免玉へ、遲き時は叶まじ。玄德大に驚き、夜に扮て新野の城へ逃回り玉ひける。此をば知ずして其夜の五更に蔡瑁兵を引て押寄、四方を圍で玄德を尋るに、更に行方を知ざりしかば、力及ず徒に引回しけるが、俄に計を案じ出し、一首の詩を作て内に荊州を奪んとすることを著し、客屋の壁に書付置て、急ぎ劉表に見えて申けるは、玄德國を奪の心すでに隱なく知て候、一首の詩を壁に書て夜中に逃去り、早く御心を決して殺玉はずんば、大なる禍を惹出し候ん。劉表これを聞て心怪み自ら行て見るに、其詩に曰、

困守三荊襄一已數年　　眼前空對舊山川

靜に削り退け玉へ、必ず恩愛に溺て弟を立玉ふなと申されければ、劉表默然として言なし。元來蔡夫人深く玄德を疑しかば、いつも屛風の後にて立聞しけるが、此時も潛に聞て心の中深く恨けり。玄德も心の中に、人の所存をも知ずして卒爾なる事を云し者かなと後悔して、座を起て厠に行れしが、良久しく囘り玉はねば劉表人を遣して招しむ。玄德淚を含で座に囘り玉へば、劉表怪て如何なる事ぞと問に、玄德答て曰、某いま厠に行て髀の肥脹て肉を生じたるを見るに、常に四方を往來して馬上を離こと無りし時は、髀の肉鞍に摺て盡く失たりしが、今は騎ことも無れば髀の肉厚して肥ふくれたり、日月蹉跎として水の流が如し、年老んこと須臾にあり、功業いまだ立ず、徒に暮ことを悲なり。劉表申けるは、御邊都に在て曹操と青梅をとり、酒を煑て英雄を論ぜし時、曹操天下の英雄は只御邊と我と也と云しと聞り、今曹操夥しく兵を集め、天子を挿で威を諸侯に震と云ども、御邊の在て居玉ふ間は我更に恐こと無。玄德醉に乘じて申されけるは、某もし國をも保ち兵をも持て候はば、何ぞ天下の小輩を屑とせん。劉表これを聞て忽然として色を變じければ、玄德心付て其疑んことを怕れ、酒に醉たる體にて座を起て出られけり。劉表言には出さずと云ども此より玄德國を奪心あるかと深く疑ひけり。時に蔡夫人きたりて劉表に見え、我適より屛風の後に在て玄德が言を聞に、荊州を奪ん

聞えければ、玄德甚だ劉表が向に都を攻ざることを悔玉ふ處に、劉表使を馳て招ければ、卽ち使と共に荊州へ到る。劉表對面して申けるは、近比曹操柳城より囘りて其勢五六十萬、都の中に屯して日々に盛なり、必ず南方を倂呑するの心あらん、向に御邊の勸を用ずして今悔れども及ず。玄德の曰、今天下わかれ爭ひ、逆徒日々に蜂起す、必この度に限候まじ、又時を待て都を攻玉へ。劉表げにもとて酒宴を設て持成、頻に淚を流しければ、玄德怪で如何なる故ぞと問に、劉表申けるは、我心に思ふ事有、適に語んとせし所に蔡夫人出來りしかば閣たり、御邊は同宗の一類、いま結で兄弟と成り、殊には平生愼深く、事を輕じ玉はぬを以て、心を盡して告申なり。玄德の曰、いかなる事の候ぞ、願くは御心を殘さず語り玉へ、若某を用玉ふことあらば、萬死と云とも辭すべからず。劉表申けるは、我前の妻陳夫人が腹に長子劉琦を產、天性賢なりと云ども、柔弱にして事を建がたし、後の妻蔡夫人が腹に次男劉琮を產、年幼と云ども甚だ聰明なり、此故に次男を立て國を讓んと思へども、禮に背ことを憚り、又長子を立て禮に從んとすれば、蔡夫人が兄の蔡瑁を先として蔡氏の一族みな軍權を專にす、今たとひ長子を立たりとも後に必ず禍を生ん、此を思ふ故に心の中つねに苦むと云ければ、玄德諫て、古より兄を棄て弟を立るは禍の基なり、若蔡氏の一黨が權柄つよきを憂玉はば、心

申されけるは、深く先生の志を感ず、去ながら凡そ人の世に居、死生有レ命富貴在レ天、なんぞ一疋の馬ゆゑに我を妨ることと候はん。伊籍これを聞て高論に服し、相別れて去ければ、玄德は新野に行て人民を治め安じ玉ふに、政の明なるを喜で德化に從はざる者はなし。時に建安十二年の春、玄德の夫人甘氏劉禪を產り。此夜一の白鶴縣衙の屋上に來り、四十餘聲鳴て西の方へ飛去ければ、人みな怪を成ところに、御產平安と云沙汰して上下みな賀を述べ、異香室に滿て月を經れども失ざりけり。元來甘夫人、ある夜北斗を吞と夢を見て孕たる子なればとて、小字を阿斗と號す。この時曹操北國に下て、許昌の都には守る勢寡と聞えければ、玄德荊州に行て劉表に告て申されけるは、今曹操北國にて袁紹と久く戰ふ、此に因て中國の勢ことごとく催促に應じて都の內空虛なり、若この時に乘て荊州襄陽の大軍を興し、都の中へ攻入玉はば、事を成こと掌握の間にあらん。劉表打笑て、我は荊州の九郡を保て外に望こと候はずと云ければ、玄德默然として言なし。劉表伴て後堂に入、酒宴を設て已に半酣に至りける時、忽然として哭ければ、玄德驚て問て曰、如何なる事有て哭玉ふぞ。劉表が曰、わが心中の事云がたし。玄德重て問んとする時、蔡夫人出來りしかば互に物語もなく、良ありて退散し玄德は新野に回り玉ふ。其年の冬曹操すでに袁紹が子共を打亡し、北國を平定して柳城より回りぬと

なりと答ふ。劉表あつぱれ好馬かなとて累に稱嘆して羨ければ、玄德その心を知て此馬を獻んと云玉ふ。劉表かぎり無よろこび、自ら打のりて城中に回りければ、蒯越見て申けるは、此馬は何方より來り候ぞ。劉表答て曰、これは張虎が騎たる馬なるを、玄德得て我に贈れり。蒯越が曰、某が兄蒯良よく馬を相候ひて、常に其事を某に教たり、今この馬を相るに眼の下に淚槽あり、額の邊に白點あり、名づけて的盧と云、これに騎時は其人に祟をなす、張虎この馬に騎て亡たり、君必ず騎玉ふこと勿れ。劉表げにもとて次の日酒宴を設て玄德を招き、昨日御邊の贈り給へる名馬まことに深く堪愛と云ども、御邊こそ箇樣なる名馬に騎て敵陣へも進玉ふらめ、我もし騎時は徒にこそ成候はん、敬で返し奉ん、御邊永く騎玉へと云ければ、玄德席を起て謝し玉ふ。劉表又申けるは、御邊久く此處に在ては武藝の志も薄ならん、此より襄陽の傍に新野と云ところあり、城内頗る兵粮武具を用意せり、手下の勢を引具して行て新野城を守玉へ。玄德恩を謝して兵を引て打出玉へば、劉表酒肴を用意して城外に送る。玄德相別て馬を早め玉ふに、一人前に來て長揖し、この馬に騎玉ふなと云ものあり。玄德これを見るに、乃ち劉表が幕賓に山陽の伊籍字は機伯なれば、馬より下て如何なる故ぞと問に、伊籍申けるは、昨日蒯越が劉表に說を聞ば、此馬を的盧と名付、必ず騎人に祟を爲と云り。玄德謝して

陳生これを見て只一騎のがさじと追來るを、張飛急に迎へ合せ、丈八の矛を撚て忽ちに刺ころし、勢に乘て攻ければ、二人の大將を討れて叶じとや思けん盡く降參す。玄德民を安じ治て荊州に囘られければ、劉表城を出て迎へ、酒宴を設て申けるは、御邊かゝる雄才あれば荊州なんの危こと有ん、去ながら南越不時に境を侵し、漢中の張魯、吳の孫權やゝもすれば寇をなして我心を不レ安しむ、如何して守るべきぞ。玄德の曰、某が手下に三人の大將あり、張飛に南越の境を守せ、關羽に固子城を堅て張魯を防せ、趙雲に三江を守て孫權を壓へさせられば、千に一も危こと候まじ。劉表この義しかるべし、兵を分て指向んと云ければ、荊州の大將蔡瑁ひそかに聞て喜ず、蔡夫人に低語て、今玄德己が大將を分て此國の四方を守らせ、其身この處に留り居ば後必ず大なる禍を成ん、彼が心根は中々畏き者にて恩を忘れ義を背く、早く此旨を君に告て追出させばやと云ければ、蔡夫人げにもと同じて其夜劉表に申けるは、妾ひそかに此國の者共が玄德に心を寄て往來すと云ことを聞り、久く留め置て益もなし、早く何方へも出し玉へ。劉表申けるは、玄德は我弟なり、爭か不義の企あらん。蔡夫人申けるは、君こそ誠の心おはしませ、他人は皆私の心あり。劉表これを聞て少しは心に疑を含けるが、次の日城を出て、玄德の乘たる馬きはめて駿壯なるを見て如何なる馬ぞと問ば、張虎が乘たる馬

通俗三國志 巻之十四

○劉玄德赴二襄陽會一

劉玄德は汝南を沒落して、荆州の劉表を賴でおはしけるに、劉表同宗の好を以て我弟なりとて相親けり。或日酒宴して居たる處に、早馬來て、江夏を守る張虎、陳生二人この頃反逆を企、人民を虜掠して荆州を攻んとす、速に討手を向られずんば由々しき大事に及んと告ければ、劉表驚て申けるは、此者共は適に己ことを得ずして我に降れる者なれば、了には叛んと常々危く思ひしに、今果して如レ此、いかゞして退治すべき。玄德の曰、御心を安じ玉へ、某打向て平ぐべし。劉表かぎり無よろこび、次の日三萬の勢を聚め玄德を大將として江夏に向はしむ。張虎、陳生この由を聞て兵を調て打て出ければ、玄德旗を進めて關羽、張飛、趙雲を左右に從へ、遙に敵陣を望に、張虎が騎たる馬その勢あたりを拂て壯なりしかば、此馬は必ず千里の駿足なるべし、世に希なる勢なりと稱嘆せられけるに、趙雲きゝもあへず槍を提て突て蒐り、只一合にして張虎を馬より突て落し、其馬を引て回るに、敵軍ふるひ怖て近付ものぞ無りける。

愛し、嫡子曹丕と共に鄴城に留て臺を造らせ、張燕に命じて北方の境を守らせ、降參の勢五六十萬を引具し、遂に都に回て功ある者に官を進め、郭嘉を祭てその功を天子に奏す。其表に曰、

臣聞、褒忠寵賢、未必當身。念功惟績、恩隆後嗣。是以楚宗孫叔、顯封厥子、岑彭既沒、爵及支庶。故軍祭酒郭嘉、忠良淵淑、體通性達。毎有大議、發言盈庭、執中處理、動無遺策。自在軍旅十有一年、行同騎乘、坐共幄席。東擒呂布、西取眭固、斬袁譚之首、平朔土之衆、踰越險塞、盪定烏丸、震威遼東以梟袁尚。雖假天威易爲指揮、至于臨敵發揚誓命、凶逆克殄、勳實由嘉。方將表顯、短命早終。上爲朝廷悼惜良臣、下自毒恨喪失奇佐。宜追贈嘉封、并前千戸、褒亡爲存、厚往勸來。謹表以聞。

乃ち郭嘉を貞侯に贈封して其子郭奕を府中にて養ひ、又南方を伐んとて計を評議す。

諸將見了て小躍して感稱す。曹操乃ち祭を設て柩を都に送らしめ、大軍を領して冀州に回る。郭嘉死する年三十八歲、曹操に仕て計を成すこと十一年なり。曹操すでに冀州に回りければ、程昱等出て申けるは、いま北國こと〲く平定せり、早く都に回て南方征伐の用意をし玉へ。曹操笑て曰、われ本より其心あり、汝等まづ吾に勸む、眞に喜ぶべしとて其夜冀州の城に宿し、東の角櫓に上て欄干に凭かゝり、仰で天文を見るに、荀攸側にありければ曹操指さして曰、南方旺氣燦然として盛なり、恐らくは輕々しく圖がたからん。荀攸が曰、丞相天の助る威を以て何の所か服せざらんとて見居たる所に、忽ち一道の金光地より起て天に上りければ、荀攸が曰、これ必ず地の中に寶あらん。曹操矢倉より下光の處を掘せければ、銅を以て造れる一つの雀を取出す。荀攸が曰、昔し舜の母玉の雀自ら懷に入と夢を見て大舜を產玉へり、今銅の雀を得るはこれ吉祥の兆なり、急ぎ臺を築てこの賀を述玉へ。曹操大に喜び、遂に銅雀臺を漳河の邊に造せ、一年を經て功了ければ、次男曹子建申けるは、高き臺を三座に築き、至て高を銅雀と名付、左の一座を玉龍と號し、右の一座を金鳳と號し、共に空中にそり橋を横たへ、龍鳳の銅雀に朝する意を成玉へ。曹操げにもとて二年を經て又二座の臺を造り、我この臺に上て老後の樂を成んと喜ける。曹操多の子ありと云ども、次男曹植字は子建が能詩文に巧なるを寵

ければ、先屈強の兵を帷幕の内に伏おき、袁熙、袁尚を招きよせ、禮了て内に入ければ、公孫康が曰、一大事を議せんと欲す、兵を皆外に出し玉へとて只二人を請じけり。袁尚座に裀なきを見て、寒氣甚しく候に願くは榻上に席を鋪玉へと云ければ、公孫康大の眼を怒して曰、汝二人が首を萬里の遠に送んと欲す、何の席をか鋪んとてはたと睨む。袁尚驚き手足を張て戰きければ、公孫康よれや者共と云も果ぬに、幕の中より兵共走出てつひに二人の首を斬、匣に入て易州に送る。この時曹操易州に在て數日の間動ざりければ、夏侯惇、張遼諫て曰、もし遼東を攻玉はずんば早く都に回玉へ、何ゆゑに此ところにて日を送玉ふぞ、荊州の劉表必ず都を襲の心あらん。曹操これを聞て打笑ひ、われは袁熙、袁尚が首を待と云ければ、諸人あざ笑て退ところに、忽ち遼東の太守公孫康使を以て袁熙、袁尚が首を送ると報じければ、諸人みな大に驚く。曹操書簡を開き見て限なく笑ひ、郭嘉が計に漏ずと云て其使を重く持なし、印を刻で公孫康を襄平侯左將軍に封ず。諸軍みな先に郭嘉が計に漏ずと宣ひしは如何なることぞと問ければ、曹操乃ち郭嘉が遺書を出。諸人これを見るに、その文に曰、

今聞、袁熙袁尚、往投二遼東一。切不レ可レ加レ兵。公孫康久畏二袁氏呑併一、往投必疑。若使二兵急一レ之、後必併レ力迎レ敵。急不レ可レ下。若緩レ之、公孫康袁氏自相圖。其勢然也。

は本襄平の人にて、武威將軍公孫度が子なり。袁熙兄弟が賴よしを聞、手下の諸將を集て評議しければ、公孫恭が曰、袁紹世に在し日つねに遼東を攻取の心ありしかども、暇なきを以て了に事を起さず、今その子兄弟散々に曹操に破られ、身の置どころ無してこの國に來る、是鳩が鵲の巢を借て了に奪て己が物とする意なり、若いま彼等を救なば後却てこの國を奪はん、不如出拔て城內に呼入、計を以て殺玉へ、然る時は曹操必ず足下を重んぜん。公孫康が曰、汝が云ところ然りと云ども、曹操もし時の勢に乘て我國を攻取んと思ふ心あらば、彼兄弟を以てわが援とせん、輕々しくは殺すべからず、先よく曹操が體を窺べし。公孫恭が曰、曹操もし遼東を取の心あらば、必ず夜を日に繼で來るべし、若その心なくんば兵を收て必ず動じ、早々に窺ひ見玉へ、曹操若來ずんば兄弟が首を斬て曹操に獻らん。公孫康しかるべしとて人を遣して曹操が體を窺しむ。袁熙は浩ることとは夢にも知ず、袁尙に向て、この遼東は要害甚だ堅固にして、數萬の精兵あるなれば曹操を拒に便あり、曹操もし退き回らば却て公孫康を殺し、此國を奪ひ取て又河北を攻とるべしと私語ければ、袁尙が曰、われもその心あるゆゑに此ところへ逃來れりとて、旅館に入て每日使を遣し對面せんことを求むれども、公孫康病に託して日を過す。其後公孫康が細作はせ回り、曹操は易州に陣を取て、遼東に下らんとする心さらに無と云

く恩賞を與へ、吾向に御邊等が諫を用ず、危を顧ずして遠く夷の地に入、天の祐を以て幸に不思議の勝利を得ると云ども、以て法と爲べからず、向に御邊等が諫しは乃ち萬安の計なり、此ゆゑに今賞翫す、必ず今より後も萬づ我を諫よと云て郭嘉が病を尋ぬれば、數日已前に亡しゆゑ公廨に柩を停おき候と答ふ。曹操大に哭き自ら行て祭を成、地に倒て涙を流し、奉孝死せり、是天われを喪なりと云て、左右の諸將に向て、御邊等が年數は皆われと同輩なり、郭嘉一人年若ければ、吾たとひ死するとも後の事を頼み置んと兼て心に思ひしに、量ざるに中道に亡たり、われ如何すべきと哀ければ、郭嘉に附從てありし者封じたる書簡を出し、是は郭公終に臨で自ら筆を取て書うつし、丞相これに從ひ玉はば遼東自ら定らんとて遺し置たりと云ければ、曹操が曰、郭嘉心を用て跡の事まで書おきたり、我なんぞ從ざらんやとて封を開て見て打うなづき、嗟嘆して已ざりければ、諸人みな其心を知ず。次の日夏侯惇諸將と共に出見え、遼東の太守公孫康久しく王化に服ず、袁熙、袁尙いま之に走る、後必ず大なる害を成ん、不レ如この勢に遼東を攻やぶり、禍の根を絕玉へと云ければ、曹操笑て曰、諸將の力を勞せしめず、近き内に公孫康必ず袁熙、袁尙が首を送るべしとて待居たりしかば、夏侯惇を始として諸將みな疑をなす。去ほどに袁熙、袁尙は烏丸を落て遼東に走り、太守公孫康を頼んとす。此公孫康

袁熙、袁尙思ひも寄ず之を聞て大に驚き、急に夷の勢を集め冒頓と討て出て陣を取。曹操自ら山にのぼり、冒頓が勢の隊伍紛々として備なきを望で張遼に向て曰、夷の勢備なし、一戰に打破るべしとて大將の麾を授、許褚、于禁、徐晃を添て四手に分、山を下りに勢に乘り力を盡して攻かゝりければ、案の如く夷の勢四角八方へ散亂して一所に又も集らず。張遼すき間もなく伐て蒐、冒頓を一刀に斬て落しければ、降人に出るもの二十萬に及べり。袁熙、袁尙すべき樣なく、數千の殘兵を引て遼東へ逃ければ、曹操兵を收て柳城に入、使を遣して郭嘉が病を聞しむるに、已に九分に迫れりと云。曹操乃ち田疇を柳亭侯に封じて柳城を守らしめんと云ければ、田疇辭して曰、某は袁紹に事へ義に負て身を逃たる者なるに、丞相の大恩を以て斯一命を失はざるを幸とす、安んぞ盧龍の陣を賣て爵祿を望べき、若已ことを得ずんば願くは立どころに死を致さん、侯爵を受ること某が本意にあらずと云て兩眼に涙を浮ければ、曹操又夏侯惇に命じて勸させけれども、田疇つひに受ざりしゆゑ、乃ち議郎に封じて柳城を守せ、單于番人を安んじければ、皆その德を感じて駿馬一萬匹を獻る。曹操大軍を引て囘る時天氣すでに寒く、殊さら旱にて二百里が間水なく、兵粮すでに盡ければ、馬を殺して饑を救ひ、地を掘こと三十四丈にして漸に水を求め、多の艱難を經て已に易州に囘り、始烏丸を攻ること勿と諫たる大將に重

云ければ、郭嘉申けるは、某深く丞相の大恩を受、たとひ一命を失ふとも萬分が一も報ずることを能じ。曹操が曰、われ此所の險阻なるを以て退て囘んとする心あり。郭嘉が曰、古より兵は貴ニ神速一と云り、今千里の遠を襲はんとて多の兵糧武具を運ゆくこと、武略の足ざるに似たり、不レ如騎馬の精兵を擇で、道を倍て火速に推よせ、敵の備なきを攻ば立どころに擒にせん、宜しく案内者を先に進て早々に蒐り玉へと勸ければ、曹操げにもと心定り、郭嘉を易州に留て病を養しめ、誰をか案内者とせんと尋ければ、或人の曰、袁紹が舊き大將田疇と云もの能この所の案内を知り。曹操尋て呼出しければ、田疇が曰、この道夏秋の間水ありて、淺けれども車馬を通ぜず、深けれども舟を渡こと能ず、久しく留る所に有ず、舊の北平郡に平岡道と云ところあり、盧龍を出て柳城に達す、建武より以來すでに二百年、了に通りたる人を聞ずと申せども、今に至て倘かすかに殘れる微徑あり、今虜の大將大軍を引て無終と云ところを堅め、進で退ことを得ず、懈て備なし、若ひそかに御方の勢を囘し、盧龍の口より白檀の難所を越て空虛なる地面に出、柳城に近付て敵の不意に出その備なきを攻ば、冒頓を擒にせんこと只一戰の中にあり。曹操これに從ひ田疇を靖北將軍に封じて案内者とし、張遼を第二の備とし、大軍あとに續て日夜を分たず馳たりける。時に建安十一年秋七月、田疇、張遼すでに白狼山に至りければ、

の境に入玉ひ、もし荊州の劉表兵を起して、虚に乗て都を攻ることあらば、如何して救玉ふべき、是大なる禍ならん、たゞ宜く都に回り玉はば、乃ち萬全の計ならんと云ければ、郭嘉が曰、いや／＼諸公の意見某が心に違へり、丞相の威勢天下に振と云ども、夷狄己が險阻にして路遠を恃、必ず用心に怠るべし、其備なきに乗て卒然として攻かゝり玉はば、立どころに破るべし、殊に袁紹は夷狄に恩を施せり、今袁熙、袁尚いまだ死せず、一旦これを弃て都に回り南方を征伐し玉ふ時に、袁熙兄弟烏丸の助を得て冒頓が心を結び、舊き忠義の臣を集て再び兵を起しなば、冀州青州の人民みな袁紹が恩を思て又忽ちに心を寄べし、然る時は大なる患なり、荊州の劉表は是坐談の客のみ、自ら其才の玄德に及ざることを知、もし重く玄德を用る時は國を奪んことを怕れ、輕く用ふる時は玄德才を展ること能ず、この故に兎やせん角やせんとて長僉議に日を送る、何ぞかる／＼しく都を攻ること有んや、丞相たゞ都のことを怕れず、早く夷狄を平玉へ。曹操大に喜び、御邊が云ところ眞に大論なりとて、遂に大軍を引て數千の車に兵粮を積、すでに盧龍寨まで出ければ、狂風面を吹黄沙漠々として山川の氣色つねならず。曹操心の內に退回んと思ひ、郭嘉を召て計を議するに、此時郭嘉は水土に伏せず、病を受て車の中に臥。曹操淚を流し、汝われに夷狄を討せんとて遠く艱難を顧ず、罹る病を受たるかと

り、引包んで攻ければ、高幹こは如何にと驚き、急に城中に回らんとするに、城門すでに樂進、李典に奪はれたり。高幹前後に度を失ひ、殘り少に討なされしかば、路を尋て散々に走り、胡の界に落ゆいて北狄をぞ頼ける。北狄の左賢王よび入て對面しければ、高幹地上に拜伏し、曹操すでに某が國を奪て、今又この所へ攻來る、願くは御救を受、共に力を併せて防がんと云ければ、左賢王大に怒り、我元より曹操と恨なし、安んぞこの所へ攻來らん、汝なにゆゑに此に來れる、却て禍を招ん爲か、早々に回り去べしと散々に罵ければ、高幹力なく荊州に行て劉表を頼んと思ひ、已に上路と云ところまで出けるが、手下の大將に都尉王琰と云もの、俄に心替して了に高幹を斬ころし、首を取て曹操に降りしかば、曹操封じて列侯とし、幷州すでに治まりければ、又袁熈、袁尙を滅して禍の根を絶んとす。

○郭嘉遺レ計定二遼東一

高幹すでに討れて幷州こと〴〵く治まりしかば、直に烏丸を攻て袁熙、袁尙を滅んと議するに、曹洪等諫て曰、いま袁熙兄弟兵を伐れ、勢盡て已ことを得ずして夷狄に走る、夷狄は禽獸の如なれば利を貪て義を顧ず、安んぞ彼兄弟を養ひ置べき、いま丞相これを攻んとて遠く夷

が曰、それ兵を興す大事は、宜く大義を立るにあり、事の成敗は一人を待ず、韓珩すでに袁氏に志あらば心の儘にせよとて、自ら城を出て曹操に降參す。曹操喜で鎭北將軍幽州の太守に封じ、幽州すでに治りければ幷州の體を聞しむるに、樂進、李典押よせて攻戰に、高幹壺關の城を固く守るゆゑ、寄手進こと能ずと告ければ、曹操自ら大軍を引て推よする。樂進、李典出見て、高幹固く守て城を破るべき樣なしと云ければ、曹操諸大將を集て計を議す。荀攸が曰、もし高幹を破んとならば宜く詐て降るの計を用玉へ。曹操しかるべしとて呂曠、呂翔二人を呼、ひそかに耳を附て計を低語ければ、二人數十騎の兵を率し、直に城下に行て大音あげ、吾等袁尙に侮られ、重恩の故主に背て一旦曹操に降ると云ども、曹操詭多して我を疑ふ、久しく事ふべき主にあらず、この故に過を改めて故主の許に回る、早く門を開て入玉へと呼はりければ、高幹いまだ信とせず、兵を推留めて只二人を許して内へ入しむ。呂曠、呂翔甲を卸馬を弃て城中に入、曹操が惡逆を訇ければ、高幹問て曰、いま曹操が大軍馳加はる、何なる計を用て破るべき。呂曠が曰、曹操が勢は遠路を來て人馬共に疲たり、今夜敵の疲に乘て一夜討し玉へ、某ねがはくは先手に進まん。高幹然るべしと喜び、其夜呂曠、呂翔を眞先に備へ、自ら一萬餘騎を引て曹操が陣へ攻かゝるに、俄に後より喊の聲を揚て伏の兵一度に起

袁譚
王修

王修袁譚が梟木を拜哭す
番卒

に立んや、我袁氏の大恩を受、もし袁譚が屍を葬ることを得ば、其のちに我一門を殺し玉ふとも、目を塞で刀を受少も恨候はじ。曹操嘆じて申けるは、河北には何とて忠義の士多かりけるぞ、惜かな袁紹が此等の人を用ざる事を、若よく用ること有ば、我いかでか此國に入ことを得んやとて、乃ち司金中郎將に封じ、上賓の禮を以て厚く敬ひ、今袁尙すでに袁熙と幽州の城に籠、如何なる計を用ふべきと問けれども、王修了に答ざりければ、曹操大に嘆じ、眞の忠臣なりと云て郭嘉に問。郭嘉が曰、降參の大將を先手に進め、早く攻かゝりて打やぶり玉へ。曹操然るべしとて、焦觸、張南、呂曠、呂翔、馬延、張顗六人の大將を先手に進め、三手に分れて幽州を攻させ、大軍跡に續て推よせたり。袁尙この由を聞て叶がたく思ければ、幽州を打すて夜中に遼西に奔て烏丸の胡を賴ける。時に刺史烏丸觸、白馬を殺して天地を祭り、幽州の諸官を集て血を歃り、皆袁氏を背て曹操に降るべしと盟を成、烏丸觸まづ血を歃て、我曹操は世に雙なき英雄たる事を知り、今ゆいて降んとす、もし順ざる者あらば忽ちに斬んと云て次第に歃下し、別駕韓珩が前に至りければ、韓珩刀を地に棄、われ等久しく袁紹父子の大恩を受、いま主亡と云ども、智は救こと能ず、勇は死ること能ず、是義に於て缺たり、若又膝を屈て曹操に降んことは、某が爲ざる所なりと、少も憚らず云ければ、一座みな色を變ず。烏丸觸

に、忽ちに出合、驀地暗に飛蒐て重ね打に斬付しかば、袁譚馬より落て了に曹洪に首を取れけり。郭圖は御方の破れたるを見て急に城中へ入んとしけるを、樂進追かけ弓を取て射たりければ、郭圖壕の中に射倒され、其儘首を取れにけり。樂進眞先に進んで城中へ蒐入ければ、曹操大軍を引て續て入、南皮の百姓を安ずる所に、忽ち一手の勢はせ來る。曹操急に兵を分て防んとすれば、是乃ち袁熙が大將に焦觸、張南と云もの二人、甲を卸戈を倒にして降人に出るなり。曹操喜て二人を列侯に封じければ、又黑山と云所の強盗張燕と云もの、十萬の勢を引て降參す。曹操又平北將軍に封じて、樂進、李典と共に幷州の高幹を攻させ、自ら幽州に向て袁熙、袁尙を攻んとす。先袁譚が首を郡縣に遍く傳て北の城門に梟させ、誰にても此首を見て哭もの有ば、其三族を殺さんと觸たりけるに、一人布の冠を戴き喪の服を披て首の邊にて哭ものあり。番の兵生取て出しければ、曹操なに者ぞと問に、知もの答て曰、これは北海營陵の人にて、王修字は叔治と申者なり、青州の別駕たりしが、袁譚を諫て逐出されたり。曹操が曰、汝來り哭は我法度を知ざるか。王修が曰、われ已に知れり。曹操が曰、汝三族の滅ることを怕ぬか。王修が曰、われ生て忠を盡す、主の亡るを哭ざるは義に有ず、死を怕れ義を忘ば何を以てか世

斬て落されければ、袁譚退て城中へ入にけり。曹操息をも繼せず四面を圍で攻ければ、袁譚ふせぐべき力なく、辛評を使として降人に出んことを求む。曹操怒て申けるは、袁譚年少して其心定らず、今又降んことを望と云ども、我なんぞ之を許べき、辛皮われに事て忠を致す、汝も袁譚を捨て此に住り、兄弟共に我に事よ。辛評答て曰、古より主貴ければ則臣榮、主憂れば則臣辱と云り、某なんぞ此に住らんやとて、城中に回りて曹操が許ざる由を告ければ、袁譚怒て、汝が弟曹操に事ふ、汝も二心あるならんと云ければ、辛評氣を激して地に昏絶し、起も直らで死にけり。袁譚甚だ後悔し、郭圖を呼で計を問ければ、郭圖が曰、もし曹操と大將を戰はしむる時は、御方必ず勝こと能じ、明日この所の百姓を集て先手とし、一度に兵を進めて討混の軍を致しなば、兩方の雌雄一擧に決せん。袁譚しかるべしとて其夜南皮の百姓を驅あつめ、次の日の曙に四方の門を開て賊の聲天地を崩し、直ちに曹操が陣に推寄て兩軍入亂て攻戰ひ、辰の刻より午の下まで勝負いまだ分たず、馬の馳ちがふ音矢叫の聲山川を振動し、互に命を惜ねば、血は流て河の如く、屍は積で山の如し。曹操この體を見るに、尋常にては叶じと思ひ、自ら馬を棄て傍なる山へ上り、攻鼓を擊て激ければ、名を惜む大將ども彌力を揮て我先にと進ける。此に因て袁譚引色に成ける所を、曹操が大軍息をもさせず揉だりければ、袁譚大に

袁尚に送れる書の略に曰、

青州天性峭急、迷ニ于曲直ー。君當下先除ニ曹操ー、以卒中先公之恨上。事定之後、乃計ニ曲直之計ー、不ニ亦善ー乎。若迷而不レ返、則韓盧東郭、自困ニ于前ー、而被ニ由夫之獲ー也。

袁譚書簡を見て劉表が救ざるを知、自ら曹操に敵すること叶まじと思ければ、平原を棄て南皮と云ところへ落ゆきけり。建安十年春正月、曹操大軍を率して南皮へ攻かゝる。時に餘寒甚しくして河筋こと〴〵く凍り、船を通ずべき様なかりければ、曹操その邊の百姓を集て氷を敲て舟を挽、兵の勞を助よと下知しけるに、百姓皆山中へ逃かくれけり。曹操武士に命じてことごとく捕て殺さしめんとしければ、百姓これに怕れ、自ら曹操が陣に來て皆罪に伏しけり。曹操が曰、われ武士に汝等を殺せと云て、今もし免す時はこれ法令の明ならざるに似たり、若又汝等を殺時は仁心なきに似たり、汝等たゞ山中に深く隱れて武士に捕るゝこと勿とて免ければ、百姓みな淚を流して去にけり。斯て大軍南皮を指て推よせければ、袁譚も兵を引て城外に陣を張。曹操馬を乘出し、我汝を用ふること輕からざるに、何ゆゑに逆心を挾めると詈ければ、袁譚が曰、汝わが國を犯して冀州を奪ひ、反て我を逆心と云は何事ぞ。曹操怒りて徐晃出よと云ければ、徐晃刀を舞して斬てかゝる。袁譚が陣より彭安と云もの馬を出し、只一合に徐晃に

を遣して密に袁譚が樣を窺はせける。袁譚は郭圖が計を用て甘陵、安平、渤海、河間なんど云所を掠とり、袁尙が中山へ落たるを聞て急に推よせて攻ければ、袁尙ふせぐこと能ずして我先にと逃て了に幽州に行、兄の袁熙と一所になる。袁譚降參の勢を集て威風漸く振ければ、曹操を攻破て冀州を取囘さんと評定す。曹操この由を聞使を以て試に招と云ども、袁譚つひに來ざりしかば、重て人を遣、書簡を送りて交を絕、自ら大軍を引て平原に攻かゝる。袁譚これを聞て怕れ驚き、急に荊州へ使を馳て劉表に救を求む。劉表乃ち玄德と議しければ、玄德の曰、いま曹操すでに冀州を破て其勢大山の如し、某量に袁譚兄弟久しからずして皆曹操が爲に擒と成ん、況や曹操つねに荊州を窺の心あり、只よく御方の兵を養ひ置て、國の境を用心し玉へ、袁譚いかに賴とも、必ず妄に兵を動し玉ふべからず。劉表が曰、しからば如何して答ふべき。玄德の曰、書簡を以て袁譚、袁尙が所へ送り、兄弟の和睦を勸るを名として緩々と日を延さん。劉表然るべしとて二人の方へ書簡を送る。袁譚に送れる書の略に曰、

君子違レ難不レ適ニ讐國一、交絕不レ出ニ惡聲一。日前聞ニ君屈レ膝降レ曹、則是忘ニ先人之讐一、棄ニ親戚之好一、而爲ニ萬世之戒一、遺ニ同盟之恥一矣。若冀州不弟、當ニ降レ志辱レ身、以レ濟レ事爲レ務。事定之後、使ニ天下平ニ其曲直一、不ニ亦爲ニ高義一耶。

んば此門を出入すること能まじ。許褚腹を立て、我等皆十死一生の戰を經てこの城を攻取たり、汝いかなれば妄に廣言を放ぞと云ければ、許攸又曰、汝が如き者は匹夫より身を起、共に事を論じがたしと罵しを、許褚いよ〳〵怒り劍を拔て許攸を殺し、首を取て曹操に見え、許攸浩る無禮を仕り候しゆゑ、首を取て來れりと云ければ、曹操が曰、許攸昔より我と朋友の交あり、この故に戲て云けるを、汝なにとて妄に殺せるぞと云て深く許褚が罪を責、屍を厚く葬しむ。曹操府堂に出て、たれか國中の民數戶籍を能知たると問ければ、騎都尉崔琰と云者こそ委く國中のことを知候へ、今は袁紹が諫れども從ざるを以て、虛病して家に在と答ふ。崔琰字は季珪、河東武城の人なり。曹操使を遣して召こと再三に及ければ、了に出て對面す。曹操乃ち冀州の別駕從事に封じ、昨日戶籍を考るに三十萬の兵あり、冀州は聞しよりも大國なりと云ければ、崔琰が曰、今天下わかれ爭て四海こと〴〵く亂る、此國久しく兵革の禍に逢て、今又袁譚、袁尙親の基業を爭ひ、人民骸を戰場に暴す所に、丞相仁義の軍を興し、風俗を德化して民の苦を救玉ふと聞て、萬人みな渴望す、然るに丞相この國に入玉ひてより曾て其事は無、たゞ軍兵を計て合戰の用意をのみ仕玉はば、萬人みな案に相違して日ごろの望を失んと答しかば、曹操色を改めて之を謝し、上賓の禮を以ていよ〳〵重く敬ひ、其後平原へ人

を得んとて、鞭を擧て指揮をなす。曹操笑て、汝が云ところ然とて直ちに府中の門に到り、誰か我より先に此内へ入たると問に、番の兵答て曰、曹丕すでに先達て入玉へり。曹操大に怒り、我法を侵す、斬て弃んと云けるを、荀攸、郭嘉これを諫て、世子早く入玉はずんば、誰かこの府中を蹈鎭る者あらんと云けるゆゑ、曹操げにもとて放しけり。劉夫人すゝみ出て曰、世子にあらずんば我等みな雜人の手に殺れん、願くは此女を獻るべし。曹操よび出して見るに、甄氏再拜して立たる貌、まことに天上の人と思ひければ、是こそ眞に我子の婦なれと云て曹丕に賜ふ。冀州すでに治りければ、曹操自ら袁紹が塚を祭、涙を流して諸人に申けるは、昔我と袁紹と兵を起時、互に其志を問て袁紹申けるは、我南は河北に據、燕代を阻て戎狄の兵を集め、南に向て天下を爭ひなば、事必濟べしと云けるを、我答て申けるは、不レ如我は天下の智慧ある人を多く用て、道を以て天下を御んに、服ざる者はあらじと共に語りしことも、早昔がたりと成て猶耳に留れり、袁紹すでに滅と云どもわれ昔の事を想て涙を流すと語りければ、諸人ことごとく感嘆せり。その後諸軍に恩賞を施し、河北の人民久しく兵亂の災に遭、これに依て此年の年貢を盡く免と云て、漢の天子に表を獻て自ら冀州の牧と稱す。其次の日許褚馬に乘て東の門より城に入ければ、許攸あとより來て呼回して申けるは、汝等もし我力を假にあらず

て城の北に屍を厚葬せける。

○曹操引レ兵取ニ壺關一

建安九年秋七月、冀州の城やぶれければ、曹操大軍を引て自ら城内に亂れ入。時に嫡子曹丕字は子桓、年十八歳にて父に從ひけるが、自ら隨身の兵を引て先袁紹が府中に行、馬より下劍を提て内へ入ければ、門を守る番の兵推止て曰、丞相命あり、誰にても此内へ入しめず。曹丕大に怒り、劍を提て馳入、直に後堂に行ければ、一夫人一人の女を懷に抱、此いかにせんとて哭居たり。曹丕前に走りより、劍を取て斬んとすれば、俄に紅の光目の前に起る。此ゆゑに心あやしみて汝は何ものぞと問ば、答て曰、某は袁紹が妻の劉氏なり。又懷なるは如何にと問ば、劉夫人答て曰、此は次男袁熙が妻の甄氏なり、袁熙遠く幽州へ赴ゆゑこの所に留たり。曹丕前に立より髮を取塵垢つきたる顏を見て、袍の袖にて推拭ひよく／＼見るに、玉の肌花の貌まことに傾國の色艶なりしかば、心驚て我は曹丞相の子なり、必ず汝が一家を救ふべしと云て、劍を提て堂上に立ければ、諸人怕て入もの無。暫ありて曹操馬に乘て城に入ければ、許攸つと來て申けるは、如何に阿瞞、もし我計におらずんば汝爭かこの冀州を取こと

日明方に、審榮西の門を推開て寄手の勢を引入けり。辛毗馬を飛して眞先に進み、大軍ことごとく込入ければ、審配東の矢倉より望見て六七騎にて馳上り、命を惜ず大勢の中へ蒐入、徐晃と馬を交て戰ひけるが、了に生取れて城外に引出さる。辛毗これを見て牙を咬目を怒らし、鞭を以て審配が頭を打、賊奴今日思ひ知と云ければ、審配縛られながら、汝狗の輩、曹操を引て冀州に入、われ恨らくは汝が肉を食ざることをと詈けり。已に曹操が前に引出しければ、曹操問て曰、汝門を開て我を引入たる者を知たるか。審配が曰、知ず。曹操が曰、これ汝が姪の審榮が所爲なり。審配が曰、小兒無用の輩、却て浩る事を仕出せり。曹操問て申けるは、我先日城を圍ぬる時、如何なる弩なれば夥しく射出しけるぞ。審配答て曰、恨らくは少し、恨らくは少し。曹操又曰、汝袁氏に事て忠を盡ずんばあるべからず、今すでに我に降らんか。審配答て曰、降ず降ず。時に辛毗涙を流して地に拜哭し、某が一族八十餘人みな此賊に殺されたり、願くは丞相この賊を某に賜へ、首を以て魂を祭んと云ければ、審配が曰、われ生ては袁氏の臣たり、死しては袁氏の鬼と成ん、汝等が如く讒諂阿諛の賊たるべからず、速に斬とて歩み出ければ、曹操武士に命じて首を討しむるに、審配その武士を叱り、我君北に在す、我を南向せて殺こと勿れと云て、了に北に向ひ頸を延て斬せければ、聞人みな涙を流す。曹操も其忠義を感じ

の城元より壕深ければ、敵の溝甚だ淺して爭か其功を成ことを得んとて見居たる所に、諸大將こと〴〵く來、今寄手の勢城外に溝を掘、急に追ちらさずんば大なる禍ならんと云ければ、審配が曰、空く敵の力を費すべし、恐るゝこと勿とて事ともせずして居たりけるに、其夜曹操十倍の人夫を添、力を併て掘せければ、曉に及で廣深さ同じく二丈の溝を掘、漳水を引て城に流かけたりけるに、水勢天に漲て城中水の深已に六七尺に及び、殊に兵粮乏なりしかば、餓死する者その數を知ず。辛毘城外に在て先日袁尙が落したる印綬衣服を槍の先に指擧、城中の人人早く降て命を助れと呼はりければ、審配大に怒り、汝久しく此國の恩を受ながら何ゆゑに曹操に降れるぞと云て、辛毘が妻子一屬の城中に有もの八十餘人を捕へ、矢倉の上にて一人づつ斬ころして其首を擲落しければ、辛毘涙を流し面を掩て哭き號ぶ。城中日に從て兵粮乏くなりしかば、諸人祕藏の名馬を殺して一時の饑を救ひ、士卒こと〴〵く倒て城を守ること能ず。此に審榮と云ものあり。元來審配が兄の子たりしが辛毘と厚く交り、今西の攻口を固城の弱たるを見て、密に書簡を矢の先に括て城外へ射出しければ、軍士これを取て辛毘に與ふ。辛毘ひそかに曹操に見え審榮が內通の事を語ければ、曹操諸將を集て法を出し、冀州もし破ば必ず妄に人を殺こと勿れ、假令袁氏の一門たりとも降る者を殺べからずとて、兵を揃て待ければ、次の

もせず、衣を更め馬を乗かへて又袁尙に攻かゝり、大軍を三手に備て兩方の兵入みだれて戰ひけるに、袁尙大に破れ西山に退て陣を取、馬延、張顗を一陣に備ければ、曹操この由を聞、呂曠、呂翔に命じて降參を勸しむ。呂曠兵を引て西山に推よせ、大音あげて、いかに馬延、張顗よく聞玉へ、袁尙今亡んとす、曹丞相は寛洪大度、賢を敬ひ士を禮す、二人もし降玉はば必ず封侯の賞あらんと呼はりければ、馬延、張顗忽ちに心を變じ、了に從つて降人に出。曹操對面して二人を列侯に封じ、次の日兵を進て西山に攻かゝり、呂曠、呂翔、馬延、張顗に敵の兵粮を運路を切塞せければ、袁尙叶じとや思けん、夜中に濫口まで退て陣屋を構んとする所に、思ひも寄ず忽ち四方に火を付て伏の勢一同に起ければ、袁尙が勢、人は甲を被るに及ばず、馬は鞍を置に及ず、我さきにと五十里あまり逃たりけるが、豫州の刺史陰夔を使とし、陳琳を差添て降參すべき由を願けり。曹操二人の使に對面して快く降參を許し、夜に入て張遼、徐晃に命じて急に袁尙が陣を攻させければ、袁尙驚き躁で印綬を落し、旗幟を棄て這々中山へ逃走る。曹操又兵を回て直に冀州を攻ければ、許攸計を教て曰、漳河の水を引て此城を水攻にし玉ふべし。曹操げにもとて兵を城外に遣し、廻四十里が間に溝を掘せけり。審配矢倉に登て曹操が兵の溝を掘を望み、溝甚だ淺かりければ、大に笑て曰、これ漳河を引て城を水攻にせん爲なり、こ

李孚が曰、城中兵粮乏して此まゝにては叶まじ、老弱の百姓女房を城外へ出して曹操に降しめ、城中の饉を救ひ玉へ、若百姓一度出ば、跡につゞいて兵を出し、相圖の火の手を擧玉ふべし。審配しかるべしとて次の日城の上に白き旗を立て、冀州の百姓降參すと書付ければ、曹操これを見て打笑ひ、是は城中兵粮に乏して、老弱なる百姓を出して兵の饉を救ん爲なり、百姓もし出ば敵の兵必ず跡に續て討て出べし、其用意をせよとて張遼、徐晃に各三千餘騎を付て兩邊に伏おき、自ら麾蓋を張せ大軍を引て城ちかく寄ければ、果して內より門を開て、多の百姓老たるを扶け幼を抱き、手に白き旗を持て紛々として出きたる。曹操聲をあげ、我汝等が城中に在て苦ことを知、もし出て降ずんば盡く饑死すべしと云ければ、皆地の上に拜伏す。曹操後陣へ遣して饉たる者共に糧を與ければ、數萬の百姓われ先にと爭ひ食。百姓すでに出了ける時、案に違ず城中の軍兵一同に突て出ければ、曹操紅の旗を動しけるに、張遼、徐晃二手の勢殺到し、散々に蒐立ければ、城中の勢しばし戰ふと云ども叶はで逃入けり。曹操兵を下知して自ら馬を飛し追すがうて城に入んとすれば、已に橋ちかく成て城の內より弩をつるべ放つ。其矢雨の如にして曹操を馬より下に射倒し、盔の眞甲に矢二條射かけられて、已に危見えける時、諸大將はせ來り漸に救かへる。曹操わが陣に歸り、頂に立たる矢も薄手なれば事と

袁尚男

袁尚
西山の小路より
滏水の
渡に出る
曹操勢

で小路より出よとて盡く打起たり。是由先達て曹操が方へ聞ければ、曹洪諫て申けるは、古より皈師勿掩と云り、今袁尙を始として其手の兵妻子一類こと〴〵く此城中にあり、必ず皆命を弃て戰ふべし、暫く御方を退て快く敵を城中へ入しめ、其のちに又かこみ玉へ。曹操が曰、袁尙もし大路より來らば、我乃ち退て敵を避べし、若又西山の小路より來ば一戰に生取ん、われ量に袁尙計なき者なれば、必ず小路より來るべし。暫く有て早馬來り、袁尙西山の小路より遠く滏水の渡に出たりと告ければ、曹操手を拍て笑ひ、是天われに冀州を賜ふなり、彼もし來ば必ず火の手を舉て城中へ相圖を成、內外より討て城に入べし、我もし兵を二手に具て、一手は袁尙を防ぎ一手は城中の敵を防ぎなば、事必ず成就せんとて心の內大に喜ぶ。去ほどに袁尙滏水の界を過て東の方陽平に至り、陽平亭に陣を取、一方は滏水に靠て冀州の城までは纔に十七里を隔たれば、多く柴薪を積で、夜に入ば火の手を舉て相圖を知せんとて、主簿李孚を曹操が奉行に仕立、路々にて陣屋の番衆を警て通り、とがむる者無りしかば直に城下に到り、門を開と呼はりける。審配その聲を聞知て門を開て入ければ、李孚申けるは、いま君すでに陽平に陣を取玉ひ、城中と相圖を合せ火の手を揚て、其時に敵陣に蒐り玉ふ、必ず城中よりも討て出て迎玉へ。審配さらば柴薪を用意せよとて山の如に積あつめ、兵の手分を定ければ、

を日の下に見下し、又地の底に路を付て攻入んとしけれども、城を守る大將審配計多き者なる故に容易破るべしとは見えず。或時東の門を守る大將馮禮と云もの、酒を好で夜まはりを怠ければ、審配四十杖脊を打てその罪を正す。馮禮責られて心の內深く恨を含、潛に門を開て曹操に降參す。曹操城をやぶるべき計を問ければ、馮禮が曰、突門の內土厚候へば、潛に地の底を掘て城中に忍入、火を掛て喊の聲を擧べし、其時四方の寄手一同に攻かゝり玉はば忽ちに破るべし。曹操しかるべしとて精兵三百人を擇で馮禮に從へ、夜中に路を掘せける。城中には審配日夜怠ことなく自ら內外を巡見しけるに、寄手每夜城の四方に篝火を燒けるが、或夜突門の方ばかり暗かりしかば、大に笑て曰、これ必ず馮禮が計にて、地を掘て入ん爲なるべしとて、急ぎ屈强の兵を擇、大石を運せて突門を掘切ければ、馮禮路を塡がれ皈るべき樣なくして、三百の精兵と皆地の底にて亡けり。曹操馮禮が仕損じたるを見て一手の勢を洹水の邊に遣し、袁尙が囘を窺はしむ。此時袁尙は平原に寄て袁譚と戰けるが、曹操すでに尹楷、沮鵠を破て冀州に向ひ、窃く鄴城を攻ると聞て兵を二手に分、囘て冀州を救んとす。大將馬延が曰、大路よりは行べからず、必ず曹操が伏勢あらん、小路より西山を經て滏水の渡に出、曹操が陣を襲時は、城の圍自ら解べし。袁尙が曰、われ先に進では惡かるべし、汝張顗と共に先手に進

張顗二人を先手とし、急に兵を進て平原に攻かゝる。袁譚この山を聞て曹操に救を乞ひければ、曹操が曰、われ今まで軍をせざるは斯る使を待ゆゑ也、必ず冀州を攻とるべし。この時許攸都より來りけるが、袁尙が平原を攻ると聞て曹操に見て申けるは、丞相なにを待て今まで袁尙を攻玉はざる、唯徒に雷の落て袁譚、袁尙を殺を待玉ふか。曹操が曰、われ兼て計を定たり、さらば攻べしとて曹洪を大將として鄴城を攻させ、自ら一軍を引て毛城に出、尹楷に攻かゝる。尹楷兵を備て一陣に馬を出しければ、曹操大音あげて許褚は無かと呼はる所に、忽ち陣中より一人の大將これに居候と答て、飛が如に蒐出、尹楷を只一刀に斬て落し、勢に乘て攻ければ、大將を討れてなじかは怺べき、散々に成て逃はしる。曹操自ら降る者は助けんと呼はりければ、盔を卸馬より下て地に跪もの數を知ず。毛城すでに破ければ、又邯鄲に攻かゝる。沮鵠兵を引て出ければ、曹操の陣より張遼つと蒐出、二人火を散して戰ひ、沮鵠了に打負て四方へ亂れて走りけるを、張遼のがさじとて大勢の中に追て入、あはひ近なりける時刀を收め弓を取て兵と射に、沮鵠たゞ中を射られて馬より落て死にける。曹操二箇所の敵を亡して、今は袁尙を救べき者なし、早く冀州を踏破んとて、大軍こと〴〵く鄴城へ推よする。兼てより曹洪が勢城を圍で居けるに、曹操が大勢重りければ、城中の兵いよ〳〵緊く相守る。曹操四方に山を築て城

黎陽に退て二人を列侯に封じたるは、河北の諸將を釣ん爲なり、國中こと〴〵く手に入て後了には君を害せんと思ふ心あり、將軍の印を刻て密に呂曠、呂翔に送り、二人に事を内應せさせ、曹操が袁尙を滅して後、その便を窺て計を成玉へ、若この儘にて閣ば、呂曠、呂翔長く曹操が臣とならん、今君より將軍の印を送り玉ふ時は、御方を思うて必ず内應を致べし、然る時は曹操を滅す時の助と成ん。袁譚げにもとて遂に將軍の印を刻で密に呂曠、呂翔にぞ送り與へける。二人この印を受て曹操に語ければ、曹操あざ笑て、今袁譚ひそかに印を送るは汝等に内應させん爲なり、我に袁尙を討せ、その後に又汝等と志を合せて我を討んと計るもの也、これ程なる淺き計を我なんぞ知ざらん、われ袁尙を討て後は兵糧自ら澤山なるべし、然る時は袁譚野心を挾と云とも、爭か我を害することを得ん、汝等かりに印を受よと云けるが、心の内これより袁譚を殺んと定けり。斯て建安九年春三月に至、袁尙鄴城に在て審配と計を議し、今曹操淇水の流を白溝に通じておびたゞしく兵粮を運、必ず冀州を攻の心ならんと云ければ、審配が曰、檄文を武安の尹楷が所に遣して、毛城に陣を取て兵粮を通ぜさせ、沮授が子沮鵠を大將として邯鄲に陣を取て曹操を遠攻にせさせ、君は大軍を引て平原を急に討やぶり、先袁譚を滅して其後に曹操を討玉へと敎ければ、袁尙げにもとて審配を留て冀州を守らせ、馬延、

○曹操決二漳河一渰二冀城一

建安八年冬十月、曹操荊州を引て冀州へ打向ければ、劉表玄德その計あらんことを怕れて輕輕しく追ず。この由先達て沙汰ありしかば、袁尙大に驚き、平原の圍を解て急に鄴城へ馳回り、呂曠、呂翔兄弟を後ぞなへとして追手を防しむ。袁譚この體を窺ひ、さらば追討に攻よとて急に跡より蒐りければ、忽ち後に相圖の鐵砲を鳴して、山陰より呂曠、呂翔喊を造て討て出、引つゝんで討んとす。袁譚のがるべき方なく、哀て告て曰、わが父ありし日曾て汝等を輕んぜず、何ゆゑに袁尙を扶て我に敵するぞと哭ければ、二人その理に伏し、馬より下て降參す。袁譚が曰、汝等われに降ること勿れ、唯曹操に降れとて、二人を伴て曹操に見ければ、曹操限なく喜び、我女を以て袁譚に妻あはせ、呂曠、呂翔を列侯に封ず。袁譚乃ち早く冀州を攻玉へと勸ければ、曹操が曰、いまだ攻べからず、今御方兵粮足ずして陸路の運送に諸軍こと〴〵く疲れ勞す、我洪水の流を過て白溝に通ぜしめ、兵粮の路を容易して其後に攻かゝるべしとて、袁譚を平原に留て陣を取せ、自ら呂曠、呂翔を伴て黎陽に引退く。郭圖密に袁譚に告て申けるは、いま曹操女を以て君に妻あはするは、君の心を疑しめじと也、又呂曠、呂翔を此に留ず、共に

ふな、某たゞ其勢を論ずべし、今袁譚、袁尙兄弟互に戰ひ爭は、他人その間を隔るにも有ず、賢臣は內に誅せられ、兵革は外に敗れ、國二つに分れて數年合戰の休時なし、この故に甲冑脫こと無れば盡く虱を生じ、饑饉旱蝗打つゞきて國に兵粮の貯なし、天の災上に應じ、人の困下に窮、凡て賢愚の分なく、盡く土の如に崩れ瓦の如に解、これ乃ち天袁氏を滅すなり、兵法にも石城湯池、帶甲百萬、而無粮者、不能守と云り、いま丞相兵を引て鄴城を攻玉はんに、袁尙が救なき時は忽ちに落城すべし、若袁尙救の爲に出ば、袁譚後より追討に蒐らん、丞相の威を以て疲たる敵を討玉ふこと、恰も迅風の秋の木の葉を掃が如ならん、天いま袁尙が首を丞相に與玉ふ、丞相これを取ずして荊州を攻玉ふ時は、荊州要害きびしうして中々急に搖こと能じ、今袁譚、袁尙互に爭て亡こと目前にあり、若天の與るを取玉はずして、來年歲豐に熟し、二人過を改て共に和睦し、舊き謀士を用て要害を守なば、丞相いかゞして攻玉はん、今袁譚が請に任せて御方に成玉ふ時は、其利大なり、今天下の寇河北より大なるは無、河北もし滅る時は天下震動せん、然らば是霸業成なり、願は明に察し玉へとさしも快く云ければ、曹操喜て小踊し、我御邊に早く對面せざることを恨とす、さらば打起とて、卽時に西平の陣を收て冀州へぞ向ひける。

時に辛毘出來りければ、曹操よび入て其故を問ふ。辛毘書簡を出して袁譚降參の由を告ければ、曹操まづ陣中に留め置、文武の大將を集てこの事如何あらんと評定す。程昱の曰、袁譚いま袁尙に攻られ、是非なくして降參を願ふ、本心の降參に有ず、先荊州を攻て、袁譚、袁尙が互に攻爭ひ大に疲るゝを待て其後に滅し玉へ。呂虔が曰、劉表大國を保て其勢甚だ强し、宜く先平玉へ。滿寵が曰、丞相大軍を引て已にこれまで出玉ふ、今又なんぞ外に向ひ玉ふべき。荀攸が曰、諸大將の意見いまだ善つくさず、某が愚意を以て思ふに、天下いま是ほどに亂れ爭の時に、劉表四十二州の大國を持ながら了に外に出ること無、たゞ境を守る計なるは大なる志なき驗なり、袁紹は四箇國を保て精兵數十萬を集たり、今度々敗軍すと云ども民の心よく服して城の構堅固なり、若袁譚、袁尙和睦して父の業を守る時は、天下いつか定るべきや、今兄弟國を爭ふ、必ず一方は打負べし、今袁譚が御方に降んと願ものは袁尙に攻られて也、丞相その降參を許し、急に兵を進めて先袁尙を滅し、後に變を見て其根を絶玉ふ時は、是天下すでに定る成べし、この時を失ふべからず、先劉表を弃置て急に冀州に向ひ玉へ。曹操げにもと心喜び、辛毘を呼で樣々に持なして、今袁譚汝を使として降參を求るは眞か又詐か、袁尙は其勢つひに能必ず勝べきか、汝明に述よと云ければ、辛毘答て曰、丞相少も袁譚が降參を疑玉

後の禍を絶玉へと云しかば、袁尚は平原に攻かゝる。袁譚討て出て防ぎ戰ふと云ども、了に破て引退き、堅く守て出ざりければ、袁尚大軍を以て三方より攻。袁譚が陣中兵粮の用意なかりしかば、始終いかゞとて郭圖と商議す。郭圖が曰、いま御方兵粮に事を欠で袁尚又手痛く攻、某よく思ふに了に此ところを守ること能ねば、使を出て權に曹操に降參し、早く冀州を攻とり玉へと云ば、曹操必ず攻きたらん、袁尚これに怕れて此を打弃冀州へ囘る時、御方追討に攻かからば、鄴郡より北に出て忽ち袁尚を擒にせん、曹操もし冀州を攻ば袁尚が勢こと〲く亂れん、其時計を以て落ゆく勢を御方に集大に勢を振ば、曹操遠路を來り兵粮續すして自ら退くべし、然る時は趙の國より北は皆御方に屬して又曹操を防ことを得べし。袁譚しかるべしと同じて誰をか使に遣すべきと云ければ、郭圖が曰、いま平原の令辛毘字は佐治と云もの、本潁州陽翟の人にして甚辯舌によし、此人を遣べし。袁譚が曰、この人を我よく知り、乃ち辛評が弟なり。郭圖が曰、彼兄弟二人甚睦うして常に親む、早々に呼玉へ。袁譚乃ち辛評を以て右の趣を告させければ、辛毘欣然として出きたる。袁譚書簡を渡し三千餘騎を以て送り出しければ、辛毘直ちに都に上り、曹操は劉表を攻んとて西平に出たる由を聞、急に行て對面す。この時曹操荊州を攻んとて西平に陣を屯しければ、劉表急に玄德を先手として之を防ぐ。

んば、天下の内何ものをか親まん、彼讒人は皆人の骨肉を云隔てわづかに一朝の利を求んとす、君ねがはくは耳を塞で聞玉ふこと勿れ、若浩る讒人を誅してよく兄弟の交を厚せば、共に國を守て了に四方に横行し玉ふべし、願はつまびらかに思ひ玉へと諫ければ、袁譚怒て了に王修を追出し、城外に陣を移して袁尙を招きけり。袁尙使を受て審配と議しければ、審配が曰、これ必ず郭圖が計ならん、若かる〱しく行玉はば計に落入玉ふべし。袁尙が曰、しからば如何答ふべき。審配が曰、不如勢に乘て攻かゝり玉へ。袁尙これに從ひ、五萬の勢を率して自ら城外に討て出ければ、袁譚これを聞つけ、扨は事もれたりとて急に兵を引て蒐出たり。袁尙大音あげて樣々に惡口しければ、袁譚大に怒り、汝すでに父を殺して國を奪ひ、今又來て我を殺んとするかと呼はりて、二人火を散して戰ひ、袁譚打負て走りければ、袁尙急に追かけ勢に乘て揉だりしに、袁譚が勢若干討れて平原へ引退き、再び敗軍を集て郭圖が計に從ひ、岑壁を大將として又冀州の城ちかく推寄ける。袁尙これを聞て自ら城外に打て出、互に喊の聲を揚て岑壁散々に罵ければ、袁尙怒て自ら戰はんとする所に、大將呂曠後より馬を蒐出し、暫く戰て岑壁を馬より下に斬て落し、勢に乘つて攻ければ、袁譚しばしも怺ず、散々に亂て平原の陣へ逃こもる。袁尙繼ても追ざりしかば、審配勸て此勢に乘つて急々に攻よせ、根を除て

ければ、袁譚、袁尙は冀州の城に入、袁熙、高幹は城外三十里に陣を取、堅く守りて防ぎ戰ふ。曹操が兵數日せむれども、要害よければ寄手討るゝばかりにて、急には中々やぶりがたく見えしかば、郭嘉計を勸めて曰、袁紹もと袁譚、袁尙二人を愛して了に死るまで世嗣を定めず、今二人この城に籠と云ども、心の內互に疑あり、急に之を攻る時は兄弟力を倂せて防ぎ救ひ、緩之をせむる時は兄弟忽ち爭の色を顯す、不如まづ御方の勢を引とり、權に荊州に下て劉表を攻、ひそかに變を窺ひ見て、兄弟國を爭ふ時急に又攻よせ玉はば、只一息に冀州を取ん。曹操げにもと喜び、賈詡を留て黎陽を守せ、曹洪を留て官渡を守らせ、自ら兵を引取て都に回ける。袁尙は寄手の退たるを見て賀を述ければ、袁熙、高幹二人は本國に回、袁譚は密に郭圖、辛評を呼で相議し、我嫡子と生れて父の基業を繼こと能ず、袁尙は第三の子にして殊に後母の腹に出來たり、安んぞ妄に此國の主と成べき、如何なる計を用てか奪ひ取べきと云ければ、郭圖が曰、君まづ此城外に出て陣を取、酒宴を設て袁尙、審配を招、油幕の內に兵を伏置て忽ち二人を殺玉ふ時は、誰か君と爭もの有ん。袁譚これに從ひ、折節別駕王修青州より來りければ、郭圖が計を有の儘に告。王修申けるは、兄弟は左右の手なり、今却て爭をなし、其右の手を討切て我こそ勝たれと云ば、是まことの勝と云んや、夫兄弟を弃て親くせず

ければ、袁尚その書を開見て審配と評議す。審配が曰、みな是郭圖が所爲なり、郭圖元より計多し、先日この所に來て冀州を君と爭ざるは、曹操が勢の境を攻るゆゑなり、曹操を破て後は必ず袁譚を勸て爭べし、今逢紀が書簡來れりと云ども是みな已ことを得ずして爲もの也、君必ず救玉ふな、曹操が手を借て先袁譚を滅す時は、是後の患を除なり。袁尚げにもとて了に救の勢を起ざりければ、袁譚この由を聞ていよ〳〵怒り、逢紀を呼出して一刀に斬殺、この上は是非なし、曹操に降んと云。ある人密に袁尚に告て、いま袁譚救の勢なきを見て曹操に降んとす、若曹操と力を合せて此ところへ攻きたらば、冀州必ず危からんと云ければ、袁尚これに驚き、然らば救はでは叶まじとて、審配、蘇由二人を留めて冀州の城を守せ、自ら兵を引て黎陽に出、呂曠、呂翔兄弟を先手とし、まづ三萬餘騎を分て曹操が陣に推よせければ、袁譚救の來るを見て大に喜び、降參の意を飜して兵を揃て備を立、袁尚と犄角の勢をなす。この時二男袁熙幽州より來り、甥の高幹并州より來り、共に力を合せて三箇所に陣屋を造り、毎日奇兵を出して曹操と雌雄を爭ひ、戰ふ毎に曹操が勢勝に乘ずと云こと無りしかども、急に根を絶こと能ず。建安七年も已に暮て八年春二月に至り、曹操兵の手分を定め急に蒐て攻たりければ、河北の勢大に破て黎陽にたまり得ず、散々に成て逃わしる。曹操息をも繼せず、追蒐

を攻、いまだ事を計がたし、先しばらく閣て只逢紀を此ところに留め、曹操を打やぶりて後に卸て冀州を奪ひ、父の業を繼玉ふべし、古人も小不レ忍則亂ニ大謀一と云り、今逢紀を呼來れるは某が計なりと私語ければ、袁譚げにもとて卽時に兵を引て黎陽に出、汪昭と云大將を先手として曹操が陣に討て蒐れば、徐晃馬を駛出し、二三合戰て汪昭を馬より下に斬落し、勢に乘て攻たりしかば、袁譚が勢盡く敗れ、黎陽へ逃入て袁尙に救を求む。袁尙これを聞て審配と商議しければ、審配が曰、少ばかりの勢にて救玉へ、多時は害あらん。袁尙これに從ひ、五千餘騎を分て救しめければ、曹操人を出して援の勢の來るを窺ひ、李典、樂進を半途に伏置て救の勢を兩旁より取こめ、一人も殘さず陷穴に入て埋ころしけり。袁譚この由を聞て大に怒て逢紀を呼、なに故に我を斯の如に輕じて、わづかの勢を出して曹操に勝を得させたるごと責ければ、逢紀申けるは、某袁尙に書簡を送り、自ら來て救しめんとて冀州へ使を遣し

害をなすことも有んとて、五人の三族を殺しけり。其のち審配、逢紀、つひに袁尚を立て父の後を嗣せ、大司馬將軍領冀青幽并四州の牧とし、書簡を以て袁譚、袁熙、高幹に報ず。この時嫡子袁譚すでに兵を引て青州を出けるが、父の亡たる由を聞、郭圖、辛評と相議するに、郭圖申けるは、君この所に居玉ふなれば、審配、逢紀等必ず袁尚を立て冀州の君とせん、早々に行玉へ。辛評が曰、卒爾に行ば却て害あるべし。袁譚が曰、汝等しかるべく計ひ候へ。郭圖が曰、兵を城外に屯し、其樣子を伺ひ見て某自ら城に入べし。袁譚しかるべしと云ければ、郭圖冀州に入て袁尚に見ゆ。袁尚問て曰、兄なにとて來り玉はぬ。郭圖答て曰、袁譚軍中にて疾に染、このゆゑに來り玉はず。袁尚が曰、われ父の遺書を受、業を繼で河北の主となる、兄を車騎將軍に封ずべし、今曹操が勢境に入、兄を前手とし、我後陣に備て防んと欲す、汝早く回てこの由を申し候へ。郭圖が曰、袁譚青州の兵を引て城外まで來り玉へども、計を議すべき大將一人もなし、願くは審配、逢紀を伴ひ行て共に計を談すべし。袁尚が曰、この二人は我朝夕事を議る、片時も外に出すこと能じ。郭圖が曰、もしこの二人を出し玉はすんば、袁譚必ず疑の心起ん。袁尚已こと能ず、しからば二人の内一人を遣べしと云ければ、審配、逢紀互に讓て行ことを好ず。袁尚鬮を取て出よと云ければ、二人鬮を取て逢紀あたりしかば、車

紹申けるは、もし此ところまで敵を延ては戰に勝こと能じ、我自ら大軍を率し、打て出て戰ん。三男袁尙が曰、父の病いまだ全く痊ず、然るに出て軍を仕玉ふこと勿れ、某ねがはくは罷向て戰ん。袁紹しかるべしと許ければ、卽時に早馬を飛し、靑州、幽州、并州に觸て袁譚、袁熙、高幹をぞ呼よせける。袁尙は去年敵の大將史渙を討てより、氣早なる若武者なれば、我に繼く者あらじと思ひ、一人の功を顯さんとて援の勢をも待合せず、自ら數萬の兵を率し黎陽に出て陣を張、曹操が先陣の大將張遼と出合、二人戰三合にして袁尙叶はずして引退き、追討に手痛せめられ一支も支ず、夜中に冀州まで逃ければ、袁紹これに驚て舊病ふたゝび起り、血を吐て已ず、昏絕して倒れければ、劉夫人たすけて後堂に入。されども次第に賴少なりければ、劉夫人急ぎ審配、逢紀を呼、後の事を評定す。袁紹もの云こと能ず、手を以て袁尙を指しければ、審配床の前にて遺書を寫す。劉夫人傍に寄、袁尙を世嗣に定べきかと云ければ、袁紹打うなづき大に一聲さけびけるが、血を吐こと一斗あまりにして忽に息絕たり。時に建安七年夏五月なり。劉夫人喪を執行けるが、いまだ葬をも成ざる已前に、日ごろ袁紹が寵愛せし妾五人を殺し、死して後も魂の九泉の下にて再び袁紹に逢んことを恐て、其髮を斂み切面の皮を剝、屍を切毀て弃させける嫉妬の程こそ懼しけれ。袁尙又その女の一屬を生て置ば

攻んとしければ、程昱諫て曰、袁紹いまだ滅ざるに一旦荊州に下玉はゞ、袁紹必ず北に起らん、若南方より夾んで攻ば、御方いかゞして防べき、劉表いまゝ玄德が助あり、袁紹又三人の子あり、輕々しくする時は大なる後悔あらん、不如まづ都に囘、暫らく人馬の氣力を養、來春暖なる時に至て大軍を引て北國に向ひ、先袁紹を滅して其勝に乘たる兵を率し、荊州に攻かゝり玉はゞ南方忽ちに定らん、然る時は天下を平均すること掌の内にありと云ければ、曹操げにもと喜て遂に都に回りけり。

○袁譚袁尚爭冀州

去ほどに建安六年も已に暮て七年の正月に成ければ、曹操諸大將を集て北國に下んことを相議し、先夏侯惇、滿寵二人に汝南を守らせて劉表、玄德が壓とし、曹仁、荀彧を留て都を守らせ、自ら大軍を引て又官渡に出張す。袁紹は去年より病に染、吐血の症を受て今春漸く本復しければ、再び大勢を以て都を攻んと議しけるに、審配すゝみ出て之を諫め、去年官渡、倉亭の敗より御方の兵一人として勇ものなし、只よく城郭を堅し、要害を構て軍民の力を養ひ玉へと云所に、忽ち早馬きたり、曹操大軍を引て官渡に出、冀州を指て攻下り候と告ければ、袁

志を思ひ見るべし、いま若これを呼納ば、曹操怒て必ず此ところへ攻來ん、不如孫乾が首を刎て曹操に送玉はば、曹操必ず君と好を結べし。孫乾色を正して曰、某は命を惜ものに有ず、玄德昔て暫く三人に從ふと云ども、皆久しく留ざるは、呂布は父を殺せる罪人、曹操は君を欺く逆賊、袁紹は忠言を用ざる匹夫、賢才の人を妬損ふ、これ等の輩は安ぞ仁義の道を論ずるに足ん、玄德は本心たゞ漢の天下を救んことをのみ思ふ、この故に言必ず信あり、忠孝兩ながら全し、安ぞ身を屈て逆臣の下に屬ん、今劉將軍は漢室の苗裔にして、寛洪大度老たるを敬ひ賢才を尊、民を恤み下を導き、當世の英雄なる由を聞て遠く來て頼んとす、爾るに御邊いかなれば讒言を以て賢人を妬害せんとするやと憚る所なく云ければ、劉表これを聞て蔡瑁を追出し、我心すでに決せり、無用の舌を動こと勿と怒しかば、蔡瑁顔を赤して退出す。劉表云て曰、玄德いま何の所にかある。孫乾が曰、いま漢江の邊にあり。劉表さらば自ら迎んとて、郭外三十里出て玄德に對面す。玄德恭しく地に拜伏せられければ、劉表涙を流して疎遠の情を訴へ、接待甚だ厚かりしかば、玄德つひに關羽、張飛を呼で對面せさせ、共に荊州に入玉ふ。劉表慇懃に持なし、連日酒宴を設て無二の氣色に見えければ、蔡瑁不足の心ありと云ども敢て顔色にも出さず。時に建安六年秋九月、曹操は玄德荊州に入て劉表を頼よしを聞、急に荊州を

われ共に漢室の苗裔なりと云へども了に音信をも通ぜず、恐くは從はじ。孫乾が曰、劉表江漢の地に據、東は吳會に連り西は巴蜀に通じ、南は海隅に近く北は漢沔に接す、君もし從ざるを恐れ玉ふならば、某ねがはくは御使に參り、必ず劉表に城を出て自ら迎させ候はんは如何に。玄德然るべしと許し玉へば、孫乾馬を飛して荊州に行。劉表呼入て對面し、汝は玄德に仕て何ゆゑに此に來れると云ければ、孫乾が曰、劉玄德は將軍と共に漢室の宗親、天下こと〴〵く之を知、いま玄德力を盡して天下を扶んとし玉へども、如何がせん兵少く大將足ずしていまだ急に其功を成ず、汝南の劉辟、龔都は本より故なき者なれども、玄德の爲に命を弃たり、今玄德戰ひ敗れ、吳に行て孫權を賴んとす、某諫て爭か親を弃て疎を賴こと有んや、荊州の劉將軍は當世の英雄にして、人の皈すること水の東に流が如し、況や又共に漢家の宗親なり、よも見弃玉ふまじ、荊州に行玉へと申ければ、玄德理に伏し、先某を使として此趣を報ぜしむ。劉表喜で申けるは、玄德は我弟なり、久しく對面せんことを願ふ、われ坐ら九郡四十二州の國を保て一人の宗親を扶ずんば、天下の人に笑るべし、今いづくに居玉ふぞとて遠く人を出して迎しむ。時に大將蔡瑁すゝみ出て曰、無用々々、玄德は心根の正からぬ者にして義に背き恩を忘る、始め呂布に從て後に曹操に事へ、近ごろ袁紹に事て皆事をし損じたり、此を以て其

走り玉へば、前に一つの大江あり。處の者に問玉へば漢江なりと申す。渡を尋て向の岸に著玉ひければ、田夫野人も劉皇叔の來り玉ふと云傳て、羊を送酒を獻る。玄德沙の上に坐して諸將と酒を飲玉ひ、大に悲をなし、諸將みな世に勝れたる王佐の才あり、不幸にして我に跟ひ浩る難儀に遭り、今日上に頭を蓋ふ瓦なく、下に首を置べき地なし、誠に諸將の一生を悞る、御邊等なんぞ我を弃て然るべき君にも仕へ、共に功名を建て富貴を得ざると云玉へば、聞人みな顏を掩て哭けり。時に關羽すゝみ出て曰、これは如何なることを宣ぞ、昔漢の高祖は楚の項羽と天下を爭ひ、戰ふ每に打負玉ひしかども、九里山の一戰に打勝て了に四百年の基を開玉へり、某等共に兄弟の義を結び、黃巾の賊を平てより已に二十年に近し、或時は勝ある時は負、其志いよ／＼堅して再び天下を恢復せんと思ふ外に他の心さらに無、なにゆゑに今日俄に心を變じて甲斐なきことを仰候ぞ、必ず御志を墮して天下の人に笑はれ玉ふなと諫ければ、玄德の曰、古より主貴則臣榮と云ことあり、我いま身を置べき地なし、恐らくは諸將の望を失はん。孫乾が曰、君の命いまだ然らず、凡そ人は成敗みな時あり、志を墮べからず、荊州は此より程ちかく、太守劉表は當世の英雄、坐ら九郡を鎭て精兵數十萬を集、兵粮山の如に積、殊更君と共に皆漢の天子の宗親なり、早く行て御賴み候へ、必ず喜びて扶玉ふべし。玄德の曰、

玄徳
趙雲勢

趙雲高覧を刺く
玄德に會す
趙雲
高覧

防ぎ、君を落し奉らんとて、自ら眞先に進んで高覽と鋒を交へ、戰三合にして馬より下に斬て落さる。玄德震ひ怕れ路を奪て逃玉ふ所に、高覽が勢忽然として後より亂れ、一人の大將馬を飛して撞て入、只一槍に高覽を刺ころす。此乃ち趙雲なりければ、玄德われ又生たりと喜び玉ふ。趙雲勢に乘て敵の勢を四角八方へ蒐ちらし、又前なる敵に討て掛れば、張郃馬を交て戰ひ、十餘合にして叶がたくや思ひけん、急に馬を打て逃わしる。趙雲勝に乘て散々に攻ければ、張郃又踏留て戰はんとす。趙雲路の險を見て急に進み得ざる所に、忽ち關羽、關平、周倉三百餘騎にて馳きたり、張郃が後より攻ければ、張郃前後を防こと能ず、散々に成て逃たりける。玄德險阻に依て陣を取、關羽に命じて張飛が行衞を尋させ玉ふに、張飛は龔都を救んとて向ひけるが、龔都已に夏侯淵に殺されしかば、龔都が讐を報ぜんとて兵を引て攻かゝり、夏侯淵を打やぶりける所に、樂進、徐晃又新手を以て取かこみ、喚叫で戰うたり。關羽は遙に喊の聲をきゝ、急に尋行て樂進、徐晃を追ちらし、共に囘て玄德に見ければ、一人走り來り、曹操大軍を引て自ら此ところへ攻かゝり候と報ず。玄德大に驚き、孫乾等に夫人老少を守護して先に行しめ、自ら關羽、張飛、趙雲と後陣に備て且戰ひ且わしる。曹操十分に打勝ければ、最早これ迄なり、長追なせそとて了に兵を收て囘けり。玄德は千騎に足ず討なされ、路を尋て

時に、向より張遼後より于禁咄と喚て掛たりければ、趙雲馬を交へて張遼と暫戰ふ。玄德力を盡して防玉ふ所に、李典兵を引て横合に攻かゝる。玄德つひに叶はず只一騎深山の中を落玉ひければ、夜もすでに明て側なる山際より一手の勢蒐出たり。玄德驚て見玉へば、敵には有で劉辟が敗軍千餘騎、玄德の夫人一族を守護して汝南より迯きたり、跡に續て孫乾、簡雍、糜芳も來りければ、玄德喜て曰、汝南いかゞして破れたる。皆答て曰、張遼精兵を引て思ひも寄ざるに勢にのつて攻かゝる、城中にはかの事なるゆゑ防べき術なく、城を棄て走たれば、張遼急に追かけ、已に危きところに、關羽が救の勢はせ來り、張遼を防で我等を扶く、此ゆゑに辛き命を拾ひ得たり。玄德の曰、關羽、張飛が行衛を知ず、如何して尋べき。劉辟が曰、まづ此ところを出て其後に御尋あるべしとて二三里ばかり出ければ、忽ち鼓の聲天地を崩すが如く、一手の勢向より討てかゝる、眞先なる大將は張郃なり。玄德馬より下て早々に降參せよと呼はりければ、玄德膽を冷して退かんとし玉ふ所に、忽ち山の上に紅の旗を擧て、一手の軍馬山を廻て後の路を一文字に取切、眞先なる大將は高覽なり。玄德前後に路絕て迯るべき樣なかりければ、天を仰で長歎し、天いかなれば斯る苦みを見せ玉へる、功名いまだ成ず、死んには如じと云て、自ら首を刎んとし玉ひければ、劉辟急に止めて曰、某ねがはくは命を弃て敵を

我をこの所に留置て敵の勢は後へ廻れり、汝南もし破なば人々皆妻子を失ひ、其うへ身を容る所なかるべし、速に救べしとて、關羽に命じて汝南を救しむ。關羽すでに打起て半日をも過ざるに、早馬はせ來り、張遼すでに汝南の城を攻やぶりしゆゑに、劉辟龔都々に命をのがる、關羽すくひの爲に向ひけるが、半途にて敵の勢に圍れたりと告ければ、玄德色を失ひ玉ふ所に、又早馬來て、張飛すでに兵粮を救んとて出けるが、道にて敵の大勢に取まかれ、龔都も散々に討れて行方しらずと報じける。玄德心の内怕れ驚き、自ら退かんとし玉へども、曹操が追掛んことを恐れて如何せんと議する所に、許褚兵を引て推よせたり。趙雲討て出て戰んと云ければ、玄德おし留めて曰、かるぐしく出ること勿れ、暫く兵の氣力を養ひ、夜に入て此陣を打て穰山へ走べしとて、密く陣屋を守て出合ず。日もすでに暮ければ、諸軍みな兵粮をつかひ、徒立の勢を先出して騎馬の勢を後陣とし、已に五六里ばかり出て山際を通ければ、俄に四方より火炬をふり擧、山の頂より大音あげて、玄德を取にがすな、曹丞相こゝに在と呼はりて、鼓の聲天に喧く喊の音地に震て、四角八方に火を掛。曹操自ら降る者は免べきぞと呼はりければ、玄德あわてゝ逃玉ふ。趙雲が曰、君すこしも畏玉ふな、只某が跡に付て來り玉へとて、自ら槍を撚て眞先に進み、敵を突やぶりて路を開ければ、玄德左右に劍を提げ喚き叫て攻戰ふ

讀玉へば、曹操大に怒り、許褚は無か、あれ討とれと下知しける。許褚槍を撚りて一陣に蒐出ければ、玄德の後より趙雲馬を馳出す。曹操これを見て、奴はいつぞや我陣を忍で通し者なり、逃こと勿と云ければ、許褚、趙雲馬を交へ、戰三十餘合にして勝負を分ず。時に東南の方より喊の聲起て關羽兵を引て攻かゝりしかば、曹操勢を分て戰はんとするに、又西南の方より喊を吶と造て張飛が一軍平攻に突て蒐り、三方より攻たりければ、曹操大勢なりと云ども皆遠路の疲武者なるゆゑ、新手の勢に揉立られて我先にと逃わしる。玄德勢にのりて二十里あまり追かけ、人を出して敵の樣子を伺はしむるに、曹操五六十里退て陣を取たりと申す。玄德心喜び、此度思の外に曹操が勢を挫たりと云玉へば、關羽が曰、いや／＼輕々しく思ひ玉ふな、曹操は詭の計極めて多し、今退たるは必ず大なる計ならん。玄德の曰、今退は敵を恐てなり、何ぞ計あらんやとて、趙雲に命じて戰を催しめ玉ふに、曹操が勢十日ばかりも出ざりけり。玄德又張飛に命じて戰を催し玉へども、曹操が勢堅く守て一人も出ざりしかば、玄德心の內深く疑ふ時に、早馬きたり、龔都、汝南より兵粮を運び、路にて曹操が勢に圍れたりと告ければ、玄德急に張飛に命じて救しめ玉ふ。時に又早馬きたり、張遼ひそかに精兵を引きて後に廻り、汝南の城を攻ると告ければ、玄德大に驚き、さればこそ關羽が云しに違ず、

○玄德敗走荊州

劉玄德は汝南に在て劉辟、龔都が勢を併せ、曹操が袁紹を攻る間に、虚に乗て都を襲んとて已に打起玉ふ所に、思も寄ず曹操大軍を引て逆寄に攻きたる。玄德これを聞て打て出て戰ふべしとて、穰山に近づくこと五十里にして陣を張、兵を三手に分、東南の方には關羽、西南の方には張飛、南の方には玄德、趙雲備を立て待かけたり。去ほどに曹操大軍を引きて近付ければ、玄德の兵鼓を撃て喊を造る。曹操陣勢を開き張て玄德に逢て一言を云んと呼はりければ、玄德馬を出して旗の下に立玉ふ。曹操鞭を擧て申けるは、われ汝を用ふること輕からず、何ゆゑに恩を忘て謀反する。玄德あざ笑て曰、汝いつはりて漢の丞相と云ども、實は國を盜む逆賊なり、我は乃ち漢室の宗親、このゆゑに汝が如き逆臣を誅す。曹操が曰、汝みだりに云こと勿れ、われ天子の勅命を受、四方を征して降れるを招き順ざるを討。玄德の曰、汝が勅命と云は是みな詐の虚言なり、われ天子の密詔ありとて懷より綸旨を取出し、馬上にて高らかに

中々攻落し難し、況や今稲すでに熟せり、急に冀州へ攻掛て破こと能はざる時は、是徒に百姓の業を妨るに有ずや、姑く稲を刈斂るを待て其のちに攻かゝるべし。諸將諫て申けるは、もし百姓を恤で急に此城を攻玉はずば必ず後に悔あらん。曹操が曰、民は是邦の本なり、本を固うせば邦自ら安からん、若冀州を攻て其民を恤ずんば、縦ひ冀州を攻取たりとも是本を廢なり、我なんの用にかせんとて未だ一決せざる所に、忽ち早馬きたり、劉玄德汝南に在て劉辟、龔都を語ひ數萬の勢を集め、丞相の大軍此ところに出て都の内空虚なりと聞て、急に都を攻んとす、早く御勢を分て都を救玉へと告ければ、諸人みな驚ところに、暫ありて都より荀彧が使來り、書簡を以て玄德大勢にて攻きたると報ず。曹操これを聞て、さらば先都の敵を討んとて、曹洪を留て黄河の岸に陣を張せ、自ら大軍を引て汝南へぞ向ひける。

を討やぶり、蒐ぬけて御方を見れば、殘少なに討成れて、袁熈、高幹も深手を負たり。袁紹終夜ら百餘里の路を走り、追手も已に遠く成ぬとて、討れたる兵を數るに一萬人に餘り、殘る勢は盡く深手を負。袁紹三人の子を抱き、箇樣に脆き負をする者かと云て大に哭き哀み、覺ず昏絕して地に倒れ、血を吐て人心地も無かりけるが、暫ありて生出、苦しげなる息を繼で、我自ら軍をすること幾度と云數を知ず、然れども官渡、倉亭の如き敗を取こと無りしに、打つゞいて此の如なること、是天われを喪なり、曹操定めて追來るべし、汝等おの〳〵本國に回て再び兵を調へ、曹操と雌雄を決して誓てこの恨を散ぜよと云ければ、嫡子袁譚申けるは、青州は兵粮の用意も澤山に候、某再び回て兵を整候はん。袁紹しかるべしとて辛評、郭圖二人を傳て共に青州に赴しめ、次男袁熙を幽州に回し、甥の高幹を幷州に回し、自ら袁尙等と共に冀州に入て病を養ひ、袁尙に審配、逢紀二人を傳て假に軍勢を掌しめ、城中に兵粮の用意澤山なりしかば、要害に逆茂木を構て曹操を防んとす。曹操は倉亭の合戰に勝ことを得、諸軍に恩賞を與へて冀州の體を伺せけるに、細作回て申けるは、いま袁紹病に臥て、三男袁尙かりに父の職を務め審配等と城を守る、袁譚、袁熙、高幹は皆本國に回りて候。諸の大將これを聞て、急ぎ攻玉へと勸ければ、曹操が曰、冀州は兵粮の用意澤山にして、殊更審配と云もの計多し、急には

操大音あげて下知をなし、後に大河有て逃る時はこと〴〵く溺れ死せん、我自ら此にあり、汝等なんぞ快く戰はざると云て自ら眞先に進めば、諸軍なじかは命を惜べき、皆一度に取て囘し力を奮て攻戰ふ。中にも許褚は馬を飛して敵の村雲立たる眞中に喚て蒐入、袁紹が大將を十騎餘り斬殺し、勢電光の激するが如なりしかば、袁紹怺へかねて急に軍を退けんとするに、曹操勢に乘て追かくる。袁紹大に亂て走ところに、鼓の聲天に喧うして、左より夏侯淵右より高覽二手の勢討て出、挾んで揉だりしかば、袁紹三人の子を引つれ這々に逃て行。すでに五里ばかりを過て、又左より樂進右より于禁兩旁より出て餘さじと攻ければ、袁紹が勢したゝか討れ、血流て草を浸し、屍は路に横たはれり。又逃ることに三里にして、左に李典右に徐晃駭を造て蒐出、四角八方へ蒐立ければ、袁紹父子膽を冷し、驚き逃て舊き陣屋の内に入、諸將みな飢つかれければ兵粮をつかはんとする所に、左より張遼右より張郃雷の落るが如く陣中に突て入。袁紹あわてゝ馬に乘り、倉亭の陣まで漸に逃のび、人馬共に疲ければ暫く息を繼んとする所に、曹操自ら大軍を引て追きたる。袁紹命を弃て拒ぎ戰ひ、漸に圍を出て散々に走ければ、右に曹洪左に夏侯惇二手の勢行先を切ふさいで、一人も殘さず討止んとす。袁紹前後に路なきを見て大音揚、もし此ところにて命を惜まば、盡く生取るべしと呼はり、力を盡して一方

て出る者あり、是乃ち徐晃が組の大將に史渙と云大將なり。驀し暗に馬を交へ戰三合にして袁尙馬を回して走ければ、史渙のがさじと追來る。袁尙しり目に顧て、彀ちかく成しかば引回して丁と射る。その矢史渙が左の目を射通し、馬より倒に落て死だりければ、袁紹わが子の勝たるを見て、蒐れや者共と下知を成ば、數十萬の軍勢潮の湧が如に討て蒐り、兩軍入亂て午刻より酉の下まで戰ひ、互に多討れて昏方に軍を收む。曹操本陣に入て諸大將を集め、如何なる計を以てか必定袁紹に討勝べきと云ければ、程昱が曰、十面埋伏の計を用玉はば、袁紹必ず擒と成ん。曹操しかるべしと喜び、兵を黄河の邊に退て先備を十隊に定め、袁紹追かけて來りなば、御方の勢後に河あるを知て命を弃て戰ふべし、早く用意をせよとて左右齊く五隊に備へ、左の一隊は夏侯惇、第二隊は張遼、第三隊は李典、第四隊は樂進、第五隊は夏侯淵なり。右の一隊は曹洪、第二隊は張郃、第三隊は徐晃、第四隊は于禁、第五隊は高覽なり。中軍には許褚を先手として、次の日まづ十隊の兵を兩旁に埋伏し、夜半の比に至て曹操いつはりて許褚を進め袁紹が陣を攻んとす。許褚すでに推よせければ、袁紹が五寨に備たる大軍一同に討て出、引包て討んとす。許褚兼ての相圖なれば、暫く戰ふ體に見せて散々に逃ければ、袁紹勝に乘て大軍を一度に進め、喊を造りかけ息をも繼ず追かけ、夜の明方に黄河の岸まで追つめければ、曹

今これを考るに已に五十年に當れり、袁紹この處を治て百姓みな恨を含む、今丞相仁義の兵を興して民を救ひ罪あるを伐玉ふ、官渡の一戰に袁紹が百萬の勢を討破玉ふこと、皆これ殷馗が言に應ぜり、萬民太平を樂べき時すでに至れり、この故に喜び候。曹操笑て曰、老人の言われ何を以てか之に當んとて、酒を進め絹帛を與へ、其のち諸軍に法を出し、誰にても妄に百姓の家に入て犬雞にても殺しなば、人を殺したる罪の如ならんと觸ければ、諸軍みな法を守て秋毫も犯すことなし。是に依て軍民その德を感じ服せずと云もの無なりしかば、曹操心の內深く喜ぶ。時に早馬來り、袁紹又四箇國の勢二三十萬を集め、倉亭に出て陣を取たりと告ければ、曹操兵を進て陣勢を張。次の日袁紹が方より戰書を送りしかば、曹操乃ち今日勝負を決せんと答へて、兩方の軍勢鼓を打て鬨を造り、曹操諸將を引て馬を出せば、袁紹三人の子と一人の甥とを眞先に進め、自ら文武の大將を從へて旗の下に馬を躍す。曹操大音擧て、袁紹よく之をきけ、汝計窮り力盡て猶降參することを思はず、偏に刀の項に臨を相待かと呼はりければ、袁紹大に怒り左右を顧て、たれか出て敵を討んと云に、三男袁尙父の前にて手柄を顯さんと思ひ、左右の手に刀を提げ馬を飛して討て蒐る。曹操これを見てあれは何者ぞと問ければ、識ものあり、答て曰、これは袁紹が三男に袁尙と云もの也。時に曹操が後より一人の大將槍を撚りて突

耳に残り留れり、譬ば一つの兎を取んとて萬人爭て追かくるに、一の之を獲たる者あれば、萬人の貪る心つひに止、これ其主の定る故なりと申候き、今袁譚嫡子に生れて出て青州を守玉ふ、此亂の萠なり、古より兄を弃て弟を立る時は天下安からず、長ぜるを用ずして幼を立る時は家邦定まらず、今御方大に破て曹操すでに境に攻入、しかるに又袁譚、袁尙兄弟國を爭時は、是自滅を招の道なり、君よく敵を拒の計を定めて、家の政を亂り玉ふなと憚ところ無諫しかば、袁紹が心いまだ決せず。時に外より報じて袁熙幽州より六萬の勢を引て馳來り、高幹幷州より五萬の勢を引て馳來り、袁譚青州より五萬の勢を率して共に冀州の城外に陣を取玉ふと告ければ、袁詔限なく喜び、再び人馬を整へて曹操を拒んとす。此時曹操は勝ほこりたる勢を引て黄河に陣を取ければ、其地の百姓簞食壺漿して之を迎ふ。曹操自ら出て百姓を勞ひければ、多の老人髪鬚こと〴〵く白きが地に拜して來り見ゆ。曹操帳中に招て坐を賜ひ、老人みな年は何ほどぞと問ければ、百歳に近く候と答ふ。曹操が曰、わが手下の軍兵汝等が鄕を亂す、然るに何事をか喜べる。老人答て曰、昔桓帝の御時に、黄星天に見れて楚宋の分に當る、遼東の殷馗と云人よく天文を曉り、夜是ところに宿して某等に語り、黄星いま乾の象に見れて此ところを照す、後五十年を經て一人梁沛の間より起り、其鋒天下に敵する者なかるべしと云へり、

ぞ惜こと有んやとて、自ら首を刎て亡たり。是を聞もの涙を流さずと云ことなし。袁紹は冀州へ回てより心の内悶え苦んで、何とやらん煩亂して快からざりしかば、國の政を理ることも叶ず。女房劉氏この體を見て、累に世嗣を定て政をも掌しめんと勸む。袁紹元より男子三人あり、嫡子袁譚字は顯思、この時出て青州を守る。次男袁熙字は顯奕、出て幽州の境を守る。三男袁尚字は顯甫、これ後の女房劉氏が腹の子なり。又甥の高幹と云ものは、この時并州の境を守る。三男袁尚は當腹の子にして生れ付人に勝れたれば、袁紹甚だ之を愛して常に我傍を離さず。劉氏又言を巧にして袁尚が才德を稱讃し、兄二人を讒言しければ、袁紹いよ〳〵袁尚を寵愛す。此時袁譚、袁熙、高幹みな己が國々を守て、袁尚一人父の傍を離ずして居ければ、女房劉氏しきりに勸て袁尚を世嗣に定玉へと云。元より審配、逢紀二人を袁尚が佐とし、辛評、郭圖二人を袁譚が佐と成んと定めければ、四人の大將互に其主を贔負して常に爭心あり。この日袁紹四人の大將を集め、今われ氣疲て心身すでに弱りたり、世嗣を定て河北の君と爲んと欲す、嫡子袁譚は性剛にして人を殺ことを好み、聰明なりと云ども事を行ふこと躁暴也、次男袁熙は柔弱にして事を成こと能ず、三男袁尚は英雄の心有て、賢を敬ひ士を禮す、我之を立て世嗣とすべし、汝等が心いかにと云ければ、郭圖すゝみ出て曰、向に沮授が君を諫し言なほ某が

逢紀が曰、田豐獄中に在て御方の破たる由を聞手を打て笑ひ、さればこそ我云ところに違はずとて喜び候。袁紹大に怒り、憎き奴が心かな、我必ず殺べしと云て馬を早めければ、逢紀又讒言し、某承ければ田豐つねに典獄の奉行に對して、君もし再びわれに謀を乞玉ふとも、重て一言も云まじきと申候と云ければ、袁紹心の內いよ〳〵怒る。この時袁紹が大軍破られたる由すでに冀州へ聞えしかば、典獄の奉行ひそかに田豐に見て、君の爲に萬全の喜を述ると云。田豐が曰、いかなる喜ぞ。奉行申けるは、袁將軍いま敗軍し玉ふ、此處へ回玉はば必ず君の諫玉ひしことを思ていまより重く用玉はん。田豐あざ笑て曰、われ必ず今日殺されん。奉行驚て曰、人みな君の爲に喜を爲、なにゆゑに浩ることを云玉ふぞ。田豐が曰、袁將軍外寛やかにして內に忌、忠臣の直言を念玉はず、若この度の軍に勝玉ふ時は、其喜に却て我を赦玉ふことも有ん、今戰やぶれて心の內に羞玉ふ、我生ること能はずと云ければ、奉行いまだ信とせず。

暫ありて使者劍を持て馳來り、田豐が首を取と云ければ、奉行始て驚き、酒肴を具て別を成ければ、田豐が曰、われ必ず死せんことを知、願は劍を借ん。奉行も涙を流して劍を與ること能ざりければ、諸人みな哭ずと云もの無。田豐が曰、大丈夫の士天地の間に生れ、其君を知ずして之に事るは智の足ざる也、疑あるを識ずして諫を進るは是不明なり、今日われ死を受、何

○曹操倉亭破二袁紹一

曹操數度の戰に討勝て、袁紹散々に落行ければ、さらば勢に乘て攻よとて急に軍馬を分撥し、跡を追て推よする。冀州の人民袁紹が敗たるを見て膽を冷氣を落し、曹操が前に跪て降參を請者日夜に勝て數がたし。袁紹はわづかに八百餘騎を從へて黎陽まで落ければ、大將蔣義渠城を出て迎入つ。袁紹城中に入て息を繼、敗軍のことを語ければ、蔣義渠乃ち落ゆく勢を招き集む。諸軍勢も袁紹が恙なくして黎陽まで引たる由を聞て又蟻の如に集り、勢ひ大に成ければ、さらに冀州に囘て再び氣を養ひ重て大義を計んとて、已に黎陽を打起、その夜山の麓に宿しければ、遠近哭き悲む聲やむ時なし。袁紹ひそかに之を伺に、諸の軍勢親を討れ子を失ひ、兄を尋ね友を呼で、互に悵悼もの幾千萬と云ことを知ず、皆胸を搥て哭きかなしみ、これ皆田豐が諫を用玉はざるゆゑ、我等斯る苦を受ると云て已ざりければ、袁紹心に後悔し、我田豐が諫を用ずして此軍を興し、此の如に打まけたり、今日國に囘て何の面目にか田豐に逢んやと云て、夜明ければ馬を早めて行ところに、大將逢紀兵を引具し、後馳にて追付たり。袁紹乃ち敗軍のことを語て、我田豐が諫を聽ず造る負を仕出したり、今日國に囘て彼に逢ん事を羞る也と云ければ、

たる圖書の中より往來の書簡一束を檢出して、一々これを開き見るに、都に殘る朝廷の官人或は我陣中の大將ひそかに袁紹に內通する書簡多し。荀攸が曰、逐一この書簡を以て證據とし、野心の者を捉て盡く殺し玉へ。曹操が曰、袁紹が勢盛なる時には、我さへ如何せんと思へり、況や他人をや、只ことごとく書簡を焚盡せとて遂に再び問ざりければ、諸人その德を感じける。沮授は獄中に在て逃ること能はず、了に生捉れて曹操が前に出ければ、曹操むかし一面の交あり、座を起て迎けるに、沮授聲を揚、われ汝に降ず、是非なくして生取れたるなりと呼はりければ、曹操が曰、袁紹愚にして御邊の計を用ず、今天下いまだ定ず、我御邊と共に事を圖ん。沮授が曰、わが一類みな袁氏の恩を蒙りながら、此時に臨で安ぞ降參せん、若足下憐の心あらば、片時も早く某が首を斬玉へ。曹操が曰、われ若早く御邊を用ば、天下は慮るに足ずとて、厚く陣中にて持成ければ、次の日馬を盗で逃んとす。曹操これを怒り、後の患を爲んことを恐て引出して斬せけるに、其顏色少も變ぜず。曹操大に嘆き、われ忠義の人を殺せりとて終日涙を流し、慇懃に自ら祭をなして黃河の渡に墳を築き、忠烈沮君之墓と碑を書て建ければ、諸人みな涙を流す。

攻、一手は黎陽を經て袁紹が皈る路を塞ぎ、三方より攻ると沙汰せば、袁紹必ず心驚き兵を分て路々を守るべし、その時御方の勢を只一手に合せ、勢に乘て攻入ば、袁紹が本陣小勢にて忽に破るべし。曹操然るべしと喜び、陣々に觸を廻し、兵を分て一手は鄴郡を攻、一手は黎陽に向ふべしと所々に其沙汰を云せければ、案の如く袁紹この由を傳聞て心の內大に驚き、急ぎ三男袁尙に五萬餘騎を付て鄴郡を守せ　大將辛明に五萬餘騎を付て黎陽を救しむ。曹操竊かに人を出して袁紹が勢の遠く行たるを窺ひ、御方の勢を八路に分、少もためらはず大山の崩るゝが如く喚て袁紹が陣に推よせければ、北國の勢さわぎ亂て戰んとする心なく、前後に度を失て散散に成ければ、袁紹甲を披までも無、單衣幅巾にて馬に飛のりければ、嫡子袁譚たゞ一人從ひ來る。早張遼、許褚、徐晃、于禁等千餘騎にて追かけ、我生取んと進ければ、袁紹あわたゞしく黃河を渡て落てゆく。曹操が大軍勝に乘て四方より入亂れ、生どり分どり其數を知ず。袁紹は重代の圖書を棄、金銀絹帛足の踏どころも無地に落して、わづかに八百餘騎に成て飛が如に逃のびければ、曹操追付こと能はず、路に棄たる物を拾ひ集め、僞て降る者を斬ころして首を取こと八萬餘級、血は流て溝に盈、黃河に溺て亡たる屍は蘆葦の繁に異ならず。始め袁紹が七十五萬と聞えし勢、みな此時に滅たり。曹操大に打勝、金銀絹帛を與て諸軍を勞ひ、路に拾う

けんや、不レ如曹操に降參して身を全うすべし。張郃が曰、われも亦この心あり、去來ゆかんとて共に手下の勢を從へ、官渡の陣へ人を遣して二人降參の由を報じければ、夏侯惇申けるは、いま張郃、高覽が御方に降は未だ其虛實を知ず。曹操が曰、われ德を以て化する時は、假令叛心ある者なりとも皆變じて善人と爲ん、早く呼入よとて門を開ければ、張郃、高覽甲を卸戈を弃て地に拜す。曹操直に對面し、若袁紹二人の計を用ば安んぞ戰に負ん、昔伍子胥は早く悟ずして自ら其身を失ひ、微子は殷を去韓信は漢に皈して共に功名を全せり、今御邊二人邪を去て正に皈す、微子、韓信に異ならずとて、張郃を偏將軍都亭侯に封じ、高覽を偏將軍東萊侯に封ず。張郃字は儁乂河間鄭人なり。曹操つねに其武藝を稱しけるが、今御方に成ければ喜こと淺からず。此時袁紹が陣には張郃、高覽敵となり、殊に烏巢の兵粮こと／＼く燒れぬと聞て諸軍みな氣を失ひ、落支度の外は無りけり。曹操は次第に勢を得て重く許攸を持成ければ、許攸又早く攻かゝり玉へと勸む。張郃、高覽これを聞て先手を仕んと望ければ、曹操しかるべしとて兵を三手に分、昏方より袁紹が陣に推よせ、終夜攻戰て敵を討こと數を知ず、曉に及で軍を收ければ、袁紹が勢大半討れ、曹操に降る者幾千萬と云ことを知ず。荀攸すゝみ出曹操に計を獻じて曰、いま作て御方の勢の手分をし、路を分て黃河の邊に出、一手は酸棗を過て鄴都を

るが少もためらはず喚て吼と蒐たりけるに、袁紹が救の勢もこらへ兼て散々に成。袁紹敗軍を收て本陣に皈ければ、淳于瓊等耳鼻もなく手足をも落されて、馬に縛られながらをめく〳〵と出きたる。袁紹敗軍に向て、何ゆゑに烏巣をば斯速に燒れたるぞと問ければ、皆答て、淳于將軍酒に醉玉ひしゆゑ戰ふこと能はずと申す。袁紹大に怒て立どころに淳于瓊を切ころしければ、郭圖心の内に、張郃、高覽、曹操が本陣を攻て思の外に打まけたり、若この所へ回りなば我爭て勸たるを罪せんと思ひ、先袁紹に讒言して、張郃、高覽二人御方の破たるを見て心中みな喜び候と云ければ、袁紹驚て曰、これ如何なる故ぞ。郭圖が曰、張郃、高覽、素より曹操に降の心あり、此故に今官渡に向ふと云ども、君の命を用ずして散々に軍兵を損へり。袁紹いよ〳〵怒り、奴原を縛て罪を正さんとて、使を馳て急に二人を呼回す。郭圖これを見て先ひそかに張郃高覽が方へ人を遣し、袁紹いま御邊達の敗軍せるを怒二人を捕て殺さんとす、用心せよと告知せたる所に、忽ち袁紹が使きたり、一大事あり早く本陣に回候へと云ければ、二高覽問て曰、いかなる大事ありて呼玉へる。使答て曰、その故を知ず、早々に回り玉へ。高覽大に怒り劍を拔て使の首を討落ければ、張郃驚て曰、なにゆゑに君の使を斬たる。高覽が曰、袁紹人の上に居して其心寛からず、妄に讒言を聞て人を害す、必ず曹操が爲に滅されん、我等豈坐ら死を待べ

る御方の大將こと〴〵く擒と成ん、烏巣もし破るゝ時は、御方の勢なにを以て一日も命を繼ん。郭圖が曰、曹操は只兵粮を襲んとばかりを心に思ふ、何ぞ跡の用心あらんやとて、二人爭て休ざりければ、袁紹乃ち張郃、高覽に五千餘騎を付て官渡の陣を攻させ、蔣奇に一萬餘騎を付て烏巣の急を救しむ。この時曹操は烏巣の兵粮を燒盡し、敵の旗幟を奪取て淳于瓊が敗軍に出立せ、山際の路を通りければ、蔣奇一萬餘騎にて救の爲に馳きたる。曹操が兵百騎二百騎、こゝ彼より旗を捲て蔣奇が勢の中へ推わけて入ければ、此は何の御方ぞと尋ぬ。曹操が兵これは烏巣の敗軍にて候と答て、大將蔣奇が廻ちかく集り、俄に喊を造て張遼、許褚刀を舞し、蔣奇走ること勿とて、張遼飛かゝつて蔣奇を馬より切て落し、兩軍入亂て攻戰ふ。北國の勢大將を討れてなじかは怺べき、我先にと落行て、討るゝ者其數を知ず。曹操大に喜び、又僞て袁紹が陣へ人を遣し、蔣奇烏巣の戰に打勝て敵を追ちらして候、御心を安んじ玉へと云せければ、袁紹これを誠の蔣奇が使なりと思て重て救をも遣さず。張郃、高覽は五千餘騎を引て官渡の陣に推よせけるが、左より夏侯惇打て出、右より曹仁打て出、寄手の勢を兩旁よりおつ取籠、曹洪又中央より起て三方より攻ければ、張遼、高覽大に破れて殘少に討れ、散々に逃走て中途にて袁紹が救の勢に出合、再び馬の足を立直さんとすれば、曹操が勝傲たる五千の精兵烏巣より皈け

けり。眭元進、趙叡は、新に兵粮を運で漸〳〵陣中へ回けるが、四方より火の掛るを見て急に救はんとて馳きたる。曹操が勢これを見て、敵後より馳來る、二手に分て拒んと云ければ、曹操申けるは、いや〳〵敵もし後へ近付ば其時に防べし、只一手に成て前に向へと下知して喚き叫で攻ければ、北國の勢こと〴〵く討れ、死人地上に遍く、火焰四方に起て烟塵空に亂れたり。曹操後を屹と見て、すは回せと云て一同に取て回し散々に攻たりければ、眭元進、趙叡忽ちに討れて、殘る勢は這々に逃わしる。曹操十分に打勝て、淳于瓊その外の生取を盡く耳鼻を割、手の指を落して馬の上に縛り付、追立て回しける。時に袁紹は、早馬の來て敵烏巢を攻ると匈に驚き、北の方を望ば火の光天に滿て喊の聲地を動す。扨は烏巢に軍あり、救の勢を向んと云ければ、大將張郃すゝみ出て曰、某ねがはくは高覽と二手に分て烏巢の急を救べし。郭圖が曰、いや〳〵張郃が言わが意に合はず、今曹操ふかく烏巢に忍入て、御方の兵粮を襲ことなれば、必ず自ら來るべし、若曹操出る時は、彼が官渡の本陣必ず空虛なるべし、今却て早く彼が本陣を攻ば、虛に乘て忽ちに破らん、然る時は烏巢の敵戰はずして退ん、是古の孫臏が魏を圍て韓を救の計なり。張郃が曰、しからず、曹操が兵を用る、詭の計多して、外に出れば內に備ふ、一つとして用心せずと云ことなし、今もし彼が本陣へ攻蒐て勝こと能ざる時は、烏巢を守

問ければ、沮授が曰、今夜天文を見候に、太白星逆に柳鬼の間を行て、光流て斗牛の分野を射る、必ず敵の兵わが陣の後を襲なるべし、然る時は烏巣に多の兵粮あり、敵定めて此を劫べし、用心なくては叶まじ、速に精兵猛將を遣し、山際の道筋に番を付て曹操が計に逢ことを免玉へ。袁紹大に怒り、汝は已に罪を得たる者なり、何ゆゑに舌を動して妄に諸人の心を惑しむると云て、典獄の奉行を呼よせ、憎き己は沮授に首枷を入て能々禁獄せよと云しに、何ゆゑに輕々しく此ところへは出し來れるぞとて、一刀にその奉行を斬死し、別人を呼で又沮授を獄に下させければ、沮授外に出て長く嘆き、御方の軍勢亡ること旦夕にあり、我死骸いづくの土に汚れんも知がたしと云て涙を流して出にけり。去程に曹操は五千の精兵を從へ、手ごとに柴を持背に薪を負て、二更の比ある役所の前を通りければ、番の兵これは何の者ぞと問。曹操答て、此は大將蔣奇、仰を承て烏巣の兵粮を守ん爲に通るなりと云ければ、袁紹が兵これを見に、みな御方の旗幟なりければ、御尤に候とて通しけり。斯て山路を過て問もの有ば皆初の如に答しかば、袁紹が兵我よ他よと相推て阻る者も無りけり。已に四更の終に到て烏巣の陣屋に著ければ、曹操兵を下知して四方へ散て火を掛させ、一度に鼓を打て喊を作り我先にと斬て入。この時淳于瓊等宿酒いまだ醒ず、喊の聲に驚て何ゆゑに噪しきと云て出ければ、忽ち熊手に掛て生取れ

守らぬことは候はじ、若かる〳〵しく馳向玉はゞ、必ず許攸が計に落入玉はん。曹操が曰、しからず、許攸が御方に來るは是天より袁紹を滅玉ふ也、今わが陣中に兵粮盡て久しく留ること能ず、若許攸が計を用ずんば、是坐ら困を待なり、萬一許攸詐ところ有ば、安んぞ我陣中に留らんや、此日ごろ我も敵の兵糧を燒んと思ふ心あり、御邊必ず疑ふこと勿れ。張遼が曰、しかれども敵軍虛に乘て本陣を攻ることも有ん、若打出玉はゞ跡の用心をし玉ふべし。曹操笑て曰、われ已に籌を定おきたりとて、荀彧、賈詡を留て許攸を陣中にて持成しめ、曹洪を大將として本陣を守らせ、夏侯惇、夏侯淵に一手の勢を付て本陣の左に伏、曹仁、李典に一手の勢を付て本陣の右に伏せ、もし敵の攻る事も有べし、怠こと勿とて、自ら五千の精兵を率る、張遼、許褚を先手とし、徐晃、于禁を後備として、人は枚を含み馬は口を勒して、その日の昏方に官渡の本陣を離れ、烏巣を指て忍びゆく、時に建安五年十月二十三日なり。此時沮授は袁紹を諫し故を以て首枷を入られ、軍中に囚れて居けるが、この夜天氣快く晴て、星の光明なりければ、典獄の奉行を呼、今夕は星の耀朗なり、我天文を視るべし、外に出せとて獄中より出、仰で天文を見れば、太白星逆行して斗牛の分野を犯す。沮授大に驚き、急に袁紹に見んことを願ふ、此時袁紹は酒を飲で醉臥たりけるが、沮授が一大事を申と云を聞て呼よせて

申が、今果して此の如し。曹操も笑て曰、古より兵は不厭詐と云へり、何ぞ輕々しく中心を露さんとて、竊に耳を附て、今陣中に只この月ばかりの兵粮ありと私語ければ、許攸が曰、詐を云ことなかれ、汝が兵粮すでに盡果たり。曹操大に愕て曰、なにとて之を知玉へる。許攸懐より曹操が荀彧に送れる書簡を出し、是は誰人の書たる書ぞと云ければ、曹操以の外に仰天して曰、この書簡いづ方よりか得玉へる。許攸使を生取たる由明に告ければ、曹操手を執て曰、ねがはくは昔の好を思て計を教玉へ。許攸が曰、丞相わづかの勢にて大敵を拒玉ふ、若急に勝玉はずんば此滅亡を求る也、某一つの計あり、三日を出ずして袁紹が百萬の勢戰はずして自然に破れん。曹操喜で申けるは、ねがはくは教玉へ。許攸が曰、袁紹が兵粮こと〴〵く故市の烏巣に貯て、本陣を離こと四十里なり、今淳于瓊を大將としてこれを守らしめ、本國より日々に運送せしむ、此淳于瓊は常に酒を好で計なき者なり、丞相屈强の精兵を選で北國の勢に出立せ、番の者尋ね問ば、我等は蔣奇が手の者なり、兵糧を守護すると答て深々と彼地に到り、火を付て燒やぶり玉はば、袁紹が兵粮たちまちに盡て、三日の内に自ら亂べし。曹操大に喜び、許攸を陣中に留め置、次の日一騎當千の兵五千人を擇出して、みな北國の勢に出立せ、袁紹が旗幟を作りければ、張遼諫て曰、袁紹が百萬の勢を養ふ兵粮の陣なれば、よも大勢にて

はくにも及ばず跣にして出むかへ、手を撫て笑ひ、許攸遠く來り玉ふ、我大事成就せりと云て、轅門の傍にて快く喜び笑ひ、共に陣中に入て昔の物がたりす。曹操まづ地上に拜しければ、許攸たすけ起して曰、足下は乃ち漢の丞相、われは布衣の匹夫なり、何ゆゑに斯尊敬し玉へる。曹操笑て曰、御邊は是われと舊き朋友なり、何ぞ官爵を以て高下せん。許攸が曰、某眼ありながら盲人に異ならず、身を屈て袁紹に從ひ、計を勸れども用られず、忠言を申せば耳に逆ふ、今のがれて此に來り、幸に故人に逢、ねがはくは丞相われを疑玉ふこと勿れ。曹操が曰、われ元より御邊の忠義を知、なんぞ疑ふことか有ん、願くは袁紹を破の計を教玉へ。許攸が曰、われ袁紹に勸め、騎馬の精兵を分て虛に乘て都を襲ひ、前後より攻んと云しかども、袁紹これを用ず。曹操驚て申けるは、袁紹もし御邊の計を用ば、我等いかゞして生ることを得ん、今袁紹が勢甚だ大にして防がたし、願くは計を教玉へとて再拜す。許攸が曰、いま丞相の軍中兵粮は何ほどか有。曹操が曰、一年の用意あり。許攸が曰、なにとて詐を云玉ふぞ。曹操が曰、半年の用意あるばかり也。許攸急に座を起、われ眞の心を盡せば、汝いつはりを以て我を欺くと云て、色を變じて出ければ、曹操急に引とめて曰、足下嗔を休玉へ、眞實を申すべし、今わが陣に三月が內の兵粮あり。許攸笑て曰、世の人みな曹操は奸雄にしてわる賢き人なりと

露見の間、ことごとく捉て獄に下し、其罪を糺問するに、證據明白なりと記ければ、袁紹大に怒り、汝かゝる私を身に行ひ、何の面目あつて我に計を勸る、汝もと曹操と好あり、必ず彼が賂を受て我を欺て都を攻させ、内通して討んと量るならん、我いま汝を殺んずれども、暫く首を預おくとて散々に罵ければ、許攸退て外に出天を仰で長嘆し、忠言却て耳に逆ひ、豎子われを納ず、我一族は已に審配に害せられたり、我なんの面目ありて天下の人に見べきとて、劍を拔て自ら首を刎んとしけるを、諸人急に曳とめ、何とて犬死をし玉ふぞ、袁紹は元世を治るの人に有ず、殊に人の忠言を納ず、後必ず曹操に滅さるべし、君なんぞ曹操に事へ昔の好を全して、暗を棄て明なるに就玉はざると勸ければ、許攸げにもとて、了に五六騎を引て曹操に降參す。此袁紹が運の盡ぬる驗なり。

○曹操烏巢燒二兵粮一

許攸五六騎を引て官渡に到りければ、曹操が伏勢取圍で生取んとす。許攸叱て、汝等無禮することの勿れ、我は曹丞相の舊き友なり、早く本陣に行て南陽の許攸きたれりと申せと云ければ、士卒急にこの由を報ず。此時曹操は衣を解て休居けるが、許攸が來れるを聞て大に喜び、履を

の處なりと油斷して毎日諸將と酒をのみ、荒み怠てぞ居たりける。曹操は官渡の要害を守り、日に從て兵糧乏なりければ、都へ使を上せて荀彧、任峻に催促し、兵糧を運せよとて書簡を遣けるが、其使三十里ばかり出て袁紹が兵に生取れけり。爰に許攸字は子遠とて本南陽の人なりけるが、生れ付傲り放にして酷だ金銀を好み、少かりし時は曹操と友たり、今袁紹に事て謀士となり、彼生取を召よせ、曹操が書簡を搜し出して急ぎ本陣に來りければ、袁紹喜て曰、汝如何なる事かある。許攸が曰、いま曹操盡く兵を引て官渡の陣を堅く守り、御方の大軍を防んとす、某量に都の內必ず守る勢少からん、若騎馬の精兵を分て密に都を襲玉はば、許昌を取こと手の內にあり、若漢の天子を奪取て其後曹操を征伐せば、立どころに生取べし、萬一曹操を生取ずとも、前後より攻る時は御方の利十分なり、今曹操が陣兵糧すでに盡たり、早く此時に乘て前後より攻玉へとて、曹操が書簡を見せければ、袁紹が曰、曹操詭の計極めて多し、此書簡は必ず計ならん、此を眞なりとして妄に動ば、必ず曹操に破られん。許攸又曰、今もし都を攻玉はずんば、必ず曹操が爲に擒とならんとて、再三すゝめ諫る所に、忽ち鄴郡より飛脚到來して審配が書簡を出す。袁紹ひらき見れば初に兵糧の事を記し、終には許攸冀州に在し時百姓の賂を取、己が一族に年貢の私をさせて放に金銀を貪取たること、此ごろ分明に

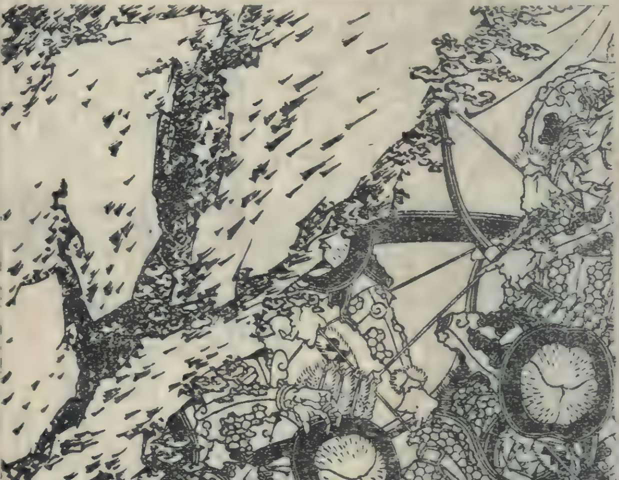
高覽二人の大將に命じ、大路より出て敵の皈るを遮しむ。去ほどに徐晃は多の兵粮を燒盡して已に囘んとする所に、張郃、高覽が勢路を塞ぐ。徐晃馬を打て鋒を交んとすれば、俄に喊の音を揚て張郃、高覽が勢後より破れ、張遼、許褚六千餘騎にて切てかゝり兩方より攻ければ、河北の勢若干亡て散々に敗北す。徐晃勝軍を收て官渡の陣に囘りければ、曹操限なく喜び、諸軍に恩賞を施して一手の勢を陣外に出し、柵逆茂木を構て掎角の勢を成しむ。袁紹は多の兵粮を燒れて心怒り、韓猛を切て弃んと云けるを、諸將やう〳〵に命を乞、官を剝で士卒となす。審配が曰、兵粮は乃ち軍中の重んずる所なれば、心を用ずんば叶まじ、烏巢は御方の兵粮を貯たる所なり、必ず大勢を以て守り玉へ。袁紹が曰、われ策すでに定れり、汝は鄴都に囘て兵粮を點撿し、滯なく運出せ。審配が曰、軍の計略至て重し、某こゝを去べからず。袁紹が曰、われ軍をすること二十年、知ずと云所なし、汝は蕭何が重任に當て輕々しきことに有らず、速に行て兵粮を運ばせ、我心を平にせよ。審配別て鄴都に囘りければ、袁紹乃ち淳于瓊を大將として、眭元進、韓莒子、呂威璜、趙叡等を指そへ、二萬餘騎にて烏巢の兵粮を守しむ。此淳于瓊は字は仲簡、つねに酒を好で性さわがしかりければ、手下の勢怕て心安からず。烏巢の守を承はり、此ところは多く陣々をへだて、殊更要害險阻にして敵の來るべき樣なければ、安閑

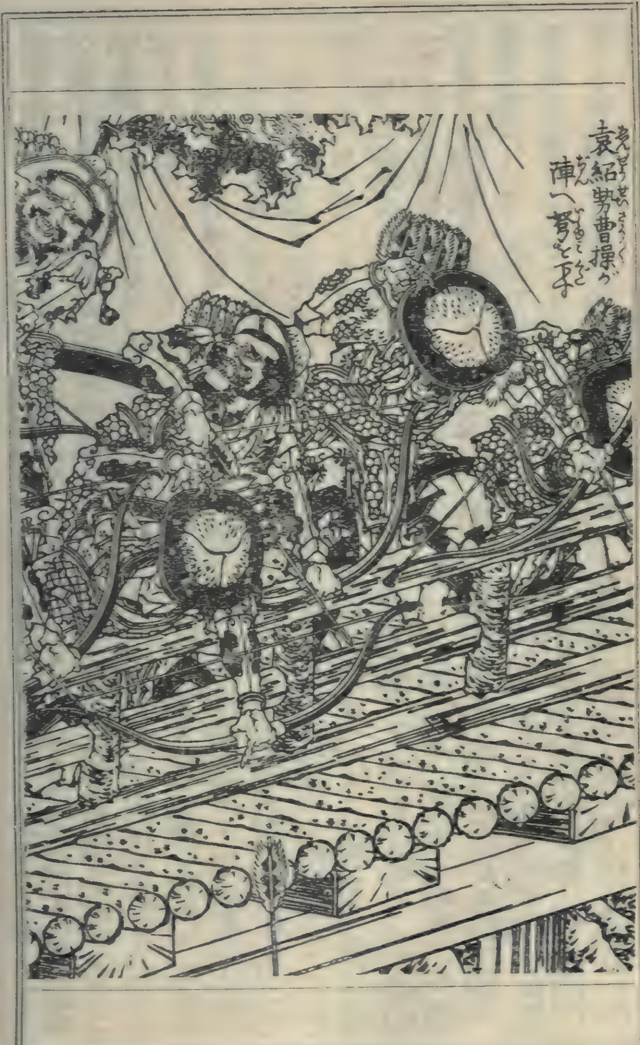
曹操開き見て大に喜び、諸將に相ふれ、彌力を盡して守らせければ、袁紹も攻あぐみけるにや、日を經て二十餘里引退く。曹操ひそかに斥候を出して敵陣の氣色を窺はせけるに、徐晃が組の大將に史渙と云もの、袁紹が兵を生捕來れり。徐晃生取を解ゆるし、引出物とらせて袁紹が陣中の事を問ければ、袁紹ちか比韓猛と云ものを大將として、多の兵粮を陣中へ運しむ、某等は路指南に出たる者也と答ける。徐晃その人を引て曹操に見え、右の趣を語りければ、荀攸が曰、韓猛は匹夫の勇を負で甚だ敵を輕んずる大將なり、御方もし一人の大將を擇び、騎馬の精兵數千を遣して半途にて擊しめば、必ず敵の兵粮を奪て袁紹が勢自ら亂れん。曹操が曰、たれをか擇で大將とせん。荀攸が曰、只徐晃に有ずんば叶まじ。曹操乃ち徐晃を大將とし、史渙と共に數千の精兵を率ゐ、硫黃焰硝を用意して先手に進ませ、張遼許褚に六千餘騎を付、二手に分て後陣に打しむ。その夜袁紹が大將韓猛、士卒を下知して數千輛の兵粮を運けるが、思も寄ぬ峪の内より、徐晃、史渙三千餘騎にて切て出たり。韓猛大に怒り、飛馬して徐晃と攻戰ところに、史渙兵を下知して敵の人夫を追ちらし、一度に火を付て兵粮を燒ければ、韓猛ふせぐこと能はず馬を打て逃わしる。徐晃兵を引て敵の兵粮を燒盡させければ、袁紹西北の方に火の起を望でこれは如何にと驚ところに、敗軍の士卒にげ回り、敵に兵粮を燒れたりと告ければ、急に張郃

この車を霹靂車と號して怖怕れ、其後よりは一人も山へ登らず。審配又一の計を巧み出し、屈強の精兵を擇で掘子軍と號し、鍬を用て密に地の底を掘、路を潛て曹操が陣に攻入しむ。曹操この體を見て劉曄に問ければ、劉曄が曰、これ袁紹が勢明に攻ること能はず、密に地の底より入んとす、御方これを防に陣屋の廻に長塹を掘切玉はば、敵の計必ず破れん。曹操大に喜び、夜を日に繼で壕を掘せしかば、袁紹が勢果して入こと能はず、徒に力を費しけり。箇樣に捗々しき勝負もなく、曹操官渡を守て八月より九月の末に至りければ、人馬共に疲て兵粮に乏し。斯ては叶まじ、暫く官渡を棄て都に回んとて、心の內一決せざりしかば、自ら書簡を調へ、使を都へ上せて荀彧に計を求む。荀彧が答る書に曰、

奉承尊命、使決進退之疑。愚意論袁紹、悉將其衆聚于官渡、欲與明公決勝負。公以至弱當至強、若不能制、必爲所乘、是天下之大機也。但紹乃布衣之雄耳、能聚人而不能用。伏以公之神武明哲、而輔以大順、何向而不濟。今軍實雖少、未若楚漢在滎陽成皐間也。是皆劉項莫肯先退、先退者則勢屈也。公以十分居一之衆、畫地而守之扼其喉、而不得進已半年矣。情見勢竭、必將有變。此用武之時、不可失也。區々拙見盡竭忠誠。惟明公裁察焉。

を移して攻ちか付。時に審配すゝみ出、いま曹操打負て官渡の要害を守る、御方十萬の勢を以て、彼が陣の前に土を重て山を築せ、射手を其頂に上せ、敵の陣中を目の下に見おろして雨の降ごとく射させなば、曹操必ず打弃て走べし、若この處を攻やぶる時は、都を取こと掌にありと云しかば、袁紹これに從ひ、力の強者を擇で、鍬鍬を持土を擔て齊く曹操が陣に推よせ、土を壘して不日に山を築出せり。元來この官渡と申は、廻り三十餘里に逆茂木を引、傍に大河流て後に大山聳たれば、袁紹いかに攻るとも近付得じとぞ見えたりける。曹操敵の山を築を見て如何せんと云ければ、張遼、許褚を初めとして討て出て蹈破んとのゝしり、一度に咄と突出しかども、審配が弩に殺所を遮られて一人も進得ず。十日ばかり過て築山すでに成就しければ、其頂に五十餘座の高櫓を構て、數千張の弩を雨の降ごとく射下けるに、曹操が軍中大に怕て楯を蒙て頭を藏し、地を掘て身を逃る。袁紹が大勢これを見て、一度に弩をつるべ放ち、あれ見よと笑ひ訇る。曹操すべき樣なく、諸將を召で問ければ、劉曄が曰、これを防には發石車を造て打破るべし。曹操しかるべしとて、夜を日に繼で數百乘を造せ、四方に具て敵の築山に向ひ合せ、袁紹が勢の山へ上る時、一度に發石車を拽動しければ、車の上より鐵炮迸り出、大石虛空に踊り揚て、山の上なる高矢倉ことぐく微塵に成、死する者その數を知ず。袁紹が勢




袁紹勢曹操が陣へ弩を下す

韓猛、淳于瓊なんど云大將を兩旁に立連ね、曹操に遇て一言を申んと呼はりければ、南方の軍中に門旗を開て曹操馬を陣前に踊せ、許褚、張遼、徐晃、李典、于禁、樂進等を左右に列ね、鞭を揚て袁紹を指、われ天子に奏して汝を大將軍に封じ、北國の勢を司しむる所に、却て謀反するは何事ぞと呼はりければ、袁紹怒て申けるは、汝いつはりて漢の宰相と云とも、實は漢の逆賊なり、その罪天に彌て王莽、董卓よりも甚し、何とて我を謀反と云へる。曹操が曰、われ今勅命を受て汝を討。袁紹が曰、われ天子の詔を受て汝が如き逆臣を誅戮す。曹操大に怒り、張遼出よと云ければ、張遼馬を飛して斬て蒐る。袁紹が側より張郃つと踊り出、二人火を散して五十餘合戰へども勝負の色なし。曹操驚て彼はいかにと云ければ、許褚こらへ兼て大薙刀を舞し、驀地暗に斬て蒐る。袁紹が陣より高覽槍を提て蒐出、時うつるまで戰ひ、互に雌雄を分ざる所に、曹操が陣より夏侯惇、曹洪二千餘騎、二手に颯と分れて兩旁より攻かゝる。袁紹が陣には審配兼て將臺の高き所に登て軍の樣を窺けるが、曹操が勢の攻きたるを見て相圖の鐵炮を嚮しければ、兩方の伏勢一度に起りて、雨のふる如く弩をつるべ放し、中軍の五千餘騎馬を乘出し〳〵、さしつめ引つめ散々に射る。曹操が勢面を向べき樣なく、一度に颰と迯ければ、袁紹大軍を引て追かけ、敵を討こと數を知ず。曹操退て官渡に陣を取ければ、袁紹も陣

すでに武陽に行て陣を取ければ、沮授來り諫て曰、御方の勢多と云ども、敵の勢の勇猛に及ず、敵の勢勇猛なりと云ども、兵粮の澤山なること御方に及ばず、敵は兵粮の便乏きゆゑ、急に戰を決せんと願ふ、御方よく要害を守り、緩々と計を成て月日を送る程ならば、敵必ず兵粮に事を欠で戰はずして敗るべし。袁紹怒て申けるは、田豐不吉の言を出して諸人の心を迷はし已に囚れて獄中にあり、國に回て後斬んと欲す、汝も亦かくの如し、罪ゆるし難とて、首枷を入て陣中に囚おき、我曹操を破て後田豐と一同に罪を正さんとて、後れ馳の兵を待そろへ、都合その勢七十五萬、四方九十里が間に陣屋を造る。この由官渡に聞えければ、曹操が勢色を失て大に怕る。曹操諸將を集て計を問ければ、荀攸が曰、袁紹が勢多しと云ども怕るゝに足ず、御方小勢なれども皆勇猛にして、一人以て十人に當べし、只速に戰を決し玉へ、若日數を送ば兵粮に乏からん。曹操が曰、これ正に我心に合へりとて卽時に下知を傳て、諸軍旗を進め喚てかゝる。袁紹が方にも勢を分て出迎へ、陣勢を開き布て、殺氣天に沖り馬烟日を蔽ふ。袁紹が大將審配は一萬人の精兵を擇んで二手に分、弩を張て兩方に伏せ、騎馬の精兵强弓の手垂五千餘騎を門旗の內に伏おき、鐵炮を鳴を相圖に盡く射かけよと下知をなす。斯て北國の軍中に三通の鼓を撃ければ、袁紹金の盔を戴き、錦の袍に玉帶を繫、一陣に馬を乘出し、張郃、高覽、

は元嘆なり。孫權用て郡丞とし、太守の事を行はしむ。是よりして威勢遠近に振ひ、江東の軍民こと〴〵く其德に懷けり。

○曹操官渡戰ニ袁紹一

去ほどに陳震𡚁より回て袁紹に見え、孫策已に死して弟の孫權その基業を受、曹操討虜將軍の官を贈て共に好を結と語ければ、袁紹大に怒り、遂に冀州靑州幽州幷州の兵を起し、まづ曹操を滅さんとて五十萬騎の勢をそろへ、都を指て攻のぼる。官渡には曹操が大將夏侯惇、兼てより陣を取て居たりければ、早馬を打てこの由を注進す。曹操あわて驚き急に兵を集けるに、折節在京の勢少かりしかば、七萬餘騎を率して官渡に出、荀彧を留て都を守しむ。袁紹已に大軍を引て出ければ、田豐又大に諫め、只宜しく境を守て時の至らんを待玉へ、妄に兵を起し玉はば却て禍あらんと云ければ、日ごろ恨を含める逢紀、これこそ究竟のことよと思ひ、袁紹に見て讒言し、君いま仁義の師を起して逆臣を伐玉ふ、然るに田豐不吉なる言を出して諸人の心を迷しむと云ければ、袁紹怒て田豐を斬んとす。諸將哀で命を乞ければ、遂に首枷を入て獄に下し、我曹操を平げて後その罪を正んとて、大軍を率て打起、旌旗天を掩ひ刀槍林の如し。

阻を以て能要害を守る時は、後に皇帝の位に卽て天下をも圖つべし、是漢の高祖の業なり。孫權が曰、われ力を一方に盡して漢室を輔んと欲す、御邊の教われ何ぞ及ぶべき。魯肅が曰、古人の言にも、人皆可以爲堯舜と云へり、但恐らくは將軍自ら爲玉はじ。孫權大に喜び、席を起て謝して曰、ふかく御邊の訓を受、ねがはくは共に事を計て同く富貴を享んとて、魯肅が老母に衣服帷帳を賜ければ、魯肅その志を感じて又一人を薦出す。其人は世の亂を避て江東に遁れ、詩書を明らめ春秋に通じ、母に事て孝を盡す、乃ち瑯琊南陽の人に、諸葛瑾字は子瑜と云もの也。孫權重く敬ひ上賓となして貴ければ、諸葛瑾すゝめて袁紹と交を絶、曹操に且く順ひ、後には又曹操をも滅し玉へと云しゆゑ、孫權これに從ひ、袁紹が使陳震を追かへし、書簡を以て交を絶。曹操は孫策が死したる由を傳へ聞、大軍を起して吳を平んと云ければ、侍御史張紘これを諫め、人の喪に乘て軍を興は古の道に有ず、若勝こと能はざる時は、是讐を結び恨を成こと甚だ深し、不如この時に厚く恩を施玉へと云しゆゑ、曹操げにもとて孫權を討虜將軍領會稽の太守に封じ、張紘を會稽の都尉に封じて、印を與て吳に回しむ。孫權限なく喜び、張紘を重く用ひて乃ち張昭と同じく國政を治させけり。張紘又一人を薦出す。この人は言少して酒を飲ず、嚴厲正大にして、乃ち漢の中郎將蔡伯階が徒弟、吳郡吳人顧雍字

がして來り玉ふと問ければ、周瑜乃ち其意を語る。魯肅が曰、劉子楊われを招き、巣湖に行て鄭寶に從んと欲す。周瑜が曰、昔し馬援が光武帝に答るに、今の世は但君たる人臣を擇のみに有ず、臣も亦君を擇と云へり、今某が主人孫權は、親く賢人を貴び才能の士を召、且先哲の祕論を聞に、天運を承て劉氏に代る者必ず東南に興んと云へり、事の勢自然に其曆數に當れり、了に必ず帝業を成て天心に協べし、是才ある人の、樊龍附鳳して忠を盡し身を立る時なり、われ今此に來れり、御邊必ず劉子楊が言を心に介玉ふなと云ければ、魯肅これに從ひ、周瑜と同く來て孫權に見ゆ。孫權重く敬ひ、共に道を論じて終日に倦ことなし。或日魯肅と只二人酒を飲で、同じ床に足を交て臥けるが、夜半に至て問て申けるは、いま漢室危して四方雲の如に亂る、我父兄の業を承て桓文の政を立んと思ふ、御邊なにを以て佐玉はん。魯肅答へて曰、昔し漢の高祖つねに義帝を尊で事んとし玉ひしかども、了に能ざりしものは、項羽が害をなすを以て也、いま曹操は乃ち項羽なり、將軍何に依てか桓文たることを得ん、某が愚意を以て計に、漢の天下再び興るべからず、曹操又急には亡しがたし、只君の爲に計時は、江東の要害に引籠て鼎足の勢をなし、天下の釁を窺ひ玉ふべし、然る時は世の人嫌を成べからず、何んとなれば、北國に事多きゆゑ曹操も暇なし、此間に黃祖を平て荊州の劉表を伐、長江の險

馳回り、呉郡にて已に死しぬと聞ければ、夜中に路を急で柩の前に拜哭す。呉夫人出て孫策が遺言を告ければ、周瑜が曰、某いかでか寄托の重任に當るべき。呉夫人が曰、江東の事萬づ御邊の心に任す、必ず孫策が言を忘るゝこと勿。周瑜地に拜伏し、某ねがはくは犬馬の力を盡し、一命を弃て忠を致んと云ければ、孫權來て拜謝して申けるは、われ兄の言を忘ず、先生ねがはくは我に訓よ。周瑜頓首して曰、ねがはくは肝腦地に塗にいたつて知己の恩に報ずべし。孫權が曰、われ父兄の基を受て江東を保んと欲す、いかなる計を用べき。周瑜が曰、方に今天下亂れて英雄蜂の如に起る、人を得る者は昌に、人を失者は亡ぶ、只高明才德の人を用て將軍の輔と成ば、江東自ら治らん。孫權が曰、兄終に臨で內事は張昭に問、外事は御邊に問と云玉ひしは、浩る故にて候はん。周瑜が曰、張昭は是賢達の士なり、將軍よく師傅の禮を以て貴玉へ、某は駑鈍にして才なし、必ず寄托の重に背ん、ねがはくは一人を薦めて將軍を佐しめん。孫權喜て曰、いかなる人ぞ。周瑜が曰、この人胸に韜略を懷き腹に機謀を隱し、幼して父を失ひ、母に仕て孝を盡す、家富で米三千斛を積、その友劉子楊、巢湖に行て鄭寶が處に寄んと云、この人いまだ行ず、將軍早く招き玉へ、乃ち臨淮東城の人にて魯肅字は子敬と云もの也。孫權大に喜び御邊行て伴きたれと云ければ、周瑜自らその家に到る。魯肅迎て座定り、いか

孫策孫權に遺言して印綬を譲
于吉霊
侍婢
侍婢
孫權

喬氏
孫策
侍婢

と中道に別る、常に汝が妹に云含め、夫の周瑜に盡し心孫權を訓導せ、必ず堂上の老母を拜して兄弟の義に背こと勿らしめよとて、又文武の諸將に向て申けるは、汝等よく我弟に事て共に忠義の名を全うせよとて、又孫權に申けるは、汝もし功ある諸將を用ずんば、吾魂魄九泉の下に于て必ず汝に對面せじ、能愼めと云置て、忽然として息絶たり。時に年二十六歳也。孫權床の前に倒ふし、音を擧て哭ければ、張昭諫て曰、これ君の哭玉ふ時にあらず、今天下いまだ定ざるに只管に哭哀て國家の大事を廢し玉ふべからず、況や奸雄きそひ起て豺狼野心の者道に當折ふし、只親戚の喪を務め禮法に拘て居玉ふ時は、國中必ず變あらん、是門を開て盜の手引するが如し、安ぞ仁と云ん、只君は外に出て諸軍勢を掌玉へとて、扶て馬にかきのせ、叔父の孫靜に喪の事を執行はしむ。孫權字は仲謀、生れ付方頤大口、碧眼紫髯なり。昔し漢の劉琬と云人、吳に使して孫氏の兄弟を見て、われ孫氏の子を見るに、兄弟共に才氣あり、然れども皆その祿を終ること能はじ、只孫仲謀一人は形貌奇偉、骨體つねに有ず、大に貴相あり、殊に壽命長久ならんと云り。この時孫權江東を保と云ども、心いまだ安からざる所に、中護軍周瑜兵を率して回りぬと告ければ、大に喜び、周瑜が回たる上は我なんの患か有んとて、心乃ち平定せり。元より周瑜は巴丘に居たりけるが、孫策が矢に當りぬと聞て速に

絶して死だりける。吳夫人哀み哭て臥房の内に扶入させければ、須臾にして生出、自ら金瘡の破れたるを見て長く嘆き、われ復生ること能はずと云て、卽時に張昭等を召て申けるは、いま中國大に亂れて天下こと〴〵く分れ爭ふ、夫吳越の勢を起し三江の要害を保ては、坐ら成敗を見るに足れり、汝等よく我弟を相けよとて弟の孫權を呼よせ、若江東の兵を率し、雌雄を兩陣の間に決して天下と衡を爭事は、卿必ず我に及じ、賢人を擇び能ある士を用て各その忠を盡させ、江東の境を保ことは我却て卿に及ず、卿よく父兄の國を開し艱難を想ひ、必ず輕々しく事を行こと勿と云て、印綬を解わたしければ、孫權拜して命を受。孫策母に向て申けるは、不孝の子天命已に盡ぬ、慈母に事ること能はず、今印綬を解て弟に讓る、願くは朝暮訓へ導き、父の時より用ひ來れる諸將を愼で輕んぜしめ玉ふべからず。吳夫人大に哭き、恐らくは汝が弟年幼して事を立ること能はじ、如何すべきと云ければ、孫策が曰、孫權年幼と申せども某に十倍せり、江東必ず無事ならん、内事決せずんば張昭に問、外事決せずんば周瑜に問、只恨らくは直に周瑜に此事を云ざることを、我死して後、周瑜巴丘より囘ば遺言を傳玉へ。又諸の弟を呼で申けるは、汝等わが死して後、みな孫權が命に從へ、若一族の内野心を挾もの有ば、諸人共に誅して先祖の墳に葬ること勿。又女房喬氏に申けるは、我不幸にして汝

吉又觀門の前に立つ。たゞ孫策が目に見ゆれども、諸人の目には見ざりしかば、孫策彌怒り、是妖人の所爲なりとて、自ら玉淸觀の前に坐し、五百人の武士を集て、此道觀を打毀と下知しければ、武士共屋に上り瓦を取て投下んとするに、一人ものこらず眞倒に地に落て、手脚を打折半死半生に及べり。只孫策が眼ばかりに、于吉瓦の上に立あらはれて武士共を推落すと見えければ、彌怒つて一度に火を掛させけるに、于吉炎の中に立て瓦を擲打こと雨の如なりしかば、孫策つひに府中に囘り、已に門に入んとすれば于吉又府前に立。これに因て家に囘らず、三萬の精兵を揃て城外に野陣を取、武士に命じて斧鉞を以て帷幕の四面を守せけるに、夜に入て于吉髮をさばきて出來る。孫策曉に至るまで酒に醉たるが如く又は狂人の如く、或は叱り或は叫で終夜睡ること能はず。次の日城中に囘んとすれば門外又于吉を見る。孫策顧ずして府中に囘ければ、吳夫人この由を聞て哀み哭く。この夜も于吉床の前に現ければ、孫策叱り叫ぶこと數十度に及んで睡こと能ず。夜すでに明ければ、吳夫人來て病を問ひ、汝が形全く變じて瘦弱りたりと云ければ、孫策鏡を取よせ照し見て大に驚き、左右の人に向て、我顏色すでに此の如なる上は、今より如何して國家の大事を成べきぞと云も果ざる所に、于吉又鏡の中にあらはれければ、孫策鏡を地に投すて、妖人と一聲さけびけるが、金瘡こと〴〵く破て昏

呉夫人齋し祭を設て禳をなす。孫策この由を聞て母に見え、我幼より父に從て四方の國々を馳廻りしかども、了に父の鬼神を祭玉へるを見ず、今母なにゆゑに鬼神に諂を成て斯祭を仕玉ふぞと云ければ、呉夫人が曰、しからず、凡そ人天地の間に生れて、誰か一度死せざらん、但淸濁の別あつて、其淸を稟たる者は英魂外に散ぜず、天に昇て神となり、其濁れるを稟たる者は幽魂散ぜず、地に入て鬼となる、聖人も鬼神之爲レ德其盛矣乎と宣ひ、又禱ニ爾于上下神祇一と云玉へり、古より鬼神を信ぜずんば有べからず、汝于吉が如き神仙を罪なきに枉て殺せり、豈その報無るべきや、我すでに人を玉淸觀に遣し、醮を設て齋を成しむ、汝自ら行て罪を謝せよ、然る時は自無事ならん。孫策心の內には許容せずと云ども、母の命なれば背こと能ず、遂に轎に乘て玉淸觀に行ければ、道主乃ち出迎ふ。孫策心よろこばず、強て內へ入けるに、道士請じて香を燒しむ。孫策已ことを得ず自ら香を燒しかども、罪を懺悔せざりければ、忽ち香爐の中烟結で、華蓋の如起のぼり、于吉その下に出現す。孫策大に驚き、急に殿中を出て廻廊を步ければ、于吉叉目の前に立。孫策從人の腰刀を拔、于吉に向て擲付たるに、一人刀に中りて倒に仆れ死す。諸人これを見れば、前に命を承て于吉を殺したる兵、刀すでに腦を貫き、七竅より血を流して死だりける。孫策その屍を葬せ、門外に出んとすれば、于

ば、須臾にして甦り、少し人心地付にけり。

○孫權領₂衆據₁江東₁

孫策生出て于吉を殺せることを語ければ、呉夫人哀で曰、汝枉てかゝる神仙の人を殺して此禍を仕出せり。孫策笑て曰、われ十六七より父に跟て戰場に出、人を殺こと麻の如く、賢愚その數いくらと云ことを知ず、然れども了に禍を成者を見ず、今この妖人を殺して國の害を除く、我なんの懼か有ん。呉夫人が曰、汝不信なるに因て此の如し、善事を執行てこの禍を禳べし。孫策が曰、わが命天に在、妖人豈よく禍すること有んや。呉夫人頻に勸れども孫策了に從はざりしかば、左右の者共に命じ、密に善事を修行して孫策が無事を祈せける。その夜の二更の比孫策臥房の内に在けるが、俄に陰雲起て側なる燈滅んとして又明に、何より來るともなく于吉床の前に立現れければ、孫策劍を拔て擲付たるに、物の倒るゝ音しけり。孫策起あがり、我平生怪き妖妄の者を誅して天下を靖めんと欲す、汝すでに陰鬼と成て何とて我に近付ぞと呼はりければ、于吉かき消ごとく失にけり。呉夫人これを聞て彌悶哀ければ、孫策病を扶て強て事を行、老母の心を安んぜんとす。されども日に從て全身黄に成て瘦しかば、

兵共于吉を捕て棚に上せ、四方より火を付たれば、焔風に順ひ黒烟地を掩ふ時に、一道の黒氣空中に飛揚しけるが、忽ち雷電鳴はためき、雨の降こと盆を傾くるが如し。片時の間に街市河を成、溪澗こと〴〵く滿足、午の刻より未の下に至ければ、于吉柴の中に仰のけに臥、大喝一聲雲收り雨歇で、日輪空に耿々たり。諸の大將自ら于吉を扶て棚より下し、繩を解ゆるして再拜し、早く孫策を請じて禮拜せしめんとて使を遣しければ、孫策轎に乘て出來り、諸將の于吉を禮せんとて爭て集り、衣服の濕をも顧ざるを見て心怒り、雨は乃ち天地の定數、汝いかでが私にすることを得ん、是妖人好時節に遇て此雨を得たり、我手下の諸將みな此の如に敬は、是禍の基なりと云て、寶劍を拔持武士に命じて斬しめんとすれば、諸人力めて之を諫む。孫策いよ〳〵怒り、汝等みな于吉に從て謀反せん爲かと云ければ、諸將默然として閉口す。武士劍を持つて于吉が首を斬落しければ、只一道の青氣東北の方へ飛去けり。孫策なほ怒やまず、于吉が屍を市に曝して、妖妄の罪を正けるに、其夜雨風一通して、曉に至て俄に于吉が屍失にけり。其趣を孫策に報じければ、孫策大に怒り、番の者共を殺んとしけるに、忽ち堂の前に陰雲起て、于吉靜々と歩み來る。孫策劍を拔て之を斬んとしけるが、忽ち日昏氣絕て眞倒に倒けり。諸人扶て內に入けれども昏迷して醒ず。老母吳夫人走り來て、これは如何にと哭けれ

津と云もの、漢の交州の太守となり、前聖の典訓を捨、漢家の法度を用ずして常に絳き頭巾を披、瑟を彈香を燒て邪道の書を讀、軍に出て不思議の妙術を成と云しが、忽ち南方の夷に殺されたり、今又于吉これに類す、國の爲に益なし、汝等なにとて心悟ざる、此もの已に幽鬼の目錄に載り、我必ず殺すべし、さのみ紙筆を費して奴が事を云ことなかれ。呂範進出て申けるは、某よく于吉仙人の雨を祈風を禱玉ふを知、幸に今旱して百姓みな雨を求む、試に祈せ、若その驗あらば扶玉へ。孫策打笑ひ、さらば妖の程を見んと云ければ、諸人よろこび于吉を獄中より取出し、首枷を解て雨を祈せけり。于吉乃ち沐浴して衣を更、傍の人に向て申けるは、われ今雨を祈り、平地三尺の水を求て百姓を救んずれども、了には命を失はれん。諸將みな靈驗だに候はば別事あるまじき由を云ければ、于吉が曰、これ我天命の盡る所なり、必ず逃るまじとて、自ら繩を以て五體を縛り、炎天に出て曝ければ、孫策使を以て、若日中までに雨なくんば、市にて焚死べしと云つかはし、先かわける柴を山の如に積搬せければ、忽ち狂風頻に起り、數萬の百姓これを見んとて相集ること雲霞の如し。孫策は城樓に登て望けるが、風すでに吹起て西北の雲早み、須臾の間に陰霧四方に重り掩へり。時に候吏來りて已に午の刻なりと告ければ、孫策申けるは、空に陰雲有りて雨ふらざるは、是妖妄邪道の驗なり、只燒殺せと下知しければ、

んや。孫策が曰、汝一物も人に取こと無んば、飲食衣服何より得る、必ず黄巾の賊張角が輩ならん、今誅せずんば後天下の害を成ん、引出して斬と下知しければ、張昭諫て曰、于吉道人この國に在こと數十年、一も過を見ず、若殺し玉はば民の望を失ん。孫策聽ず、此等の奴原は我乃ち劍を試んと欲す、何ぞ狗を斬に異んと云ければ、諸將諫れども了に聽ず、首枷を入て獄に下しけり。諸將せん方なく退き、回て人々の妻子を宮中へ遣し、孫策が母呉夫人に右と告させければ、呉夫人大に驚き、急に孫策を召て曰、汝于吉仙人を獄に下せりと聞しが、此人は多く諸民の病を救て、國の爲に福神なり、必ず殺こと有べからず。孫策が曰、これは妖人にて詭の術を以て人の心を惑しむる者なり、我袁紹が使を樓上にて持成ところに、奴が來れると云て諸の大將こと〴〵く椽を下て再拜す、賓客に給仕する者共まで一人も殘らず出去れり、此みな張角が類の妖人なり、殺さでは叶まじ。呉夫人再三諫ければ、孫策又曰、ねがはくは女童の云ことを聞入させ玉ふな、某宜く料んとて、急に典獄の奉行を呼、于吉を引出し來れと云ければ、奉行も于吉を敬ふこと父母に事が如く、首枷をも解免して置しかば、孫策怒て典獄の奉行を一人も餘さず首を刎たり。諸の大將張昭等を先として數十人、連署に名をのせて于吉が一命を乞ければ、孫策が曰、汝等は古の書を讀で何とて禮義を知ざるぞ、昔南陽の張

好を結で南北より曹操を攻やぶり、天下を分て保んと云ければ、孫策天の助なりと喜で城樓に酒宴を設け、諸の大將を集て陳震を持成けるに、諸大將俄に立さわいで、紛々として樓を下る。孫策怪で其故を問ば、近侍の者答て曰、いま于吉仙人來り玉へり、此ゆゑに諸將みな拜せんとて立出たり。孫策欄干に凭て之を見れば、一道人身の長八尺、髮鬚こと〴〵く白して面桃花の如く、飛雲の鶴氅を披、藜の杖を攜たるが道の正面に立。これを拜せんとて諸の大將百姓男女香を焚て、來集る者幾許と云ことを知がたし。孫策大に怒り、此妖妄の邪道を以て人を惑す曲者なり、早く生捕來れと下知しければ、諸人諫て曰、この人東國に居住して、時この處へ來る、城外に道院有て、夜は曉に至るまで靜坐して動ず、晝は香を焚て道を講じ、符水を施して人の萬病を救に痊ずと云ことなし、眞に世の神仙、わが國の福神なり、宜く敬玉ふべし。孫策いよ〳〵怒り、汝等わが命を用ずんば必ず法を正さんと云ければ、諸人已事を得ず于吉を引て樓に上る。孫策叱て曰、狂夫なに故に邪道を以て人を惑ぞ。于吉答て曰、某嘗て山中に入て藥を採、神書を曲陽泉水の邊に得たり、皆白き帛に朱を以て書たるが、太平清領道と名づく、凡そ百餘卷、みな人の病を治する妙術にして禁咒科と號す、某これを得てより、惟天に代て德化を施し、普く人間の病苦を救て、一物も人に取ことなし、安ぞ人を惑こと有

内よく〳〵愼で妄に動玉ふこと勿れ、萬一怒の心發て氣を激すれば、此瘡必ず大事ならんとて藥を與ふ。元來孫策は平生性急にして、三日の間も無事に過こと能ず。已に廿日餘を歷て都より人來りければ、いそぎ召寄て虛實を問に、その人答て申けるは、曹操深く將軍を怕れ、獅子の兒共に鋒を爭がたしと申候。孫策笑て曰、曹操が手下の大將も皆われを怕るか。答て曰、惟郭嘉と云もの一人將軍を怕ず。孫策問て曰、郭嘉我を如何云しぞ。其人猶豫して答ざりければ、孫策怒て殺んとす。此に因て告て申けるは、郭嘉嘗て曹操に向て孫策怕るゝに足ず、輕々しくして備を成ず、假令百萬の勢ありとも安んぞ中國に横行せん、尋常性急にして謀少し、是匹夫の勇なり、倘一人力剛き刺客あらば、忽ち強暴の幽鬼と成ん、必ず云甲斐なき小人の手に懸て、命を失んと申し候。孫策大に怒て曰、憎き奴が辭かな、先日の獵に我を射たりしは、必ず奴が計にて曹操が所爲ならん、我誓て都を攻とり、漢の天子を助べし、瘡の痊るを待べからず、早く用意をせよと觸ければ、張昭諫て曰、醫者深く戒て、百日が間は必ず動玉ふなと云へり、何ゆゑに一旦の忿に因て、自ら千金の身を輕んじ玉ふぞ。孫策が曰、匹夫われを侮る、我之を忍がたし、不日に都を取て英雄を顯さん。張昭深く諫め、將軍の瘡平愈して後、兵を起し玉ふこと晩きに有ずと云て議する所に、忽ち袁紹が使陳震と云もの來り、共に

ず。孫策つねに獵を好み、或日兵を引て丹徒の西に出、鹿を追て深山に入、諸將と爭て射取んとて、皆馬を飛して思ひ〳〵に追掛たり。孫策が乘たる馬は五花馬とて世に勝たる駿足なれば、岩に上り惡所を超る事平地を行が如し。されば多の御方に離て、只一騎飛が如に馳ければ、藪の陰に兵三人、弓を帶し槍を持て立居たり。孫策馬を勒て、汝等は何ものぞと問へば、韓當が手下の者なり、此に在りて鹿を射候と答ふ。孫策これに因て疑はず、馬を拍て馳ければ、一人急に追かけ、槍を以て孫策が左の腿を突。孫策怒て劍を拔て斬んとしけるが、取迯して劍を落し、鞘を以て戰ふ所に、又一人近々と走り寄、弓を曳て丁ど射る。其矢孫策が面に中りければ、孫策事ともせず其矢を拔て射返しけるに、一人忽ちに射殺さる。殘り二人は槍を以て散々に突て廻り、我等は許貢が賓客なり、今主の讐を報ずと呼はる。孫策武具を持ねば、せん方なく馬上にて弓を以て打けれども、二人少しも退ず。孫策已に數十箇所瘡を被り、馬も深手を負て事急なる所に、程普五六騎を引て尋きたり、三人の敵を寸々に斬。孫策は全身を槍に突れ、面の瘡深手にて血流れて朱に成しかば、袍を砍割て瘡を包み、吳會に回て病を養ひ、華陀を召で療治させんとて、遍く國中を尋れば、已に都に上てその門弟ばかり吳に留れり。頓て召よせ藥を獻れと云ければ、醫者申けるは、これ鏃に毒を塗たるゆゑ已に骨に徹れり、百日か

心、出作爪牙、表之鴟張以祖氣息。而祖家屬部曲、掃地無餘。表孤特之虜、成鬼行屍。誠皆聖朝神武遠振、臣討有罪、得效微勤。謹表奏聞、伏望天覽。

曹操も孫策が勢盛なるを知て稱嘆し、獅子の兒共に鋒を爭がたしと云ひて、曹仁が女を孫策が弟の孫匡と云者に妻せて一家の好を結び、張紘を都の中に留おきけり。孫策は日ごろ大司馬の官位を望で累に天子に奏聞すれども、曹操之を許ざりしかば、心の內深く恨で、常に都を攻んとするの巧あり。吳郡の太守許貢この由を聞、ひそかに人を上せて帝に表を獻る。其表の略に曰、

孫策驍勇、與項籍相似。宜加貴寵、可以還京邑。若被詔、不得不還、若放于外、必作世患。當速制之。

許貢が使、この表を捧げ都へ上るとて江を渡けるが、番の兵に捕はれて孫策が前に引出さる。孫策表を開見て大に怒り、欺て許貢を招き、汝なにゆゑに我を殺んと巧ぞと責ければ、許貢申けるは、われ曾て其意候はず。孫策表を取出して是は如何にと云ければ、許貢答ふべき辭なし。孫策つひに武士を呼で絞殺させしかば、家に殘る妻子從類ことごとく逃散けり。其內に日比許貢が養置たる賓客あり。三人志を合せ、何とぞ許貢が仇を雪んと狙しかども、了に其使を得

○孫策殺于吉仙人

呉の孫策は江東に威を振て、兵精く糧足り。建安四年の冬廬江を攻取、黄祖を破り劉勳を平げて、豫章の太守華歆も已に降參しければ、勢いよ〳〵盛なり。是に因て張紘を使として都にのぼせ、漢帝に表を獻る。其表に曰、

臣討黄祖、以十二月八日、到祖所屯沙羨縣。劉表將助祖、並來趣臣。臣以十一日平旦、部所領、江夏太守行建威中郎將周瑜、領桂陽太守行征虜中郎將呂範、領零陵太守行蕩寇中郎將程普、行奉業校尉孫權、行先登校尉韓當、行武鋒校尉黄蓋等、同時倶進、身跨馬一陣、手擊急鼓、以齊戰勢。吏士奮激踴躍、百輩心精意果。各竟用命、越渡重塹、迅疾若飛。火放上風、兵激烟下、弓弩並發、流矢雨集。日加辰時、祖乃潰漫。鋒刃所截、欻火所焚、前無生寇、惟祖迸出、獲其妻息男女七人。斬虎郎韓晞已下二萬餘級、其赴水溺死者一萬餘口、獲船大小七千餘艘、財物如山積。雖表未擒、祖宿狡猾爲表腹

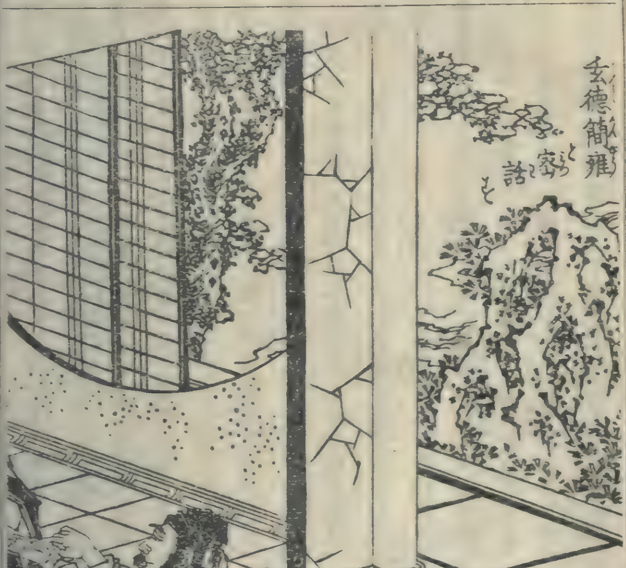
て兵を催し、天地を祭て兄弟再會の喜を述、諸軍に恩賞を施して設け、天地を祭て兄弟再會の喜を述、諸軍に恩賞を施して

す。那後牛馬を宰して聚義の酒宴を設け、天地を祭て兄弟再會の喜を述、諸軍に恩賞を施して往日の大將ことごとく聚りたる上に、趙雲、關平、周倉を添て勇み進ずと云もの無。乃ち軍勢の著到を數ふるに五千餘騎と注たれば、此城は分内狹して叶まじ、汝南の城に楯籠て大儀の計略を運さんと議する所に、折境劉辟、龔都使を馳て招きければ、玄德つひに汝南に到り、四方の勢を催集めて日々に盛なり。袁紹は荊州の消息を聞んとて數日玄德を待けるが、玄德は關羽張飛等と汝南の城に楯こもりたりと告る者ありければ、扨は我を出拔けり、河北の勢を盡く起して攻滅さんと怒けるを、郭圖諫めて申けるは、玄德は癬疥の病なり、捨置とも何ほどの事あらん、曹操は心腹の病なり、征伐もし延引せば後必ず禍を成ん、荊州の劉表は大國を保て兵多と申せども怕るゝに足ず、吳の孫策は威三江に震て地六郡に連る、周瑜、張昭が如き謀略の輩多く、程普、黃蓋なんど云る武雄の將あり、兵糧六七年を貯へ、精兵數十萬を聚む、使を遣して共に好を結び、南北より曹操を攻ば破らずと云ことは候まじ、曹操もし破れば天下なんの患か有んと云ければ、袁紹實にもと同じて汝南に向ふ事を閣き、陳震と云者に書簡を持せて吳の國へぞ遣しける

將玄德を見て馬より飛で下、路の傍に拜伏す。諸人よく〳〵見れば往日公孫瓚が大將たりし眞定常山の趙雲字は子龍なり。玄德近く寄て、一別の後曾て消息を聞ず、今何として此處に在ぞと問玉へば、趙雲申けるは、某公孫瓚に事て北平に在しに、公孫瓚無ㇾ計人の諫を用ひず、袁紹に攻られて家に火を付て滅たり、袁紹その後しきりに某を召て用ひんと云ども、某よく彼が成ㇾ事の主に非を知たれば、了に北國の方へ出て偏に皇叔の行衞を尋しに、袁紹が處に御座ある由を聞て軈て馳參んと思へども、袁紹が怪めんことを憚て默止たり、外に君とすべき人なく、四海の間に飄零して一身を置ところなし、此間裴元紹と云る山賊、某が馬を剝取んとて來りしを一槍に刺殺たれば、手勢みな降人となる、是に依て山中にて數日を送る、昨日張飛古城に在と告る者候ひし故、既に打立て行んと思ふ所に、料ざるに如ㇾ此、これ昨夜の夢に應ぜり、天の賜なりと云ければ、玄德限なく喜び、我御邊を一度見て乃ち捨ざるの心あり、今幸に相逢と申されければ、趙雲が曰、某四方の國々を經て主と爲べき人を求る事多年、つひに君に過たる眞の主なし、今想ざるに參逢て、平常の願足り、身を君の爲に捨て肝腦地に塗とも恨る事候はじと云ければ、玄德その勢を幷せて直ちに古城へ來り玉ふ。張飛諸大將を引て出迎へ、城中に入て共に失散の事を語り、二夫人詳に關羽が忠義を語られければ、聽人感嘆して皆淚を流

徳に見ゆ。關羽申けるは、此人は某と同く關氏にて候へば、次男關平を某が養子に仕んと存ずる也。玄徳の曰、行年幾何ぞ。關定が曰、關平は十八歳にて候。玄徳の曰、御邊は二人の子ありて關羽は倘子を持ず、養て子とせば如何ん。關定が曰、ねがはくは尊命に從はん。玄徳限なく喜び、關平を召て關羽を拜して父とせしめ、袁紹か討手を向ぬ先に早く打立とて、家を出て馬を早め玉へば、關定遠く送りて相別る。玄徳本道を經て漸く臥牛山も程近く成たる所に、周倉數十騎を率して馳來れり。關羽これを見るに盡く手負て朱に成たる者ありければ、如何なる故ぞと問に、周倉答て申けるは、某さきに臥牛山へ行しに、何くとも知ず一人の大將馬を進めて通りしが、裴元紹と鋒を交へて只一合に刺殺し、相從ふ勢を悉く降らしめ、却て己が者として山中に陣をとる、某預け置たる士卒を招けども、皆彼大將を怕れて來る者なし、某怺ず押寄て戰ふに、彼大將よく槍を使て某三箇所まで深手を被り、這々に逃れて此まで來れり。玄徳の曰、その者名字を云ざりしか。周倉が曰、つひに名乘ねば名字をば知ず候へども、武藝まことに尋常に越て候。關羽きゝもあへず、いで其人に對面せんとて、青龍刀を提て眞先に進めば、玄徳も跡に續て臥牛山へ上玉ふ。周倉山の麓に到り大音あげて叫ければ、彼大將兵を率して打て出たり。玄徳これを見て鞭を加て急に進み、來る者は趙雲に非やと呼はり玉へば、彼大

玄德


玄德簡雍と密語す
簡雍

虎なり、二の鹿を失て一の虎を得ば、曹操とても恐るゝに足ず。袁紹笑て申けるは、我實は關羽を愛す、聊戯を云て早く御邊に招しめん爲なり。玄德の曰、さ候はば孫乾を途中へ出して關羽を此處へ招しめん。袁紹尤しかるべしと云ければ、玄德退て出玉ふ。其跡に簡雍ひそかに袁紹に告て申けるは、玄德を輕々しく荆州へ遣し玉はば、必ず再び回るまじ。袁紹が曰、しかる時は如何せん。簡雍が曰、某ねがはくは伴ひゆき、一には劉表に利害を說、二には玄德の心を量て、變あらば早く將軍に訴ん。袁紹斜ならず喜び、此義よく我心に協へり、御邊跟ひ行て玄德を取逋なと云ければ、簡雍拜謝して去にけり。玄德は關羽を招しむる爲なりとて先孫乾を出し、次の日袁紹に見えて只今打立由を申されければ、袁紹が曰、御邊一人にては他國へ行て事諧まじ、簡雍を伴ひゆき、共に相議して事を行ひ玉へ。玄德命を受、卽時に簡雍と馬を飛して城を出られければ、郭圖この由を聞て急ぎ袁紹に見て申けるは、玄德汝南に行て事を成こと能ず、空く回りて今又簡雍と共に荆州へゆく、必ず再び回るまじ、早々に召戻し玉へ。袁紹が曰、汝なにとて疑の心多き、簡雍よく計をなす、我なんの患か有んとて更に省ざりしかば、郭圖長嘆して退出す。玄德は簡雍と冀州の境を出玉へば、孫乾待うけて共に關定が家に到る。關羽門外に出迎へ、手を執て淚を流し、互に失散の情を訴ければ、家主の關定二人の子を引て玄

主喜て申けるは、某も關氏にて關定と申者なり、久く將軍の威名を聞て幸に見ゆることを得たりとて、二人の子を出して慇懃に持なす。關羽二人の名を問に、關定申けるは、兄を關寧と云て儒學を好み、弟を關平と云て武藝を志し候。關羽これに依て二十騎の兵を此彼に隱しおき、其身は關定が家に留りて專ら孫乾が消息を待居たり。孫乾は只一騎冀州に到り、密に玄德に見えて事の仔細を語りければ、玄德限なく喜び、近ごろ簡雍も我を尋て此に來れり、共に計を定めて早く古城へ引取んとて、簡雍を召て議せられければ、簡雍申けるは、君明日袁紹に見え、荊州の劉表は大國を領して勢盛なり、某ゆいて好を結び、共に曹操を伐んと云玉はば、袁紹必ず許諾せん、其時に出て身を脫玉へ、某は別に計を運して出候ん。玄德この義然るべしとて、次の日袁紹に見えて申されけるは、荊州の太守劉表は、九郡の地に據て兵多く粮足り、共に好を結て都を攻る程ならば、曹操一鼓してやぶるべし。袁紹が曰、われ往日すでに使を遣して好を結んと云ども、劉表肯て從はざりき。玄德の曰、劉表は某と漢室同宗の親族なれば、自ら行て利害を說ば、必ず喜て將軍に從はん。玄德が曰、劉表もし我に心を合せば、天下に何の患か有ん、御邊試に行玉へ、近ごろ關羽は已に都を出て尋來ると云沙汰あり、若此處へ來らば、首を刎て顏良、文醜が仇を報ぜん。玄德の曰、顏良、文醜は喻ば二疋の鹿なり、關羽は一疋の

いまだ劉皇叔の面を見ざれば、酒を飲ても咽に下ず。孫乾が曰、汝南これより程ちかし、明日ゆいて皇叔に見ん。關羽此義しかるべしとて、次の日孫乾と十騎あまりを率して汝南にゆき玄德を尋れば、劉辟對面して申けるは、皇叔この間こゝに居玉ひしが、小勢にて事難成とて、三日已前に又河北へ行玉へり。關羽心憂て怏々たる體なりければ、孫乾申けるは、將軍少も憂玉ふ事勿れ、某河北に行て皇叔を伴來んとて空く又古城へ回り、共に事を議するに、張飛申けるは、我ねがはくは河北に行ん。關羽が曰、この城は我等が一命を寄て賴とする處なり、御邊かる〳〵布出ること勿れ、我孫乾と共に行ん。張飛が曰、御邊は袁紹が大將顏良、文醜を殺せり、若行玉はば害あらん。關羽が曰、心安く思ひ玉へ、我機に臨み變に應ぜんとて、孫乾と二十騎を率して打出けるが、周倉を召て申けるは、臥牛山に住る裴元紹が手勢いか程か有らん。周倉が曰、兵は五百餘人、馬は五六十疋も候はん。關羽申けるは、我は此より河北にゆき、皇叔を迎て古城に回らん、汝は早く臥牛山へゆき、裴元紹その外の勢を驅あつめ、本道に出て迎奉れ。周倉命を受、欣然として去ければ、關羽は路を急で已に冀州の界に到る。孫乾が曰、將軍は此邊に宿を借て暫く待玉へ、某ひそかに行て皇叔に見え、計を設て脫れ來ん。關羽然るべしと同じて村の內へ入て宿を借。家主出合て名字を問ければ、關羽隱さず事の樣を語る。家

城中へ招き入れけり。

○劉玄德古城聚義

張飛城門を開て二夫人を招き入たる所に、斥候より報じて、只今四五十騎の兵南の方より此處へ來候と云ければ、深く怪を爲て心安からず、自ら外に出て見れば、果して弓箭を持たる騎馬の兵南門に馳きたり、張飛を見て盡く馬より下たり。張飛よく〳〵見るに糜竺、糜芳兄弟なりしかば、急に立向て何とて此に來り玉ふぞと問に、糜竺申けるは、徐州沒落の後、われ等兄弟は故鄕に囘りて人々の行末を尋聞に、皇叔は河北に落玉ひ、關羽は曹操に降れりと沙汰す、此に依て河北へ行んとて打出しに、昨日路にて聞ば、張姓の將軍眼大にして虎鬚なるが、古城を奪取て楯こもる、世にも怕しき大將かなと云て通る者あり、某これを聞より、必ず御邊ならんと思て尋ね來れり。張飛喜て申けるは、關羽すでに都をのがれ出、二夫人を送て只今城中へ入たり、孫乾又皇叔の消息を聞來て城中にあり、早く來て對面し玉へとて、相伴て內へ入、共に夫人に見て一度は哀み一度は喜ぶ。諸人みな甲を卸で數日の疲を休め、甘夫人都にての事を物語し、關羽が忠義の事を說玉へば、張飛感嘆して休ず、羊を殺して酒宴を設く。關羽申けるは、

て、矛を撚て突てかゝる。關羽身を避て後を見るに、誰とも知ず旗三流さし擧て、一彪の軍馬飛が如に馳きたりければ、張飛に向て申けるは、御邊疑あらば暫く見よ、我いま目の前に追手の大將を打取て、詐なきを明べし。張飛が曰、しからば我三通の鼓を打間に、追手の大將を斬死せ、若遲き時は我必ず汝を殺ん。關羽許諾して待居たるに、追手の勢すでに近付、曹操が大將に猿臂將軍蔡陽、刀を横へて馬を出す。關羽問て曰、きたる者は何人ぞ。答て曰、われは是蔡陽なり、汝さきに甥の秦琪を殺せり、曹丞相の命をうけ、此に來て汝を擒にし、却て壽亭侯に封ぜられんと欲す。その詞いまだ了ざるに、張飛鼓を鳴しければ、關羽馬を出して驀地暗に討てかゝり、只一合にして蔡陽が首地に落、鼓いまだ一通をだにも了ざれば、張飛これを見て心の内大に喜ぶ。關羽は勢に乘て遯る敵を追かけ、旗指を生捕て蔡陽が追蒐きたれる子細を問に、答て申けるは、關將軍の都を出玉ひし時、蔡陽しきりに追蒐て討ん事を望む、然ども曹丞相ゆるし玉はねば爲方なく默止居たるに、甥の秦琪が黄河の岸にて討れたる由を聞、いよ〳〵怒を含ところに、折節曹丞相汝南の劉辟を退治せよとて兵を授玉へり、蔡陽天の與と喜び、汝南へは向ずして將軍を追かけたり。關羽これを聞て張飛に右と告させければ、張飛すこし怒を靜め、關羽が士卒を召して都にての始終を問ふに、有の儘に告ければ、さては詐らざりけりとて

りて義を忘る、今又こゝに來て我を欺んとするか、我快く勝負を決して汝を死さば我活ん。關羽が曰、御邊定めて事の仔細を知ざるならん、我自ら云がたし、二夫人に見えて詳に聞。甘夫人これを見て自ら簾を掲て、張將軍なにとて如此なるぞと申されければ、張飛が曰、夫人少も驚せ玉ふな、我いま不義の賊を誅して城中へ入奉ん。甘夫人の曰、關將軍は人々の行衛を知らず、已事を得ずして暫く漢に降れり、曹操に降れるに非ず、皇叔の河北に居玉ふ由を聞て獨千里の艱苦を經、われ等を送て此まで來れり、事を聞さだめずして必ず悞をし玉ふな。張飛が曰、大丈夫の士、豈二君に仕るの禮あらんや、夫人必ず此者に欺れ玉ふな。甘夫人の曰、下邳城に在し時、敵大勢にて爲べき樣なく、此故に暫く漢に降れり。張飛が曰、もし大敵に逢て事諧ずんば、縱令死しては骸を暴とも、豈命を貪て辱を受んや、已に曹操に降りて何の面目ありて此に來れる。關羽が曰、事の是非を辨ずして何とて右は躁ぞ。孫乾も累に諫て、關羽實は曹操に降玉はず、能々是非を聞定玉へと云ければ、張飛いよ／＼怒て申けるは、汝等妄に舌を動、必ず曹操と計を約し、我を出拔て生捕ん爲なるべし。關羽が曰、われ若御邊を生捕んとならば必ず兵を引て來るべし、是見玉へ、車を推士卒の外に兵は一人もなし。張飛なほ心安からざるに、馬烟を舉て大勢寄來りしかば、大に驚き、あれは如何に、我を生取の計なりと云

徐州沒落の後すでに半年、絶て消息を聞ざりしが、量ざりき兄弟の此處に在んとは、此疑もなき張飛なり、孫乾早く內へ入て事の仔細を告知せ、城を出て二夫人を迎へよと云玉へと申ければ、孫乾馬を打て古城へゆく。張飛は徐州を落てより後は、芒碭山の中に身を隱し山賊をして居たりしが、玄德を尋んとて河北へと志して打出、この處を通りて飢に疲れ、城中へ人を遣して少の助を求るに、城主更に與へず、却て其人を逐出しければ、張飛腹を立て少も怺ず、平攻に攻入て薙で廻る程に、城中想ひ寄ざる俄事なれば、上を下へ騷動して了に盡く落行けり。張飛すでに城を乘取、縣官の印を奪て彌兵を聚め、威風を振て居たる所に、忽ち孫乾來て申けるは、劉皇叔すでに袁紹が處を出、汝南に行て劉辟を賴玉ふ、此に仍て關羽も都を逃て、二夫人を車にのせ、今此城外まで送り來れり、將軍速に出て迎へ玉へ。張飛きゝもあへず丈八の蛇矛を取て馬に打のり、千餘騎を率して北の門より出ければ、關羽これを見て心喜び、青龍刀を周倉に持せて相近付く。張飛眼を怒して八たと睨み、虎鬚さかさまに豎て叫ぶ聲霹靂の如く、矛を撚て突て蒐りければ、關羽こは如何にと驚き、急に身を避て申けるは、昔の誓なに故に早わすれ玉ふぞ。張飛怒て申けるは、汝は不義の輩、なんの面目ありて我に逢んとする。關羽が曰、われに如何なる不義かある。張飛が曰、汝すでに曹操に仕て壽亭侯に封ぜられ、富貴を貪

ず、先山中に回て暫く棲遅、わが重ねて招を待候へ。周倉頓首して申けるは、某は云に足ざる匹夫なるが、不幸にして身を盗賊に陷入、つねに非を改るの心あり、今將軍に見て雲を披て天日を見るが如し、若將軍に弃られては外に求べき主なし、手下の勢の相從はんを如何と思し食れ候はば、暫く此處に遺し留めて裴元紹に預置、某只一人歩行して將軍に跟ひ、萬里をも不ㇾ可ㇾ辭。關羽その志の切なるを感じて二夫人に右と語れば、甘夫人の曰、彼一人ならば伴ゆくとも何の妨か有ん。關羽この由を告て一人を伴んと云ければ、裴元紹申けるは、周倉もし行玉ふならば某も同く行ん。周倉が曰、御邊いま來る時は、手勢ことごとく散亂すべし、暫くわが士卒を預りて共に併領し玉へ、關將軍に跟ひ行、やがて馳回りて御邊をも招べし。裴元紹已ことを得ず、兵を引具し怏々として去ければ、關羽、孫乾車を守り、周倉を伴て路を早め、日を經て汝南の界に到り、傍なる山の上に古き城の在を望み見て、處の人に何者の籠りたる城ぞと問に、答て申けるは、此は古城と云處なるが、三月ばかり已前に、一人の大將軍その名を張飛とやらん申が、四五十騎を率して俄に此城中へ攻入、大將官人共を悉く追出し、城を我物として壕を深し柵を結、兵粮を貯へ人馬を集て、今は其勢四五千に餘れり、遠近その威を畏て敵する者なし、必ず容易に此邊を通て、彼人にとがめられ玉ふなと語ければ、關羽限りなく喜て申けるは、

小賊

裴元紹
小賊の
髻とらつて
関羽と
拜と
関羽
糜夫人
甘夫人

身を寓て常に將軍の威名を慕ひ、時を待て拜し見ん事を願ふ、此に依て聞知たり。關羽長嘆して申けるは、山林の中に潜る忠義の人ありて賊をなすか、御邊いまより邪を去て正に從へ。裴元紹拜謝しければ、關羽すでに打立んとする所に、遙に馬烟を擧て來る者あり。裴元紹これを望て、定て周倉にて候はんと云けるに、其勢ほどなく馳きたり、悉く馬より下て一人の大將路の傍に拜伏す。關羽急に扶起して、御邊如何なれば如此なるぞと問に、答て申けるは、某は關西の周倉と云もの也、往昔張寳が手に屬して戰場に出、しば〳〵將軍の尊顏を知、つね〴〵身を悞て盜賊に陷、將軍に從ひ事る事能はざるを恨とす、今日幸に天の賜、この處にて拜する事を得たり、願くは將軍某を棄ず、馬前の一小卒となして用玉はば、假令死とも辭する事無らん。關羽が曰、御邊われに從んとならば、相從ふ勢を如何とかする。周倉が曰、從はんと云ものを率ゆかんとて、手勢に向て、汝等いかに關將軍に從ふべきかと問に、皆一同に從はんと答ふ。關羽事の仔細を二夫人に語るに、甘夫人の曰、將軍都を出てより、獨千里を淩で多の艱難を經歴し、一も人の助を受ず、向に廖化が送んと云しをも將軍すでに用ひ玉はず、今もし如此なる溢者を賴なば人の議論を挽ん、殊には曹操が聞んも恥かし、我等は女の身なり、將軍宜く圖玉へ。關羽嘆服して退き、周倉に向て申けるは、われ御邊を隔るに非と云ども、二夫人これを喜玉は

る也、蹴散して棄んとて、馬を打て進みければ、眞先に立たる大將大音あげて申けるは、我は張角が與黨に大方裴元紹と云もの也、こゝを通んと思はば快く赤兎馬を渡せ。關羽これを聞て打笑ひ、慾心熾盛の山賊共、昔張角に從て尙この關羽を知ざるか、取れぬ物を取んとして却て汝が首を失ふな。裴元紹又申けるは、我顏赤して髯長き人を關羽と云りと聞しが、了に目には見ず、汝は是いかなる人ぞ。關羽刀を横へ、左の手に髯を握りて是見よと呼はりければ、裴元紹大に駭き、馬より飛で下、郭常が子を髻取て引ふせ、再拜して地上に跪く。關羽いかなる故ぞと問に、答て申けるは、某は天公將軍張角に從ひし裴元紹と云もの也、黃巾の與黨ほろびて後は身の置どころの無に、山林に嘯聚り、諸方の溢者を語うて山賊を業とす、今朝この者來て、一人の旅客赤兎馬とて天下無雙の名馬に騎り、必ず此處を通るべし、待て奪取んと云し故に、如此に待蒐たり、想はざるに關將軍なり、この者を生取て獻ると云ければ、關羽申けるは、我甚だ郭常が志を憐む、其子を殺に忍ずとて、馬の前にて繩を解放させければ、頭を抱て鼠の竄が如に去にけり。關羽乃ち裴元紹に問て曰、御邊なにとて我名を知たるぞ。答て曰、此より二十里を隔て臥牛山と云る山あり、其山に周倉とて關西より出たる者あり、板肋虬髯、形甚だ雄壯にして左右の臂よく千斤をあぐ、初め張寶に從て黃巾の黨たりしが、近ごろ山林に

断て鼎の沸が如なりしかば、關羽驚て起あがり、劍を提て行て見れば、郭常が子地上に倒たるを士卒散々に打擲す。こは如何なる事ぞと問に、答て申けるは、此人ひそかに赤兎馬を盗出し打乘て逃ん爲に鞍を置んとしけるが、如何したりけん、此馬に踏倒されて、聲を放て叫し故に、某等驚て馳來りたれば、同類四五人物を盗で逃んとす、此故に如此。孫乾これを聞て盡く殺せと云ければ、關羽が曰、われ獨千里を行は偏にこの馬の力に依り、然るを盜で去んとするは我を殺工なり。時に家主の郭常走り來て申けるは、不肖の子浩る悪事を仕出して、罪まことに難逃と云ども、老妻つねに此子を愛す、もし殺し玉はば必ず痛く哭ん、某これを見るに忍ず、望らくは將軍の慈悲を以て一命を助玉へ。關羽憐で皆命を扶させ、夜の明るを待て打立ければ、郭常夫婦地に再拜して申けるは、不肖の子悪事を爲て虎威を冒、幸に活命の恩を被る。關羽その志を憐み、只今こゝへ召出し玉へ、われよく諫戒て心を改させんと云ば、郭常申けるは、夜の四更の比、五六人の悪黨を引て何くとも知ず出去り、是前生の宿業にて候はん。關羽長嘆して家を出、漸く三十里ばかり來りけるが、人里遠き山路に、騎馬の大將二人百餘人の士卒を從へて行前を攔りしかば、山賊にてぞ有んとて能々見れば、一人は身に鎧を著て黄巾を以て頭を包り、其傍なるは適の郭常が子なりけり。扨は貪る心、尚さきのにも懲ず、我通るを待居た

けれバ、濕たる者を乾んとて岡の上なる家に宿を借、家主出むかへて如何なる人ぞと名字を問けれバ、關羽詳に來意を語る。家主喜て申けるは、某は郭常と申者也、久く此に世を遁て將軍の威名を聞、いま幸に見る事を得たりとて、羊を宰て酒を進め、二夫人を後堂へ請じて持なしけれバ、關羽、孫乾一處に聚て、濕たる者を火に烘り、馬に秣を飼せける。已に昏方に至て、一人年わかき大將從者五六人を引てあわたゞ布きたりけるを、家主の郭常、わが子こゝに來て關將軍に見え奉れと云。關羽問て曰、これ如何なる人ぞ。答て曰、これは老父が一子にて候。關羽その子に向て、今いづ方より囘りたるぞと問に、獵に出て囘り來れりと答ふ。父の郭常荐に涙を流して申けるは、某は先祖より儒道を專とする家なれども、天下の亂を避て此處に田を耕、年すでに老て只この一子ありと申せども、惡を行て儒業を學ず、明くれ獵漁を業として諫をも聞ず、これ家の不幸なり。關羽申けるは、今天下亂て合戰やまず、弓馬を學び武藝を嗜こと惡に非、後に大なる功を立ること有ん。郭常が曰、武藝を嗜は好と云ども、この子は放蕩にして用るに足ず。關羽嘆息して語りて深更に至り、臥房に入て密に孫乾に申けるは、父は如此賢人なるに、子は甚だ不肖なり、是天命の齊からざる也。孫乾申けるは、昔瞽叟は愚頑にして舜の如き聖人を生り、例なきにも非とて少し寢入たる所に、俄に屋の後に人さわぎ馬

を賜て早馬を立玉へり、未だ此へは來らざるか。夏侯惇が曰、これも人を殺せる事の聞えざる前の使ならん、兎角生取とて、兵を下知して四方より取圍ところに、遠く大音あげて、元讓、雲長戰を止よと呼はる者あり。諸人よく見るに張遼なりしかば、戰を止て相待に、程なく張遼きたり馬上より申けるは、關羽が東嶺關にて太守孔秀を殺したる由都へ聞え、若如此ならば路にて害に逢もの有ん、只無事に通させよとて某を來らしめ玉へり。夏侯惇が曰、秦琪は猿臂將軍蔡陽が甥なり、我往日蔡陽を丞相に薦しゆゑ、甥の秦琪をわが手下に屬置たり、關羽すでに秦琪を黄河の渡にて殺せり、我爭か默止べき。張遼が曰、われ蔡陽に逢て此事を宜く申ん、已に丞相寬洪の心を以て、關羽を放して其忠義を全せしめ玉ふ、將軍必ずこれに背玉ふ事勿と云ければ、夏侯惇許諾して軍を收。張遼又關羽に申けるは、御邊いづくを指て行玉へるぞ。關羽が曰、玄德いまは袁紹が處に居玉はず、われ普く天下を尋んと欲す。張遼が曰、もし在處を知玉はずば、再び都に回りて丞相に從ひ玉へ。關羽が曰、已に一度出て安ぞ又ゆかん、御邊都へ回り玉はば、宜く丞相に謝し玉へとて相わかれければ、張遼は都に上り夏侯惇は又官渡を守る。關羽馬を早めて程なく車に趕つき、右の事を物語して日すでに傾きければ、路の傍に宿を借り、次の日より大雨ふりつゞきしかども、片時も急ぐ路なれば、車を守て進發す。數日ありて雨晴

は、我往日いまだ漢に降らざる時、凡そ人を誅戮すること心の儘に行はんと約せり、途にてわれを遮んとせし奴原を一々に殺し來れり、汝も亦首を失んより、速に去て命を扶れ。夏侯惇聞もあへず、我秦琪が仇を報ぜんとて、槍を撚て突てかゝる處に、早馬一騎馳きたりて關將軍と戰ふ事勿と呼はる。夏侯惇なに事ぞと問ば、馬の上より告文を取出して申けるは、曹丞相深く關將軍の忠義を憐み、若關所にて遮り住んとする者あらば、無事に開て通させよとて告文を出し玉へり。夏侯惇申けるは、關羽路にて多く大將を殺せり、丞相これを知玉へるか。答て曰、いまだ知玉はず。夏侯惇が曰、然らば早く生取て都に送り、丞相の命に任せんとて、馬を交へて關羽と二十餘合ぞ戰うたる。時に又早馬打て、二將軍戰を休よと呼はりて來る者あり。夏侯惇問て曰、汝は如何なる使ぞ。答て曰、曹丞相路にて關將軍を攔る者あらば、關を開て通させよとて告文を出し玉へり。夏侯惇が曰、丞相は關羽が途にて關守を殺せし事を知玉へるか。答て曰、その事いまだ都へは聞えず。夏侯惇が曰、しかる時は此者を取にがすまじとて、槍を撚て蒐れば、關羽も刀を舞して又十合ばかり戰ふ所に、忽ち早馬きたりて兩將戰を已よと呼はり、左右へ引わけたりしかば、夏侯惇問て曰、丞相關羽を生捕との使か。答て曰、然らず、路にて關所の割符なくんば、遮り住んとする者あらん、無事に通させよとて、追々三箇度まで告文

るに、案に相違して袁紹が手下の大將互に妬爭ひ、田豐は獄に囚れ沮授は退けらる、審配、郭圖志を得て權を專にすと云ども、袁紹本より疑の心おほき人なれば萬決すること能はず、此に依て將軍もし輕々しく行玉はば、如何なる變を起さんも知がたければ、某ひそかに劉皇叔と身を脫るゝの計を定めて、三日已前に皇叔と汝南に來る、若將軍この事を知ずして輕々しく袁紹が處へ行玉はば、轂の中に落て害せられ玉はん事を恐れ、夜を日に繼で此迄きたれり、早く汝南に來て對面し玉へと云ければ、關羽限なく喜び、二夫人に右の趣を語る。夫人孫乾を召て玄德の事を問れければ、孫乾詳に徐州沒落の後艱難を凌ぎ、袁紹が兩度まで斬んとせしことを語るに、皆淚をぞ流ける。關羽これより路を易て汝南を望で進ところに、跡より馬烟を揚て來る者ありければ、孫乾に車を守せ自ら馬を囘して見れば、夏侯惇が勢なり。元來夏侯惇は曹操が命を受、袁紹が厯の爲に官渡に陣を取て居たりけるが、關羽ひそかに都を逃れ、路にて守の大將を斬、剩わが手下の秦琪を黃河の渡にて殺せりと告るを聞て心の中大に怒り、三百餘騎にて追蒐來れる也。すでに相近に成ければ、關羽馬を住め大音あげて問て曰、我を趕は如何なる人ぞ、誤て曹丞相の本意に背こと勿れ。夏侯惇申けるは、汝丞相の告文をも取ず、私に出來りて、途にて又わが大將を殺せり、我なんぞ生取ざるべき、早々に縛を受よ。關羽申ける

にて我を遮らんとせし者こと〴〵く斬れたり、汝も亦頭を失ん爲か。秦琪あざ笑ひ、汝たとひ名も無下將を斬たりとも、爭か我に向ふべきと云ければ、關羽が曰、汝自ら顏良、文醜に優れりと思か。秦琪大に腹を立、我等が手竝を見て思ひ知と云まゝに、刀を舞して蒐りければ、關羽馬を交て青龍刀を擧るかとすれば、秦琪が首は地に落たり。關羽大音あげて、我に向ふ者は悉く如此、早く舟を出して我を渡せと云ければ、敗軍敢て逃ちらず、急に舟を出しけり。關羽北の岸に登りて、此より袁紹が領地なれば、彌車を早めて北を望で進發す。

○關羽擂鼓斬蔡陽

關羽都を出てより五箇所の關を越、六人の大將を斬ころし、已に黃河の北に渡りければ、心の中すこし安く、我路にて大將を討たりしは已事を得ざる故なりと云ども、曹操もし聞ば、必ず我を怨で恩を知ぬ者なりと思ふべしとて嗟嘆して休ず、車に沿て進ところに、忽ち騎馬の客鞭を打て馳來り、雲長しばらく留れと呼はる。關羽馬を扣て見るに是乃ち孫乾なれば、近く寄て問て曰、汝南に別てより一向消息を聞ず、如何んとかし玉ひし。孫乾申しけるは、汝南の劉辟、龔都某を河北に使せしめ、袁紹と好を結で玄德を汝南へ請じ、共に力を戮て曹操を伐んと謀

關羽が曰、われ曹丞相に暇をこひ、玄德の行末を尋ねんとす。劉延が曰、玄德は河北に居玉ふ、河北は曹丞相の大敵なれば、丞相爭か將軍を許し玉ふべき。關羽が曰、我始め浩る爲を思へばこそ、丞相に約を固して、玄德の在所をだに知ば水火に向ふとも尋去んと云り。劉延が曰、いま黄河の渡には、夏侯惇が手下の秦琪と云もの大勢にて要害を守る、必ず將軍を通まじ。關羽が曰、太守ねがはくは渡の舟を借玉へ。劉延が曰、舟は多くあれども、今もし將軍に借ば後日の責いかゞ遁ることを得ん。關羽が曰、われ適に顏良、文醜を討て太守の爲に危を救へり、今日われに一艘の舟を借玉はぬか。劉延が曰、舟を借ことは易しと云ども、夏侯惇もし聞ば必ず我を罪すべし。關羽この言を聞て劉延を無用の人なりと思ければ、了に車を推せて秦琪が陣へ赴く。秦琪これを聞て自ら兵を率して出むかへ、來る人は何ものぞ、名を聞んと云ければ、關羽答て申けるは、われは漢の壽亭侯關羽なり。秦琪が曰、今いづくへ行玉ふぞ。關羽が曰、われ河北に行て玄德を尋んとす、願くは渡の舟を借玉へ。秦琪が曰、曹丞相の告文ありや。關羽が曰、われと曹操とは同く是漢朝の臣、われ何ぞ彼が下知を受ん。秦琪が曰、われ夏侯惇の命を受、この渡を把守る、汝翅あらば飛てゆけ、然らずば曹丞相に問て那後に通べし。關羽怒て申けるは、汝不知や、路々

許都城外の胡華と云人の子か。胡班が曰、是也、なにとて某が父を知玉へる。關羽その家に宿を假たる由を語り、從者を召て胡華が言傳たる書簡を渡しければ、胡班ひらき見て長く嘆じ、われ父の書を見ずんば必ず悞て天下忠義の人を殺さん、不如計を有の儘に告知せて落さん者をと思ひければ、近く寄て低語けるは、王植今佇計を設て將軍を殺んとす、早々に城を出て落させ玉へ、二更の比を相圖に四方より火を掛んとす、某ひそかに關門を披て出し奉んと云ければ、關羽大に驚き、取ものも取あへず二夫人を車にのせ門外まで出けるに、果して火炬を持たる者共ひしへと來集る。胡班ひそかに北の關門を披て送り出し、客屋に回りて四方より火を掛たれば、伏の勢喊を造りて打て出、亂れ入て尋ぬれども人ひとりも無。さては計を推して逃たるならん、急に趕かけよとて飛が如に趕かくる。關羽は胡班に扶られ二里ばかり出たるに、火炬を燃し連て限なき人馬追きたり、關羽をのがすなと聲々に訇り、王植眞先に馬を進む。關羽馬を留めて、汝元より我と讐なし、何故に燒殺んとはしたるぞと云ければ、王植兵を下知して自ら槍を撚て突てかゝる。關羽馬を交て青龍刀を振あげ、只一合に王植を斬て落し、勢に乘て蒐たりしかば、敵軍膽を冷して八方に散亂せり。是より車を早めて已に滑州の界まで來りければ、太守劉延之を聞つけ、數十騎を引て城外に出むかふ。關羽馬上にて禮をなし、太守別

問に、關羽答て申けるは、われ兄を尋て河北にゆく。王植が曰、將軍は天下の義士なり、遠路に驅馳して疲玉はん、二夫人を伴て城中に入、一夜人馬を息て夜明て出玉へと誠しげに云ければ、關羽その慇懃なるを見て少しも疑ふ心なく、城中に入て客屋に休む。王植酒宴を勸んとて招きけれども、關羽固く辭して、夫人こゝに在、しばらくも離べからずと云ければ、飲食みな客屋に送り來る。關羽馬に秣かひ、甲を解て士卒を休息せしめければ、王植ひそかに喜び、從事胡班を召て申けるは、關羽都を迯出て路にて太守を殺す、其罪きはめて大なり、彼が武勇は容易に當がたし、汝千餘騎を率して客屋を圍み、投火炬を多く用意し、乾ける柴を積で四方より火を付、早く外門を燒崩せ、二更の比を合圖に我も兵を出すべきぞと下知しければ、胡班命を承て、兵を調へ乾ける柴に焰硝を灌で夥しく搬あつめ、用意こと〳〵く備りて只時刻を待けるが、我久く關羽が名を聞及で了に其人を見ず、此間に密に伺ひ見んと思ひ、客屋に行て關將軍は何くに居玉ふぞと問に、廳上に書を觀玉ふと答ふ。胡班忍やかに窺ひ見るに、關羽左の手に長き髯を握り、几に凭て燈の下に書を觀居たる氣色、よの常の人ならずと驚きければ、覺ず感嘆して是は天上の人なりと云けるが、其言高聲なりしゆゑ、關羽聞付て何者ぞと問。胡班内に入て、某は太守に從ふ從事官胡班と申もの也と答ければ、關羽驚て申けるは、

を呼で青龍刀を側に置しむ。時に卞喜法堂に請じて酒宴を勸んと云ければ、關羽心を付て四方を伺に、壁の陰に人衆を伏たりと見ければ、卞喜將軍われを酒宴に招き玉ふは好と云ども、却て恐しき巧あらんと云に、卞喜申けるは、我敬で將軍を持成ん爲なり。關羽いよ〳〵怪み、起て物かげを見るに、斧を持薙刀を提げ、弓に矢を挿たる者多かりしかば、扨は疑ふ所なく我を出抜て討ん爲なりと思ひ、聲を勵して、汝を善人かと思へば却て我を害せんとするかと訇ければ、卞喜事の顯たるを見て、兵共出よと呼はるに、膽の太き少もの十人ばかり踊り出けるを、關羽青龍刀を舞して悉く斬殺す。此に怕れて卞喜堂を下りて走けるを、關羽急に追掛ければ、卞喜元來力つよき者なれば、引返して鐵鎚を投付たり。關羽身を避て青龍刀の背にて打ひらき、かへす刀に卞喜が肩より腰をかけて眞二に劈倒す。敵軍ふるひ怕て十方へ落失ければ、長老を招て禮をなし、若老師の扶にあらずんば我必ず害に遭んと云て、慇懃に別をなし車を守護して出ければ、普淨長老も衣鉢を收拾し、我も此處に住ること能はず、他國に行て雲遊せん、將軍よく身を保玉へ、後日に又對面せんとて寺を出て去にける。滎陽の太守王植は、向に討れし洛陽の太守韓福と一類なれば、兼て勢を聚て相待けるに、關羽すでに沂水關を越て太守卞喜を殺し、只今この處へ來ると云を聞て、自ら門を開て出むかへ、此は何くへ通玉ふぞと

れば、廻廊の陰に屈強の兵二百餘人を伏て、後に盞を擊て叫時討て出よと約をなし、自ら關門を排て出迎ければ、關羽その慇懃なるを喜び、馬より下て禮をなす。卞喜申けるは、將軍の威名天下たれか仰ざらん、況や今故主の許に歸玉ふ、是義を全する也、われ心に深く敬ふ。關羽これを誠なりと思て、孔秀、韓福を殺したる由を語るに、卞喜申けるは、將軍潔る不義の輩を誅し玉ふ、曹操なんぞ怒ることあらん、某宜く此事を申べし、暫く此處にて休息し玉へとて鎭國寺に請じければ、關羽心の內大に喜ぶ。寺中の僧侶三十餘人、鐘を鳴して出迎たる中に、普淨長老とて關羽が同鄉の人あり。卞喜が出拔て殺んとする計を知ければ、進んで關羽に問訊して曰、將軍蒲東を出て幾年ぞ。關羽が曰、二十年に近し。長老の曰、將軍われを知玉ふか。關羽が曰、不レ知。長老の曰、われは將軍と同鄉に生れて、將軍の家とは僅に河一を隔たり、年久ければ忘れ玉ふべし。卞喜これを聞て腹を立、長老故鄉の好あらば事必ず洩んと思ひければ、我關將軍を請じて酒を勸んとするに、沙門の身として何とて妄に舌を搖ぞと叱りければ、關羽申けるは、さのみな怒り玉ひそ、同鄉の人なれば共に昔語を爲なりとて、相作て方丈へ入ければ、長老まづ茶を進む。關羽申けるは、一夫人車の上にあり、願くは先すゝめ玉へ。長老乃ち夫人に茶を進め、手に戒刀を執て關羽にきと目加しければ、關羽その意を省り、從者

羽なり、門を開て通し玉へ。韓福が曰、曹丞相の告文ありや。關羽が曰、事冗しくして取きたらず。韓福が曰、この所は古の都にて、關所も平地に續たれば第一の固なりとて、我を擇で守しめ玉ふ、此故に晝夜怠ず非常を正、もし告文なくんば、御邊必ず私に逃來れるならん。關羽怒て申けるは、東嶺關の孔秀われを住んとして却て斬れたり、汝も亦首を失ん爲か。韓福大に怒て、誰か出て擒にせんと呼はりければ、孟坦雙刀を提て討てかゝり、戰いまだ三合ならざるに馬を飛して走りけるを、關羽急に趕掛只一刀に斬て落す。孟坦は兼ての計なれば、詐て逃わしり、關羽を伏の處に帶きよせ、四方より取こめて生取んと思ひしに、案に相違して關羽が騎たる赤兎馬は千里の駿足なれば、忽に追付られたり。太守韓福は門の傍に馬を立て居けるが、孟坦が討れたるを見て急に馬を進め、弓を取て兵と放に、その箭關羽が左の臂に中けるを、かなぐり棄て大勢の中へ斬て入、韓福を門の前まで追かけ、青龍刀を取のべて、頸より肩を連ねて砍て落す。敵軍膽を冷して散々に走ければ、關羽瘡の口より流るゝ血を帛を裂て能々束ね、人の知ん事を恐れて夜中に路を急ぎ、沂水關へぞ來りける。この關をば、始め黄巾の賊にて後に曹操に降りし幷州の卞喜と云もの大勢にて固たり。關羽が韓福を殺して來る由を聞、ひそかに計を設て討べしとて、其邊に漢の明帝の建立し玉ひし鎭國寺と云寺ありけ

こを通べきかと罵りければ、關羽きゝもあへず驀地暗に打て蒐り、兩馬相交り、只一合にして孔秀を腰より二に斬て落す。諸軍ふるひ恐て散々に走りけるを、關羽大音あげて申けるは、汝等みな逃ること勿れ、我孔秀を殺せるは已事を得ざる故なり、汝等罪なし、我なんぞ害することと有ん、我すでに丞相に暇を乞、都を離て來る所に、孔秀みだりに殺んとす、我已事を得ずして誅したり、願くは此由を丞相に傳へよと云て、關を越て通ければ、諸軍みな地に再拜す。洛陽の太守韓福は、關羽が東嶺關を越て孔秀を斬たる由を聞、いそぎ諸大將を集めて申しけるは、關羽すでに都を逃出て、是非なく東嶺關を越たり、此處へ來らばわれ如何すべき。大將孟坦が曰、丞相の告文も無て私に出來る者を輕々しく通しなば、後日の責のがれ難からん。韓福が曰、關羽は勇猛にして敵する者なし、顔良、文醜が萬夫不當と聞きしも、了に叶はで討れたり、何とぞ計を運して欺て生取ん。孟坦が曰、先要害に逆茂木を引て彼が來るを待うけ、某は打って出て戰はん、太守は山の上に陣を取て、雨のふる如に箭を放玉へ、兵を左右の谷に伏置て忽に生取、都へ送りのぼせて恩賞に預らん。韓福この義しかるべしとて千餘騎の勢をあつめ、關門を固て待ところに、關羽車を守護して出きたれり。韓福手に弓を持て馬を門の前に立、來たる者は何ものぞ、名字を聞んと呼はりければ、關羽馬上より禮を成て申けるは、我は壽亭侯關

去ほどに關羽は胡華が家を出、洛陽を指て進ところに、路に一の關あり、東嶺關と名づく。之を守る者は曹操が手下に孔秀と云もの、五百餘騎にて固たり。此處は元來三州第一の要害なれば、車を傍に駐て關羽只一騎のぼり來る。孔秀これを聞て自ら劍を提て出向ひ、何とて馬より下ぬかと叱ければ、關羽飛下て禮をなす。孔秀問て曰、將軍これは何方へとて通り玉ふぞ。關羽答て曰、われ曹丞相に別をなし、河北へ行て玄德を尋ぬ。孔秀が曰、河北の袁紹は曹丞相の大敵なり、御邊いま行んとならば、必ず曹丞相の告文を取來玉ふならん。關羽が曰、事火急に出て告文を忘きたれり。孔秀が曰、もし關所の割符なくんば、御邊しばらく此處に逗留し玉へ、我都に人をのぼせ、丞相の命を受てその後に通べし。關羽が曰、もし使の往還を待ば徒に日を送らん。孔秀が曰、一日丞相の命なくんば一日住ん、一年なくんば一年住ん。關羽怒て申けるは、汝いかなれば我を侮る。孔秀が曰、國の法度なれば我心に任せず、今の世龍虎相爭ふ時、もし輕々しく通しなば、後日の責を我いかゞして免れん。關羽が曰、汝もし我を通さずんば、只今大なる災有らん、願くは快く通し候へ。孔秀が曰、強て通らんとの心ならば、相伴ふ人を盡く住て質として、只一人通候へ。關羽大に怒り、刀を舞して斬てかゝれば、孔秀急に内へ入、關門を閉て鼓を鳴し兵を集めて後、又門を拔き自ら槍を撚て馬をすゝめ、汝こ

我久く威名を慕て、今幸に逢ことを得たりとて敬で内に請じ、車の上なるは何人ぞと問ふに、關羽答て曰、これは兄の夫人なり。家主乃ち婦女を出して迎へさせ、二夫人を草堂の中に請ず。關羽叉手して其傍に立ければ、家主累に坐し玉へと勸れども、關羽許容せず。二人の夫人上に在す、爭か禮を亂るべきと云。家主申けるは、將軍は姓も違へり、何ゆゑに甚だ敬玉ふぞ。關羽が曰、われ玄德、張飛と三人、生死の交を結て兄弟の約を誓へり、二人の嫂久しく艱難の中を經れども、嘗て假にも禮を缺ず。家主これを聞て彌敬ひ、將軍は天下忠義の人也とて、婦女を草堂にのぼせて二夫人を持成しめ、自ら關羽と小齋に入て物語しけるが、關羽その名を問に、家主答て、某は胡華と申もの也、昔桓帝の時議郎に封ぜられしが、官を休て今は此處に老を養ふ、愚息にて候胡班と申もの、滎陽の太守王植が處に在りて從事官たり、將軍必ず此路を通玉はん、願くは愚息が方へ書簡を傳て給れと云ければ、關羽その書簡を請とり、終夜京にて曹操が禮待せし事を語るに、胡華感嘆して息ず。夜すでに明て慇懃に朝餉を勸ければ、其後關羽二夫人を車に請じ、胡華に別れて洛陽を望で進發す。

○關羽五關斬二大將一

將軍に獻ると云ければ、關羽問て曰、二夫人の車は何くにかある。廖化が曰、人の害せん事を怕れ、山中に留めて守らしむ。關羽が曰、早々に此處へ送り來れ。廖化急に馬を打て山中に入、暫ありて百餘人の士卒に車を推せて來りければ、關羽馬より下て車の前に立より、夫人に詰る難儀を見せ奉るは、某が罪なりと云に、甘夫人申されけるは、若廖化が扶くるに非ば、必ず杜遠に辱められん。關羽乃ち相從ふ士卒に事の仔細を問に、向に杜遠車を劫して山中に入、廖化と二夫人を分て妻とせんと云、廖化よく由來を問て劉皇叔の夫人と聞より、再拜して甚だ敬ふ、杜遠は從はずして了に廖化に斬れたりと語ければ、關羽乃ち廖化が前に來り、再拜して之を謝す。廖化手下の兵を分て送り奉んと云ければ、關羽心の中に、此者は黄巾の賊徒にて人を掠る溢者なり、若これ等の扶を受ば人の笑に逢んと思ひ、乃ち謝して申けるは、厚く御志の程を感心すと云ども、已に都を出る時、千里を獨行んと曹操に約せり、若重て相遭事有ば、今日の情を忘候はじとて別ければ、廖化金帛を贈りしかども關羽更に受ず、車に沿て曹操が錦の袍を送りし事を物語して日も漸く暮ければ、傍なる家に宿を借んと云に、家主の翁髮髯こと〴〵く白が立出て問て曰、將軍は如何なる人ぞ。關羽答て曰、われは劉皇叔の弟關羽なり。家主驚きて申けるは、彼顏良、文醜を討たる人か。關羽が曰、是なり。家主限なく喜び、

関羽

關羽二夫人と尋て廖化に遇ふ
廖化

袍の恩を蒙ると云て馬を引回し、北を指て去ければ、許褚怒て申けるは、此人甚だ無禮なり、追かけて生取ん。曹操が曰、彼は只一人われは二十餘人あり、安ぞ疑の心有ざらん、我すでに言を出せり、必ず信に背て追事勿れとて、此より都に回りけるが、路すがら嗟嘆して諸大將に申けるは、汝等みな關羽が志に效て、萬世に其名を傳よとぞ申ける。關羽は時刻うつりて夫人の車心元なく、馬を打て三十里あまり來りしかども、車の行方を見ず。心怪て馬より下、山に打あがりて望見れば、谷を隔て雲長暫く住と呼はる者あり。關羽いよ／＼怪をなす所に、年の程二十ばかりなる大將、黄巾を以て首を包み、錦の袍を披て歩卒百餘人を跟へ、山を下て馳近付。關羽大音あげて、何者なれば我を呼ぞと問に、彼人馬より飛で下、槍を弃て地に拜伏す。關羽詐の計ならんと思ひ、壯士早く名字を聞んと云ければ、彼人答へて申けるは、某は本襄陽の廖化字は元儉と云もの也、天下の亂を避て江湖の間に流浪し、五百餘人の溢ものを集めて山賊を業とす、同伴に杜遠と云ものあり、向に山を下て往來の人を伺ひ、二夫人の車に乘たるを劫し來る、某從者に如何なる人ぞと尋ぬれば、漢の劉皇叔の夫人なりと申、此故に某再拜して敬ひ、將軍の忠義を聞て感嘆するに忍ず、早く御車を推て原の路に送り奉んと申せども、杜遠肯て從はず、却て不義を行んとせしに因て、某つひに杜遠を殺し、首を取て

るに、良有て曹操五六騎を率して馳きたり、許褚、徐晃、于禁、李典が輩ことゞゝく跡に續く。關羽が刀を横たへて橋の上に馬を立たるを見て、曹操諸大將を馬より下しければ、關羽よく之を見るに、皆甲をも披ず武具も持ねば、扨は我を伐ん爲にては無りけりと心を安じて控たるに、曹操聞て申けるは、將軍なにとて路を急ぎ玉ふぞ。關羽馬上に禮を爲て申けるは、某往日丞相に三の望を乞たりしに、幸に許容し玉へり、今故主河北に在て袁紹に寓、この故に早早に出行んとす、向に相府に入んとすれども能ず、書を遺して鈞威を冐す、願くは丞相昔日の一言を忘玉ふな。曹操が曰、われ天下の宰相なれば、一言も信を違ず、何ぞ前日の言を忘べき、但將軍の遠く出玉ふを送て、路の費を助ん爲に黄金を餞す。關羽申けるは、某しばゝゝ丞相の恩賜を蒙て、尙途中の用意あり、願くは此を留て諸軍に分ち施し玉へ。曹操が曰、これ我寸志を表さん爲なり、將軍の大功を萬一も謝せんと欲す。關羽が曰、某久しく丞相の大恩を感ず、此少の功勞爭か報ずる事を得ん、他日萍水再遇ば、別に餘恩を報ずべし。曹操笑て申けるは、將軍は忠義の士、われ因緣薄して中道に別る、此一領の袍は、わが送別の忱を表さん爲なりとて、傍なる大將に命じて、赤地の錦の袍を兩手に捧て贈らせければ、關羽心の中に若は計もや有んと思ひ、馬の上より薙刀を指のべ鋒に掛て請取、肩に打かけて、丞相賜

の主あり、豈人情を以て私せんや、想に路の程いまだ遠くは隔らじ、我自ら行きて別をなし、大人の意を知せんとて、張遼を召て申けるは、汝は只一騎關羽に追付て、暫く路にて住らしめよ、我跡より金銀を用意して馳ゆき、關羽に送て路すがらの費を助ん、又秋も半にて冷なれば、錦の袍を餞して、後までも之を思て我を忘こと無らしめんとて、張遼すでに打出ければ、諸大將と跡に繼てぞ打立ける。關羽が騎たる赤兎馬は千里を走る駿足なれども、車に沿て緩々と轡を執て進ところに、跡より雲長しばらく住れと呼はる者あり。關羽これを聞て我字を呼ものは我を害する人にては有まじと思ひければ、士卒に向て申けるは、汝等は車を推て先ゆけ、我この人に對面して跡より行んずるぞとて後を顧れば、張遼只一騎鞭を揚て馳きたる。關羽問て曰、御邊こゝに來るは我を生取ん爲か。張遼が曰、われ身に甲を被ず手に武具をも持ず、御邊少しも疑ふ事勿れ、曹丞相別を惜で、御邊に餞せんとて自ら來り玉ふ、別に害するの心なし。關羽が曰、丞相の自ら來り玉ふは必ず事の故あらん。張遼が曰、諸人みな御邊を追んと云ども、丞相これを制して彼各その主あり、本に囘らしめて其忠義を完せしめよと宣ひて、今自ら來り玉ふ、御邊しばらく馬を住て待玉へ。關羽が曰、丞相もし大勢を引て來り玉はゞ、我ねがはくは只一騎快く戰て打死せんとて、馬を引囘して霸陵橋の上にて待居た

ん。曹操が曰、いかなる仔細ぞ。程昱が曰、關羽に大なる罪三あり、昔日下邳の城にて彼が事の急なる時、丞相に降て偏將軍に封ぜられ、三日に小宴五日に大宴、馬に上る時は金を與へ、馬より下る時は銀を與へ、纔なる功ありとて又壽亭侯に封ぜらる、其恩榮至極せり、然るに一旦丞相を棄て去、その罪一なり、丞相の命をも受ず飄然として打出、剩へ北門の番衆を斬んとせり、是國法を犯、その罪二なり、故主の微きなる恩を思て丞相の大恩を知ず、妄に書簡を送て鈞威を冒、その罪三なり、今彼を許して袁紹に赴せしむるは、虎を放て人を喰しむる也、不如蔡陽が望のまゝに追蒐て伐しめ玉へ。曹操申けるは、關羽初め我に三箇條の願を約して、玄德が在所を知ば、那時暇をも乞ずして出去んと云り、此故にいま我を棄て去り、我もし追蒐て殺しなば、天下の人われを信義なき人とせん、彼各その主あり、必ず追事有べからず。程昱が曰、關羽告ずして打出るは國法を背なり、これを空く措ば何を以てか人を治ん。曹操が曰、彼が告ざるに非、六七度まで府中へきたりしかども、迴避牌を掛て入ことを許ず、わが與へたる金銀等を、一つも私に用ひずして盡く留めおきたり、關羽が如き志は千金にも換がたし、眞に守義輕財大丈夫なり、如此の人を我深く心に敬ふ。程昱が曰、いま若殺し玉はずんば、後に大なる禍をなさん、那時必ず悔玉ふな。曹操が曰、關羽は義に負人に非、彼各そ

○關羽千里獨行

曹操は關羽が出去しをも知ず、諸大將と政事を議して居たる所に、忽ち關羽が使なりとて書簡を贈り來れり。曹操いそぎ披き見て、以の外に驚き、關羽すでに出去りと云ところに、北門の番兵あわたゞ敷走り來り、關羽いま是非なく門を推とほり、一輛の車を守護して、二十餘人北を指て落行たりと訴ふ。時に又一人來りて申けるは、關羽夜の明方に、金銀段匹を庫内に封じ、壽亭侯の印を遺しおき、十人の美女を内室に留め、初め跟へ來れる二十餘人の士卒を引て家を出て落ゆきたり。滿座みな興を醒ところに、猿臂將軍蔡陽すゝみ出て申けるは、某ねがはくは五千餘騎を引て關羽を生取きたるべし。曹操が曰、主に事て本を忘れず、眞に天下の義士なり、來ること明白、去ことも明白、これ天下の丈夫なり、汝等も此を手本にせよとて蔡陽を叱退く。程昱申けるは、關羽丞相に暇をも乞ず、是大なる無禮ならずや。曹操が曰、彼が心の儘に故主に歸らしめて、其忠義を全うせしむ。程昱が曰、然る時は御方の諸將みな不平の心あら

于漢朝、少事劉皇叔、誓同生死。前者下邳失據、許降丞相、所請三事、已領恩諾、羽所以敢焉。拔擢過望、實難克當。今探知故主劉皇叔見在袁紹軍中、身爲寄客、使羽旦夕不安。三思丞相之恩、深如滄海、返念故主之義、重如丘山。去之不易、住實難。事有前後、當還故主。尚有餘恩未報、俟他日、以死答之、乃羽之志也。謹書告辭、幸希鈞鑒。建安五年秋七月狀上。

軍いつか打立玉ふぞ。關羽が曰、たゞ朝夕の間にあり、此ごろ曹操が多く某に贈れる金銀段匹を盡く封じて遺置き、一つも持去べからずとて又丞相府に行けるに、なほ廻避牌を掛たり。如此なる事五六度に及べども、肯て入事を許ざりしかば、關羽せん方なく、張遼に遇てこの由を告んとて其家に行に、張遼も虚病して出合ず。關羽心に思ひけるは、是我出去事を許ざる計なり、大丈夫の士すでに去んと欲して動かざるは本意に非、所詮書簡を遺して去んとて一通の書を封じ、壽亭侯の印を庫の内に掛おき、曹操が贈りあたへたりし金銀段匹を一々に記録を副て遺し留め、夜のあけがたに二夫人を車に乘せて自ら赤兎馬に打乘り、たゞ一人の士卒に書簡を持せて丞相府に遣し、手に靑龍刀を提げて北の城門より出んとすれば、番の者共遮り住めんとしければ、關羽眼を怒して、何ものなれば我を住めんとするぞ、汝等みな頸を失はんためかと叫ければ、番の者共震ひ怕れて逃わしる。關羽すでに城門を出て士卒に命じて申けるは、汝等は車を守て先にすゝめ、我は跡より行て追手寛ば防ぐべし、能々心を盡して二夫人を驚かしむる事勿れとて、官道を望んで徐々とぞ進みける。關羽が曹操に遺れる書に曰、

漢壽亭侯關羽、特沐再拜、奉㆓書大丞相曹俺下㆒。羽聞、有㆑天而有㆑地、有㆑父而有㆑子、有㆑君而有㆑臣、天氣應㆓乎陽㆒、地氣應㆓乎陰㆒、萬物皆順㆑時、方可㆘養㆓群生㆒而成㆗三綱五常之義㆖也。羽生㆓

時、堅く曹操に三つの約をなせり、此故に暫く身を寓て時を待、いま已に大なる功を立て其恩を報ぜり、來る時明白、去時も明白にすべし、御邊は御回りありて此趣を傳へ玉へ、我必ず曹操に暇を乞て、二夫人を守護して回るべし。陳震が曰、曹操もし許ずんば如何ん。關羽が曰、われ必命を棄ん、何ぞ久しく此に逗らんやとて、返簡を調へて玄德に答ふ。其書に曰、

羽切聞、義不負心、忠不顧死、是大丈夫之志也。羽自幼讀書、粗知禮義、至于觀羊角哀、左伯桃之事、論張元伯、范巨卿之約、未嘗不之嘆而流涕也。昔羽守下邳、內無積粟、外無援兵、欲盡死節、奈有二嫂之重、未敢斷首捐軀死于溝壑也。近自汝南、方知信息、須當面辭曹公、奉送二嫂、皈也。昔日降漢時、已曾預言、今已有微功之報、不容不從也。忽得兄書、視之如夢。羽但懷異心、天地可表。披肝瀝膽、筆楮難窮、瞻拜有期、伏惟照鑑。

陳震返簡を得て回りければ、關羽自ら丞相府に行て曹操に暇を乞はんとするに、曹操兼て關羽が來ん事を量り、門に廻避牌を掛て入事を許ず。この牌の掛る時は、如何なる大事ありても內へ入ざる法なれば、關羽空く回て一向に旅裝を促し、自餘の者を一人も用ひず、始め小沛より跟へ來れるもの二十餘人に、夫人の車を推せて打立べしと用意をなす。廿夫人問て曰、將

ず、若玄德死せば我豈ひとり生んや。張遼が曰、いま玄德は河北に居玉ふ、御邊ゆいて尋玉はんか。關羽が曰、往日の言われ安ぞ負事有ん、御邊必ず約を違ず、丞相に告て我ために暇を請玉へ。張遼これを聞て、扨は此人不日に回り去事有んと思ひければ、相別て相府に行、曹操に見て右の趣を語る。曹操嘆じて申けるは、眞に忠義の人なり、我これを留るの計有とて、府門に牌を掛て人の出入を許さず。關羽は心に計を運して兀然として居たる所に、外より故人きたれりと報じければ、召入て對面するに、更に知ざる人なりしかば、御邊は何ものぞと問ふに、某は袁紹が手下に南陽の陳震と云もの也と答ふ。關羽大に驚て急に左右の人を退け、如何して來り玉ふぞと問ふに、陳震一通の書緘を出す。關羽開て見れば玄德の書なり。其書に曰、

備嘗謂、古人恐獨身不能行其道。故結天下之士、以友輔仁。得其友則益、失其友則損。備與足下自桃園共結刎頸之交、雖不同生、誓以同死、今何中道割恩斷義。君必欲取功名圖富貴、願獻備首級、以成全功。書不盡言、死待來命。

關羽見了て申けるは、某玄德を尋ぬる事を思はざるに非、いかゞせん其在所を知ず、我なんぞ曹操に事て富貴を貪らんや。陳震が曰、玄德常に將軍を慕て涙つひに乾ず、早く河北に來て往日の義を全し玉へ。關羽が曰、人生天地之間始終なきは君子にあらず、我さきに漢に降る

て計を成玉へ。關羽が曰、すでに君の行末を知たれば、了には再び對面すべし、御心安く思し食るべしとて退て外に出、いかゞせんと思ひ煩ひ、起居共に安からず。此時于禁すでに玄德の河北に居玉ふ由を聞知ければ、關羽が出去ことも有んとて、張遼を以て其體を探聞しむ。關羽は憂悶て坐する所に、張遼つと來り、御邊この間玄德の消息を聞玉ふと承て、御慶を申と云ければ、關羽申けるは、いまだ故主に對面せず、何の喜ぶ事か候はん。張遼が曰、御邊つねに春秋を讀み玉ふ、管仲と鮑叔とが交を知玉はん、願はくは語り給へ。關羽が曰、管仲嘗て云り、吾三戰三退、鮑叔不以我爲懦、知我有老母也。吾嘗三仕三見逐、鮑叔不以我爲不肖、知我不遇時也。吾嘗與鮑叔談論、身極困乏、鮑叔不以我爲愚、知時有利不利也。吾嘗與鮑叔賈、分利多、鮑叔不以我爲貪、知我貧也。生我者父母、知我者鮑叔と云り、此乃ち二人の交なり。張遼が曰、御邊と玄德との交は如何ん。關羽が曰、われ玄德と生死の交を結んで、生る時は同く生、死する時は同く死す、管仲、鮑叔が類の及ぶ所に非。張遼が曰、御邊と我とが交は如何ん。關羽が曰、われ御邊と邂逅に相交る、吉凶相救ひ患難相扶く、力の救事克はざるに至ては即止、なんぞ我玄德と生死の交に比せん。張遼が曰、玄德さきに小沛に利を失ひし時、御邊なんぞ命を棄て戰ひ玉はざる。關羽が曰、われ玄德の生死を知ら

散々に走り、四角八方へ落失けり。關羽州郡を治めて都に班ければ、曹操自ら洛外に出むかへ、酒宴を設て諸軍を持成。關羽退て家へ回りければ、甘夫人問て曰、將軍外に出ていまだ劉皇叔の消息を聞玉はぬか。關羽が曰、某この間心を盡して尋ぬれども知たる者候はず、さればとて御心を苦め玉ふな、近き内には御對面をさせ奉んとて暫く休居けるに、甘夫人、糜夫人簾の内に伏轉で、聲を放て哀み哭き、皇叔は定めて討れさせ玉ひしを、我等が痛く哀ことを恐て、關羽隱して知せぬ者ならんと云玉ふ所に、門を守る士卒内に哭く聲するを聞て、夫人は何を哀で右は哭き玉へる、劉皇叔の河北に居玉ふを知玉はぬにやと云。夫人いそぎ其者を召て、汝いかがして知たると問玉へば、某この間關將軍に從て汝南に赴き、軍中にて聞たりと答ふ。夫人いそぎ關羽を召て申されけるは、劉皇叔久く將軍と義を結て、假にも志を替玉はず、將軍いま曹操が恩を受、昔日の誓を忘て詐を以て我を欺き、我等が憂死するを待て自ら快く富貴を受ん爲なるべし、願くは今劍を借て二人の命を早し、將軍の疑を散ぜんとて、淚を流して哀玉へば、關羽も流るゝ淚を押へ、頓首して申けるは、某すでに皇叔の恙なく袁紹が館に居玉ふ由を聞と云ども、隱して夫人に知せ奉らざりしは、內走下女の聞つたへて外に泄ん事を怕ゆゑ也、この事よく〳〵心に祕して只ゆるく圖るべし、急にせば害あらん。甘夫人の曰、將軍よく心を盡し

力を戮して曹操を伐んとす、此故に頻に兵を興して攻かゝる所に、將軍自ら討手に來り玉ふと聞て、劉辟、龔都喜に堪ず、明日の合戰には詐て皆逃走るべし、將軍は汝南を平げたりと號して都に囘り、早く二夫人を守護し玉て汝南に來り、再び玄德に見え玉へと云、某この事を告げ申す爲に密に來れり。關羽驚嘆して申けるは、不圖玄德の袁紹が處に居玉はんとは、我必ず夜を日に繼で馳行ん、然れども我已に顏良、文醜を伐たれば、袁紹怒て變を生ん事を恐なり。孫乾が曰、さ候はゞ某先ひそかに河北に行て事の體を探り、重て將軍に報ずべし。關羽が曰、われ玄德に一度遇ことを得ば、假令死すとも恨なけん、今都に囘て曹操に暇を乞、日夜を分たず馳きたるべし、御邊速に去て河北の虛實を窺ひ、半途に出て我を待玉へとて、孫乾を送り出しける。于禁、樂進は此體を見て心中には怪めども、敢て辭には出さず。次の日の曉天に關羽兵を進めければ、龔都一陣に馬を出して、主に背く匹夫早く頸を渡せと罵る。關羽大音あげて申けるは、鼠輩みだりに朝廷に背て、何とて我を主に背と云ぞ。龔都が曰、玄德久く袁紹に從ふ、汝却て曹操を扶るは何事ぞ。關羽きゝもあへず刀を舞して打てかゝりければ、龔都一戰にも及ばず、馬を飛して逃走り、後を顧て申けるは、故主の恩不可忘、御邊速に來れ、我必ず汝南の城を讓與ん。關羽その意を知ていよ〳〵兵を進めければ、劉辟、龔都いつはりて

りと語りければ、諸人みな其論に服す。時に早馬到來して、汝南に黃巾の餘黨劉辟、龔都と云者二人、兵を聚て亂をなす、曹洪推よせて戰ふと云ども、利を失ひて引退く、早く討手を下されずんば、由々しき大事に及ぶべしと告ければ、關羽すゝみ出て申けるは、某ねがはくは打向て是等の賊を平げん。曹操が曰、御邊累に大功あれども、我いまだ恩賞をもせざるに、何とて又行かんと云玉ふぞ。關羽が曰、某無事にして日を送る時は、身必ず病を生ず、願はくは討手に向ん。曹操これを壯なりとして五萬の勢を授け、于禁、樂進を副將として汝南を指て向はしむ。荀彧ひそかに曹操に告て、關羽つねに玄德を忘れず、箇樣に度々外に出し玉ひて、若玄德が消息を聞ば忽ちに回り去んと云ければ、曹操點頭して、われも其心なきに非ず、この度功を成て回らば、重ては用ふまじとぞ申ける。關羽は兵の手分を定めて、夜あけば汝南へ向はんと議する所に、門外にて敵の間者と思しき者を二人生取たり。關羽召よせて能々見るに、一人は孫乾なり。こは如何にと驚て、傍なる人を退け、近く寄て問て曰、徐州沒落の後は一向消息を聞ざりしが、玄德の行衞を知玉へるか。孫乾申けるは、徐州の敗より某は雲南に流浪して、劉辟、龔都を頼み、暫く身を寄て居し所に、近ごろ玄德は河北の袁紹が館に無恙御座ある由を聞、早く行て尋奉んと思へども、未得其使して延引せり、幸に劉辟、龔都みな袁紹に心を寄、共に

關羽に顏良、文醜を討せ、將軍の御心を怒らせて某を殺んとする質なり、某久しく將軍の恩養を蒙りながら、何しに野心を挿べき、將軍よく思ひ玉へと申されければ、袁紹これに心解て敬で座上に請じ、われ若悞て御邊を害せば、忌賢の惡名を得んと云ければ、立德謝して申されけるは、將軍寬洪の恩德を蒙て、某いかゞして報ずる事を得ん、物馴たる者を使として密に關羽が方へ書簡を送り、某が此に在を知しめば、彼必ず夜を日に繼で來るべし、然る時は共に力を協せ、先手の大將として曹操を伐亡し、顏良、文醜が仇を報ぜん。袁紹喜で申けるは、我もし關羽を用て大將と爲ことを得ば、顏良、文醜が再び生たるに勝べし、早々に招き玉へとて、兵を武陽と云ところ迄退けて、要害に陣を取。

○關羽遺レ書辭ニ曹操一

曹操すでに文醜を討て袁紹遠く退きければ、夏侯惇を留めて官渡を守らせ、我身は都に囘て慶の酒宴をなし、關羽が手柄を稱賀して後、呂虔を召て申けるは、向に延津の戰に兵粮武具の車を先陣に備て敵に掠奪はせたるは、是乃ち餌を與へて敵を釣の計なり、只荀攸一人わが心を知

指て、十騎あまりを引たる大將出きたり、青龍刀を打ふりて、賊將早く首を渡せと罵りければ、文醜馬を交て二三合戰ひ、叶はじとや思けん引回して走るを、關羽赤兎に一鞭を加へ、追付て後より文醜が首を斬て落す。曹操阜の上より此を見て、鼓を打鑼を鳴し、大軍を驅て攻下るに、河北の勢大將を討れてなじかは怺べき、我さきにと逃わしりて、黄河の流に溺死する者かずを知ず。初より玄德は三萬餘騎にて後陣に備て居玉ひしが、敗軍走り來て、又頰の皮赤して髯の長き大將、文醜が首を切たりと罵ければ、馬を岸の邊に驅よせて遙に向を望み玉ふに、黄河を阻て一簇の勢往來飛が如く、左に突右に撞て河北の大勢を散々に斬て廻る。諸軍みな、向に文醜を討たりしも是なりと告ければ、玄德しばらく見玉ふ所に、漢の壽亭侯關羽と書たる旗を指出せり。扨は我弟まことに曹操が處に在けりとて、心中に天地を祈念し、隙を伺て逢んとし玉ふに、曹操が勢勝にのりて河を渉て攻きたりしかば、小勢にて支る事克ず、落ゆく勢にさそはれて十里ばかり走り玉ふ處に、袁紹が救の勢きたり、共に官渡に引退く。郭圖、審配二人、この度の軍にも玄德の弟關羽又文醜を斬たりと告ければ、袁紹大に怒り、大耳の賊なにとて如此なるぞとて、玄德を引出して斬んとす。玄德申されけるは、我ねがはくは一言を伸て死ん、曹操元より深く某を怕る、某徐州を落て將軍に身を寄、曹操これを聞て力を協て都を攻ん事を患ひ、

馬より下、甲を卸で休息せしむ。暫く有て文醜が勢勝に乗て追かけ來りしかば、休居たる兵共驚き怕れて、早く白馬に退き要害にて支んと云。時に一人すゝみ出て、是こそ願ふ幸よ、敵に餌を與て怠れるを討んと云もの有。曹操これを見るに荀攸なりしかば、打笑て目くばせするに、荀攸その心を悟て早く閉口す。案の如く文醜が勢は勝ほこりて心怠り、兵粮輜重を掠奪て思ひ思ひに打ちり、戰はんとする心なかりしかば、曹操見すまして、すは蒐れとて山の上より一度に咄と斬て下るに、文醜が勢備みだれて、一戰にも及ばず散々に逃わしる。曹操が勢これに氣を得て四方よりおつ取こめ、餘さじと攻ければ、文醜勇を振て只一騎圍を出、しづ〳〵と引て回る。曹操阜の上より大音あげて、文醜は河北の名將なり、早く生取きたる者には、恩賞望に任べしと呼はる。之を聞て張遼、徐晃馬を飛して追かけ、文醜遼し何くに逃るぞと詞を掛て、近々と寄ければ、文醜後を屹と見て弓を取て兵と放つ。其矢張遼が面を指て來るを、急に頸を下て避ければ、盔の纓をぞ射切たる。張遼怒て打て蒐るに、文醜が二の矢面に中て、乘たる馬も前足を跌き、眞倒に落ければ、文醜首を取んと馳來る。徐晃これを見て大鉞を打ふり、立塞りて三十餘合戰ふ。この間に張遼遠く落のびければ、徐晃すでに力疲れ、敵に勢の重なるを見て、馬を回して走りけり。文醜又勝に乘て河に沿て進む所に、漢の壽亭侯關羽と書たる旗を

漢壽亭侯之印と云六字を刻み、再び張遼に持せて遣しければ、關羽これを見て打笑ひ、丞相よく我心を知玉へりとて、再拜して受たりけり。浩る所に早馬到來して、袁紹が大將に文醜と云もの、黄河を渡して延津まで攻よせたりと報じければ、曹操先人を遣して其邊の百姓を西河と云ところに移させ、自ら兵を引て打出けるが、途中にて下知を傳へ、兵粮の車を先に具て、軍勢は皆跡より來れと云。呂虔怪て問て申けるは、今俄に兵粮輜重を先に備玉ふは如何なる故ぞ。曹操答て曰、兵粮を跡に具ては動すれば敵に掠らる、此故に先に具ふ。呂虔が曰、敵もし向より攻來らば、兵粮を守る者いかゞして防べき。曹操打笑て、我別に計あり、敵きたらば期に臨で行ふべしと云ければ、呂虔いまだ悟ず、心に怪く思ひながら、輜重を先に具て延津へ馳向ふ。案の如く追々人走り來て、敵の大將文醜大勢にて兵粮を掠す、御方の勢みな車を棄て敗北せしと告ければ、諸大將申けるは、されば斯こそ有んと思たれ、退て自馬の難處に支んとて曹操に報ず。曹操は自ら後陣に備けるが、此由を聞て申けるは、敵勝に乘とも何ほどの事か有ん、只兵粮を捐置、河より北に向て敵の囘る路を横ぎり、一人も餘さず討とれとて、兵を下知して進みけるが、文醜に蒐立られて又散々に成ければ、曹操大音あげて、南なる阜に登りて敵を避よと呼はる。士卒これを聞て我先にと阜に登りければ、曹操又下知をなして、諸軍みな

とこそ云しとて、了に諫を用ざりければ、沮授外に出て長嘆し、上盈其志不務其功、悠悠黄河、吾其濟乎と云て、此より後は癖病して出ざりけり。玄德進で袁紹に申されけるは、某將軍の大恩を蒙る、願くは先手に向ひて、一には將軍の恩を報じ、二には關羽が實不を聞定めん。袁紹この義しかるべしとて、文醜に指副て先陣の大將としければ、文醜申けるは、玄德は數度の戰に負て用るに不足大將なり、只ねがはくは某一人に先陣を許し玉へ。袁紹が曰、われ玄德の才力を試ん爲なり。文醜が曰、さ候はゞ某が勢を三萬引わけて玄德に授け、後陣に備て戰はしめん。玄德これを聞て本より我ねがふ所なりと申されければ、文醜乃ち三萬餘騎を分あたへ、自ら七萬の勢を率して一陣にぞ進ける。曹操は顏良を誅してより彌關羽を重じ、壽亭侯に封ぜんとて帝に奏して印を鑄させ、張遼を使として遣しければ、關羽再拜して印を見るに、壽亭侯之印とあり、乃ち辭して申けるは、某いかんぞ浩る高官を受る事を得ん。張遼申けるは、將軍顏良を誅して希代の功を立玉へり、此故に封賞あり、何ゆゑに辭し玉ふぞとて再三に及べども受ざりしかば、無力かへりて右の趣を報す。曹操しばらく思案して申けるは、關羽この印を見て其後に辭したるか。張遼が曰、某ゆいて先印を渡し候へば、關羽よく印を見て、再三に及べども固く辭して受候はず。曹操嘆じて申けるは、此わが誤なり、早く印を鑄改よとて、

軍只かりそめの一言を聞て某を殺し玉ふか、某徐州に敗てより妻子一族こと〴〵く行方を知ず、殊に關羽が消息を聞ず、天下の間に顏の似たる人もあり、又名字の同き人もあり、頰の皮赤して大薙刀を使ふ者某が弟に限候はじ、將軍いまだ詳にせずして、某を殺玉ふは如何なる故ぞ。袁紹元來心淺き者なれば、この言を聞て實にもと後悔し、沮授を責て申けるは、我誤て汝に惑され、已に賢人を殺さんとせりとて、自ら玄德を座上に請じて曹操を破るの計を議するに、忽ち一人すゝみ出て、顏良は某が兄弟なり、すでに曹操が爲に討れたれば、某ねがはくは打向て此仇を報ぜんと呼はる。諸人之を見れば、其人身の長八尺、面は獬の如くにして眼の光星の如く、山後の人に文醜とて乃ち河北の名將なり。袁紹斜ならず喜び、汝に非んば顏良が仇を報ずべき者なし、我又十萬の精兵を汝に授く、速に打向へと云ければ、文醜いさみ喜び、直に黃河を打渡て曹操が陣へ押寄る。沮授これを見て袁紹を諫め、凡兵を用るの肝要は、勝負變化よく詳にせずんば有べからず、今宜く兵を延津に屯して、官渡に勢を分置ば、若勝て後に進むは過なし、今かる〴〵しく黃河の流を打わたり、萬一御方利を失ふ時は、一人も生て還る者候ふまじと云ければ、袁紹怒て申けるは、汝が如き奴原、みだりに無用の舌を動して我兵の心を迷す、遠慮の過たる長々しき事を云て、徒に月日を送る、聞ずや、古の兵法にも兵は貴神速

てなじかは慄べき、討るゝをも顧ず手負をも扶ず、右往左往にぞ落失ける。關羽山に上りて顔良が首を出しければ、曹操大に稱歎して、將軍の神威世に及ぶものあらじと感じける。時に關羽申けるは、某が如は豈いふに足んや、某が弟に燕人張飛と云ものあり、百萬の軍中に蒐入て大將軍の首を取こと嚢を探て物を取出すが如し。曹操いよ〳〵驚き、左右の者共を顧て申けるは、今よりして燕人張飛と云ものに出あはば、輕々しく戰ふなとて、襟の裏帶の端に其名を書記して忘るゝこと無らしむ。扨こそ後の長坂橋の軍に曹操大に怕れけり。

○關羽延津ニ斬ニ文醜一

顔良すでに討れて、先手の十萬餘騎わづかに逃れて走ければ、半途にて後陣のすくひの勢に出あひ、這々本陣に回て、頬の皮赤して髯長き大將只一人、大薙刀を提て陣中へ蒐入、顔良を斬て落して首を取かへりぬと告ければ、袁紹色を失て申けるは、我顔良を心やすく斬て落ものは凡夫の態にあらず。沮授申けるは、此は玄德の弟に關羽と云ものゝ所爲ならん。袁紹以の外に怒り、玄德われに從て却て曹操に內應し、關羽に我大將を討せたり、早く引出して斬て棄よと下知すれば、武士共玄德を捕きたる。玄德少しも怕るゝ色なく、袁紹に向て申されけるは、將

萬の精兵、四方八面旗幟明に立て、槍刀日に輝く。曹操嘆じて、河北の人馬は扨も壯なる勢かなと云ければ、關羽笑て申けるは、某これを見る事土にて造れる犬雞の如し、物の用に立がたし。曹操又申けるは、あれ見玉へ、多の大將次第を守て旗の紋あざやかに、人は虎の如く馬は龍の如し。關羽が曰、これを金の弓玉の矢に喩ふ、用て何の益あらん。曹操指さして、あれなる旗の下に馬を立たるが顔良なりと云ければ、關羽之を見て、冷笑て申けるは、顔良は標を立て首を賣ものに似たり。曹操が曰、この人は河北無雙の名將なるに、御邊いま何ゆゑに輕んじ玉ふぞ。關羽が曰、某ねがはくは彼が首を取て獻らん。張遼傍に在て申けるは、軍中には戲言なし、輕んじて仕損じ玉ふな。關羽しづ〳〵と座を起て赤兎馬にひたと打のり、盔を卸で鞍にかけ、八十二斤の青龍刀を提て山を下りに驀地暗に蒐入ければ、河北の大軍その勢に當る者なく、香象の海を渡て波の開るが如、兩旁へ颯と分れて中を開て通しけり。顔良これを見て、彼は玄徳の弟關羽にては無かと思ひ、近く成て問んとしけるに、早關羽が馬つと馳來り、只一刀に斬て落す。河北の勢膽を冷し、旗を棄鼓を落して散々に走ければ、關羽馬より下て顔良が首を取、鞍の傍に拴付て亂れたる大勢の中をあだかも人なき處を行が如し。曹操これを見て進めや者共と下知すれば、張遼、許褚を先として、山を下りに斬てかゝる。河北の勢大將を討れ

れと呼はりければ、顔良兎角の問答にも及ばず、馬を交へて只一刀に斬て落す。曹操色を失ひ、誰か出て戰はんと云に、徐晃すゝみ出、某ねがはくは戰はんと云て、馬を打て顔良と二十餘合戰ひ、力疲て退きければ、諸軍みな震ひ怕れて進んとする者ぞなき。曹操も少し引退き、二人の大將を討れて心の内憂ひ苦む。程昱申けるは、某一人の大將を勸て顔良を退けん。曹操が曰、いかなる人ぞ。程昱が曰、關羽に非んば叶ふまじ。曹操が曰、關羽功を立ば囘り去んと云、われ是を以て患とす。程昱が曰、丞相この人を重く愛して又さほどに疑ひ玉ふならば、了に何の用にか立候はん、顔良は河北第一の猛將なり、關羽を召て戰はしめ、若打勝ばいよ／＼重く用ひ、若打まけば疑を決して棄玉へ。曹操尤と喜び、急に使を馳て關羽を招かしむ。關羽これを聞ていそぎ二夫人の前に到り、白馬の戰强して曹操急に某を招く、暫く御暇を乞て罷向んと申ければ、夫人申されけるは、將軍ゆき玉はば必ず皇叔の行衛を尋玉へ。關羽が曰、某が心專その事を思ふ故なり、近き内に御對面をさせ奉んとて靑龍の偃月刀を提け、赤兎馬に打のりて直に白馬に到りければ、曹操自ら起て迎へ、顔良が武勇敵する者なくして、二人の大將を討れたり、此に因て御邊を招くと云ければ、關羽先敵陣の樣を見んと望む。曹操酒を擕て山に登り、暫く見居たる處に斥候より報じて、顔良いま打て出たりと申す。諸人これを見れば、十

も計の大事を知ず、先陣を一人に任せらるゝこと然るべからずと云ければ、袁紹怒て曰、わが名將を汝等なにとて量り知ん、彼が軍するを口を閉て見物せよとて、大軍を進めて黎陽に到る。去ほどに東郡の太守劉延が方より、都へ早馬を立て袁紹せめ上ると告ければ、曹操大に驚て急に軍馬を集め、兵粮物の具を持搬で洛中の騒動斜ならず。關羽これを聞て曹操に見て申けるは、此度の合戰には某を以て先手とし玉へ、功を立て御恩を報じ候はん。曹操功を立ば彼が去ん事を怕れ、今度の戰は御邊を勞せしむるに及ばず、重ねて賴申んと謝しければ、關羽は家に回りけり。曹操十五萬の勢を起して三手にわけ、自ら五萬餘騎を率して白馬に到り、山に沿て陣を取、遙に敵の陣を見渡せば、渺々たる平野に顏良が先手の精兵十萬餘騎、陣勢を備てひかへたり。曹操心驚き、大將宋憲に向て、汝は呂布が猛將、人皆其名を知、馬を出して戰へかしと云ければ、宋憲欣然として馬にのり、槍を提て蒐出、日ごろ河北にて萬夫不當と呼るゝ顏良は何くに在ぞ、寄や勝負せんと呼はりければ、顏良きゝもあへず刀を舞して馬を交へ、戰三合ならざるに宋憲を一刀に斬て落す。曹操これを見て膽を冷し、あはれ大將かなと感じければ、魏續すゝみ出て申けるは、顏良すでに某が同伴を殺せり、願くは出て仇を報ん。曹操しかるべしと許しければ、魏續喜で馬にのり、長き矛を取て蒐出、大音あげて、汝いま首を失はん、早く降

を亡べし、今もし浩る廟勝の策を用ずして、成敗を一戰に決せんとし玉はば、若心に諧ざる事有ば悔るとも及ぶまじ。袁紹之を聞て心疑ひ、玄德に問て申けるは、田豐國を守るの計を勸む、如何んとか思ひ玉へる。玄德の曰、これ儒者の論なり、戰場に臨で身を輕んずる事を思はず、坐ら朝夕を送りて徒に祿を食ひ、無用の計を云て將軍に大義を天下に失はしめんとす。袁紹この義まことに我意に諧へりとて了に兵を起しければ、田豐又諍て諫む。袁紹怒て申けるは、汝文を重じて武を輕んず、無用の舌を動かして、我に大義を失はしむる事勿れ。田豐なほ諫て、若某が計を用ひ玉はずば、軍に出で玉ふとも利あるまじと云ければ、袁紹怒て斬て棄んと云。玄德命を乞て、大將を殺ん事、軍を出に不吉なりと申されければ、了に獄中に囚へ置しめ、檄文を作て曹操が惡を國中に觸知せ、軍勢を催促す。大將沮授は元來田豐と交深かりし故、彼が罪なくして獄に下れるを見て、世の中さてとや思けん、一門の親類を盡く集め、家の財物を分與て、永く訣を爲て申けるは、田豐は君を諫て獄に下る、我已事を得ず催促に從て曹操を伐、この軍千に一も利あるまじ、若幸にして利を得ば、勢必ず大に震ん、若打負事有ば、我身も如何なる死をせんも量がたしとて打泣ければ、淚を流ざる者は無りけり。袁紹すでに兵馬を整へ、顏良を先陣として白馬と云ところより攻かゝらせけるを、沮授諫めて、顏良は勇あれど

と云ければ、曹操も背て怒らず、長嘆して申けるは、事レ君不レ忘ニ其本一、これ眞に天下の義士なり、何か囘り去んと云ぞ。張遼が曰、必ず功を立て丞相の恩を報じ、那のちに去んと申候。曹操が曰、是眞に仁者の人なり。荀彧傍に在て此由を聞、さ候はば彼に功を立させぬ樣にして留め玉へ、彼功を立ぬ間は出去こと候まじと云ければ、曹操げにもとて彌厚く敬ひけり。此時玄德は冀州に在て袁紹を賴玉ひけるが、日夜憂悶て喜しき色見えざりければ、袁紹問て申けるは、御邊いかなる事の有て常に憂玉へるぞ。玄德の曰、二人の弟如何なりたるも音耗を聞ず、妻子又曹操が手に囚れ、又上國に報ずる事能はず、下家を保事能はず、爭か之を患ざらん。袁紹が曰、われ兵を起して都を攻んと思ふ事久し、今春の暖なるに及べり、早く攻のぼりて曹操を平ぐべし。田豐これを聞て諫て申けるは、曹操が徐州へ向へる時は、都の空虛なるに乘て速に攻上るべきに、今は徐州を平げて都に囘り、守りの勢嚴重なり、況や曹操が兵を用るこ と變化極り無して、計鬼神も測がたし、小勢なればとて輕んずべからず、不レ如久く守る計を成て、御方山川の要害を保ち、四州の兵を調練して、外英雄の士を招き內農耕を務て、屈强の兵を揀で奇兵とし、虛に乘て河南を攻、曹操右を救ふ時は其左を攻、左を救ふ時は其右を討、敵を奔走に疲して人民業を務ること能はざらしめば、力勞せずして彼困む、二年の內に坐ら曹操

は、我關羽を重んずること甚だ心を盡せり、然れども常に出去んとする心あり、如何して留べき。張遼が曰、某自ら行て靜に彼が意を探り見候はんとて、次の日關羽が館に到り、暫く世間の事を語て、我御邊を丞相に薦しが、今は心の落著たるかと問に、關羽申けるは、我甚だ曹丞相の重じ玉ふを感ずると云ども、只形は此に在て心は劉皇叔の所にあり。張遼が曰、御邊大に差れり、凡そ大丈夫の世に居、輕重を分たざるは丈夫に非ず、われ思ふに玄德の御邊を用ひ玉ふ事、必ず曹丞相に及ぶまじ、何とて常に囘り去んとし玉ふぞ。關羽が曰、われ能曹丞相の重んじ玉ふ恩を知る、いかゞせん劉皇叔の大恩を受て、曾て生死の交を誓しゆゑ背ことを爲べからず、了には此に留らじ、去ながら丞相の恩も捨がたければ、如何にもして然るべき働をなして功を立て恩を報じ、其後に囘るべし。張遼が曰、玄德もし此世に居玉はずんば、御邊いかゞし玉ふべき。關羽が曰、われ必ず地の底までも從はん。張遼いかに云どもその住る心なきを見て、退て外に出、暫思案しけるは、若この由を隱さず告ば、丞相怒て關羽を殺し玉ふこと有ん、若又かくして告ずんば、君に事ふる道に違ん、嗚呼丞相は君なれば父の如し、關羽は友なれば兄弟の如し、兄弟の情を以て父を欺は大なる不忠なり、寧不義に居とも不忠なることをせまじとて、直ちに曹操に見えて有の儘に語り、關羽元より玄德と生死の交を誓し故、了に留る心なし

糜夫人

甘夫人怪夢を糜夫人に語して哀哭す
甘夫人

を解て出候。曹操申けるは、然らば鬚を裹玉へとて、錦の嚢を與けり。次の日朝に出でける時、帝怪て、關羽が胷に嚢を垂たるは如何なる故ぞと御尋ありければ、關羽謹て奏しけるは、臣が鬚きはめて長し、丞相嚢を賜し故に如此包み候。帝乃ち殿上に召れ、嚢を解せて御覧あるに、鬚の長さ腹を過ければ、限なく打笑て眞の美髯公なりと宣ふ。此より諸人聞傳て、關羽を美髯公とぞ名付ける。曹操つねに何を與ても關羽が喜ぶこと無を患けるが、或日その回るを送て門外に出、馬の痩たるを見て申けるは、御邊の馬なにとて右は痩衰たるぞ。關羽が曰、某肥て身重く候ゆゑ、如何なる強き馬も痩候。曹操左右に命じて一匹の馬を引出させけるが、全身の毛火よりも赤く、眼は鑾鈴の如なり。御邊この馬を知りやと問に、關羽申けるは、呂布が乘たる赤兎馬にては候はぬか。曹操が曰、是なり、駿壯にして乘ものなし、御邊今より之に乘玉へとて、鞍を具て與へければ、關羽再拜して恩を謝す。曹操心の中怒て申けるは、汝さきに金銀美女を與へしに、御邊つひに再拜せず、又よろこべる色もなし、今この馬を與たれば再拜して喜ぶ、此なんぞ人を賤んじて畜類を貴べるぞ。關羽申けるは、某よく此馬は千里の駿足なるを知れり、今幸に下し賜る、若劉皇叔の行末を聞ば、假令遠しとも一日の間に此馬にて馳ゆかん、此ゆゑに深く喜候とて打のりて回りければ、曹操後悔して已ず。急ぎ張遼を召て申ける

て申けるは、此袍は曾て劉皇叔の所レ賜なり、此故に常に表被として、皇叔の面を見るが如くに存ずれば、暫ちも身を放ず、今丞相の新に給へる袍を以て、豈皇叔の舊き賜を忘んや、此に因て上に重ね候と云ければ、曹操も感心して、扨も忠義の人かなと、口には云ども心中には喜ず。關羽退き出ければ、一人走來て、二夫人いま大に哭て地に倒玉へり、將軍早く回り玉へと申。關羽いそぎ内門に入て何事の出來たると問に、甘夫人申されけるは、我昨夜劉皇叔の土坑の中に陷入玉ふと夢を見る、醒て糜夫人と議するに、今は此世に無人と成玉ふならん、此故に哭き哀めり。關羽が曰、それ夢は思より出て跡なきものなれば、一も之を信とせず、夫人つねに心に皇叔を慕ひ玉ふ故に、渇る夢を見玉へり、近き内に皇叔を尋て對面せさせ奉んと兎角に云なぐさめ、覺ず流レ涙退きけるに、折境曹操又使を以て酒宴に招きければ、相府に行て見えける。曹操その涙を含たるを見て如何なる故ぞと問に、關羽申けるは、二夫人劉皇叔を慕て日夜に哭く、某も哀て覺えず涙を流したり。曹操打笑て酒を勸め半酣に至ければ、關羽長き髯を手に握り嘆て申けるは、生て國家に報ずること能ず、兄弟昔の約に背く、渇る淺猿き事や有。曹操問て曰、御邊の髯は何ほどか有ぞ。關羽が曰、數百根あれども秋に至れば三五根ぬけ、冬に至れば彌多く拔候ゆゑ、斷んことを怕て極寒の時は囊を以て裹み、賓客なんどに逢時は囊

き由を勅せられければ、曹操乃ち偏將軍に任ず。關羽恩を謝して回りければ、曹操相府に酒宴を設て諸大將を集め、關羽を上座に請じて上賓の禮を以て樣々に持成、酒宴はてゝ回れば、使を立て綾錦百匹金銀の器を送る。關羽これを受て一も我身の用とせず、盡くに夫人に奉りければ、曹操いよ〳〵敬て、三日に小宴五日に大宴、馬に上ば金を與へ、馬より下れば銀を與へ、世に絕たる美女十人を擇で送りけれども、關羽みな二夫人の內門に給仕せしめ、金銀段匹は目錄を添て庫內に納め置、つねに三日每に內門に入て、二夫人の安否を問、少しも禮を缺ざりしかば、感嘆せずと云ものは無りけり。

○關羽白馬刺顏良

曹操箇樣に心を盡して重ずれども、關羽更に悅べる色なかりしかば、曹操ある日酒を勸て持成、御邊の被玉ふ綠錦の袍、あまりに舊く見ゆるに、之を被玉へと云て、長に合たる錦の袍を新に仕立て與へければ、關羽これを受て下被とし、舊き袍を其上に重て坐す。曹操笑て申けるは、御邊何とて物を儉約にし玉ふぞ。關羽が曰、某なんぞ儉約ならん。曹操申けるは、我は漢の大丞相なり、錦の袍に事を欠べきか、御邊いま舊き袍を上に被玉ふは、儉約に非や。關羽答へ

ゆかん、曹操は位すでに丞相に居て、一言を以て天下を治む、若いつはり有ば誰か服せん、定て某を止候はじ。甘夫人申されけるは、凡そ事われに問ず、但事の宜きに從て執行ひ玉へ。關羽心決し、數十騎を率して降りければ、曹操これを聞て諸大將を遠く出て迎へさせ、曹操轅門まで出ければ、關羽地上に拜伏す。曹操答禮して拜しければ、關羽申けるは、敗軍の將深く丞相不殺の恩を蒙る、豈答禮を受べけんや。曹操が曰、われ元より御邊の忠義を知、焉ぞ害を加ん、我は乃ち漢の丞相、御邊は乃ち漢の臣、官位等からずと云ども、御邊の德を敬ふ故なり。關羽が曰、張遼わが爲に三箇條の願を諾ふ、誠に丞相の大恩なり。曹操が曰、われ一言を以ても四海に感ぜしめんと欲す、安ぞ違背あらん。關羽が曰、もし玄德の在所をだに聞ば、火を踏水に入とも尋ゆかん、其時告ずして出去ん、丞相必ず怪玉ふな。曹操が曰、在所をだに知ば、早々に尋ゆき玉へ、但畏くは亂軍の中にて玄德は討死せられん、御邊よく心靜に聞玉へとて、酒宴を設て持なし、徐州の地面すでに平定しければ、次の日都へ上りけるに、關羽は二夫人を車にのせ、自ら守護して送ゆく。已に許都に至て諸軍こと〴〵く營寨に回り、關羽は居所を請取て一の家を分て兩院となし、二夫人の居玉ふ所は、内門に年老たる士卒十人を置て守しめ、其身は外門にぞ居たりける。曹操自ら關羽を伴て朝に出、漢の天子に見えしむるに、官を與べ

取圍だる勢を暫く退け玉へ、我城中に入、二夫人に見て此事を語り、那のち降るべし。張遼又山を下て、曹操に勢を退くることを語るに、曹操げにもとて卽時に下知を傳へ、諸軍皆圍を解て三十里退かしむ。荀彧諫て申けるは、未關羽の心根をも知ずして、圍を解こと然るべからず、必ず變を生ずべし。曹操が曰、關羽もし約を詐る人なれば、我箇程に慕ひ望ず、彼は忠義の心きはめて正き者なり、少しも變ずることは有まじとて盡く退かしむ。此に因て關羽山を下て下邳の城に入、軍民の平安なるを見て直ちに府中に到りければ、甘夫人糜夫人内より走り出、淚を流して先玄德の行衞を問玉ふ。關羽階下に拜して申けるは、皇叔小沛に敗玉ひて後は、今に至るまで消息を聞かず、某敵を逐拂ん爲に城を出て戰ひしに、山の上に圍れて、小勢なれば力及ばず、張遼と申もの昔の好を以て降參をすゝむ、某此の如く三箇條の願を望候ひしに、曹操みな許諾す、二夫人の御心を問て、彌この事を決し候はん。甘夫人申されけるは、昨日この城やぶれて曹操すでに攻入しかば、定めて我を殺やせんと思ひしに、思の外に門に番を付て、妄に人を入しめず、將軍いかにも事を料ひ玉へ、只將軍もし曹操に從はば、皇叔を尋ること能まじきを怕るゝ也。關羽が曰、この事少しも御心を苦め玉ふな、某有て在ば、了には皇叔に對面をせさせ奉るべし、某命を恙なくして、もし御在所をだに承らば、飛が如に馳

奴婢等に至るまで、玄徳の給が如く渡し玉へ、又みだりに人を内へ入しむべからず、三には、我もし劉皇叔の行衛をだに知ば、千里萬里を云ず、丞相に告るに及ばず忽ちに出去ん、此三の願もし一も相違せば、我こゝにて命を弃ん、御邊早く問て回報せよ。張遼これを聞て馬を飛して山を下り、曹操に逢て右の趣を語り、彼三箇條の願あり、之をだに御同心候はば、盔を脱で降んと申す、一には、漢の天子に降て丞相に降らず。曹操笑て申けるは、此願は許すべし、われ漢の丞相なれば漢は乃ち我なり、何のわかちか有ん。張遼又申けるは、二には、玄徳の夫人あり、俸祿奴婢の類その外の用物みな玄徳の給が如く、妄に人を門内へ入しむべからず。曹操が曰、これも極めて易き事也、玄徳が給しに一倍して與ふべし。張遼が曰、彼もし玄德の行衛をだに知ば、遠と云ども丞相に告ずして出去ん。曹操この時頭を掉て申しけるは、いかでか、此願は諾まじ、我關羽を望は何の爲ぞ、長く御方に爲て物の用に立ん爲なり。張遼が曰、丞相古の豫讓が衆人國士の論を聞玉はずや、玄德が關羽を養こと、只厚く恩を施ばかり也、丞相又この者を愛して深く恩徳を與へ、其心を結び玉はば、關羽豈丞相を棄んや。曹操げにもと喜て申けるは、汝よくも論じたり、我三の願を諾べし、早々に降らしめよ。張遼命を承、いそぎ山に上て右の由を語るに、關羽申けるは、我意は如此なれども、二夫人の御心を量がたし、先

の計なりとす、御邊もし討死し玉はば、妻子一族依ところ無らん、此御邊倚托の重に負て、實は不義なり、其罪二つ也、御邊は武藝人に勝れて、更に經史に能通ぜり、玄德と力を協せ、漢の天下を扶て萬民を救ふことを思はず、血氣の勇を成て徒に討死し、上祖宗に背き下その主を辱しむ、安んぞ義たることを得ん、其罪三なり、如此なる三の罪あり、我なんぞ告ざらん。關羽理に責られ、暫く思案して申けるは、御邊わが三の罪を說、いかゞして此罪を免れしめん。張遼が曰、いま四面こと〴〵く曹丞相の勢なり、御邊もし降參せまじとの心ならば、必ず討死せん、もし然らずんば且く曹丞相に降り、玄德の消息を聞定て其のちに去玉へ、是一には玄德の預け玉へる妻子を守り、二には其義を完し、三には其身に恙なからん、能々心に思ひ玉へ。關羽が曰、御邊三の便を云、われ又三の願あり、曹丞相もし此願を諧へば、我甲を卸で山を下らん、若又かなふまじきとならば、我たとひ三の罪を受けて天下の人に笑はるとも、快く此處にて打死すべし。張遼が曰、曹丞相は寬洪の大度ありて、廣きこと海の如し、何事か容ざらん、早々に告玉へ。關羽が曰、一つには、我むかし劉皇叔と誓し時、共に漢を扶て天下を中興せんと約せり、今われ漢に降て曹操に降らず、凡そ人を誅戮すること、丞相の命を受ずして心の儘に行ふべし、二には、劉皇叔の夫人二人あり、俸祿その外一切の用物、上下の

かば、卽ち立向て、御邊こゝに來るは我に敵せん爲かと問ふに、張遼が曰、然ず、故人昔の情を思ひ、申べき事ありて來りたりとて、刀を投棄て馬より下ければ、關羽が曰、しからば我に降參を勸ん爲か。張遼が曰、然らず、御邊むかし我を救玉へり、今われ何ぞ御邊を救ざらん。關羽が曰、御邊さては我力を扶ん爲か。張遼が曰、然ず。關羽が曰、しかる時は何の爲ぞ。張遼申けるは、玄德、張飛共に存亡を知ず、盡く沒落せり、曹丞相昨夜すでに下邳城を破て一人も軍民を害せず、玄德の妻子一族には別に家を與て入置、門外に守を居て、妄に入ものあれば立どころに誅し玉ふ、我この由を告ん爲に來りたり。關羽怒て申けるは、是御邊われに降參を勸るに非や、我いま此絕地に居と云ども、死を見ること元に歸るが如し、露ばかりも命を惜ず、汝早々に退け、我山を下て快く戰はん。張遼あざ笑て申けるは、御邊の言の如くならば、必ず千載の物笑と成ん。關羽が曰、われ忠義を完して討死せんに、誰か笑ふ者あらん。張遼が曰、若此處にて討死し玉ふ時は、御邊大なる罪三つ有。關羽が曰、御邊試に云、聞かん。張遼が曰、昔し御邊は桃園に義を結て生死を同うせんと誓へり、玄德近ごろ小沛に敗れて、行方なく成玉ふ、御邊もし此處に打死して、玄德又出玉はゞ專ら御邊を慕玉はん、此孤主に背て又桃園の誓に違ふ、主を誤り身を喪ふ、其罪一つ也、往日玄德妻子一族を御邊に托して、萬全

に罵り辱しめければ、關羽大に怒り、三千餘騎を引て打て出、十合あまり戰ひければ、夏侯惇いつはり負て且戰ひ且走る。關羽勝に乘て二十里ばかり追けるが、屹と心付て急に引囘さんとすれば、左に徐晃、右に許褚二手の勢路を塞ぐ。關羽事ともせず蹴やぶりて通るに、伏の勢潮の如に起り、弩を放こと雨の如し。關羽これにも怕れず、自ら眞先に進て圍を開に、許褚中央に在て弩百張をつるべ放つ。其箭蝗の飛が如にして楯も甲もたまらねば、關羽さすがに過ることを得ずして又跡へ引退を、徐晃、許褚追かけしかば、關羽取て反して攻戰ふ。二人力疲て退けば、夏侯惇入かはりて相さゝへ、生手を入かへ〳〵戰ひければ、日すでに暮る迄關羽城中へ囘ること能はず、傍なる小山に打あがりて暫く息やすめければ、曹操が大軍その麓を圍だること團々として鐵桶の如く、半は下邳の城を攻て、一順一逆長蛇の陣を開き張。兼て城中へ入おきたる一揆の勢共、時分よきぞとてひし〳〵と聚り、合圖の火を擧て門を開きければ、曹操兵を驅て卽時に城を登とり、夥く火を擧て關羽が心を惑はしむ。關羽は山の頂に在りて、城中に火を掛たるを望見て大に驚き、終夜斬て下んとすれども皆亂箭に射囘され、人馬ことごとく瘡を被りて、曉に至るまで進ことを得ざりしかば、今は偏に討死と定め、快く一軍せんとて、又山を下んとする所に、麓より只一騎鞭を加て上る者あり。關羽これを見るに張遼なりし

て申けるは、關羽は忠義の志きはめて深き者なれば、如何に思し食るとも降ることは候まじ、若かる〱數人を遣して利害を說しめば、反て其禍に逢ん、先兵を進めて城を圍み、事急なるに至らば萬一も降ること有ん。張遼申けるは、某は關羽と一面の交あり、願くは行て降らしめん。程昱が曰、御邊たとひ交ありとも、我よく關羽を測に、中々詞を以て動し難からん、若關羽が進退きはまりたる時に、御邊ゆいて說玉はば、我計を用ひて降らしめん。曹操問て曰、いかなる計ぞ。程昱が曰、關羽は萬夫不當の勇ありて、特に玄德と兄弟生死の約を誓て、信義きはめて深き者なり、智謀を用ひずんば勝こと克じ、今玄德が兵多く御方に降れり、此者共に計を敎て、小沛の城より敵に追れたる勢の如くに見せて、下邳の城へ入しめば、關羽これを御方なりと知て疑ふまじ、箇樣に禍を城中に種置て、關羽が外へ打て出たる時、御方の者共は只いつはり負て遙々と引出し、密に精兵を以て其回る路を横きり、急に内外より揉あはせて城を乘とり、其後には生取んとも降參を說んとも、思ふ儘に料ふべし。曹操かぎりなく喜び、物馴たる兵十餘人に計を云ふくめ、降參の勢數十人が中に混て下邳の城に遣し、徐州小沛の敗軍、曹操に追れて逃きたれりと云せければ、關羽たばかるとは夢にも知ず、扮もなき御方の勢なればとて、城中に住め置けり。其次の日夏侯惇五千餘騎を率して直ちに壕の邊まで押よせ、散々

へと謝せられければ、袁紹作て冀州に回り、敬ひ尊で無二の氣色にぞ見えたりける。

○張遼義説ニ關羽一

曹操すでに小沛の城を攻落して、直ちに徐州へ推寄るに、糜竺、簡雍ふせぐこと能ず、城を棄て落ゆきければ、陳登内より門を開て曹操を引入けり。曹操城中に入て陳珪、陳登を召出し、適に車冑を殺せる罪を責て、若この城を治て百姓を安堵せしめば、前日の罪を全く恕さんと云。これに因て二人力を悉して百姓を撫安じければ、城の内事ゆゑなく靜りて、上下みな安堵の思をなせり。今は關羽が妻子老小を預りて、僅に籠たる下邳の城ばかり殘りたれば、此を破んことは掌の内にありとて、曹操喜悦の眉を開き、早く攻べしと議するに、荀彧申けるは、關羽は尋常の敵にあらず、計速に攻るにあり、若遲き時は袁紹に襲れん。曹操が曰、速に攻るには如何なる計を用ふべきぞ。荀彧申けるは、丞相は徐州に本陣を居られ、一手の勢を下邳城へ指向て、誘て關羽を城外へ引出し、密に大軍を以て其際を取きり、急に城を攻落さば、關羽足を止むべき處なくて、自ら擒とならん。曹操が曰、われ本より關羽が男つき人に秀て武藝三軍に冠たるを愛す、何とぞ此者を御方になさば、我なんの思ふことか有ん。郭嘉すゝみ出

引て小沛の城へ回んとし玉へば、敵はや城を攻取て火を掛たり。徐州の城へや入んとて、河を阻て見玉ふに、曹操が旗を打立て、限なき人馬野に盈山に漫れり。玄德かへるべき路なく、如何せんと案じ煩ひ玉ひしが、袁紹が若戰に打負なば冀州へ來れ、佐んと云しことを屹と思ひ出し、青州の路を志して走り玉ふに、樂進兵を驅て引包で討んとす。玄德なじかは擬議すべき、馬を打て蒐とほり、北を望て走り玉へば、相從ふ勢次第に亡て、後には只一騎になり、此日數箇所の敵陣を遁れ出、三百里の路を馳て、暮に及で青州の城下に著玉ふ。番の者共その名を問て、急に城主に報じければ、此城には兼て袁紹が嫡子袁譚守り居けるゆゑ、急に迎へ入て事の仔細を問。玄德右の趣を語り、城を破られ妻子を棄て此處に遁れ來り、偏に安身を賴み奉ると申されければ、袁譚謹で禮待し、旅館を點して父の方へ注進す。袁紹この由を聞て、自ら五萬餘騎を率し半途まで出て、玄德を冀州の城へ入奉るべしと下知しければ、袁譚自ら玄德を送て平原の境に到る。袁紹三十里出て相待ければ、玄德地に拜伏して見えらる。袁紹も答禮して申けるは、先日小兒の疾に因て、救の勢を興こと能ず、今日幸に相見して平生の望を達することを得たり、御心を安じて此處に御入候へ、共に力を戮せて曹操を誅すべし。玄德喜に堪ず、孤窮の某曹操に攻られ、妻子を捐て慚を顧ず、來て將軍の門下に投ず、願くは憐を垂玉

玄德
玄德馬を返して青州へ奔る

假に陣屋を構へ、其外の大勢を八方に伏置て、今や來ると待懸たり。玄德は曹操が勢の進み近付て陣屋を造る由を聞、その夜月の光明なりければ、孫乾を留めて小沛の城を守せ、自ら兵を二手にわけ、張飛と左右に備て押寄玉ふ。張飛は神妙の計なりと心勇で驀地暗に蒐入けるに、俄に零々落々として四方より火燒出、喊の聲地を動して、限なき人馬打て出たり。扨は敵の計ありとて、急に引て退んとすれば、東の方より張遼、西の方より許褚、南の方より于禁、北の方より李典、東南より徐晃、西南より樂進、東北より夏侯惇、西北より夏侯淵、八方の勢二十餘萬、わづかなる張飛が勢を、團々として百千重に取かこむ。張飛命を棄て散々に戰ひ、左に撞右に突ても出ることを得ず、結句わが手下の兵共も、元來都より從ひ來れる曹操が勢なれば、事の危を見て我さきにと降人になり、反て後より攻たりける。張飛いよ／＼力を失ひ、徐晃と十合あまり戰ふ所に、又後より樂進斬てかゝりければ、今は遁れぬ所と思ひ、斬ども射れども顧ず、平討に進んで一方を打やぶり、つと圍を出て御方を見るに、十騎ばかりに成ければ、小沛へ回るべき路もなくて、芒蕩山へ迯去けり。玄德は左に備て寄られしが、敵陣へ攻入んとする時、喊の聲しきりに響て、大軍うしろを取卷ければ、急に退かんとするに、向より夏侯惇打てかゝり、後より夏侯淵追かくる。玄德しばし支て戰ひ、只三十騎ばかりに打なされ、

で小沛の城に回り、右の趣を語りければ、玄德周章して如何せんと議し玉ふ。張飛すゝみ出て申けるは、少しも憂ることなし、某奇妙なる計を以て曹操を打やぶらん、彼が勢この處へ來りなば、皆遠路に疲て四五日は物の用に立まじ、御方この利に乘て火急に推よせ、敵に足を踏させず、陣場の要害いまだ調はざるに乘て、不意に攻る者ならば、一戰して功を成ん。玄德手を拍て限なく喜び、我つねに汝を血氣の勇者なりと思しに、前には好計を用ひて劉岱を生捕、今又浩る不思議の計を申出す、汝も亦よく兵法を用ふ、甚だ好く〳〵、曹操が大勢この處へ來らば、汝が計を用ひて急に逆寄にし、一夜討して敵に膽を剉させんとて、人馬を調て待玉ふ。曹操二十萬の大軍を推て、漸く小沛の界に近付けるに、俄に狂風一通吹て、眞先に立たる一面の牙旗を吹折ければ、暫く馬を留め、自ら吉凶を占て試に諸大將の意見を問に、荀彧申けるは、風は何方より吹て又いかなる色の旗を折たるぞ。曹操が曰、風は東南の方より吹て、角上の青く紅なる旗を折たり。荀彧申けるは、此は別の兆に非、今宵敵の夜討に來るを天より告玉ふ者也。曹操げにもとて打諾ところに、毛玠走り來て申けるは、適に東の方より風吹て、立たる旗を折たるは、今夜敵軍逆寄に來る兆なり、御用心なくては叶まじ。曹操が曰、天すでに警玉ふ、我なんぞ備を成ざらんとて、二十萬の勢を九にわけ、僅なる一軍を面に立て

田豐その故を問に、袁紹が曰、わが命すでに危し、旦夕も料がたし、豈他事を議するに暇あらんや。田豐駭て申けるは、何事の出來て左樣の事を仰候ぞ。袁紹が曰、われ多く子を持たれども、第五男ばかり幼と云ども心に協へり、其餘は悉く不肖なり、此ごろ第五の子、疥瘡を病で已に危し、我これを憐で老の命も賴少く思ふ也、兵を起さんことは思ひも寄ず、我身さへ如此、なんぞ他人を救ことを得ん。田豐申けるは、只今曹操大軍を率て徐州に向ふ、此に因て都の內には守る勢もなし、君もし義兵を起し、虛に乘つて攻上り玉はゞ、上は天子を扶け、下は萬民を救て、誠に四海の大幸たらん、諺に天の與るを取ざれば、反て其咎を受と云り、願くは能察し玉へ。袁紹申けるは、我も亦汝が計の好を知れり、如何せん心の中なにとやらん恍惚として進む氣なし、假令强て打起とも利あるまじ。田豐が曰、何ゆゑに御心の進み候はぬぞ。袁紹が曰、わが子共の多中に、此子ばかりを常に愛す、萬一疎にして病痊ずんば、悔るとも及ぶまじ、孫乾は徐州へ回りて此由を玄德に語り、若敵に攻られて打負玉はゞ、必ず我國へ來り玉へ、力を盡して助まゐらせんと申さるべしと云て、了に內へ入ければ、田豐杖を以て地を撃、長嘆して申けるは、惜べし哀べし、渇る遇がたき時節に至り、小兒の僅なる病に因て兵を起こと能ず、大事去り、痛哉惜哉とて外に出ければ、孫乾事の諧ざるを見て、夜を日に繼

急に攻て滅すべし、袁紹は四箇國を保て志大なれども、心に疑多して、事を決すること能はず、豈かる〴〵しく都へ攻のぼるべきや。荀彧が曰、袁紹は不才なれども、手下に田豐、沮授、審配、郭圖、許攸、逢紀なんど云大將は、皆これ人に超たる智謀ある者なり、袁紹もし此者共が計を用ひば、禍必ず大ならん。曹操これを聞て如何せんと煩ふ處へ、郭嘉出來りければ、乃ち問て曰、われ東國に向て玄德を伐んと思へども、袁紹が虛にのりて都を攻めんことを怕る、汝いかなる計かある。郭嘉が曰、袁紹は性遲して疑多く、事を論じて決すること能はず、手下の大將たがひに妬み忌で計調はず、何ぞ是を怕玉ふぞ、玄德は徐州に在て新に人馬を集と云へども、人の心いまだ服せず、丞相もし攻玉はば、一戰して打やぶらん、早々に兵を催して先玄德を平げ玉へ。曹操かぎり無よろこび、汝が申ところ能わが意に協へりとて、即時に二十萬の勢を興し、五手に分て徐州へぞ向ひける。此由さき達て徐州へ聞えければ、孫乾いそぎ下邳城へ行て關羽に知せ、次の日小沛の城に入て玄德に報ず。玄德大に驚き、如何せんと議せられけるに、孫乾申けるは、河北へ使を馳て袁紹に救を求め玉へ。玄德これに從ひ、書簡を封じて即ち孫乾を使とし玉ふ。孫乾夜を日に續で冀州へ下り、先田豐に逢て事の由を告ければ、田豐次の日引て袁紹に見えしむ。袁紹なにとかしたりけん、衣冠をも整へず、形容憔悴して出ければ、

たる者、わが命を受ずして内に入もの有ば、誰にても立所に斬ころせ、汝等もし守ること嚴からずんば、同罪に行ふべきぞとて、日比董承と往來せし者を、逆黨と號して誅しければ、科なくして殺さるゝ者數を知ず。此より大小の官人一人も耳を傾けて言ひ語るを得ず。曹操又物馴たる兵三千人を擇で御林の軍とし、曹洪を大將に定めて、常に内裏を守らしむ。

○玄德匹馬奔二冀州一

去ほどに曹操は、董承等千餘人を誅して内裏より歸り、荀彧を召て申けるは、董承等すでに滅たれども、馬騰と玄德と猶陰謀の數にあり、如何して伐べきぞ。荀彧答て申けるは、馬騰いま西涼州に兵を屯す、輕々しくは平げ難からん、只書簡を送て交を結び、彼が心を安んじて緩緩と計を運し、都へ召上せて欺て殺し玉へ、玄德は徐州の城に在て猗角の勢を張、これ又容易には攻べからず。曹操が曰、しかる時は如何せん。荀彧申けるは、今丞相と天下を爭ふ者は河北の袁紹なり、兵を官渡に屯して、常に都を攻んと志す、丞相一旦もし遠く出玉ひて、袁紹虚にのりて都を襲ば、何を以て防玉ふべきぞ。曹操が曰、いやく玄德は人傑の才なり、今平げずんば後いよく大に成て、如何んとも爲べき樣なからん、その勢なほ微なるに乘つて、

董承等が謀叛を陛下知し食れて候か。帝答て宣く、董卓は已にほろびたり。曹操聲を勵して申けるは、董卓にては候はず、車騎將軍董承が事なり。帝哭き怕れて宣ひけるは、朕曾て此事を知ず。曹操が曰、自ら指を破て血詔を書玉ひしを忘玉へるか。帝魂天外に飛で御顏土の色の如く、默然として御座ありければ、曹操武士に命じて董貴妃を取て引ふせ、一人謀叛すれば九族ことごとく滅ぶ、引出して殺せと下知すれば、帝哀で宣ひけるは、董貴妃子を孕で已に五月に及ぶ、丞相ねがはくは之を憐め。曹操眼を怒して申けるは、若天より我を佐るに非ば、わが九族みな滅ん、然るに此女を留て後の患を遺んや。董貴妃泣て申けるは、われ胎内に御子を妊り、この子を生落さん迄は、我を冷官に貶し置て、那後は如何にもし玉へ。曹操頭を掉て申けるは、汝逆賊の種を遺して、母の讐を報しめん爲か、叶まじく〳〵。帝御涙を押て宣ひけるは、丞相もし彼を殺さば、願くは屍を全うして殺せ、必ず見苦しき目を見せしむること勿れ。曹操乃ち練帛を取よせ、早く勒ころせと下知をなせば、帝あまりの爲方なさに、流るゝ御涙を押のごはせ玉ひ、董貴妃に向て、汝九泉の下に于て、必朕を怨なと宣へば、曹操怒て起あがり、汝なほ女童の如くに餘波を惜かと云て、急に武士を下知して宮門の外に引出させ、練帛にて勒死しけることそうたてけれ。那後宮門の番衆を召よせ、法を出して申けるは、今よりして天子の外戚内族

王子服等すでに捉られて皆白狀分明なり、汝なほ服せぬか。董承が曰、何とて浩る實なきことを誣玉ふぞ。曹操怒て了に董承を縛らせ、兵共を打入て家内を遍く探させければ、須臾にして衣帶の血詔并に義狀を取出せり。曹操これを見て、鼠の輩何とて如此なる、一家の男女を一人も逃すなとて悉く囚させ、府中に回て諸大將を集め、血詔を見せしむるに、荀彧が曰、丞相この事を如何せんと思し食候ぞ。曹操申けるは、我よく思ふに、誅二其君一而弔二其民一と云る先言に從ひ、天子をも殺して別に德ある人を君とすべし。荀彧申けるは、丞相の威名四海に震て能天下を從へ玉ふは、是漢の天子の勅命と云を以て、征伐名あり、賞罰制あり、古今の議論を絕もの也、いま若天子を殺さば、何を以てか天下を治めん。曹操が曰、汝が高論まことに當れり、我いかりを押て之に從ひ、天子を宥して董承等五人の一族を市に誅し、謀叛の罪を正と云て、明に天子に示さん。荀彧が曰、事すでに此に至れり、彼等は一人も宥がたし。曹操心つひに決り、董承、王子服等五人の一族男女七百餘人を捉へ、次の日都の中を引わたして盡く誅しければ、人民涙を流さぬは無りけり。董承が女董貴妃は、美人の譽ありて天子に幸せられ、已に懷姙して五月に及べり。此日帝は伏皇后、董貴妃と、宮中にて密に董承が事を議して御座ありしに、忽ち曹操劍を帶て出來りければ、帝胸打さわぎ、頻に怖れ戰玉ふ。曹操問て申けるは、

ば、曹操又吉平に向て申けるは、誰か汝に毒を用ひさせたる。吉平が曰、その人こそ有。曹操が曰、早々に告よ、汝が一命を扶けん。吉平が曰、天より我に命じて、逆賊に毒を進めさせ玉ふ。曹操大に怒り、それ責よと下知すれば、獄卒棍を執て散々に撃たるに、後には全身やぶれ損じて打べき様も無りけり。此を見ける董承が心、恰も刀を以て胸を割様にぞ覺ける。曹操問て曰、汝が手の指一つ不足は何ゆゑぞ。吉平が曰、悪逆の曹操を討んとて、指を咬切て誓を爲り。曹操獄卒に命じて吉平が左右の指を悉く切落させ、汝さほどの誓に一つにては不足ならん、今は必ず厭足べしと云ければ、吉平申けるは、我口あり賊を呑べし、舌あり賊を斬べし。曹操又獄卒に命じて舌を抜と云ければ、吉平が曰、わが舌を抜こと勿れ、只今明に白状せん。曹操が曰、しからば必ず命を扶ん。吉平が曰、汝暫く我縄を解、自ら本人を捉て獻らん。曹操くるしかるまじとて縄を解せければ、吉平内裏を望て再拜し、臣不幸にして國の爲に此逆賊を殺こと能はず、天運時至らざる故なりと云も果ず、我と頭を堦に投つけ、碎てぞ死だりける。曹操後悔して屍を寸々に割裂せ、秦慶童を引出して董承に此人を知りやと問に、董承怒て、走たる奴こゝに居かと云て斬んとするを、曹操申けるは、必ず手も指玉ふな、此者訴人に出て我に知せたり。董承申けるは、丞相なにとて走たる奴の言を信じて、某を疑ひ玉ふぞ。曹操が曰、

べからず。曹操が曰、吉平を以て我に毒を進る計、董承が所爲に非して誰ならん。王子服なほ知ずと云ければ、曹操が曰、今宵もし白狀せば、汝等が一命を饒ん、事外より露れなば、必ず難儀に至るべし、早々に白狀せよ。王子服等努々この事知ずと云ければ、曹操大に怒り、武士に命じて先四人を獄に下す。

○曹操勒ㇾ殺董貴妃ㇾ

次の日曹操千餘騎を率して自ら董承が家に行、對面して問て申けるは、昨日百官を招て酒宴をせしに、御邊一人來り玉はざるは如何なる故ぞ。董承答て曰、疾いまだ快からざるに因て、輕しくは外に出ず。曹操あざ笑ひ、御邊の疾は天下の疾ならんと云ければ、董承色を失て震ひ怖る。曹操平坐して申けるは、御邊この間太醫吉平に逢玉ひしか。董承が曰、この間久しく逢ず。曹操左右の者に命じて件の者を出せと云に、三十餘人の獄卒吉平を引て堦の下に居ければ、吉平大音あげて、曹操君を欺く逆賊、天罰を蒙んと詈る。曹操申けるは、我この者を拷問するに、王子服、吳子蘭、吳碩、种輯四人を指、この故に盡く捕て廷尉に下す、此外に又一人あり、尚いまた捕得ず、御邊誰にて有んと思玉ふぞ。董承恐れ入て手足の措を知ず、默然として居けれ

出せ、必ず汝を宥べし。吉平叫で申けるは、汝が意王莽に超、姦佞なること董卓に過たり、天下みな汝を殺んことを願ふ、我豈一人此の如ならんや。曹操大に怒り、初は七人、汝を加へて八人ならんと云ければ、王子服等四人、これを聞て互に面を見あはせ、針の毡に坐する心地して、膽魂も身に沿ず。曹操獄卒を下知して、強く責ては水を澆せ、絶入こと數度に及しかども、全く畏るゝ氣色なかりしかば、先その責を止させ、坐を起て内に入、使者を以て、百官みな御回り候へ、王子服、吳子蘭、种輯、吳碩四人は、其まゝ遺留り玉へ、夜宴を設て持成んと云ければ、百官こと〲く回れども、四人は跡に逗り、魂も大に飛、ふるひ戰てぞ居たりける。良ありて曹操出て問て申けるは、御邊達を留ること別事に非、四人ひそかに董承が家に聚て、何事をか巧玉ひしぞ。王子服が曰、われ等なに事をか巧べき、只よの常の物語をせり。曹操が曰、絹に書たりしは何事ぞ。王子服が曰、この事曾て知ず。曹操申けるは、御邊知ずと云ば知さで打置べきか、事の仔細を明白に知たる者あり、對面させ申んとて、件の秦慶童を呼出しければ、王子服驚て申けるは、汝なにとて斯に來れる。秦慶童が曰、汝等いつはること勿れ、六人一處に在て義狀に名字を書たること、我明に好知り。王子服申けるは、此者は董承が妾に密通して痛く責を被り、私に逃れ出て主を讒言し、有もあらぬ事を丞相に訴ふ、必ず信じ玉ふ

るは、量に汝は醫者の身にてわが門に出入す、必ず他人の勸に因て、我を害せんと巧なるべし、其本人をだに指出さば、汝が命を扶べし。吉平叱て申けるは、汝は君を欺き上を僭せる逆賊なり、天下の人こと〴〵く汝が肉を啖んことを欲す、なんぞ我一人のみ成ん。曹操再三本人を聞んと云ければ、吉平怒て曰、われ汝を殺ん爲に、今まで汝に從へり、安んぞ他人の勸に依ん、今事すでに露る、只死ぬる斗なり。曹操大に怒り、獄卒を下知して痛く撃せけれども、吉平少しも叫ず、已に二時あまり責ければ、皮肉やぶれ裂、血ながれて泉の如し。曹操打殺しては悪かりなんと思ひ、しばらく責を閣き、次の日群臣に酒宴を勸んとて招きければ、董承一人病と號して來らず。王子服等四人は、疑はれんことを畏れて百官と一同に來れり。曹操後堂にて樣樣に持なし、半酣に至て申けるは、今日の座席あまりに無興候ほどに、旁の爲に一笑を催し、酒の醉さまさせ申んとて、例の者ひき來れと云ければ、二十人の獄卒共吉平に頸枷を入て、堦の下に拽居たり。曹操申けるは、百官この者を知玉へるか、悪黨に心を合せ、朝廷に叛て我を殺んと巧しが、天より告玉ひて我に此の如く囚れたり、只今こゝにて彼が白狀を聞玉へとて、獄卒に命じて散々に打せければ、吉平昏絶して息消けるを、水を顏に澆たれば忽ち生出、眼を怒らし牙を嚼で、曹賊われを殺さずして何をか待ぞと罵る。曹操が曰、苦しくば早く本人を指

やぶりて誓を成したるも怪き事にて候ひしと云ければ、曹操大に駭き、汝よくも此事を知せたり、他日の恩賞その望に任べしと云て、府中に藏しおきけり。董承は浩る事とは夢にも知ず、奴は定めて他國へ逃去ぬらんと思て、曾て僉議をもせざりける、天運の程こそ淺猿けれ。次の日曹操にはかに頭風發りたると沙汰して吉平を召よせ、例の如く藥を調へしむるに、吉平仕すましたりと思ひ、毒藥を懷に入、いそぎ府中に行て見れば、曹操牀の上に平臥せり。吉平自ら毒藥を煎じ、定めて一服にて痊申さんとて器に入て捧ければ、曹操毒なりと知て肯て飲ず。吉平あつき内に早く飲玉へ、少し汗出て立所に快らんと云ければ、曹操が曰、汝は元より儒書を讀、さだめて禮義を知ぬことは有まじ。吉平申けるは、人として豈禮義を知ざる者候はんや。曹操が曰、君疾ある時は臣必ず藥を試み、父疾ある時は子必ず藥を試む、此古今定まれる禮義なり、汝なんぞ此藥を先試て進ざるぞ。吉平これを聞て色を失ひ、此まことの藥なり、何の試ること候はんと云けるが、心中すでに計の洩たるを省ければ、急に曹操が耳を摑で毒藥を灌んとするに、推倒されて起んとするを、諸人馳あつまりて縛けり。曹操申けるは、我さらに病なし、汝を試ん爲に詐て如此とて、強く壯なる獄卒二十人を摘で吉平を後園に拖出させ、倒に縛て拷問すれども、吉平肯て怕るゝ色なく顏なほ常の如し。曹操亭上に坐して笑て申け

平自ら指を咬やぶり、血を出して誓をなしければ、董承さては詐ならずとて、衣帯の血詔を見せて申けるは、我すでに與力の人々を語うて計を運ところに、玄德、馬騰都の内を出たれば、施べき計なくして日夜案じ煩ふ故に、如此氣の病と成り。吉平申けるは、兎角計を運し武具を動ことを用ひず、曹操を殺こと某が手の中にあり。董承が曰、いかなる故ぞ。吉平申けるは、曹操つねに頭風を病、もし起る時は其痛骨髓に入、いつも某を召て藥を調へしむ、若如此なること有ば、一服の毒藥を用て立どころに殺さん、何ぞ兵を催し刀を舞ことを用べき。董承が曰、もし然る時は、漢の天下を中興すること御邊一人の功ならん。吉平が曰、御心を安じて待玉へ、彼が病の發る時、忽ちに殺して天下の殃を除んとて、相別て歸りけり。董承心の中限なく喜、起て後堂へ入たるに、奴の秦慶童、ほの暗ところにて雲英と云る妾と私に低語て居ければ、大に怒て秦慶童を殺んとす。夫人哀んで命を乞ければ、脊を四十棍打て、一間なる處へ押入けるに、秦慶童痛く打れたるため、恨で夜中に鎖を扭きり、塀を踰て直ちに丞相の府にゆき、一大事を訴んと云ければ、曹操靜なる處に召て自ら尋ね問に、秦慶童申けるは、此日比、王子服、呉子蘭、种輯、呉碩等、ひそかに董承が家に聚りて事を議するは、必ず丞相を殺し奉んとの巧ならん、董承又絹を六尺きりて、人々の名字を書たるをも觀たり、近ごろ太醫吉平が、指を咬

ひとしく來て、事すでに成就せり、面々よろこび玉へと云。董承その故を問に、王子服申けるは、荊州の劉表、河北の袁紹と好を結び、五十萬の勢を興す、西涼州の馬騰も并州の韓遂と心を戮せて、七十萬の勢を起す、共に日を定めて直ちに都へ攻上る、曹操これを怕れ、兵を分て諸方の寄手を防んとす、此故に都の内無勢なり、我等五人の手の者を集めば、千餘人は必ず有ん、今宵は曹操府中に酒宴して上元の賀をなす、此天の與る時節なり、急に押よせ取圍で殺べし。董承大に喜び、手の者共を驅あつめ武具を調へ、自ら槍を提て馬にのり、内門に勢を調て、已に二更の鼓をうつ時、直ちに府中へ攻入、曹操が後堂にて酒宴をするを見て、大音聲を揚て、逆賊曹操にぐることなかれと罵り、劍を拔て斬けるに、曹操が頸地に落ると思へば、俄に睡さめて春の夜の夢なりけり。口なほ曹操を罵て已ざりければ、一人前に來て、御邊は曹操を殺んとするかと云。董承胷打騒ぎ、被を卸で見れば吉平なり。遍身に汗を流してわな〳〵と震ひければ、吉平申けるは、今は某をさのみ畏玉ふな、某は曹操が恩顧の者なれども、心の中なほ漢を忘す、日比くるしげに御嘆あるを見て、態と尋ね問こと無りしが、今夜の氣色を見て明に知り、若某を用ひ玉ふこと有ば、君の御ため三族を捨て忠を盡さん。董承涙を流して申けるは、只恐くは、曹操ひそかに汝を以て我を探しむる成ん、此ゆゑに語ることを得ず。吉

通俗三國志　卷之十

○曹操三勘吉平

車騎將軍董承は、帝の血詔を受てより日夜に心を苦め、なにとぞ計を運して曹操を殺さんと巧けるが、宗と頼たる玄德、馬騰は皆都を出去しかば、王子服等と密に事を謀れども、爲べき樣なかりけり。如此に月日を送らば、いつか帝の宸襟を安め奉んとて、寢食をも忘れ、建安四年も空く暮て、あら玉の春立歸りぬれば、百官悉く禁殿に出て朝賀を成けるに、曹操みだりに大臣を輕んじ公卿に無禮しければ、彌口惜き事に思ひ、此より氣の病となりて、一度臥て起ざりしかば、帝この由を聞し食れ、典藥の太醫に勅して療治すべき由を命ぜらる。太醫吉平と申は乃ち洛陽の人にて、世に秀たる名醫なり。詔を承て董承が家にゆき、藥を調へて與へければ、日に沿て效を得たり。されども董承が常々苦しげに長嘆するを見て、吉平心の中に甚だ怪く思ひけるが、正月十五日の夜、今宵は上元の佳節なりとて外に出ければ、董承も傍の人と酒を飲、覺ず醉て被をかづき睡入けるに、日比ひそかに事を謀る王子服、种輯、吳碩、吳子蘭

とし玉ふぞ。禰衡答て申けるは、大兒孔文擧、小兒楊德祖、この二人の外に人と思ふ者はなし。黃祖が曰、我等が如き者は如何ん。禰衡が曰、御邊は社の中の神に似たり、人の祭を受ると云ども、何の靈驗もなし。黃祖大に怒り、汝われを以て土人形とするかと云て、引出して斬せけるに、禰衡死ぬる迄罵て已ざりしと語りければ、劉表哀み哭て、屍を鸚鵡洲に葬らしむ。此に因て了に曹操に順はざりしかば、曹操都に在て禰衡が殺されたる由を聞、大に笑て申けるは、さればこそ腐りたる儒者の辨として、己が舌に劍あり、口ゆゑに自ら死したり、然れども劉表わが使を殺したれば、此儘にては打措がたし、大軍を起して荊州を攻破んと議するに、荀彧諫て、袁紹いまだ平服せず、玄德なほ徐州にあり、若これを棄て東國に向ひ玉はば、心腹の病を後にして、手足の瘡を先にするが如し、先袁紹を平げて次に玄德を除き、其後に江漢を伐玉はば、一鼓して定まらんと云ける故、曹操げにもとて止りける。

君爲君と云る古の詞に任せて、天子の命を受ては、其本義將軍の御爲を思ふこと能はじ、冀くはよく思案を運し玉へ。劉表聽ず、われ別に高論あり、汝早く都に上れと云ければ、韓嵩やむ事を得ずして都に上り、朝に出て貢物を捧ければ、曹操對面してのち詔を申下し、侍中靈陵の太守に封じて又荊州に囘らしむ。荀彧これを聞て諫めて申けるは、韓嵩の來りしは都の虚實を窺ん爲なり、今なんの功も無に高官を授玉ひ、又禰衡が音信も無に荊州へ囘らしめ玉ふ、これいかなる故ぞ。曹操笑て申けるは、禰衡あまりに我を辱しむ、此故に荊州へ使せしめ、劉表が手を借りて殺さんとす、何ぞ再び問事をせんと云ければ、諸人皆その高論に服す。韓嵩は荊州に囘り、劉表に見えて都の隆なる由を語り、御子一人朝廷に仕官させて人質とし玉へ、然時は曹操も疑事無して、此國自ら長久ならんと云ければ、劉表大に怒り、汝二心あり、斬て棄んと云に、韓嵩叫で申けるは、將軍こそ始より某が諫を聽玉はず、某さらに將軍に背事なし。蒯良これを聞て劉表を諫め、向に韓嵩がいまだ都に上らざる時、すでに再三この事を云り、今さら二心にては候はじと云ければ、劉表わづかに死罪一等を宥して獄中に囚へ置けり。時に江夏より人來り、禰衡すでに黄祖に殺されたりと告ければ、劉表駭て其子細を問に、答て申けるは、黄祖ある時禰衡と酒を飲、共に覺えず醉けるが、黄祖問て申けるは、御邊都に在て誰人を英雄

此ゆゑに荊州に使せしめ、我手を借て之を殺し、劉表こそ賢人を殺せりとて、不義の名を取しめんと計る、我又これを殺さず、黄祖が處へ遣して、曹操に我智恵の程を知しめんとす。諸人みな驚嘆して其明なるを稱する所に、袁紹が方より使來り、共に力を合せて永く好を結んと云ければ、使を旅館に宿し置、文武の大將を集めて申けるは、曹操禰衡を以て我を招き、袁紹も使を馳て好を結んとす、我いづ方にか從はん。從事中郎將韓嵩申けるは、今曹操と袁紹と天下を爭ふ、重きこと將軍の御身にあり、若天下の御望あらば、此時に乘て早く事を起し玉へ、又天下の御望なくんば、宜き方へ從ひ玉へ、今曹操よく兵を用ひて、名譽の士競て服す、其勢必ず先袁紹を破ん、袁紹を破て後に、兵を東國へ移さば、恐くは將軍防ぎ玉ふこと能はじ、只荊州を持ながら、曹操に從ひ玉はば必ず重く用ふべし、是萬全の計にて候はん。劉表心疑て更に決せず、良ありて申けるは、汝先都に上て其虚實を窺ひ來れ、那後に事を決すべし。韓嵩申けるは、夫聖人は節に達す、其次は節を守る、某は節を守る者なり、君臣は各定れる分あり、死を以て節を守る、是命ずる所あり、火を踏湯に入と云とも辭すること無、將軍もし上天子に順ひ、下曹操に從ひ玉はば、某が心も安からん、若御心に疑を懐て決せず、某を都に上せ玉ひて、天子萬一某に官爵を賜らば、某は漢の臣となりて將軍は故主とならん、然る時は在

禰衡朝堂に御賀して曹操を愧しむる
禰衡
曹操

張遼
荀攸
荀彧
戲役人

劉表に說て降らしめば、我必ず汝を用ひて公卿とせん。禰衡肯て許容せざりしかば、曹操馬を引せて從者二人に扶けのせさせ、手下の諸將みな酒肴を用意して東門の外まで送るべしと下知しければ、文武の諸將さき達て東門に出でけるが、皆心中に怒を含み、荀彧申けるは、禰衡こゝに來るとも、我等起て迎ること有べからずとて待ところに、暫く程へて禰衡きたれり。諸人平坐して起て迎る者なかりければ、禰衡聲を放て大に哭く。荀彧問て申けるは、汝いま首途を祝時に、何事を哭くぞ。禰衡が曰、汝等一人も起こと能はず、死人に同じ、我死人の中を行、この故に哭なり。諸將みな申けるは、汝われ等を死人と云、汝は頭なき狂鬼なり。禰衡が曰、我は乃ち漢朝の臣なり、曹操が叛逆の與黨にあらず、安んぞ頭なかるべき。諸將いよ〳〵腹を立、斬て棄んと云けるを、荀彧制して申けるは、丞相さきに、彼を殺は鼠を殺が如と云玉へり、我等刀を汚して何にかせん。禰衡が曰、汝等われを鼠とするか、鼠には尙人の性あり、汝等は眞の糞蟲なり。諸將みな大に怒り、相伴て去ければ、禰衡直ちに荊州に到り、劉表に見えて其德を稱すと云ども、實は誹れる言なりしかば、劉表喜ず、江夏の城へ遣して黃祖に見えしむ。或人問て申けるは、禰衡しきりに君を誹る、何ゆゑに殺さずして江夏へ遣し玉へるぞ。劉表が曰、禰衡すでに曹操を罵辱しむ、されども曹操忍で之を殺さゞるは、天下の心を收ん爲なり、

ことく\く聚り賓客座に列る。鼓の役人きたりければ、禰衡も其中に在けるが、自ら堂に上て鼓を撃、漁陽の三撾を奏しけるに、音節よの常に替て殊に妙に聞えければ、滿座慷慨せざるは無。良ありて左右の諸大將みな叱て、朝堂の御賀には、鼓の役人古より新き衣を披るに、汝なにとて左樣の汚れたる衣を披るぞと云ければ、禰衡少もさわがず、靜々と帶を解、やぶれ穢たる衣を座上に脫で赤裸になり、全身を露して立しかば、滿座の人々興を醒してみな顏を掩ふ。禰衡ゆるく\と犢鼻褌を著て少しも顏色を變ぜず、又三通撃ければ、曹操叱て申けるは、朝堂の中にて何とて無禮を仕るぞ。禰衡が曰、君を欺き上を罔する無禮に校ぶる時は、我いま父母より得たる全身を露す、是乃ち正く潔き人なり。曹操が曰、汝自ら潔と云、濁りたる人は何くにある。禰衡申けるは、汝賢愚を分こと能ず、是眼濁なり、詩書を讀ず、是口濁なり、忠言を聞ず、是耳濁なり、古今に通ぜず、是身濁なり、諸侯を容ること克ず、是腹濁るなり、常に反逆の企をなす、是心濁なり、我は天下の名士なるに、汝用ひて鼓の役人とするは、陽貨が孔子を害せんとし、臧倉が孟子を毀れるに似たり、汝霸王の業を心に掛て、何とて箇樣に人を輕んずるぞ、是まことに匹夫の所行なりと罵ければ、諸大將斬て捐んと怒るを、曹操制して申けるは、我この者を殺さんは鼠を殺に同じとて、禰衡に向て申けるは、汝もし荊州に使し、

し、許褚は牛馬を牧しむべし、樂進は狀を讀しむべし、李典は書簡を持せて使たらしむべし、呂虔は刀を磨せ劍を鍛しむべし、滿寵は酒を飲せ糟を食しむべし、徐晃は猪を屠り狗を殺さしむべし、于禁は背に板を負せて墻を築しむべし、夏侯惇を肥ふくれたる將軍と號し、曹子孝を錢ほしがる太守と名づく、其外の者共は、衣を被る故に衣桁の如く、飯を食ふ故に飯嚢の如く、酒を飲ゆゑに酒桶の如く、肉を食ふ故に肉袋の如し、手足を動し言を出すと云ども、何の益か有ん。曹操これを聞て心の中大に怒り、汝は如何なる能あるぞと問に、禰衡申けるは、我は天文地理の書一として通ぜずと云事なく、九流三教の事曉ずと云ことなし、上は以て君を堯舜に致べく、下は以て德を孔顏に配べし、胸中には治レ國安レ民の方を隱す、豈俗子と共に論ぜんや。張遼これを聞て以ての外に怒り、匹夫いかなれば無禮の言を出せるぞとて、劍を拔て斬んとするを、曹操押とゞめて申けるは、今朝堂に鼓を打役人を欠、近日朝賀の酒宴なれば、禰衡を用ひて鼓を打しめん。禰衡肯て辭せず、領掌して去ければ、孔融も心の內恐れ入て退きけり。張遼申けるは、丞相なにとて禰衡を斬て弃玉はざる。曹操が曰、この人元より世上に虛名高して、遠近に知ざる者なし、今これを殺さば、人みな我を議論せん、彼自ら才能に傲る、我いま鼓を撃せて恥辱を與る也とて、時に建安四年八月朔日の朝賀に、曹操省臺に出て酒宴をなし、百官

て、揚武將軍に任じ、賈詡を執金吾として酒宴を成て悅をのぶ。時に荊州より使かへり、劉表を招けども、心に疑を懷て從はずと云ければ、張繡申けるは、我襄城に在て久しく劉表と交を結ぶ、辯舌の人に我書簡を持せ遣し、利害を說て諭しめば、忽に來り降ん。孔融申けるは、某が家に平原の禰衡字は正平と云ものあり、才學きはめて高しと云ども、生れ付ものに忍こと能ず、言を出せば必ず人を傷る、この人昔より劉表と交ること深し、丞相用ひて使とし玉へ。曹操召よせて對面しけるに、いまだ座を賜ざりしかば、禰衡はや心に怒を發し、天を仰で長嘆して申けるは、天地の間濶しと云ども、何とて人は無ぞ。曹操が曰、わが手下に名士數十人あり、當世の英雄なり、汝なにとて人なしと申ぞ。禰衡が曰、ねがはくはその才の詳なるを聞ん。曹操申けるは、荀彧、荀攸みな智深く計多き者なり、古の蕭何、陳平も及ぶまじ、張遼、許褚、李典、樂進、其勇あたる者なし、古の岑彭、馬武も及ぶべからず、呂虔、滿寵從事たり、于禁、徐晃先鋒たり、夏侯惇は天下の奇才、曹子孝は世間の福將、汝なんぞ人なしと云る。禰衡あざ笑て申けるは、御邊の言相違せり、是等の人々われ明に知れり、荀彧は人の疾を問せ喪を弔はしむべし、荀攸には墓を守らしむべし、程昱には門を守しむべし、郭嘉には文を書せ詩を作しむべし、張遼には鼓を打せ金を鳴さしむべ

を起して曹操を攻め玉ふと聞しが、如何勝負を決したるぞ。使申けるは、時いま寒氣の忍がたきに至れり、此故に暫く戰を休て來春を待、荆州の劉表と襄城の張繡とは、國士の風あるを以て使を差て招しむ。賈詡笑て申けるは、汝早く國に囘りて袁紹に申せ、御邊が骨肉の弟をさへ、疑ひ妬で容ること能ず、安んぞ天下の國士を招て用ることを得ん、我なんぞ膝を屈めて汝が下に立ん、早々に囘れとて、書簡を引やぶり逐立て出しければ、張繡申けるは、今袁紹は勢盛にして曹操は弱し、何ゆゑに使を逐立たるぞ、若袁紹怒て攻來らば、我なにを以てか防ことを得ん。賈詡申けるは、某が意は曹操に降んと思ふ故なり。張繡が曰、われ曹操と深き讐あり、今もし降らば害せらるべし。賈詡が曰、もし曹操に降る時は其便三あり、曹操は天子の勅命を受て天下を征す、其宜き一なり、袁紹は强と云ども、將軍いま降り玉はば、必ず甚だ輕ずべし、曹操は弱と云ども將軍を得ば重く用ん、其宜き二なり、曹操は五霸の志あり、必ず私の怨を捨ん、其宜き三なり、少しも疑ふこと無して、早く曹操に降玉へ。張繡尤と同じければ、賈詡乃ち劉曄を伴ひ來る。劉曄對面して曹操が平生の德を稱し、若ふるき讐を思はば、何ぞ今某を使として招ことをせんと云ければ、張繡喜び、此上は何の疑ふこと有んとて、酒宴を設て重く持なし、次の日都に上て降參を乞。曹操自ら出むかへ、張繡が手を執て申けるは、御邊すでに我

○禰衡赤裸罵曹操

去ほどに劉岱、王忠都に回り、曹操に見えて玄德の野心なき由を申ければ、曹操大に怒り、己等遙々と討手に向て、敵を平ぐること克ず、却てわが國を辱しむ、速に斬て棄べしと罵けるを、孔融諫て申けるは、劉岱、王忠は玄德が對手にあらず、此故に打負て回りたり、然るを殺し玉はば、諸人心を安ぜず、丞相を明ならずと沙汰すべし。曹操げにもとて二人の死罪を宥して官爵を剝取、その後自ら大軍を起して徐州を攻んと議しけるを、孔融又申けるは、時いま冬の末に至て寒氣忍がたし、漫に軍を興べからず、來春を待て發向し玉へ、荊州の劉表と襄城の張繡と力を併せて朝廷に背く、使を遣し禮を厚して招玉はば、必ず來て服すべし、此二人丞相に降らば、天下響の如くに應ずべし。曹操この義わが意に合へりとて、卽時に人を仕立て荊州、襄城へ下らしむ。襄城へは劉曄使として下りけるが、先賈詡に逢て曹丞相の仁德漢の高祖の風ありと云ければ、賈詡大に喜び劉曄を私の宅に留め置、次の日張繡に見えて曹操が盛德を稱し、今劉曄を使として招しむ、早く降り玉へと云ところに、河北より使ありとて書簡を獻る。乃ち披き見れば袁紹が張繡を招く書なり。賈詡その使に對面して問て申けるは、袁紹ちか比兵

所に、忽然として鼓の聲地を搖し、一手の勢路を遮る。二人駭て之を見れば張飛なり。眼を怒らして申けるは、我兄は何とて如此に分別の無ぞ、適生取たる逆賊を箇樣に放ことやあるとて、丈八の矛を舞し、咄と喚て蒐りければ、劉岱、王忠馬上にて顫ひ戰く所に、一人後より馬を飛して出來り、無禮をするなと呼はりければ、誰やらんと見るに關羽なりしかば、劉岱、王忠すこし心を安んじて相待に、關羽つと來て申けるは、兄すでに二人の者を放して回らしめ玉ふ、何ゆゑに路を遮て止んとする。張飛が曰、今もし放さば重ねて又きたるべし。關羽が曰、若重ねて來らば那時に誅すべし。劉岱、王忠申けるは、某二人すでに活命の恩を蒙る、丞相もし某等が三族を滅とも、誓て再び來るまじ、願くは此を放し玉へ。張飛申けるは、假令曹操が自ら來るとも、一人も生ては返さじ、今權に二つの首を汝二人に預け置、重ねて來る時に請取ん。劉岱、王忠膽を冷し魂を失ひ、頭を抱て鼠の竄が如に去ければ、關羽、張飛も城中に回る。玄德申されけるは、曹操必ず自ら攻來ん、いかゞして防べき。孫乾が曰、徐州は敵を受て久しく保がたき城なり、不如兵を小沛に屯し、下邳の城を守て掎角の勢をなし玉へ。玄德この義しかるべしとて、關羽に妻子一族を託て下邳城に籠おき、孫乾、簡雍、糜竺、糜芳を徐州の城に留め、自ら張飛を引具して小沛の城を守り玉ふ。

勢喚き叫で込入、矢を放こと雨の如し。劉岱案に相違して散々に亂れ、我さきにと落ゆく所に、山の際より張飛一軍を引て攔り止め、馬を交て只一合に劉岱を摑で地に抛、生取て回りければ、降る者數を知ず。玄德この由を聞て限なく喜び、關羽に向て申されけるは、張飛は元來ものさわがしき男なるが、今智謀を用たり、我なにをか患んやとて、自ら城を出て迎玉へば、張飛これを見て大音あげて申けるは、兄われを物さわがしきと云玉ひしが、今日は如何に。玄德笑て曰、われ適に言を以て汝を激さずんば、今日なんぞ如此なることを得ん。張飛も限なく打笑ひ、士卒を下知して劉岱を引出させければ、玄德馬より飛下、自ら縄を解て申されけるは、わが弟誤て無禮をなせり、願くは恕玉へとて伴て城中に入、さきに生取て囚おきたる王忠を召出して、一同に持成て申されけるは、車胄さきに我を殺んとせしに因て、已ことを得ずして誅戮せり、此故に丞相疑をなし、二人を指て此處に向はしむ、われ丞相の大恩を蒙りて、常に命を棄て報ぜんことを思ふ、安ぞ朝廷に背て丞相に敵せんや、御邊ねがはくは我等が罪なき由を宜く丞相に告玉へ。劉岱、王忠拜謝して曰、某二人すでに擒にせらる、若一命を扶玉ふ時は、是將軍の洪恩なり、丞相の御前は某二人に任せ置玉へ、貳心在せぬ由を明に申べし。玄德大に喜び、次の日生取を悉く放して回し玉ふ。劉岱、王忠すでに城を離れて十里ばかり出ける

ちらして、三千餘騎を率して打出たり。此時劉岱は王忠が生取れたるに驚て、固く陣門を守て居たりしに、張飛直に押よせ、勢に乗て攻やぶらんとす。劉岱いよ〳〵張飛を怕れて、數日の間出ざりければ、張飛元來性さわがしうして、少しも怺ぬ大將なれば、敵の出ざるに退屈して、樣々に惡口しけるが、心の中に屹と計を案じ出し、今夜の二更に敵陣を夜討にすべし、其用意をせよとて手下の者に相ふれ、晝の間しきりに酒を飲で、詐て大に醉たる體をなし、過もなき士卒を散々に打擲して陣中に縛おき、後に首を斬て旗を祭り、軍の首途に具んと罵りて、密に其友に命じて繩を解ゆるさしむ。士卒過なくして痛く責られ、心に恨を含で劉岱に降參し、事の樣を有の儘に告ければ、劉岱初の程は詐ならんとて信ぜざりしが、其士卒全體を打れて血に染たるを見て、扨は張飛が例の躁暴より出たり、今夜の二更に寄來らば、引包で討とれとて、兵を皆陣の外に伏おき、鳴を靜めて待居たり。張飛は士卒の走りたるを見て、計成就せりと喜び、兵を三手に分て一手は只三十餘人、二更の比夜討に向ふと號して敵陣に攻かゝらせ、二手の勢は敵陣の後へ廻して、虛に乘て攻入べしと約をなす。去ほどに夜も二更の比に至ければ、張飛自ら劉岱が陣の後に廻り、三十餘人の者共喊を造て押よせ、火を掛て攻入けるに、伏の勢こと〴〵く起り、引包で內外より討んとする所に、思も寄ぬ陣の後より、張飛が二手の

山際に趕て來りければ、關羽急に取て返して喚て蒐るに、王忠驚き怖て走りけるを、關羽刀を左に持、右の臂を指のべて王忠が鎧の上帶を攫で中に提げ、脇に夾で囘りければ、其勢ふるひ怕れて散々に走りけるを、關羽が三千餘騎勢に乘て追かけ、馬を奪こと數百疋なり。關羽いそぎ王忠を縛て玄德の前に出ければ、玄德問て曰、汝なに者なれば僞て曹丞相とは申たるぞ。王忠答て曰、われ何ぞ僞ん、丞相われに命じて旗ばかりを立て疑兵の計を成しむ、丞相もし袁紹を破り玉はゞ、不日に來て汝等を生取玉ふべし。玄德乃ち衣服を與へ、酒を飮せて留めおき、又劉岱を生取んと議し玉ふに、關羽申けるは、我さきに兄の曹操に和睦を求るの御心あるを量て、王忠を生取きたれり、さ無んば疾斬て捐ん。玄德の曰、われ眞に此心あり、張飛が性躁して必ず王忠を殺んことを患ひ、彼が行んと云を止めたり、此等の者共を、假令ころしたりとも益あるまじ、若生て置時は、曹操が怒を休ること有ん。張飛すゝみ出て申けるは、某ゆいて劉岱を擒きたらん。玄德の曰、劉岱は昔兗州の刺史たりし時、虎牢關にて董卓と戰ひし者也、かろんずる敵にあらず。張飛が曰、これ程の奴原なんぞ道に足ん、我卽時に攫で持きたるべし。玄德の曰、われは只汝がもの躁して彼を殺さん事を患ふ。張飛大に腹を立、なにとて適より我を輕んじて躁しく〳〵と云玉ふぞ、若かれを殺さば、我必ず其命を償べしと云

関羽雪中に王忠を計る
関羽

王忠

とす。張飛が曰、もし曹操に出合ば、引摑でもち來らん。玄德の曰、曹操は漢の逆賊なれども、天子の勅命と號するに依て、名正く言順ふ、我いま敵對する時は、必ず逆臣と呼るべし。張飛が曰、もし左樣の御意にて候はば、只手を束て彼が來るを待玉へ。玄德の曰、いま袁紹われを救と云ども、虛實を知がたし、若曹操に惡まれて、大軍この處へ攻きたらば、我死するに門なからん。張飛が曰、他人の威勢を稱揚して御方の氣を滅し玉ふな。玄德の曰、知レ彼知レ己、百戰百勝、知レ己不レ知レ彼、一勝一負、不レ知レ己不レ知レ彼、百戰百敗、これ萬古不易の理なり、わが城中兵糧の用意もなく、殊に手下の軍兵は、都より曹操に預り來れる勢共なり、假令戰たりとも何を以てか勝ことを得ん、只千に一も賴とするは袁紹が救なり。關羽申けるは、然れども坐ら滅亡を待べきにも有ず、某罷向て虛實を見來んとて、三千餘騎を率して城外に出ければ、王忠兵を進めて攻ちかづく。時十月の半にて、陰雲四方に覆ひ、大雪ふり積て寒氣堪がたきに、關羽刀を提て馬を眞先に出せば、王忠大音あげて申けるは、曹丞相こゝにあり、匹夫なんぞ早く降らざる。關羽申けるは、曹操あらば馬を出せ、我對面して一言を云ん。王忠が曰、曹丞相なんぞ輕々しく汝が如き者に對面し玉はん。關羽大に怒り、馬を飛して打て蒐ければ、王忠も槍を撚て二三合戰ふに、關羽いつはりて逃わしる。蓬し回せとて、

劉岱、王忠二人は、五萬餘騎にて徐州を百里へだてゝ陣をとり、中軍に丞相の大旗を打立て、曹操が自ら向うたると披露し、肯て輕々しくは進まず、堅く守て日を送り居たるに、如何思ひけん、曹操使を馳て、速に攻かゝるべしと催促す。劉岱これを聞て王忠に向て申けるは、丞相早く戰を促玉ふ、御邊推寄、一軍して敵を試玉へ。王忠申けるは、都を出る時、丞相懇に御邊を召て計を授玉へり、今何とて我に讓玉ふぞ。劉岱が曰、われは是この陣の大將軍なり、豈かる〴〵敷敵に向はんや。王忠が曰、さな云玉ひそ、御と御邊と官爵に高下なし、焉ぞ御邊の下に屬ん、所詮一度に打向はん。曹操が使これを見て申けるは、二人爭をなしては、如何んぞ玄德に敵することを得ん、兵を二手に分て鬮を拈て打向ひ玉へ。二人この義に從ひ鬮を拈たるに、王忠先の字に當りければ、兵を進めて徐州の城に攻かゝる。玄德敵の寄るを見て、陳登と計を議し玉ふに、陳登申けるは、袁紹十萬の勢を起して黎陽まで出たれども、手下の謀士不和にして戰はずして日を送る、然れども、某よく曹操を量に、詐の計きはめて多ものなれば、必ず袁紹を畏れて、自ら黎陽に向て自ら防ん、今この處に丞相の旗あるは、詐て自ら向うたる體を見せ、敵を畏れしむるの企ならん。玄德の曰、いかゞして虛實を知ん。張飛すゝみ出て申けるは、某ゆいて見きたるべし。玄德の曰、われ汝が性の躁して事を仕損ぜんを患

態と丞相の旗を指せて徐州に向て玄德を攻させ、自ら二十萬の勢を率し、黎陽に出て玄德を防んとす。程昱諫て申けるは、劉岱、王忠は玄德が對手に不足なり、別に可然大將を擇玉へ。曹操申けるは、我すでに之を知れり、此故に態と我丞相の旗を指せて、自ら向うたる體を見せしむ、然る時は玄德われを畏れて輕々しく戰はじ、御方も陣を按て急に進まざらしむ、此間に我先袁紹を破りて、勝に乘て直ちに徐州へ押よせ、玄德が外の援を絕て容易生捉ん爲なりとて、黎陽に出て陣屋を構へ、袁紹と八十里阻て互に要害を緊く守り、出て戰ふこともなく、八月より十月まで徒にこそ暮しける。其故を如何にと尋ぬれば、許攸勞る事ありて、審配大將たりしが、沮授兼て袁紹を恨る故あるに依て、審配が計を用ひず、了に不和に成けるゆゑ、玄德が心疑ひ惑て、進んで戰ふことを思はず、一度も出ること無りしかば、曹操これを聞て、さればこそ內變を生じてけり、袁紹さだめて墓々しく攻來ることは有まじ、我自ら斯に在て益なしとて、臧霸を留めて靑州徐州の境を守らせ、于禁、李典を河上に留め、曹仁を總大將として官渡の難處に陣を取せ、自ら一軍を引て都へぞ回り上りける。

○關羽張飛擒二劉岱王忠一

十萬の精兵を調て、黎陽を指て進發す。此時曹操は都に在て、玄德襲て車冑を殺し、袁紹を頼で大軍都へ攻のぼると沙汰するを聞て大に驚き、諸大將を集めて如何せんと評議す。時に北海の太守孔融、將軍に任ぜられて都に逗留しけるが、此由を聞て曹操に見えて申けるは、袁紹は勢大にして輕々しく敵し難からん、不如交を結て和睦を求め玉へ。曹操諸人に問て申けるは、和睦をせんと戰はんと、孰が御方の利ならん。荀彧答て曰、袁紹は無用の人なり、一戰して打やぶるべし、必ず和睦すべからず。孔融が曰、御邊の言大に錯れり、我思ふに袁紹は國廣く民強して、田豐、許攸が輩智謀深く、審配、逢紀よく兵を用ひ、顏良、文醜、勇あたる者なし、其外沮授、郭圖、高覽、張郃、淳于瓊等、みな此世に希なる名士なり、何ゆゑに輕んじ玉ふぞ。荀彧笑て申けるは、足下只その一を知て其二を知玉はず、袁紹兵衆と云ども法整ず、田豐は剛にして上を犯し、許攸は貪て不知、審配は專にして計なく、逢紀は果にして無用、これ等の人は互に爭妬で、必ず內變を仕出べし、顏良、文醜は匹夫の勇なり、只一戰して生取にせん、其外碌々の小輩、縱ひ何百萬ありとも豈道に足んや、我此ゆゑに袁紹を無用の人と申也と云ければ、孔融言なくて閉口す。曹操大に笑て申けるは、何事も荀彧が智囊に洩ること無、早く用意をせよとて、前後兩營の官軍を起し、先劉岱、王忠二人に五萬の勢を授け、

圖すゝみ出て申けるは、御邊の意見相違せり、昔武王の紂を伐玉ひしをだも、天下これを不義とせず、況や今曹操を伐に、何ぞ無名の師と云ん、主公四州の強を守て、軍士精練、將校奮勇なり、若この時に乘て大業を定めずんば、後に却て害あらん、是所謂天の與るを取ざれば、反て其禍を受るの理なり、是乃ち越の霸たる所以にして、呉の亡る所以なり、夫戰は時の機を見て變に應ずるを本とす、願くは鄭玄が書簡の旨に從ひ、玄德を招て共に力に協せ曹操を滅して、上は天意に合ひ下は人情に順ひ玉へとて、四人の議論區分れて、袁紹も心いまだ決せざる所に、忽ち外より許收、荀諶二人きたれり。袁紹申けるは、汝二人多く計あり、今鄭玄書簡を送り、兵を起し玄德を救て曹操を滅せと云、これに因て議論するに、田豐と沮授とは兵を起こと不可然と云、審配と郭圖は早く兵を起せと云、汝二人が心を以て決すべし。元來この二人田豐、沮授と不和にして、郭圖と深く睦じかりしかば、郭圖がひそかに目加するを見て其意を曉り、乃ち答て申けるは、古より天の與るを取ざれば、反て其殃を受と云り、若早くせめ上り玉はずんば、曹操に寄らるべし、先んずる時は人を制す、必ず延引あるべからず。袁紹これに心決し、早く都へ攻上るべしとて、返簡を書きて孫乾を回し、審配、逢紀を總大將とし、田豐、荀諶、許攸を謀士とし、顏良、文醜を先手として、騎馬の勢二萬、歩立の勢八萬、都合

の大將を悉く集め、大軍を起して都に上り、漢を扶て曹操を滅さんと議するに、一人すゝみ出て、此事しかるべからずと云。諸人これを見れば、英傑超レ衆見識高明なる鉅鹿の田豐字は元浩と云もの也。諫て申けるは、近年は合戰打つゞいて百姓みな疲れ、倉廩に貯なうして賦役甚般なり、此國の深き憂なり、只宜く朝廷に貢物を捧げ、農を務め民を安じて、其のち時を待て兵を黎陽に屯し、河內に舟を造りて武具を整へ、精兵を諸處に分て邊境を襲ひなば、曹操が兵やすきこと無して、三年の內に事必ず定らん。時に又一人すゝみ出て曰、この計わが意に叶はず。諸人これを見れば、忠烈慷慨、相貌端莊なる魏郡の審配字は正南と云ものなり。田豐に向て申けるは、兵書の法十圍五攻、敵する時は能戰ふ、今主公の神武、河北の精兵を率て曹操を計玉はんことは掌の內にあり、何ぞ徒に月日を送らん、若延引せば、後に悔とも及ぶまじ。又一人すゝみ出て、いや〱此計不レ可レ然と云。諸人これを見れば廣平の沮授なり。審配に向て申けるは、夫亂を救ひ暴を除く、之を義兵と云、衆を恃み强に傲る、之を驕兵と云、義兵は敵に勝、驕兵は必ず滅ぶ、今曹操漢の天子を許昌に遷し、勅命と號して天下を制す、其名義兵に似たり、況や妙勝の計を用て强暴を恃ず、法令よく行はれて士卒精練なり、豈公孫瓚が如の輩ならんや、今萬安の計を棄て無名の師を起さんこと、此自滅を招の道也。時に郭

送りて御頼候はば、曹操たとひ來るとも何の恐か候べき。玄德の曰、われ之を思へども嘗て好をも結ばず、剰へ弟の袁術を我すでに滅せり、旁深き怨あれば、今いかでか我を救ん。陳登が曰、此處に年老たる官人あり、桓帝の御時に尚書たりし康城高密の鄭玄と云もの也、この人袁紹と三代の通家なり、若これを頼玉ひて、袁紹に書簡を送らしめば、事必ず成ん。玄德この義に從ひ、陳登と共に鄭玄が家に行、右の趣を告て再拜して頼玉へば、鄭玄欣然として書簡を調ふ。玄德いそぎ其書を持せ、孫乾を河北に遣はして救を求め好を結ばしめ玉ふ。袁紹對面して鄭玄が書簡を見るに、其書に曰、

伏聞、漢道凋零、奸臣强暴、外無匡扶之柱石、内無伏策之棟梁。賊臣曹操幽帝許都、社稷傾危、生靈塗炭。惟明公世居相府、天下仰之、若大旱而望雲霓、如久澇以思天日。倘與劉玄德協力同心、共立伊尹周公之績、名垂青史、萬代不磨。區々之志、愿聽察焉。

袁紹見了て申けるは、玄德わが弟を殺せり、我つねに仇を報ぜんとす、焉ぞ好を結ばん。孫乾申けるは、玄德さきに袁術を拒たるは、此乃ち天子の勅命を傳て、曹操が爲しむる所也、いま將軍に從て共に力を併せ、漢室を匡して曹操を討んと欲す、願くは能察し玉へ。袁紹が曰、われ元より玄德は世の英雄なることを知、もし志を改めて我を恃まば、我必ず救べしとて、手下

得たりとて暫し戰ひけるが、叶はずして引回せば、陳登內より城門を閉て、雨の降ごとく矢を放つ。車冑こは如何にと驚き、城を棄て走ければ、關羽急に追かけ、兼ては生取にせんと巧しが、何とかしたりけん一刀に斬て落し、首を取て城下に到り、反賊車冑を已に誅したるぞ、降る者は命を扶んと呼はるに、城中の者共、こと〴〵く地に拜して降んと請。關羽よく人民を安じ、車冑が首を提て玄德に見え、右の趣を審に語る。玄德大に駭き、曹操もし自ら攻きたらば如何せんと怖れ玉へば、關羽申けるは、某張飛と共に之を防べし。玄德後悔して、我もし知たらば車冑を殺まじき者をとて、城中に入玉へば、人民出迎て地上に再拜す。已に府堂に登て、向より張飛が見えぬは何くへ行たると尋る所に、張飛あわたゞしく走り來り、我すでに車冑が妻子を盡く殺し了れりと呼はる。玄德いよ〳〵憂て、曹操が大將を如此に殺して、若自ら大軍にて攻來らば、我なにを以てか防ことを得んとて、深く張飛が躁きを戒め玉ふ。

○曹操分兵拒袁紹

玄德すでに徐州の城に入りて頻に曹操が攻來んことを恐れ玉へば、陳登申けるは、曹操が常に畏れ憂る者は河北の袁紹なり、今袁紹四州を保て精兵百萬、文官武將雲霞の如し、早く書簡を

でに兵を城門に伏たり、輕々しく入ば仕損ずべし、此事を只われ等に任せよ、我一の計あり、夜深方に、曹操が大事ありて軍兵を指向たりと詐り、車冑を出抜て城より外へ呼出し、引組で生捉にせん、先この事を玄德には知せ申まじ。張飛が曰、彼もし城外へ出ざる時は如何ん。關羽が曰、われ期に臨で計ありとて、幸に都より來れる者共の中に、曹操が旗幟ありければ、此を先に進めて、其夜の三更に壕の邊に到りて、門を開けと呼りければ、内より何者ぞと問に、答て申けるは、此は都より曹丞相の、大事ありて張遼を指向玉へる也、早く門を開て入玉へ。車冑これを聞て、急に陳登を召て申けるは、深更に及で輕々しく門を開ことは、如何なる詐の計あらんも知がたけれども、若まことの張遼が、丞相の大事ありて來りたるを入ずんば、後難又のがれがたからん、我いかんとも決することを得ずとて、自ら矢倉に上り大音あげて、夜中なれば實不を辨がたし、夜あくる迄は門を開まじく候ぞと云ければ、城外より申けるは、丞相機密の大事あり、夜の明るを待ちて事洩る時は、悔るとも及ぶまじ、何とて張遼を疑玉ふぞ、疾門を開られ候へ。車冑いかゞせんと案じ煩ひ、已に五更の比に至て、緊く鎧たる精兵千餘騎を相從へ、門を排き、手に刀を提て壕に橋かけ、張遼はいづくに居玉ふぞと云に、關羽は十二斤の青龍刀を舞して馬をかけよせ、匹夫いかなれば玄德を殺んとするぞと罵りければ、車冑心

の屍を收て妻子を引具し、盧江を指て逃れけるを、廣陵の徐璆と云もの、盡く討取て傳國の玉璽を曹操が方へ送りければ、曹操これを賞して徐璆を高陵の太守に封ず。玄德は袁術が滅たるを聞て、表を上て朝廷に奏し、朱靈、路昭を曹操が方へ返らしめ、都より從へ來れる五萬の勢を徐州に留て界を守らせ、恩德を施して民を恤み玉へば、國中こと〴〵く悅服せり。朱靈、路昭二人、都に囘て曹操に見えければ、曹操五萬の勢を率ゐ來らざるを怒りて首を刎んとす。荀彧諫て申けるは、丞相すでに玄德を總大將とし玉ひし故に、權柄みな玄德一人に歸す、朱靈、路昭は其手下にありて下知を聞もの也、いかんとか仕候はん、只ひそかに書簡を以て車冑に計を授け、玄德を欺て討しめ玉へ。曹操この義げにもとて、密に除州へ使を馳て、計をぞ傳へける。車冑書簡の趣を見て、陳登を召てひそかに議するに、陳登申けるは、玄德を殺こと極て易し、城門に兵を伏置、玄德を招て、內へ入んとするを一刀に斬玉へ、某は矢倉の上より、繼く者を射とるべし。車冑大に喜び、兵の手配をして玄德を酒宴に招く。陳登は家に囘り、父の陳珪に事の樣を語るに、陳珪申けるは、玄德は仁者なり、豈殺に忍んや、汝早く行て告知せよ。陳登が曰、某も玄德を殺に忍ず、已に計を定めて候とて、直に行て關羽、張飛に逢、企の樣を語るに、張飛きゝもあへず牙を咬で、早城中へ打て入んと鬩くを、關羽押止て申けるは、彼す

靈を一槍に刺死す。袁術先陣の亂れたるを見て、自ら兵を驅て進みければ、玄德兵を三手に分て自ら中軍を守り、關羽、張飛を右に備へ、朱靈、路昭を左に備へ、眞先に馬を出して、袁術匹夫、汝大逆無道にして叨に帝號を僭す、我いま勅命を受て汝を討、もし速に降參せば、命ばかりを扶くべきぞと、大音あげて罵玉へば、袁術怒て申けるは、席を織履を售たる小輩、何ぞ我を輕んずるとて、兵を下知して討てかゝる。玄德の左右に備たる二手の勢、むかへ合せて戰ひ、火を散して揉だりしかば、袁術が人馬みだれ立て、討るゝ者數を知ず、血は流れて泉の如く、屍は積で岳の如し。向に袁術を背て嵩山へ落たる雷薄、陳蘭、思ひも寄ずその後を攻て、兵粮財寶の車を悉く奪取ければ、袁術進退谷りて囘るべき路なく、如何せんと案じ煩ふ。兼て袁術が通ると聞て近國より聚りたる强盗溢者共、晝夜を分たず襲ひ劫しければ、戰ふべき力も無て這々江亭まで引退きたるに、相從ふ勢次第に減じて、老弱にして肥脹たる者共、わづかに千餘人ぞ殘り留りける。況や炎天の暑氣に逢て兵粮は盡たり、麥の屑三十斛ばかり有けるを、軍士に分ち施と云ども、餓死する者麻を亂せるが如なり。袁術も麥の屑を食んとするに、咽ふさがりて入ざりしかば、蜜水を求て渴を止んと云に、庖人答て、只血水は有ども蜜水は無と云ければ、袁術大に叫で床の上より地に落、血を吐こと一斗あまりにして了に死けり。姪の袁胤そ

時に建安四年の六月、玄徳すでに徐州に下着せられければ、初め曹操が權に太守として留置たる車騎將軍車冑、出迎へて城中に請じ、酒宴を設て持なす。糜竺、孫乾等きたり見えければ、玄徳舊宅に入て妻子に逢、その後人を出して袁術が消息を尋ね聞しむ。此時袁術は皇帝の位を僭してより、淮南にて莫大の奢をなし、暴逆を專にして人を恤むこと無りしかば、相從ふ者次第に背て、雷薄、陳蘭と云二人の大將も嵩山へ落去り。此より勢ひ衰て爲べき樣なかりしゆゑ、書簡を以て兄の袁紹が方へ帝號を送りける。其書に曰、

漢之失天下久矣。天子提攜、政在家門。豪傑角逐、分裂疆字。此與周之末年七國分勢無異、卒強者兼之耳。袁氏受命當王、符瑞炳然。今君權有四州、民戶百萬、以疆則無與比大、論徳則無與比高。曹操欲扶衰拯弱、安能續絕命救已滅乎。今納上帝號、請早即皇帝位、共享萬世之洪基。不可失此機會。傳國璽續當獻上。弟術百拜。

袁紹元より天下の望ありければ、此書を見て限なく喜び、袁術を河北に召で共に力を併せんとす。此に依て袁術淮南を打すて、人馬を收拾し、天子御用の物を車に載て、すでに徐州の境まで出たり。玄徳この由を聞て、五萬の勢を調て要害に待懸玉ふに、袁術が先陣紀靈打やぶりて通らんとするを、張飛大に怒りて直ちに馬を交へ、十合あまり戰ひけるが、叫聲雷の如く、紀

より大將在レ外君命有レ所レ不レ受、われ天子に見えて詔を受、又丞相の命を蒙りて、已に此まで打出たり、御邊いかなれば輕々しく來て我に代んとするぞ、程昱、郭嘉が徒しきりに賂を求しかども、我さらに與ざりし故、みだりに丞相に讒言して、今御邊を追しむるならん、汝等が如き不義の徒を、今寸々に斬て弃んずれども、我深く丞相の恩を受たれば忍びざる所あり、御邊早々に回て此事を宜く云玉へとて、馬を早めて去玉へば、許褚すべき樣なく、空く回りて曹操に右の趣を語る。曹操これを聞て、程昱、郭嘉を責て申けるは、汝等ひそかに玄德に賂を求め、彼が與ざりし故に、怨を懷て惡ざまに讒を構るは何事ぞ、玄德は元より我に背く心なし。程昱、郭嘉頓首して申けるは、丞相これも亦玄德が詐て云を信じて、却て某等を疑ひ玉ふか。曹操笑て曰、彼すでに遠く出たり、若再び追ば、我を恨で禍を成ん、我又汝等を疑はず、汝等心を安ぜよとて座を起けるが、心の内半信半疑にして決せざりしとかや。兼て董承に一味して密に曹操を討んと計りし西涼州の太守馬騰も、玄德の都を出玉ふを聞て、事急には成がたからんと思ひ煩ふ所に、我國へ胡の勢寄ると沙汰ありしかば、遂に西涼州へぞ回りける。

○關羽襲斬二車冑一

玉はず、今日又兵を授け玉ふ、是龍を大海に放ち、虎を深山に歸しむる也、後に如何んとも仕がたからん。郭嘉が曰、わが心も如此、玄德元より雄才あり、民の意よく歸順す、關羽、張飛萬人の敵あり、久く人の下に在ものに非、その計の深きこと及び難し、古人も、一日縱敵萬世之患と云り、今兵を與玉ふは、虎に翼を添なり。曹操が曰、われ能玄德を窺ひ見るに、閑冷時に野菜を作り、醉中に雷を畏れて筯を落す、物の用に立人に非、何ぞ憂ること有ん。程昱が曰、閑冷時に野菜を作り、雷を畏れて筯を落は、皆彼が計なり、豈本心の事ならんや、丞相の明よく天下を照す、何とて玄德一人に迷され玉ふぞ。曹操これを聞て足ずりして申しけるは、我誤て此人に出拔れたりとて、長嘆して後悔し、誰か追蒐て生取きたらんと問に、一人すゝみ出て申けるは、某ねがはくは五百餘騎を率して、玄德を挐り歸んと云。諸人これを見れば、虎賁校尉許褚なり。曹操いしくも申たりと喜びければ、許褚五百餘騎を引て飛が如に打向ふ。關羽、張飛後陣に備けるが、後に馬烟を擧て大勢の來るは、必ず追手ならんとて、玄德に告知せ、陣を取て來るを待に、間もなく許褚勢に乘て馳きたり、玄德の左右に關羽、張飛が馬を雙べて立たるを見て、臆してや有けん、轡を控て進まざりしかば、玄德問て曰、校尉なにとて此に來れる。許褚が曰、丞相の命なり、將軍早く兵を某に渡して都へ回り玉ふべし。玄德の曰、古

人の大將を相副、五萬の精兵を借べしとて、次の日相伴て朝に出、曹操事の樣を奏して、玄德つひに退き玉へば、帝も御淚を浮て送り玉ふ。玄德家に回りて取ものも取あへず、軍馬を調へて將軍の印を腰につけ、飛が如に出玉へば、車騎將軍董承この由を聞て、十里亭まで追かけ來り、日比の約を忘ず、常に曹操を誅するの計略を運して、帝の宸襟を休め玉へと云。玄德の曰、御身よく〳〵愼玉へ、我この度都を出るは、實は日比の計を成ん爲なり、必ず期に臨では書簡を馳て告申べし。董承が曰、將軍必ず常に此事を思うて、勅命の重を忘れ玉ふなとて、淚を含で別ければ、玄德いよ〳〵路を急ぎ玉ふ。關羽、張飛怪で問て申けるは、兄いかなれば箇ほどに慌翊いて都を出玉ふぞ。玄德の曰、われは籠の中の鳥、網の中の魚なり、此度都を出るは、魚の大海に入、鳥の青天に上るが如し、曹操は憂を同すとも樂を同すべからず、若一度心變せば、我いかなる死を受んも知がたし。關羽、張飛これを聞て、實にもと心付ければ、後陣の朱靈、路昭を催促して、夜を日に繼で急ぎけり。此時郭嘉は諸郡の巡撿に出て回りけるが、玄德兵を引て徐州へ赴たりと云を聞て、以ての外に駭き、急に曹操に見えて申けるは、丞相なにとて玄德に大軍を授玉ひし。曹操が曰、袁術が河北へ行を半途にて討しめん爲なり。程昱すゝみ出て申けるは、往日玄德を豫州の牧に封じ玉ふ時、某等しきりに諫しかども、丞相つひに聽

の大勢きたるを見て、大半門を開て降人となる、此に依て公孫瓚力衰へ、黒山の張燕に救を求め、密に約を定めて、救の勢火の手を揚ば、城中よりも一度に打て出て揉あはせんとて書簡を送りけるに、其使袁紹が伏勢に生取れけり、袁紹書簡を披き見て、城外に火を揚、救の勢の來れる體を成ければ、公孫瓚すはや合圖をするは、打て出よとて盡く出けるに、伏勢四方より起て散々に戰ひしかば、公孫瓚のこり少に討れて這々城中へ逃れ入、その後袁紹地の底を掘て本陣へ潛り入、火を付て内外より攻ければ、公孫瓚のがるべき路なく、妻子を刺殺して其身も自害して滅ぬ、袁紹降參の勢を幷せて、遠近こと〴〵く順ひ靡き怕れずと云ものなし、袁紹が弟の袁術は、淮南に在て久く皇帝と稱しけるが、其傲莫大にして軍民を恤ざりしゆゑ、手下の者共怨を含て背もの衆し、これに依て皇帝の位に居こと能はず、兄袁紹が方へ使を馳て帝位を贈る、袁紹も已に北平を攻取たれば、心に帝位を望み、袁紹が傳國の玉璽を求む、袁術いま玉璽を持て淮南を打すて、河北に行て兄と一處に成んとす、若二人力を幷せば、由々しき大事にて候ん、丞相速に圖玉へ。時に玄德奮然として申されけるは、袁術もし河北に行ば、必ず徐州の路を通らん、某ねがはくは一軍を引て馳向ひ、半途にて討止ん。曹操喜て申けるは、御邊もし行玉ふ時は、我なにをか患んや、明日天子に奏聞を經て、早々に打立玉へ、我朱靈、路昭と云二

の曰、わが野菜を作り雷を畏るゝ、皆これ曹操を欺ん爲の質なり、曹操は心根の恐しき者なれば、日夜ひそかに我を窺はん、若わが野菜を作て、自ら糞土を搬び水を澆ことを爲て、武藝の志なきを知らば、必ず我を無用の人と思ふべし、又筯を落したるは、我を指て天下の英雄と云、われ未レ答ところに、俄に雷なりはためきしかば、大に恐るゝ體を爲て、手に持たる筯を落し、曹操に我を輕んじて小兒の如く思はしむ、然る時は我を害するの心なかるべしと語玉へば、關羽、張飛その高明なるに服す。次の日曹操又玄德を招て酒宴する處に、滿寵が回りて候と報じ來る。曹操召よせ問て申けるは、汝河北に行て袁紹が虚實を窺ひ來れるか。滿寵答て曰、河北にも別に替たる事なく候が、北平の公孫瓚すでに袁紹に滅されたり。玄德打驚きて申されけるは、公孫瓚はわが親き友なり、何とて一旦に滅ひたるぞ、合戰の樣を詳に御語り候へ。滿寵が曰、公孫瓚數箇度の戰に負て、退て冀州を守り、大に城郭を築て高き樓を造り、易京樓と名付て三十萬斛の兵粮を貯へ、軍勢の出入やむ時なかりしが、或日一手の勢袁紹が大軍に圍れければ、城中の者共打て出て御方を救んと云、公孫瓚怒て申けるは、御方の勢わづかに敵に圍れたるを、若急に出て救はゞ、今より後に御方の兵命を弃て戰ふ者一人もあるまじ、敵きたる時は只救をのみ求べし、今たとひ盡く討るゝとも出て救こと不レ可レ有と云ければ、諸軍みな恨を含で、敵

るに、大雨さつと降來て、雷の鳴こと天地を崩が如くなりしかば、玄德ふるひ戰き、手に持たる筯を取落さる。曹操なにを畏れ玉ふぞと問に、玄德答て曰、聖人も迅雷風烈則必變と云り、一震の威かくの如し。曹操申けるは、此は乃ち天地の聲、なんぞ驚き怕るゝことを有ん。玄德の曰、われ幼より雷を怕れて、身を藏に所なきを恨む。曹操これを聞、いつはりとは夢にも知ずして玄德を無用の人なりと思ひ、冷笑てぞ居たりける。關羽、張飛は城外に出て弓を射たりしが、家に回りて玄德を尋れば、張遼、許褚、相府に伴ひ去りと申す。こは如何にと驚て、急ぎ相府に馳きたり、後園に突て入ば、番の者共むらがり集て押止んと閧けるを、盡く踐たふし、直ちに小亭の前まで入けるが、玄德と曹操と相對して酒を飲を見て、外に立て內へ入ざりければ、曹操これを見て問て申けるは、二人何とて此に來れる。關羽答て曰、某二人、丞相の兄を招て酒宴し玉ふ由を承り、劍を舞して一笑を助ん爲に來り候。曹操その心を推して限なく笑ひ、是は古の鴻門の會にあらず、安ぞ項莊、項伯を用んと笑ければ、玄德も亦大に笑玉ふ。曹操左右の人に命じて、二樊噲に酒を給へと云ければ、關羽、張飛拜謝して酒を飲、酒宴休で別れて家に回る。關羽申けるは、某二人、兄の獨り出玉ふと聞て直事ならずと存じ、以ての外に驚きたり。玄德ひそかに筯を落したる事を語り玉ふに、關羽、張飛その意を曉ず。玄德

玄德

玄德曹操と論じ雷声に驚く
曹操
郭嘉
程昱

未知。曹操申けるは、自ら知玉はずば、定めて名を聞及玉ふべし、願くは世俗を以て論じ玉へ。玄德の曰、淮南の袁術は兵精く粮足り、英雄と云べきか。曹操笑て申けるは、袁術は冢中の枯骨なり、我必ず不日に生捕ん。玄德の曰、河北の袁紹は四代三公に上て、門下に故吏衆く、今冀州に虎踞して、手下の大將計を爲もの數を知ず、英雄と云べきか。曹操笑て曰、袁紹は色厲して膽薄し、奸謀決すること無して、大事に逢て身を惜み、小利を見て命を輕ず、是乃ち癬疥の輩なり、爭か英雄たることを得ん。玄德の曰、荊州の劉表は、威九州を鎭て八俊と呼る、英雄と云べきか。曹操あざ笑て申けるは、劉表は酒色に溺る、何ぞ英雄たることを得ん。玄德の曰、吳の孫策は江東の領袖、血氣まさに剛し、英雄と云べきか。曹操笑て曰、孫策は父の名を藉黃口の小兒なり、焉ぞ云に足ん。玄德の曰、益州の劉璋は英雄と云べきか。曹操が曰、劉璋は門を守る犬なり、安ぞ英雄たらん。玄德の曰、張繡、張魯、韓遂が輩は如何ん。曹操手を打て笑て申けるは、此等は皆碌々たる小人、なんぞ云に足ん。玄德の曰、これより外に某が知たる人候はず。曹操が曰、それ英雄は胸に大なる志を懷き、腹に良計を隱して、宇宙を包藏するの機、天地を呑吐するの志あり。玄德の曰、今誰か能如此ならん。曹操手を以て玄德を指さし、又自ら我を指さして申けるは、今天下の英雄は唯御邊とわれと二人也。其言いまだ了ざ

答玉ふ。曹操かぎり無打笑ひ、我さきに小梅の熟せるを見て、去年張繡を征伐せし時、途中に無水して兵みな渇を苦ければ、われ心に一計を生じて、向に梅の林あり、早く行て之を取と云しに、兵これを實なりと思うて急に進む程に、口中に津を生じて遂に渇せざりし事を思出し、今小梅を採て賞翫せんとす、況や酒を煮て能熟せり、御邊と共に小亭に會して樂べしと云ければ、玄德然るべしとて相從て亭中に到り、青梅を山の如く盤に貯へ、二人對坐して酒宴をなし、半酣に到て、俄に雲興て急雨を催し、傍なる人々あれ〳〵虚空に龍が昇り候と云ければ、曹操欄干に凭て遙に望み、玄德に問て申けるは、御邊變化の道理を知玉へるか。玄德答て曰、某いまだ知ず。曹操申けるは、夫龍は能大に能小に、能升よく隱る、大なる時は霧を吐雲を興し、江を飜し海を捲、小なる時は頭を埋み爪を伏し、介を隱し形を藏む、升る時は宇宙の間に飛揚し、隱るゝ時は波濤の内に伏藏す、龍は本陽物なり、時に從て變化す、方に今春深て其時を得たり、人に相比すれば、龍發る時は九天に升り、人志を得る時は四海に縱横す、此ゆゑに龍を世の英雄に比す、御邊は四方を經歷して、必ず當世の英雄を知玉はん、何人とか思玉へる、試に謂玉へ。玄德の曰、われ凡夫の眼を以て、焉ぞ英雄を知らん。曹操が曰、辭退な仕玉ひそ、胸中には定めて思ひ寄あらん。玄德の曰、われ丞相の恩顧を受て朝廷に事と申せども、英雄を

通俗三國志 巻之九

○青梅煮レ酒論ニ英雄一

玄德は董承に勸られて、密に曹操を討の計を運されけるが、其疑を避ん爲に、常に自ら後園にて野菜を作り、水を澆ぎ糞土を搬で日を過し玉ふ。關羽これを怪て、兄いまは弓馬の道に心を懸ず、小人の事を學で、野菜を作て日を送り玉ふは如何なる故ぞと問に、玄德打笑て、我深き心あり、汝等が所レ知に非と答へ玉ふ。此に依て關羽は春秋を讀、或は馬にのり弓を射て日を送る。一日關羽、張飛二人外に出て弓を射ければ、玄德自ら後園に水を澆ぎ居玉ふ處に、許褚、張遼二人、十騎あまりを引て出來り、曹丞相の命なり、早く相府に出玉へと云。玄德心驚て、今なんの用ありて召れ候ぞと問玉ふに、許褚その故を不レ知と申す。彌心元なく思ひながら、急ぎ相府に參れければ、曹操色を正して申けるは、御邊家に在て何の好事かある。玄德その意を知ず、驚き怕れて答ること能はず、面土色の如くなりければ、曹操その手を執て後園に出、野菜を作て樂かと云。玄德これを聞て初めて心を安じ、無事の日を過して閑冷を忘ん爲なりと

て見ることを得たり。玄德かくすべき樣なく、わが弟曹操が君を欺を見て、忍がたくして斬んとせし也と宣ふに、董承聞て面を掩て哭きければ、玄德問て曰、如何なる事ありて哭玉ふぞ。董承が曰、漢の朝廷に若關羽ほどの心根もちたる忠臣あらば、何ぞ太平ならざることを患とせん。玄德心の內に、此は曹操が我を探ん爲に右いはする者ならんと思はれければ、曹丞相よく國を治む、何ぞ患ること有んと云玉ふに、董承色を變じて申けるは、御邊は天子の皇叔、われ此故に實を告、なにとて詐と思ひ玉ふぞ。玄德の曰、われは詐ならんことを恐れて戲る也。董承懷より密詔を取出して、此を御覽候へと云ければ、玄德ひらき見て悲憤して淚を流す。董承申けるは、我いかにもして此賊を伐んとするに、一味同心する人多し、義狀を書て堅く盟を致せりとて出しければ、玄德これを見るに、第一車騎將軍董承、第二長水校尉种輯、第三昭信將軍吳子蘭、第四工部郎中王子服、第五議郎吳碩、第六西涼の太守馬騰と記したれば、諸公すでに如此忠義の志あり、我なんぞ犬馬の勞を辭せん、密詔を賜りたる上は、命を失ふとも惜ことなしとて、自ら義狀の奧に左將軍劉備と記し、此事は寬々と謀るべし、輕々しくして洩し玉ふなとて、共に議して五更の比に至り、董承わかれて家に回る。

馬騰乃ち朝廷にて列坐の鴛行鷺序の記録を取りよせ、一々點檢して語ふべき人を相議し、漢室の宗族に至て手を打て申けるは、此にこそ究竟の人あれ、此人をだに語らはゞ事必ず諧ん。董承、王子服等申けるは、誰人にて候ぞ。馬騰が曰、われ思ふに、豫州の刺史劉玄德を語らはば、自餘の十人に優べし。董承が曰、玄德は漢室の皇叔なれども、今は曹操に一味して、交の親こと兄弟の如し、爭か此事に與べき。馬騰申けるは、玄德の心素より曹操を殺んとする巧あり、先日許田の獵に萬歲を迎し時、關羽怒て已に曹操に斬て蒐んとせしを、玄德目加せして止られしゆゑ、關羽刀を收て出ざりき、是その心に殺ことを思はざるに非、曹操が兵多して我力の不足を恐て也、足下試に語ひ玉へ。吳碩申けるは、此事急には中々なり難からん、人人よく心に祕して、重て又相聚んとて、盡く別て回る。董承は次の夜の暗まぎれに密詔を懷に藏め、忍で玄德の館に行ければ、玄德驚き怪み、出むかへて引て小閤に入、夜中に忍での御出は如何なる故ぞと問玉ふに、董承申けるは、白晝に來らば曹操が疑はんことを憚て、馬にも駕ずして密に來れり。玄德酒宴を勸て持成玉ふに、董承申けるは、先日許田の獵に關羽すでに曹操を斬んとせしを、足下急に目くばせして止玉ひしは如何なる故ぞ。玄德色を失て怖れ驚き、此事なにとて知玉へるぞと問ふに、董承申けるは、他人肯て知もの無、われは其側に在

き様なく、默然として居たりければ、馬騰座を起て、此も柱石の才に非と云て囘らんとす。董承この一言を聞て再拜して押とめ、足下なにを以て柱石の才に非と云玉ふぞと問に、馬騰申けるは、許田の獵に鹿を射ること、我恨肺腑に徹れり、足下は乃ち天子の御舅、なに故に徒然として君を救ことを思はず、如此にては居玉ふぞ。董承なほ詐ならんことを疑ひ、長嘆して申けるは、曹丞相は世の棟梁、われ何ぞ能及ばん。馬騰怒て申けるは、御邊の心には曹操を正き人と思ひ玉ふか。董承が曰、人の聞んも畏し、聲を低し玉へ。馬騰罵て申けるは、生を貪り死を怕るゝ者とは大事を議すべからずとて、又起て出んとす。董承言を緩して探り見るに、果して忠義の心いつはり無見えければ、書院に伴ひ行て低語けるは、我元來曹操を誅する計を運せども、若は足下の詐て探り見ん爲に來り玉ふかと危めり、決して忠義の御心あらば、何しに藏し申べきとて、乃ち密詔を取出して見せければ、馬騰齒咬をして申けるは、足下もし内應し玉はゞ、某は西涼の大軍を起して、必ず都へ攻上るべしとて、髮鬚みな倒に豎あがり、感激して、口中より血を流す。董承同志の人々を召出して義狀を見せければ、馬騰も名字を書のせ、盟を爲て申けるは、今すでに六人志を合す、若十人に及ぶ時は、事必ず成就せん。董承が曰、朝廷の舊臣を見るに、忠義兼備りたる人は稀なり、容易に語らば反て禍の本と爲ん。

汝等は曹丞相を殺んと巧か、我必ず訴人に出ん、董承は證據に立玉へ。种輯驚き怒て申けるは、忠臣は命を惜ず、我たとひ死すとも漢の鬼と爲て賊を討ん。董承大に笑て曰、我等さきより此事を議し居たるに、二人の來り玉ふを見て心を量ん爲に戯たり、此を見玉へとて、天子の密詔を出しければ、种輯、吳碩ひらき見て共に涙を流しける。董承乃ち義狀を取出して二人の名字を書のせければ、王子服喜て申けるは、皆これに御待候へ、吳子蘭を召來んとて走り出たりしが、須臾にして伴ひ來る。吳子蘭も義狀に名字を記し、共に靜なる密室に入、酒を飲で計を議するに、又外より西涼の太守馬騰きたれりと報ず。董承いそぎ人を出して、此間病に臥て見ること能はずと云せければ、馬騰怒て申けるは、我昨日滕華門にて、恩賜の御衣を披て出玉ふを見たり、何とて虛病して對面し玉はぬぞ、我すでに本國へ回らんとす、事の故ありて此に來れり、然るに情なく見え玉ふこそ心得ねと深く恨ければ、董承これを聞て已ことを得ずして出迎ふ。馬騰内に入て申けるは、某は西蕃の守たるを以て、今天子を朝拜す、本國に回ること近に在、國舅は天子の御外戚、國の大老なるを以て、謹で來り禮する所に、何ゆゑに輕んじて逐出さんとはし玉ひしぞ。董承申けるは、近ごろ病に染で、速に出て迎へ奉らず、罪の大なること山海の如し。馬騰申けるは、足下の面は春色を含で、病ありとは見えず。董承答ふべ

けるは、御邊は曹操を殺んと巧玉ふか、我この事を訴へん。董承哀で申けるは、御邊もし訴人に出ば、漢室この時に滅亡せん。王子服が曰、これ戲なり、御心を安じ玉へ、われ累代漢の恩を蒙りながら、爭か不義の行をせん、願くは一臂の力を扶け、共に國賊を誅すべし。董承が曰、御邊果してわれを助るの心ある時は、天下の幸甚なり。王子服申けるは、密なる處に入て義狀を書、三族を棄て忠を盡を本とし、天下の爲に賊を伐の計を成ん。董承喜で密室に入、絹を取出して義狀を書、自ら名字を押ければ、王子服も名字を書のせ、將軍吳子蘭は我と交を結こと深くして、忠義の心ある者なり、此事を語らば必ず喜で力を盡さん。董承申けるは、朝中にも長水校尉种輯、議郎吳碩二人なほ漢を思ふ心あり、好隙も有ば此事を談べしとて計を議し居たるに、暫ありて外より報じて、种輯、吳碩きたり玉へりと申す。董承手を扑て王子服に申けるは、さればこそ此者共も御獵より回て、曹操を疾の心起り、我に告んとて來れる者なり、是天の助ならん、御邊は先かくれ玉へとて屏風の陰に藏しおき、自ら出迎て書院に請じ、坐定りて种輯申けるは、御獵より回て足下も定めて恨を含の心あらん。董承が曰、恨ありても爲べき樣候はず。吳碩申けるは、若力を合する者あらば、我誓て國の賊を誅せん。种輯申けるは、天下の爲に害を除く、命を失ふとも何ぞ惜ん。時に屏風の後より王子服走り出て申けるは、

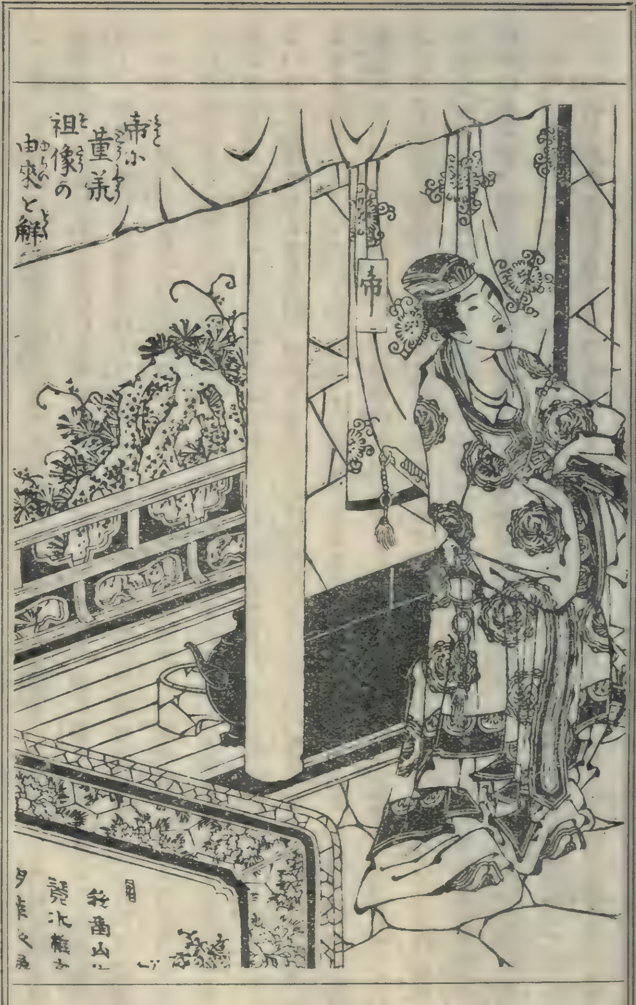
色あり。切開て出せば、乃ち素き絹に血を以て書たる密詔なり。其詔に曰、

朕聞、人倫之大、父子爲レ先。尊卑之殊、君臣爲レ重。近者操賊出レ自二閣門一、濫二叨佐輔之階一、實有二欺罔之罪一。結二連黨伍一、敗二壞朝綱一、勅賞封罰皆非二朕意一。夙夜憂思、恐二天下將危一。卿乃國之元老、朕之至親、可レ念二高皇創レ業之艱難一。糾二合忠義兩全之烈士一、殄二滅姦黨一、復二安社稷一、除二暴于未萌一、祖宗幸甚。愴惶破レ指書レ詔付レ卿。再四愼レ之、勿レ令レ有レ負。建安四年春三月詔

董承見了て涙を流し、誠に一天の君として奸臣に惱され、爲ん方なさに我を召て、何とぞ頼んとは思し食けれども、事の洩んことを怕れて、樣々に御心を盡されたる者なりとて、御痛はしく憐に思ひければ、寢食共に廢れて行坐不レ安、その詔を袖に入て書院に立出、再三ひらき誦ども施べき計なし。几の上に披き展て、曹操を滅さん計を思ひ煩ひ、少し睡居たるに、日比睦く交はる侍郎王子服と云もの、案内もなく出來り、直ちに書院に入たるに、董承几に倚て睡、袖の下に素き絹を隱して、微し文字の見えければ、密に窺ひけるに朕の字あり。扨は密詔なんど賜りたると怪て、靜に取て懐に藏め、董承を喚起して、好も睡り玉ふ人かなと云ければ、董承打驚て詔書を尋れども見えず。膽を冷し魂を失て震ひ戰ければ、王子服申

打見て笑て申けるは、扨々これは好玉かな、其御衣をも見せ玉へ。董承背に汗を流し、已こと
を得ずして遂に卸で渡しければ、曹操よく内外を採り見て、日の影を受て詳に窺ひ、那後わ
が身の上に重ね被て玉帶を繫、左右の者に向て、如何に我に似あうたるかと云。みな能御長に
應じて似合たりと答ければ、曹操打笑て申けるは、此はわが長に能應じたれば、直に申受べし、
別に又この回禮を致さん。董承が曰、君の恩賜かるべく布すべからず、丞相いかなれば由なく
所望し玉へるぞ。曹操が曰、御邊この中に計あるにては候はずや。董承容を改めて申けるは、
某なんぞさる事あらん、丞相もし其御疑にて候はゞ、御衣も玉帶も共に獻るべし。曹操
が曰、御邊たまく君の賜を受、われ何ぞ漫に取ん、只聊の戯なりとて返しければ、董
承虎口をのがれたる心地して急ぎ私宅に回り、御衣を見れ共一物も無。さきに天子頻に我を顧
て、御手を擧て指さし玉ひしは、何さま事の仔細あらんと思ければ、其夜は眠こと能はず、案じ
煩うて又玉帶を見るに、面は玲瓏たる白玉、小龍の花を穿つ模樣を爲て、裏には紫の錦を
襯とせり。卓の上に之を展て、時うつる迄守り居けるが、不覺心疲て睡ける。折境傍なる燈
火風に吹れて丁子頭を落し、玉帶に燒ついて薰ければ、打驚て夢さめ、急に玉帶を取て見る
に、裏に重たる紫の錦すこし破て、素き絹露れたり。此に彌心付て窺ひ見れば、幽に血の

ことなし、高祖つねに其德を稱し玉へり、此に依て御側を離ず。帝嘆じて、眞に社稷の臣なりと宣ひて、折境あたりに侍る人も無りしかば、密に董承が前に寄て、卿いまより朕が側に立て、張良、蕭何が如くなれと宣ふ。董承頓首して申けるは、臣なんの功ありてか如此なることを得ん。帝宣ひけるは、先年卿が長安にて難を救し功を思て、朕片時も忘るゝことなし、何を以てか其功を顯ことを得ん、卿この衣服と玉帶とを著て、朕が左右を離るゝこと勿れとて、親ら御衣を卸せ玉ひ、玉帶を副て下し賜りければ、董承再拜して之を受、暫く有て退出す。早この由を曹操に告る者あり、帝いま董承と功臣閣へ上り玉ふと云ひければ、曹操速に馳來る。董承も已に宮門まで出けるが、向より曹操があわたゞ敷きたるを見て、急に避べき路なければ、怖戰て門の旁に立居たり。曹操怪み問て申けるは、國舅いづくへ行玉ふぞ。董承答へて曰、適に天子の召に應じ、朝に入て見え奉りたれば、錦の御衣と玉の帶とを下し賜へり、今退て私宅に回る。曹操が曰、それは今なんの故ありて賜たるぞ。董承が曰、某先年長安より還幸の路次に參り合、賊徒を防し功あるを以て、之を賞して下し賜へり。曹操が曰、ぬいで我に御見せ候へ。董承心に思ひけるは、向に帝の御氣色、いかさま此中に密詔などや入置せ玉ふらんと、危み怕れて卸かねたるを、曹操士卒を下知して、あれ解來れとて、是非なく帶を奪とり、能々


帝に董承祖像の由来を解く
帝

董承

に召よせたるぞやと宣へば、董承頓首して申けるは、臣なんの功ありて陛下の左右に侍することを得ん。帝相伴て殿中を出させ玉ひ、太廟に入て直ちに功臣閣に登り、自ら香を焚て漢家歴代の祖宗を拝し、壁に掛たる畫像を御覧あるに、中間に漢の高祖を畫て、二十四代の帝を兩邊に列ねかけたりければ、董承に向ひて、朕が先祖は如何なる人ぞと問玉ふに、董承申けるは、乃ち陛下の帝業を開き創め玉ひし漢の高祖皇帝なり、何ゆゑに御尋候ぞ。帝宣ひけるは、朕が先祖いづくより身を起して此基業を開き玉ひしぞ、卿試に其由來を伸よ。董承打驚て、陛下聊臣に戲れ玉ふか、聖祖の事如何んぞ知し食れぬことの候べきと申しければ、帝宣ひけるは、朕故ありて卿に問、辭すること無して速に說。董承申けるは、高祖皇帝泗上の亭の長より身を起し、三尺の劍を提て白蛇を碭山に斬、義兵を揚て四海に縱横し、三年に秦を亡し、五年に楚を亡し、大漢四百年の天下を開て、萬世の基を立玉へり。帝嗟て宣ひけるは、祖父如此に英雄なれども、子孫には朕が如く懦弱なる者あり、此ほどにも劣る者か、兩旁に立ちたるは如何なる人ぞ。董承申しけるは、上は留侯張良、下は酇侯蕭何なり。帝宣ひけるは、此二人いかなる功ありて側に立ぞ。董承が曰、高祖基業を開き玉ふは、皆この二人の功なり、張良は運二籌於帷幄之中一決二勝於千里之外一、蕭何は國家を鎭め百姓を懷け、兵糧を通じて不足なる

趙高に過たり。帝宣ひけるは、朝廷の內こと〴〵く曹操が耳目なり、誰か今忠を盡して此禍を除もの有ん。伏完申けるは、若陛下の親き國戚に非んば、此大事を謀べからず、臣は年衰て威名も無、幸に車騎將軍董承は、權よく人を服して志實に忠を存ず、此人を御頼あらば、必ず能功を成ん。帝宣ひけるは、董承は昔朕を西都に救て、李傕、郭汜が難を遁れしむ、其志の程を朕も能知れり、速に召て事を議ん。伏完申けるは、陛下に近侍する者も、皆曹操が內應の者共なり、萬一この事洩る時は、却て大なる禍を引出さん、臣よく愚案を運し候に、尋常にては叶ふまじ、董承を召て、何となく御衣一領玉帶一條を賜ひ、帶の裏に密詔を縫入て置玉はば、董承必ず家に囘て開き見るべし、然る時は元より忠義の志深きに、彼が娘いま陛下の貴妃なれば、旁默止がたくして、晝夜に計を運べし。帝この義まことに然るべしとて、密に人目を忍で御指を咬やぶり、血を瀝て詔を書、伏皇后に命じて、玉帶の裏に紫の錦を重ねて縫こめさせ、自ら錦の御衣と彼玉帶とを召され、勅を下して董承を招き玉ふ。董承いそぎ參內しければ、帝近く召て宣ひけるは、朕昨夜伏皇后と共に長安より還りたることを物語して、李傕、郭汜に追れし苦み、御身の忠を盡して救はれし功勞を思ひ出し、覺えず淚を流せしが、御身の大功を、今まで恩賞も無て捨置たることを悔み、今よりは朕が左右を離しむべからずとて、頻

羽長嘆して、今日奸雄の曹賊を殺さずんば、後に御覽候へ、必定天下の禍を成べしとぞ申ける。

○董承密受衣帶詔

帝は獵場より還幸なりて、其夜御涙を押て、密に伏皇后に告て宣ひけるは、哀かな朕位に卽てより、逆臣打續て世に出、初め董卓が殃を受て、後に李傕、郭汜が亂に遭、一日片時も安き事なかりしに、曹操を得て心喜び、此ぞ天下を平定して、朕が股肱とも成ぬべき者なりと頼たるに、案の外に國の政を擅にし、常に奸計を爲て天下を奪んとするの巧あり、朕殿上に在て、針の氈に坐するが如し、今日獵場にて鹿を射取、朕が前に立塞て萬歳を呼れし心は、大逆の計を人に隱さず、己が威勢を試ん爲なり、朕夫婦又いかなる憂目に罹て、何くに死んも知がたしとて、伏顚で悶玉へば、伏皇后宣ひけるは、朝廷の百官みな四百餘年漢の祿を費して、今一人も忠を盡して國の殃を救んと思ふ者の無こそ哀けれとて、共に哭玉ふ。時に一人外より來り、無用なるに何を哭玉ふぞ、臣ねがはくは天下の害を除んと云者あり。帝驚て見玉へば、伏皇后の父に伏完と云人なり。乃ち御心を安じて、皇丈朕が腹中の事を知れるかと宣へば、伏完申けるは、許田に射鹿こと誰か齒を切ざらん、曹操が天下を奪の巧は、昔の

る。衆の百官下將校に至るまで、金箭を見て帝の射させ玉へると思ひしかば、盡く走り集て同音に萬歳を呼。時に曹操馬を飛して馳來り、帝の御前に立ふさがりて、我こそ射たれと云て萬歳を迎ければ、諸人みな色を失て興を醒す。玄德の後に在ける關羽、心怒て眼を張眉を揚、刀を提げて出んとしけるを、玄德これを止めん爲に、手を動して目加せし玉へば、關羽怒を押て出ざりけり。曹操時に玄德を顧ければ、玄德急に賀して、丞相の神射世に及もの有じと申さる。曹操打笑て、此みな天子の洪福なりと云て、了に雕弓金箭を己が腰に挾んで、後まで天子に返し獻らざりしかば、朝廷の老臣嘆ずと云もの無りけり。其より酒宴數刻に及て、帝還御なりければ、各みな都に回る。玄德ひそかに關羽を召て、今日なにとて躁く怒を發したるぞと問玉へば、關羽申けるは、君を欺き上を僭を見ては、某しばらくも忍がたし、何故に目加して停玉ひしぞ。玄德の曰、鼠に投打するに器を忌は、假令鼠を殺し得ても、器の損ぜんことを畏る故なり、曹操奸計を生じ、獵に事よせて己が威勢の程を見ん爲に、帝と常に馬を雙べ、四方に手下の大將を置て、朝廷の舊臣を一人も前に近付ず、簒逆の心すでに露たり、我急に汝を停たるは、曹操が手下に十萬の精兵あり、假令曹操を斬たりとも、手下の者共必ず我等を殺んことを畏て也、然る時は事の成ざる而已ならず、却て天子の御身に禍を引出さんと云玉へば、關

は、神氣を爽にして身快らん、一なり、耀レ武揚レ威四方に示す、二なり、軍兵は閑なれば困ず、困ずる時は疾を生ず、奔走して逸すること無、三なり、天子及公卿までも、弓射ことを習ずと云こと無、四なり、臣すでに用意せり、速に御出あるべしと奏し申せば、帝やむことを得ずして雕弓、金鈚箭を携へ、已に逍遙馬に召れ、玄德を伴ひ行べしと詔ありければ、玄德乃ち關羽、張飛と弓矢を挿み、武具を執て數十騎にて相從はる。見物の貴賤群集して、あれこそ劉皇叔よ、兵の出立げにも爽なりとぞ申ける。曹操は爪黃飛電と云る名馬の太く逞に乘て、十萬餘騎の精兵を從へ、二百里を打圍せて、兼ての思案なれば自ら天子の御後に沿、手下の大將を華やかに出立せ、武具を執て前後左右に簇擁せしむ。此に依て朝廷の百官は、帝の御前に近付こと能はず、皆遙の跡に引さがりける。天子は雕弓、金鈚箭を御手に攜へ、其餘は箭に盡く名字を錄す。已に許田に到て玄德を御前に召れ、朕が今日の獵は皇叔を慰ん爲ぞと宣ふ所に、草の中より兎を追出せり。帝あれ射取と宣へば、玄德馬を馳て丁ど射る。其矢正中にあたりて兎つひに僵ければ、帝限なく叡感ありて、御馬山の坡に到りける時に、荊棘の中より鹿一つ奔り出ければ、帝御手づから三度まで射玉へども皆中ず。傍なる曹操に、卿これを射とめよと宣へば、曹操天子の雕弓、金箭を取て八たと射るに、鹿の背に矢あたりて、小篠の上に臥たりけ

は、天の助哉と思し食て、曹操然るべく官を定めよと宣ひければ、曹操承りて左將軍宜城亭侯に封ず。玄德恩を謝して共に朝を退出せられければ、是よりして劉皇叔とぞ申ける。曹操すでに相府に回りければ、荀彧を初めとして、文武の大將ひとしく來て申けるは、今日天子玄德を尊で叔父とし玉ふ、恐らくは丞相の害ならん。曹操が曰、われ玄德と相親こと兄弟の如し、何とて害を成こと有ん。劉曄申けるは、某よく玄德を見るに、世の英雄にして久しく人の下に居者に非、つねに御用心なくては叶まじ。曹操打笑ひ、好亦交三十年、惡亦交三十年、好も惡も我心に主張ありとて、此より玄德と彌相親み、出る時は車を共にし、坐する時は席を共にす。或日程昱來て天下の事を論じ、今呂布滅て四海震動す、霸王の道を行ふべきかと云ければ、曹操申けるは、未可行、朝廷に尚股肱の舊臣多し、輕々しくせば害を生ぜん、我天子を許田の獵に請じて、諸人の氣色を窺ひ見るべしとて、犬鷹の用意して兵を城外に調へ、自ら宮中に入て許田の御獵を催べしと奏しければ、帝宣けるは、田獵は聖人の正き道にあらず、朕此故に元より好ず。曹操申けるは、古の帝王、春は蒐し夏は苗し、秋は獮し冬は狩し、四時郊に出て武を天下に示し玉へり、況や今四海大に亂れて、互に戰ひ爭ことをなす、若出て獵をし玉ふ時は、其利四あり、陛下つねに深宮の中に御座ありて、神力疲病す、今弓馬の間に馳騁し玉ふ時

其間は車騎將軍車冑を留めて、權に徐州を守らしめんとて、日を經て都に著ければ、諸軍勢に恩賞を與へて重く持なし、丞相府の左を玄德の旅館にしつらひ、次の日相作て朝廷に出。玄德朝服を具て地下に拜舞せられければ、帝勅して殿上に召る。曹操その功勞ある由を奏しければ、帝玄德の先祖は如何なる者ぞと勅問あるに、玄德覺ず淚を流されければ、帝怪て其故を問せ玉ふ。玄德謹で奏し、今勅を承て覺ず感傷の意を生ず、臣が先祖は中山靖王の後胤、景帝の玄孫劉雄が孫劉弘が子なり、先祖劉貞は涿鹿縣陸城亭侯に封ぜられしより、家緣流落して、臣に至て先祖を辱しむ、此故に淚を流して候と申されければ、帝打驚せ玉ひ、扨は漢室の一族なり、家の世譜を取きたれとて、宗正卿に命じて前に進で讀せらるゝに、曰、

漢景帝生十四子、第七子乃中山靖王劉勝、勝生陸城亭侯劉貞、貞生沛侯劉昂。昂生漳侯劉祿、祿生沂水侯劉戀、戀生欽陽侯劉英、英生安國侯劉建、建生廣陵侯劉哀、哀生膠水侯劉憲、憲生祖邑侯劉舒、舒生祁陽侯劉誼、誼生原澤侯劉必、必生潁川侯劉達、達生豐靈侯劉不疑、不疑生濟川侯劉惠、惠生東郡范令劉雄、雄生劉弘、弘不仕、劉備乃劉弘子也。

帝聞し食れ、是乃ち朕が皇叔なりと宣ひ、御淚を流して便殿に請じ、叔姪の禮を爲て酒宴を賜ひ、御心の內には、今曹操威を專にして天下を奪んとする計あり、朕浩る英雄の叔父を得たる

地にすて笑て申けるは、我も亦よく張遼が忠義を知、この故に戯るゝ也とて、自ら縄を解衣服を與へければ、張遼乃ち降參す。曹操限なく喜び、假令わが妻子を殺したりとも、何ぞ舊き讐を心に思はんとて、中郎將關内侯に封ず。臧霸は兗州に在て此消息を聞、われ今は誰にか依ん、惟張遼と一處に成んとて、手勢數百人を引て馳來りしかば、曹操重く用ひけり。臧霸又泰山に引こもりたる者共の方へ使に遣し、利害を說て招きければ、孫觀、吳敦、尹禮は來りて降りしかども、昌豨一人は從はず。曹操乃ち臧霸を瑯琊の相に封じ、孫觀等に一々官を授て青州徐州を守らせ、呂布が妻子竝に貂蟬等を皆都へ送りのぼせ、貯たる金銀を士卒に分ち、遂に師を收めて許昌へぞ回りける。

○曹操許田射鹿

曹操徐州を平定して下邳城を打立、都を指て上るに、人民こと〴〵く香を焚て路の衢に出むかへ、劉玄德を此處の太守として留め玉へと願ひければ、曹操申けるは、劉使君は莫大の功勞あるに因て、都に上て天子に見え玉ふ、後に又來り玉ふべきぞとて打出れば、百姓頓首して喜けり。曹操馬を竝て玄德に申けるは、御邊先都に上り、天子に見て後再び來て徐州を治め玉へ、

張遼囚はれて曹操を辱しむ
張遼

曹操
玄德
関羽

玄德打諾て居玉ふに、曹操その意を知て呂布を前に引出さしむ。呂布申けるは、丞相の患とし玉ふは某に過ず、今すでに服しぬる上は、天下は掌の内にあらん、丞相歩將として某を騎將とし玉はゞ、四方を定むること豈道に足んや。曹操笑て玄德に申けるは、今呂布を如何せんと思玉ふぞ。玄德對て曰、昔し彼が丁建陽と董卓とに仕へしを知玉はずや。呂布これを聞て大に驚き、玄德を八たと睨で、此人は何とて信なきぞと云に、曹操武士に命じて、引出して頸を縊よと下知すれば、呂布引立られながら跡を顧て、大耳の賊、わが轅門に戟を射たる恩を忘たるかと呼はる時に、大音あげて、呂布匹夫なにとて命を惜ぞと云て來る者あり。曹操これを見るに、武士共張遼を引て階下に居ければ、急に下知を傳て呂布を門外に縊殺させ、首を斬て路頭に曝し、其のち張遼を召て、此人は元來よき男つき哉、惜き者を斬んよなと云ければ、張遼申しけるは、我兩度まで濮陽にて對面せしが、汝なにとて忘たるか。曹操笑て、汝われを知たるかと云に、張遼齒を切て可レ惜々々と呼はりければ、曹操なに事ぞと問に、張遼申けるは、汝を濮陽の城にて燒んとせし時、惜らくは火の大ならざる事を、火もし大ならば、汝が如き國賊を燒殺さん。曹操以ての外に怒り、敗將なんぞ我を辱しむると云て、自ら劍を拔て斬んとするを、玄德と關羽と急に推止めて申けるは、張遼は心の正き士なり、願くは宥し玉へ。曹操劍を

ずとせば、汝なんぞ逆臣の呂布を助けたる。陳宮申けるは、呂布は計なき者なれども、汝が詐多して人を欺き、奸雄にして上を犯が如の心なし。曹操申けるは、御邊は自ら智謀を頼む、今生捉れて心如何ん。陳宮傍なる呂布を指さして申けるは、但この人我が計を用ひず、若わが計を用ひば、今日なんぞ如此ならん。曹操笑て申けるは、今御邊の身いかゞせんと思へるぞ。陳宮申けるは、臣として忠ならず、子として孝ならず、惟速に死せんことを思ふ。曹操が曰、御邊老母あり、此を如何せん。陳宮が曰、われ聞、孝を以て天下を治る者は、人の親を殺さずと、老母の存亡將軍の心にあり。曹操が曰、御邊妻子あり、此を如何せん。陳宮が曰、われ聞、仁政を天下に施ものは、人の祀を絶ずと、妻子の存亡も將軍の心にあり。曹操留戀の心起て、殺に忍ざる氣色なりければ、陳宮申けるは、願くは我速に誅を被り、軍法を明にすべしとて、自ら起て樓を下れば、牽住れども住らず。曹操しきりに涙を流し、送て外に出て申しけるは、陳宮が老母妻子を盡く都に上せて、我府中にて苦に養へ、怠る者は必ず斬んと下知をなせば、陳宮は此を聞ながら跡を顧ず、默然として頸をのべ、快く斬れければ、諸人みな涙をぞ流しける。曹操も其志を憐み、棺槨を具へて都に送り、妻子に與へて厚く葬らしむ。此間に、呂布哀で玄德に告て申けるは、公は座上の客、われは階下の虜れなり、願くは一言を以て此苦を寬し玉へ。

櫓の上より呂布が戟を投出して、城門を開きければ、大軍一齊に亂れ入。城内の兵あわて騒で大半降人に爲ければ、高順と張遼とは、西の城戸洪水深うして出べき樣なく、盡く生捉れけり。陳宮は南の門に支へて戰ひけるが、徐晃に出合て擒にせらる。曹操樓門に上て、御方の勢に法を出して人民を安じ、玄德を請じて傍に坐せしめ、一千人の精兵を遣して呂布を拖出さしむるに、長一丈の男を餘りに強く縛たれば、團々として毬の如し。呂布叫んで、繩あまりに急なり、少し寬めよと云ければ、曹操申けるは、虎を縛は急にせでは叶まじ。呂布が曰、われ願くは一言を伸て死ん。曹操少し寬めんと云に、主簿王必すゝみ出て申けるは、呂布は尋常の者に非、況や其手下の勢みな此にあり、必ず寬め玉ふべからず。曹操げにもとて、呂布に向て申けるは、我寬めんと云ども主簿更に從はずとて、降參の者を召して一々對面するに、呂布ひそかに侯成、魏續が傍に在を見て申けるは、我つねに汝等を用ること薄からず、何とて右情なきかと憾ければ、宋憲あざ笑て、汝みだりに女房の言を用ひて、大將を芥の如くす、何ぞ薄からずと云んと申ける時に、兵共高順を縛て來りければ、曹操われに降んやと問に、首を垂て答ざりしかば、了に引出して誅せしむ。其次に陳宮を引出しければ、曹操申けるは、御邊相わかれて後恙なきや。陳宮が曰、汝が心根の正からざるを知て、我さきに汝を捨たり。曹操が曰、われを正から

を合圖に、呂布を生取て門を開かん、其時を違へず急に攻入玉へと云ければ、曹操限なく喜び、檄文を書て城中へ射入ける。其文に曰、

今奉ニ明詔一征ニ伐呂布一。如有下抗ニ拒大軍一者上、滿門誅滅。如城内上至ニ將校一、下至ニ庶民一、如獻ニ呂布之首一者、重加ニ官賞一。大將軍曹　押字

次の日の曙に、城外の寄手數十萬、一度に金を鳴し鼓を打て鬨の聲を揚、天を動し地を震て、四方より攻のぼりければ、呂布大に驚き、自ら走り廻りて攻口を堅く守らせ、戟を舞して打入る敵を支へ戰ふ。時に合圖を乖ず城の上に白き旗を指擧たれば、曹操すはや約束の旗を出したるは、彌急に攻よとて、喚き叫で競ひ進む。飛矢は雨の如く、迸る鐵砲は雹の如し。已に日中まで餘りに烈く攻たれば、兩方の討死上が上に重りて、俄に山を築あげたり。寄手の勢すこし引退しかば、呂布戰ひ疲て椅子の上に睡り居たるに、兼ての約束なれば宋憲走り來り、左右の人を追のけて先呂布が戟を奪ふ。魏續心得たりとて、押へて呂布を縛ければ、呂布こは如何にと驚き、寄や者共と呼はるに、宋憲が手下の勢夥しく驅來て、少とも呂布を働さず。魏續矢倉の上より白旗を執て招けば、曹操が大軍一度に來る。魏續大音あげて、已に呂布を生取たり、盡く入と呼はれども、夏侯淵もし詐の計もや有んとて、心疑て輕々しくは進まず。宋憲

とて、引出して斬しめんとす。高順等こと〴〵く嘆て一命を乞ければ、呂布牙を嚙で申けるは、法令を犯せるの罪、斬では叶べからずと云ども、汝等が嘆に免じて百杖打ん。諸大將なほ哀で乞ければ、五十杖打て免しけれども、侯成が背は血走りて花楓の如し。呂布は怒の氣なほ已ず、酒も猪も盡く棄させしかば、諸大將みな安からず思ひけり。宋憲と魏續と二人打つれ、侯成が陣に行て事の樣を問に、侯成淚を流して申けるは、今日もし御邊達の救に非ずんば、我必ず殺さるべし。宋憲申けるは、呂布みだりに女房を重んじて、大將を芥の如に輕んず。魏續申けるは、曹操が大軍四面を圍み、洪水墻を涵す、我等討死すべき樣もなし。宋憲が曰、この處にて討死せんより、東の關門ばかり幸水も無れば、倡や呂布を捨て何方へも落行ん。魏續奮然として申けるは、何ぞ落ゆくと云こと有ん、呂布を生取て曹操に降らん。侯成申けるは、此義尤しかるべし、我馬ゆゑに浩る責を受たり、呂布が賴とするは赤兎馬なれば、我先この馬を盜で曹操に獻り、計を定めて攻やぶるべし、御邊二人は跡に殘りて、呂布を生取玉へとて、夜深て廐を窺に、番の者共こと〴〵く寐入ければ、軈て赤兎馬を引て打のり、東の門より走り出るに、魏續と宋憲と送り出して馬ぬす人よと呼はり、詐て追かくる體をなす。侯成は曹操に見えて赤兎馬を獻り、右の趣を語りて宋憲、魏續等が內應の事を語り、城の上に白旗を立る

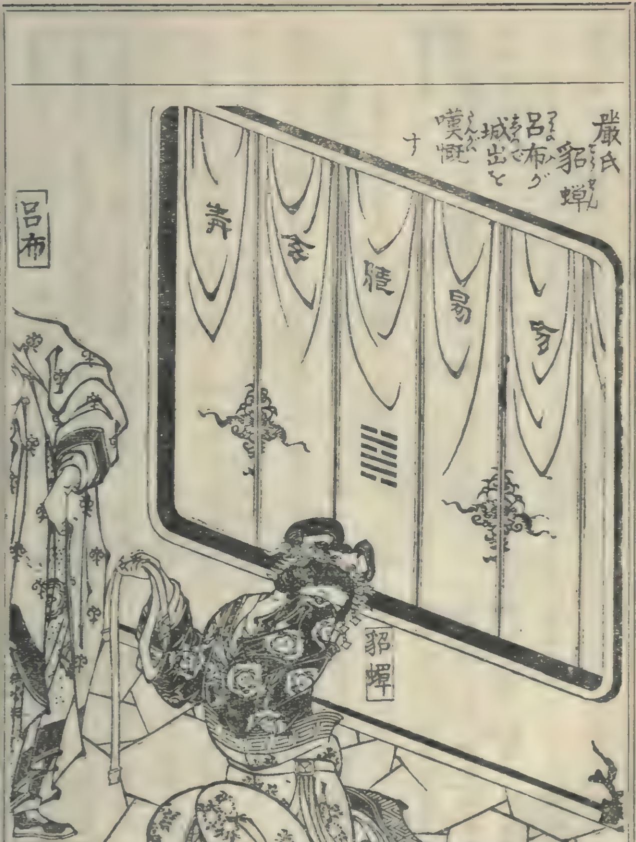
擧に城を破るべし。郭嘉進み出て曰、某一の計あり、御方の利二十萬の勢に比すべし、呂布勇なりとも爭か逃れん。荀彧傍より笑て申けるは、沂水と泗水とを塞かくるにては無か。郭嘉が曰、實に然り。曹操限なく喜び、人夫二萬を擇で沂水泗水の流を引、大軍を皆高き處に移さしむ。城中の者共、ある夜俄に物さわがしかりければ、こは如何にと驚く所に、洪水壕に溢て夥しく城中へ入ければ、急に此由を告るに、呂布申けるは、我赤兎の名馬あり、水を渡ること平地の如し、何の怕か有んとて、只明昏酒を飮て居たりしが、或時鏡を開き見て驚て申けるは、我酒色を過して身體大に衰たり、今より後は堅く戒べし、城中の者共少にても酒を飮もの有ば、必ず首を刎て戒とせん、堅く禁酒の法を守れとぞ觸たりける。元より大將侯成馬十五匹あり、馬飼共ひそかに寄合、ことごとく盜出して玄德に獻り、降參せんとて引て出けるを、侯成聞付趕かけて斬殺し、馬を取返しければ、諸大將みな相賀して集り、酒五六斛猪十四五を用意して、祝を爲んとしけるが、侯成自ら酒五瓶と猪一匹とを呂布が前に攜へゆき、將軍の虎威に托て馬盜人を追付て取かへして候へば、諸大將みな賀をのぶ、此故に些の酒を用意し、猪を獵て一笑をなす、先將軍に進めて寸志を表すと云ければ、呂布勃然として怒て申けるは、我禁酒の法を出して堅く戒る所に、汝酒を用意して諸人を集むるは、共に志を結て我を殺さん爲か

呂布勇なりと云ども、背に女を負たれば快くも働得ず、萬一傷を被らんことを恐れて、圍を破り得ざる所に、後より徐晃、許褚を先として、曹操が大勢殺到し、矢を放つこと雨より繁く、呂布を逃すなと聲々に呼はりければ、遂に一人も通ること能ずして、空く下邳城に回り、上下氣を墮して勇める儀勢もなし。呂布は心の內悶え苦て、日夜酒を飲でぞ居たりける。曹操は城を圍て已に六十日に餘れども、城の內更に弱りたる色なければ、心の內安からざる所に早馬來て、河內の張揚元より呂布と好ありて、此城の後攻をせんと企しに、手下の大將楊醜と云もの、心替して張揚を弑せり、陸固と云もの之を怒て又揚醜を誅し、兵を引て犬山へ落行たりと告ければ、曹操驚き、其陸固を生て置まじとて、大將史渙を遣し、追付て打殺さしめ、手下の大將を召て申けるは、我この城を圍て二月に餘れども、城さらに弱ず、北に西涼の憂あり、東に劉表、張繡が禍あり、我心片時も穩ならず、今張揚事を起して、心腹の憂を爲んとせしに、幸にして自滅せり、此城急々に落べきに有ねば、打捨て都に回んは如何にと問に、荀攸諫て申けるは、甚だ然るべからず、某よく思ふに、呂布勇あれども計なし、今大に敗て氣を墮し力を失ふ、其三軍は大將を以て主とす、大將もし氣を墮時は、諸軍の心爭か震ん、陳宮は計あれども甚だ遲し、今呂布が氣力の調はず、陳宮が計の決せざるに乘て、火急に攻る程ならば、一

は王法に無親、みな〱能愼め、我も今より日夜甲を卸まじと云玉ふに、張飛申けるは、我すでに大將郝萌を生取たれども、何の恩賞にも預らず、曹操が下知は譃ことにあらずや。玄德の曰、爭かさる事有ん、曹操數十萬の大軍を統て、若法令を正さずんば、何を以てか人を服せん、汝必ず怠ること勿れとて、手配を定て用心し玉ふ。去程に許汜、王楷城中に回て呂布に見え、袁術疑を成て更に許容せず、先息女を送り來らば、其後に救はんと約す、速に遣し玉へと云ければ、呂布申けるは、今この圍の中に如何して女を送らん。許汜申けるは、將軍自ら出玉はずんば、中々叶まじ、今日は凶神の辰に當れり、城を出るに不吉なり、明日は吉日にて候、戌亥の時刻を待て出玉へ。呂布これに從ひ、張遼、侯成を召て申けるは、明夜わが女を淮南へ遣す、汝二人三千餘騎を率し、車を用意して從ひ來れ、我自ら敵の圍を突て二百里ばかり送り出、汝二人を附て淮南へ行しむべきぞとて、已に時刻に成ぬれば、女を綿に包て呂布自ら背に負、その上に甲を被せて赤兎馬にのり、手に戟を執て、二更の比月すこし明なりければ、城門を開て自ら眞先に進み、張遼、侯成を後備として玄德の陣を蒐通るに、鼓の聲地を動して、關羽が一軍路を攔る。呂布十合あまり戰ひ、横ざまに突て通らんとするに、又張飛が一軍攻きたる。呂布は戰を好ず、隙を窺て走らんとする所に、玄德の勢四方より起り、入みだれて散々に戰ふ。

に落され、今頻に後悔す、大王ねがはくは察し玉へ。袁術申けるは、汝等いま敵に攻められて、身の切なるを憂ひ、詐て女を送らんと云て、我救を求めん爲なり、我なんぞ輕々しく救はん。許汜又申けるは、今もし救玉はずんば、呂布必ず敗れん、呂布一たび敗れば、大王も全こと能まじ。袁術申けるは、呂布は反覆常ならざる者なり、早く女を送り來らば、我その後に國中の兵を起して救べし。許汜、王楷、さ候はゞ、女を送りて再び來らん、必ず救の勢を出し玉へと約して、郝萌と共に下邳へ回らんことを議するに、日の内は敵の用心ありて通り難からん、夜に入て我等は先に進まん、郝萌は跡なる敵を防ぎ玉へとて、密に敵の樣を窺ひ、夜半の比馬を飛して馳通りければ、張飛、なに者ぞ、夜深て大勢馬を早むると云て、一軍を引て蒐出、路を遮て散々に戰ひ、只一合にして郝萌を生捕けり。許汜、王楷は、此間に圍を突て城下に到りければ、内より門を披て扶け入しむ。張飛自ら郝萌を縛て本陣に回りければ、玄德拷問して急ぎ曹操に見え、呂布が袁術に救ひを求る由を告玉ふ。曹操さればこそ程昱が云しに違ずとて、郝萌が頸を刎させ、法を出して申けるは、若呂布を取にがし、其外手下の者を一人にても通したる者あらば、必ず軍法に處すべしとて、晝夜眠ることなく、陣々を堅く守らしむ。玄德諸大將を集て、我いま此路を守て、殊に淮南の正路なれば、呂布必ず此を通るべし、萬一失ある時

り、われ敢て輕々しくは出ずと云ければ、陳宮外に出て長嘆し、我等みな死して、身を葬の地も無るべしとぞ申ける。呂布日夜外に出ず、只嚴氏貂蟬を守て酒を飲居たりければ、陳宮が手に順ふ許汜、王楷と云もの二人、來て見んことを求む。呂布對面して、何とぞ敵を退るの計もや有と問に、許汜申けるは、袁術淮南に在て威勢甚だ盛なり、將軍さきに息女を送て婚姻を爲んと約し玉へり、何ぞ使を馳て救を求玉はざる、若救を得て內外より攻ば、曹操必ず退くべし。呂布この儀げにもと喜び、急ぎ書簡を調へて乃ち二人を使とす。許汜申けるは、某二人君の命を受と云ども、容易には出がたし、一軍道を引て圍を破り、我等を扶け出す人なくては中中叶ひ候はじ。呂布乃ち張遼、郝萌二人に各五百餘騎を付て、淮南の境まで送れとて、其夜の二更に、張遼前に備へ郝萌後に備へて、門を排て突出し、直ちに玄德の陣を蒐通て、已に淮南の境に到り、夜深て敵も皆知らず心安しとて、郝萌は五百餘騎にて許汜、王楷と淮南に進み、張遼は引わかれ、五百餘騎にて本の路より城へ回らんとするに、關羽一軍を引て路を橫ぎりしが、互に顧眄の心ありて、未だ戰はざる所に、城の中より高順、侯成打て出て、張遼を救ひ回る。許汜、王楷は壽春に行て袁術に見え、再拜して呂布が書簡を獻るに、袁術申けるは、向に我使を斬て交を絕たりしが、今又なんの爲に如此なる。許汜申けるは、向に呂布誤て曹操が計


嚴氏貂蟬
呂布が城出と嘆慨す
呂布
貂蟬

ず従ふべしとて、兎角して三日の間出ざりしかば、陳宮見えて申けるは、曹操が大軍すでに勢ひを張て、四面より攻來る、若早く出玉はざる時は、後すべき樣なかるべし。呂布が曰、われ能思案を運に、遠く出るは堅く守るに如ず。陳宮又申けるは、近ごろ曹操都より夥く兵粮を運送せしむ、將軍兵を引て其路を截塞ぎ玉へ、此曹操が爲には大なる毒なり。呂布が曰、この計きはめて好、われ必ず行んとて、内に入て又嚴氏に申けるは、今曹操兵粮を運ぶ、我ゆいて之を撃ん、暫く心を寛して、我還るを待玉へ。嚴氏これを聞て涙に咽で申けるは、君もし城を出玉はゞ、陳宮と高順と定めて城を守らん、我元より二人の間不和にして、常に爭色あることを知れり、君もし外に出玉はゞ、二人事を起さんこと明白なり、此城萬一失あらば、君いづくにか身を置玉ふべき、願くは能察し玉へ、妾昔長安にて君に棄られ、幸に龐舒が情に依て身を藏し、再び君に逢ことを得たり、今又妾を顧玉はぬかとて、聲を放て泣ければ、呂布情に惹れて心の内憂ひ悶え、貂蟬を召て此事を語るに、貂蟬申けるは、君重き御身を輕んじて、必ず外に出玉ふな、片時も別れては妾たれをか頼まんと嘆ければ、呂布申けるは、汝憂ること勿れ、我この戟と赤兎の馬と有内は、天下の人誰か近付ことを得んとて、陳宮を召て、都より兵糧を運ぶと沙汰するは皆詐なり、曹操は計多き者なるに因て、我を引出さん爲に右する者な

を如何なる者と思玉ふぞ、今日もし降參せば、卵を石に投るが如ならん、豈全ことを得んや。呂布怒て劍を拔て斬んとするを、高順、張遼推止め、諫て申けるは、陳宮は忠義の人なり、言みな本心より出、ねがはくは君詳にし玉へ。呂布劍を捨て申けるは、此汝に戲る也、ねがはくは曹操を拒の計を敎よ。陳宮辭して計なしと云に、呂布再三請求む。陳宮申けるは、某が計恐くは將軍用ひ玉はじ。呂布が曰、御邊の良計、われ何ぞ用ざらん。陳宮申けるは、曹操遠く來て勢ひ必ず久しきこと能はじ、若將軍精兵を率して城外に陣を取玉ひて、某に守らせ玉はば、曹操來て將軍を攻ば、某兵を引て後に廻らん、曹操又城を攻ば、將軍又その後より撃玉へ、如此なる時は、十日より内に曹操兵糧に事を缺で、都を指て逃上らん、此乃ち犄角の勢ひ也。呂布喜て申けるは、此誠に良計なり、早く兵を調んとて、自ら武具を用意しける時に、寒氣甚しうして、側なる人みな綿衣を被る。女房嚴氏呂布が衣服を執て問て申けるは、君いま何くへとて出玉ふぞ。呂布が曰、陳宮われに犄角の計を敎て、城を出て陣を取しむ。嚴氏申けるは、昔曹操重く陳宮を用ひて、我子の如にしたれども、彼つひに捨て君に事ふ、君いま陳宮を用ひ玉ふこと曹操に及ず、然るに此城を彼に任せて妻子をも顧ず、一人城を出玉ふか、若一旦變あらば、妾いかゞして君に逢ことを得ん。呂布申けるは、夫人の心宜く事を料ひ玉へ、我必

るに乘て、逆寄にし玉はゞ、此以逸撃勞なり、必ず大に利を得玉はん。呂布申けるは、我ちか比敗軍の後なれば、輕々しく出べからず、敵の來り攻るを待て、我一度に突て出ば、奴原ことぐく亂れて、自ら泗水に溺るべし、此妙計なり、事すでに掌に在と云ければ、陳宮あざ笑て退出す。右て五六日を過ける所に、曹操大軍を驅て城の四方に向城を構へ、曹操自ら二十騎あまりを率して櫓の下に馬を立、呂布に逢んと呼はりければ、呂布矢倉に上て何事ぞと問。曹操大音あげて申けるは、御邊われに於て元より讐なし、袁術と婚姻を結び玉ふと聞て、我自ら攻きたれり、袁術反逆の罪あり、御邊董卓を誅せる功あり、我惟袁術を討て罪を正さんと欲す、御邊もし戈を倒して我に順はゞ、天子に奏して封侯の位を失はじ、然る時は長く富貴を受て功名立べし、若迷を執て降らず、城郭やぶれば一人も生ること能はじ、悔るとも遲からん、速に思案を決し玉へ。呂布申けるは、丞相しばらく退き玉へ、我商議して降るべし。陳宮傍に立居けるが、大音あげて罵りけるは、曹賊よくも頰の皮厚き、汝は君を欺く奸人なり、反て他人を誘れるかとて、弓を取て丁ど射る。其矢曹操が麾蓋に中りければ、曹操怒りて申けるは、我誓て汝を殺し、此憤を散ぜんとて、兵を下知して城を攻んとす。呂布これを見て、曹丞相われを免し玉へ、必ず頸を延て降るべしと云ければ、陳宮色を變じて申けるは、將軍は曹操

迎へて、妻子一族の恙なく城中にある由を語る。玄德限なく喜玉ふ處に、陳珪、陳登來り見ゆ。曹操酒宴を設て賀をのべ、自ら中座に據て、左に玄德右に陳珪、文武の諸將を兩邊に列ね、累に陳珪父子が功を稱揚して十縣の祿を與へ、陳登を伏波將軍とす。那後下邳城を攻るの計を議するに、程昱申けるは、呂布大に敗れて僅に下邳の小城を賴とす、只ゆる〳〵と攻玉へ、自ら滅べし、若急に攻ば、逃れ難を知て、必ず一命を輕んじ、淮南の袁術と一つに成ん、然る時は由々しき大事なり、不如大將を擇で淮南の路條を守らせ、外袁術を壓へ內呂布を防しめ玉へ、況や呂布が大將に臧霸、孫觀など云畏ろしき者、なほ山東に陣を屯す、是又用心なくては叶まじ。曹操申けるは、此よく我意に合へり、山東の路々は我自ら守ん、淮南の路條は玄德よく守り玉へ。玄德の曰、丞相の尊命、豈敢て違はんやとて、次の日手配を定め、糜竺、簡雍を留めて徐州を守らせ、自ら關羽、張飛、孫乾を引つれて淮南の路を截ふさぎ、邳郡を指て寄玉ふ。

○白門樓曹操斬呂布

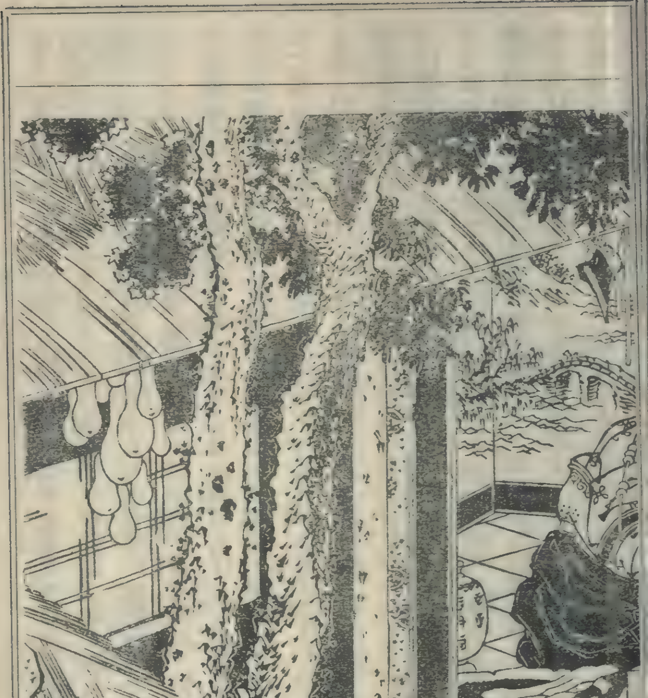
呂布は諸處の軍に打のこされたる兵を引て、下邳の城に楯こもり、泗水の流に逆茂木を引て、兵粮武具を用意しければ、陳宮申けるは、今曹操が勢遠く來る、陣屋の要害いまだ十分ならざ

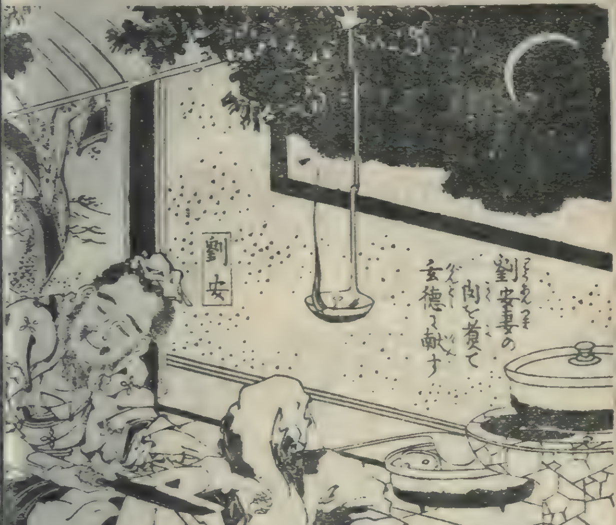
を請取て後、曹仁が勢を引入、呂布が來ると聞て自ら高櫓に登り、大音あげて申けるは、呂布匹夫、なにとて來れる、我は元漢朝の臣なり、豈汝が如き逆賊に從はんや。呂布大に腹を立、この賊を殺さずんば、我なんぞ心を安ぜんとて、兵を下知して城を攻んとするに、忽ち後より喊の聲地を動す。急に高順を出して見せしむれば、一彪の軍馬喚て蒐り、眞先に進むは、頭は豹の如く鬚は虎の如し、乃ち劉玄德の弟張飛なり。丈八の矛を提て高順と火を散して戰ふに、高順なじかは敵すべき、馬を回して逃わしる。張飛勝に乘て呂布が備に蒐入、勇を震て戰ふ所に、又喊の聲四方より起て、曹操が大勢潮の如くに進む。呂布小勢にて支ること能はず、東を望て走れば、張飛、曹操のがさじと追かくる。呂布人馬疲て討るゝ者數を知ず、我先にと逃る所に、又一手の勢行前を攔て、劉玄德の弟關羽八十二斤の青龍刀を提げ、反賊いづくへか走る、快く刀を受よと呼はりければ、呂布是非なく馬を交て戰ふに、後より張飛霹靂の落かゝる如く喚て蒐たりしかば、呂布慌謝て下邳の城へ走るに、侯成兵を引て出むかへ、救て城中へぞ入にける。關羽、張飛兵を收て一處に聚り、互に失散の事を物語し、關羽は向に小沛より沒落して海州に藏れ、此消息を聞て來れりと云に、張飛は芒蕩山へ逃れて山賊を成居たるが、此由を聞て來れりと云て、曹操に見えて禮をなし、次に玄德に見えて共に徐州の城に入ければ、糜竺出

宮も殘少に討れて、吳敦、孫觀等は行方を知ず、夜明て後、陳登が囘忠にて曹操を引入たりと云沙汰しければ、呂布以ての外に仰天して、討のこされたる兵を集め、陳宮と共に徐州へ囘り、城中へ入んとするに、矢倉の上より箭を放こと雨の如なりければ、こは如何にと驚く所に、糜竺城上に立あらはれ、大音聲を擧て、呂布匹夫、汝いつはりて我君の徐州を奪へり、今舊の如く取かへす、早く何方へも落行と呼はりける。呂布問て申けるは、陳珪は其内には居ぬか。糜竺答て曰、われ已に斬て棄たり。呂布色を失ひ、左右を顧て陳登は如何なりたると問にふ、今朝より行方知ずと答ふ。陳宮怒て申けるは、常に某が諫め申せしは、沽るべしと推したる故なり、然るに將軍彼に迷はされて某を用ひ玉はず、今如此なるに至ても、猶迷を執て惡人を尋ね玉ふか。呂布後悔すれども及ばず、爲方なさに小沛を指て來る所に、半途にて高順、張遼と出合たり。何とて來れると問に、高順申けるは、某よく小沛の城を守て防ぎ戰ふ所に、陳登馬を飛して馳來り、君すでに曹操に圍れ玉へり、早く行て救ひ奉れ、我よく城を守らんと云り、此に依て取ものも取あへず、兵を引て打出たり。陳宮申けるは、此みな奴が計なり、必ず曹操が勢を引入べし。呂布齒を切て申けるは、我つねに陳登父子を重んずること、汝等が知ところ也、然るに我を出拔て曹操に内通す、誓て恨を雪べしとて、小沛を指て打向ふ。陳登は城

此故に少しも危ことなし、呂將軍は先小沛の城を救玉ふべきに、何とて此に來り玉へる。陳登申けるは、是御邊を疑うて也、油斷し玉はゞ害に遇玉はんとて、高櫓に上て望み見るに、曹操が大軍すでに壕の邊まで推寄たりければ、密に內應の書簡を三通書て箭の根に付、夜中に曹操が方へ射下して、次の日別て出んとするに、陳宮申けるは、此處は我等よく要害に支て危きことなし、御身は呂將軍を勸て小沛の敵を追拂ひ玉へ。陳登われ此由を申んとて、馬を飛して回り、呂布に見えて申けるは、某ゆいて窺ひ見るに、案に違ず孫觀、吳敦等共に野心を挿で、曹操を引入んとす、某よく陳宮と計を合せ、今夜必ず將軍を勸て討しめんと約せり。呂布喜て申けるは、御邊もし先ゆかずんば、我必ず大事を悞らん、再び行て陳宮と計を合せ、今夜火の手を擧て合圖をせよ、我これを見ば急に進んで殺べし。陳登承り候とて、又馳ゆいて陳宮を召出し、曹操が勢ひそかに山を越て攻入、こと〴〵く徐州の城を圍む、今は此處を守ても甲斐なし、速に回て徐州を救玉へと云ければ、陳宮こは如何にと膽を冷し、取ものも取あへず、蕭關を棄て走りける。陳登は關門に火の手を揚て、曹操が勢を引入けるに、呂布は兼ての合圖を乖へじとて、火の手を見ると倖く兵を驅て進み來るに、暗さは暗し半途にて陳宮が勢と出あひ、互に敵ぞと心得て、喚き叫で戰ふ所に、曹操大軍を引て散々に蒐やぶりしかば、呂布も陳

退くべき様なからん、不如この城の金銀兵粮を過半下邳の城へ移し入て、此城の危き時には、退いて下邳の城を頼みとし玉へ。呂布喜て申けるは、汝が教わが意に合へり、徐州は本城なれば敵も偏に目に掛べし、我妻子一族をも下邳の城に移置べしとて、宋憲、魏續二人に命て、妻子并に金銀兵粮を下邳の城に移させ、小沛を指て出ければ、陳珪いまは憚る事なしと喜び、糜竺と計を合せて徐州の城を堅く守り、呂布回來らば一矢射んとぞ用意しける。呂布は斯ることをば夢にも知ず、徐州は第一の城なれども、陳珪を留め置たれば心安し、早く小沛の後攻をして、敵を追拂んとて、陳登と萬づ心を合せ、半途まで出けるが、曹操自ら蕭關を攻ること急也と聞て、先蕭關へ行んと云。陳登申けるは、將軍は兵を率て徐々と來玉へ、某は先ゆいて敵の虛實を窺はん。呂布申けるは、如何なる故に先ゆかんとする。陳登が曰、泰山の孫觀、吳敦等は御方に從ふと云ども、回忠の心あり、輕々しく爲べからず。呂布大に喜び、汝は誠に忠義の人なり、勞を辭せずして君の爲にすと云て、後陣を按へて進まず。陳登數十騎を引て蕭關に至り、陳宮、臧霸に遇て合戰の樣を問、呂將軍なに故にか深く御邊達を疑て、輕々しくは此に來り玉はず、必ず害せらるべきぞと低語ければ、陳宮驚て申けるは、我なにをか疑はるべき、今曹操が勢壯なりと云ども、久して必ず變を生ぜんことを料り、我等難處に支て合戰をせず、




劉安
劉安妻の肉を煮て玄德に献す
劉安妻

ば攻よとて、曹仁に三千餘騎を付て小沛の城に向はしめ、自ら玄德と二十萬の勢を引て山東の境に出、遙に蕭關を望み見れば、泰山の强盜孫觀、吳敦、尹禮、昌豨四人、三萬餘騎にて陣を取たり。曹操蹴ちらして棄よとて、許褚を眞先に進ければ、四人の賊將ひとしく馬を出し、火を散して戰ひけるが、許褚に斬立られて四方へ颯と引退く。曹操これを見て、蒐れや者共と下知をなせば、大軍潮の湧が如く蕭關まで攻付たるに、討るゝ者數を知ず、右往左往に落ぞゆく。此時呂布は徐州の城へ回りけるが、小沛の城を敵せむると聞て、自ら救ん爲に、陳珪、陳登を召て敵を防の計を議し、陳珪は留りて徐州を守れ、陳登は我に從ひ來れとて、急に人馬を揃しむ。陳登ひそかに父に告て申けるは、向に曹操、東國の事は盡く我等父子に任せ置と云玉へり、呂布が滅亡近付たり、早く曹操に內應すべし、今某を小沛に伴ひ行んとす、某ひそかに計を成べし、呂布もし打負て曹操に追れ來るとも、父この城を能守りて糜竺と力を幷せ、必ず呂布を城中へ入玉ふな、某期に臨んでは身を脫るゝの計ありと低語ければ、陳珪申けるは、呂布この城を第一として、妻子一族を盡く留め置、われ如何んぞ獨事を成ん。陳登申けるは、御意を安じ玉へ、某計を以て外に移べしとて、呂布すでに打立んとする時、見えて申けるは、徐州の城は四面に敵を受たり、曹操も此城を第一と口に掛候、もし事の急なるに至らば、外へ

ば、今は流落たれども、漢家劉氏の苗裔にて劉安と云者なり、幸に劉豫州に見ゆることを得たりと云て、喜ぶこと限なく、山野の禽獸を獵て持成んとて遍く求れども、折節一つも得ざりしかば、爲ん方なさに密に女房を斬殺し、其肉を煮て獻る。玄德いかなる肉ぞと問玉ふに、狼の肉にて候と云ければ、孫乾と共に飽まで食し、夜明て打立時、廐に入て馬を出さんとするに、厨の傍に一人の女を殺して、臂の邊の肉を削取たる有ければ、驚て其仔細を尋ね、始て女房を烹て持成たると知ければ、感傷して已ず、御志の程まことに忘がたし、此處にて朽果んより、我と共に都へ上り玉へと勸玉へば、劉安辭して申けるは、某が老母を養ふべき者なし、此ゆゑに遠く去べからずとて別れしかば、玄德馬を早て梁城に著玉ふ時に、向うより馬烟を立て、限なき人馬出來りしかば、人を遣して見せしむるに、曹操が大軍なり。喜て中軍に入、曹操に見えて、小沛の城やぶれ、二人の弟妻子老小こと〴〵く行方なく成たりと語玉へば、曹操感嘆して共に涙を流す。玄德路にて劉安が女房を煮たる事を語玉ふに、曹操その志の切なるを感じ、孫乾を使として劉安に金百兩を送らせ、大軍を推て濟北に到る。夏侯淵いそぎ見えて、兄夏侯惇が左の眼を射られて、痛甚しき由を告ければ、曹操都へ送り上せ、斥候の兵を出して、呂布が消息を聞しむるに、呂布ちか比陳宮、臧霸と、泰山の强盗を語うて兗州を攻ると申す。さら

呂布申けるは、我と玄德と義を結んで兄弟たり、爭か情なく妻子を殺べき、汝こと〴〵く引具して、事の靜まらん迄は徐州の城に住れ、若みだりに狼藉を爲もの有ば、之を以て斬て棄よとて、自ら帶たる寶劍を解て與へければ、糜竺喜て拜謝し、玄德の妻子を車にのせて徐州の城へぞ入にける。呂布は小沛の城に高順、張遼を籠おき、自ら山東兗州の界に出張し、關羽、張飛、孫乾等は散々に落て山林に身を寓、ひそかに玄德の行末を問尋ぬ。

○呂布敗走下邳城

玄德は只一騎小沛の城を逃れ出、都へと志して山の傍を過玉ふ處に、孫乾數十騎を引て尋ね來り、手を執て哭き哀む。玄德嘆じて、關羽、張飛が行方をも知ず、妻子一族の存亡をも知ず、我ひとり生て恥を曝んより、只この處にて自害をせんは如何にと宣ふを、孫乾諫て申けるは、何條いまさる事有べき、諸人のこらず討れぬと知たらばこそ兎も角も思案を爲べし、未だ何の聞定めたる事もなく、空く此にて死ば千載の笑を取ん、早く都に上て曹操を賴み玉へ。玄德これに從ひ、路を尋て馬を早めけるが、飢疲て村の內に入食物を求め玉ふに、田夫野人までも劉豫州の來り玉ふと云て、爭て食を獻る。日すでに暮ければ、獵師の家に宿して家主の名を問へ

しと呼はりて、口に入て喫了り、高順をば打棄曹性に飛でかゝり、只一槍に突ころす。高順急に取て返し、兵を驅て攻ければ、夏侯惇眼しきりに痛て戦ふこと能はず、已に危く見えたるを、弟の夏侯淵力を震て救ひ出し、李典、呂虔と一手になり、追かくる敵を打拂て濟北まで引退く。呂布御方の勝たるを聞て、自ら馬を飛して來り、早く勢ひに乘て攻やぶれとて、自ら關羽が備に打て蒐り、高順と張遼とは張飛が備に打て蒐る。玄德これを見て手下の勢を二手に分、すゝんで戦はんとし玉ふに、呂布電光の如く後より喚て蒐ければ、關羽、張飛が陣中さわぎ亂れて、討るゝ者麻を散せるが如し。玄德つひに叶はず城中へ逃入んとし玉へば、呂布すきまもなく追きたる。玄德壕の邊に到て、橋を渡せと呼はり玉へば、内より門を開て橋を渡すに、呂布追すがうて入けれども、矢倉の上なる兵共、玄德に中んことを憚て矢を放ず、十騎あまり木戸口に立ふさがりて、命を棄て防しが、呂布に悉く斬倒さる。此故に門を守る勢四方へ颩と散ければ、呂布が大軍みだれ入て火を放つ。玄德すべき様なく、妻子を棄て只一騎西の門より落玉ふ。呂布すでに中門に入ければ、糜竺出むかへ、馬の前に跪て申けるは、玄德は將軍と兄弟の交をなせり、我きく、大丈夫は讐ありても人の妻子を殺さずと、量に玄德、なんぞ將軍と衡を抗はん、常に轅門に戟を射玉ひし恩を思うて片時も忘れず、將軍ねがはくは憐を垂玉へ。

り、曹操に見えて事の急を告ければ、曹操諸大將を集めて申けるは、我いま呂布を伐んと思ふ、袁紹は遠く北平へ行たれば怕るゝことなし、只劉表と張繡と我後に在て、虚を窺て都を襲んことを恐るゝ也。荀攸申けるは、劉表、張繡新に敗たる後なれば、爭か輕々しく兵を興し來らん、呂布は猛き虎なり、若袁術と一味して淮泗に縱橫せば、英雄の武士從ひ付て大なる禍を成ん、今勢ひの小きなるに乘て、速に根を絶玉へ。曹操美も申たりとて、旗下の大軍を整へ、先ゆいて小沛の城を救へとて、夏侯惇、呂虔、李典三人に、五萬の勢を授て向はしむ。其勢すでに徐州の境に著ければ、高順これを聞て呂布に報ず。呂布驚て侯成、郝萌、曹性三人に、二百餘騎を付て高順を助させければ、小沛の城を三十里退いて陣をとる。玄德寄手の退くを見て、必ず曹操が救の來れる成んとて、孫乾、糜竺、糜芳三人を留めて城を守らせ、自ら城を出て陣をとり、張飛を先陣として關羽と左右に備玉ふ。夏侯惇は打寄ると倖く槍を撚て眞先に進み、呂布出よ、快く勝負せんと呼はりければ、高順刀を舞して五十餘合戰ひ、叶はずして走りけるを、夏侯惇蹙し反せとて、力を盡して追かくる所に、傍より呂布が大將曹性ちか〴〵と走り寄、よく挽て兵と射る。其矢夏侯惇が左の眼に中りければ、夏侯惇これを事ともせず、かなぐりて矢を拔に、鏃目の珠と共に出けるを、大音聲を揚て、此は父の精母の血なり、空く棄べき樣な

んとするを、關羽推留めて城中へ回り、兵に命じて堅く守らしむ。張飛申けるは、我すでに張遼を趕蒐て生取んとせしに、何とて留め玉ひしぞ。關羽申けるは、張遼が武藝は我等が下に出ず、我さきに言を和げて恥しめたれば、已に順へる心あり、今戰を休て退きたるは此故なり。張飛これに心付て再び出ざりければ、玄德も亦深く警て緊く門を守らせらる。呂布は自ら下邳の城を攻けるに、要害堅固にして急には落まじと思ひ、兵を殘して遠攻にせさせ、自ら小沛へ向ひ來る。玄德これを聞て矢倉の上より大音あげ、某は元來呂將軍と恩ありて讐なし、曹操天子の勅命を傳へて、我に兵を催せと云、從はずんば有べからず、此ゆゑに返簡を遣す、我なんぞ呂將軍に向て弓を挽害を成んと呼はり玉へば、呂布も理とや思ひけん、只圍だる斗にて急に攻んともせず、自ら徐州に回りて思案を運すに、曹操を敵に受ては了に好るまじと思ひ、大將郝萌を淮南の袁術が處へ遣し、我元より大王と婚姻を約して、一家の好を結んとせしに、誤りて一旦曹操に出拔れ、剩へ合戰に及て日比の意に背く、今これを悔れども甲斐なし、願くは我女を送りて互に唇齒の交を結び、曹操を破らんと樣々に云せけれども、袁術初に手ごりして一圓に聽入ず。郝萌空く回り、兎角息女を淮南へ送て、其後に交を結玉はずんば、袁術事の變を恐れて心解まじと云に、呂布沈吟して更に決せず。此時簡雍は夜を日に續で都に上

に、簡雍字は憲和と云もの也。玄德喜て書簡を封じ、夜を日に繼て打立せ、偏に籠城の用意をして自ら南の門を固め、孫乾に北を守らせ、關羽に西を守らせ、張飛に東を守せ、糜竺は糜夫人の兄たるを以て、糜芳と共に中軍を司て妻子老小を守らせ、鹿角、逆茂木を引かけて、敵の來を待玉ふ。去ほどに寄手の大勢城の四方を取圍で、生手を入かへ〳〵息をも繼せず攻たりければ、玄德矢倉に上て大音あげ、我元より呂布と讐なし、何ゆゑに兵を差向たると呼はり玉ふに、高順答て申けるは、汝密に曹操と計を合せて我君を害せんとす、幸に天の助に依て事忽に露れたり、速に頸を延て刀を受よと罵りければ、玄德默然として言なし。高順壕の邊まで攻よせ、暮に及ぶ迄戰を促せども、城中堅く守て出る者なし。張遼は西の門を攻けるが、關羽内より固めて高櫓にのぼり、大音あげて、汝は張遼に非や、元より汝が人品は尋常の人とは見えず、何とて天に背き道を忘れて、逆臣の呂布に事るぞと恥しめければ、張遼いかゞ思ひけん、首を低て言ず。關羽これを見て、扨は此人忠義の志ありけりとて、互に陣を取向うて少しも惡口を吐ず、張遼も兵を制して城を攻ざりけり。關羽は此間に東の木戸心元なしとて、人を遣して見せしむるに、張飛寄手の惡口に腹を立て、門を開て打て出たりと申。關羽急に行て見れば、張遼ひそかに東へ廻り、張飛と火を散して戰けるが、關羽を見て引退く。張飛急に趕

の道筋に、由ある人の使と覺て、傳馬に馳て通る者あり、誰ならんと怪み、急に追かけて、何人の使にて誰の許へ行たるぞと問に、驚き怕れて答へざりければ、扨は故ある曲者ぞとて、兵を下知して捜さしむるに、玄德より曹操に答る書簡を取出す。必ず事の仔細あらんとて、使を縛り來て呂布に右の趣を語る。呂布使を責て事の樣を問に、某は曹丞相の命を承て、小沛の城へ書簡を送り、今玄德の返簡を取て歸るもの也と答ければ、其返簡を披き見るに、曰、

今奉相公明命、豈不夙夜用心。備兵微將寡。不敢妄動。望相公大興王師到來。備用爲先驅。呂布乃狼虎之徒、輕則猖獗矣。備嚴兵整甲、專待鈞命。

呂布以ての外に怒り、曹操賊匹夫、ひそかに玄德と約して我を殺さんとす、先その使を斬て棄よ、我兵を起して攻上んとて、卽時に使の首を刎、陳宮、臧霸を大將として、泰山の強盜孫觀、吳敦、尹禮、昌豨なんど云溢者を語ひ、山東の州郡に攻かゝらせ、高順、張遼を小沛の城に指向て玄德を攻させ、宋憲、魏續を汝潁の邊に向はせ、自ら徐州の境に出て三方を援け救ふ。此由早く小沛へ聞えければ、玄德いかゞせんと膽を冷し、諸將と計を議するに、孫乾申けるは、急ぎ都へ早馬を飛して曹操に救を求め、城を固く守て防玉へ。玄德げにもとて、誰をか使とせんと宣ふに、一人すゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。諸人これを見れば、乃ち玄德と同鄉の人

陳宮小沛に猟として曹操ら使と呂捕る

陳宮
曹操

小沛の城へ使を遣して、劉玄徳に此事を知せ、夜明て袁紹が使者に對面して重く持成、天子の勅命なりとて袁紹を大將軍大尉に進めて、冀州、青州、幽州、并州を併せ領せしめ、都の内も事多に依て軍兵を借こと能はず、此ゆゑに兵粮米千斛を贈る、早く北平を征伐せらるべしと云て、使者を回しければ、袁紹かぎりなく喜び、國中の勢を催して軈て北平へ推寄、公孫瓚と合戰す。此時徐州には呂布つねに陳珪、陳登を重んじて、此に過たる忠節人は有まじと思ひ、萬づ心を置ずして二人の料ひに從ひ、明昏只酒を飲で娯をなす。陳珪父子も深き所存ありければ、頻に德を稱して呂布が心を悅しむ。陳宮元より智謀深ければ、陳珪父子が呂布を欺て、曹操に内應することを省り、必ず大なる禍を惹出さんことを怕れ、或時呂布に告て申けるは、陳珪父子、言を巧にし色を令し、諛ひ媚て將軍を欺く、然るに將軍この二人を重んじて、心腹の大事を議し玉ふ、今早く省り玉はずんば、必定滅亡を取玉ふべし。呂布勃然として怒て申けるは、汝讒言を以て此賢人を退けんとす、誰をか諂佞と云ん、我若舊日の事を思はずんば、必ず頸を斬ん者をと罵りければ、陳宮慚愧して外に出、わが忠義の心を明こと能ず、却て殃を受んとす、然れども今身を逃んとせば、天下の人の笑に遭んと云て、心の内悶々として樂ず、四五騎の手の者を引て、憂を忘ん爲に小沛の邊に出、ひろき野にて獵をなす。時に都より往來

て親疎をなす、君は明達にして拘ず、惟才の宜を擇で用玉ふ、此度勝なり、袁紹は遲重にして決斷なし、事必ず後に悔あり、君は能大事を斷じ、變に應じて窮なし、此謀勝なり、袁紹は軍を御ること寬して、法令正しからず、士卒衆と云ども實は用るに足ず、君は法令すでに明に、賞罰正く行ひ玉ふ、士卒寡と云へどもみな命を棄んと勇む、此武勝なり、袁紹は累代高位に昇て、讒諛の人從容飾智、名高く譽ある者用ひられて、士の能寡して問を好もの多く歸服す、君は至仁を以て人を用ひ、誠を推て虛美せず、己を謹こと儉にして、功ある者を賞して惜こと無、この故に天下忠義の士こと〴〵く用ひられんことを願ふ、此德勝なり、此の如き四勝ありて、天子を輔け義に仗て征伐せば、誰か敢て順ひ靡ざらん、袁紹が輩なんぞ謂に足ん。曹操が曰、汝ひとへに我を譽、われ之に及ばずと云ども、今袁紹を伐んは如何に。荀彧申けるは、然らず、今呂布徐州に在て常に野心を挿む、若これを棄て袁紹と戰ひ玉はゞ、呂布虛に乘て都を襲ん、不如書簡を以て袁紹が心を安じ、官職を加て米千斛を合力し、彼が公孫瓚と遠く北平にて戰ふ間に、先呂布を平げて禍の根を絕、うしろに敵なき樣にして心安く袁紹を伐玉はゞ、滅さんこと掌にあり。曹操手を打て大に笑ひ、郭奉孝が機、荀文若が智、割符を合せたるが如し、陳平、張良も此上には出べからず、我先呂布を伐んとて、密に

ことなし、此仁の勝七なり、袁紹は大將みな權を爭て、讒言その主を惑す、君は下を御るに道を以てして、浸潤行はれず、此明の勝八なり、袁紹は是非を分たず、君は是なるを進め、非なるを退け、進るに禮を以てし、正に法を以てす、此文の勝九なり、袁紹は虛に乘ことを好めども兵要を知ず、君は寡を以て多に克、兵を用ふこと神の如く、軍人これを恃み、敵人は畏る、此武の勝十なり、君此の如き十勝あり、袁紹なんぞ亡ざらん。曹操申けるは、御邊が云ところ我敢て及ばず、然れども今袁紹を伐んは如何に。郭嘉が曰、呂布都ちかき徐州に在て心腹の患なり、今袁紹兵を起して、遠く北平の公孫瓚を攻にゆく、不如この間に先呂布を平げて、其後に袁紹を伐玉へ、今もし輕々しく袁紹を伐んとし玉はゞ、呂布必ず虛に乘て都を窺ん。曹操げにもと喜び、夜に入て密に荀彧を召て申けるは、汝は袁紹が虛實を知たるか。荀彧が曰、今日使きたれりと承り候ひしが、未だ其故を聞き候はず。曹操乃ち書簡を出して見せしむるに、荀彧申けるは、袁紹が書簡の面、なにとて右無禮なる。曹操が曰、われ常に袁紹を伐んと思へども、力の不足を患る也。荀彧申けるは、古の成敗は、誠に其才あれば弱と云ども必ず强し、苟も其人に有ざれば、强と云ども必ず弱し、高祖、項羽の存亡これ也、いま君と天下を爭べき者は袁紹一人なり、某よく袁紹を見るに、外寬して內忌、人を用ふと云ども、心に疑あり

申けるは、高祖、項羽の戰は、君の能知せ玉ふ所也、高祖は弱と云ども、智謀に勝、項羽は强と云ども計を知ず、此ゆゑに高祖の爲に滅されたり、某ひそかに思ふに、袁紹に十敗あり、君に十勝あり、袁紹が兵いかに强とも必ず亡ん、袁紹は事を行ふに禮義繁く、君は本體よく自然に任せ玉ふ、此道の勝一なり、袁紹は逆を以て動き、君は順を以て天下を率玉ふ、此義の勝二なり、漢の末は政の寬より亂る、袁紹は寬を以て寬を濟ふ、此故に民畏ず、君は糾に猛を以てして上下みな制法を知、此治の勝三也、袁紹は外寬して內忌、人を用ふれども疑ひ多く、唯一族の中を重く用ふ、君は外簡にして內明に、人を用て疑ふことなく、才の宜を擇で親疎を間ず、此度の勝四なり、袁紹は謀を好ども決斷なく、常に後悔のみ多し、君は計あればすなわ卽ち行ひ、變に應じて窮なし、此謀の勝五也、袁紹は累世位高して高議揖讓、名ある人を集め、辯舌を巧にして外を飾もの衆く歸服す、君は誠を以て人を用ひ、心を推て虛美を爲ず、儉を以て下を率る、功ある者に恩賞して吝玉はず、人の忠正遠見にして、實ある者みな用ひられんことを願ふ、此德の勝六なり、袁紹は人の飢寒たるを見ては、哀憐の色形ると云ども、目の及ばざる所は一つも知ず、此所謂婦人の仁なり、君は目前の小事は忽にして、大なる事の四海に與る程に至ては、接恩の加る所みな其望に過、目の及ばざる所と云ども、救玉はずと云

○夏侯惇拔レ矢啖レ眼

建安三年戊寅の秋、曹操南陽の戰に負て、又河北の袁紹が都を襲んとする由を聞、いそぎ兵を收て歸洛するに、諸大將みな半途まで出迎へ、禁裏に入て天子を拜し、退て丞相府に回りければ、暫ありて郭嘉來り見ゆ。曹操問て申けるは、汝なにとて遲參したる。郭嘉答て曰、只今河北より袁紹使を馳て書簡を送り、北平の公孫瓚を攻んと欲するに、御方兵粮に事を缺、ねがはくは軍兵を合力し、兵粮を借玉へと云送れり。曹操笑て申けるは、我さきに途中にて、袁紹が都を襲んとする由を聞て、夜を日に繼で馳のぼれり、然るに今書簡を送て左樣なる事を云は、我すでに都へ回りけるを知て、心に怖畏を懷き、先都を攻る思案を止たれども、若は我怒り疑はんことを憚て、詐りて公孫瓚を攻るに兵を借よ糧をくれよと馴々しく云送る者ならんとて、其書簡を見るに、文體甚だ傲り放なりければ、暫く使を留め置、ひそかに議して申けるは、袁紹右の如くに無禮をなす、我つねに伐亡さんと思へども、力の足ざるを患とす。郭嘉

後陣に軍ありて、御方やぶれぬと聞、急に取て回さんとするに、後陣の者共馳きたりて、山際より誰やらん討て出て、追手を防止めたりと申す。曹操それ如何なる人ぞと問に、一人の大將槍を挾で馬より下、路の傍に踞る。曹操これを見るに、先年黃巾の賊を破て勸賞被りし鎭威中郎將李通字は文達とて、江夏平春の人なり。何とて此に來て我を救たると問に、汝南に在て合戰の様を承り、馳來りて力を副んとせしに、敵の追かくるを見て防ぎ止めたりと答ふ。曹操神妙なりとて、裨將軍建功侯に封じ、又汝南を守らしめ、すでに都に回りければ、荀彧城外に出むかへ、相伴て直ちに朝廷に出、まづ詔を申降して吳の國へ使を馳、孫策を討逆將軍吳侯に封じて、荊州を攻よと下知をなす。諸大將きたり見え、拜賀を伸て問て申けるは、適に荀彧早馬を飛して、劉表が安衆の路を塞たると告しに、丞相の返簡に、我必ず破レ敵の計ありと答玉ふは如何なる故にて候ぞ。曹操答て申けるは、劉表前を遮り、張繡後より趕、これ我に死地を與る者なり、御方の將士その遁れ難を知て、命を弃て勵み戰ふ、此に因て必ず勝べきを知れり、此孫子が玄妙なりと云ければ、諸人その論に服して悉く再拜す。

敵は勇み御方は弱る、爭か又追ことを得ん。賈詡申けるは、兵勢は變あり、急に又追かけ玉はゞ、必ず打勝玉はん、萬一勝ずして回り玉はゞ、某が首を獻らん。張繡しからば追て見んとて打立けれども、劉表は疑て從はず。張繡兵を驅て飛が如く喚て曹操が勢に討て入ければ、戰んとする者ひとりもなく、馬物の具を打すて、亂れ騷で逃わしる。張繡氣に乘て繼て追んとするに、山の際より一手の勢打て出、力を震て防しかば、此迄ぞとて安衆へ引回す。劉表これを見て大に驚き、賈詡に問て申けるは、向に我精兵を引て追かくる時、御邊これを止めて、追ば必ず破れんと云、今又敗軍を引て、再び追ば必ず勝んと云、而して御邊の言に迯ざるは如何なる故ぞ、何とて如此先見の明なる。賈詡申けるは、是知やすき事なり、將軍よく兵を用ひ玉へども、曹操には及ばず、曹操が勢まことに敗軍の後なれども、追手の蒐らんことを知て、自ら後陣に備て精兵を殿とす、其ゆゑに追手の勢壯なりと云ども打負べきを知、曹操すでに打勝て後は、再び敵の追んとは思ひ寄ず、都に事ありて心急ぐ故に、屈強なる騎馬の勢は皆さきに進み、其身も路を急で一手の勢を後陣とし、大將に命じて守らしむ、此に因て重ねて追時は、敵の不意に出なり、曹操が大將よく戰へども、亦將軍には及ばず、此必ず勝べきの理なりと云ければ、劉表も張繡も其高論に服して、劉表は荊州に回り、張繡は襄城に楯こもる。曹操は

安衆へ逃あつまる。曹操は圍を出でて、險阻を前に當て陣を取ところに、又都より早馬きたり、河北の袁紹この比都の内空虚なりと聞て、大軍を起して急に攻上んとす、荀彧が書簡これに候とて出しければ、曹操急ぎ披見するに、其書に曰、

近人自冀州來報說、田豐謂袁紹曰、今將軍糧足兵強、曹操南征未回、宜早乘虛以襲許都、奉迎天子、號令海内、此爲上策。若不乘機破之、終被他擒、雖悔無益也。紹聽之、持疑未決。或請丞相還都別作區處。劉表張繡疥癬之疾、不足憂也。望早々班師、勿失大事。

曹操以ての外に驚き、今都の内空虚なるに、袁紹もし攻のぼらば、乍ち瓦の如に解んとて、取ものも取あへず兵を引て馳のぼる。張繡これを聞つけ、急に追かけて討んとするを、賈詡諫て申けるは、必ず追べからず、若追時は却て敗れん。劉表申けるは、曹操都に事ありて、敗軍を引て惆愓かへる、我これを追ずんば何をか期んとて、張繡と一手になり、一萬餘騎にて追かくる。曹操は自ら後陣に居けるが、追手の蒐るを見て、兼て期したる事なれば、一軍を引て取て囘し、散々に打やぶる。劉表、張繡したゝか討れて引退き、賈詡に逢ひて、御邊の諫を用ひず、今大に敗たりと云に、賈詡申けるは、兵を調へて今一度追玉へ。張繡が曰、すでに一戰に負て、

を問に、答て申けるは、去年この處にて戰し時、典韋われを救て討死せり、此を思て哭なりとて、頻に涙を流しければ、聞人みな感嘆す。暫く水邊に陣を居て、牛を宰馬を殺して祭を設け、再拜して典韋が魂を招き、聲を放て哭ければ、大小の將士みな涙を流す。次に姪の曹安民を祭り、次に嫡子曹昂を祭り、又その時に乘たる絶影馬を祭り、討死せし士卒をも悉く祭りければ、諸軍號哭の聲やまず。時に都より荀彧早馬を立て、荊州の劉表兵を安衆に屯し、御上の路を塞で張繡に力を併す、御用心あるべしと告ければ、曹操あざ笑て驚たる氣色もなく、急に返簡を調へ、我しづ〳〵と退けども、心に敵の來るを知、すでに計を定め置たれば、少しも怕る事無、安衆に到らば必ず敵を破るべしと書て、使を都へ回し、進んで安衆の界に著て、向うを遙に見やれば、案の如く荊州の兵難處を截塞いで待懸たり。時に後より馬烟を立て、張繡追來ると告ければ、曹操山に沿て陣を取、夜中に人の通はぬ山際の路を穿開せて、精兵を藏しおき、態と小勢に見せて控たれば、夜あけて劉表、張繡が兵これを望み、思ふに敵の勢これ程に小勢なるべしとは知ざりしが、何さま兩方より攻るを怕れて、大半は落失たるらめ、盡く手取にせよとて、皆思ひ侮て前後より討てかゝるに、俄に傍なる山内より伏の勢突出して、縱橫無碍に蒐たりければ、劉表、張繡が兵、思ひの外に討やぶられて、死する者數を知ず、皆

ず、壕は死人にてぞ填たりける。張繍追討に攻て殺して五更の比に及び、曹操十里あまり退きければ、城中の勢これ迄ぞとて引かへし、敵の棄たる馬物の具兵粮を取たること限なかりしかば、上下勇み悦ずと云もの無。曹操は這々のがれて、討のこされたる者を見るに、痛手を負ぬ者もなく、一夜の戰に死人五萬餘人と記しければ、再び戰ふべき力も無て、都を指て回らんとす。城中には賈詡ひそかに曹操が都へ回る由を窺ひ聞て、急に荊州へ書簡を遣し、太守劉表に兵を出して曹操が後を塞げと云ふ。劉表これを聞きて早く打て出んとするに、番の兵來り告て、吳の孫策兵船を揃て此處へ攻來んと企ると云ければ、心の内怖れ驚き、用心きびしうして敢て輕々しく動ず。時に蒯良諫て申けるは、今孫策が兵船を調て攻きたる勢ひをなすは、曹操が下知を受て敵を疑はしむる計なり、實に攻來る事は候まじ、近ごろ曹操南陽の戰に負て、力を失て逃のぼる、これ難得の時なり、若勢ひに乘て平げずんば、後必ず大なる害を成ん、早々に打立玉へ。劉表げにもと同じて、黃祖を江の邊に遣して、孫策を壓させ、自ら兵を引て安衆と云ところ迄出張し、路を截塞で曹操が上を支んとす。張繍も劉表が消息を聞、この度曹操を生取ずんば、いつの時をか期ん、追つめて前後より討取とて、勢に乘て趕かくる。曹操は敗軍を收て都を指て上けるが、襄城に到て淯水を通る時、馬上にて哭き哀む。諸人その故

破り易からんと思ひ、急に打やぶりて攻入んと計り、態と西の方を急に攻る體をなし、城中の者共これを防んとて、盡く一處に集りたるを窺ひ、却て不意に東南の角より入ん爲なり。張繡が曰、しからば如何して防べきぞ。賈詡が曰、これ何の難き事か有ん、此あたりの百姓を集めて西の門を守らせ、時々鼓を打喊を作て、大勢ふせぐ體をなさしめ、屈強の勢を盡く東南の方に鳴を靜めて伏おき、鐵砲を響すを合圖に盡く打て出る者ならば、曹操を生取ずと云こと無ん。張繡限なく喜び、百姓を西の門に集て喊を作り鼓を打せければ、案の如く曹操自ら兵を率し、城を破ること今夜にありとて、彌西の門に大勢を添、雲の梯を推よせて、天地も崩るゝが如くに見せければ、城中にも喚き叫で防ぐ體をなす。夜も已に二更の比に至りて、すはや時分よきぞとて、曹操すぐりたる兵を驅て、直ちに東南の角に廻り、鹿角、逆茂木を打やぶるに、防んとする者もなし。扨は西の門ばかりに集り居て、此を知ざるなれ、速に進めとて、木戸を打やぶりて込入に、出あふ者一人もなく、只西の門に鼓の聲のみ聞えけるが、忽然として一聲の鐵砲耳根に響きければ、此は如何と驚く所に、喊の聲地を震して十方より火をかけ、伏の勢雲霞の如に起りければ、曹操膽魂も身に沿ず、馬を拍て出んとするに、張繡うしろより掩殺し、東南の門を排て城中の勢盡く出ければ、曹操が軍勢あらけ亂れて、討るゝ者かずを知

自ら半途に出て陣をとり、賈詡を留めて城を守らしむ。去程に曹操兵を引て近付ければ、張繡自ら馬を出し、大音あげて申けるは、曹賊汝は仁義を假て人を欺く禽獸なり、必ず天の罰を受べきぞ。曹操大に怒り、虎侯は出ぬかと云に、許褚これに候とて打て出たり。張先槍を捻て迎へあはせ、戰ひ三合ならざるに許褚に斬て落されければ、張繡が勢怕れ驚く。曹操見すまして急に兵を進めければ、散々に亂れて一支も支へず、我さきにと城中へ逃かへる。曹操勢ひに乘て直ちに南陽の城下に到り、四方を圍で攻ければ、張繡も堅く守りて鐵砲火箭を打出し、鐵を沸して灑ぎ懸させ、壕には大河を塞入たれば、水の勢ひ急にして、寄付べき便なし。曹操下知を傳て、土を運ばせ柴薪を稠あげ、沙嚢を重ねて其上に雲の梯を構へ、城を日の下に直下して、入かへ〳〵攻戰ふ。曹操自ら城の四方を能々窺ひ、毎日西の門に大勢を指むけ、柴を稠土を築せ、梯を連ねて偏に此門より攻入んとす。張繡四方より攻られて安き心なきに、曹操自ら西の門を手痛く攻て、三日が間息をも繼せざりければ、如何せんと議するに、賈詡申けるは、某よく曹操が計を推したり、敵の計に就て却て計を用ひば、曹操が不意に出て忽ちに擒にせん。張繡が曰、ねがはくは聞ん。賈詡が曰、某矢倉の上より見るに、此三日の間は曹操自ら馬に乘て城を巡る、彼が意は此城の東南の角に、鹿垣、逆茂木の舊して半すぎ朽ちたるを見て、此が

と限なし。凡そ諸軍麥の邊を通るには、馬より下、手を以て麥を扶け、相傳てぞ進みける。曹操が乘たる馬いかゞしたりけん、鳩の飛に驚て躍り跳て、麥の中へ走り入、麥多く倒れければ、曹操しばらく兵を留め、行軍主簿を召て、我麥を多く害へり、此罪を如何せんと云ければ、主簿答て申けるは、丞相の言令たれか從はざる者候はん。曹操が曰、われ自ら法を出して、又自ら法を犯す、何を以てか人を服することを得んとて、劍を拔て自害せんとす。諸將急に推止ければ、郭嘉申けるは、古春秋の義、法不レ加レ于レ貴、いま丞相大軍を統て自害し玉ふことやある。曹操申けるは、春秋すでに法は貴き人に加ざることあり、我これを忘たり、然らば父母の賜たる髮を切て、權に首に代んとて、劍を拔て髮を切ければ、諸軍悚然として其正きを感じ、彌法を守て恐れ謹まずと云もの無。時に五月の末に到り、南陽を指て進むに、諸軍みな長途に疲れ、山路を經て打通るに、暑氣たへ難く喉かわいて、水を求れども水なし。上下息を休めて暫く進まざりしかば、曹操ひそかに計を案じ出し、馬上より鞭を以て指をしへ、此より先に梅の林あり、早く行て梅の實を取と云ければ、諸軍みな口に津を生じて少しも渴せず、忽ちに難處を越けり。世の諺に、梅酸の渴を止ると云は此なり。張繡は南陽の城に在て曹操が向ふと聞き、色を失て、急に荊州へ人を走らして援の勢を求め、雷敍、張先と云ものを先陣とし、

汜を討殺し、其一族二百餘人を生捕て朝廷に獻ると奏しければ、百官みな喜て、生捕を市に引出して誅せしめ、朝敵の張本なればとて李傕、郭汜が首を路頭に曝す。人民これを見て酒を沽て賀をなし、舞謠聲家々に遍し。朝廷にも公卿僉議ありて、浩る朝敵の滅たるには、古の吉例に依て、御賀あるべしとて、天子を殿中に請じ奉て、文武の百官こと〴〵く太平の酒宴をなし、段煨を盪寇將軍とし、伍習を殄虜將軍として、初の如く長安を守らしめ玉ふ。

○決勝負賈詡談兵

時に建安三年夏四月、曹操淮南より都に回り、朝に出て天子に見え、早く張繡を討んとて、兵を調て打立ければ、天子親ら御車を促して、城外に送り玉ふ。路次の人民大軍の通ると聞きて、折境麥の盛なれば、軍勢の狼藉を怕れ、家を棄て逃わしる。曹操しばらく陣を取て、其邊の村老百姓を尋ねさせて、本の家に回らしめ、地頭を召て申けるは、我天子の勅命を受、賊を伐て民の害を除く、今麥の熟せる時に、兵を出すは不得已ば也、こゝを通るに、諸の大將末々の士卒までも、麥を害ひ田地を踐あらし、人の財物を掠取もの有ば、忽ちに頸を刎ん、王法に無親、よくこれを守れとて、秋毫も犯事無ければ、路々の百姓地に拜して聖德と稱し、喜ぶこ

盡させ、壽春すでに平定しければ、又淮水を渡して袁術を追んと議するに、荀彧諫て申けるは、近年飢饉打續て、人民やすき心なきに、又兵亂の患に逢ば、怨み哭もの多からん、若はるばると淮水を渡て、急に勝こと能ずんば、退かんと欲すとも叶まじ、不如まづ都に回りて、來春麥の熟する時を待玉へ。曹操いかゞせんとて心いまだ決らざる所に、忽ち都より早馬到來し、張繡さきに荊州へ落て、劉表を頼み居たりしが、南陽張陵の軍勢これに從ふに因て、勢ひ漸く振んとす、曹洪この由を聞付、急に押よせて戰ふと云ども、毎度利を失て引退く、張繡いよ〳〵勢を集め、虛に乘て都へ攻上んとす、速に御旋あるべしと告ければ、曹操色を失ひ、劉表と張繡と力を併せて攻上らば、勇々しき大事に及ぶべし、吳の孫策に命じて、兵を起して荊州を攻んとする體をなさしめば、劉表これを防ん爲に、出て外に向ふこと無るべし、劉表もし國を出ざる時は、張繡が一軍小勢にして破り易からん、我早く打滅して禍の根を斷んとて、吳の國へ使を馳て孫策に荊州を攻る勢ひを成しめ、兵を收めて都に回りけるが、呂布と玄德とに、義を結て兄弟の約を致させ、玄德を小沛の城に回し、密に私語て申けるは、御邊を小沛の城に置は、是陷坑を掘て虎を待なり、只よく陳珪、陳登と心を合せて、呂布を殺の計を運さるべしとて相わかる。此ころ長安より都へ早馬を立て、將軍段煨、伍習二人、兵を起して李傕、郭

を、曹操武士に命じて一刀に頸を斬せ、竿に指あげ榜を立て諸軍に示し、王垢私に粮を盗で小斛を用ひたり、此に依て謹で軍法を正し、頸を所ㇾ刎なりと觸させければ、三十萬の勢これを見て、扨は丞相の所爲に非、王垢が私より發たる事なりと云て、怨る者こそ無りける。其後いよ〳〵兵粮乏く成ければ、曹操諸人に法を出して申けるは、此城を三日の内に攻落すべし、怠る者は立どころに誅せんとて、自ら馬に乘て濠ぎはに到り、兵を下知して濠を塡させ、燒草を積て矢倉を燒落さんとすれば、城中より射出す矢雨の如く、大木大石を飛すこと雹の如し。寄手これに怕れて少し引退んとするを、曹操自ら劍を拔て立どころに二人の首を刎ければ、諸軍みな震ひ恐る。曹操自ら馬より下て、土を運び草を擔て濠を塡ければ、大小の將士これに激されて、丞相かくの如なる上は、諸軍なんぞ命を惜まんとて、切れども射れども顧ず、のり越のり越攻のぼりて、喚き叫音天地を崩す。されば城の內も力を限に防げども、已に色めき渡て見えければ、夜に入りて寄手の內に先を爭て壁を登る者あり。曹操これを賞して夥しく金銀を與へければ、諸軍なじかは勇ざらん。此より軍威大に振て、了に一方の門を打やぶり、大軍こと〴〵く込入しかば、城中の大將李豐、陳紀、樂就、梁剛等こと〴〵く生捕れ、市に引出して首を刎らる。曹操城中に入て軍民を安じ、袁術が建置たる宮殿樓閣を、一字も遺さず燒

まじ、諸軍勢力を激して城を一時に攻おとせとて、速に戰はんとすれば、城中きびしく守て出あはず。兎角する程に一月あまりも過ければ、曹操が陣中すでに兵糧つきて、人馬漸く餓に臨む。是によりて呉の國へ使を馳て、孫策に米十萬石を借りて分ち施と云ども、又不日に竭ぬ。呂布、玄德も形の如くわが本國より運漕すと云ども、路遠ければ叶ひ難し。兵粮の總官任峻と、倉奉行王垕と來て曹操に申けるは、御方の勢雲霞の如にして、如何にすれども粮つゞかず、丞相よろしく料ひ玉へ。曹操申けるは、我も爲べき質なし、汝まづ小斛を以て粮を與て、暫く一時の急を救へ。王垕申けるは、然らば兵共の怨ることもや候はん。曹操が曰、われ一つの質あり、まづ小斛を用ひて粮をわかて。王垕命を領し、毎日粮を賄り與る者共に小斛を以て施しければ、曹操ひそかに陣中の樣を窺ひ聞しむるに、諸軍みな怨を含み、此彼に寄合て、曹丞相いかなれば右われ等を欺き玉ふぞ、兵粮の數足ずとつぶやく。曹操いそぎ王垕を召て申けるは、諸軍いま我を怨で如何とも爲べき樣なし、汝に一物を借て之を靜んと欲す、必ず妻子を心に介な、我よく／＼養ふべきぞ。王垕問て曰、なにを某に借玉ふべきぞ。曹操が曰、汝が頸を借んと欲す。王垕驚て申けるは、某いかなる罪か候ぞ。曹操が曰、われ能汝が罪なきを知、然れども汝もし死せざる時は、三十萬人の心こと〴〵く變ぜん。王垕哀で再び言んとする

し、勢ひにのりて喚てかく。淮南の先陣五萬餘騎、大將を討れてなじかは怺べき、立脚もなく逃くづれければ、袁術自ら後陣に支て、引なく〳〵と制すれども耳にも聽いれず、落ゆく勢に倡なはれて壽春城に引こもる。時に早馬追々きたりて申けるは、吳の孫策すでに曹操か下知を受て、舟手より此城の西に向ひ、呂布徐州の勢を率して東を攻、劉玄德豫州の勢を調て南より寄、曹操は自ら三十萬騎にて北を攻る、事すでに迫れりとて、上下みな色を失ひければ、袁術手足の措どころを知ず、急に諸大將と相商に、楊大將申けるは、今年は壽春に水旱の患ありて五穀熟せず、今又兵革を受て人民こと〴〵く怨み嗟く、寄手四方より競て防べき質なし、不如この城には守りの勢を殘して、出て戰ふこと無らしめば、敵も長々の陣に氣つかれ兵粮乏して自然に變ぜん、陛下は御林護衛の兵ばかりを率て、淮水を渡せ玉へ、是一つには兵粮の費を省き、二つには敵の鋭氣を避ん爲なりと云ひければ、袁術しかるべしとて、李豐、樂就、梁剛、陳紀四人の大將に精兵十萬を付けて壽春の城を守らせ、その身は庫府の金銀珍寶を車にのせて、相從ふ者二十萬人、聯絡して絕ず、淮水を渡て去にけり。曹操は手勢三十萬に餘りたれば、每日費ところの兵粮いく千萬と云ことを知らず、況や諸郡數年の水旱に、百姓みな飢つかれて、木の根を掘草の葉を採て僅に命をつぐばかりなれば、掠め取べき物もなし。右ては此陣かなふ

さらば攻よとて急に麾下の勢を整へ、曹仁を都の留守とし、兵粮武具を車千輛あまりに積で、その勢都合三十餘萬、建安二年秋九月に都を打立、まづ早馬を打て呉の國に報じ、徐州と豫州とへ使を馳て、共に兵を調て豫章にて出合んと云つかはす。先陣すでに豫章の界に著ければ、玄德兵を引て豫州より來り、曹操に對面して頸を二つ出さる。曹操驚て何者の頸ぞと問に、答て申されけるは、此は揚奉、韓暹二人が頸なり、呂布この者を手下に用て、沂都、瑯琊を守らしむるに、二人みだりに惡を逞して、毎日揚州、徐州の邊に出で、人民を劫し子女を犯す、某坐ら其狼藉を見るに忍ず、酒宴を設て二人を招き、關羽、張飛等に命じて席上にて討殺さしむ、此に因て手下の勢皆某に降參せり。曹操限なく喜び、御邊國の爲に害を除く、是大なる功なりとて、兵を推て徐州の界に到れば、呂布來て對面す。曹操言葉を和て其心を悅しめ、重ねて都に回らば左將軍に申薦んと云ければ、呂布恩を謝して相從ふ。乃ち諸軍の手配あるべしとて、夏侯惇、于禁を先手とし、曹操自ら中軍に備て、玄德を右にそなへ、呂布を左に備ふ。袁術この由を聞て以ての外に駭き、先五萬の兵を調へ、橋甤を先手の大將として打て出て防しむ。兩方の軍勢忽ち壽春の境にて出あひ、橋甤旌をすゝめて馬を蒐する、鼠賊なんぞ我國を侵と罵りければ、夏侯惇きゝもあへず、槍を提て撞てかゝり、戰ひ三合ならざるに橋甤を刺死

○曹操會レ兵伐ニ袁術一

孫策は淮南の使を追かへし、袁術必ず怒て攻來るべし、兵を調て相待とて、兵船を江邊に列て用心する所に、都より曹操が使きたり、天子の詔を傳て會稽の太守に封じ、兵を起して淮南の袁術を伐べしと下知しければ、孫策喜て詔を承、やがて淮南を攻んとす。時に長史張昭申けるは、袁術ちか比呂布と戰ひ負て囘りたれども、元來兵強く糧多ければ、敢て屑とせず、必かる〴〵敷せめかゝりて、國の禍を惹出し玉ふな、不レ如曹操に自ら淮南を攻させて、我國の勢は跡より打向て力を助けんと云玉はば、曹操必ず兵を發して淮南に向はん、是兩方より挾て攻る時は、袁術必ず破るべし、又は萬一わが國に災のある時、救を曹操に求ん爲の計なりと云ければ、孫策限なく喜び、書簡を調て曹操に送る。曹操は張繡と戰ひ負て都に囘てより、偏に典韋が討れたるを惜み、祠堂を建て祭をなし、其子典滿を中郎に任じて憫み用ひけるに、吳の國より孫策が使きたり、多の禮物を獻りて書簡を送る。曹操ひらいて見るに、先みやこの勢を起して淮南を攻玉へ、吳の國の勢は後より攻かゝらんとの事なりければ、早く打向て平ぐべしとて、先間者を遣して窺はしむるに、袁術ちか比兵粮に乏して、陳留の邊を掠劫すと申す。

父に問けるは、某か意は楊奉、韓暹を二人共に此處に住め置て、重て呂布を殺時の翼にせんと存ぜしに、何ゆゑに二人ながら遠く去しめ玉ひしぞ。陳珪申けるは、若この者共を留め置時は必ず呂布に諂ひ從はん、然らば虎に翼を添る也、われ此故に遠く去しむ、元來呂布が翼を除て心易く誅せん爲なりと答けれは、陳登父の高見に服す。袁術は若干の軍馬を失て、這々淮南へ逃かへり、何とぞ此恥を雪んとて、吳の國へ使を馳て孫策に軍兵を借んとす。此時孫策は盡く江東の地を攻靡て、文武の大將を用ひ、威風遠近に震ふ。浩る所に淮南の使きたり、袁術皇帝ちか此呂布に戰ひ負て、孫將軍に援の勢を借て其恨を雪んとす、早く力を助て往日の交を忘るゝこと勿と云ければ、孫策以ての外に怒り、汝みだりに帝位を僭して朝廷に背き、剩へ我預け置たる傳國の玉璽をも返さず、是いかなる所行ぞ、我つねに兵を起して打滅し、罪を正して天下に謝せんと欲す、何ぞ力を助るの理あらん、早く首を洗て刀の臨を待と書て、使を追立て囘しける。使いそぎ淮南に囘りて右の趣を語り、孫策が書簡を渡しければ、袁術ひらき視て牙を嚼で怒をなし、孺子みだりに朕を辱しむ、先吳を攻やぶりて、此憤を散ぜんと鬩けるを、長史楊大將と云もの、樣々に諫て止めけり。

ば、呂布大に怒り、戟を舞して斬て懸るを、大將李豊槍を撚て迎へ、戰ひ三合ならざるに右の臂を斬落され、槍を棄て走りけり。此を見て梁紀、樂就二人、急に出て呂布と戰ひ、未だ勝負を分たざるに、袁術兵を率して自ら進む。時に楊奉、韓暹又後より攻入ければ、袁術が勢俄に亂れて散々に敗北す。呂布いよ〳〵氣に乘て、息をも繼せず追立々々攻ければ、袁術が勢のこり少に打なされ、二里ばかり逃延たるに、山の上より一彪の軍馬かけ出て、去べき路を攔れり。眞先なる大將は劉玄德の弟に、關羽字は雲長、八十二斤の青龍刀を提げ、大音あげて申けるは、我こゝに來て呂布を救ふ、逆賊頸を延て刀を受よとて、五百餘騎をめき叫で蒐たりしかば、袁術膽魂も身に沿ず、已に馬より落んとしけるを、紀靈只一騎かへし合せて防ぎ戰ひ、這々たすけて淮南へぞ回ける。呂布思ひの儘に打勝て、諸方の敵を趕まくり、彌陳珪父子を重んじ、關羽竝に楊奉、韓暹を招て慶の酒宴をなし、劉玄德の恩を謝して關羽を豫州へ回し、楊奉を瑯琊の牧とし、韓暹を沂都の牧とし、次の日密に陳珪を召て申けるは、我楊奉、韓暹が內を一人この處に留んと欲す、汝が意いかゞ思へる。陳珪申けるは、此に留めて益なし、二人ゆいて山東を守らば、一年を過ずして山東の城郭自ら將軍に屬せん。呂布げにもとて、次の日諸軍に恩賞を與て手分をなし、韓暹を沂都につかはし、楊奉を瑯琊に遣す。陳登この由を聞て、私に

として小沛の路を守せ、一手は陳宮を大將として沂都の難處を守せ、一手は張遼、臧覇を兩大將として瑯琊を守せ、一手は宋憲、魏續を兩大將として碣石を守せ、一手は呂布自ら大將として大路に陣を取て張勳を支んとす。その勢みな一萬餘騎なり。去ほどに、七路の寄手ひとしく進んで、徐州の境に近付けるが、呂布自徐州大路へ三十里出張したると聞て、大將軍張勳怕れて二十里ばかり引退き、呂布は尋常の敵に非、よく〳〵諸方の御方と計を協せて、一齊に攻んと議す。呂布は敵の戰はずして退たるを怪み、自ら山に上て夜中に敵陣を窺へば、俄に火の手を擧て、敵の陣上を下へと騷動す。あはや是こそ楊奉、韓暹が兼ての合圖なれ、此方よりも攻合せよとて、自ら兵を驅て喚て蒐る。張勳は思ひも寄ず、楊奉、韓暹に火を付て後より攻られ、如何せんと騷ぎ閧處に、呂布前より打て入ければ、彌みだれ立て馬物の具をも打すて、散々に走り迷ふ、討るゝ者數を知ず。呂布勝に乘て殺して、夜の明方に至りければ、紀靈救の勢を引て馳きたるに、楊奉韓暹又傍より打て蒐りしかば、救の勢も共に亂れて、一支もせず我さきにと逃わしる。呂布追討に進ところに、山際より人馬夥しく蒐出、二手に颯と分れて、中軍に龍鳳日月の旗を指あげ、四斗五方の幟を立、白旄、黃鉞、金瓜、銀斧、黃羅の傘を張て、其下に袁術金の鎧を被て手に刀を提げ、馬を一陣に進めて、呂布匹夫早々に降れと罵りけれ

陳登款待
韓暹
韓暹

陳登

に行ければ、韓暹問て曰、汝は呂布が大將、いま何とて此に來れる。陳登笑て申けるは、某は漢朝の臣、なんぞ呂布が大將たらん、將軍さきに天子長安より還幸の時、忠戰を勵で危を救ひ、世に希なる功を立玉へり、身に少の罪無して、眞に有德清白の大丈夫、然るに今袁術が如き逆臣を佐玉ふは、譬ば明珠を舍て泥丸を取が如く、良玉を抛て頑石を抱に似たり、不忠不義の名、萬世に至まで人に爪彈して疾まれ玉はん、某ひそかに將軍の爲にこれを恥とす、豈一旦の怒に因て千古の名を失はんや、且袁術は心に疑多き人なり、後必ず將軍を害すべし、能々思案し玉へと云ければ、韓暹申けるは、我漢に歸せんと思ふ心なきに非、つねに便なきを恨る也。時に陳登懷より呂布が書簡を取出し、此を視て早く心を決し玉へと云ければ、韓暹ひらいて視るに、其書に曰、

布聞、二一將軍同扶二大駕一、立二萬世之功一。偶因二一時之間言一、以致レ失二身手關外一。若能革レ故鼎レ新、去レ邪從レ正、同誅二黨逆一、共佐二皇朝一、以圖二遠大一、名書二竹帛一。專候二回音一。切希二照察一。

韓暹見了て申けるは、我意本より如レ此、御邊先かへれ、我ひそかに楊奉と志を合せて、袁術を討取べし、合戰の最中に火の手を揚るを、我等が合圖と知玉へと云ければ、陳登わかれて徐州に還り、呂布に右の趣を語るに、呂布かぎり無よろこび、兵を五手に分て、一手は高順を大將

對手なり、敵は遠路に疲れ、御方は以逸待勞、四方路を分て要害に拒べし。呂布あざ笑て曰、汝頭を斬れんが痛さに、僞て暫く我を欺き、他國へ逃ん爲に右申か。陳珪申けるは、某が妻子一族みな將軍の掌にあり、某これを棄て何くへか逃ゆかん、今某が計を用玉はゞ、徐州必ず安かるべし。呂布が曰、ねがはくは計を聞ん。陳珪が曰、袁術いま楊奉、韓暹を用て翼とす、彼みな一處に在と云ども、烏の集たるが如にして、心さらに相親ず、若正兵を以て難處に防ぎ奇兵を出して竊に伐ば、千に一も勝ずと云こと有じ、又別に某が計あり、徐州を安くする而已ならず、袁術をも擒にせん。呂布喜て問て曰、ねがはくは汝が計に從ふべし。陳珪申けるは、楊奉、韓暹が袁術に從ふは、鳳凰の雛に從ふが如し、勢必ず久しからじ、殊に袁術が人を用るは、薪を積が如し、今この二人を用ふと云ども、此二人は元來漢朝の臣、長安より還御の時、路次の軍に大なる功を立たる者なれども、曹操が勢を憚て、心ならず袁術に身を寓る者なり、此ゆゑに袁術つねに甚だ輕んず、若ひそかに書簡を送て楊奉、韓暹が心を結び、又豫州へ人を遣して劉玄德に救を求めば、袁術を生捕こと一戰の上に有ん。呂布喜て申けるは、汝父子の内に、自ら行て楊奉等を招き諭さんや。陳登が曰、某速に行ん。呂布乃ち書簡を調へて、先豫州の劉玄德に救を求め、陳登に五六騎を授て楊奉等を諭さしむ。陳登下邳の路條より韓暹が陣

路の都救應使と定め、自ら李豐、梁剛、樂就等と、精兵三萬餘騎を率して後陣にぞ續きける。
袁術が大軍徐州へ向ふと聞えければ、呂布膽を冷し、その樣を見て參れとて、早馬を遣しけるに、軈て馳かへりて申けるは、袁術自ら後陣に備て、先手の勢を七路に分つ、張勳が一軍は直ちに徐州の大路に蒐り、橋蕤が一軍は小沛に蒐り、陳紀が一軍は沂都にかゝり、雷薄が一軍は瑯琊に蒐り、陳蘭が一軍は碣石にかゝり、韓暹が一軍は下邳にかゝり、楊奉が一軍は峻山にかかり、一日にみな五十里の路を打て民屋を虜掠し、其勢恰も卵を壓が如なりと告ければ、呂布こは如何にと怕れ躑き、急に陳珪、陳登を召て相議するに、陳宮傍に在て申けるは、今日の禍は陳珪父子が爲わざなり、彼二人元より曹操に內通の心ありて、言を巧にし色を令し、朝廷に媚て君を賣、己が身に富貴を求て禍を將軍に移、早く二人の首を斬て袁術が方へ送り玉はば、大軍自ら退かん。呂布、げにも汝が申如く、我も常に彼父子を怪む、それ搦よと下知すれば、陳登笑て申けるは、將軍なにとて箇程に懦弱なるぞ、某いま袁術が勢を見ること、朽木を碎が如し。呂布申けるは、汝この敵を退くる計ありや、若計あらば罪を免さん。陳珪問て曰、袁術が勢いか程と聞え候ぞ。呂布が曰、七手に分れて二十餘萬なり。陳珪が曰、この國の勢はいか程候ぞ。呂布が曰、五六萬に過ず。陳珪申けるは、袁術が二十萬に御方の五六萬、よき程の

順命て九五の位に登らんと欲す、汝もろ／＼の臣よく忠孝の節を激し、朕を輔て政を行へと云ければ、主簿閻象と云もの諫て申けるは、昔周の后稷より文王に及まで、功を累ね徳を積玉ひしかども、天下を三分して其二を有ち、猶殷の紂王に事玉へり、今君まことに累代克昌なりと申せども、周の盛なるに若ず、漢室衰たりと云ども、未だ殷の紂が悪逆に至らず、此事決して宜からじ。袁術申けるは、我袁姓にして陳の國より出たり、陳は乃ち大舜の後、土を以て火を承、その運に應ぜり、我字は公路、讖の文に代漢當塗高と云り、況や傳國の玉璽あり、若帝位に即ずんば却て天道に背ん、吾心すでに決せり、再び諫る者あらば、必ず首を刎んとて、號を仲氏と建て臺省官府を造り、龍鳳の輦に駕て南北の郊に祭り、馮氏の女を皇后として、後宮の美人數百人、衣服みな錦繡を重ね、器用金玉を瑩く。諸人賀を伸て、已に帝業成就せりとて、嫡子を東宮とし、呂布が女を娶て共に好を結んとて、屢使を遣すに、呂布却て曹操に一味して媒の韓胤を市に斬て、其外の使を皆首を刎たりと聞て大に怒り、二十萬の勢を起して七手に配つ。第一大將軍張勳、第二橋蕤、第三陳紀、第四雷薄、第五陳蘭、第六韓暹、第七楊奉なり。日を擇で打立ければ、兗州の刺史金尚を大尉に任じて、七路の兵粮を奉行せさせんと云に、金尚いかゞ思ひけん、堅く從はざりしかば、袁術怒て金尚を殺し、大將紀靈を七

ば虎を養が如し、當に肉に飽しむべし、飽ざる時は必ず人を食んと申せしに、曹操打笑て頭を掉、いや〳〵、我呂布を養は鷹を養が如し、狐や兎の世に在間は、先飽しむべからず、饑る時は人に用られ、飽時は飛去んと云り、某又狐兎とは誰を申ぞと問しに、曹操答て呉の孫策、冀州の袁紹、荊州の劉表、益州の劉璋、漢中の張魯、これ等を世の狐兎とす、鷹に非んば取こと能じとこそ申て候へと云ければ、呂布これに心解て限なく打笑ひ、曹操よく我を知れりと云て、少しも疑ふ心ぞ無りける。時に早馬來り、袁術淮南の大軍を起して此處へ寄ると告ければ、以ての外に周慞し、諸大將を集て計を議す。

○袁術七路攻二徐州一

袁術は淮南の郡縣を横領して、地廣く糧多し。是皆人民を掠劫して、邪に富貴を得たる者なり。殊さら孫策が預け置たる帝王傳國の玉璽ありければ、皇帝の位に卽んとて、九重の宮室を造り、車輦冠冕等まで一齊に備りければ、手下の大將を盡く聚めて、昔漢の高祖は泗上の亭の長たりと聞しが、四百餘年の帝業を創て今日まで傳たり、而れども天數すでに盡て、劉氏微弱、四海鼎の如に沸、わが家は四代まで三公に昇て、百姓の歸する所たれか心を寄ざらん、我應レ天

與レ操交レ兵、今操保二轉陛下一。臣爲二外將一有レ兵自從、恐レ有二嫌疑一。是以待二罪徐州一、進退未二敢自專一。近奉三天寵曲頒二恩命一、愧感交集。倘有二征討一、願效二努力一、萬死不レ辭。謹表以聞。

曹操甚だ喜び、呂布如レ此なる上は、我なにをか患んとて、先韓胤を市に出して首を斬しむ。陳登申けるは、呂布は豺狼の心ありて、勇にして無レ計、智淺して去就に輕し、君ひそかに圖て除玉へ。曹操申けるは、我よく呂布が爲レ人を知れり、狼子の野心を挿で久くは養がたし、汝父子に非んば此事を謀得じ、常に其旨を心得よとて、乃ち陳登を廣陵の太守とし、父陳珪を中二千石として囘らしむ。陳登拜謝して打出ければ、曹操自ら送り、其手を執て申けるは、東國の事こと〴〵く汝に任す。陳登答て、丞相兵を起し玉はゞ、某必ず內應すべしと云て相わかれ、直ちに徐州に囘りて、曹操が父子に官爵を贈りたる由を語るに、呂布怒て申けるは、汝つかひとして都に上り、何とぞ我ために徐州の牧を求めずして、放に己が富貴を受、さきに汝が父われを勸て、袁術と交を絕せて却て曹操に服せしめたるは、汝等われを賣て身の富貴を取ん爲なりとて、劍を拔て斬んとす。陳登大に笑て申けるは、將軍なにとて明ならざるぞ。呂布が曰、如何ん、汝理あらば命を扶けん。陳登申しけるは、某都にて曹操に見え、呂布は譬

れども、我さまで哭ことなし、只哀きは典韋なりとて、頻に涙を流しければ、聞人みな丞相の大將を愛し玉ふこと、實の骨肉に超たり、一命をこの君に捧て死んこと、露ばかりも惜からずとぞ申あひける。此も曹操が奸計とぞ聞えし。此時奉車都尉王則は、勅使として徐州に下向し、呂布に對面して詔をのべ、平東將軍に封じ玉ふとて印綬を渡しければ、呂布拜謝して喜こと限なし。王則又曹操が書簡を出しければ、呂布ひらきて讀に、其文に曰、

國家無二好金一、孤自取二家藏金一以鑄レ印。國家無二好紫綬一、取下所二自帶一紫綬上以表二寸心一。望將軍與二劉備一合同、共滅二袁術一、大著二忠誠一。書不レ盡レ言、惟將軍照鑑。

呂布見了て、我と劉玄德とは元より深き怨なし、何ぞ和睦せざるべきと云ところに、忽ち淮南の袁術より使きたれりと申す。呂布笑て、如何なる使ぞと問に、袁術大王近き内に皇帝の位に卽んとす、此に因て其子を東宮に立、いそぎ呂將軍の息女を送りて、東宮の夫人に備へ玉ふべしとの使なりと答ふ。呂布これを聞て大に怒り、反賊なにとて如レ此なるぞとて、卽時に使の頸を刎、さきに留めて獄に下したる媒の韓胤を引出して頭枷をいれ、陳登に表を持せて、之を送りて都に上らしむ。曹操對面して呂布が表文を見るに、其詞に曰、

臣呂布、自レ誅二董卓一、又羅二喪亂一、寄二跡山東一、本欲レ邀レ駕。知二曹操忠孝奉一駕許都一。臣前者

とは知ず、追きたる敵を支んとて敗軍の士卒を集め、曹操が來るを見て彌兵を激し、濠を掘せ柵を結せければ、或人來て申けるは、適に狼藉を成て打ちらされたる青州の者共、怨を含て讒言し、將軍心がはりし玉ひて、却て御方を討玉ふと申す、此に因て曹丞相疑て來り玉ふ、先この陣を棄て、二心なき由を明し玉へ。于禁申けるは、今敵の勢勝に乘て追きたる、若陣屋を構てこの處にて一支さゝへずんば、御方いづくにか足を留ん、我二心なき由を申は小事なり、敵を支るは大事なりとて、陣屋を造り出しける時、案の如く張繍が兵、二手に分れて追きたる。于禁まち受たる事なれば、自ら眞先に進んで士卒を勵し、短兵急に揉だりしかば、曹操相がかりに蒐りて散々に打やぶる。張繍のこり少に討なされて、爲べき樣なかりければ、荊州に走て劉表を頼む。曹操喜て本陣に囘りければ、于禁きたりて青州の兵共の狼藉したることを語る。曹操申けるは、狼藉を靜めたるはさも有ん、汝わが下知も無に陣屋を作りたるは何故ぞ。于禁事の樣有の儘に語るに、曹操嘆じて申けるは、淯水の敗軍われ大に狼狽せり、汝みだれたる軍中に在て能兵を整へ、堅く守て動ず、追かくる敵を支たる事、古の名將も此上には不レ可レ出とて、金の器一對を恩賞に賜ひ、壽亭侯にぞ封じける。次に夏侯惇を召て法令の正からざるを責、師を収て都に囘りけるが、諸人に語て、此囘の敗軍に、嫡子曹昂と姪の曹安民とを討れた

地を震て、流るゝ血泉の如く、了に倒て死けれども、半時ばかりは近付ものぞ無りける。曹操この間に馬を尋て打のり、後の門より走りけるに、曹安民只一人、歩跣にて従うたり。いまだ淯河の邊にも到ざるに、曹操右の臂をしたゝかに射られ、乗たる馬も三條まで射付られて、漸く河を渡らんとする所に、敵の勢急に趕かけ、曹安民を取圍で寸々に斬る。曹操震ひ怕れ、河を打渡て向の岸に蒐あがれば、矢一つ來て馬の眼に中る。此に依て小篠の上に下立、のり替を待ほどに、敵の勢生取んと馳あつまる。嫡子曹昂は遙に落のびたりけるが、父の危を見て馬を求て馳きたり、曹操を扶けのせて、趕かくる敵を支けるが、了に亂れ矢に射死されたり。されば討れたる屍路に横たはりて、軍果て後も淯河の流血に成て、紅楓の陰を行く水の夕陽を涵せるが如なり。曹操初め夏侯惇に命じて青州の勢を司らせけるが、軍令緊しからざるゆゑに、其勢四方に散て人民を刼しける。于禁その狼藉を靜ん爲に、惡人の張本を斬て民を安じければ、青州の勢みな怨を含み、曹操に見えて申けるは、于禁俄に敵と成て、却て我等を殺さんとす、此ゆゑに這々のがれて來り候とて、皆涙を流しければ、曹操大に驚て、料ざりき、于禁が心易せんとは、我いかゞして都に囘らんと嘆ところに、諸大將こゝ彼こより馳きたり、夏侯惇申けるは、某打向て于禁が實不を聞きたらんとて、手勢を引て打出る。于禁は浩ること有

車兒扮れて伴ひ行けり。曹操はこの夜も彼女房と酒もりして居けるが、俄に人馬の音もの騒く成ければ、人を出して何事ぞと問に、張繡が陣の夜巡なりと答ふ。此に依て心を安じて居たるに、漸く二更の比に至て、一人走り來り、陣屋の後上を下へ反して、草を稠だる車に火燒出たりと申す。曹操なほも驚ず、兵共が油斷して、手誤し出したる成んと云ところに、四角八方に火起て、陣中皆さわぎ閙く。曹操こは如何にとて、走り出て典韋を呼に、醉倒て帳外にあり。去ほどに遠近鼓を打鑼を鳴して、喊の聲地を動しければ、典韋夢打驚き、躍り起て傍を尋れども、戟は二つ共に見えず、早敵の大勢轅門の邊まで攻來りければ、急に雜兵の腰刀を拔てよろめき出るに、寄手の勢みな長き槍を持て、四方より突こと野澤の葦に異ならず。典韋は身に甲をも被ざれば、遍身に創を被りながら、敵二十餘人を斬て落して、騎馬の勢を追出しければ、又歩立の敵軍入かはりて攻たりける。典韋なほ踏止て喚き叫で戰けるに、頼切たる刀も折ければ、大手をひろげて近く寄たる敵二人を左右に持あげ、散々に撃合たるに、矢場に死する者八九人、寄手これに怕れて門外へ颺と引、只遠矢に射すくめける。陣々ことごとく火かゝりて、士卒われ先にと落ゆき、本陣を救んとする者なかりしかども、典韋なほ門を守て退かず。其後敵の勢みな後より亂れ入、典韋が立すくみたるを、槍を指のべて群り撞に、喚く聲

りける。張繡この由を聞て怒て申けるは、我本より曹操は仁義を心に掛けて道を行ふ人なりと聞しが、今かゝる行を爲て我を辱しむ、如何せんとて諸大將と議するに、賈詡申けるは、必ず此事泄べからず、萬一外に沙汰ある時は、我等みな三族を滅されん、明日曹操が外に出て事を議する時、君よく箇樣々々に計を成玉へと低語ければ、張繡喜て相待に、案の如く次の日曹操本陣の帳上に出、軍中の事を議す。張繡すゝみ出て申けるは、某に從て丞相に降りたる兵共、この比ぬけ〳〵に落去もの多し、願くは某が陣を本陣の傍に移して、落去ものを制せん。曹操しかるべしと許ければ、張繡ひそかに喜び、陣屋を四個所に造て曹操が中軍に近付、計を相議するに、典韋と云大力の剛の者、重さ八十斤に作たる鐵の戟を左右の手に提げ、いつも曹操が寢房の前に在と聞て、輕々しく進み難しとて案じ煩ふ所に、舊き大將に胡車兒と云ものあり、力五百斤を負、日に七百里を走る。進出て申けるは、典韋が事は某に任せらるべし、期に臨で酒宴を設て招き寄、酒を強て大に醉て還る時、某ひそかに雜兵に打混り、從ひ行て先その戟を盗取ん、然る時は此人物の用に立べからず。張繡かぎり無よろこび、武具をとゝのへ手配を定めて、用意一齊に備しかば、賈詡に命じて典韋を招かせ、酒を勸て樣々に持なしけるに、晩方には前後も知ず醉伏たり。已に回んとて出ければ、兼ての計を乖ず、胡

この邊に妓女は無かと問に、姪の曹安民衣食の役にて前に候ひけるが、答て申けるは、昨日の暮程にひそかに一人の美女を見て、如何なる者ぞと尋て候へば、張繡が父の張濟が妻なりと申候き、顏色殊に麗しうして、實に天の生る質にて候と云ければ、曹操それ具して參れと云に、曹安民混盔五十人を率し、須臾の間に伴ひ來る。曹操これを見るに、傾國の色まことに云ばかり無あてやかなりしかば、汝は如何なる姓ぞと問に、張濟が妻にて鄒氏なりと答ふ。曹操が曰、汝われを知たるか。答て曰、久く丞相の威名を聞て、今幸に見ることを得たり。曹操申けるは、張繡が罪甚だ大なりと云ども、我汝を思ふ故に其降參を許せり、然らずば一類を滅べし。女房拜謝して申けるは、實に再生の恩を感ずること深し。曹操打笑て申けるは、今汝に逢は不思議の幸なり、今宵ねがはくは枕席を共にし、都に回りて後は我本妻とすべしとて、其夜は帳中に枕を竝べ、夜明て女房申けるは、此まゝにて久しく城中に居玉はば、張繡疑を起して人の怪め申すこと候はん。曹操實にもとて共に城を出て本陣に回り、人の疑を避ん爲に、大將典韋を召て申けるは、汝精兵二百人を擇で中軍の帳外に宿直し、我呼に非んば一人をも內へ入しむること勿れ、若誰にても漫に入もの有ば、卽時に首を刎よとて、日夜外に出ず。彼女房と酒をのみ樂を成て、都の事をも忘居ければ、軍中の將士內外通ぜず、皆退屈してぞ居た

ども、呂布が玄徳を攻て、虚に乗て都を襲ん事を怖れ、心いまだ決せざるを、荀彧申けるは、此は極めて易き事にて候、呂布は勇にして無レ計ものなれば、慾に迷ひて利を見ては前後の思案に及ず、いま使を遣して、官位を加へ恩賞を與玉はば、心喜て安からん、然る時は玄徳と和睦を成て、遠き慮は候はじ。曹操美くも申たりとて、卽時に奉車都尉王則を勅使として徐州へ遣し、この間に張繡を退治せんとて、自ら十五萬の勢を起し、夏侯惇を先陣とし、三手に分れて宛城へ發向す。時に建安二年五月、先陣すでに淯水の邊に著て陣屋を造りければ、張繡これを聞て以の外に驚き、如何せんと議するに、賈詡申けるは、曹操いま勢盛にして、中々敵すること叶まじ、不レ如早く降參して、軍民の苦に罹ことを免れしめ玉へ。張繡いかゞと心危みながら、戰て勝ことを得じと思ひければ、賈詡を使として降參をぞ乞せける。曹操對面して快く降參を許し、賈詡が應對水の流が如なるを見て、尋常の者ならずと思ひ、平に我に仕よと云に、賈詡申けるは、某さきに李傕が手に屬して、罪を天下に得たり、今又張繡に仕て、二心なき者と頼まれたれば、故なうして棄るに忍ずとて、拜謝して城中に回り、次の日張繡に從て共に來り見えける。曹操かぎり無よろこび、大軍を城外に留め置、自ら小勢を引て城内に入、數日逗留しければ、張繡酒宴を設て樣々に持なす。或時曹操酒に醉て臥けるが、傍の人に向て、

を殺さば、必ず妬レ賢忌レ才の誚を取玉はん、殊に玄德は英雄の譽天下に隱なき者なる上、いま困窮して君を賴む、若これを殺さば、智謀の將士もみな疑を含で逃れ去ん、然る時は君たれと共に天下を治め玉はんや、夫除二一人之患一以阻二四海之望一安危の機よく〳〵察し玉ふべし。曹操喜て申しけるは、我も右こそ思つれ、汝が計よくも我心に合へりとて、次の日天子に奏聞を歷て、玄德を豫州の牧に封ず。程昱この由を聞て、急ぎ曹操を諫て申けるは、玄德の爲レ人を某よく見候に、才德世に超て甚だ民の心を得たり、了に人の下に居べからず、不レ如早く除き玉へ。曹操申けるは、汝が云ところ然らず、方に今英雄を招き用るの時なるに、一人を殺して天下の心を失ふべきか、郭嘉が所存も我に同じと云ければ、程昱げにもと嘆服し、君まことに王霸の德あり、某等が及ぶべきに非と云て退出せり。曹操その後精兵三千餘騎、兵糧一萬斛を玄德に與て豫州の太守とし、重て日を定め、共に兵を起して呂布を討たんと約をなす。時に宛城より早馬きたり、舊の董卓が大將張濟長安に在て勢を集め、荊州に打入て穰城を攻取んとせしが、流矢に中りて命を失ひぬ、其兄の子に張繡と云もの、敗亡の卒を招き、賈詡と云大將が勸に依て荊州の太守劉表と一味し、宛城に楯こもつて都へ攻上んと企候、討手もし延引に及ばば、勇々しき大事なるべしと告ければ、曹操驚て、先張繡を平ぐべしと議しけれ

○曹操起レ兵伐二張繡一

建安元年の冬、劉玄德小沛の城を呂布に追出され、わづかに五千餘騎にて許昌の都へ逃のぼり、曹操が方へ孫乾を使として賴べき由を云つかはさる。曹操少しも異儀に及ばず、玄德は我弟なり、疎にすべき樣なしとて、人を出して迎へければ、玄德次の日城中に到り、再拜して見えらる。曹操自ら扶け起して上座を讓りければ、玄德つぶさに呂布が惡虐を告玉ふ。曹操申けるは、呂布は元來義を知ぬ國賊なり、時を待て退治すべしとて、酒宴を設て持なし、暮に及で別て相府に回りければ、荀彧ひそかに來て低語けるは、玄德は世の英雄にて怖しき者なり、早く除き玉はずんば、後に大なる患を成ん。曹操いかゞ思ひけん、默然として居たりしかば、荀彧退き出にけり。暫ありて郭嘉外より來りければ、曹操問て申けるは、荀彧われに玄德を殺せと勸む、汝が心いかゞ思へる。郭嘉申けるは、荀彧が勸ること、尤その理なきに有ねども、君いま仁義の兵を起して天下の爲に害を除き、信義を以て賢人を招き、百姓を治め玉ふべきに、却て玄德

横ぎる。張飛勇を震て八方へ切ちらし、已に圍を出ければ、跡より張遼が一軍趕きたるを、關羽とりて回して之を防ぎ、五千餘騎にて許都を指て落玉へば、呂布は長追なせそとて兵を收て徐州に回り、高順を留て小沛の城を守らしむ。

奪ひしは、汝が馬なるを知ざればなり、早々に退けと云ければ、呂布牙を嚙で曰、環眼の賊、われを輕んずることこの度ばかりに非、われ必ず頸を取ん。張飛大音あげて罵り、われ汝が馬を奪りとて、汝腹を立て攻きたる、汝は我兄の徐州を奪て、今に返ずと云ければ、呂布聞もあへず戟を舞して打て蒐り、二人百餘合ぞ戰うたる。呂布が大勢四方より進んで、漸々として取まはしければ、玄德小勢にて防こと能ず、金を鳴して城中に退き玉ふ。呂布これを圍で四方より攻ければ、玄德乃ち張飛を叱り、是又汝が馬を奪ひしより出たる禍なり、その馬はいづくにか有と宣へば、張飛が曰、こと〴〵く廐に縛だり。玄德これを寄手の陣へ送り玉ひければ、呂布怒を止て戰を收んと云に、陳宮又諫て申けるは、今もし玄德を殺し玉はずんば、必ず近き禍を成ん、早々に攻玉へとて、鼓を打て兵を激し、息をも繼せず攻ければ、玄德いかゞせんと議し玉ふに、孫乾申けるは、曹操が怨る者は呂布なり、不如この城を棄て許都に走り、曹操を恃で兵を借、時を窺て仇を報じ玉へ。玄德の曰、誰か先手に進んで路を開かん。張飛が曰、某ねがはくは出て命を棄ん。玄德これに從て張飛を先手とし、關羽を後陣とし、自ら中軍を領して妻子を護り、其夜の三更月明なりければ、城中一萬の勢を半留めて西の門を守らせ、喊を造り鼓を打て旚く戰體をなさしめ、却て北の門より走り玉へば、宋憲、魏續が二手の勢路を

其二
張飛
關羽

かと罵りければ、陳宮默然として退きける。陳珪申けるは、暫く韓胤を囚へ置、袁術が方へ使を馳て、用意いまだ備らず、重て日を定め女を送るべしと云つかはし、愚息にて候陳登を使として、韓胤を搦て朝廷に送り、袁術が叛逆に一味せざる所を明に告玉はば、曹操これを喜で將軍と好を結べし。呂布いまだ心決せず、此事重ねて議せんと云ける所に、一人外より來て申けるは、玄德小沛の城に在て、兵を集め馬を買、これ如何なる故ぞ。呂布が曰、これ大將たる者の心がけて爲べき事也、なんぞ疑ふ事有ん、我も好馬を求ん爲に、宋憲等を山東へ遣せり。後數日を經て宋憲、魏續回りければ、呂布問て申けるは、汝二人いかほどか馬を得たる。宋憲が曰、この間山東に出て名馬三百匹を買て歸ところに、小沛の境にて強盜に刧れて、大半は奪れたり、よく〳〵承はり候へば、玄德が弟の張飛、いつはりて山賊に出立たるにて候。呂布大に怒り、こはそも如何なる故ぞ、早く小沛を打やぶらんとて、大軍を起して推よする。玄德この由を聞て、兵を引て城を出、自ら大音あげて、呂將軍なにとて此の如なると問玉へば、呂布罵りて曰、われ轅門に戟を射て汝が命を救ふ、何ゆゑに我馬を盜たるぞ。玄德の曰、われ馬少き故に四方より買あつむ、何ぞ將軍の馬を取ん。呂布怒て曰、汝張飛を山賊に似せて、我名馬百五十疋を奪へり、我なんぞ伐ざるべき。張飛これを聞て、矛を提て進み出、われ馬を

音樂風に響き、鼓の聲天に喧しく、已に送りて城外へ出たりける。爰に沛の令陳珪と云ものあり。乃ち陳登が父にて、年老病を養て私の家に居たりしが、此日音樂の聲を聞て何事ぞと問に、左右答て申けるは、呂布女を袁術に送りて、婚姻を成交を結んとす、今送りて城を出たり。陳珪が曰、なに者か媒をしたる。答て曰、三日以前に韓胤と云もの壽春より來りしが、是定めて媒にて候はん。陳珪驚て申けるは、是疎は不レ間レ親の計なり、必ず玄德を殺さん爲なるべしとて、病を扶て行て呂布に見えければ、呂布問て曰、陳大夫なにとて此に來れる。陳珪が曰、將軍ちかき内に死玉ふと聞て、喪を弔はん爲に來りたり。呂布大に驚て曰、これ如何なる事ぞ。陳珪が曰、袁術さきに多く金帛兵粮を將軍に送りて、玄德を殺さんとす、將軍戟を射て戰ひを休玉へり、今又使を以て婚姻を求むるは、是息女を人質に取て玄德を殺させん爲なり、或は金銀を求め兵粮を借り、援の勢なんどを求めて天下を奪はんと謀りし者なり、女を人質に送り玉ひて後は、袁術が申ところ一つとして背玉ふこと能じ、將軍又謀叛の人と親く成玉ふ時は、滅亡すでに至れり、萬世の惡名を得て逆臣と呼れ玉はんと云ければ、呂布以の外に仰天し、陳宮われを勸て浩る事を仕出したり、早く追蒐て召回せとて、大將張遼に大勢を授て、三十里追掛て引かへらしめ、陳宮が罪を責て、汝われを勸て千載の惡名を取せんとする

成には、聘を受るの吉日を以て卽ち日限を定む、天子は一年、諸侯は半年、大夫は一季、庶人は一月なり。呂布が曰、袁術は傳國の玉璽あり、必ず近き内に皇帝と成べし、我天子の例を用ひん。陳宮が曰、甚だ然るべからず。呂布が曰、しからば諸侯の例を用ふべし。陳宮が曰、いよいよ無用なり。呂布が曰、しからば卿大夫の例を用ふべきか。陳宮が曰、甚無用なり。呂布驚て曰、われ今徐州を領すと云ども、天子より封じ玉へるにあらず、此に因て庶人の例を用ひよとのことか。陳宮が曰、爭かさること候はん。呂布が曰、しかる時は汝が心いかん。陳宮が曰、方に今天下大に亂れて、英雄の諸侯こゝに爭ひ彼に戰ふ、袁術は大國を保て威勢四方に振ふ、今將軍息女を送りて共に好を結び玉ふと聞て、人多く妬羨む、若日を擇ぶなんど云て延引に及びなば、世間ことごとく聞知て、半途に兵を伏て奪ひ取こともや有ん、是禍を招く端なり、すでに媒ありて事定まりぬる上は、いまだ人の遍く知ざる間に、片時も早く息女を壽春へ遣し玉へ、然る時は袁術よく吉日を擇で、婚禮の儀を執行ふべし。呂布限なく喜び、汝が云ところ心に合へりとて、女房嚴氏に語りければ、嚴氏これに從ひ、陳宮が教にあらずんば我女を失ふべし、速に用意をし玉へと云。呂布乃ち金帛を送りて韓胤が媒を謝し、用意ことごとく備りければ、香車寶馬を裝ひ、大將には宋憲、魏續二人、兵を引て之を守護し、媒の韓胤を伴て、

禮物を捧て徐州へ到り、呂布に見て申けるは、袁術いま將軍の德を慕ひ、共に秦晋の好を結んで、永く一家の交を成んことを願ふ、將軍幸に息女あり、袁術ひとりの男子あり、若息女を迎る時は、何の慶か之に超ん。呂布大に喜び、禮物を收て内に入、女房嚴氏とこの事を議するに、嚴氏が申けるは、袁術久しく淮南に威を震て、兵多粮足れり、近き内に天子と成玉はんと云ものあり、若いま一家の好を結ぶ時は、我女國母の望あり、殊更彼も男子一人なり、我女を妻時は、假令皇后とならずとも、永き好と成て徐州も亦危こと無らん。呂布いよ〳〵心を決し、韓胤を請じて重く持成、まづ驛館に留て休息せしむ。次の日陳宮ひそかに韓胤に問て申けるは、誰か此計を設て、御邊に媒をせさせたるぞ、必ず玄德を殺の質ならんと韓胤驚て色を失ひ、地に跪て事の樣を白狀し、足下ねがはくは憐玉へと云ければ、陳宮笑て申けるは、我すでに玄德を殺さんと思へども、呂布つねに從はず、是わが希ところ也、もし延引に及びなば、必ず他人に妨げられん、我速に勸ん、必ず心を安じ玉へ。韓胤喜て謝して曰、某再生の恩を被る、袁術もし之を聞ば、必ず足下を重んずべし。此に於て陳宮內に入、呂布に見て申けるは、某承る、袁術いま婚姻を求むと、是本より望ところなり、徐州長久の慶これに過べからず、日を定め玉へるか。呂布が曰、いまだ定まらず。陳宮が曰、古より婚姻を

呂布戟を射て
玄德紀霊と
和睦せしむ
呂布

玄德
紀霊

同じければ、呂布又洒を飲で一巡に至りける時、自ら起て矢をはぐ。弓は秋月の天を行が如く、箭は流星の地に墮るが如く、戟の小枝にはたと中る。帳上帳下、聲を調て感ずる聲しばしは止ず。呂布弓を棄て座に著、二人の手を執て申けるは、是天戰を休玉ふ也、今日は共に醉をなして、明日各陣を退き玉へ。紀靈が曰、某これを背には有ねども、空く回ては主人に對して如何口を開べき。呂布が曰、その事少しも患玉ふな、我書簡を袁術に送てこの事を巾べし。紀靈止ことを得ず、書簡を求めて回ければ、呂布乃ち玄德に向て曰、われ若救ずんば御殆危からん。玄德拜謝し、身を終まで忘候はじとて相別れ、次の日共に陣を收て小沛に回り玉へば、呂布も徐州へ回りける。紀靈は淮南に回りて袁術に見え、右の趣を語りて呂布が書簡を出しければ、袁術大に怒て申けるは、呂布さきに我許多の贈物を受て、反て玄德に心を通じ、戟を射るを名として我を欺く、我自ら大軍を引て先呂布を滅さん。紀靈が曰、事かるべく敷すべからず、呂布は當世の英雄、徐州の要害を保て、若玄德と首尾相連る時は敵すること能ふまじ、某よく計を運すに、呂布が女房に嚴氏と云もの一人の女を產、いま君又男子を持玉ふ、徐州に使を遣して婚姻を求玉へ、呂布が女こゝに在ば、彼必ず玄德を殺べし、此疎は不間親と云の計なり。袁術同心して、卽時に韓胤に命じてこの計を行はしむ。韓胤媒の使として、

ず。呂布中座に據て紀靈を左に坐せしめ、玄德を右に坐せしむ。酒宴すでに半に及で、二人共に唯われに對して戰を止玉へと云ひければ、紀靈申けるは、われ君の命を受、十萬の勢を引て偏に玄德を生取んとす、爭か戰を止候はん。玄德默然として居玉ひければ、後に立たる張飛目を怒らし、劍を拔て申けるは、御方いま勢少しと云ども、汝が輩を小兒の戲の如くに思ふ也、むかし黃巾の賊徒百萬に餘りしを、我等が討滅せるを見ずや、汝みだりに舌を動と云ども、爭か我兄に敵すべき。關羽いそぎ張飛が袖を控て、暫く呂將軍の料ひを見るべし、那のち本陣に回りて奴原一々に討取んと云ければ、呂布勃然として申けるは、我いま汝等を一處に招て、共に戰を休させんとす、何ぞ無用の言を出せる。玄德紀靈共に默然たりければ、張飛前に踊出、われ汝が首を取こと掌の內にありと云て、紀靈を討んと勇ける。呂布大に怒り、わが戟もち來れとて、長き戟を取よせ、右の手に提ければ、玄德も紀靈も共に色を失ふ。呂布申けるは、われ今戰を和睦せしむること、私に爲にあらず、專天命の決する所なりとて、持たる戟を陣外の轅門に立させ、手に弓矢を取て玄德紀靈に申けるは、是より轅門の交百五十步あり、我いま一矢、立たる戟の小枝を射ん、中りなば互に戰を止玉へ、若中らずんば、本陣に回て心の任に戰ひ玉へ、此事もし許容なくんば、我いま御邊二人を共に殺さん。滿座みな尤と

ること手を反が如き者なり、輕々しく行玉ふな。玄德の曰、呂布わが恩を受ること久し、何ぞ我を害すべきとて、了に呂布が陣に入玉ふ。呂布對面して申けるは、我いま御邊の危を救ふ、必ずこの恩を忘玉ふな。玄德拜謝して傍に坐し玉へば、關羽張飛その背に侍立す。呂布又使を遣して紀靈を招に、暫く有て外より紀靈すでに來れりと告ければ、玄德これを聞て大に驚き、急に起て避んとし玉ふを、呂布拖止めて申けるは、我いま御邊と紀靈とを一處に招て、共に事を議せんとす、必ず疑ひ玉ふなと云ければ、玄德その故を知ずして、心の内怪み怕れ玉ふ。紀靈は馬より下て内へ入けるが、玄德を一目見てつと引回して出ければ、諸人住むれども耳にも聞入ず。呂布走り付て紀靈が臂を取て引とめ、恰も三歲の小兒を提たるが如くなれば、紀靈問て曰、將軍われを殺し玉ふか。呂布が曰、なんぞ殺さん。紀靈又曰、大耳の賊を殺し玉ふか。呂布が曰、なんぞ殺さん。紀靈が曰、ねがはくは早く一言を述て、某が心を決し玉へ。呂布が曰、玄德は我弟なり、今御邊の爲に苦めらる、之を救んが爲なり。紀靈大に驚て曰、しからば必ず我を殺し玉ふべし。呂布笑て曰、爭か人を殺さん、我つねに合戰を好ず、只和睦を好なり。紀靈が曰、和睦とは何ぞ。呂布が曰、われ兩人の戰を止させ、天の決するに任せて和睦せしめん、此に來り玉へとて、伴て座に卽ければ、紀靈と玄德と、じり目に相見て共に心の内安から

ん、必ず救ひ玉ふこと勿れ。呂布が曰、袁術もし玄徳を滅さば、必ず北の方泰山に連らん、然る時は我も自ら袁術が領内に入べし、救ずんば叶まじとて、兵を引て打出る。去ほどに紀靈が大軍長く驅て大に進み、小沛城の東南に陣を取て、晝は刀槍を連ね、旌旗を立て天を掩が如く、夜は大篝燒つゞけ、鼓を打て山川も崩やすらんと夥し。其勢ひ恰も泰山を以て卵を壓が如くなりしかば、玄徳五千餘騎にて城外に出て陣を取玉ふ。張飛馬を躍せ打て蒐らんと勇むを、玄徳急に推止め玉ふ所に、呂布兵を引て救の爲に馳來り、城の西南にあたりて一里隔て陣を取たりと告ければ、心の内大に喜び玉ふ。紀靈は城を破ること掌に有と思ふ所に、呂布大勢を引て玄徳を救ふと聞て、急ぎ書簡を送て約に背けるの罪を責。呂布ひらき見るに、

靈聞、大丈夫之士心無㆓二意㆒、專在㆓一圖㆒、可㆑赴㆓鼎鑊之烹㆒。紀信就㆓楚軍之裂㆒、鱄諸受㆓吳王之殺㆒。前者溫侯既受㆓袁氏之禮物㆒、今復納㆓劉備之佞言㆒、非㆓英雄之所㆒㆑爲也。若蒙㆓早斬㆓劉備㆒、永爲㆓唇齒之援㆒、共圖㆓王霸之基㆒。願賜㆓片言㆒、以決㆓去就㆒幸甚。

呂布これを見て打笑て申けるは、我一つの計あり、此を用て袁術も我を怒らず、玄徳も我を恨ざらしめん。高順問て曰、ねがはくは聞ん。呂布が曰、いま詞を以て述がたし、期に臨で此を見よとて、急ぎ使を遣して玄徳を招く。玄徳喜て出玉へば、關羽諫て曰、呂布は心の定らざ

萬斛。迎逢道路、非直此上、當絡繹復致。若軍器戰具他所乏少、大小惟命。

呂布これを見て深く喜び、贈物を受收めて重く韓胤を持成ければ、韓胤回りてこの由を告。袁術斜ならず喜び、さらば攻よとて紀靈を大將とし、雷薄、陳蘭を副將として、大軍を小沛の城に向はしむ。玄德これを聞て大に驚き、如何せんと議し玉ふに、張飛すゝみ出でて申けるは、何ほどの事か有べき、某ねがはくは蹴ちらして棄候はん。孫乾が曰、御方兵少く粮乏して爭かこの大敵を防べき、徐州へ馬を馳て呂布に救を求め玉へ。張飛が曰、これ程の敵を見て何ぞ人の力を借ことあらん、某が打やぶるを見玉へとて、已に矛を取て出んとす。孫乾推止め、血氣の勇を起し玉ふな、不如この城を棄て曹操が處に行んと云ければ、玄德の曰、これ我意に合へり、呂布もし救ずんば、その時城を棄て曹操を賴んとて、徐州へ早馬を立て呂布に救を求らる。呂布ひらき見るに、その書に曰、

伏自將軍垂念、令備于小沛容身、實拜雲天之德。今術欲報私讐、遣紀靈領兵到縣、亡在旦夕。非將軍莫能救之。望驅一旅之師、以救倒懸之急、不勝幸甚。

呂布見了て申けるは、兩方より書を送て、一方は救を求め一方は救ふこと勿れと云、我いかんとも決し難し。陳宮が曰、玄德今力弱と云へども、後には必ず天下に縱横して將軍の禍を成

江の險あり、兵精く糧足て、かるぐ〵しくは攻がたからん。袁術が曰、さきに劉玄德、なんの故も無に兵を起して我を攻んとす、この恨わすれ難し、今これを伐たんは如何に。楊太將が曰、玄德を伐んと思ひ玉はば、某計を用て擒にせん、今玄德は小沛の城に楯こもり候へば、御方の大軍を以て蹈やぶらんこと、何より以て易しと申せども、呂布徐州を守て居候へば、必ず玄德を救ふべし、彼等二人志を一にする時は大事なり、不如さきに約束したる兵糧金銀段子名馬を、只今呂布に贈て共に好を結び、必ず玄德を救ふこと勿れと云玉はば、彼目の前の慾に心迷て必ず將軍に從はん、然る時は玄德を手取にせん、玄德を平げて後又呂布を滅す時は、是先一患を除の計なり。袁術大に喜び、卽時に書簡を作り贈ものを調て、韓胤を使として徐州に行しむ。呂布これを得て披き見るに、其書に曰、

昔董卓作亂、破壞王室、禍害術門戶。術擧兵關東、未能屠裂卓。將軍誅卓送其首、爲術掃滅仇恥、使術明目于當世、死生不愧、其功一也。昔金尙向兗州、甫詣封部、爲曹操逆所拒破、流離迸走、幾至滅亡。將軍破兗州、術復明目于遐邇、其功二也。術生平以來、不聞天下有劉備、備乃擧兵與術對戰、術憑將軍威靈、得以破備、其功三也。將軍有三大功在術、術雖不敏、奉以生死。將軍連年攻戰、軍粮若少。今送米二十

るに、忽ちに作ひ來る。孫策乃ち對面するに、白髮童顏出塵の容なりければ、其名を問に、沛國譙郡の華陀字は元化と云もの也。軈て周泰が瘡を療治せしむるに、是なんの難ことか有んと云て藥を與ければ、一月の間に平復せり。孫策これより山賊を盡く平げて、江南八十一州の内には手にさはる者も無れば、諸將を分て要害を守らしめ、十萬の勢を集めて廣く賢能の士を招き、勢ひ遠近に震ひしかば、朝廷に表を捧て曹操と交を結び、又袁術が方へ馬を馳て、預け置たる傳國の玉璽を求むるに、袁術この時帝位に卽んと思ふ心ありて、了に玉璽を返さざりけり。

○呂布轅門射レ戟

袁術この時淮南の地を構領して、勢む甚だ盛なりければ、心に帝位の望を起して、孫策が預おきたる傳國の玉璽を返さず。長史楊大將、都督張勳、その外紀靈、橋甤、雷薄、陳蘭なんど云へる三十餘人の大將を集めて申けるは、孫策われに兵三千人、馬五百疋を借て。後必ず返すべしと約せしが、已に江東の州郡を平げて、十萬の勢を集めても今にその汰沙をせず、我いそぎ孫策を滅して江東を取んと思ふは如何あらんと問に、楊大將申けるは、孫策いま江東に據て長

朗が曰、杳瀆は我第一の處なり、二人早々に打向へ、我も後陣に繼べし。嚴白虎いそぎ五千餘騎を引て、其夜二十里ばかり出ければ、初更の比、思ひも寄ぬ林の內より賊の聲俄に起る。扨は敵の計なりとて、速に退かんとすれば、四方より火を掛て孫策路を遮れり。周昕眞先に進んで路を開きけるが、一槍に刺殺されければ、その勢ことごとく降人となる。王朗も後陣に備て已に城を出けるが、先手の破れたるを聞て叶じとや思ひけん、跡へは回らずして海隅へ落失たり。嚴白虎は這々逃て餘杭へ走りけるを、董襲字は元代と云もの、迎て酒を飲しめ、密に首を斬て孫策に獻つる。此に於て南方ことごとく平均しければ、孫靜を留て總守らしめ、朱治を吳郡の太守とす。時に早馬來て申けるは、孫權周泰二人宣城を守る所に、俄に山賊共四方より推よせたり。時に夜も深てふせぐ兵なかりしかば、周泰只一人孫權を助て出んとするに、賊軍競ひ蒐りて危かりけるを、周泰身に甲をも披ず、大勢を打破て了に圍を出ければ、槍にて突れたる瘡十二箇所あり、苦痛甚うして已に危しと告ければ、孫策大に驚く。董襲すゝみ出て申けるは、某むかし海賊と戰て身に矢瘡を被り候ひしを、會稽の虞翻と云もの名譽の醫者を薦て、十日が內に平愈せり。孫策が曰、虞翻とは虞仲翔がことか。董襲が曰、なにとて知玉へる。孫策が曰、向に張昭この人を薦來る、今功曹の令たらしむとて、急ぎ虞翻に命じて醫者を招しむ

瑜、程普二軍を引て敵の後より蒐たりしかば、王朗大に亂て城中へ逃こもる。孫策四方より息をも繼せず攻たりしかば、王朗これを防ぎ兼て、打て出て快く戰んと云に、嚴白虎申けるは、孫策大勢なりと云へども、遠路を來りたれば急に戰を決せんことを望む、御方もし堅く城を守らば、彼兵粮につまりて一月の内に自ら走らん、其虚に乘て之を討べしとて、四門を閉て築地を構へ、久しく守るの計をなす。孫策これを憂て如何せんと議するに、叔父孫靜申けるは、王朗固守て此城急に落がたし、會稽の金銀兵粮は大半査瀆と云ところにあり、此より纔に數十里を隔たれば、先この處を棄て査瀆を攻んに、其不意に出て必ず破らん。孫策尤と同じ、即時に下知を傳て、陣中に多の篝火を燒せ、處々に旗ばかりを立て疑兵をなし、夜中に圍を解て査瀆へぞ向はせける。周瑜が曰、もし大軍一度に退かば、敵の追こと有ん、奇兵を用て破り玉へ。孫策が曰、われ已に計あり、この城を取ること必ず今夜ならんとて、了に盡く打立たり。王朗が斥候の勢これを見て、寄手すでに退きたりと報じければ、諸人怪て矢倉より見るに、城外に篝火燒て、立連たる旗整々たり。王朗が曰、孫策なにゆゑに今急に退くべき。周昕が曰、これは我等が急に追はんことを畏れて、疑はしめん爲の計なり、孫策兵粮盡て退きたるならん。嚴白虎申けるは、御邊の心われに同じ、孫策必ず査瀆を取ん、速に追蒐べし。王

ふまじとて、城を棄て落ゆきけるに、孫策急に追蒐て、黄蓋その大將王晟を生取、太史慈烏城を乘取て勢ひ破竹の如く、國中ことごとく平定す。嚴白虎は路すがら民を劫して粮食を掠め取、餘杭を指て落下りしが、その地に凌操と云ものあり、土民を集て攻たりしかば、嚴白虎辛き命を助り、會稽を指て逃わしる。凌操は其子凌統と手勢を引て孫策に見え、先手と成て嚴白虎を追かけ、西津の渡にて大に戰て、討取たる首を孫策に送る。嚴白虎力つかれて暫く休居たるに、程普急に攻ければ、又したゝか討れて夜中に會稽へ入にける。此時會稽の太守王朗と云もの、嚴白虎を救んとて打出ければ、虞翻字は仲翔と云もの諫て申けるは、孫策は仁義の兵を起し、嚴白虎は暴虐の衆を集む、この時早く嚴白虎を生取て孫策に獻り玉へ、是天に順の道なりと勸れども、王朗更に聽ざりしかば、長嘆して山林に隱れけり。王朗いそぎ嚴白虎を迎て、已に山陰の野に陣を取ければ、孫策馬を出して申けるは、我いま義兵を起して浙江を平げんとす、汝等なんぞ降らざる。王朗怒て申けるは、汝慾心やまず、已に吳郡を取て又こゝに來る、我必ず嚴白虎が仇を雪ん。孫策聞もあへず、自ら打て出んとするに、後より大將一騎つと出たり、是乃太史慈なり。王朗刀を舞して馬を交へ、勝負いまだ分れざる所に、會稽の大將周昕と云もの、馬を飛して打てかゝる。此を見て黄蓋又馬を出し、火を散して戰ひけるに、周

當馬を飛して打て蒐る時に、陳武と蔣欽と小舟に乘て敵の後へ廻り、岸に上て矢を放こと雨の如なりしかば、嚴輿すでに後陣より亂て、楓橋を棄て逃わしる。韓當兵を驅て急に追掛、昌門の下にて敵を討こと數を知ず。孫策大軍を引て水陸共に進み、吳城を圍で三日が間は息をも繼ず攻させ、自ら壕の邊に馬を立て兵を下知する所に、城中より大將と覺しき者一人高櫓に上り、左の手にて上なる梁を持、右の手にて孫策を指ざし、大音あげて樣々に罵りければ、太史慈これを見て心怒り、憎き奴が體かなとて、馬の上にて弓推張、よく挽て兵と射る。其矢誤ず彼敵の左の手を梁ながらに射付たりければ、諸軍感ずる聲しばしは休ず。この者しかるべき者にてや有けん、城中より大勢走上て、矢を拔て漸に扶け入しむ。嚴白虎これを聞ておそれ驚き、寄手に此の如き射手あり、我久しく戰うては惡かりなん、不如和睦せんとて、次の日嚴輿を使として孫策が陣に行しむ。孫策對面して酒を進め、半酣に至りける時、俄に劍を拔て嚴輿が坐したる席を砍ければ、嚴輿驚て倒れたり。孫策笑て申けるは、是戯なり、驚こと勿れ、御邊が兄の意は如何ん。嚴輿が曰、將軍と和睦をなし、江東の地を分ち取んと欲す。孫策大に怒、汝鼠の輩、なにとて我と同く國を分たんと云ければ、嚴輿事の調ざるを見て、急に起て出たりしを、孫策走り蒐りて斬殺し、其從者に首を持せて回しければ、嚴白虎色を失ひ、右ては叶

諸大將みな申けるは、今太史慈を放ち玉はば、彼なんぞ再び來らん。孫策が曰、太史慈は青州の名士、信義を以て重しとす、必ず詐は有まじとて、次の日竿を立てて日影を見せしむるに、案の如く太史慈千餘騎を引て日中に回り來たる。孫策これより精兵數萬を領して威風遠近を靡す。江東の人民これを恐れて孫郎と呼、いづくにても孫郎が來るとだに申せば、膽を冷し魂を失て、官吏城を棄て山野に藏る。孫策よく法度を正して、秋毫も犯こと無りければ、人民その德に服して、聞つたへ〳〵我も〳〵と來り從ふ。貧なる者には米を與へ、或は家を作りて回らしめければ、各家業を勤て、懽び歌ふ聲野に遍し。此に於て老母一族を曲阿より迎へ、弟の孫權に大將周泰を付て宣城を守らしめ、自ら兵を引て南方へ打向ふ。この比吳郡に嚴白虎と云ものあり。自ら東吳の德王と號し、大將王晟なんど云ものと烏城興嘉を守りけるが、孫策が攻來ると聞て、弟の嚴輿に兵を付て楓橋に陣を取しむ。孫策すでに推よせ、自ら討て出んとしけるを、張紘諫て申けるは、夫大將たる人は、籌謨の自て出る所にして、三軍の命を繫る所なり、安んぞ小敵に遇て自ら輕々しく出玉ふぞ、只よく中軍に在て天授の姿を重んじ、四海の望を副て、國中の人をして上下こと〴〵く怖慄れしめ玉へ。孫策謝して曰、先生の教まことに金玉の論なり、我只將士の命を用ざるを恐るゝ故なりとて、韓當に向て、あれ打破れと下知すれば、韓

見えけるを、太史慈右ては叶ふまじとて、一度に門を開て討て出けるが、孫策が兵を下知して雨の降ごとく射かくる矢に進むべき様なくして、又城中へ引回す。其夜陳武眞先に進んで壁を登り、火を掛て戰ひければ、太史慈かなはじとや思けん、東の門より落行けり。孫策急に追蒐て三十里來りければ、太史慈は五十里走りて人馬共に疲れ、繁たる蘆原の中を通る時、俄に四方より喊を造りて熊手に掛て生捕けり。孫策自らその繩を解て錦の袍を披せ、禮を厚して座上に請じければ、太史慈が曰、敗軍の將早く首を刎られんことを願ふ。孫策申けるは、我よく御邊の忠義を知、劉繇は蠢ける蟲の如し、御邊を用ひずして此の如に滅たり。太史慈その志を感じて降らんと請ければ、孫策甚だ喜び、其手を執て申けるは、先日神亭の戰ひ、御邊われに勝んと思ひ玉ふか。太史慈答て曰、いまだ勝負を知がたし。孫策大に笑ひ、今日の事萬づ御邊と議せん、ねがはくは良計を敎られよと云ければ、太史慈が曰、敗將なんぞ論ずるに足ん。孫策酒宴を設て持成、むかし韓信は廣武君に計を求む、我いま御邊に計を問、必ず辭することと勿れと云ければ、太史慈申けるは、劉繇行方なく落失て、其手の勢ことぐゝく散亂す、若某自ら行て招來らば、みな將軍に降るべし、然れどもこの事恐くは將軍の心に合まじ。孫策喜て曰、これ本より望ところ也、御邊速に行て、明日午の刻に回り玉へ。太史慈すでに出ければ、

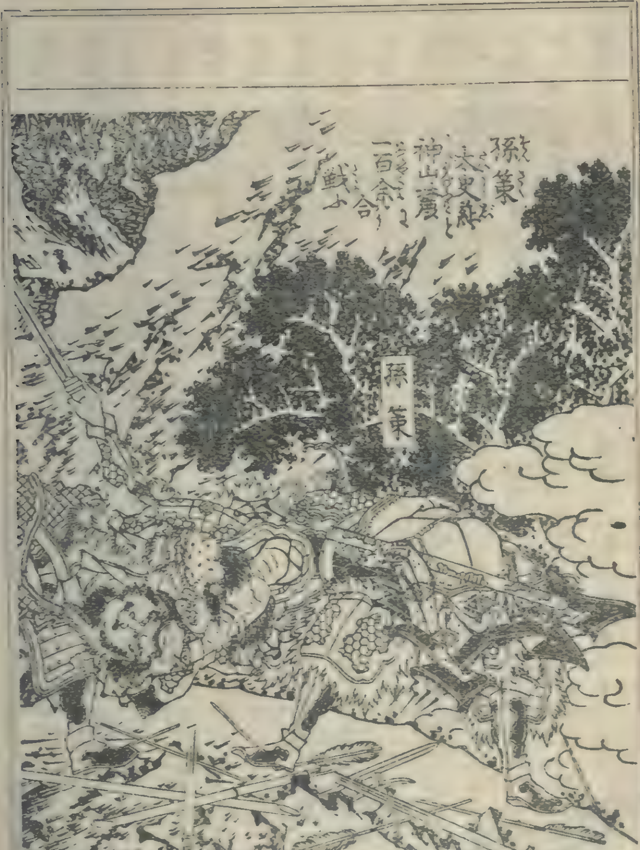
笮融と討殘されたる者を引具し、荊州へ行て劉表に從ふ。孫策勝に乘て又秣陵城へ攻かゝり、壕の邊に馬を立て、薛禮もし早く降らずんば、只今蹈やぶらんと呼はりければ、矢倉の上より大將張英よく挽て兵と射る。その矢孫策が左の腿に中りて馬よりどふと落けるを、諸人扶て本陣に回り、鏃を拔藥を傳ければ、孫策薄手なれば之を事ともせず、諸將と計を定め、詐て軍中に喪を擧させ、矢創急所にて孫策すでに死したりと沙汰して、大に哭き哀みければ、薛禮これを聞て實なりとし、さらば夜討にして一人も餘なとて、城中の勢を盡く起し、張英、陳横を眞先に進めて打て出ければ、忽然として後に喊を吶と擧て、孫策こゝに在と呼はる。諸軍魂を失て前へも進まず、後へも退かず、皆馬より下て地の上に拜伏し、降參せんと望みければ、孫策これを一人も殺さず。薛禮すべき樣なく、亂軍の中にて斬死に失たりしかば、張英は陳武に逢て突殺され、陳横は蔣欽に射殺さる。孫策秣陵城を取て人民を安じ、直ちに涇縣に推寄る。太史慈はこの處に楯籠て、又二千餘騎を集め、密く守て防ぎければ、孫策ひそかに周瑜に問て、太史慈を生取計やあると云に、周瑜申けるは、この城を三方より攻めて東一方を開かれ候へ、此より東の方五十里に兵を伏て、彼が走りて疲れたるを擒にせん。孫策しかるべしとて、三方より息をも繼ず攻ければ、城中の勢は大半山越の者共なるゆゑ、寄手の盛なるを怖て落支度に

しかるべしとて、兵を五手に分、喊を造て攻たりければ、劉繇が陣中大に亂れて四紛五落、散散に逃わしる。太史慈ふみ止て戰ふと云へども、力及ざりければ、十騎あまりを引て涇縣へ落ゆき、劉繇は許子將と云ものに扶られて、這々秣陵へ逃わしる。孫策大に利を得て、又陳武を用ひて甚だ喜ぶ。この人は身の長七尺、面黄にして眼の内朱の如く、形容きはめて古怪なりければ、先手の大將にぞ定めける。劉繇に與力せし彭城の相薛禮、兵を催よし聞えければ、早く蹴散せとて推よするに、陳武十騎あまりを引て大勢の中へ打入、立どころに五十餘人を殺しければ、薛禮城中に逃こもりけるを、四方より攻る所に、早馬來て、劉繇いま笮融と兵を引て牛渚を攻ると告ければ、孫策聞もあへず、自ら打向て戰けるに、敵の陣より大將干糜と云もの、槍を提て蒐りしかば、孫策馬を交て二三合戰ひ、馬の上にて生取回る。此を見て樊能と云もの、馬を打て追來るを、孫策屹と顧みて、汝なに者ぞ我に近づくと呼はる聲雷の如くなりしかば、樊能驚て倒に落けるを、孫策槍を下て突殺し、脇に夾たる干糜を一しめしめて地に投たれば、微塵に碎て失てけり。是より江東の人、孫策が勇力を畏れて小霸王とぞ號しける。劉繇目の前に頼切たる一人の大將を討れ、我さきにと走りけるを、孫策これを追討に攻ければ、死する者一萬餘人、降る者數を知ず。此より劉繇力を落して、防べき様なかりしかば、

○孫策大戰嚴白虎

その次の日、孫策兵を引て劉繇が陣に推よせ、昨日奪ひ取たる太史慈が戟を眞先に出して、太史慈蓬くもこの戟を落して、這々に命を扶りたりと呼はらせければ、劉繇も兵を出し、昨日のちぎれ盔を長き竿に指擧て、孫策が首すでに此に在と呼はらせて、同音にぞ笑ひける。暫ありて太史慈馬を蒐出し、いかに孫策は落失たりしか、出て戰を決せよと罵りけるを、孫策聞もあへず、槍を取て出んとしければ、程普が曰、將軍なにゆゑに自ら輕々しく出玉ふぞ、某ねがはくは戰はんとて、馬を打て出ければ、太史慈あざ笑ひて曰、汝は何ものぞ、わが對手にあらず、早く逃去て孫策を出し來れ。程普大に怒り、驀し暗に蒐りて三十餘合戰ふ所に、劉繇金を鳴して急に軍を收めければ、太史慈引退て問て曰、われ今敵を擒にせんとするに、何とて金を鳴し玉へる。劉繇が曰、敵の大將周瑜、ひそかに廻て曲阿を取、又廬江松滋の人に、陳武字は子烈と云もの、周瑜に力を併せて我本城を攻取たり、この處に逗留せば、前後に大敵を受て叶まじ、早く秣陵へ回て、薛禮、笮融と一手に成んとて盡く引退く。孫策わざと追ざりければ、張昭申けるは、敵今周瑜に曲阿を取れて戰はんとする力なし、今夜急に推よせて夜討にし玉へ。孫策

太史慈


孫策
太史慈と
神山廟に
一百余合
戦ふ
孫策

怒り、汝が如くに逃る者は大丈夫にあらずと云て、又三十餘合ぞ戰うたる。太史慈心の内に思ひけるは、此處にて久しく戰はゞ、敵には十三騎の兵あり、我は只一人なり、生取にせらるゝこと有んとて、又いつはり負て馬を返し、我を趕こと勿れと云て、麓の原まで追掛、又こゝにて五十餘合戰ひ、孫策が突槍を太史慈身を避て其柄を握り、我持たる槍にて突んとするを、孫策亦その柄を握る。互に二つの槍を拽合ほどに、後には馬より共に落にけり。馬は何地ともなく走り去、二時ばかり拽合けるが、遂に槍を棄て引組、上になり下になる。この時太史慈は三十歳、孫策は二十一歳なれば、勇を奮ひ氣を激して、鎧袍は徹塵に掣裂、いまだ勝負も見えざりけるが、孫策は轉ざまに、太史慈が背に指たる短き戟を取て突んとするに、太史慈は孫策が披たる盔を引ちぎりて、散々に打あうたり。時に鼓の聲地を動して、劉繇千餘騎にて馳來りければ、十三騎の者共馬を雙べて喚て蒐り、縱横に相あたる。孫策太史慈は猶も離ず戰ひけるが、太史慈は孫策が槍と馬とを取て又喚て蒐る。孫策は程普が牽せたる馬に乘て、千餘騎が中へ突て入。されども大敵凌に難ければ、孫策が十三騎戰ひ屈して見えたる所に、忽ち神亭の山際に喊の聲を擧て、周瑜兵を引て馳きたり、孫策を扶けて互に引じと戰ひければ、何果べしとも見えざりしに、日すでに西山に沈んとする時、暴に大雨ふりければ、相引にぞ退きける。

此必ず孫策が敵を帶き出の計ならん、輕々しく動こと勿れ。時に太史慈躍出て申けるは、此時を失ふべからず、今孫策を生捕ずんば、何の時を待べきぞ、志ある人は我に從へとて、槍を取て馬に乘、只一騎に鞭を加て出ければ、座中に年わかき一人の大將あり、太史慈は眞の猛將なり、我も共に力を副んと云て、跡に繼て馬を出せば、滿座みな大に笑ふ。孫策は敵の陣をよく見了て、程普を顧て、倡や囘んと云ところに、麓より大音あげて、それなるは孫策にては無か、逃ること勿れと呼はりて、驀地暗に登る者あり。孫策後を屹と見て馬を止め、槍を横たへて立ければ、交ちかく成て問て曰、その內に孫策は無きか。孫策が曰、汝は何ものぞ。答て曰、われは東萊の太史慈なり、孫策を手捕にせん爲に來りたり。孫策笑ひて曰、われは是孫策なり、汝後に立たる者と二騎ひとしく蒐れ、勝負せん。太史慈が曰、汝に從ふ十三騎、馬を雙べてことごとく出よ、我これを擒にせんとて、槍を撚て突て蒐る。孫策も只一騎馬を出し、火を散して五十餘合戰へども、雌雄さらに分れず。十三人の大將は見物して居たりしが、心驚て醉るが如し。太史慈も、孫策が武藝聞しよりも勝れりと思ひ、態と馬を打つて深山へ走り入けるを、孫策蓬し囘せと呼はりて、跡に付て追かくる。太史慈心喜び、嶺を週て山の後に出、馬を立て申けるは、孫策やさしくも追きたる、汝まことに大丈夫ならば、快く我と勝負せよ。孫策大に

りたり。孫策甚だ喜び、用て軍前の校尉とし、牛渚、邸閣に敵の貯へ置たる兵粮武具を奪取て、その勢四千餘騎になりければ、神亭と云ところへ打向ふ。劉繇は張英が牛渚を破られたりと聞て大に怒り、斬て棄んと云けるを、諸人哀で命を乞受、零陵城を固く守り、本陣を神亭の山より南に屯劄す。孫策は山の北に陣を取て、其地の百姓を召て、この山に後漢の光武帝の廟あるかと問に、皆答て申けるは、廟は今に残りて候へども、祭る人なければ盡く破れ損じたり。孫策が曰、不思議や、昨夜光武帝の我を迎玉ふと夢を見たり、早く行て祭るべし。張昭諫て申けるは、今山の南に劉繇本陣を屯せり、若伏勢あらば如何し玉はん。孫策が曰、神明われを擁護し玉ふ、何の怖るゝ事あらんとて、槍を提て馬にのり、程普、黄蓋、韓當、蔣欽、周泰等十三人の大將を作て、遙に神亭の嶺へ登り、破れたる廟の在けるを、香を焚て再拜し、心中に祈念しけるは、我もし江東に基業を創て、父の志を繼ことを得ば、必ずこの廟を再興して、四時怠ず祭を成ん、尊神ねがはくは力を副て、敵軍を不日に討靡させ玉へとて、諸將を顧て申けるは、山の南に敵の本陣ありと聞しに、倡やこれより嶺を越て、ひそかに其樣を窺見んとて、諸人諫れども更に聽ず、馬を打てぞ登りける。劉繇が斥候の勢共これを見付て、急ぎ本に報じて、只今孫策わづか二十騎ばかりを引て御方の陣を窺ひ候と告ければ、劉繇申けるは、

集め、孫策が武勇は人ことごく之を怕る、如何して防べきと云に、張英すゝみ出て申けるは、某ねがはくは一軍を引て牛渚の要害を守り、敵きたらば打やぶるべし。時に一人傍より出て申けるは、某ねがはくは此度の先陣たらん。諸人なに者ぞと見れば、東萊黄縣の太史慈字は子義なり。往日孔融が爲に北海城の圍を解いて後、この所に來り事しなり。劉繇が曰、汝いまだ先手の大將には用ひ難し、唯わが左右を離こと勿れと止めければ、太史慈默然として退出す。張英は大勢を引て牛渚を固め、兵粮十萬斛を邸閣と云ところに貯へて、緊く守りて相待ところに、孫策すでに前なる灘まで推よせければ、暫くも足をためさせじとて、自ら馬を眞先に蒐出す。孫策が陣より黄蓋刀を舞して打て出、火を散して切合ところに、俄に張英が陣後より亂て散々に走りければ、孫策勢ひに乘て追かけ、火を掛て攻たりしかば、張英したゝか討れ、牛渚を棄て深山に逃かくる。孫策大に打勝ちて、敵の後に火を掛たるは如何なる者ぞと問に、二人の大將三百餘騎を率して來り見ゆ。孫策これを見るに、一人は面まつ黒にして髯黄なり。九江壽春の人に、蔣欽字は公奕と申す。一人は形は彪の如く、日朗にして眉濃なり。九江下蔡の人に、周泰字は幼平と申す。二人ひとしく再拜して申けるは、我等は亂を避て洋子江の内に人を集め、强盜追剝を成て世を渡る者共なるが、いま將軍の賢を招き玉ふと聞て、事ん爲に來

へて我家に請じければ、孫策その家に入、兄弟の情を以て周瑜が母を堂下に拜す。その叔父に周尙と云ものあり、丹陽の太守たり。周瑜が家に來て共に計を議しければ、周瑜が曰、某も將軍に從て共に江東を攻取、犬馬の勞を辭せずして大業を建ん。孫策大に喜び、呂範、朱治を召て對面せさせ、共に天下事を議するに、周瑜申けるは、將軍大業を興んと思ひ玉はば、宜く賢人を招き玉へ、江東に張氏の賢人二人あり、知玉へるか。孫策が曰、いまだ知ず。周瑜が曰、一人は博群書を覽て、能隷字を書、その上天文地理に明なり、是彭城の人に、張昭字は子布と云もの也、又一人は九經に貫通して、諸子百家に明なり、是廣陵の人にて、張紘字は子綱と申もの也、共に世に希なる才智にて、亂を避てこの處に遁る、將軍これを用玉へ。孫策限なく喜び、使を遣して招けども、固く辭して來らざりしかば、自ら行て禮を厚し、了に伴ひ來て共に事を議するに、言語應對滔々として懸河を決るが如くなれば、張昭を長史撫軍中郎將とし、張紘を參謀正議校尉として、兵を調て楊州の刺史劉繇を攻んと議す。爰に劉繇字は正禮と申は、漢室の一族にして、太尉劉寵が姪、兗州の刺史劉岱が弟なり。舊は楊州の刺史たりしが、袁術に追出されて曲阿に逃れ來りしを、彭城の相薛禮、下邳の相笮融と云もの二人、兵を集めて救ひ扶く。この時孫策が攻來ると聞て、手下の大將に樊能、干糜、陳横、張英など云ものを

帝王傳國の玉璽を質として、兵を借らんと思ふは如何に。呂範が曰、袁術つねに帝位に卽んと思ふ心あり、此故に玉璽を得ば必ず喜て從はん。孫策次の日袁術に見て哀哭きければ、袁術その故を問に、孫策申けるは、父の讐いまだ報ぜざるを常に心に掛候に、今又舅の吳景、楊州の刺史劉繇に攻られて、事すでに急なり、老母を初として一族みな曲阿に置候へば、必ず敵に害せられんことを思うて哭き候、願くは幾千の兵を暫くの間借玉へ、江を渡て吳景を救ふべし、その爲には父が遺し置たる傳國の玉璽を質に留めんと云ければ、袁術玉璽を見て心に喜び、われ玉璽を望には有ねども、暫くは預り置、いま兵三千人、馬五百疋を借べし、事果て後は必ず返し候へ、汝官爵なくては大軍を下知すること能はじ、我いま折衝校尉殄寇將軍に封ず、日を擇で打立と云ければ、孫策拜謝して退き、呂範、朱治を作て、父が時より從ふ程普、黃蓋、韓當を引具して、已に歷陽まで出ければ、向より一人の大將きたり、近く成て馬より下。孫策これを見れば、其人面は美玉の如く、脣は抹朱の如し。姿質風流儀表秀麗、胸には經天地緯の才を藏めて、腹には安邦定國の計を隱す、廬江舒城の人に、周瑜字は公瑾と云もの也。初め孫堅が董卓を追伐せし時、この周瑜は孫策と同年なりしゆゑ、義を結んで兄弟の約を成しめ、周瑜は二月遲く生れたればとて、弟とぞ定めける。今日孫策がこの所を通ると聞て、路まで出迎

に行袁術をぞ頼ける。袁術甚だその才能を愛して、われ子を持て孫策が如ならば、死すとも復なにをか思はんと云り。後に懐義校尉に封じて、涇縣の太師祖郎と云ものを伐しむるに、戦ひ勝て回り、又廬江の陸康を伐しむるに、比類なき手柄を披しければ、袁術甚だ喜び、酒宴を設て持成けり。其夜月の光明にして白日の如くなりければ、孫策天を仰で大に嘆息し、さるにても我父は世に雙なき英雄にて、江東を攻取玉へり、我その子と生れて箇ほどにも劣りけるかと思ひ、只一人嘯き哭て坐したる所に、忽ち一人外より來り、笑て申けるは、孫策なにを哭玉ふぞ、御邊の父世に在し時は、萬づ我と事を謀玉へり、何事も我に問玉ふべきに、只今の獨哭は無益なりと云。孫策驚て之を見れば、丹陽故鄣の人に、朱治字は君理とて、昔し父に仕て從事たりし者なり。乃ち近く寄て、我哭ことは、父の志を繼こと能はずして、空く日を送る故なりと云ければ、朱治が曰、袁術に軍勢を借て江東に回り、舅の呉景を救と號して父の志を繼玉へ、大丈夫たる者、なんぞ人の下に膝を屈めんとて、計を議するに、後より忽然として、この義まことに然るべし、我手下の精兵百餘人あり、之を以て力を副んと云ものあり。二人驚て何者ぞと問ば、袁術が謀士に、汝南細陽の呂範字は子衡と云もの也。孫策大に喜て、共に計を議するに、呂範申けるは、我推量するに、袁術軍勢を借申まじ。孫策が曰、われ父が遺し置たる

こと有んとて、徐州の境に近付玉へば、呂布その疑を散ぜん爲に、まづ夫人一族を送り回す。此夫人は甘氏麋氏なり。この間呂布が情ありて、士卒を付て門を守らせ、時々贈物なんどしたる由を告られければ、玄德の曰、呂布は義を知ざる人にあらず、汝等疑ふこと勿れとて、遂に城中へ入玉ふに、張飛は呂布を怨で入ざりけり。呂布對面して申けるは、我この國を奪にあらず、張飛酒を過して叨に人を殺せる故、しばらく來て守る者なり。玄德の曰、われ元よりこの國を將軍に讓らんと欲す、是わが望ところ也。呂布いつはりて再三辭退し、酒宴を設て持成、まづ小沛の城に入玉へと云ければ、玄德別て出玉ふ。關羽張飛喜ざる體なりければ、玄德の曰、身を屈して分を守り、天の時を待には如ず、汝等必ず怒ること勿れとて、小沛の城を守り玉ふ。

○孫策大戰太史慈

爰に吳の孫策は、父の孫堅が討死せし後も、江東の地を保ちて賢を集め士を招けるが、母方の舅に丹陽の太守吳景と云もの、舊の徐州の太守陶謙と深き仇ありて、陶謙大軍にて攻下ると沙汰ありければ、孫策これを防べき力なく、老母一族を曲阿と云ところに藏し措て、我身は淮南

に攻ん、然らば兵糧五萬石、駿馬五百疋、金銀一萬兩、段子千匹を獻んと云つかはしければ、呂布喜で從ひ、高順を大將として五萬の勢を起し、玄德の後をぞ攻させける。玄德この由を聞、前後に大敵を受ては叶まじとて、大雨の夜ひそかに盱眙の陣を引拂て廣陵へ落玉ふ。高順は五萬餘騎にて已に遙々と來りけるが、玄德ゆき方なく落たりと聞て、直ちに紀靈が陣へ行、すでに玄德を追落せり、約束の物を請取んと云に、紀靈申けるは、我この由を袁術に告て此方より送るべし、御邊は先回り玉へ。これに依て高順徐州へ回り、呂布に見て右の由を語る。暫ありて袁術が方より書簡きたりければ、呂布ひらき見るに、玄德いま廣陵へ落たり、若これを生取なば、那時約束の物を獻らんと書たりしかば、大に怒り、袁術約を背て我を欺、兵を起して打やぶらんと云に、陳宮諫て申けるは、袁術壽春城を守て勢ひ甚だ盛なり、輕々しくは攻がたし、不レ如玄德を招て小沛の城を守らせ、其のち時を伺て兵を起し、玄德を先手として袁術を平げ、次に袁紹を滅して天下の内に縱橫し玉へ。呂布しかるべしと喜び、急ぎ使を馳て玄德を招しむ。この時玄德は廣陵へ落て袁術に夜討せられ、殘り少に成て進退きはまりたる所に、呂布が使きたりて招ければ、大に喜で打立玉ふを、關羽諫て申けるは、呂布は詐多して義を知ず、かる〴〵しく行玉ふな。玄德の曰、人すでに情ありて我を招く、何の疑

して戰ひければ、曹豹なじかは怺べき、只三合にして走りけるが、河中にて追付られ、了に水中にて斬れたり。呂布は城中の軍民を安じて、我久しく玄德の恩を受、いま此の如しと云へども、爭か情なき振舞をすべきとて、士卒百人を擇で玄德の妻子を守らせ、妄に人を入しめず。張飛は纔に數十騎を引て盱眙の陣に到り、玄德に見て右の趣を語りければ、諸人皆色を失ふ。玄德嘆じて曰、浮世の習ひなれば得も喜ぶべからず、失ふも哀べからず。關羽問て曰、兄の夫人は如何。張飛答曰、事あまりに急なりしゆゑ、助けて出すべき隙なく、城中に捨措たり。玄德これを聞て默然として居玉ひければ、關羽又申けるは、汝さきに徐州を能守んと固く肯ひ、今城を奪はれ、夫人を捨て猶討死することも能はず、何の面目ありて此までは來りたるぞ。張飛恥しめられて大に怖れ、自ら劍を拔て首を刎んとしけるを、玄德急に劍を奪ひ取て宣ひけるは、古人云る事あり、兄弟は如手足、妻子は如衣服、衣服破時尙有更換、使手足若廢いづくんぞ能再續と、我等三人桃園に義を結て、同日に生ることを求ず、同日に死んと誓ひしに、安んぞ兄弟半途にして亡んや、呂布わが妻子を捕たりとも、必ず殺ほどのことは有まじ、何とぞ計を運さんと云玉へば、聞人みな淚を流す。袁術は呂布が徐州を奪取たる由を聞て、いそぎ使を馳て慶を伸、もし徐州の兵を起して玄德が後を攻玉はば、此方よりも夾んで急

に酒を過して、前後も知ず醉臥たり、速に來て城を取玉へ、我内より門を開かんと云つかはしければ、呂布これを見て陳宮と議するに、陳宮申けるは、將軍この小沛の小城を守りて、いつまで斯て居玉ふべき、今もし徐州を取玉はずば、我等はいづくへなりとも遁去ん、早く打立玉へとて、赤兎馬を引出して鞍を備ければ、呂布戟を取て打のり、五百餘騎にて打出れば、陳宮、高順、大軍を引て後陣に續く。其路わづかに四十五里なれば、夜の四更の比すでに徐州の城下に到り、殊更月の光も晝の如くなりしかば、其邊を窺ひ見るに、用心の兵一人も見えず。扨は心安しとて、呂布門の前に馬を立、劉使君、事の急ありて使を馳玉ふ、門を開られ候へと呼はりければ、曹豹兼て矢倉の間に在けるゆゑ、門を開て入にける。呂布が大勢ことぐ〵く打入て、喊の聲を舉たりければ、俄に城中上を下へと返す。張飛は猶いたく醉て醒ざりしが、人々急に引起し、呂布ひそかに曹豹と內通して、大勢すでに攻入たりと告ければ、張飛大に驚き、鎧取て打かけ、丈八の矛を提て馬に打のりける時、早敵の勢本陣に亂れ入。張飛矛を舞して良久しく戰ひけるが、酒いまだ醒ずして叶がたく思ひ、馬を打て走りけり。呂布も張飛の武勇を侮にくしとて、態と追掛ざれば、騎馬の大將十八人、張飛を扶けて圍を出、東の門を打やぶりて走りけるを、曹豹これを見て百騎ばかりを率し、恨を雪んとて追來る。張飛大に怒り、引回

徐州の城には張飛守りの大將として、萬づ陳登と相議しけるが、下吏の者共を懐と思ひ、酒宴を設て盡く集め、わが兄の打立玉ふ時、固われを戒て、一滴も酒を飲こと勿れと云ひ玉へり、然れどもわれ此度は一大事の守りを承りたれば、諸人と心を合せて能城を守らんと欲す、今日ばかりは酒を飲で、明日より固く一滴をも禁制すべしと云て、盃を取て一番に初め、又陶謙が大將たりし曹豹と云ものが前に置ければ、曹豹よく玄德の戒を聞けるゆゑ、某は天の戒に從て本より酒を飲ずと云。張飛大の眼を怒して、これなる男は何とて飲まじきと申ぞ、賓飲こと能はずんば、我のまし樣をこそ能知たれと云。曹豹これに怕れ、已ことを得ずして飲ければ、次第に飲傳て滿座みな大に醉。張飛又盃を執て曹豹が前に立より、頻に酒を強たりければ、曹豹が曰、某まことに飲ことを得ず、幸に免し玉へ。張飛が曰、汝も元來酒を好む、今なにゆゑに飲ずと申ぞとて、再三に及べども飲ざりしかば、勃然として怒て曰、汝なにとて大將の下知に背ぞとて、棍を持て曹豹が背を百杖うち、血流れて泉の如くなりければ、陳登諫て曰、玄德打立玉ふ時固く戒め玉ひしを、早わすれ玉へるか。張飛なほ怒りて、汝は文官なり、何ぞ大將の事に預らんと云て、又五十杖ぞ打たりける。曹豹退いて痛骨髓に入、ふかく張飛を恨ければ、其夜ひそかに呂布が方へ書簡を送て、玄德いま南陽に出て、張飛一人徐州を守る、今夜大

こと能ず、陳登を軍師として萬此人に問て事を行ひ、必ず酒を飲こと勿れとて、三萬餘騎を引て打立玉ふ。此時袁術は南陽に在て勢甚だ大なりけるが、忽曹操が使きたりて、劉玄德天子に奏して南陽を攻取んとす、御用心あるべしと告ければ、袁術甚だ怒て曰、玄德は蓆を織履を售うたる匹夫なるが、妄に徐州を領して諸侯と同列するを、日比奇怪に思ひしに、今却て我を攻んと計る、早く行て蹈やぶれとて、紀靈と云ものに十萬餘騎を付て徐州へ向はしむ。去程に兩方の軍勢忽臨淮郡の盱眙と云ところにて行あひ、玄德小勢なれば、山に依水に沿て陣を屯す。紀靈は本山東の人にて、力人にすぐれ、重さ五十斤に造たる三尖の大刀を使ふ。馬を一陣に蒐出して、玄德匹夫、なにとて我大國を侵と呼はりければ、玄德大音あげて曰、われ天子の詔を受、順を以て逆を討、汝早く頸を延て刀を受よ。紀靈大に怒り、馬を飛して打て蒐れば、關羽八十二斤の青龍刀を舞して出迎へ、戰ひ三十餘合にして、紀靈かなはずして引退く。紀靈が大將に荀正と云もの、馬を打て蒐出ければ、關羽あざ笑て曰、汝は何者ぞ、近付て首を失んより、只紀靈を出せ、勝負せん。荀正が曰、汝は名もなき下將、わが紀靈將軍の對手にあらず。關羽聞もあへず、直に馬を交へ、只一合に荀正を斬て落す。玄德これに氣を得て、三萬餘騎一度に咄と蒐たりしかば、紀靈大に亂れて淮陰を指て引退き、河口に陣を取て矢軍に日を送る。

玉はば、袁術怒て必ず徐州へ攻かゝらん、又玄德が方へは勅使を立て、天子の詔なり、早く兵を起て南陽の袁術を伐と云つかはさば、勅命默止がたくして必ず打立ん、徐州人寡き時は、呂布必ず奪取の心起らん、此乃ち驅レ虎呑レ狼の計なり。曹操大に喜び、先袁術が方へ使を馳て、次に勅使を徐州へ遣す。玄德城を出て之を迎へ、勅命を領して勅使を回し玉へば、糜竺諫て申けるは、是も亦曹操が計ならん、君必ず從ひ玉ふこと勿れ。玄德の曰、これ計なりと云ながら、天子の勅命と申せば背がたし、我兵を起して南陽へ向ふべし。孫乾が曰、君もし打立玉はば、跡の用心第一なり、徐州を守る者を殘し玉へ。玄德の曰、關羽、張飛が內を一人留て守しめん。關羽が曰、某ねがはくは守らん。玄德の曰、汝は我と朝夕事を議す、暫も離がたし。張飛すゝみ出て曰、某こゝに留て能守らん。玄德の曰、汝こゝを守ること能じ、元より酒を好で、醉時は妄に士卒を打擲し、事を成こと輕々しくして、人の諫をも聽ず、我心つねに安からず、他の人を留べし。張飛が曰、某いまより後少しも酒を飮まじ、又士卒を憐で萬づ人の諫に從はん。玄德の曰、爾もし心を改めば、我又なにをか憂とせん。糜竺が曰、張飛いま口には箇樣に云玉へども、我その違んことを怕る。張飛怒て申けるは、われ兄に從ふこと年久し、了に一度も信を違へず、汝いかなれば妄に我を輕んずるぞ。玄德の曰、汝が性ものに堪忍

呂布

玄徳呂布を後堂に請じて曹操が書簡をしめた
玄徳

德急に推止玉へば、呂布驚て曰、なにゆゑに我を殺さんとする。張飛大音あげて曰、曹操汝が道を知らざるを以て、わが兄に命じて討殺さしむ。呂布が曰、われ汝と元より仇なし、何とて斯情なき。玄德叱て張飛を退け、呂布を後堂へ請じて曹操が書簡を見せ玉へば、呂布涙を流して曰、これ曹操が我等二人を怕れて、不和にせん爲の計なり。玄德の曰、將軍心を安じ玉へ、我なんぞ浩る不義の事をせん、小沛の城に近比兵粮を用意せしむ、將軍行て守り玉へ。呂布拜謝して出ければ、玄德門外に送り玉ふ。張飛が曰、今なにとて殺し玉はざる。玄德の曰、これは曹操が計にて、我呂布と一處に在ば、心を合せて事を起んことを畏れ、二人の間を不和にせん爲なり、是乃ち兩雄不並立と云の計なり。關羽これを聞て、眞に兄の言よく當れりと云ければ、張飛申けるは、我は唯呂布を殺して後の患を絶んと存ずる也。玄德の曰、これ大丈夫のする所にあらず、汝多言する事勿とて、自ら驛舘に行て勅使に見え、恩を謝する表を上り、又曹操に返書を送りて、呂布が事は容易には圖がたし、心靜に時を待て討べしと答玉ふ。勅使回りて其趣を告ければ、曹操いそぎ荀彧を召て申けるは、この計成ず、如何せん。荀彧が曰、某又一つの計あり、驅虎呑狼の計と名づく。曹操が曰、いかん。荀彧が曰、ひそかに袁術が方へ使を馳て、玄德いま天子に奏して南陽を攻取んと請、用心し玉へと云つかはし

つの虎これを爭て、一匹は死して一匹は傷を被らん、然る時は容易く二つの虎を殺す、今玄徳徐州を保と申せども、陶謙が讓を受たるばかりにて、天子より封じ玉へるにあらず、勅使を遣して之を眞の太守に封じ、又ひそかに書簡を送て、呂布を殺せと云つかはさば、玄徳喜で從はん、玄徳もし呂布を殺さば、將軍又玄徳を討玉はんに難き事無るべし、玄徳もし呂布を殺すこと能はざる時は、呂布必ず玄徳を殺さん、此乃ち二虎競レ食の計なり。曹操大に喜び、此卽時に勅使を馳て玄徳を征東將軍宜城亭侯領豫州の牧に封じ、別に書簡を添てぞ遣しける。此時玄徳は徐州に在て、曹操天子を佐て賊軍を破り、許昌に都を構たりと聞て、使を馳て慶を述んと議し玉ふ所に、忽ち勅使ありと報じければ、急に出てこれを迎へ、謹んで勅命を承り、酒宴を設て持成玉ふ。勅使又曹操が書簡を出しければ、玄徳ひらき見玉ふに、呂布を殺せとの事なりしかば、勅使を驛舘に留め置て、其夜諸將を集めて此事いかゞせんと議し玉ふに、張飛が曰、呂布は人の恩を思はぬ者なり、曹操が命に任せて早く首を刎玉へ。玄德の曰、呂布賴べき方なく、身を寄て此に來る、此を殺ば不義ならん。張飛なほ無用なる義理を立玉はんより、早く殺して後の禍を絕玉へと勸れば、玄德怒て坐を起たまふ。次の日呂布自ら來て玄德に見え、昨日天子より官位を送り玉ふと聞て、御慶を申と云ければ、張飛劍を拔て走り來る。玄

通俗三國志　巻之六

○呂布月夜奪徐州

曹操が威勢盛に震て、朝廷の政一人の料ひとなりければ、或日大に酒宴を設けて、文武の大將を盡く集め、天下の事を議して申けるは、我いま漢室を輔る故を以て、位すでに三公に登れり、是みな汝等が力なり、只心に憂る者は、袁紹、袁術二人なりと云へども、共に大國を領して勢ひ大なれば、容易には圖難からん、劉玄德いま徐州に在て太守となる、呂布さきに山東を逃てより、玄德に身を寄て小沛の城に楯こもる、彼等二人もし志を合せて兵を起さば、由々しき大事なり、諸將いかなる計かある。許褚すゝみ出て申けるは、某ねがはくは五萬の勢を引て、玄德、呂布が首を取きたらん。荀彧申けるは、いや／＼御邊の武勇まことに人に超たれども、近ごろ天子を許都に遷して人の心定まらざるに、輕々しく兵を起は然るべからず、我一つの計あり、二虎競食の計と號す。曹操が曰、ねがはくは聞ん。荀彧が曰、譬ば岩の下に、食に饑たる二つの虎あり、日夜往來して食を求む、時に山の上より食物を投下時は、二

権柄これより曹操一人に歸して、出入つねに鐵甲の精兵三百餘騎を從へけり。浩りし後は朝廷次第に衰て、故老の大臣もみな曹操が威を怖て、凡そ天下の政、まづ曹操に告て其後に天子に奏す。此ほどに不定の世の中、一人を除けば一人起る、漢家の運の末こそ淺猿けれ。

奮然として嘆じて曰、われ楊奉が無能なるを知れども相從こと年久し、今これを捨るに忍ず。滿寵が曰、古の詞にも、良禽は相レ木而棲、賢臣は擇レ主而事と云り、大丈夫の士、知て爲ざるは大丈夫にあらず。徐晃席を起て謝して曰、ねがはくは御邊の敎に從はん。滿寵が曰、もし楊奉、韓暹が首を取て來り玉はば大なる功ならん。徐晃が曰、一日も主と頼で、今これを殺さんは大なる不義なり、我これを爲ず。滿寵が曰、御邊は眞に有德の士なり、去來させ玉へ伴んとて、數十騎を引て出ければ、楊奉これを聞て追蒐こと甚だ急なり。時に四方より火を掛けて、曹操が伏勢一度に起り、楊奉を中に取籠て散々に攻戰ひ、已に討るべく見えけるを、韓暹一軍を引て救ひ出す。されども殘少に討れて、瘡を被る者多かりしかば、二人共に南陽を指て落ゆき、袁術を恃で居たりける。曹操は徐晃を得て大に喜び、御車を早めて已に許都に到りければ、宮殿宗廟を建て、司院衙門等まで一齊に備り、董承等を先として、舊臣十三人を列侯に封じ、自ら大將軍武平侯の職を受て、荀彧を侍中尙書令とし、荀攸を軍師とし、郭嘉を司馬祭酒とし、劉曄を司空曹掾とし、毛玠、任峻を典農中郎將、催督錢糧使とし、程昱を東平の相とし、范成、董昭を洛陽の令とし、滿寵を許都令とし、夏侯惇、夏侯淵、曹仁、曹洪を將軍とし、呂虔、于禁、樂進、李典、徐晃を校尉とし、許褚、典韋を都尉として內外の事を攝りしかば、

り喊の聲俄に起て、楊奉、韓暹兵を引て路を遮、徐晃を眞先に進めて、曹操匹夫、天子を刧して何へか行と呼はりければ、曹操大に怒り、許褚は無か、あれ討とれと下知するに、許褚馬を飛して出ければ、徐晃大なる斧を舞して五十餘合ぞ戰うたる。曹操遙に徐晃が威風凛々たるを見て、心の內驚き、金を鳴して軍を收め、諸將を集て申けるは、我徐晃を見るに、眞に大將の才なり、力を以て之を殺に忍ず、何とぞ奇妙なる計を用ひて御方の大將となさば、我ねがひ足と云ふに、一人すゝみ出て申けるは、某元より徐晃と一面の交あり、今夜雜兵に扮れて彼が陣に行、利害を說て降參せしめん。諸人これを見れば、山陽の滿寵字は伯寧なり。曹操しかるべしと許しければ、滿寵その夜ひそかに徐晃が陣に扮れ入て窺ひ見るに、徐晃甲をも解ず帳上に坐したりしかば、前に進んで長揖し、故人恙なきやと云に、徐晃屹と見てしばらく思案して申けるは、山陽の滿寵にては無か。答て曰、しかり。徐晃が曰、今なにとて此に來れる。滿寵が曰、曹操兗州より我を招き、用て行軍從事とす、今日戰場にて御邊の武藝を耀し玉へるを見て、甚だ惜く存ずるゆゑ、死を顧ずして此に來れり、何とて世に少なる才を棄て、楊奉、韓暹が輩に事へ玉ふぞ、曹操は一世の英雄、漢の天子を佐て民を救、今日の軍に力を以て戰ひを決するに忍ず、某に命じて御邊を招しむ、なんぞ暗を棄て明に事玉はざる。徐晃

去年の春より、太白星すでに鎭星を牛斗の間に犯して天津を過、熒惑星逆行して太白星と天闕に會す、金と火と相交る時は、必ず新天子世に興る、今漢の運氣を見るに、天數すでに盡たり、晉魏の間に必ず興る者あらんとて、乃ち天子に奏して申けるは、天命去就あり、五行つねに盛ならず、火は土を生じ候へば、漢の火德に換て天下を承る者は必ず魏ならん、能天下を安んずる者は必ず曹姓の人ならん、唯よろしく曹氏の人を用て政を治めさせらるべしとぞ申しける。曹操この事を聞て王立が方へ使を遣して申けるは、我よく御邊の忠義を知、然れども天道の理は深遠にして量がたし、願くは此事博く外に沙汰し玉ふなとて、荀彧を召て語りければ、荀彧申けるは、漢朝劉氏火德を以て天下に王たり、この故に兩都みな興る、今將軍は土の性を受玉へり、許昌は土に屬す、この地に行玉はば必ず興らん、火は土を生ず、土は木を生ず、是董昭、王立が申ところ也、他日必ず王者興らんと云ければ、曹操いよ〳〵心を決して、次の日帝に見て奏聞し、洛陽は久しく廢たる所にて、皇居の構成がたし、殊に諸國運送の便惡して、人みな飢を苦しむ、臣量に、許昌は魯陽に近して、城郭宮殿こと〴〵く備り、民物きはめて富饒なり、鑾輿を遷して御幸なし奉らんと申ければ、百官その威に怕て然べしとぞ同じける。曹操兼て用意したりしかば、鑾駕を備て盡く打起、遙に洛陽を離れける所に、深き林の陰よ

皆鼠の輩なり、少しも御心を費し玉ふな。曹操が曰、李傕、郭汜一戰に破れて落去れり、其まゝにて棄おくべきか。董昭が曰、彼こゝを落て、虎に爪なく鳥に翼なきが如し、久からずして將軍の爲に皆擒とならん、豈道に足んや。曹操その應對よく機に應ずるを見て、心驚て申けるは、我ねがはくは朝廷の大事を問ん、今いかなる急務か有べき。董昭が曰、將軍義兵を起して暴亂を誅し、朝に入て天子を佐玉ふ、其功五霸に超たり、其外の諸將人異に意別にして、いまだ必ず服じ、今この所に留て天子を佐玉ふ時は、事の勢ひ便を得玉はじ、惟天子を許昌に移して都を建玉へ、行非常之事者必有非常之功、ねがはくは將軍算の大なるを行ひ玉へ。曹操無限喜び、董昭が手を執て申けるは、是乃ち我等が本より志ところ也、いかに楊奉、韓暹大梁に在て、朝廷の大臣と内外より計を成ことも有んか、御邊これを如何思ひ玉ふと云に、董昭申けるは、此きはめて易し、書簡を送て彼等が心を安からしめ、其後に奏聞を經て、今洛陽は久しく荒て兵糧の用意なり難し、先許昌に御幸なし奉りて官人百姓の饑を救ん、許昌は魯陽に近して運送の便よしと云玉はゞ、群臣たれか從はざらん。曹操喜んで、我必ず御邊の敎に從はん、今より後も萬づ我に敎玉へ、必ず厚報ずべしと云ければ、董昭拜謝して此より曹操に阿り從ふ。此ごろ侍中太史令王立と云もの、宗正劉艾に語りて申けるは、われ天文を考るに、

時は我等が前々拔群の功ありしも賞せらるゝこと有べからず、不レ如落行敵を追かくると號して大梁に陣を取、機を見て變ずべしとて、手勢を引て出にけり。帝は曹操を宮中へ召んとて、勅使を陣中に遣し玉ひければ、曹操出迎へて對面し、禮了てその人を見るに、眉目清秀にして、飄々たる神仙の氣象ありければ、心の内に思ひけるは、近年打つゞき饑饉して、官民も軍民も青ざめたる體なるに、此人ばかり精神純雅なるは常の人にてはよも有らじ、我心根をも推量して、妨を成ことも有んかと深く憎み、御邊はいかなる人にて、今勅使を承り玉ふぞと問ふに、答て申けるは、我等は何の功も無て、三十年が間徒に君の祿を費す者なり。曹操問て曰、いま如何なる官職かある。答て曰、始め孝廉に擧られて袁紹が從事たりしが、天子洛陽へ還幸なりぬと聞て馳上て朝覲し、正議郎に封ぜらる、濟陰定陶の董昭字は公仁と申もの也。曹操席を下て敬ひ、我つねに御邊の大名を聞り、幸に逢事を得たりと云ひて酒宴を設て持成、荀彧等を召て共に天下の事を議する所に、外より一人走り來り、只今誰とも知ず、一手の勢東を指て馬を早め候と報ず。曹操それ追つめて生捕きたれと下知しけるを、董昭申けるは、此は始め李傕に事たりし楊奉と云ものと、白波帥の山賊に韓暹と云もの二人なり、將軍の勢ひ大なるを怕れて、大梁へ出るにて候。曹操が曰、いま外に出るは我を疑うてならん。董昭が曰、これ等は

らん、速に戰はんと議するに、賈詡諫て申けるは、曹操數十萬の勢ありて、文官武將數を知ず、不レ如盜を卸戈を倒にして降人に出玉へ、戰はば必ず敗れん。李傕大に怒り、汝いかなればて不吉の言を出せるぞとて、引出して斬んとしけるを、諸人哀んで一命を乞扶けしかば、夜に入て行方しらず逃失けり。次の日李傕、郭汜兵を揃て出ければ、曹操まづ曹仁、許褚、典韋に精兵三百餘騎を付て戰はしむ。李傕が甥に李暹と李別と云ものゝ二人、眞先に馬を出しければ、曹操これを見て、彼は何ものぞと問て、いまだ答る人なかりし所に、許褚たゞ一人馬を飛して打て蒐り、一刀に李暹を斬て落す。李別大に怕れて走らんとするを、許褚追掛て眞倒に引落し、首ふつと扭切てしづ〳〵と回りけるに、追人さらに無りけり。曹操喜に堪ず、許褚が背を撫て當世の樊噲なりと感稱して、又夏侯惇を左に備、曹仁を右に備へ、自ら鼓を打て眞先に進みければ、諸卒氣を勵て散々に攻戰ふ。その勢ひ傑然として電光の如くなりければ、李傕、郭汜大に怕れ、忙々として家を失ふ犬の如く、急々として網を洩たる魚に似たり。回せ〳〵と呼はれども、なじかは住るべき、西を指て我さきにと落行けり。曹操は賊軍を退治して、討取たる首を路次に斬梟させ、洛陽の城外に屯劄して、勢ひ甚だ大なりければ、此を見て楊奉、韓暹二人ひそかに議して申しけるは、今より曹操大なる功を成ば、必ず權柄を專にせん、然る

夏侯惇馬を蒐出して遙に望み、此は御方歩立の勢にて候と云ければ、帝御心を安じ玉ふ。時に近臣奏して曰、只今の勢は、曹操が弟の曹洪と申者を大將として、李典、樂進を副將とし、先陣もし打負る事もや有んとて、援の勢を差向て候。帝いそぎ曹洪を御前に召れ、曹將軍は朕が社稷の臣なりと宣ひければ、曹洪頓首して退く所に、李傕、郭汜が大軍すでに推よせたりと騒ぎければ、夏侯惇それ已に用意ありとて、歩立の勢を後陣とし、騎馬の勢を先陣として、驀地暗に打て蒐りければ、李傕、郭汜が大軍、みな長途に疲てなじかは怺べき、十方に散亂して一支も支ず。夏侯惇勝に乘て首を取事一萬餘級、帝を守護して洛陽の故宮に入奉り、兵みな城外に陣をとる。次の日曹操大軍を引て洛陽に來り、精兵三千餘騎を率して皇居に到りければ、近臣引て帝に見しむ。曹操階下に拜伏しければ、帝平身を賜て殿上に召る。曹操謹で奏しけるは、臣陛下の洪福に依て兵を山東に聚む、近比勅命を承りて、生涯の面目報ずるに門なし、今李傕、郭汜罪惡大に漫る、臣四十萬の精兵あり、順を以て逆を討、なんぞ克ずと云の理あらん、陛下よく龍體を保ちて社稷を重しとし玉へ、時を廻さず太平を致さんと申ければ、帝も群臣も頼しき思ひをなし、卽時に司隷校尉錄尙書事に封じて節鉞を假玉ふ。曹操恩を謝して退き、次の日五十里出て陣を取る。李傕、郭汜この由を聞、曹操遠路を來りぬれば、人馬必ず疲たる

行て未レ歸、不レ如二この處を去て曹操が方へ落行べし。楊奉、韓暹答て曰、曹操とても如何なる野心あらんも料がたく候へば、臣ねがはくは打て出て敵を防ん。董承申けるは、今城郭の構もなく、兵とても多からず、戰うて若勝ざる時は、何れの處にか身を置ん。浩る所に人走り來て、賊軍既に近付たり、何ぞ長々しき僉議し玉ふと呼はりければ、董承まづ帝と皇后とを車にのせ奉り、取ものも取あへず山東を指て走りければ、侍衛の百官みな歩跣にて相從ふ時に、向より馬烟夥しく起て、鼓の聲響ければ、帝怖れ慄き玉ふ所に、一人馬を飛して馳來り、御車の前に再拜す。帝これを見玉ふに、山東へ行し勑使なれば、あれなる大勢は何者ぞと問せ玉ふに、答て申けるは、曹操勑を承て山東を打立ところに、賊徒すでに都を攻ると聞て、先夏侯惇と申ものを先陣とし、その外の猛將十餘人、五萬餘騎にて早これまで參りたり。帝大に喜び玉ふ所に、暫ありて夏侯惇、許褚、典韋を先として、飛が如に馳來り、御車に近付て申けるは、皆甲冑を帶して候へば、再拜する事成がたく候、願くは軍禮を以て見候はんとて、同音に萬歲を呼。帝叡感斜ならず、汝等鞍馬の驅馳、他日恩賞あらんと宣ひければ、夏侯惇謹んで奏しけるは、主人曹操大軍を整ふる所に、敵早せめ上りぬと承はり、臣等を先手として天子を守らしむ。時に近臣走り來り、東の方より一手の勢馳參るは、敵の勢にあらずやと申しければ、

其沙汰にも及び候はざりしが、曹操いま山東に在て數十萬の勢を集め、勢ひ遠近を靡候、勅使を立て都の内へ招き入、賊徒を伐しめ候はんやと申ければ、帝御許容ありけるゆゑ、即時に山東へ勅使を下さる。此時しも曹操は山東に在て、天子洛陽へ還幸なりぬと聞て急ぎ馳參るべしと議するに、荀彧申けるは、昔し晉の文公は周の襄王を納て國々の諸侯みな從ひ、漢の高祖は義帝の爲に縞素して天下こと〴〵く心を傾す、今天子逆臣の爲に襲れて塵を蒙らせ玉ふ、將軍義兵を起し玉ふと云ども、山東の亂を鎭て官軍を救に暇あらず、方に今洛陽に還幸ならせ玉へども、皇居宮院こと〴〵く荒て助奉る處もなし、この時に因て君を助、人の望に從ふは大順なり、公道を以て天下を服せしむるは大略也、仁義を扶て英雄を致は大德なり、然る時は四方の國々に少々謀叛を企る者ありとも、豈道に足んや、若早く心を決し玉はずして、他の英雄この心つく者あらば、悔るとも及ぶまじ、速に打立玉へと勸ければ、曹操尤と同じて、さらば用意をせよとて兵を整ふる所に、天子勅使あり、詔を捧て召玉ひければ、願ところの幸かなとて、兵を分て追々に馳參る。帝は洛陽に入せ玉ひて、俄の事なれば百事いまだ調ず、城郭の構も備ざる所に、李傕、郭汜大軍を引て攻來ると沙汰ありて、上を下へ反しければ、帝いそぎ楊奉を召て宣ひけるは、賊軍又この處に來れり、朕いづくにか身を藏さん、使命山東に

を眞先に進めければ、李樂勢ひに乘て蒐出、槍を撚て戰ふと見えしが、徐晃大なる斧を舞して馬より下に砍て落しければ、李樂二つに成て失たりける。此より路ひらけて關所を御通ありければ、箕關の太守張楊、絹帛粮食を捧て輙道まで御迎に馳參る。帝叡感ありて大司馬に封じ玉ひければ、張楊恩を謝して暫く野王と云所に御車を駐めける。

○遷₂鑾輿₁曹操秉ㇾ政

去ほどに帝は虎口の難を御のがれ有て、已に洛陽の舊都へ入せ玉へども、董卓が都遷の時兵火の爲に燒拂れて、宮殿の跡には荊棘生て月影もの冷く、墻壁傾き壞て青苔露滋し。官省民家こと〴〵く燒野の原と成て、雞犬の聲無、狐兎の跡路に交る。萬昔に替れるありさまなれば、帝をはじめ奉り侍衞の百官そゞろに涙を流し、俄に皇居を構て帝と皇后とを入奉り、百官の朝賀はみな蒿草の中に立。今年は亂逆國々に起て一日も靜ならざるに、饑饉疫癘打つゞきければ、公卿穿議ありて建安と改元す。洛陽の居民わづかに數百家ありと云へども、食すべき物なければ、或は樹の皮を剝、草の根を掘て命を繼。朝廷の官人も、尙書郞より以下は盡山に入て柴を採、淺猿かりける世の中なり。太尉楊彪奏し申けるは、適に勅を承はりて、いまだ

ものを二百餘人あつめて、校尉に封ずるもあり、御史に封ずるもあり、皆將軍の下吏なりと號して、印を刻までも及ばず、錐を以て文字を掘付、その部曲の章となす。或は濁酒麁飯なんどを奴婢に持せて直に天子に獻る。帝は彼が心に背ん事も叶がたく思し召ければ、毎事忍で受玉ひけり。諸國今年も饑饉して、百姓みな棗をとり草を煮て命を繼、餓死する者路を塞けり。河内の太守張楊米と肉とを獻り、河東の太守王邑衣服少々獻りしゆゑに、帝は纔に饑寒を免れ玉へり。董承、楊奉相議して人を洛陽に上せ、内裏を造て後還幸なし奉らんと云ければ、如何思ひけん李樂更に從はず。董承が曰、洛陽は古の都なり、此處は分内狹して事成がたし、早く洛陽に還幸なし奉らん。李樂怒て申けるは、汝等洛陽に回らば回れ、我は此處に住まらん。楊奉、董承兎角の問答にも及ばず、御車を守護して軈て打立ければ、李樂は俄に心變して李傕、郭汜に内應し、天子を奪はんとぞ工ける。楊奉、董承その意を推して御車を早め、精兵を後陣に備て已に箕關の關を越んとする所に、夜も四更の比過て、跡より追手の勢驅來り、その車を留よ、李傕、郭汜こゝに在と聲々に呼はりければ、帝を初奉り諸人魂を落して怖戰く。早山の上に火を付て、喊の聲四方に起りければ、楊奉申けるは、何條李傕、郭汜がこの山にあるべき、此は如何さま李樂が詐て成わざならん、其奴原ならば手痛あてゝ蹴散せとて、徐晃

伏完
皇后

獻らざりしゆゑ、晩に及んで瓦屋のあやしげなる處に宿し奉り、その邊の百姓共粟の飯を進めけるに、帝も皇后も麁糲にして喉に下ず、終夜御涙を流し玉ふ。次の日李樂を征北將軍に封じ、韓暹を征東將軍に封じ玉ひ、此に逗留ありては然るべからずとて、御車を促さしむる所に、大臣二人尋ね來りて地の上に拜伏す。帝これを見玉ふに、太尉楊彪、太僕韓融なりければ、共に御涙を流して哭き玉ふ。太僕韓融申けるは、浩る淺猿き事やある、臣が申すことを李傕、郭汜よく用ひ候、願くは一命を捨て賊の陣に行、なにとぞ誘て見候はん、陛下よく龍體を保せ玉へとて、泣々跡へ引かへす。此處に數日御車を止めて諸人の疲を休めければ、太尉楊彪申けるは、安邑縣に行玉て假に皇居を構、しばらく諸國の官軍を御待あるべしとて、御車を早めて程なく安邑縣に到る。されども皇居とすべき家も無れば、あばら屋の門戸なく、四方に荊棘生しげりたるに、帝と皇后とを入奉り、諸の大臣荒草の中に在て事を議す。李樂、韓暹は元來山賊を業として、人を剝民を劫して世を渡りし者なるが、事の急なるに臨んで御賴ありければ、速に御迎に出て道々の合戰に功勞ありけるゆゑ、二人に將軍の官を授玉へり。されども身卑して禮義を知ざりしかば、俄に高官を得て心よろこび、漫に臂を張りて公卿大臣を帝の御前とも云ず惡口し打擲す。常に士卒を集めて相撲を取、昨日今日まで神主醫師なんどよばれたる

敵きびしく追ければ、李樂大音あげて曰、事すでに急なり、天子御馬に召れ候へ。帝御涙を流し、朕は馬に乘べけれども、此内の官人を如何んぞ捨るに忍んと宣ひて、跡を顧玉へば、追手の勢ま近く來り、火を掛て喊を造る。李樂取て回して防ぎ戰ひけるに、大將胡才敵に圍れて討れければ、官軍みな逃わしる。楊奉、董承事の急なるを見て、御車を捨て歩跣になり、兎角して黃河の岸まで來りければ、李樂等その邊を走り廻りて小舟一艘尋出し、此を渡として天子皇后を載奉らんとするに、前なる岸屛風の如く峙ち、寒氣甚しくして手足も快く働ず。帝は伏皇后と手に手を取て岸の上までは登り玉へども、大波天を拍て、見るに膽冷かりければ、舟の上まで下玉ふこと能ず。後には鼓を打鑼を鳴して、敵の大勢追きたる。楊奉大音あげて、馬の手繩を解て天子の御腰を縛り、舟へ下し奉らんと云ける所に、皇后の兄に伏德と云人、數十疋の絹を持來り、我これを路にて撫へり、早く此を以て御腰を縛んと云ければ、行軍校尉尙弘と云もの、天子と皇后とを絹にて包み、舟の中へ下し奉る。李樂人々を扶けのせ、自ら劍を拔て舟の頭に立、のり後たる者共が遙に泳ぎ付て乘んとするを、舟を乘しづめじと太刀薙刀にて斬拂ひければ、或は手を切れ指を斬れ、赤に成りて啼號ぶ。御舟恙なく北の岸に著ければ、楊奉民の家に入て牛車一輛たづね出し、帝を乘奉りて太陽と云ところに到る。此日は供御をも

ば、了に殘り少に打なされ、天子皇后を急ぎ車にのせ奉りて、侍衛の宮官あわて慌き、取ものも取あへず我さきにと逃はしる。符册典籍も皆道路に捨たれば、馬蹄の塵に埋沒す。去ほどに殘る兵引下りて防矢仕り、御車を先立て陝北の方へ落けるが、了に諧ふまじき由を奏し申せば、急ぎ河東へ勅使を馳せて、故の白波帥の與黨に、李樂、韓暹、胡才とて三人ありけるを、前々の罪を宥し玉ひ、早く兵を興して官軍に力を副よと云つかはさる。此者共は山賊強盗の張本なりと云ども、事急なる故に已ことを得ずして召れける也。李樂等天子の罪を宥し玉ふと聞て大に喜び、四方の溢ものを集めて軈て御迎に馳參る。李傕、郭汜は路すがら民の屋を劫して、老弱なるは切殺し、壯なるは推て手下の兵とし、是等を先驅として敢死の軍と號し、勢ひに乘て追かくる。時に白波帥の山賊共兵を集めて官軍を助ると告ければ、此等の者共は元より山林に集り居て、慾心熾盛の溢もの成ば、慾に遇ては必ず亂るべしとて、郭汜士卒に命じて衣服物の具なんどを路々に捨させけり。李樂、韓暹等は新手の勢を引て渭陽まで出でけるが、案の如く路々に捨たる物を見て、互に爭ひ取んとて、備も盡く亂れたる所に、李傕、郭汜が大軍四面より競來り、勢ひ大山の崩ごとくなれば、散々に破れて討るゝ者數を知ず。楊奉、董承こゝを先途と戰へども叶べくも思はざりしかば、御車を扶て北國の方へ落し奉る。跡より

を流し玉ふ。董承奏して申けるは、臣楊奉と力を合せ、此賊を滅して御運を開き奉らんとて、御車を早めて弘農まで入奉る。郭汜は敗軍を収て引退き、李傕に逢て申けるは、御邊と我と元來恨べきこと無りしに、一旦事の變に依て互に合戰に及べり、今すでに和睦せし上は、舊の如くに交を結び、共に身の上を謀るべし、天子すでに弘農まで入玉ひ、楊奉、董承御車を守護して手痛く戰ふ、若山東に到りて要害に楯こもり、國々の諸侯を集めて我等を伐ば、我等朝敵の名を得て誰か力を勠べき、必ず九族を亡さるべし、如何料ひ玉ふと云ければ、李傕が曰、いま張濟長安に在ていまだ動ず、我御邊と兵を調て弘農に推よせ、天子を弑して二人天下を分ち取ん、片時も急げと云ほどこそあれ、路次の人民を擄掠し、在々所々に火を付て塵をだにも遺さず、飛が如に追かくる。楊奉、董承これを聞て、敵長途を急で來りぬれば、人馬みな疲たるらん、蹴散して棄よとて、東澗と云ところまで打て出、こゝにて賊の勢と大に戰ふ。李傕、郭汜二人相議して申けるは、此まゝにて日を送らば官軍いよく勢重らん、共に備を立て大將を戰はせ、矢軍をすればこそ箇樣には隙を取、只打混の軍をして相掛りに攻めんに、官軍は小勢なり、我等は大勢なり、などか勝ずと云事有んとて、李傕左にあり郭汜右にあり、山に漫り野を掩て、喊を造りて攻かゝる。楊奉董承二手に分れて命を限と戰へども、入かはる勢無りけれ

見て大に怒り、只踏やぶりて棄よとて、崔勇と云ものを眞先に進めければ、楊奉が陣より徐晃を知れりやと呼はりて大將一騎かけ出で、大なる斧を以て崔勇を馬より倒に砍て落し、直ちに大勢の中に馳入りて縱横無碍に蒐たりしかば、郭汜散々に亂れて二十里あまり引退く。楊奉盔を卸で御車の前に頓首しければ、帝自ら車より下て楊奉が手を執、卿この危を救しこと、朕よく肺腑に銘じて忘じと宣へば、楊奉再拜して恩を謝す。帝又さきに敵の大軍を斬て大勢を破りし者は誰人ぞと御尋ありければ、楊奉一人の大將を車の前に拜せしめ、此は河東楊郡の人に、徐晃字は公明と申もの也と奏して、御車を守護して華陰の寧輯と云ところに到りければ、將軍段煨と云もの衣服飲膳を獻る。この夜は楊奉が陣に御車を宿し奉り、夜あけて打起んとするに、又郭汜が大勢攻來り、四方を圍で散々に戰ふ。徐晃勇を振て防と云ども、小勢なれば力疲て已に危く見えける所に、一軍東の方より喊の聲を擧て賊徒を十方に蒐ちらす。徐晃救の勢來れるならんと喜び、力を奮て追立々々攻たりしかば、郭汜大半討れて右往左往に散亂す。帝虎口を出たる御心地して、抑此大敵を追散して、朕を救し者は誰人ぞと宣ふに、一人錦の袍を被て御車の前に再拜しければ、之を見玉ふに、董貴妃の父董承なり。後馳の官軍を引來て、幸に賊軍を討破りぬと奏しければ、帝大に叡感ありて、諸處の難儀なりし事を語りて御涙

ゆるは何者ぞと呼はりければ、侍中楊琦馬を乗出し、此は漢の天子還幸の御車なるぞ、狼藉するなと答ける。之を聞て大將と思しき者二人すゝみ出て申ければ、吾等は郭汜が命を受て此橋を固め、御幸の路を淸めて非常を警ん爲に此にあり、ねがはくは眞の天子か見奉らんと云しかば、楊琦高く御車の簾を掲しに、帝宣けるは、朕自ら此にあり、汝等なんぞ退かざる。諸軍これを聞て一同に萬歲を呼、左右に分れて退きければ、御車すでに橋を過けり。橋を固めたる勢共馳回て此の趣を告ければ、郭汜大に怒て曰、われ天子を奪ひ取て再び郿塢城に籠り、又天下を手に握んと思うて汝等に橋を守らしむ、何とて御車を通したるぞ。二人の大將申けるは、某等只橋を守れとばかりの仰を承て、帝を奪ひ奉れとの本意を知ざる故に、路を開て通したり。郭汜いよ／＼怒り、われ張濟を欺てこの大事を企る所に、如何なれば通したるぞとて、了に二將の首を刎、急に兵を率して趕かくる。御車すでに華陰縣を過ける所に、後より喊の聲起て追手の勢間近く來り、その車止まれとぞ呼はりける。帝大に怖玉ひ、已に狼の喉を逃て又虎の口に遇、いかゞせんと宣へば、近臣みな淚を流す。時に傍なる山の内に鼓の聲天地を動して一彪の軍馬かけ出、大漢の楊奉と書たる旗を進めて郭汜が勢に打向ふ。元來李傕を離てより終南山に居たりしが、天子を扶け奉らんとて、千餘騎を率して來れる也。郭汜これを

れを聞付、まづ宋果を捕て首を刎けり。楊奉は外に在て、時刻にも成ぬと相待に、合圖の火も見えざりければ、心怪で進まざる所に、思ひも寄ず李傕急に攻め來りければ、楊奉大に驚き、入亂て四更の比まで戰ひけるに、手勢若干討れければ、了に叶ずして落行けり。此より李傕が勢ひ次第に衰へ、郭汜と日夜戰うて互に討れたる兵多く、血は流れて溝をなし、屍は積で山の如し。浩る所に陝西より張濟大軍を引て馳上り、李傕、郭汜が方へ使を立て申ける、我御邊二人と董卓の讐を報じ、志を併せて政を攝んと約せしに、今同士軍をし出して天子百官を擄にすること是いかなる所行ぞ、速に軍を止て和睦をし玉へ、若異儀に及びなば、我等大軍を以て盡く蹈やぶらんと云つかはしければ、李傕、郭汜一儀をも云ず、共に軍を收けり。張濟表を上て、帝を弘農まで移し奉らんと奏しければ、帝大に喜び玉ひ、朕つねに洛陽の舊都を慕ふ、今弘農まで還んは大なる幸なりとて、すなはち張濟を驃騎將軍に封じ玉ふ。張濟使を遣して郭汜が囚おきたる百官を放し出させ、酒肴を送て持成けり。李傕は御車を求め出して行幸の用意をなし、舊の御林の軍を此彼より尋ね集めて數百人ありけるに、長き戟を持せて御車を守らせ、その夜まづ新豐まで到り、次の日の昏方に覇陵橋を過玉ふ。時秋の半なれば、吹風も身に入、御車を早むる所に、忽ち喊の聲地を動して、數百騎の兵橋の上に蒐出、こゝに車の見

散々に李傕を罵りければ、帝この由を聞玉ひて、いとゞ憂事に思し食、いそぎ使を馳て皇甫酈を西涼へ回し玉ふ。李傕が手下の勢は大半西涼の兵なりければ、皇甫酈が回る時、李傕大逆無道にして天理に背、漢の天子を弑して位を奪んとすと云しを聞て、皆心の内安からず、左樣の逆臣に從ふべき樣なしと申あひける。折節賈詡ひそかに諸軍勢に告て、天子よく汝等が忠義を知玉ひて暫く暇を賜る、本國に回りて恩賞を待と云ければ、諸軍この時李傕を怨る者多くして拔々に落行けり。口を經て皇甫酈が西涼へ回りたるを告る者ありければ、李傕大に怒て虎賁郎王昌に追付て殺せと云。されども王昌も皇甫酈が忠義を感じて、空く中途より引回し、行方なく失たりとぞ申ける。賈詡ひそかに帝に奏して、李傕に重き官職を授玉へと申ければ、帝これに從て大司馬に封じ玉ふ。李傕つねに左道の妖術を好み、軍中に巫女を召て鬼神を敬ひ祈りけるが、今大官を得て心喜び、是巫女の神に祈し驗なりとて、重く巫女に恩賞を與て、士卒を恤こと無りしかば、騎都尉楊奉心に怒て、宋果と云ものに私語けるは、我等つねに十死を出て一生に逢、矢に中り石に打れて戰をなす、然れども巫女にも及ばずと云ければ、宋果申けるは、唱や李傕を殺して漢の天子を救ふべし。楊奉が曰、しからば御邊は中軍に在て、今夜の二更に合圖の火を掛よ、我は外に在て攻入べしと、約を定めて相別れけるが、如何したりけん李傕こ

了に自ら滅亡に及べり、近ごろ董太師の強き、君臣みな怖慄しかども、呂布これを殺して、須臾の間に首を高き竿に指擧たり、此を以て能思へば、勇にして強も何の益かある、將軍いま身上將として群臣の上に立、子孫權を握り宗族寵に傲る、國家の爵祿その至極を盡して、誰人か仰ざらん、今郭汜が群臣を捕て質とする、將軍の天子を劫して質とし玉ふ、孰をか重しとし、孰をか輕とせん、よく〳〵之を思ひ玉へ。李傕大に怒り、劍を拔て申けるは、扨は天子汝を使として我に恥を與へ玉ふか、先汝が首を斬て其後に天子を弑ん、是大丈夫の心なりとて、已に斬んとしけるを、騎都尉楊奉推止めて、郭汜いまだ滅ざるに勅使を殺し玉ひなば、郭汜四方に觸て、勅使を斬たる逆臣を伐と云ん、然る時は天下の諸侯みな郭汜を助て、將軍一人逆臣の名を得玉はんと云ければ、賈詡も強く諫しゆゑ、李傕怒を推へて放しけり。賈詡乃ち引て外に出しければ、皇甫酈大音あげて罵り、李傕勅命を用ひず、漢の天子を殺さんとする、是簒逆の心なりと呼はりけるを、侍中胡邈苦々しきことに思ひ、急に止めて申けるは、李將軍御邊を用ふること淺からず、何とて無用の言を出して自滅を求玉へるぞ。皇甫酈大に怒て曰、汝は朝廷輔佐の大臣、なにゆゑに斯る諂を吐出せる、我久く漢の祿を食へり、君辱らるゝ時は臣死す、是當然の理なり、我いま李傕に殺されんは天命の爲ところ也、何の恐るゝこと有んとて、

何條て、賈詡答てに、問と無かては意にての意にての我を害せんとの意にては無かと問に、賈詡答て、何條

を召て、今内侍官が劍を帶て立たるは、我を害せんとの意にては無かと問に、賈詡答て、何條さること候はん、軍中なれば用心の爲なるべしと云ければ、李傕これに依て心疑はず。

○楊奉董承敕二御駕一

帝日夜御心を苦め玉ひ、僕射皇甫酈は辯舌に巧にして、而も李傕、郭汜と同郷の者なれば、行て二人間を和睦せしめよと命じ玉ふ。皇甫酈まづ郭汜が陣に行て詔を述ければ、郭汜申けるは、我なんぞ天子を惱し奉らん、李傕もし天子を舊の如く出しなば、我も群臣を放して戰を休ん。此に依て皇甫酈直に李傕が陣に行、われ本西涼の人にて將軍と同國なるを以て、天子われを使として和睦の事を說しめ玉ふ、郭汜は已に勅命に順り、將軍いかゞ答玉はんと云ければ、李傕申けるは、我呂布を破て後すでに四年の間朝廷の政を輔て、三輔の郡縣平安なること、天下誰かその功を知ざらん、郭汜は馬を盗む虜なり、爭か我に竝べき、我必ず之を殺ん、御邊は我と西涼に育玉ふが、如何に我國の軍兵は其勇猛なる事郭汜が勢より勝れるにあらずや、郭汜いま群臣を囚て質とす、是いかなる悪虐ぞ、御邊は定めて郭汜が方を引人ならんと云ければ、皇甫酈色を正して申けるは、昔し有窮の后羿と云し人、わが強弓挽を頼として患難を思はず、

の臣として、君を扶け世を救こと能はず、天地の間なんぞ生たる甲斐あらんとて、相抱て大に哭き、昏絶して地に倒けるが、家に回て朱儁は病を發して死にけり。此より李傕、郭汜毎日兵を出して攻戰ひ、五十餘日に及びければ、兩方の討死道路に横たはりて、恰も屠所の肉の如し。帝は日夜御涙を流して哭き哀ませ玉ひけるを、侍中楊琦ひそかに奏して申けるは、臣よく賈詡が心を見るに、李傕に事て無二の氣色なれども、其心いまだ君を忘れず、陛下御心を殘ず實を以て告玉へ、彼必ず李傕を諌べし。帝點頭して居玉ふ所に、良ありて賈詡來りければ、帝近侍の人を退けて自ら地上に再拜し玉ふ。賈詡大に驚き拜伏して、臣が罪萬死なほ輕しと云ければ、帝宣ひけるは、卿漢朝を憐で朕が命を扶よ。賈詡頓首して申けるは、臣が心箇程に情なくし奉るにあらず、今暫の間忍玉へ、臣よろしく計を成んとて退いて出にけり。暫く有て、李傕長き刀を腰に横たへ、劍を腕に掛、鐵の鞭を手に提て遽しく來りければ、帝大に怖慄き玉ひて、御顏土の色の如し。內侍官直事ならずと思ひ、皆劍を帶て帝の御側に立ければ、李傕これを怕てや有けん、郭汜惡逆を長じて主上を劫さんとす、若某が守護するに有らずんば、大なる難に逢玉はんと云けるを、帝手を拱して、卿われを扶くるの功わすれ難しと謝し玉へは、李傕が曰、陛下は眞に賢聖の君なり、よく〳〵龍體を保ち玉へとて退て外に出、手下の大將

云沙汰ありと告ければ、帝人を出して見せしめ玉ふに、郭汜が勢なりと申す。帝いよ／＼憂玉ふ所に、門外に喊の聲天に喧しく、鼓の聲地を動して、李傕兵を引て御座の廻を守護しければ、郭汜馬を出して呼はりけるは、逆賊李傕なに故に天子を刼して此に來れる。李傕が曰、われ帝を守護して此にあり、汝天子に向て弓を挽は眞の逆賊にあらずや。郭汜が曰、汝帝を此處に推こめ奉り、守護するとは何事ぞ、速に出し奉らずんば我必ず汝を殺さん。李傕が曰、無用の問答なせそ、多くの人を惱さんよりは、汝と我と獨身にして勝負を決せん。郭汜これ我のぞむ所なりとて槍を提て出ければ、李傕も刀を舞して馬を出し、十合あまり戰ふ所に、太尉楊彪馬を打て馳きたり、兩將しばらく戰を休玉へ、我群臣と共に和睦を勸んと呼はりければ、兩方兵を收て引退く。楊彪、朱儁朝廷の大臣六十餘人を伴て郭汜が陣中に行、和睦を成て戰を止玉へと云ければ、郭汜兎角の答をも云ず、兵を下知して群臣を捕しむ。群臣驚怕れ、此いかなる故ぞと問に、郭汜申けるは、李傕が方には天子を捕て質とす、我方には群臣を質とせん。楊彪言をあらして、一人は天子を刼し、一人は群臣を捕ふ、是いかなる行ぞと云ければ、郭汜劍を拔て斬んと怒るを、中郎將楊密急に推止めけるゆゑ、郭汜劍を收て楊彪、朱儁二人を放し出し、其餘の群臣を盡く捕へおく。楊彪外に出て朱儁に申けるは、我等社稷

て散々に射る、死する者麻の如し。李傕跡を追て攻來り、後を裏で掩殺しければ、郭汜つひに打負て散々に逃わしる。李暹は天子を引立、火を蹈烟を冒して先李傕が家まで入れ奉りければ、郭汜は兵を引て内裏に入、宮嬪宮女を搦捉て、一度に火を掛け、宮殿樓閣一宇も殘らず燒拂ふ。次の日天子は李傕が家に囚れ玉ふと聞て、郭汜自ら推寄ければ、李傕打て出て戰ひ、射ちがふる矢は雨の如く、鐵砲を迸らしむること蝗の飛よりも繁し。郭汜つひに打負て退きしかば、李傕天子を車に乘て送て郿塢城に入奉る。帝は弓箭の聲を聞て魂を失ひ膽を冷し玉ひ、伏皇后は涙衣に滿て顏をも擡玉はず。御車すでに郿塢に著ければ、李暹一間なる處に帝と皇后とを推こめ、密しく番を付て内外の出入を止けるゆゑ、近侍の臣みな饑を苦む。帝人を出して李傕に米五斛牛骨五具を乞求め玉ひければ、李傕大に怒て曰、朝夕飯を獻る上は、米を求て何にかし玉ふとて、只わづかなる魚肉を獻る。帝これを見玉ふに、皆腐り損じて臭こと甚しかりければ、御涙を流して、何とて此の如く朕を欺と宣けるを、侍中楊琦ひそかに奏して、李傕は邊境の夷にそだちて身鄙ものなれども、今日すでに背逆の罪を悔て怏々の色あり、御駕を移して黃白城に行幸なし奉らんとす、暫の辱めを忍玉へ、必ず其罪を責玉ふなと云ければ、帝聲を飲で哭玉ふ時に、近臣奏して、誰とは知ず二手の軍勢寄きたり、天子を救奉ると

き人なり、古より二雄不二並立一と申せば、若酒後に毒なんどを以て將軍を害することも候はん、必ず油斷し玉ふなと云ければ、郭汜さらに用ひず、何條李傕が左様の心あるべきと云て、了に使と共に行、暮に及て回りけり。その後李傕が方より食物を送りければ、女房ひそかに侍婢に命じて毒を入置しむ。郭汜これを食んとするに、女房諫て申けるは、外より來る食を試ずして喰ことやあるとて、先犬に與ければ、犬忽に死けり。郭汜これより心に疑ひを起しけるが、或日李傕に誘れ出て終日に酒宴し、夜に入て回ければ、俄に腹の痛甚し。女房さればこそ毒に中り玉へりと云て、急に糞汁を飲せければ、嘔吐して痛止。郭汜大に怒り、我李傕と共に事を圖、互に心を合せて長く富貴を受んと思へば、結句われを害せんと計る、我早く手を出さずんば、必ず毒害せらるべしとて、手下の勢を調へて李傕を討んと用意をなす。李傕この由を聞て驚て申けるは、郭汜いかなれば此の如き、我先急に討て首を取んとて、兵を引て推よする。兩旁の軍勢端なく長安の城下にて出あひ、入亂れて散々に攻玉ふ。この間に李傕が兄の子李暹と云もの、數千の精兵を率して内裏を圍み、車三輛を以て、一つには帝をのせ、一つには伏皇后をのせ、一つには賈詡、左靈二人をのせて、後宰門より出わしる。内侍官女喚き叫で、歩跣にて逃迷ければ、郭汜これを聞て、急に兵を分て後宰門に馳きたり、帝を取奉んとて路を横切

楊彪が女房
郭汜が女房を詐る

郭汜妻
楊彪妻

費亭侯に封じ玉ふ。李傕、郭汜は彌逆威を振て朝廷の上に横行し、萬づ心の任に政を行ふ。されども百官みな其威を怕れて言を出す者も無りければ、太尉楊彪、太司農朱儁二人ひそかに帝に奏して申けるは、今曹操四十萬の兵を集めて、謀臣武將數百人を用ふ、若この者に勅して逆臣を伐しめ玉はば、社稷再び興て天下の幸甚しからん。帝御涙を推へて宣ひけるは、朕此の如く李傕、郭汜が辱に逢て、惡虐の甚しき、董卓よりも過たり、日夜心を苦めて行坐共に安からず、朕これを除んと思へども施べき計なし。楊彪が曰、臣一つの計あり、先李傕と郭汜とに同士軍をせさせて、其後に曹操を召ば、天下忽に平ならん。帝問て宣く、汝いかなる計をか用ひん。楊彪が曰、臣が妻を潛に郭汜が女房の處へ遣し、反間の計を用て二人の賊に自ら害を成しめん。帝宣く、卿等いかにも計を運して朕が苦を採とて密詔を下し玉ひければ、楊彪わが家に回り、其妻に計を敎て郭汜が處に到らしむ。妻よく計を受て、いつもの如く郭汜が女房と物語して密に低語、郭將軍は常に李傕の夫人に馴染玉ひて、互に情ふかく通玉ふが、知玉はぬにやと云ければ、女房大に驚き、怪しや、動すれば夜深るまで回玉はぬを、常に心元なく思ひしに、扨は浩る事の有けるかや、能も知せ玉うたりとて、數日を經ける所に、李傕が方より使ありて郭汜を招きければ、女房諫て申けるは、李傕は心の怖し

呂布昨日すでに徐州を奪の心あり、必ずかる〴〵しく行玉ふな。玄德の曰、われ實の心を以て人を愛す、人なんぞ我に背んとて、了に呂布が館に入玉ふ。呂布酒宴を設て後堂に請じ、妻子を出して再拜せさせければ、玄德慇懃に禮を成玉ふ。酒半酣に及て呂布玄德の手を執、われ量らざるに此處に身を寓て賢弟の恩を受ると云ひければ、張飛これを聞て目を怒らし、劍を拔て申けるは、わが兄は金枝玉葉、漢の天子の至親なり、汝は乃ち人家の奴、なんぞや我兄を賢弟とは申ぞ、われ汝と快三百合戰んと鬩きけるを、玄德急に住め玉へば、關羽引て外に出す。玄德笑て、わが弟酒を過して狂言を放つ、將軍怪玉ふなと宣へば、呂布默然として言ず。暫ありて玄德歸り玉へば、呂布自ら門外へ送り出るに、張飛馬を躍せ槍を橫へて、呂布出よ、われ快く三百合戰んと呼はりけるを、玄德強て囘り玉ふ。次の日呂布來て暇を乞、いづ方へ成とも行んと云けるを、玄德強て止め、我弟の無禮を必ず心に掛玉ふなとて、張飛を召で呂布を持成と云玉へば、張飛目を怒らして呂布を睨み、牙を嚙で立たりけり。玄德せん方なく、此傍に小沛とて一つの城あり、初め我等が居し處なり、分內狹は候へども、將軍しばらく行て守り玉へ、軍馬兵粮の備もあらまし用意候と云玉へば、呂布拜謝して小沛の城にぞ籠ける。此時曹操は汝南潁川の賊徒を平げたる由長安へ聞えければ、朝廷これを賞して建德將軍

陳宮が曰、近ごろ劉玄德徐州を領す、行て此人を頼玉へ、暫く氣力を養ひ成て又兵を起すべし。呂布此に從ひ直に徐州に赴ければ、玄德これを聞て、呂布は當世の英雄なり、我自ら出て迎んと云玉ふを、糜竺諫て申けるは、呂布は虎豹なり、引入玉はば人を食ん。玄德の曰、向に呂布が兗州を攻るにあらずんば、曹操爭かこの國の圍を解ん、わが徐州を得たるも實は呂布が力なり、彼もし徐州を望ば、我乃ち讓與ん、況や彼その心なし、何ぞ疑ふこと有んとて、數千の兵を引て城外三十里出て迎へ玉ふ。呂布禮を成て城中に入、われ董卓を討つてより、又李傕、郭汜が變に遭て關東に流浪す、向に足下の爲に兗州を攻て徐州の圍を解、いま料ざるに曹操が計に落され、身の置所なきを以て足下を頼む、願くは力を盡して再び漢室を興すべしと云ければ、玄德の曰、陶謙新に逝去して徐州を領すべき人なし、幸に將軍この所に來り玉ふ、古より德ある人には國を讓る、將軍ねがはくはこの國を領し玉へ。呂布心の內大に喜び、熟見るに玄德の後に立たる關羽、張飛目を怒らして已に劍を拔んとする氣色ありければ、佯て打笑ひ、量に某は一人の勇夫なり、焉ぞ能この國を治ることを得んと云ければ、玄德再三讓り玉ふ。陳宮傍に在て强レ賓安能壓レ主と云ふ事あり、玄德公必ず疑ひを成玉ふなと云ければ、玄德酒宴を設て持成玉ふ。呂布客屋に回りて、次の日玄德を招きければ、關羽、張飛申しけるは、

り火を掛て盡く燒拂ひしかども、敵一人も見えず、陣屋の内に鼓の聲大に響て、喚き叫聲たえざりしかば、心疑て進み得ざる所に、陣屋の後に一手の勢出たるを見て、急に追掛て討んとすれば、合圖の鐵砲を鳴して堤の陰より伏の勢一度に起り、夏侯惇、夏侯淵、許褚、李典、樂進、典韋六騎の大將、馬を飛して打てかゝる。呂布大に驚き、慞ふためき走りければ、大將成廉すでに樂進に射殺されて、討るゝ者數を知ず。陳宮これを聞て、斯ては孤城守り難し、早く出て走るべしとて、高順と妻子老小を扶けて我さきにと落行ければ、曹操勝に乘て城中に攻入、その勢破竹の如し。太守張邈は這々のがれて袁術が方へ落ゆき、弟の張超は自害して燒死しぬ。是より山東の一境こと〴〵く曹操に從ひ靡きければ、民を安じ城を固め、なほ諸國の勢を集めける。

○李傕郭汜亂㆓長安㆒

呂布は定陶を追出され、散々に成て走りけるが、路にて陳宮諸大將を引て追付しかば、再び敗軍を集めて海濱に屯し、曹操と雌雄を決せんと議するに、陳宮申けるは、今曹操が勢大にして共に戰を交へ難し、先身の置所を求めて重て時を待玉へ。呂布が曰、いづくにか身を安ずべき。

は、呂布は猛き虎なり、今幸に力乏し、この時に乘て追討に攻玉へ。曹操、この儀しかるべし、汝こゝを能守れとて、自ら大軍を引て定陶へ追てゆく。呂布は定陶城に入て、陳留の太守張邈その弟張超と敗軍を集め、折節兵粮の用意調はざりしかば、高順、張遼等を諸處に分て兵粮を運送せしむ。この時曹操が大軍すでに推よせ、城を四十里隔て陣屋を構へ、青麥を刈て兵粮の資とする由聞えければ、呂布急に推よせけるが、曹操が陣の傍に深く茂りたる林ありければ、若伏勢や有んと疑て、進まずして空く引回しけり。曹操これを見て諸大將に向て申しけるは、呂布戰はずして引退しは、林の中に伏勢あらんことを疑て也、われ量るに林の内に少々旗ばかりを結付、西の方の堤に幸に水無れば、精兵を其陰に伏おかん、明日呂布來て必ず林に火を掛べし、其時思ひ寄ずことごとく打て出て敵の後を圍なば、呂布必ず擒となるべしとて、陣屋の内には鼓を打もの五十人を留めおき、近邊の百姓を驅加て鼓を打、喚き叫で大勢こもりたる體を成しむ。呂布は空く引退て陳宮と計を議するに、陳宮申けるは、曹操は詭の計きはめて多し、輕々しくし玉はば大なる破れあらん。呂布が曰、われ何ぞ曹操を怕れん、明日林に火を付て彼が伏勢を焼やぶらんとて、次の日陳宮、高順を留て城を守らせ、自ら大軍を引て打て出、林の内を望み見るに、旗幟少々立て風に飜て見えければ、兵を驅て大に進み、四方よ

ければ、程昱申けるは、この勢ひに乘て直ちに濮陽を攻取玉へ。曹操然るべしとて、許褚、典韋を先手とし、夏侯惇、夏侯淵を左ぞなへとし、李典、樂進を右備とし、呂虔を後ぞなへとして濮陽に發向す。呂布これを聞て兵を調へ、自ら出て戰はんと云を、陳宮諫て申けるは、輕々しく出玉ふこと勿れ、曹操兗州を取て其勢ひ盛なり、暫く御方の大將を待そろへて、那後に戰ひ玉へ。呂布が曰、われ天下に懼もの無、誰か敢て近付んとて、自ら城外に打て出、大音あげて、曹賊なんぞ我大將を殺したると呼はりければ、許褚刀を舞して討てかゝる。呂布大に怒り二十餘合戰ひければ、曹操これを見て、呂布は中々一人して敵し難し、典韋出よと下知をなす。典韋聞もあへず鐵の戟を提て蒐出、許褚と力を盡して兩旁より戰へども、呂布これを事ともせず。又曹操が陣より、夏侯惇、夏侯淵左より蒐り、李典、樂進右より進みければ、呂布力及ばず城中へ逃入んとするに、城の上より田氏遙に呂布が打負たるを見て、壕の橋を挽たりけり。呂布門を開けと呼はりければ、田氏矢倉より大音あげて、我すでに曹操にこの城を獻る、汝はいづくへも落行と云。呂布牙を咬暫罵りて立たれども、爲べき樣なかりしかば、定陶を指て落行けり。陳宮等は事の變を見て、呂布が妻子一族を助けて東門より逃れ出でければ、曹操つひに濮陽城を取て田氏が舊日の罪を宥し、士卒を勞ひ百姓を安じける。時に劉曄申ける

たりけん牛みな逃走りければ、某追付て二の牛を左右の手にて尾を持、さかさまに百歩ばかり引戻しけるに、賊徒その力にや怖れたりけん、牛を取ずして回り去れり、箇様の業を爲て無事なる事を得たりと語りければ、曹操が曰、われ久しく名を聞り、今われに降らんや。許褚が曰、ねがはくは一族と共に降らんとて、了に數千人を率ゐ來りければ、曹操大に喜び、何儀、黄邵が首を路次に斬梟させて、汝南潁川こと〴〵く平ぐ、時に興平二年夏四月に、軍を收て山東に陣を取ければ、曹仁鄄城より夏侯惇を使として申けるは、近ごろ間者を入て窺はしむるに、兗州を守る呂布が大將薛蘭、李封等こと〴〵く怠り荒で、諸處に打散て民を劫して、城を守る勢は甚だ寡、速に推よせて其備なきを攻ば、破んこと掌の内に在。曹操これを聞て、さらば攻よとて直ちに兗州の城に推寄ければ、薛蘭、李封あわて驚き、俄の事にて勢を集むべき様なく、纔に城を出て陣を張ければ、許褚これを見て、某ねがはくは此敵を討て君の恩を報ぜんと云ままに、刀を舞して出ければ、李封槍を撚て馬を交へ、只一合に斬て落さる。薛蘭これを見て怖れ慄き、一合にも及ばず城中へ逃入んとしければ、壕の邊にて李典一文字に路を遮る。この故に城に入ること能はず、鉅野に向て走る所に、曹操路を横ぎりて、從事呂虔と云もの近々と馬を蒐よせ、よく挽て射たりければ、薛蘭倒に落て死にけり。此に於て兗州すでに曹操に屬し

ず戟を舞して打て蒐り、二人辰の刻より午の下りまで戰へども勝負さらに分れず、暫く息を休めて許褚又進めば、典韋も馬を出し、申の刻より昏に至るまで火を散して戰ひけるが、互に馬疲ければ、勝負は明日と約束して相引に退ける。曹操は後陣に在て此由を聞、大に驚て諸大將と馬を飛して馳來り、次の日許褚が來るを見るに、その貌天神の如く威風凛々たりければ、心の内この者を御方になさんと思ひ、典韋に計を授て詐負て退けと云。此に因て典韋三十餘合戰ひ、馬を回して走りければ、許褚急に追來るを、曹操射手を出して散々に射る、許褚これを見て退きければ、曹操その夜陣の外五里に深き陷穴を掘せ、熊手を使ふ兵を伏おき、次の日典韋に百餘騎を付て戰はしむ。許褚これを見て馬を飛して來りければ、典韋戰ひ三合ならざるに詐て逃走る。許褚これを追て馳ければ、思ひも寄ず馬に乘ながら陷穴に落入て、伏の勢に熊手に掛て生取る。曹操自ら其繩を解、衣服を與て名を問に、許褚答て申けるは、某は譙國の人に、許褚字は仲康と云もの也、天下の亂を避て一族數百人と此邊に逃れ居、されども動すれば强盜に刼されて安きことも無し、ある時强盜入ければ、某手の者共に大石を集めさせて、自ら散々に投掛しに、賊徒みな打ひしがれて這々に逃去れり、其のちは賊と和睦して、ある日某が家の牛を以て賊の米に代んとす、米すでに運び來て、賊徒牛を引て回りけるが、いかゞし

み出、ねがはくは某に此賊を討しめ玉へと云て、態と馬より飛て下、刀を提て出向ひ、只二人火を散して戰へども、二時あまりに及びて勝負さらに分れざりければ、曹洪詐て引退くに、何曼急に追來るを、引回してはたと斬。きられてひるむ所を、返す刀に腿を斬落しければ、截天夜叉つひに沙の上に倒死す。これを見て李典兵を引て直ちに賊軍に突て入、四角八方へ蒐ちらし、大將黃邵を馬の上にて生取ければ、降人に出るもの數を知ず、兵粮金帛こと〴〵く捨おきけり。賊將何儀は黃邵が討れたるを見て力を失ひ、わづか二百餘騎を引て葛陂の堤を落ゆきけるに、山の間より一手の勢打つて出、身の長八尺ばかりなる壯士の容貌勇偉なるが眞先に進み來る。是は譙國の人に、許褚字は仲康と云もの也。路を塞で打止んとしければ、何儀大に怒り、槍を撚て戰はんとするを、許褚引組で馬より下にどふと落、ちつとも働さず、壓て繩を懸たりける。相從ふ百餘騎の勢地に拜して降らんと請ければ、許褚こと〴〵く引回る。典韋は浩ることとは知ず、何儀を追つめて討んとて、葛陂の堤まで來りける所に、喊を咄と作て一手の勢打て出ければ、汝等は黃巾の賊にては無かと問に、許褚答て申けるは、黃巾の賊百餘騎を我こと〴〵く擒にす。典韋が曰、しからば何ぞわが君に獻らざる。許褚あざ笑て曰、われ何の故ありて人に獻らん、汝もし我手の內の刀に勝ば、那時に獻るべし。典韋きゝもあへ

は、本を捨て末を取、安を以て危に換なり、願くは君よく之を思ひ玉へ。曹操が曰、ちか比は凶年打つゞいて兵を養粮足ず、汝これを如何せん。荀彧が曰、先陣の國を攻取て兵粮の資とし、汝南潁川には、黄巾の餘黨何儀、黄邵と云もの蜂起すと承れば、打向て攻平げ、其貯置たる物を取て御方の資用と成時は、天子の爲に忠を盡し、萬民の爲に害を除て、此天理に順の道なるべし。曹操大に喜び、夏侯惇、曹仁を留て兗州を守らせ、十二月に打立て先陣の國を屠とり、逕に汝南潁川に向ふ。この時黄巾の賊徒に何儀、黄邵と云もの二人、十萬餘の悪黨を集めて居けるが、曹操が寄ると聞て羊山まで打て出、野に滿山に漫て陣を取と云ども、惟これ狐群狗黨の溢ものなれば、隊伍行列の備もなく、紀律法度の定もなし。曹操これを見て打よすると齊く、强弓の精兵を調て眞先に進め、雨の降ごとくに射させて、敵の色めく所を典韋に命じて蒐させければ、討るゝ者數を知ず、賊軍多く亡て、蛛の子を散すが如く右往左往に落て行。曹操勝に乘て追蒐、羊山に逼て陣を取ければ、次の日賊の陣より身の長九尺あまりなる男の、眼星の如く髯長うして色飽まで黒が、手に鐵の棒を提げ、馬にも乘ずして只一人すゝみ出、大音あげて名乘けるは、日比天下に隱なき截天夜叉何曼と云は我事也、曹操は何くにかある、快く出て勝負せよと呼はりければ、曹操これを見て、李典出よと下知するに、曹洪すゝ

通俗三國志　巻之五

○曹操定陶破呂布

徐州の太守陶謙死して、劉玄德その讓を受、自ら徐州の牧と稱する由その聞え有ければ、曹操鄄城に在てこの事を聞、大に怒て申けるは、我父の讐いまだ報ぜざるに陶謙死せり、玄德半箭の力をも費さずして坐ら徐州を横領す、我先玄德が首を斬、陶謙が塚を掘てその屍を市に曝し、父の寃を雪ぐべしとて、已に打立んとしけるを、荀彧諫て申けるは、昔漢の高祖は關中を保ち、光武は河内に據て根を深し、本を固して天下を制す、此故に進では敵に勝、退いては固守る、適事を仕損じても、本固故に了に大業を濟玉へり、今君事を兗州に首玉ひて、河濟は乃ち天下の要害、これ亦昔の關中河内なり、若又徐州を攻て盡兵を起し玉はゞ、呂布虛に乘て兗州を取ん、兵を多く留て兗州を守らしむる時は、徐州に向ふ勢小勢にて攻がたし、萬一兗州を奪れ、又徐州をも取事能はざる時は、君いづくにか身を容玉はん、殊に陶謙死すと云ども、玄德よく國を守る、城中の軍民その德に懐て、命を棄んことを願ふ、今兗州を棄て徐州を取玉ふ

玄德已事とく涙を流し、君もし此國を受玉はずば、我等みな賊の手に殺されんと云けるゆゑ、玄德已事を得ずして徐州の牧を領し、糜竺、孫乾、陳登等を輔佐として政を行はしむ。陶謙死する時六十三歳、玄德喪を發して大小の將士と孝を掛て祭をなし、黄河の原に厚く葬り、陶謙が遺表を朝廷に奏せらる。

な飢を苦み、關東の國々、米一斛に値の錢五十貫なり。此に依て曹操兵粮盡て鄄城に引退きしかば、呂布も兵を山陽に屯して、暫く軍は無りけり。爰に徐州の太守陶謙、年六旬に餘て病すでに急なりければ、糜竺、陳登を召て國の事を議するに、糜竺申けるは、曹操さきに圍を解て回りしは、呂布が兗州を攻る故なり、今年は國々飢饉して、兵粮の用意なり難きゆゑに、暫く攻きたらずと申せども、來春に至らば曹操又兵を起して先徐州へ向ふべし、君すでに國を玄德に讓んと宣へり、今病すでに急なり、早く玄德を招き玉へ。陶謙げにもとて、人を小沛の城へ遣しければ、玄德數十騎にて來り玉ふ。陶謙床の邊に請じて申けるは、我老病すでに危して、朝夕も料がたし、君ねがはくは漢家の城池を憐で此國を保玉へ、然る時は老夫死して後も心安く目を塞ん。玄德の曰、君すでに二人の子あり、何ぞ此に讓り玉はざる。陶謙が曰、長子陶商、次男陶應、みな國を保の才にあらず、老夫が無らん跡にも必ず官を授玉ふな。玄德の曰、某不才にして爭か此國を治むる事を得ん。陶謙が曰、われ一人を薦て君の輔と成ん、必ずよく此人を用玉へ、北海の人に、孫乾字は公祐と云もの也。玄德再三辭し玉へば、陶謙又糜竺に向て、玄德公は當世の英雄なり、汝よく之に事よと云て、自ら其心を指し俄然として息絶ければ、諸人みな大に哭き、玄德を推て太守とす。玄德なほ許容無りしかば、徐州の百姓ことご

開きけるが、火焰甚だ盛にして、矢倉の上より柴薪を投下し、黒烟吹掩て目昏心迷て方角も知ず、典韋這々門の外まで出ければ、門の梁焼落て曹操が馬の後に横たはり、馬はどふと倒れけるを、曹操手を以て梁を撥のけしに、臂惨しく燒爛て、髭髯のこらず焦失たり。典韋は壕の邊にて夏侯淵に遇、共に蒐入て尋ね出し、夏侯淵自ら曹操を馬の上に抱きかゝへて走りければ、典韋前に進んで路を開く。呂布が大勢跡を慕て皆城外へ打て出ければ、曹操が救の勢踏止て攻戰ひ、直ちに殺して曉に至り、互に引て囘りけり。曹操萬死を出て本陣に囘りければ、諸大將みな慶をのぶ。曹操あざ笑て、我誤て匹夫の計に中れり、必ずこの恨を雪べしと云ければ、郭嘉が曰、計速に行はば呂布必ず擒と成ん。曹操が曰、人を呂布が陣へ遣して、我すでに燒死せりと云せなば、必ず來て此を攻べし、その時馬陵の山の内に伏勢を置、半途に出て討やぶらん。郭嘉しかるべしとて軍中に喪を發し、曹操すでに燒死玉へり、如何せんとて哭き哀ければ、此由忽ち濮陽へ聞えけり。呂布これを聞て大に喜び、さらば虚に乘て攻よとて、卽時に兵を引て出ければ、思も寄ず馬陵の山路を過る所に、鼓の聲地を動して、四方の伏勢一度に起り、散々に戰うたり。呂布が勢惨しく討れて、我先にと濮陽城へ逃こもり、此より日夜朝暮に兵を出して戰ふと云へども、墓々しき勝負もなし。今年は蝗四方に起て農民み

舞して大勢の中へ斬て入ければ、その鋒に當る者斬て落されぬは無りけり。高順、候成これに怖れ、却て城外へ逃出けるを、典韋追かけて壕の邊まで來り、曹操を見失ひしかば、取て回して突て入、李典に逢て、君は何くに在ぞと問に、李典申けるは、我も尋れども見え玉はず。典韋が曰、御邊は外に出て救の勢を催せ、我自ら尋ぬべしとて、只一騎大勢の中へ蒐入、左に突右に撞、又壕の邊に出けれども曹操を見ず、斯ては命生て何の面目あらんと獨言して、取て回して渦まいたる敵の中へ喚て蒐入、八方を拂て尋ぬれども曹操さらに見えず、暫く橋の爪に立て息つき居たる所に、樂進來て、君はいづくに居玉ふぞと問。典韋が曰、われ兩度まで蒐入て尋ぬれども見え玉はず。樂進が曰、われも行て尋ぬべしとて、二騎打つれて蒐入けるに、矢倉の上より鐵炮火矢を打出す事雨の如なりければ、樂進畏れて引退く。典韋は猶これにも怖れず、火の中烟の内とも云ず馬を飛して馳まはる。曹操は初め典韋を見失ひ、南門より出んとすれども叶ず、北門へ走りければ、火の光の中より呂布戟を舞して追かけ、曹操が盔をからりくと撃て、曹操は何くへか逃たると問に、曹操答て、あれに行黄なる馬に乘たるが曹操なりと云ければ、呂布信と思ひ、急に馬を馳て去けるゆゑ、曹操不思議の命を助かり、東門に走て典韋に遭。典韋大音あげて、南門は已に崩れたり、早く東門より出玉へと呼はり、先に進んで路を

第に城中へ退きければ、この紛に田氏が使城を出、曹操が陣に行て書簡を送る。急ぎ披て見るに、今夜の初更矢倉の上にて鑼を鳴時、早く兵を進玉へ、内より門を開んと記せり。曹操大に喜び、夏侯惇を左に備へ、曹洪を右に備へ、自ら夏侯淵、李典、樂進、典韋を引て、中軍を領じ、昏方に兵粮を使て、合圖を聞ば一番に入んと時刻を待。時に李典諫て申けるは、敵の計とも知ずして、將軍眞先に城へ入玉ふ事然るべからず、某まづ入て窺ひ見るべし。曹操怒て申けるは、われ自ら入ずんば誰かこの城を乘取もの有ん、無用の詞を出す事勿れとて、了に眞先にぞ進みける。已に初更の比に至て、月の光いまだ擧らず、合圖いまやと待ところに、俄に西の門に鑼を鳴し螺を吹て、喊の聲大に響き、火の手を擧て騷動し、門を開て橋を渡しければ、曹操すはやと云ほどこそ有、自ら一番に蒐入内の樣を伺ひ見れば、敵一人も見えず、さては計に落たり、早く出よと呼はる所に、一聲の鐵炮ひゞいて四方の門に火を掛、雨の降ごとく火炬を投落して、硫黃焰硝迸り、近付べき樣ぞなき。典韋は戟を提て曹操を助け出さんとするに、金を鳴し鼓を打て、東の方より張遼、西の方より臧霸喊を造て攻かゝる。曹操色を失ひ北門へ走りければ、又郝萌、曹性二手の勢打てかゝる。曹操慘しく討れて南門へ走りければ、又喊の聲を擧て高順、侯成が二手討て蒐る。典韋四方路なきを見て、目を怒らし牙を咬、鐵の戟を

外に伏勢を以て攻るならば、曹操いかでか脱るゝ事を得ん。呂布しかるべしと同じて、田氏を語ふに一儀にも及ばず、軈て書簡を送りける。曹操は敗軍を集めて計を議し居たる所に、忽ち濮陽城より田氏ひそかに内通の書簡を送り、呂布が悪逆人民みな恨む、今黎陽へ行て高順を留めて濮陽を守らしむ、速に推よせ玉へ、内より門を開て引入べし、矢倉の上に義の字を書たる旗を揚ば、是乃ち内通の合圖なりと云來れり。曹操大に喜び、是天の助なり、早く用意をせよとて、田氏が使を厚く賞して回しければ、劉曄諫て申けるは、呂布は計を知ねども陳宮よく計を用ふ、田氏が内應は必ず陳宮が計ならん。曹操が曰、さほどに物を疑はば必ず大事を誤らん。劉曄が曰、しかりと云ども用心なくては叶まじ、兵を三手に分、二手は城外に伏せて只一手を城中へ入玉へ。曹操これに從ひ、自ら一軍を領して濮陽城に推よせ、遙に城の上を望み見れば、色々の旗幟風に飜りて、西門の角なる矢倉に義の字を書きたる白旗ありければ、心の内深く喜ぶ、時に興平元年甲戌九月二十一日の事なるに、日すでに午の下りに至りける時、城中より門を開て大將二人打て出たり、眞先なるは侯成、うしろ備へは高順なり。曹操これを見て典韋出よと云ければ、典韋左右の手に戟を提げ、馬を飛して驀地暗に斬て入、侯成なじかは怺べき、散々に走りければ、典韋追掛て壕の邊に到る。高順後陣に支へて暫く戰ひ、次第次

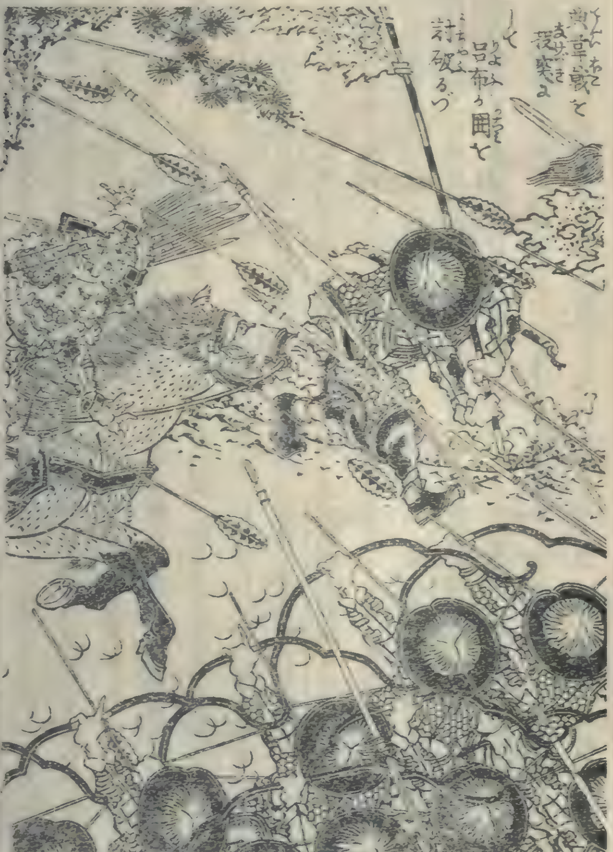
十騎を突ころす。敵の大勢その怪力に怖て肯て近付もの無かりければ典韋又馬に飛のり、八十斤の戟を舞して大勢の中を切ひらくに、呂布が大將も驚き怖て、皆途を開て通しける。曹操辛き命を扶り、兵も此彼より集りければ、路を來めて囘らんとする所に、日すでに西山に傾き、後より喊の聲起て、呂布赤兎馬に乘て追かくる。この時曹操、人つかれ馬倒て、口より烟を出して大息を吐折ふしなれば、如何せんとあきれ果たる所に、南の方より夏侯惇數十騎を引て尋ね來り、呂布を支て戰ひけるが、夜に入て俄に大雨ふりけるゆゑ相引に退き、曹操手負を扶け討死を數ふるに大半に及びければ、今日典韋なくては千に一も免れ難しとて、乃ち領軍都尉に封じける。

○陶謙再讓徐州

呂布大に打勝て濮陽城に囘りければ、陳宮申けるは、此處に田氏と云ものあり、家富で僮僕數百人あり、今田氏に計を行せて、密に曹操が方へ内通の書簡を送らせ、呂布惡虐無道にして人民こと〴〵く恨む、今自ら黎陽へ行て、濮陽には高順を留めて守らしむ、早く推よせ玉へ、内應すべしと云せなば、曹操信なりとして必ず來らん、那時城内に欺き入て四方の門に火を掛、

けれども、叶はずして走りければ、曹操膽を冷し、一命を扶らんと北を指て逃る所に、山の後より喊を喚と造て、一手の勢打て出、左に張遼右に臧覇、引包で餘さじと攻戰ふ。曹操殘り少に討れ、呂虔、曹洪に命じて防しむと云ども共に打やぶられて走りければ、我さきにと逃る所に、又向うより鼓の聲地を動して一彪の軍馬打て出、郝萌、曹性、成廉、宋憲四人の大將路を横ぎり、一人も餘さず打止んとす。曹操魂も身に付ず、相從ふ勢は大半亡ぬ、諸大將は皆跡に下りて敵を防ぐ、今は逃れぬ所と思ひければ、自ら眞先に進んで圍を出んとするに、一聲の梆子を鳴して敵矢を放事雨よりも繁し、此に依て後へ退かんとすれば敵の大勢競ひ蒐りて、四方の圍鐵桶よりも密し。曹操大音あげて、我いま討死すべし、誰か救ふ者あらんと呼はりければ、跡より大將一騎、左右の手に重さ八十斤に造りたる鐵の戟を二つ提げ、大勢の中を斬開て馳來る、是乃ち典韋なり。急ぎ馬より飛おり、某が跡に付て圍を出玉へと云まゝに、二つの戟を脇に挿て、別に短き戟數十本を手に持、敵近付事十歩ならば我に知せよとて士卒に命じ、自ら眞先に進んで盔の錣を傾け、雨の降ごとく射かくる矢を事ともせずして圍を破るに、呂布が兵五六十騎、これを射殺さんとて前に近付ければ、士卒大音あげて十歩にて候と告。又五歩にて候と告ける時、典韋首を振あげ、手に持たる戟を投突にするに、迯るゝ者もなく、矢場に數

曹操
典韋


典韋戟を投突よして
呂布ヶ圍を討破るづ

けるは、某山に登て望み見れば、濮陽の西に一つの陣屋あり、さまで大勢とは見えず、今日の勝軍に敵今夜は油断すべし、御方の勢を二手に分て夜討にし玉はば、是不意に出るなり、呂布必ず亂るべし、其時夾んで攻る程ならば、十分に利を得ん。曹操しかるべしと同じて、曹洪、李典、毛玠、呂虔、于禁、典韋を左右に備へ、二萬餘騎にて夜中に細路を廻て、敵に知せじと推よする。呂布は此日の戰に打勝て本陣に回りければ、陳宮申けるは、濮陽の西なる陣は御方第一の處なり、若敵に襲れなば大なる難儀に及ばん。呂布が曰、今日曹操散々に敗北せり、何ぞ再び來るべき。陳宮が曰、曹操は計多き者なり、若來て御方の備なきを攻ば、如何して防事を得ん。呂布これに從ひ、然らば用心あるべしとて、高順、魏續、侯成三人の大將を西の陣に向はしむ。この時曹操ひそかに山路を越て西の陣に攻かゝりければ、案に違はず防ぐ勢寡して敵四方に散亂せり。夜も四更の比に至て、高順、魏續、侯成大勢にて馳來り、陣屋を取返さんとて新手を入かへ戰ひければ、曹操大に驚き、力を震て防ぐ所に、夜すでに明方に及で、西の方に鼓の聲しきりに起る。此は何事ぞと問に、一人走り來り、呂布自ら御方の後へ廻れりと告ければ、曹操色を失ひ、陣屋を棄て走りけるを、高順、魏續等勝に乘て追蒐、呂布ゆく前を遮て討止んとす。此に依て曹操が勢討るゝ者數を知ず。于禁、樂進二人、呂布を夾んで戰ひ

聞きて呂布に告て申けるは、曹操が勢遠路を來て盡く疲たり、速に打向て攻やぶり玉へ、日數を延らば氣力を養ひ成て退け難からん。呂布が曰、われ匹馬天下に縱橫す、何ぞ曹操を怖るべき、彼が陣屋を造るを見ば、我推寄て蹴散さん。次の日曹操濮陽に陣を取。遙に敵の陣を望めば、呂布眞先に馬を出して、左に陳宮あり右に高順あり、八人の猛將その次に排列す。八人の大將は、面紫玉の如く目は朗なる星の如く、年二十歲にして鴈門馬邑の人に、張遼字は文遠、次に性烈火の如く體奔狼の如く、泰山華陰の人に、藏霸字は宣高、腰に鐵の棒を掛、手に槍を執て打出る。其次に郝萌、曹性、成廉、魏續、宋憲、侯成なんど云へる者共、威風凜々として、五萬餘騎の精兵鼓を鳴して鯨を造る。曹操その勢ひに氣を吞れて、心の內喜びず、大音あげて、我元より讐なきに何とて此の如なると呼はりければ、呂布答て申けるは、兗州は漢朝の城池、汝なにとて掠め取りたる、誰かある曹操を擒にせよと下知すれば、藏霸聞もあへず、鐵の棒を提て馬を出す。曹操が陣より樂進馬を馳出し、二人戰ひ三十餘合に及びける時、呂布が陣より張遼又打て蒐る。曹操急に夏侯惇を出して戰はしめ、時移るまで勝負の色わかれざりければ、呂布こらへ兼て戟を舞して打て蒐る。樂進、夏侯惇これに怖れて退きければ、呂布が五萬餘騎勢ひに乘て掩殺す。曹操散々に亂れて四十里退き、諸將と計を議するに、于禁申

からず、薛蘭、李封が分として安んぞ兗州を守る事を得ん、此より南の方百八十里に泰山の小路あり、究竟の要害なれば一萬餘騎の精兵を伏置、曹操が長途に疲て越る時、その半を討しめば盡く擒にせん、昔し韓信趙の國を攻んとて井徑の道を過る時に、李左車と云もの、趙の大將陳餘に告て申けるは、今韓信勢ひに乘て遠く戰ふ、その鋒あたるべからず、井徑の路は地甚だ險阻にして、車は軌を方る事能はず、騎は列を成事を得ず、推量するに、韓信この路を過る時、兵粮輜重必ず後陣にあらん、願くは我に精兵三萬を借玉へ、小路を廻て敵の半わたるを討ん、將軍よく壕を深し逆茂木を繁く引て、城に籠て出玉はずば、彼前んでは戰ふこと能はず、退いては還る事を得ず、野に掠る物なく兵粮に乏して、十日の内に必ず韓信が首を取んと云へり、然れども陳餘これを用ひずして、了に其身を滅せり、今日の事これに類す、半途を討て曹操が兵糧を斷んと云ければ、呂布答て曰、われ濮陽に出て別に良計あり、御邊が知ところに非とて、了に陳宮が計を用ず。曹操は夜を日に繼で路を急ぎ、已に泰山の難所を越んとする時、郭嘉馬を扣て申けるは、暫く進むべからず、此所に敵の伏勢ある時は由々しき大事なり。曹操笑て曰、呂布は計なき輩なり、此ゆゑに薛蘭に兗州を守らせ、自ら濮陽に陣を取、なんぞ此處に伏を置事を知んとて、曹仁を兗州に向はせて、その身は濮陽に赴く。陳宮この由を

へども、此處に暫く逗留ありて老夫が力を扶玉へ。滿座の人々みな一同に然るべしと勸ければ、玄德已事を得ずして此義に從ひ、酒宴はてて盡く退散す。趙雲暇を乞北平へ回らんと云けるを、玄德別を惜て又二日留めらる。孔融、田楷等みな國々に回りければ、趙雲も已に打立んとす。玄德この間禮待甚だ厚く、別に臨で捨ざるの情深かりしかば、趙雲地に拜伏し、某いづくに在とも君の顧戀の恩を忘じと云て、涙を流して去ければ、二千餘騎の兵も相從て回りけり。玄德は關羽張飛と小沛の城を守り、要害を堅固に構て、居民を懷て住り玉ふ。去程に曹操徐州を引拂て兗州に回りければ、曹仁半途まで出むかへて申けるは、呂布大軍を率して其勇あたる者なし、殊に陳宮、高順と云もの二人、よく計を用て手下に八人の猛き大將あり、此に依て御方みな戰ひ敗て、わづかに鄄城、東阿、范縣ばかりいまだ落ず。曹操笑て曰、量に呂布は勇あれども計なし、患るに足ぬ敵なり。郭嘉が曰、然れども君必ず敵を輕じ玉ふ事勿れとて、要害に陣を張て敵の樣を候はしむ。此時呂布は滕縣まで攻入けるが、曹操が來ると聞て急に薛蘭、李封と云ふ二人の大將を召て申けるは、汝二人一萬餘騎にて堅く兗州を守れ、我は自ら行て曹操を破るべしとて、已に手配を定ければ、陳宮この由を聞て、將軍この所を去て何くへ向ひ玉ふぞと問に、呂布答て曰、われ濮陽に出陣して鼎足の勢ひを成ん。陳宮が曰、然るべ

辭して申されけるは、我孔北海の勸に依て義の爲に來り救ふ、然るに却て人の國を受ば、天下の人必ず不義の名を呼ん。糜竺申けるは、今漢室衰て四海こと〴〵く亂る、功を立業を創事今日にあり、徐州は富饒の地にして戸口百萬、君この讓を受て辭し玉ふ事勿れ。玄德の曰、この事決して從ふ事能はじ。陳登申けるは、太守年老て病多く、事を治ること能ずして國を禪る、君必ず辭する事勿れ。玄德の曰、袁術は四代三公の家にして、天下の望この人に掛れり、今壽春にあり、何ぞ此國を讓り玉はざる。陳登が曰、袁術は人に傲て亂を治むる主にあらず、今徐州は精兵十萬、上は君を正し民を救ひ、下は地を畫て界を守るべし、君なんぞ受玉はざる。孔融傍に在て申けるは、袁術は塚中の枯骨、豈道に足んや、今日の事、天の與るを取ざれば後必ず悔あり、玄德公必ず辭し玉ふな。玄德肯て許容の色なかりければ、陶謙痛く哭き、玄德の手を執て申けるは、君もし我を捨て回り玉はゞ、我死しても目を塞ぐ事能はじ。關羽申けるは、太守此の如く禪り玉ふ、兄先權に國を受玉へ。張飛すゝみ出て曰、長僉議までもなし、太守の印を我に渡し玉へ、我これを領して兄を扶べし。玄德大に哭て申されけるは、汝等なにゆゑに我を不義に陷しめんとするぞとて、劍を拔て自害せんとし玉へば、趙雲急に止めて劍を奪ふ。陶謙申けるは、君もし讓を受玉はずんば、此より近き邑に小沛と云小城あり、分內は狹候

呂布を招き、大將として窃に濮陽より兗州に攻入しむ、此ゆゑに御方こと〴〵く破れて、纔に鄄城、東阿、范縣三つの城ばかり、荀彧、程昱二人が計を用ふる故にいまだ落ず、曹仁も毎度打負て戰ふ事を得ず、若救の勢遲き時は、兗州こと〴〵く敵の物と成ん、此に依て早馬を立ると語りければ、曹操以ての外に周慞し、兗州もし破なば我いづくをか家とすべきとて計を議するに、郭嘉申けるは、是なほ幸の折ふし也、劉玄德が和睦を乞を一面目にして早く囘て兗州を救ひ、天下の笑に逢事を免れ玉へ。曹操その義に從ひ、先返簡を調へて玄德の使を囘しける。其書に曰、

操累世名家、父遭荼毒、安得不報、故勒兵問罪于陶謙、欲圖族滅以雪大寃。玄德帝室之冑、才德兼全、特遣書來慰我天下之重、即日班師囘守。略此以聞、別圖後會。

その後曹操が大軍こと〴〵く退きければ、太守陶謙窮鳥の籠を出たる思を成て、喜ぶ事限なし。饗て孔融、田楷等を城内に招て、其外の軍勢を城外に宿を點じ、酒肴を送りて數日の勞を慰め、酒宴を設て玄德を高座に請じ、半酣に至て申けるは、老夫年衰て露の間も料りがたき命なり、殊に二人の子不肖にして國を保の才にあらず、玄德は帝室の宗親にして文武共に備れり、今より我に代て徐州の太守と成玉へ、我は心やすく閒居して老病を養ふべしと云ければ、玄德驚き

和て之に答へ、彼が心を怠しめて不意に兵を進め、其怠れるを討玉はば、城忽ち破るべし。曹操げにもと悟りて莞笑て申けるは、我立徳の自ら此に來て見えざるを怒る、然れども已に書簡を送て和睦を乞うへは、別の仔細あるまじとて、返簡を調へんとする所に、兗州より早馬打て急を告ければ、曹操大に驚てその故を問に、答て申けるは、呂布長安を沒落して、武關より出て袁術を頼しに、袁術本より呂布が詐多を知て肯て容ず、又袁紹を頼ければ、袁紹しばらく用ひて、乃ち大將として張燕を常山に破る、此に因て呂布己が強を特で袁紹が大將を小兒の如に輕んず、袁紹これを怒て偸に殺さんとしけるゆゑ、呂布のがれて張楊に倚、この時龐舒と云もの長安に在て、呂布が棄置たる妻子一族を密に送りければ、李傕、郭汜これを聞て了に龐舒を斬殺し、張楊が方へ書簡を送て、速に呂布を討て出せと云、呂布これに怖れて陳留に行、太守張邈が手下に屬す、此より先に張邈、弟の張超が薦に倚て陳宮を手下に用ふ、この時陳宮申けるは、今天下大に亂れて英雄双び起る、君千里の衆を領し、四戰の地に居して若志を立玉ふ時は、人傑と呼れ玉はん事掌を反よりも易し、何ぞ人の下にて膝を屈め玉ふべき、今曹操徐州に出て兗州守りの勢寡し、呂布は世に比なき猛將なり、今幸に來り頼む、暫くこの者を用て共に兗州を攻とり、天下の勢ひを伺て時の變に隨ひ、霸王の業を成玉へと勸む、張邈喜て

玉へ、老夫年六旬に餘りぬれば、露命朝夕をも料がたし、君は英名四海に聞えて眞に豪傑の才なれば、今より徐州の太守と成玉へ、我自ら表を上りて朝廷に奏すべし。玄德申されけるは、我朝廷に親族たりと云ども、功微に德薄して、平原の相だにも其職に稱ず、今孔融に勸られ義に仗て此に來れり、太守いかなれば浩る事を宣ぞ、我この國を奪んとする心ありと疑ひ玉ふか。陶謙が曰、我なんぞ疑ふ事有ん、此まことに本心なりとて、再三讓れども玄德さらに從ず、今曹操が大軍城を圍む、我先書簡を以て和睦を勸め、彼もし用ひずんば那時に打破らんと云て、肯て兵を動さず、使を出して曹操が陣に遣さる。曹操は諸大將を集めて計を議する所に、徐州の城より戰書を送れりと報じければ、大に笑て披き見るに玄德の書なり。其書に曰、

備自關外得拜君顏、各天一方、不及趨侍。向者尊父曹侯、皆因張闓之不仁也、陶恭祖乃誠實君子、聞知則肝膽皆裂、萬望明公俯察衷情、回百萬之雄兵、掃天下之大患、匡扶帝王、拯救黎民、乃社稷生靈之幸甚也。愿明公垂察焉。

曹操見了てその使を散々に罵り、玄德いかなる者なれば書簡を以て我を欺く、書中又われを譏意あり、先使の首を刎よと怒りければ、郭嘉ひそかに諫て申けるは、君怒を休王へ、玄德遙々と來て徐州を救ひ、今まづ和睦を勸るは、是禮を先にして兵を後にするの意なり、君亦言を

ければ、曹操が大軍四方より取こめんとす。張飛雷の落かゝるが如く、丈八の蛇矛を提て眞先に進み、大勢の敵を拂て路を開ば、其勇あたる者無して、皆中をあけて通しけり。進んで一つの役所の前を過んとする時、鼓の聲大に響て、數萬の敵軍潮の如くに渦まき出、大將一騎大音あげて、匹夫いづくへか逃る、快く勝負せよと呼はる、是乃ち鉅平の于禁なり。張飛大に怒り矛を舞して喚で蒐り、火を散して戰ひ、兩軍入亂れて喊の聲天地を動す。玄德雙股の劍を提げ、張飛に力を副て急に進み玉へば、于禁かなはじとや思けん、馬を拍て走りけるを、張飛追討に城下まで進む。城の中より、紅の旗に平原の劉玄德と書たるを見て、陶謙門を開きければ、玄德千餘騎を引て易々と城に入る。

○呂布大戰㆓濮陽㆒

玄德すでに徐州の城に入玉ひければ、太守陶謙その喜ぶ事淺からず、酒宴を設て持なし、熟玄德の爲ㇾ人を見るに、儀表俗を離て眞に世の英雄かなと思ければ、糜竺に命じて徐州太守の印を玄德に讓しむ。玄德以の外に驚て其故を問玉へば、陶謙申けるは、今四海ことぐく亂れて、帝王懦弱、姦臣權を專にして社稷危し、君は乃ち漢室の宗親、宜く力を盡して萬民を救ひ

し玉ふぞ。玄徳の曰、われ行時は戰を止て和睦せしめん。公孫瓚が曰、曹操いま己が強を恃む、爭か御邊の言を聽ん。玄徳の曰、われ已に必す救ん事を約せり、豈信に背んや。公孫瓚が曰、しからば我勢二千餘騎を借ん。玄徳の曰、ねがはくは大將趙雲を借玉へ。公孫瓚これを許しければ、玄徳喜て都合五千餘騎にて打起玉ふ。此時徐州には陶謙日夜攻られて、救の遲を憂る所に、糜竺回り、北海の孔融すでに兵を起し、又玄徳を語ひ來ると告ければ、大に喜ぶ所に青州より陳登も回りて、田楷救の勢を起と告たりける。去ほどに孔融、田楷が二手の勢すでに徐州の界に著けるが、共に曹操を怖て肯て近くは進み得ず、山に傍て陣を取。曹操も後攻の大勢來るを見て、急に城を攻ずして勢を分てこれを防ぐ。次の日玄徳五千餘騎にて孔融が陣に著ければ、孔融申けるは、曹操本智謀の深き者なれば、兵を用るに或は進み或は退き、輕々しくは戰はず、能敵の虛實を見て其後に事を行ふ、今戰を止めて聽も寄來らざるは、必す大なる計あらん。玄徳の曰、われ恐くは陣中に兵粮足ずして、久しく守る事能じと覺る也、關羽、趙雲二人に四千餘騎を付て此に留め、我は張飛と千餘騎を引て城に入、陶謙と力を合て內より討て出ん、必す外よりも揉あはせて攻玉へ。孔融この義しかるべしとて、田楷と左右に分れて陣を張、關羽、趙雲を中軍に備て兩邊を救しむ。玄徳は張飛と千餘騎をすぐりて曹操が陣を眞橫さまに馳通り

張飛玄徳に幅て曹操が陣を横行す
張飛

玄德

爲に糜竺を以て某に救を求むと語りければ、玄德の曰、われ元より陶謙を知る、まことに正實の君子なり、速に行て救ひ玉へ。孔融が曰、玄德公は漢室の宗親なり、曹操不仁にして百姓を殘害し、强を恃で君を欺く、今徐州を攻て一國の人を殺し盡んとす、聖人も見レ義不レ爲無レ勇なりと云り、君ねがはくは某に力を併せて、徐州の急を救ひ玉へ。玄德の曰、われ救事を辭するに有ねども、如何せん勢寡く力足ざれば輕々しく動がたし。孔融が曰、われ陶謙と一面の交あるを以て、滿城の錢粮を費し自ら行て急を救ふ、君は當世の英雄、豈仗レ義の心なからんや。玄德の曰、しからば太守まづ打向ひ玉へ、我は北平の太守公孫瓚に四五千の兵を借、跡を追て向ふべし。孔融が曰、さ候はば、君必ず約を違へ玉ふな。玄德の曰、太守われを如何なる人と思ひ玉へる、聖人も、自レ古皆有レ死、人無レ信不レ立と云り、我たとひ兵を假得ずとも必ず行て救べし。孔融大に喜び、先糜竺を徐州へ回して、兵を調て打立ければ、太史慈拜して申けるは、某老母の命を受、こゝに來て急を救ふ、幸に賊徒滅て外に慮る事無、いま楊州の刺史劉繇某と同郷なるゆゑ、書を以て頻に招く、行ずんば叶まじとて、暇を乞て回りければ、孔融金帛を與れども更に受ず、回りて老母に見え、又楊州へぞ赴ける。玄德は北平に行て公孫瓚に見え、徐州を救由を語り玉へば、公孫瓚が曰、御邊は曹操と寃なし、何ゆゑに人の爲に力を盡

賤人なり、今黄巾の餘黨兵を起して北海の城を圍む、太守孔融勢ひ孤にして救を求むべき所なし、君の仁義を行ひ、人の危を救ひ玉ふを知て、某を使とし頸を延て援を待、某只一騎大敵の圍を出、萬死を逃れて此に來れり、君ねがはくは察し玉へ。玄德大に驚き、孔北海も世に某が在事を知玉へるか、速に救べしとて、關羽、張飛と三千餘騎を率して北海城に向ひ玉ふ。賊の大將管亥後攻の來を見て、自ら勢を分て出向ひ、玄德の小勢なるを侮り、眞先に馬を出しければ、玄德大音あげて曰、逆賊首を落されんより何ぞ早く降らざる。管亥大に怒り、刀を舞して討て蒐れば、太史慈馬を出さんとするに、玄德の傍より關羽八十二斤の青龍刀を提て驀地暗に馬を飛し、數十合戰ひけるが、管亥なじかは敵すべき、只一刀に斬て落さる。太史慈、張飛これを見て、左右に分れて面も掉ず斬て入、縱横無碍に蒐たりしかば、賊軍大に亂れて馬の足を立かねたり。玄德鼓を打て、進めや兵と下知し玉へば、三千餘騎の兵轡を双べて短兵急に拉ぐ。孔融は矢倉の上より見るに、玄德の精兵猛虎の犬羊の群に入が如く、賊の大勢を八方へ蒐ちらしければ、四方の門を開て盡く討て出たるに、賊軍内外より揉立られて討るる者數を知ず、散々に成て落ゆきけり。孔融無レ限喜び、玄德を迎て城中に入、酒宴を設て持成、糜竺を呼出して對面させさせ、今徐州の太守陶謙、久しく曹操に攻られて事すでに急なり、此ゆ

郷に住けるを、時々米穀なんど送りて憐みける故とぞ聞えし。孔融甚だ喜び、馬物の具を與ければ、太史慈申けるは、賊軍いま四方を圍めり、某に千餘騎の勢を借玉はば、外に出て蹴散さん。孔融が曰、御邊が英勇まことに人に超たれども、敵は大勢なり、輕々しくすべからず。太史慈が曰、老母深く御恩を被り、某を以て太守に報ぜしむ、若この敵を退けずんば、某なんの面目ありて老母に見んや、命を失とも惜事候はず。孔融が曰、われ劉玄德は當世の英雄なる事を聞り、今平原の令たり、若この人の救を得て内外より攻るものならば、賊を破らん事掌にあり。太史慈が曰、太守いそぎ書簡を調へ玉へ、某圍を出て平原に行ん。孔融大に喜びければ、太史慈緊く鎧て馬にのり、腰に弓を掛手に槍を提て、只一騎門を開て出ければ、寄手これを見て、すはや城中より討て出るは、我先に高名せんとて、數百騎が程群り來るを、太史慈事ともせず、眞中へ蒐入て散々に戰ひ、蒐ぬけて走りければ、矢場に死する者三十餘人に及べり。賊將管亥城よりして出たりと聞て、自ら精兵を引て追蒐ければ、太史慈馬を留て矢種を惜ず射たりけるに、面に進んだる敵百騎あまり射落されて、手負たる者は數を知ず。賊軍大勢なれども、此に怖て追ざりしかば、太史慈やす〳〵と圍を出、平原に行て劉玄德に見え、書簡を呈して救を求ければ、玄德問て曰、御邊は如何なる人ぞ。答て曰、太史慈字は子義、東海の

討るゝ者數を知ず、我さきに城中へと逃こもる。賊軍四方を圍で攻る事急なりければ、孔融力を失て憂ひ苦む。糜竺は救を求る事は思ひ寄ず、我身さへ回る事能はねば、茫然としてあきれ居たり。次の日孔融矢倉に登て見るに、賊軍城を圍たる事鐵桶の如くなりければ、始終いかゞあらんと怖れ憂る所に、忽ち城外に大將一騎馬を馳て、手に長き槍を提げ、賊の大勢にかけ入て、左に突右に撞、人なき所を行が如く、直ちに壕の邊に來て門を開けと呼はりけり。孔融その勇猛なるに驚き、誰とも名字を知ざれば、容易に門を開かざる所に、賊軍跡に付て追來しかば、彼大將馬を引回して喚て蒐り、近付敵十騎あまり目の前に突殺して、猶大勢に斬て入、その勢ひ傑然として數萬の敵軍近付もの無、只遠矢に射すくめければ、孔融これ程の大將を無代に討せたらんは惜かるべしとて、精兵數百騎を出し、城戸を開て迎入しむ。その人内に入て槍を棄て再拜しければ、孔融これを見るに、身の長七尺五寸、髯美して臂は猿の如し。いかなる人ぞと問ば、答て曰、某は東萊黃縣の太史慈字は子義と申もの成が、昨夜遼東より家に回る所に、老母の申けるは、今黃巾の賊徒北海の城を圍で事すでに急なり、我太守の恩を受けたり、汝一人なりとも馳行て力を副よと申に依て、只一騎こゝに來れり、願くは命を捨て老母の爲に恩を報ぜん。是元來孔融久しく太史慈が英名を聞て、其母北海郡を離るゝ事二十里、都昌と云

は、魯國曲阜の人にて、孔子より二十代の的孫、泰山の都尉孔宙が子なり。この日賓客を集め酒を飲で居たる所に、徐州より糜竺と云もの使たりと報じければ、孔融自ら出迎へ、故人なにとて來り玉ふと云に、糜竺乃ち陶謙が書簡を出して救を求む。孔融が曰、われ陶謙と親き交を結ぶ、況や御邊自ら使たり、必ず兵を起して救べし、然れども曹操元より我と讐なし、又交る事甚だ厚ければ、一囘書簡を送て和睦を勸め、若順ずんば兵を起さん。糜竺が曰、曹操己が勢ひを恃で必ず和睦致まじ。孔融まづ諸將に命じて兵を集めさせ、又書簡を持せて曹操が方へ遣し、返答を聞て打立んとする所に、早馬急を告て、黃巾の賊の餘黨に管亥と云もの、十餘萬の溢ものを集め、今この城に推よせ候とて、上を下へ返しければ、孔融大に驚き、急に兵を引て打出るに、賊軍早城下まで來り、管亥大音あげて申けるは、我この城に兵粮多くある由を聞て、一萬斛借ん爲に來れり、速に借ば退かん、若異儀に及ば、城郭を踏破て一人も殘さず討殺さんとて、同音に喊を咄と造る。孔融大に怒り、我は乃ち漢の臣なり、漢の城を守て賊人に借兵粮あらんや、取れぬ物を取んとして二つなき首を失なと罵りければ、管亥馬を飛して討て蒐る。孔融が後より北海の名將宗寶と云もの、槍を撚て喚て蒐出、二人火を散して戰ひけるが、宗寶馬より下に斬て落されければ、孔融おそれ驚く所を、賊軍勢ひに乘て蒐出しかば、

れて相引に退きける。

○劉玄德北海解レ圍

曹操が三十萬の勢徐州の界に陣を取て勢ひ遠近に震ひければ、陶謙怖れ戰き、敵の勢ひ大にして戰ふべき樣なし、一國の百姓を滅さんよりは、我自縛して敵の手に渡らんと云けるを、一人すゝみ出て申けるは、太守久しく此國を治め玉ひて、人民こと〴〵く其恩を感ず、況んや曹操大勢なりと申せども、いまだ城中へは入らず、太守よく力を盡して堅く守り玉はば、某不才なれども計を用て曹操を破らん。諸人驚てこれを見れば、東海朐縣の人に、糜竺字は子仲とて、乃ち徐州の別駕從事なり。陶謙問て申けるは、汝如何なる計かある。糜竺が曰、某自ら北海郡に行て太守孔融に救を求め、又一人の使を青州へ遣して田楷に救を求め、此二手の勢を得て内外より夾んで攻ば、如何なる曹操なりとも退かでは叶まじ。陶謙大に喜び、誰か青州へ使せんと問に、廣陵の謀士に陳登字は元龍と云ふもの進み出て曰、某ねがはくは行ん。陶謙甚だ喜び、急ぎ書簡を調へて二人を遣し、自ら城を固く守て出で戰ふ事無りけり。曹操は急に破り難を見て、四方に向城を構、攻道具を調て徐州の勢ひを挫ぐ。北海の太守孔融字は文擧と申

んとす、汝は陶謙と好ありて我を斯あざむくかとて散々に詈ければ、陳宮默然として退き、我なんの面目ありて漢の官爵を受んやと云て、直に陳留へ行て太守張邈にぞ從ひける。去ほどに曹操が大軍の通る跡には、山に草木も殘さず里に雞犬もなし、往來の人も絕て燒野が原と成ければ、太守陶謙この由を聞て天を仰ぎ長嘆して、我罪を天に得たり、一國の人に斯る災を受しむと哭き、早敵の勢國中に打入て、人民を屠り草木をも止めずと云を聞て、張闓匹夫妄に慾に耽りて此禍を招き出せり、いかゞせんと議するに、大將曹豹申けるは、敵の勢近付たり、豈手を束て死を待んや、某打て出て之を防ん。諸人みな實にもと同じければ、陶謙已事を得ずして兵を調へて出向ふ。曹操は眞先に白き旗を二つ立て、曹嵩、曹德が名爵を記し、又大なる旗を二つ立て、報讐雪恨と書て、自ら馬を蒐出し淚を含で、汝等逆賊なにゆゑに我父を殺せると呼はりければ、陶謙馬を出して禮を施し、我本將軍と好を結ん爲に、張闓に命じて送らしむる所に、賊心改めず、財寶を貪て此の如し、我知事にあらず、願くは察し玉へと答ければ、曹操大に怒て曰、老賊わが父を殺して猶みだりに舌を動す、誰か出て擒にせん。夏侯惇きも敢ず、馬を飛して蒐りければ、曹豹槍を撚て火を散し戰ひけるに、俄に大風吹起て石を飛し沙を走らしめ、大木根より拔て虛空に飄り、立列たる旗共盡く倒れしかば、兩軍驚き亂

中へ隱れけるを、軍兵共搜し出して寸々にぞ斬たりける。應劭は防べき力無して、數十騎を引て冀州へ走り、袁紹が手に屬しければ、張闓こと／＼く財寶を取て寺に火を付、五百の人夫を引具して淮南へぞ走りける。その內に命を助りたる者一人兗州へ歸りて右の趣を告ければ、曹操哀み哭て地に昏絕す。夏侯惇たすけ起して申けるは、此は陶謙一人の爲ところ也、いそぎ罪を責玉へ。曹操齒を切て申けるは、我一族を殺せる讐いかでか報ぜざるべき、速に大軍を興して徐州へ推よせ、國中の人は云に及ばず、山林草木も殘さす平ぐべしとて、荀彧、程昱二人に三萬餘騎を付て鄄城、東阿、范縣の要害を守らせ、夏侯淵、于禁を先陣として三十萬の勢を起す。この時東郡の從事官陳宮は陶謙と交り深かりしゆゑ、曹操が徐州へ向ふ由を聞て大に驚き、急ぎ來て曹操に見ん事を求む。曹操昔の恩を思ひ、自ら出むかへて對面するに、陳宮申けるは、將軍いま大軍を起して徐州に向ひ、父の讐なれば一國の百姓をも盡く殺んとし玉ふと承はる、太守陶謙は正實の君子なり、强て事を行ひ利を貪る如の輩にあらず、必ず事の仔細を能聞玉へ、況や州郡の民は皆これ漢の百姓なり、將軍こと／＼く殺し玉はんは、不仁の甚だしき也、望らくは能これを思ひ玉へ。曹操怒て申けるは、汝むかし我を棄て夜中に去、いま何の面目ありて此に來れる、陶謙わが一家を殺せり、我誓て讐を報じ、奴が首を以て祭を成

せしめ、泰山の太守應劭を瑯琊郡へ遣して父曹嵩を迎しむ。曹操が父曹嵩は、陳留より難を遁て瑯琊郡に居たりしが、今曹操が迎を受て、弟曹徳と一族四十餘人、相從ふ者百餘人を伴ひ、車百餘輛に家の財寶を積で兗州を指て打起けり。爰に徐州の太守陶謙字は恭祖と申は、元丹陽の人にて溫厚正實の君子なり。曹操が山東に威を震ふ由を聞て、常に交を結ばんと思ふ所に、父曹嵩一族を引て徐州の境を通りければ、願幸也とて、自ら酒肴を舁せて出むかへ、二日が間止めて樣々に持成、都尉張闓と云ものに、人夫五百人を付て送らせける。曹嵩すでに華費と云ところに到り、時秋の初にて大雨俄に降ければ、傍なる古寺に宿を借、方丈に入て休けり。張闓は囘廊の内に休居けるが、五百の人夫みな雨に濕て怨ければ、夜に入て密に同志の者を語ひ、我は元來黃巾の餘黨なるが、是非なくして陶謙に從ふ、不レ如この財寶を奪ひ取て強盜入たりと披露し、曹嵩が一族を殺して山中に逃入、共に富貴を受んは如何あらんと云に、皆しかるべしと同じける。さらば速かに打入とて、三更の比雨風いまだ休ざるに、喊を造りて斬て入。曹嵩大に驚き、此は何事ぞと云時、兵すでに方丈に入ければ、弟の曹徳劍を拔て出けるが、一槍に突殺され、一族男女四十餘人、此彼に迷ひ慞て盡く斬倒さる。曹嵩は一人の妾を引て方丈の後へ走り、墻を超て逃んとすれども、妾甚だ肥ふくれて超る事能はざりければ、了に廁の

百人を引て來る。乃ち泰山鉅平の人に、于禁字は文則と云もの也。弓馬に達して武藝衆に超たれば、曹操用て點軍司馬とす。夏侯惇一人の大將を薦め來る、見る者驚ずと云事なし。身の長一丈に餘て、腕の力筋太く、眼さかさまに裂て百練の鏡を双べ、悪鬼羅刹も此には過じと畏れければ、曹操いかなる人ぞと問に、夏侯惇申けるは、この人は陳留の典韋と申もの也、始め太守張邈に事へしが、手下の大將と喧嘩をし出し、自ら數十人を殺して山中に遁る、某ある日獵に出て、此人の虎を追掛て大なる澗を超るを見付、直者ならずと存じて從へ來れり、力よの常に超て、常に使ところの武具は重さ八十斤に造りたる鐵の戟なるが、いつも左右に二本提て敵の中へ馳入、人を討事物なきが如し。曹操信なりとせず、さらば試んと云に、典韋二つの戟を執て馬を躍せ、水車に輪して上下馳騁飛が如し。曹操大に驚き、これ人間の態にあらず、眞に天神なりと云ける所に、折ふし大風吹て前に立たる大旗すでに倒んとしけるを、士卒數百人あつまりて倒さじと鬩けども、旗しきりに動ければ、典韋走り寄て士卒を盡く追のけ、片手にて旗桿を握るに少しも動事無りしかば、曹操その怪力を見て、古の悪來にも劣るまじとて、用て帳前の都尉とし、白地の錦の袍に鞍置たる名馬を與ふ。これより曹操が勢ひ山東に震ひ、青州の兵三十萬騎を領して兗州に陣をとり、河南の任峻字は伯達と云ものを用て兵粮を奉行

封ず。姪は荀攸字は公達、智謀衆に超たり。昔し何進に從て黄門侍郎と成し者なり。曹操用て行軍教授とす。此より日夜兵法を論じて少しも倦事無りしかば、荀彧申けるは、劉岱が内に一人の賢人あり、其才大に世に秀たり、劉岱が没落の後は、其人の行衛を知ず、東郡東阿の人にて、身の長八尺三寸、程昱字は仲德と申もの也。曹操が曰、われも久しく其名を聞りとて、人を遣して尋させければ、果して山中に書を讀で居たり。曹操禮を厚して招きければ、程昱つひに來り事へ、荀彧に向て申けるは、某は孤陋にして寡聞の人、いま御邊の薦を被る、御邊の鄕に一人の大賢人あり、何とて之を薦め玉はぬぞ。荀彧が曰、いかなる人ぞ。程昱が曰、陽翟の郭賀字奉孝なり。荀彧驚て曰、われ此を忘居たりとて、曹操に告て禮を備へて招せければ、郭賀つひに來り事ふ。曹操共に天下の事を論じて無レ限喜び、我に大事を成しむるは必ず此人ならんと云ければ、郭賀も人に語て申けるは、われつねに善主を得て事へん事を願ひしに、今まことの君を得たりとて、又一人の賢人を薦め出す。乃ち光武帝の嫡流に、劉曄字は子陽とて、淮南成德の人なり。智勇共に備りたれば、曹操喜て甚だ重ず。劉曄又二人を薦む、山陽昌邑の人に、滿寵字は伯寧、武城の人に、呂虔字は子恪なり。曹操元より二人の名を知たれば、用て軍中の從事とす。滿寵又一人を薦む、陳留平丘の人に、毛玠字は孝先なり。或時一人の大將數

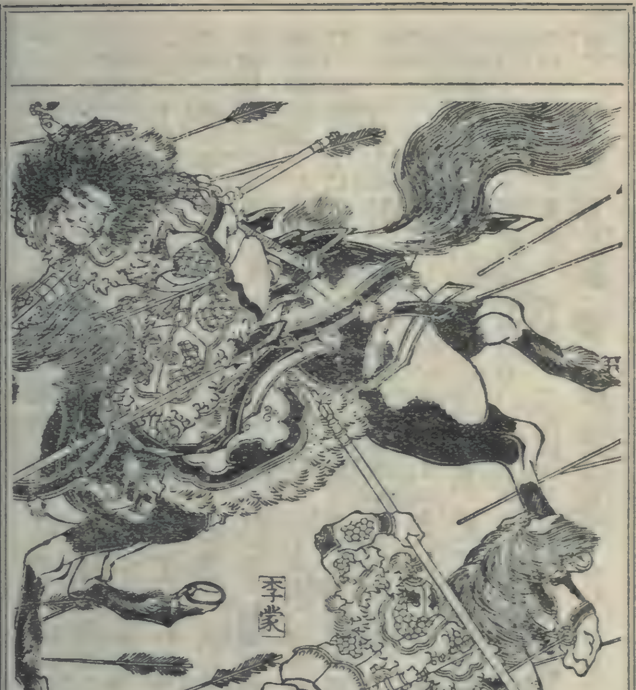
此ころ青州に黄巾の餘黨蜂起して人衆百萬を集め、兗州の太守劉岱を追出して在々處々を放火し、人の財寶を掠とる。此より州郡騷動して早馬日々に急を告ければ、李傕、郭汜一處に集り、誰をか討手に向んと議するに、朱儁申けるは、山東の蜂起を靜ん事、曹操ならでは叶まじ。李傕が曰、曹操いま何くにかある。朱儁が曰、楊州に兵を集めて濮陽に賊を破り、于毒を武陽に攻、匈奴を内黄に擊、凡そ戰ふ毎に勝ずと云事なし、今東郡に在て大軍を集む、早く使を馳て兗州の太守に封じ、山東の亂を平げしめ玉へ。李傕この義に從ひ、詔を申し下して曹操を東郡の太守に封じ、濟北の相鮑信と一同に賊を伐しむ。曹操これに依て鮑信と計を合せ、賊と大に壽陽と云ところにて戰ひ、鮑信は深入して討死す。曹操は戰ふ毎に打勝て追討に濟北まで攻付しかば、賊軍降る者數萬人、やがて此勢を先手として、到る所勝ずと云事なく、百日を過ざるに降る者三十萬に及びければ、百萬餘人の男女を懷て、其内屈強の者を擇で青州の兵と號し、其餘の百姓には皆屯田をせさせける、時に初平三年冬十二月。賊徒ことごとく滅たる由長安へ奏しければ、李傕詔を申下して曹操を鎭東將軍に封ず。曹操表を上て恩を謝し、兗州に在て賢人を招きければ、一番に叔姪二人きたり事ふ。乃ち潁州の人にて、叔は荀彧字は文若、時に年二十九歲、人みな王佐の才と稱す。曹操大に喜び、是わが子房なりとて行軍司馬に

讒言して有もあらぬ事迄も告たりしかば、李傕大に怒り、兵を起して樊稠を伐んとす。賈詡諫て申けるは、今人の心安からざるに、頻に兵を動す事然るべからず、必ず禍を招く端とならん、不ㇾ如勝軍したる喜と號して、酒宴を設て張濟、樊稠を招き、席上にて生捉玉へ。李傕これに從ひ、二人を招て持成、酒宴半に及て、近ごろ韓遂が方より書簡を以て、樊稠が謀反の心ある由を告來れりと云ければ、樊稠大に驚て答んとするを、武士共首を斬落しけり。張濟も驚怖て地の上に拜伏しけるを、李傕扶起して申けるは、樊稠ちか比韓遂と內應す、我この故に斬殺せり、御邊は我心腹の人、なんぞ疑ふ事有んや、樊稠に從ひし勢も、御邊一手に合せて領せらるべしとて、酒宴數刻に及んで相わかる。李傕、郭汜すでに西涼の勢を破りし後は、國の諸侯みな己が境を守て兵を起もの無りしかば、乃ち賈詡を尙書僕射に進めて國の政を行はしむ。賈詡又より〳〵諫て、仁德を行ひ天下の賢を用ふべき由を申ければ、李傕、郭汜これに從て少し惡虐を止ける故、朝廷しばらく靜に、獻帝の宸襟も少し安き事を得たり。賈詡字は文和、武威姑藏の人にて智謀世に超、後に曹操が臣となる。

○曹操興ㇾ兵報ニ父讐一

首を斬て寄手の陣へ投出しければ、事の難儀に成ぬ先に退くべしとて、陣屋を收て回んとす。李傕、郭汜これを聞て、さらば追討にして一人も洩さず討止んとて、張濟を大將として馬騰を追せ、樊稠を大將として韓遂を追しむ。張濟兵を引て飛が如に追蒐しかば、馬騰動すれば取て回して戰ふと云ども、大勢の引立たる勢なれば、我先にと落ゆいて散々に亂れけり。馬超この體にては御方盡く討れぬべし、此にて一防ふせぐべしとて、只一騎取て回し、大勢の中へ喚て蒐入、近付敵四五十騎討取ければ、張濟これに畏れてその後は追ざりけり。樊稠は韓遂を追蒐けるが、陳倉の邊にては早追付んとする時、韓遂馬を回して申けるは、御邊と我と元同郷の友なるに、何とて情なく追玉ふぞ。樊稠馬を駐めて申けるは、これ君の命なれば私すべからず。韓遂が曰、天地反覆誰が身の上も知がたし、我この度軍を起も國の爲なり、我と御邊とは同國の故人、いま隔るとも後又會せん、萬一心に諧ざる事有ば、那時いかゞして對面し玉はんと云ければ、樊稠これを聞て如何思ひけん、二人馬を双べて暫く物語して回りける。爰に李傕が姪に李別と云ふものあり、日頃樊稠を恨る事有て不和なりしが、韓遂を追ずして物語したる由を聞、すはや究竟の事出來たりと喜び、李傕に

馬超王方を討て李蒙を生捉
馬超
王方


李蒙

へ。張濟、樊稠二人、長安の西二百里に盩厔と云所あり、山路嶮岨にして第一の要害なり、早く行て此を固め玉はば、敵自ら走るべしと云ければ、李傕、郭汜大に喜び、張濟、樊稠はよく難所を守れ、李蒙、王方は一萬五千餘騎を引きて一先出て戰へと許す。李蒙、王方勇み喜び、二百八十里西に出て敵の來るを待に、西涼の勢二手に分れて推よせ、馬騰大音あげて誰か反逆の賊を擒にせんと云に、傍より年わかき大將一騎蒐出たり、面は琢玉の如く眼は流星のごとし、虎體猿臂、扶風茂陵の人に、馬超字は孟起とて、乃ち馬騰が嫡男にて時に年十七歳なり。手に長き槍を提げ、馬を躍らして出ければ、王方これを見て其年わかきを欺き、槍を交て二三合戰ひ、馬より下に突落さる。馬超その首を取て徐々と回りければ、李蒙大に怒り、槍を撚て追來るを、馬超しり目に眄て、李蒙が突槍を頭を下て之を避、引組で鞍の上に壓つけ、脇に夾で回りければ、賊軍みな怖れ戰く。馬騰これを見て大軍一度に蒐りしかば、散々に成て走りけるを、追打に進んで谷の口に陣をとる。李傕、郭汜この由を聞て、今さら賈詡が先見の明あるを信じて、此より諸處の要害を守り、一人も出て戰ふ事無りしかば、是にこそ寄手の勢は徒然に忍かねて盡く退屈し、軍を休て二月ばかりも過ければ、兵粮につまりて兵みな飢にのぞむ。斯ては叶ふまじ暫く本國に回りて時を待んと議するに、内應を頼たる侍中馬宇が下部、回り忠

○李傕專權殺樊稠

李傕、郭汜は、天子を挾で萬づ心の儘に政を行ひ、逆威を逞して朝廷に横行し、朱儁を太僕に進め、天子の傍に人を付て、若己に順ざる者あれば盡斬ころす。此に依て天子より百官に至るまで、震ひ怖て針の席に坐するが如し。かゝる所に、漢の伏波將軍馬援が後胤に、西涼州の太守馬騰字は壽成、幷州の刺史韓遂と云ものを語うて、密に長安へ使を上せ、侍中馬宇、諫議太夫种邵、左中郎將劉範三人を頼で、李傕、郭汜を伐んと奏しければ、帝乃ち馬騰を征西將軍に封じ、韓遂を鎭西將軍に封じ玉ふ。此に依て十萬の勢を興し長安へ攻上りければ、李傕、郭汜大に驚て計を相議するに、謀士賈詡が申けるは、今敵の勢遥々と上て、好ところは急に戰を決するにあり、若要害を固て日を送らば、敵の勢百日より内に兵粮盡て自ら亂れ去べし、那時追討に討ほどならば、馬騰、韓遂手捕にすべし。李蒙、王方二人すゝみ出て曰、いや／＼この計しかるべからず、精兵一萬餘騎を借玉はば、我等罷出て打やぶらん。賈詡が曰、今もし戰はば御方必ず破れん。李蒙が曰、われ等この軍に負ば必ず首を斬玉へ。賈詡が曰、御邊二人もし打勝て回り玉はば、必ず我首を獻らん、強て向はんと思ひ玉はば心の儘にし玉

悪虐を放にせしかば、天子勅を下して問玉ひけるは、王允すでに滅たり、何とて兵を退けざる。李傕答て申けるは、已に讐を報ずと云どもいまだ恩賞を蒙ず、此に依て退くことを得ず。天子勅して宣ひけるは、汝が望に任せて如何なる恩賞をも與ふべし。李傕乃ち所望の官位を書て奏しければ、天子已事を得ずして李傕を車騎將軍池陽侯に封じ、司隷校尉を兼て天子の節鉞を假、郭汜を後將軍に封じて、二人に天下の政を攝しむ。また樊稠を右將軍萬年侯に封じ、張濟を驃騎將軍平陽侯に封じ、二人兵を引て弘農に陣を張しむ。その外李蒙、王方も校尉の職に封ぜられければ、李傕、郭汜等、これより逆威を振ひ、董卓が死骸を尋ねて、此彼より些ばかりの皮と骨とを拾ひあつめ、沈香の木を以て像を造り、大に祭を設け功德を作り述て、王者の禮を以て郿塢に葬り、其華麗なる事善盡し美盡しけるが、さしも快き天氣俄に大雨車軸のごとく、雷電鳴はためいて平地水深き事五六尺、董卓が柩を震ひ出して、木像皮肉こと〴〵く微塵になる。此に依て又吉日を擇で厚く葬るに、其夜も初の如く震ひ出しけり。此の如く三度あらため葬るに、皆雷神に摑み出されけるこそ不思議なれ。餘りに君臣を惱し、人民を苦めたる董卓なれば、天地神明も容玉はぬにやと、身の毛も彌竪事共なり。

稷の臣なるを、王允みだりに計を設て之を殺せり、臣等この讐を報ぜん爲に此に來る、豈謀反の心あらんや、王允を出して渡し玉はば、忽ちに退き回らん。王允これを聞て天子に奏して申けるは、臣本社稷の爲に計を成て、事すでに此に至れり、今は臣を惜ませ玉ふな、臣ねがはくは賊の手に渡りて國の禍を宥すべし。天子御涙を流してさすがに棄がたく思し食、兎角の仰も無りければ、王允自ら宣平門の樓より跳り出、王允こゝにあり、逆賊は何くに居と呼はりければ、李傕劍を拔て走り寄、大に責て申けるは、董太師いかなる罪ありて汝計を以て殺したるぞ。王允大音あげて曰、董賊が惡逆天に彌り地に漫る、其誅せらるゝ日、長安の人民みな慶び踊て舞謠へり、天下たれか知ざらん。郭汜怒て申けるは、太師の罪はあらばあれ、我等なんの罪ありて、赦免を乞ども許さず盡く誅せんとはしたるぞとて、李傕と共に劍を拔て司徒王允を寸々に斬り、一族數十人こと〴〵く市に出して殺しければ、長安の人民老たるも若きも、涙を流して哀けり。李傕、郭汜、さらば此勢ひに乘て天子をも討殺せとて、二人劍を提げて入んとしけるを、張濟、樊稠諫て申けるは、今日もし天子を殺さば、恐くは天下の諸侯從ふまじ、先しばらく天子を助け置て、勅使を立てゝ國々の諸侯を召のぼせ、一人も殘らず殺しなば、是その手足を除なり、天下自ら我等に屬せん。李傕、郭汜げにもと同じて兵を城中に屯し、

難して、殘りなく討れければ、靑瑣門外に馬を立て王允を召出し、賊の勢すでに都に亂れ入候へば、今はいかに思し召とも叶まじ、早く馬に乘て落玉へ、伴ひ奉らんと云に、王允申けるは、漢の運いまだ盡ずば、宗廟社稷の擁護の力を借て、國家を再び安んずべし、事もし協はずんば、我身を死して朝廷に報ぜん、天子御年幼して、偏に我一人を賴玉ふ、難に臨で苟も命を惜事は我せざる所なり、只ねがはくは關東の御方に、忠を盡して君を助よと云つたへて玉はれとて、淚を流して立ければ、呂布せん方なく後を見るに、早門々に火かゝりしかば、事急にして妻子一族をも打棄、百騎ばかりにて敵の圍を破、關東を指て落ゆき、南陽の袁術を賴でぞ居たりける。去ほどに賊軍四方より打入て、火を放ち人を殺し、家々に推入つて財寶を掠とり、官女妻子を是非なく奪ひ取て白晝に姦婬す、前代未聞の惡行なり。太常卿种拂この狼藉を見て、命生て何かせんとて、下部共四五人を引て切て出、みな南掖門の傍に射殺されしかば、太僕魯馗、太鴻臚周喚、城門校尉崔烈、越騎校尉王頎四人も打て出て、國の爲に身を滅す。賊軍內裏を圍で內庭まで亂れ入ければ、近臣みな天子を宣平門に出御なし奉る。李傕、郭汜等、黃蓋の出るを見て天子なりと知ければ、一度に萬歲を唱けるに、天子樓に依て勅問ありけるは、汝等詔をも受ず、何とて私に兵を起して都へ入たる。李傕上を仰で奏して曰、董卓は陛下社

めて打立ければ、李傕兵を進めて戰を催す。呂布勝に乘て驀地暗に打て蒐り、喚き叫で戰ひければ、李傕が勢捲り立られ、退て山に上る。呂布これを追て登んとするに、上より大木大石を投る事雨よりも繁ければ、急に退かんとする時、思も寄ぬ後より、喊を咄と擧て郭汜が勢打てかゝる。呂布驚て之を拒んとすれば、鼓の聲大に響て郭汜が勢は引退き、李傕金を鳴し鑼を皷て潮の湧が如に打て蒐る。呂布又取て囘して戰はんとすれば、鼓の聲大に響て李傕つひに引退き、郭汜金を鳴して後より攻る。此の如く晝夜旦暮に時を定めず推よせ、左を拒がんとすれば右を討、右を救んとすれば左より蒐り、十日あまり惱しければ、呂布心疑て氣力疲れたる所に、長安より早馬打て、張濟、樊稠二手に分れて都を攻るに、官軍小勢にて防事能はずと告ければ、呂布色を失ひ、軍を收めて都に囘んとす。李傕、郭汜これを聞付、勝に乘て追掛ければ、呂布が勢討るゝ者數を知ず、大半は降參しける故、賊軍いよ〳〵勢ひを得て、長安城を百重千重に取卷、生手を入替々々攻たりける。呂布これに氣を落し、敵の圍を蹴散して入んとするに、俄に賊の聲を擧て手下の勢みな盔を卸で李傕に降る。已に圍れて七八日を經ければ、官軍次第に弱るを見て、始め董卓に從ひし李蒙、王方と云もの二人、城中に在て門を開て敵を引入しかば、是より破れて賊軍都に亂れ入。呂布わづかなる勢を引て、打入敵を支へけるが、大敵淩に

ては、一番に討れんと思ふ也、不如身近き者共を引具し、金銀を取あつめて何方へも落ゆき、心安く一期を暮さんは如何にと云ければ、胡赤兒しかるべしと同じて、密に三四人相つれて夜中に忍び出て走りけるが、路に一つの河あり、此を渡らんとする時、胡赤兒俄に刀を拔て牛輔が首を討落し、金銀を奪ひ取て直ちに呂布が陣に行、胡赤兒と云者牛輔が首を取て降人に出と報じければ、呂布喜んで手下に用る所に、金銀を貪て主を殺せる由を告る者ありければ、遂に引出して斬て棄させ、敵の陣に攻近付。李傕この由を聞て大に驚き、自ら兵を引て打出ければ、呂布戟を舞して大勢の中へ討て入、左に突右に撞、勇を震て戰ひしかば、西涼の勢みな馬の足を立かね、慘しく討れて五十里退て山の傍に陣をとる。郭汜、張濟、樊稠等、こと〴〵く一處に集て如何せんと議しければ、李傕申けるは、呂布が勇猛あたり難しと云ども、元來智謀なき者なれば畏るゝに足ず、我一軍を引て谷の口を固め、毎日彼を欺て矢軍にて日を送るべし、其間に郭汜は密に呂布が後へ廻り、日夜兵を出して昔彭越が楚を攻たりし法に效ひ、金を鳴しては兵を進め、鼓を鳴しては兵を退け、敵の心を驚き疑はしめば、呂布前後に度を失はん、張濟と樊稠とは二手に分れて却て長安を襲ひ玉へ、呂布これを聞ば必ず大に亂るべし、我その時四方より追討に進まば、長安を破らん事掌の內にあり。諸人みな計を受、手配を定

大に驚き、董卓をこそ殺し玉ふとも、百姓なんの罪ありて盡く殺さんと宣ふぞ、同く死なば、思ふ程戰うて死かしと云て、元よりこの國武勇の勝れたる國なれば、日夜引も斷ず馳あつまりて、半月にも及ばざるに十萬餘騎にぞ成たりける。李傕大に喜び、さらば時を運さず攻上れとて、四手に分て進む所に、路にて董卓が婿に中郎將牛輔と云もの、五千餘騎にて加りければ、先陣に備て、勢ひ彌大なり。王允この由を聞て打驚き、呂布を呼で計を議するに、呂布笑て申けるは、少しも御心を苦め玉ふな、某この鼠の輩を討事は、手を反よりも易しとて、李肅と兵を引て出向ふ。李肅先陣を望んで眞先に進み、牛輔が勢と戰うて散々に打やぶり、敵を討事數を知ざりければ、勝に乘て油斷する所に、思もよらず、其夜牛輔俄に夜討して四方より攻たりしかば、李肅悽しく討れて三十里引退く。呂布大に怒り、汝無用の軍をして御方の弱りを仕出せりと云て、引出して首を斬、軍門に曝ければ、諸軍みな呂布が法度の劇しきを畏れ、常に己が武勇を頼て人を恤まず、妄に士卒を鞭打けるゆゑ、軍中みな心變じて離れ去んとする者多し。次の日呂布自ら出て戰ひければ、牛輔なじかは敵すべき、一支も支ず散々に打負て、討るゝ者大半に及べり。其身も數箇所瘡を被て、這々命を扶りければ、夜に入て大將胡赤兒と云ものを密に召て申けるは、呂布が英勇天下に敵する者なければ、我この陣の先手に在

○李傕郭汜寇長安

董卓に從ひし四人の大將、李傕、郭汜、張濟、樊稠は、三千餘騎にて陝西の方へ逃下り、長安へ表を上て赦免をぞ求ける。司徒王允申けるは、今逆賊すでに滅たれば、天下に大赦を行るべけれども、元來董卓が惡行は、この四人の者共が助に依り、罪の張本を赦免あらば、向後の狼藉止べからず、盡く誅すべしとて、曾て恩許の沙汰なかりければ、李傕この由を傳へ聞、斯ては叶まじ、人々の手勢を早く捨て、獨身にして何方へも落ゆき、命を完するより外は有まじと云けるを、賈詡と云もの諫て申けるは、今四人の人々兵を捨て此彼に落行玉はば、一人の亭の長も綁捕ん、誰か又落人よとて見とがめざるべき、不如偏に討死と志して陝西の勢を催し、長安へ攻入て董卓の爲に讐を報じ、事濟時は天下を正し、事濟ざる時は那時いづくへも落行玉へ、迚も遁れぬもの故に、由なき恥を曝し玉ふなと云ければ、四人げにもと同心して、西涼州に流言し、王允この國の民を盡く殺さんとすと沙汰しければ、國中の人民これを聞て

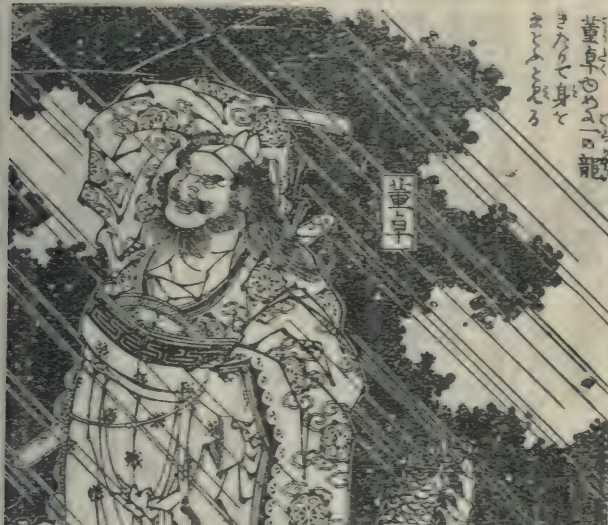
を滅し典を廢せば、豈よく久しからんやと私語けるが、王允程なく三族を滅されけるこそ不思議なれ。蔡邕其後獄中に縊殺されしかば、當時の士大夫みな涙を流して惜ずと云もの無。嗚呼蔡邕不世の才を懷き、董卓が屍に哭て自らその不善を知、これ始より誤て董卓に事し故なり、王允つひに之を殺せる亦非なりとせず、然る時は凡そ士大夫は、よく其主を擇で事べき者なり。

哭者ありと告きたる。王允怒て申けるは、長安の士民こと〴〵く慶び踊るに、何ものなれば此の如くなる、急ぎ搦て參れと下知しければ、武士共須臾にして捕きたる。諸人これを見るに侍中蔡邕なりければ、滿座みな大に驚く。王允色を變じて申けるは、董卓は國の大賊、すでに漢の天下を滅さんとせり、汝は世々漢の祿を食ふ、力を盡し志を合せて逆臣を討んとは思はずして、剰へ屍を抱て哭は何事ぞと責ければ、蔡邕罪に伏して申けるは、某不才なりと云へども猶大義を知、古今の安危耳厭まで聞知れり、豈國に背て賊に向はんや、狂瞽の辭謬て口より出たり、身不忠なりと云ども、ねがはくは首に黥せられ、足を刖れて漢の史記を續成んと云ければ、滿座の公卿みな蔡邕が才智を惜み、努て科を申し宥め、太傅馬日磾、ひそかに王允に向て曰、蔡邕は曠世の逸才、多く漢の故事を知れり、當に漢の史記を造らせて、一代の大典と成玉へ、彼素より天下に忠孝の名を得たり、今わづかなる罪を以て之を殺さば、世の人これを議論せん。王允首を掉て申けるは、昔し漢の武帝、司馬遷を誅せずして了に史記を作らしめ、謗を後代に得玉へり、況や今國祚すでに衰て戎馬郊にあり、浩る佞臣に筆を執せて幼主の左右に居しめば、既に聖德に益なく、必ず後代の訕を得んと云ければ、馬日磾言なくして退き、傍の人に向て、王司徒の所爲の如んば、其子孫必ず滅ん、善人は國の紀、制作は國の典なり、紀

涼州へ落下れり。呂布一番に城中に入て、先貂蟬を取て長安に上せければ、皇甫嵩申しけるは、此内に良家の美女八百人あり、其餘はこと〴〵く董卓が一族なれば、一人も餘さず斬殺さんとて、老小を分たず當るを幸に斬て廻る。董卓が老母年九十に餘りけるが、内よりよろめき出て、我一命を扶け玉へと云も果ざるに、首は地へぞ斬落しける。一族誅せらるゝ者男女千五百餘人、庫内に貯たる黄金二三萬斤、白銀八九萬斤、錦繡綾羅珠翠珍寶、山の如く積で數を知ず、倉中の米八百萬石、王允これを半百姓に施して、半は官庫に藏めしむ。董卓を殺したる日より、日月の光も初て明に微風も起らず、其屍を大地に曝しけるに、餘りに身の肥脹たるを見て、諸の兵共臍の内に火を燃しければ、膏流れて地に滿、光明暁まで絶ざりけり。四方の民きたり集て、董卓が首を取て、あら惜やと云て地に投、つひに微塵にぞ碎きける。城内城外の百姓、老たるも若きも、遠き者は聞傳て喜で雀躍し、手を打て舞謠ひ、或は家乏き者は衣裳を賣、酒を沽て慶をなし、今夜より心安く夜を寐んとぞ申ける。董卓が弟の董旻、兄の子董璜二人も、手足を斬て市に曝され、李儒は大地に縛れけるが、四方軍民日比の恨を雪んとて、爭うて其肉を一口づつ啖て了に殺せり。門下に阿り諂ひし者共も、盡く獄中に殺されて後、王允太平の酒宴を都堂に設て、百官を集め慶を述る所に、何者やらん董卓が屍を抱て

庭に入ければ、王允、黄琬等劍を執て殿門に立。董卓これを見て大に驚き、彼等が劍を持たるは如何なる故ぞと問に、李肅急に車を推ければ、王允大音あげて、逆臣來れり、武士共出よと呼はる程こそあれ、屈強の精兵百餘人走り出て、戟を以て董卓を刺。董卓兼て身に鎧を被たるゆゑ少しも透らず、臂を突れて車より落、呂布は無か、是扶よと叫びければ、呂布後より跳り出、勅命を受て逆賊を討と高らかに呼はり、戟を取て董卓が喉を突洞しければ、李肅その首を斬て指擧たり。呂布右の手に戟を持、左の手に詔書を開き、大音聲を擧て、天子の詔に依て逆臣董卓を誅し畢れり、其餘は罪なし、こと〴〵く宥し玉ふと呼はりければ、内外の將吏、同音に萬歲を唱て拜伏す。董卓この時年五十四歲、漢の獻帝初平三年壬申四月二十二日なり。呂布が曰、つねに董卓が惡行を助けて、天下を亂りし者は李儒なり、誰か行て搦捉ん。李肅すすみ出、われ願くは行んとて兵を調る處に、俄に門外もの騷しかりしかば、何事ぞと問に、李儒が下部共すでに李儒を縛て出し候と申す。王允申けるは、董卓が一族こと〴〵く郿塢にあり、誰か行て誅滅せん。呂布が曰、某ねがはくは行ん。王允しかるべしとて、李肅、皇甫嵩を相添て五萬餘騎にて下らしむ。元より郿塢城をば、董卓が四人の大將に李傕、郭汜、張濟、樊稠と云もの三千餘騎にて守りけるが、董卓すでに都にて討れて、官軍大勢にて向ふ由を聞、つひに

乘たる馬しきりに嘶て駭騰り、其轡を掣切ければ、董卓怪んで問て曰、車輪を折馬轡を斷、これいかなる故ならん。李肅答て曰、太師いま帝位に卽玉ふ、是舊を除て新に代る也。董卓喜て、汝が云ところ甚だ明なりとて、次日俄に大風吹て霧深く立蓋ひ、天地濛々たりしかば、是いかなる祥瑞ぞと問に、李肅答て、主上いま九五の龍位に登り玉ふ、紅光紫霧の賀瑞を顯して、天より慶を助るならんと云ければ、董卓喜斜ならず。已に長安に著ければ、百官門外に出迎へ、王允、黃琬、淳于瓊、皇甫嵩等、道の傍に拜伏して臣と稱し、明日未央殿にて御受禪あるべしと申す。董卓まづ相府に入ければ、呂布來て賀を伸て申けるは、大人明日は齋戒沐浴して禪を受、萬世不磨の基を建玉へ。董卓が曰、われ天子とならば、必ず汝を以て天下兵馬の總督とすべし。呂布拜謝して傍に居たりしに、夜深て數十人の小兒郊外に集り、歌を謠聲風に吹れて相府に聞ゆ。歌の詞に、千里の草何ぞ青々たる、十日の下猶不ㇾ生と謠て、聲いと物悲かりければ、董卓怪んで問て曰、この童の歌その吉凶いかん。李肅答て、是は漢の世滅て董氏の興る意なりと云ければ、董卓げにもと云て疑はず。夜すでに明ければ、車を備て相府を出、前後左右に數千の武士を從へ、內裏の外門まで來りければ、百官みな朝服して出迎ふ。李肅は手に劍を執て相從ひ、北掖門に守護の武士を止め置、只二十餘人の士卒に車を推せて禁


董卓ゆめに一龍きたりて身をまとふとみえる
董卓

面してその故を問に、李肅申けるは、近ごろ天子御不豫の事有て日々に重らせ玉ひ、百官を未央殿に集めて、天下を太師に讓んと宣ふ、百官僉議一同して、某を以て此事を太師に告しむ、速に御上り有て九五の位に卽玉へ。董卓が曰、司徒王允は恙なきか。李肅が曰、王司徒はあまりの喜に堪ず、自ら受禪臺を築て、偏に主上の御上を待申され候。董卓笑て曰、われ近ごろ一つの龍きたりて身を纏と夢を見たりしが、此慶に應ぜり、時失ふべからず、早く車を備て長安へ上るべし。李肅が曰、主上漢の天下を受玉はば垂拱萬年、某が子孫も賴あり。董卓が曰、われ帝位に登ば、汝を必ず執金吾に封ぜん。李肅拜謝して此より臣と稱す。董卓すでに打立んとして貂蟬に向て申けるは、我昔日汝必ず貴妃と成べしと云しが、今果して此の如し。貂蟬拜謝して喜びければ、董卓又後堂に入て老母に見ゆ。老母この時年九十餘、わが子いづくへ行ぞと問ければ、董卓が曰、われ長安に上り、漢の禪を受て天子となる、老母ちかき内に皇太后と呼れ玉はん。老母が曰、われ近ごろ皮肉動て心驚く、この上り然るべからず。李肅傍に在て、俄に萬代の國母と成玉へば、皮肉の動ことも候はんと云ければ、董卓大に喜び、汝が云ところ甚だ明なりとて、車に乘て打出たり。數千の精兵前後を守護して、已に十里ばかり來る所に、乘たる車の輪忽ち折ければ、逍遙、玉面と云る馬に乘かへ、又十里あまり來りけるに、

洩し玉ふなとて、酒宴數刻に及で呂布は別て回りけり。王允事すでに成りと喜び、僕射士孫瑞、司隷校尉黃琬二人を招て計を議するに、士孫瑞が曰、近ごろ天子御不豫のこと有て已に痊たり、一人辯舌の者を郿塢に遣し、天子詔ありて董卓に帝位を禪玉ふと云しめば、必ず喜て馳來るべし、其時朝門の内に武士を伏おき、立所に斬殺さん。黃琬が曰、たれか此使たらん。士孫瑞が曰、呂布が同國の友に騎都尉李肅と云もの、久しく董卓に事て近ごろ勘氣を被り、今私の家に在て心深く恨を含む、呂布を遣してこの由を語らしめば、李肅必ず使せん、董卓も亦疑はじ。王允尤と同じ、呂布を召で之を語るに、呂布申けるは、昔我を勸て丁建陽を殺させしも李肅なり、我ゆいて此事を語り、李肅もし從はずんば先一刀に斬て棄んとて、王允と共に李肅が家に到り、密なる處に入て申けるは、昔御邊の勸に依て、丁建陽を殺して董卓に事ふ、今董卓不仁不義を行て、天子を惱し萬民を害す、其惡虐天地に漫れり、御邊いま郿塢に下りて董卓を欺き、何とぞ賺して此處へ呼上せ玉へ、我王司徒と計を合して共に國の逆賊を滅し、漢の天下を中興して、後の世までも忠臣と稱れんと思ふは如何にと云ければ、李肅喜て申けるは、われ久しく此賊を伐んと思へども、力を合する人なきを恨む、是天の助なりとて、卽時に打起て十騎あまりを從へ、郿塢の城に行て、天子勅使として李肅を下し玉へりと報ず。董卓對

人に笑ひ辱められて、女房を奪れたる人よと呼れ玉はんことこそ口惜けれと云ければ、呂布恨氣胷に塞り、魂を失て地に倒る。王允驚て扶け起し、我無用なる言を出して御心を怒らしめたりと云ければ、呂布大息ついて曰、われ誓て老賊を殺してこの羞を雪べし。王允急にその口を掩て申けるは、將軍卒爾なる事を云玉ふな、若外に聞えば三族を滅されん。呂布が曰、大丈夫の士天地の間に生れて、豈鬱々として人の下に屈んや。王允が曰、われ將軍の英勇を見るに、昔の韓信に百倍せり、韓信だも王に封ぜらる、將軍なんぞ區々として居玉ふべき。呂布牙を嚙で申けるは、我悔らくは老賊と義を結で父子の約を成り、今殺さんと思へども人の議論を恐るゝ也。王允大に笑て曰、將軍の姓は呂、老賊が姓は董、さきに戟を投付たる時父子の恩愛ありと思ひ玉ふか。呂布奮然として曰、司徒の教にあらずんば某これを曉るまじ、心すでに一決せり、必ず老賊を殺べし。王允が曰、將軍漢を扶て再び天下を治め玉はば忠臣なり、靑史名を留て萬載に傳べし、若董卓を扶玉はば逆臣なり、史官筆を下して惡名後代に及ぶべし。呂布が曰、われ誓て逆賊を殺さん、司徒必ず疑ひ玉ふな。王允が曰、但事成ずして反て禍を招んことを怖る。呂布劒を拔て自ら其臂を刺、血を流して誓を成ければ、王允拜謝して曰、漢の天下四百餘年、みな將軍の賜なり、天子すでに詔書あり、將軍よく忠義の志を勵して外に

事を云ものあらば、誓て首を斬ん。李儒天を仰で大に嘆き、我等こと〴〵くこの女の爲に亡されんと云ければ、董卓いよ〳〵怒て門より外に逐出し、車馬を用意して郿塢に回る。

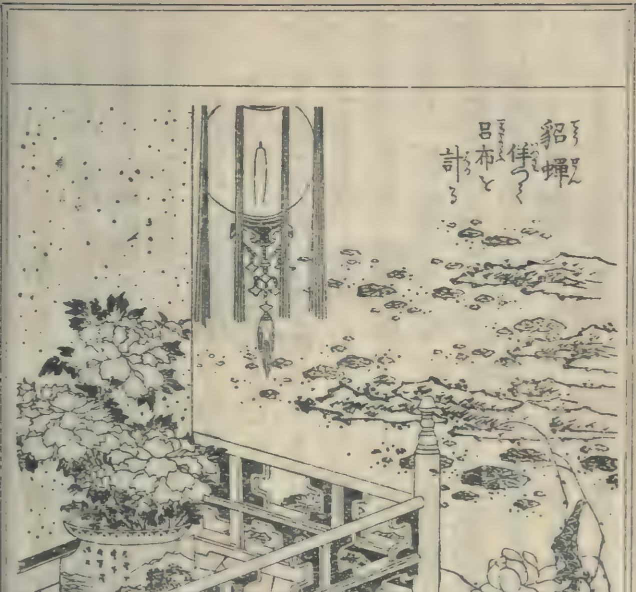
○王允定レ計誅ニ董卓一

去ほどに董卓郿塢に回ると沙汰ありければ、朝廷の百官こと〴〵く出て之を送る。呂布は心に貂蟬が事を思ひ、諸人と齊く出て車の内を目枯もせず見やりけるに、貂蟬ひそかに袖を掩て哭き慕へる體を成ければ、茫然として岡の畔に馬を留め、其方をのみ眺て回ることをも忘居たれば、後より呂將軍なにを悲み玉ふぞと問ものあり。呂布驚て之を見るに、司徒王允なりければ、近く寄て語て曰、わが悲は貂蟬故なり。王允作りて大に驚き、扨は今まで我娘を將軍に獻らざるかと問に、呂布答て曰、老賊自ら寵愛して、今に其沙汰候はず。王允が曰、これ禽獸の所行なり。呂布ありし事共を語ければ、王允が曰、まづ我家に來り玉へ、この事を議せんとて、密室に入て酒を勸れども、呂布怒の氣轉深し。王允申けるは、董太師わが女を汚し、將軍の女房を奪ひ玉ふ、是まことに天下の笑草、萬代の恥辱なり、天下の人董太師を笑ふのみならず、我と將軍とを笑ふべし、我は年老果たれば道に足ず、將軍は年壯なる英雄なるに、天下の

呂布に私すると責ければ、貂蟬涙を流して申けるは、妾つねに呂布は太師の子なるを以て毎事愼み敬ふ所に、今日思ひも寄ず戟を提て鳳儀亭まで追來れり、妾池に身を投んとするを急に抱き止めて、生ん死んとする間に、太師きたりて救玉へり、妾なんぞ私あらん。董卓が曰、われ汝を以て呂布が妻とすべし。貂蟬が曰、妾すでに太師に事て、今又奴の家の妻と成ことは、假令死すとも辱を受じとて、劍を執て自ら首を刎んとす。董卓急に抱き止、われ聊戯るゝ也と云ければ、貂蟬大に哭て膝の上に伏轉び、これ必ず李儒が計ならん、彼もとより呂布と厚く交る、必ず頼れて爲ことなるべしと云ければ、董卓が曰、われ汝が爲には命を棄んとす、爭か他人に與ふべき。貂蟬拜謝して涙を流し、此まゝにて置玉はば、妾必ず呂布に殺されんと云ければ、董卓申けるは、我明日汝を伴て郿塢に回り、心安く樂まん、郿塢の城には三十年の兵粮を貯て、門外に數百萬の軍勢あり、事を成す時は汝必ず貴妃たらん、事ならざる時は、汝亦富貴の家の妻として長く樂を受べし、此二つを遯じ、少しも患ること勿れと云ひければ、貂蟬喜てこれを謝す。次の日李儒きたりて、今日幸に吉日にて候、貂蟬を呂布が家に送り玉へと云ければ、董卓大に怒て、汝が女房を呂布に與べきかと云。李儒案に相違して、太師必ず美人に惑され玉ふなと云ければ、董卓色を變じて曰、美人爭か我を惑こと有ん、再び貂蟬が

しけるなり。李儒いそぎ董卓をたすけおこして書院に到り、再拜して申けるは、某社稷の爲を思うて誤て此の如し、死罪々々と謝しければ、董卓が曰、呂布わが寵愛の姫に戯る、必ず引出して首を刎ん。李儒が曰、しからず、昔も浩る例あり、楚國の莊王ある夜諸將を集めて酒宴し、寵愛の美女を出して持成玉ひける時、俄に風吹て座中の燭を打消たり、其間に一人の大將ひそかに美女を抱きければ、美女やがて其人の冠の纓を拽取、この由を莊王に告、莊王申されけるは、酒後なればさること有んとて、滿座の人の纓を取しめ、其のちに燭を燃せらる。是に依て戯たる人は知ざりしが、莊王のちに秦の大敵に圍れて已に危かりける所に、一人の大將、命を塵芥よりも輕んじて大勢の敵を破り、了に救ひ出しけり、莊王その大將の痛手負たるを見て、何ものなれば力を碎て我を助たると問玉へば、某は蔣雄と申もの也、先年冠の纓を絕たりし時君の恩を蒙り、今これを報ずと云へり、此を今の世までも申し傳て、絕纓の會と名付候、太師よく古の例を思うて、只この折ふし貂蟬を呂布に下し賜ひなば、呂布その恩を感じ、命を棄て忠を盡べしと諫ければ、董卓少し怒を止て、汝が云ところ我心に協へりと云。李儒喜で申けるは、漢の高祖黃金二萬斤を陳平に賜て、遂に天下を得玉へり、太師いま此に類す、目出度々々〱とて拜謝して回りけり。董卓後堂に入て貂蟬を召よせ、汝なにとて

呂布
貂蟬


貂蟬佯つく呂布と計る

ならば、妾いつか心を安んずべき。呂布立住て曰、われ計を運して心安く汝と契ん。貂蟬が曰、妾深き閨の中に在ても、將軍の名を聞て世に双なき英雄と思ひしに、今なにとて人の下に立玉ふぞとて涙を流こと泉の如くなれば、呂布心空に泛れて、手に手を取て伏轉てぞ居たりける。董卓は朝より退いて、呂布を尋ぬるに見えざりければ、怪く思ひながら車に乘て相府に回り、門前に呂布が乘たる赤兎馬ありけるゆゑ、番の者共に問ば、呂將軍さきに後堂へ入玉へりと答ふ。董卓いそぎ後堂に入て尋ぬれども、呂布さらに見えず、又貂蟬も居ざりしかば、侍女を召で責問に、向に呂將軍戟を提てあわたゞしく來り玉ひしが、何くへか行玉ひけん、須臾にして見え玉はずと答ふ。董卓いよ〳〵怪み、後園に出て尋ねければ、呂布貂蟬が手を執て鳳儀亭に伏居たり。董卓前に走り寄、大音あげて、匹夫いかなることぞと呼はりければ、呂布大に驚き、急に走り出けるを、董卓その戟を奪て投打にしければ、呂布手を以て打落す。董卓本より肥脹て急に走ること能はず、落たる戟を取間に、呂布すでに五十歩あまり逃のびたれば、跡に付て追ところに、外より李儒あわてゝ走り來り、董卓が胸を突て眞倒に打僵す。是元來李儒は常の如く相府に來りけるが、呂布後園より走り出て、太師われを殺し玉ふと呼はるを聞て、何事やらんと驚きける所に、程なく董卓戟を執て追來りしかば、推止んとして誤て打僵

亭にて待玉へ、我も跡より參んと云。呂布大に喜び急ぎ後園に出て鳳儀亭の曲欄に靠、戟を杖て待ける所に、暫ありて貂蟬花を分柳を拂て出來れり。其粧へる姿は、畫に書とも筆も及び難く、月宮の仙子、化して此土に來るかと怪まる。貂蟬涙を流して申けるは、我王司徒の爲には實の女にては候はねども幼より恩愛の深きこと骨肉に過たり、天下英雄の士を擇で嫁しめんと云玉ひしに、一度將軍に見て平生の願ひ足れりと思ふ所に、案の外に董太師不仁の心を起して妾を奪ひ玉へり、妾明暮將軍を思ひ沈と云ども、その志を知しむること能はず、今幸に逢ことを得たり、此身すでに汚れたれば再び英雄に事ることを得ず、今この所に死して妾が心をも知せ奉り、將軍の念をも絶べしとて、前なる蓮池に身を投んとす。呂布急に抱き止め、涙に咽で申けるは、我よく汝が誠の心を知、恨らくは夫婦の緣淺して浩る禍に罹ことを。貂蟬又呂布が手を執て曰、妾今生にては將軍の妻となること能はず、願くは後世の契を結んとて、又池に飛んとす。呂布押止め、我もし今生にて汝を妻とせずんば、豈世の英雄と云ふに足んや、必ず了には志を遂べしと云ければ、貂蟬が曰、妾この處に在て一日も一年を送るが如し、將軍憫で救ひ玉へ。呂布が曰、われ老賊に從て朝に出、ひそかに隙を伺て此に來れり、若尋ぬることや有ん、先回らんとて出ければ、貂蟬袖を引止て申けるは、將軍さほどに老賊を怕れ玉ふ

して袖を掩へば、呂布心も砕る樣に覺えける。董卓は睡れる體を成てひそかに呂布が氣色を伺ひ、がはと驟おき後を見るに、貂蟬屛風の畔に在ければ、大に怒り、汝わが愛する姬に戲るゝか、向後必ず內へ入ること勿れとて、呂布を追立て出しければ、呂布甚だ恨で退きけり。李儒この由を聞て、急に來て董卓に見え、何とて呂布を逐出し玉へると問に、董卓が曰、わが寵愛の姬に戲ぶる、此ゆゑに追出せり。李儒が曰、太師天下を取んと思ひ玉はば、少の罪を宥し玉へ、呂布が心もし變ぜば、大事必ず破るべし。董卓が曰、しかる時は如何せん。李儒が曰、明日呂布を召て金銀を賜ひ、其心を慰め玉へ。董卓これに從ひ、次の日呂布を後堂に招き、我昨日病重して、思はざるに誤て汝を責、汝必ず心に掛ること勿れ、今より每日きたりて我左右を離るゝこと勿れとて、黃金十斤錦二十疋を與へければ、呂布拜謝して又これより出入す。董卓が病すでに愈たりと云ども、貂蟬と日夜遊樂して久しく郿塢へも回らず、朝廷に出る時は、呂布馬にのり戟を執て車に從ひ、殿に昇る時は、董卓劍を帶履を踏、呂布は戟を執て階下に立。百官みな怖れ戰き、地上に拜伏してこと〴〵く命を聞。ある日董卓朝に出て天子と政を論じければ、呂布は常の如く戟を執て內門に立、よき隙なりと思うて、只一人馬に乗て相府に回り、戟を持ながら後堂へ入て貂蟬に遇んと尋ねければ、貂蟬も內より走り出て、將軍園に行て鳳儀

立たるを見て、眉を顰めて憂る體をなしければ、呂布心すでに慌惚として退もやらず、暫く沈吟して立囘り、又行て窺ひ見れば、董卓すでに起て中堂に座す。呂布が來るを見て、外面無事なりやと問ければ、呂布無事に候と答て董卓が後に伺候し、目を偸て窺ひ見れば、簾の内に人あり、往來して半面を出し、目を以て情を寄。呂布これを貂蟬なりと知て、心も浮れ魂も飛で、その方をのみ見居たれば、董卓なにとやらん呂布が言亂れたるを怪み、後を屹と見て、呂布しばらく退け、今事もなきにと云ければ、呂布心の内大に疑ひ、退いて家に回る。その女房呂布が顏色の常ならざるを見て、今日董太師に叱られ玉ふかと問ふに、呂布聲を荒らげ、太師いかでか我を制することを得んと云ければ、女房怖て再び問ず。此より呂布心に貂蟬がことをのみ思ひ慕て、毎日相府に出て窺へども、目に見ることだに叶ねば、明暮茫然としてぞ居たりける。董卓は貂蟬を得てより、色に迷ひ情に引れて、一月あまりも事を理ず、日夜酒を飲で片時も離るゝことなし。時春の末に至て少し疾に染ければ、貂蟬衣帶をも解ず、意を曲て阿り從ふ。董卓いよ〱他に異なる思ひを僞て、誠心に之を愛しけり。或日呂布來て疾を問、床の前に侍立するに、貂蟬床の後に在て董卓が睡れるを伺ひ、呂布が顏を守て眸を動さず、手を以て胸を指ば、呂布その意を悟り、諾て之を答ふ。貂蟬又手を以て董卓を教へ、頻に涙を流

貂蟬にあらずして誰ならん。王允笑て曰、さては將軍この事を知玉はぬか、我昨日朝に出たる時、董太師我を召て、密に事を議せんと欲す、明日汝が家に行べしと宣へり、此に依て酒宴を設て相待ところに、太師酒後に宣ひけるは、汝ちか此貂蟬と云女を呂布に與へんと約せり、先わが家に送り遣せと云玉へり、我尊命に背こと能ず、貂蟬を召て見えしむるに、太師又宣ひけるは、我吉日を擇で大に酒宴を設け、呂布と夫婦に成て興ある笑をなさんとて回り玉へり、何ゆゑに我を疑ひ玉ふぞ。呂布驚て曰、われ浩ることを知ずして輕々しく司徒を疑へり、無禮の罪いかゞして償はん。王允が曰、ちかき内に必ず婚禮あるべし、先貂蟬が歌舞粧の道具を將軍の方へ送らんと云ければ、呂布拜謝して回りけり。

○鳳儀亭呂布戲ニ貂蟬一

董卓その夜は貂蟬に幸して、次の日午の刻まで起あがらず。呂布は早朝より相府に出て窺ひ見れども、董卓いまだ出ざりしかば、私に後堂へ入て侍女に問。侍女答て申けるは、太師は昨夜貂蟬と共に寐玉ひしが、今に至て起玉はず。呂布これを聞て怺かね、臥房の傍に行て見れば、貂蟬只今起たりと覺て、窓の下に坐して綠の髮を梳り、鏡に對して粧をなす。忽ち呂布が

一點櫻桃啓絳脣　兩行碎玉噴陽春
丁香舌吐銜鋼劍　要斬姦邪亂國臣

董卓稱嘆して甚だ興じければ、王允乃ち貂蟬に命じて盃を擎しむ。董卓その手を執て、春色幾何ぞと問ければ、貂蟬答て曰、妾が年二十なり。董卓笑て申けるは、眞に神仙の人なり。時に王允拜伏して、願くは此女を太師に獻るべしと云ければ、董卓喜んで曰、美人を給る、我なにを以てか德に報ぜん。王允が曰、この女もし太師に事ば大なる幸なり、夜もいたく深候に、早く太師の府中へ送らんとて、氈車を備て先貂蟬を送りければ、董卓坐を起て之を謝し、別て相府に回りけり。王允遠く出て董卓を送り、暇を乞てかへる所に、誰とは知ず二行に燈火を張て、數十騎の武士共馬を拍て馳來る。近付まゝに之を見れば、呂布眞先に進んで左の手に戟を持、馬上より猿の如くなる臂を舒て、王允が襟のあたりを引摑み、大の眼を怒らして申けるは、憎き己は、已に貂蟬を我に與んと約して、今又なにとて董太師に獻りたる、是われを小兒の如く弄かとて、已に首を斬んとしけるを、王允少しも躁ず、是往來の岐なり、事を論ずる所にあらず、我家に來玉へと云ければ、呂布來て後堂に坐す。王允問て申けるは、將軍いかなれば我を疑ひ玉ふぞ。呂布が曰、御邊いま一人の女を車に乘て相府に送れりと告る者あり、

光り白日の如く、侍女に命じて酒を勸めさせ、教坊の樂はさまでの興も無候に、某が家の女樂を成て一覽に具んと云ければ、董卓然るべしと云ふ。王允乃ち簾を捲せければ、絲竹管絃の音、曲奏耳に韻き、貂蟬袖を飜して簾の外に舞歌ふ。其歌に曰、

原是昭陽宮裏人　驚鴻宛轉掌中身
只疑飛過洞庭春　按徹梁州蓮步穩
好花風裊一枝新　畫堂香暖不勝春

董卓これを見て感興の餘り、今一曲と望みければ、貂蟬又起て舞ふ。その歌に、

紅牙催拍燕飛忙　一片行雲到畫堂
眉黛促成遊子恨　臉容初斷故人腸
楡錢不買千金笑　柳帶何須百寶粧
舞罷隔簾偸目送　不知誰是楚襄王

董卓大に喜び、興に乘じて貂蟬を召しむるに、近く來て再拜しければ、乃ち王允に問て申けるは、是いかなる人ぞ。王允答て曰、樂女貂蟬と申もの也。董卓が曰、わが前にて一曲を唱へよ。貂蟬乃ち手に檀板を執、聲を低して謠て曰、

董卓が前に拜伏して、某ねがはくは太師に酒宴を進めんと欲す、若駕を枉て茅屋に來り玉はゞ、何の喜か之に侈んと云ければ、董卓答て曰、司徒は國家の大老、幸に我を招かる、明日必ず行ん。王允拜謝して家に回り、水陸の珍味を調へ、錦繡を地に布、內外に幔幕を引て、正堂に高座を設て待ければ、次の日巳の刻に、太師來り玉ふと報ず。王允朝服を備て門外に出迎へければ、董卓車より下て、左右前後に戟を持たる精兵數百人、簇擁して內に入、董卓高座に著て王允を傍に坐せしむ。暫ありて酒宴初まり、王允謹で盃を擎げ、太師の盛德、伊尹周公にも過たりと云て、天子を敬禮の如くし、樂人に命じて樂を奏せしめければ、董卓いよ〳〵喜、座上に盃盤狼藉たり。已に酣に及て王允後堂に請じければ、董卓護衛の兵を殘し留て、只一人進み來る。王允又盃を取て、某幼より天文を學び得たり、每夜乾の象を窺見るに、漢の運氣すでに盡て、天下新に起らんとす、太師の功德巍々として古に耀き今に騰る、舜の堯に受、禹の舜に繼玉ふが如し、是天心に應じ人情に順ふ也、たれか服せざるべきと云ければ、董卓が曰、われ焉ぞ此を望まん。王允又申けるは、天下は一人の天下にあらず、天下の人の天下なり、古より德なきは德あるに讓る、是當然の理なり。董卓笑て曰、もし天運我に歸せば、司徒を必ず重く用ん。王允再拜して之を謝し、夜に入ければ、堂中に燭を點じてその

王允董卓が悪行を愁ふ
王允

し玉ふ、早晩ねがはくは天子に薦て高官を賜へ。王允笑て曰、われ專ら將軍を頼で董太師に愛せられん事を望む、然る時は身を終るまで將軍の德を忘れじ。呂布笑て酒を飮ければ、王允左右の人に命じて、我女を召來て將軍に酒を勸めさせよと云けるに、頃くありて丫鬟の侍女二人、貂蟬を引來て呂布が前に拜せしむ。呂布これ何なる人ぞと問ければ、王允答て曰、これは我女貂蟬と云もの也、將軍を持成ん爲に召出せり。時に貂蟬手に盃を執て呂布に進めければ、王允醉たる由にて申けるは、我一家は皆この將軍を賴奉る、我女まづ飮で後に盃を獻れ。呂布打笑て、貂蟬に近く寄て坐せよと云ければ、貂蟬退て內へ入んとす。王允引止め、將軍は我一家の恩人なり、苦からぬ、坐して持成せと云ければ、貂蟬坐に著て酒を勸む。酒興半に至ける時、王允打ほゝ笑て、我この女を將軍に獻りて侍妾たらしめんは如何にと云ければ、呂布跪て謝して曰、ねがはくは犬馬の報を致ん。王允が曰、われ近き内に吉日を擇で送るべし。呂布大に喜び、頻に貂蟬が顏を見れば、貂蟬も秋波を以て情を寄。王允申けるは、今夜は此處に住め申さんずれども、董太師の尋怪むこと有ん。近き内に必ず貂蟬を送るべしと云ければ、呂布拜謝して回りけり。王允しすましたりと喜び、貂蟬に向ひて申けるは、天下萬民の幸なり、又董卓を招べし、汝よく歌舞を成て之を持成とて、次の日朝に出でて、呂布が居ざる時を伺ひ、

受て、命を棄るとも何ぞ惜ん。王允が曰、いま百姓倒懸の苦を受、君臣累卵よりも危し、朝廷文武の舊臣施べき計なし、只汝にあらずんば救こと能はじ、其故は、董卓が手下に呂布と云ふ大將あり、其勇萬夫も當ること能はず、殊に義を結んで董卓と父子の約をなす、我この二人を見るに、共に色に溺れ酒に耽る、今連環の計を用て、先汝を呂布に與て後又董卓に與へ、中にて汝に計を行はせて彼二人が間を隔遠け、呂布を欺て董卓を殺させなば、社稷再び興て、漢の天下みな汝が力ならん。貂蟬喜て申けるは、妾すでに命を大人に獻る、何ぞ辭すること候はん。王允が曰、事もし洩る時は我三族を滅さん。貂蟬誓を成て曰、大人御心を安んじ玉へ、妾もし此事を仕損じなば、必ず萬刄の上に死して世々人間の身を受べからず。王允大に喜び、次の日金の冠を造らせ、七寶を以て之を飾り、使を以て呂布が方へ送りければ、呂布喜に堪ず、自ら行て恩を謝す。王允は兼て呂布が來んことを量り、酒肴を用意して待居たるに、案の如く來りしかば、自ら中門に出迎へ、堂上に請じて上座を讓る。呂布問て申けるは、某は董太師に從ふ一將、司徒は朝廷の大臣なるに、何とて斯は敬玉へる。王允が曰、今の天下に英勇の人なし、惟將軍一人なり、我將軍の官爵を敬にあらず、將軍の才德を敬ふ也とて、慇懃に酒を進めければ、呂布笑ひ樂み、酒宴酣に至て申けるは、司徒此の如く某を愛

哭く聲しけり。怪く思うて密に窺ひ見れば、歌舞の美人貂蟬と云者なり。此は幼より選で樂女としけるが、生れ付聰明にして心ざまやさしかりけるゆゑ、常に憐で我子の如くし、歌舞吹彈を習はしむるに、一通百達、九流三教極めずと云ことなし。天の生る姿は露を含る芙蓉の如く、一たび笑ば實に國をも傾べし、時に年十八なり。王允しばらく立て、賤人何を嘆くぞ、私の情ありやと云ければ、貂蟬驚たる體にも有ず、前に來て申けるは、妾いづくんぞ私の情あらん、大人疑ひ玉ふこと勿れ。王允が曰、もし私の情なくんば夜深てひとり何を嘆く。貂蟬が曰、ねがはくは妾が本心を伸ん、妾幼より大人の恩を被り、歌舞の諸藝を學び極めて、實の子の如く愛せらる、紛骨碎身すとも爭か此恩を報ずる事を得ん、常に大人の喜しき色なく眉を顰玉ふを見ても、必ず國家の大事を心に思ひ玉へる成んと推料り、女の身なれば尋ね問て大人の患を慰むる事もなし、今夜又悶苦める氣色に見え玉ふゆゑ、若男の身にても有ば、命を棄て助申さんと思ひ、此ゆゑに嘆きしなりと云ければ、王允杖を以て地を撃、長嘆して申けるは、誰か量ん漢の天下いま汝が掌に在んとは、此方へ來れとて畫閣の中に伴ひゆき、堂中に坐せしめて、自ら頓首して再拜す。貂蟬大に驚て伏し轉び、これは如何なる故ぞと問に、王允只涙を流し、汝漢の天下の滅んとするを憐めと云て大に哭く。貂蟬申けるは、妾大人の恩を

して皆々酒を飲玉へと云。又一日天文官來て、昨夜天文を視るに、黑氣地より起て直ちに天に上れり、是大臣の身に災ある兆なりと告ければ、董卓次の日省臺に酒宴を設て百官を集めけるに、酒酣に及びける時、呂布あわたゞしく走り來り、董卓が耳本に依て何事やらん私語ければ、董卓打うなづき、汝必ずのがすなと云。呂布急に走り蒐りて、座上なる司空張溫が髻を摑で中に提げ引立て堂を下りければ、滿座みなふるひ怕る。董卓笑て申けるは、昨日太史官きたりて大臣の身に災あらんと云しは、此人に應ぜり。須臾ありて武士共張溫が首を斬、盤に入て持來りければ、董卓此を百官の前に出し、各手に取て之を見せしめ、呂布を呼で百官に酒を強よと云ければ、百官みな怖れ戰き、魂も天に去かと思ひけり。董卓笑て申けるは、諸官必ず怖こと勿れ、張溫ひそかに南陽の袁術に內應し、計を約して我を殺んとせしが、今日袁術が使書簡を持て、誤て呂布が家に來り、此に依て事あらはれ、今三族を滅せり、汝等眞の心を以て我に順ば、其身も全きことを得ん、我は天の祐を得たる人なり、我を害せんとせば却て其身を滅べしと云ければ、百官みな再拜して退きけり。司徒王允は我家に回りて、董卓が惡行をつく〴〵と心に思ひ、坐して席を安んぜす、杖を携て後園に出、天を仰で涙を流し、折ふし茶蘼咲亂れて月に映じければ、其側に沈吟して立たるに、誰やらん牡丹亭の畔に人の

董卓長安に在て、呉の孫堅が討れたる由を傳へ聞、わが病一つ除けり、其子孫策は甚だ幼と云ば道に足ずとて喜ぶこと限なし。いよ〳〵憚る所なく侈を長じて、自ら尙父と號して萬づ天子の儀仗を僭し、弟の董旻を左將軍鄠侯に封じ、兄の子董璜を侍中に任じて御林の軍馬を摠領せしめ、一門の男女長幼を分たず、盡く列侯に封じて金紫の爵位を與へ、又人夫二十五萬人を集めて郿塢と云ところに城を築せ、高下厚薄週九里にして長安の城郭に異ならず、慘しく宮殿を建連て金玉の光を瑩き、二十年の兵粮を貯て、十五より二十までの美女八百人を擇び集め、天下の重寶を山の如くに積で、常に人に語りて申けるは、我事成ば天下を取ん、事成ざる時は此内に在て老を養べし。此に依て朝廷の公卿も董卓に阿り諂ひ、地に拜伏して命を聞く。つねに己が一族を盡く郿塢城に居しめ、自ら往來して半月一月に長安に囘りけるが、その度ごとに朝廷の百官横門より外に出て、路々に幔幕を張、酒肴を持せて我劣じと媚諂ひ、其路二百五十餘里が間寸地も殘さず毡を布幕を引ずと云ことなし。ある日百官酒を舁せて董卓を送りけるが、其ころ北國より降人に出たる軍兵數百人ありけるを、董卓武士に命じて盡く引出させ、或はその手足を切せ、眼を鑿り舌を拔、或は大鍋を居て煮させなんどしければ、半死半生なる者共倒れ轉て泣號ぶ。百官みな顏を掩て震ひ怖れけるに、董卓は快く打笑て、之を輿に

て屍を尋させけるに、敵すでに城中へ取入たりと告ければ、孫策悲み慟て申けるは、父の屍をも敵に取れて、我なんの面目ありてか生て國に回るべき。黄蓋が曰、某すでに敵の大將黄祖を生取て候へば、此を以て君の屍に代ん、早くこの由を城中へ報じて、劉表が意を問玉へ。軍吏桓楷と云もの劉表と舊き好ありて、城に使せんと望みければ、孫策これを許す。桓楷只一人城中に入て、黄祖を以て屍に代んと云に、劉表申けるは、孫堅が屍こゝにあり、早く黄祖を送り回さば、互に戰ひを止て再び犯こと無ん。時に蒯良すゝみ出て申けるは、無用々々我一つの計あり、江東の敵を一人も餘さず討取ん、先桓楷が首を刎て、この時に乘て大に戰はば、江東主なうして自ら破るべし、若孫堅が屍を回して共に軍を收め玉はば、彼氣力を養ひ成て、了に我國の禍を成ん。劉表が曰、われ黄祖と心腹の交あり、之を棄るは義にあらずとて、了に屍を送りければ、蒯良又諫て曰、無用の大將一人を棄て萬里の國を得るは、大丈夫の志なりと云けれども、劉表つひに用ひず、黄祖に代て軍を收めしかば、孫策父の柩を守て江東に回り、曲阿の原に葬て、其のち父が業を繼で賢才を招き集め、次第に勢ひを振ける。

○司徒王允說二貂蟬一

人によるぞ、何く迄にぐる、快く降參せよと呼はり、追て山へ上りけるが、木の葉しげりて路昏き處あり。此に至て忽ち敵の行衛を見失ひ、馬を打て眞平地に上らんとする時、大石を投下こと蝗の飛が如く、四方の林の陰より矢を射ること雨よりも繁ければ、憐べし孫堅大石に打れて頭を微塵に碎かれ、身に立矢は蓑の毛の如く、三十騎の兵とみな一處にて滅にける。その年三十七歳、時に初平三年辛未十一月七日なり。是まことに先年玉璽を盜し時、詐て誓を成たる天罰にやと思ひ合されて怖しけれ。呂公は誰とも其名を知らねども、敵の大將を討取たれば、合圖の連珠砲を鳴しけるに、城中の者共これを聞て、すはや呂公が軍するは、蒐あはせて力を添よとて、黄祖、蒯越、蔡瑁みな城戸を開て打て出ければ、江東の勢俄の事にて弓よ刀よと騷動し、上を下へ返して討るゝ者數を知ず。黄蓋は漢江に兵船を調て居たりしが、喊の聲に驚て盡く舟より上り、本陣を指て來る所に、黄祖一軍を引て打て蒐りければ、入みだれ火を散して戰ひ、黄蓋戰ひ二三合にして引組で黄祖を生どる。程普は孫策を助けて走りける所に、呂公討止んと追掛ければ、引囘して戰ひ、呂公を馬より斬て落す。兩方の軍勢をめき叫で攻戰ひ、直ちに殺して曉に及び互に退て軍を收め、劉表が勢は城中に入、吳の勢は漢水へ引退く。此に至て父孫堅が峴山にて討れたることを初て聞知、大に驚て哭き悲音地を動す。急ぎ人を遣し

地に落たり、分野を以て之を度るに、的しく孫堅に應ぜり、今一人の大將を城外に出して袁紹が方へ遣すべし、誰をか用んと問に、大將呂公すゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。蒯良が曰、御邊もし行んとならば能わが計を聞玉へ、先馬強なる精兵五百餘騎を調て、射手をその中に雜へ、敵の圍を打破りて峴山へ上るべし、敵もし跡を慕て追來らば、百餘騎を分て山の頂に大石を集めさせ、射手百人を木深き林の中に伏て、敵きたらば暫く應對て思ふ圖に帶きよせ、大石を打かけ矢を放て、色めく所を蒐破り、もし打勝ば合圖に連珠砲を鳴し玉へ、城中よりも打て出て力を戮すべし、若追かくる敵なくんば、夜を日に繼で路を急ぎ、袁紹が方へ行て早く救を求め玉へとて、書簡を封じて渡しければ、呂公計を受て軍馬を調へ、日の暮をぞ相待ける。日すでに西山に沈で、蒯良矢倉より望み見るに、東の方に寄手寡かりしかば、密に城戸を開て呂公が軍を送り出す。呂公五百餘騎を引て敵の役所の前を打通りければ、孫堅これを聞付、なに者なれば夜中に我役所の前を忍やかに通るぞとて、自ら三十騎ばかりを引て蒐出見れば、一手の勢峴山へ向て馬を飛す。孫堅大に怒り、一騎も殘さず追附て討取とて、諸大將へも知せず自ら眞先に進めば、三十餘騎の兵共飛が如くに相從ふ。呂公追手の懸を見て、兵を分て山林の間に伏おき、引回して暫く戰ひ、詐り負て走ければ、孫堅勝に乘て大音あげ、追手も

孫堅峴山
討死す

は劉表が後妻蔡夫人が兄に蔡瑁と云ものなり、誰か出て生取んと云ければ、程普馬を馳て蔡瑁と五六合戰ふと見えし。蔡瑁つひに打負て陣中へ走りけるを、孫堅大軍を進めて掩殺し、敵を討こと數を知ず。蔡瑁殘り少に討れて城中へ逃入ければ、蒯良大に怒り、汝わが計を用ずして斯る負をし出せり、軍法を正して首を刎んと云けれども、劉表ちか比その妹を愛して、了に刑を加へざりけり。去ほどに諸所の軍に勝傲りたる大勢、城の四方を取圍で息をも繼ず攻ければ、蒯良下知を傳て緊く守り、袁紹が方へ使を馳て救ひの勢を求めける。この襄陽城と申は、山に傍水に倚て、荊州無双の要害なれば、孫堅數日攻れども、城の弱らざるを見て退屈して居たるに、或日俄に狂風起りて、中軍に立たる師の字の旗竿折ければ、諸人色を失ひ、扨はこの軍甚々しからじ、暫く退て時を待玉へと口々に勸ける。孫堅申けるは、我いく度か戰ひに臨めども、箇樣の事を心に掛ず、況や數箇度の戰に打勝て、この城を取ること手の内にあり、何ぞ輕々しく退くべき。韓當が曰、この旗は軍中の主なり、君なんぞ輕んじ玉ふ。孫堅が曰、風は乃ち天地呼吸の氣なり、時いま冬の末に至て朔風俄に起り、立たる旗を折たればとて、何ぞ怪で輕々しく是ほどの大事を廢すべき、早く城を攻落せとて、鐵炮火矢を打かけ喚き叫で攻たりけり。城中には蒯良ひそかに劉表に告て申けるは、某昨夜天文を見るに、一つの將星

は張虎、陳生と云二人の大將を從へ、汝等江東の鼠、なんぞ我大國を犯と呼はりければ、堅孫大に怒て、誰か出て此賊を討んと云に、韓當きゝも敢ず、刀を舞して張虎と三十餘合ぞ戰うたる。陳生これを見て、又槍を撚て打て出、韓當を夾んで戰ひしかば、孫策父の傍に在てよく挽て兵と射るに、其矢陳生が面に立て馬より落て死にける。張虎は猶韓當と戰ひけるが、陳生が馬より落たるを見て怖れ驚く所を、韓當得たり賢しと刀を取のべ、盔の眞甲を重ね討に討たりければ、了に馬より落て死たりける。此を見て程普直ちに馬を飛して黃祖を擒にせんと進みければ、荊州の勢大に亂れて十方へ散亂す。黃祖は盔を卸すて、馬より下て步立の勢に雜り、這々命を扶りしかば、孫堅兵を驅て均く進み、直ちに漢水に到りて黃蓋が舟手の勢を漢江に屯せしむ。黃祖戰ひに負て、敵勝にのる由早馬打て告來りしかば、劉表色を失ひ、諸大將を集めて計を問。蒯良申けるは、黃祖大に破れて御方の鋭氣を失ひ、兵みな戰ふ心なし、只壕を深し城を固してよく／＼守り、密に使を馳て袁紹に救を求玉へ。蔡瑁進み出て日、これ大に拙計なり、敵軍すでに城下に臨めり、豈手を束て死を待んや、某不才なりと申せども、城を出て戰はん。劉表げにもと容しければ、蔡瑁一萬餘騎にて襄陽城を出、峴山に陣を張。この時孫堅は諸所の戰ひに打勝、長く驅て大に進む所に、蔡瑁出たりと告ければ、左右に向て、これ

七歳なりけるが、進み出て申けるは、父已に陣に臨玉ふ、某も願くは伴はん。孫堅が曰、汝は幼より英氣人に超たれば、我に從ひ來るべし、孫靜は次男孫權と國を守るべしとて已に打立ければ、孫策氣早なる若武者なれば、眞先に船を飛して直ちに樊城へ攻かゝる。荆州には兼てより待かけたることなれば、黃祖江の邊に打て出、射手を進めて散々に矢を放ち、馬武者を其後に備て、色めく所を蒐立んとす。孫堅が先手の勢射立られて岸に近付こと能はず、盡く退きければ、孫堅これを見て尋常にては叶まじとて兵船を引退け、數十艘の小舟を出して敵を欺き、岸に上らんとする勢ひをなす。黃祖が勢これを上じと鏃を調て射たりしかば、孫堅心中に喜び、三日が間小舟を出して欺きしに、黃祖が勢矢種みな射盡し、孫堅が舟には十萬にあまれる箭を得たり。次の日順風吹おこりければ、孫堅大音あげて速に攻よと下知するに、五百餘艘の兵船、鼓を打て喊を造り、一度に岸に推よせ、我さきにと攻上れば、黃祖これを上じと雨のふる如く矢を放つ。されども孫堅自ら眞先に進み、程普、黃蓋、左右に分れて驀地暗に打てかゝり、韓當中央より進んで黃祖を生取んと爭ひければ、荆州の勢大に亂れて、討るゝ者數を知ず、散散に落ゆき鄧城に逃こもる。孫堅舟手の勢を黃蓋に授け、自ら陸に上て鄧城へ推寄ければ、黃祖前なる廣野に出て陣を張。孫堅も陣勢を開き布て、孫策槍を提て眞先に進みければ、黃祖

ぎ荊州を攻取んとて手下の勢を調へければ、程普諫て申けるは、袁術元より詐多き者にて、其詞つひに信なし、輕々しくし玉ふこと勿れ。孫堅が曰、われ常に荊州を攻んとする心あり、必ずしも人の助を待にあらずとて、黄蓋を先手として兵船五百餘艘を江に浮べ、日を擇んで進まんとす。此由荊州に聞えければ、太守劉表大に驚き、諸將を集めて計を議するに、蒯良すゝみ出て申けるは、是ほどの敵を何ぞさのみ怖るゝこと有ん、只江夏城の黄祖を先手として要害に防がしめ、荊州襄陽の大軍を起して自ら後陣に備へ玉へ、然る時は大なる江を隔て孫堅いかでか自由を成ん。劉表この義しかるべしとて、黄祖を先鋒と定めて國中の勢をぞ集めける。

孫堅は吳氏が腹に四人の子あり、長男孫策字は伯符、第二孫權字は仲謀、第三孫翊字は叔弼、第四孫匡字は季佐なり。又吳氏が妹の腹に一男一女あり、孫朗字は早安、女の名は仁。又俞氏の腹に一男あり、孫韶字は公禮と云。已に吉日を擇で打立と觸たりければ、舍弟孫靜字は幼臺と云もの、諸子を引て來り見え、今董卓亂を成て天子懦弱、四海みな塗炭の苦を受、兄まづ義兵を起して、國の爲に亂を治むることを思はず、纔なる私の恨を雪んとて荊州に向ひ玉ふこと、甚だ然るべからずと諫ければ、孫堅が曰、浩る大事は汝等が知ところにあらず、我天下に縱横して、世を救ひ民を安ぜんと欲す、豈手を握て死を待べけんや。長男孫策時に年十

人以爲レ榮。自省ニ邊鄙一得下與ニ將軍一共同中此福上、此誠將軍之眷、而亦瓚之幸也。

袁紹ひらき見て甚だ喜び、此上は何ぞ勅命を背べきとて、和睦すでに定りしかば、次の日使又公孫瓚が陣に行、酒宴數日に及て那のち長安へ回りければ、公孫瓚乃ち兵を收めて、長安へ表を上て玄德を平原の相たらしめん事を奏す。玄德すでに打立玉へば、趙雲此間その德を感じて別に忍ず。某公孫瓚を當世の英雄なりと思ひ、袁紹を棄て來り事に、案に相違して民を救の才にあらず、これも袁紹が如き輩なりと云ければ、玄德の曰、御邊よく心を堅して公孫瓚を助よ、重ねて相見せんとて出玉へば、趙雲涙を流して留りけり。此ころ南陽の太守袁術は、兄袁紹が冀州を得たると聞て、冀北の名馬千疋を所望しけるに、袁紹一疋をも與へざりければ、心の內大に怨で、此より兄弟不和になる。袁術又荊州へ使を立て、太守劉表に兵粮米二十萬斛を借んと云に、劉表肯て一粒も與へざりしかば、怒を含で密に吳の孫堅が方へ書簡を送り、共に荊州を攻取んと云。其書に曰、

異日奪レ卯截レ路、乃吾兄袁紹之計也、今紹又與レ表相議、起レ兵襲ニ江東一、吾不レ忍レ言。公可ニ速興レ兵取ニ荊州一、吾當ニ與助一、夾攻ニ袁紹一二讐可レ報、汝得ニ荊州一吾取ニ冀州一、切勿レ誤也。

孫堅この書を見て大に喜び、劉表向に路を塞で、故なきに我を討んとせり、此時に乘て怨を雪

内に、趙雲が人表よの常ならざるを敬ひ、趙雲も玄德を見て實によき主君かなと思ひ、此より互に捨ざるの意あり。

○孫堅浮江戰劉表

袁紹打負て引退き、兩陣相拒で一月に餘りければ、此由すでに長安へ聞えてけり。董卓は洛陽を落て後長安に都を構へ、天子を挾んで自ら太師と稱し、位諸侯の上に居、出入つねに金花の皂蓋にのる。或日李傕きたりて申けるは、今袁紹と公孫瓚と磐河に支て大に戰ふ。太師宜く天子の詔と號して使を遣し、軍を休て和睦せさせ玉ひなば、二人恩德を感じて必ず太師に順ふべし。董卓尤と同じ、次の日天子の勅命なりとて、太傅馬日磾、太僕趙岐二人を關東へぞ下しける。兩使直ちに磐河に下著して、先袁紹が陣に到りければ、袁紹再拜して詔を聞。兩使又書簡を以て、和睦あるべき由を公孫瓚に告ければ、公孫瓚一儀にも及ばず、軈て袁紹が方へ書簡を送て曰、

馬太傅趙太僕、以周召之德、銜命來征、宣揚朝恩、示以和睦、曠若開雲見日、何の喜如之。昔賈復寇恂、亦爭士卒、欲相危害、遇光武之寬、親俱陛見、同輿共出、時の

此軍の體を見よと云て大に笑ひて居たる處に、思も寄ず趙雲五百餘騎にて、勝に乘て攻かゝり、矢を放こと雨の如なりしかば、袁紹膽を冷して如何せんと騒ぐ所に、公孫瓚又大勢を引て四方を圍ければ、田豐震ひ怖れ、袁紹に向て申けるは、敵四方を取巻て、矢を放こと雨よりも繁し、あれなる築地の陰に入て之を避ん。袁紹抜たる盔を脱で地に投すて、大丈夫の士は、戰場に討死するこそ本意なれ、何ぞ身を避て活る事を望んと呼はり、自ら眞先に馬を出せば、其手の兵たがひに命を輕じ、喚き叫で攻戰ふ。浩る所に、初め北る敵を追たる顏良文醜が千餘騎の勢、跡に戰ひありと聞て速に取て回し、喊を咄と擧て蒐たりしかば、公孫瓚又散々に亂れて趙雲と一手になり、橋の邊まで退きけるを、袁紹が大軍勢ひに乘て追蒐しかば、河中に追落されて溺れ死する者數を知ず。袁紹自ら馬を飛して、一騎も餘さず打とれと呼はり、又五里あまり追ところに、山の間より一彪の軍馬打て出、まつ先に進むは左右の手に劍を提て、是乃ち劉玄德なり。其跡に關羽八十二斤の青龍刀を提げ、張飛一丈八尺の蛇矛を横たへ、我平原より來て公孫瓚を助く、袁紹早く降參せよと呼はりければ、袁紹驚きさわぎ、すはや例の劉玄德よ、速に退けと云ほどこそあれ、大に亂れて人馬たがひに踏殺され、甲を棄盔を落して散々にぞ落ゆきける。公孫瓚十分に打勝、本陣に回りて玄德を持成、趙雲が功を物語りしければ、玄德も心の

討て蒐る。されども麴義は、靜かへりて音もせず、已に近々と寄ける時、合圖の鐵砲を鳴ほどこそあれ、八百の勢鏃を調て散々に射出し、透間もなく討て蒐りければ、嚴綱殘り少に討成れて、這々に退きけるを、麴義八百餘騎にて追かけ、自ら嚴綱を切て落す。此に依て公孫瓚が先陣すでに破れければ、左右に備たる五千餘騎これを救んとする所を、顏良文醜千餘騎にて喚て蒐り、四角八方へ蒐ちらして、恰も電光の激するが如なりしかば、五千餘騎の勢十方に打散て、又一處には集まり得ず。袁紹勝に乘て橋の上まで攻よせ、麴義眞先に進んで帥の字の旗を砍て落しければ、公孫瓚大に怒て、自ら馬を交て二三合戰ひけるが、叶ずして引退けば、麴義いよいよ氣に乘て、後陣の備に打てかゝる。此陣には趙雲五百餘騎にて備けるが、御方引ども肯て動ず、敵かゝれども更に畏ず、湛然として兵を一處に集め、麴義が打て蒐るを見て、趙雲自ら十餘合戰ひ、一槍に麴義を馬より突て落し、直ちに大勢の中へ蒐入て、左へ追なびけ右へ追廻し、敵を討こと數を知ず、血は混々として溝をなし、屍は壘々として丘の如し。公孫瓚は始め散々に負て走りけるが、後陣の軍に御方勝たりと云を聞て、急に取て回しければ、敵軍大に亂れて右往左往に落てゆく。袁紹わづかに三百餘騎を從へ、射手五十人を左右に立て大將田豐と馬を双べ、初め公孫瓚が大將を討れ、旗を折れたるを見て、公孫瓚はさしも無能なる大將かな、

上へ逃のぼる。文醜なほも退かず、又七八十合戰ひけるが、後より敵の大勢かゝるを見て、馬を回して去にける。公孫瓚山を下りて、我を扶けたる者は何人ぞと問に、其人身の長八尺、濃眉大眼濶面重頤、相貌堂々威風凛々、常山眞定の人に趙雲字は子龍と云ものなり。公孫瓚問て曰、御邊いかなれば此處に在て我危を救うたる。趙雲が曰、某は本袁紹が手下の大將たりしが、袁紹民を恤み漢を扶くる心なきを見て、此處へ逃來れり、願くは仁德の主に事て、共に天下塗炭の苦を救ん。公孫瓚大に喜び本陣に回りて武具を整へ、次の日一色に白き馬を二千疋そろへて盤河の橋に陣を張、又歩立の勢を中軍とし、馬強なる勢五千餘騎を備て左右の羽翼とす。公孫瓚が多く白き馬を持たるは、先年羌胡の勢と戰ひ、常に白馬を撰で先手としけるゆゑ、白馬將軍と號して畏れあへり。是軍の吉例とぞ聞えし。袁紹これを望み見て、先顏良、文醜二人を先手の大將とし、屈強の射手千餘騎を左右に備へ、又麴義と云大將に、北國無双の射手八百餘騎を附て中軍とし、袁紹自ら後陣に備ふ。公孫瓚はいまだ趙雲が心根を知ざれば、態と後陣に備て、大將嚴綱を先手とし、師の字を金線にて繡たる紅の旗を立て、互に蒐るを相待、辰の時より巳の時にいたる。袁紹が大將麴義は前に疊楯一面につき竝べ、射手を其陰に隱して出ざりければ、公孫瓚御方を顧て、誰か先この敵を破らんと云に、先手の大將嚴綱兵を引て

ぞと呼はりければ、袁紹馬を橋の上に蒐すゑて申けるは、韓馥不才にして冀州を保こと能はず、我を招て國を譲れり、汝いかなれば兵を起し來れる。公孫瓚怒て曰、むかし洛陽を攻たりし時、汝を忠義の人なりとして、共に議して盟主と爲ところに、實は狼心狗幸の曲者なり、何の面目ありて天地の間に立んとはする。袁紹左右を顧て、誰かある、奴を生取て舌を拔と云ければ、文醜とて長八尺ばかりなる男の、面獅の如く、色あく迄黑きが、馬を飛して蒐出たり。公孫瓚も槍を撚て突出し、橋の上にて只二人二時ばかり戰ひけるが、公孫瓚つひに叶ず、馬を打て走りけるを、文醜のがさじと追かけ、直ちに中軍へ蒐入、左に突右に撞て人なき處を行が如し。北平の軍勢あへて當る者なく、しどろに成て見えければ、公孫瓚が大將四人、取卷て討たんと四方より進みけるを、文醜少も畏ず、黑烟を立て戰うたり。暫ありて一人の大將槍に中て馬より落ければ、殘る三騎の大將叶じとや思ひけん、馬を打て逃はしる。文醜勝に乘て公孫瓚を討んと馳まはりければ、公孫瓚膽を冷して山の間を走る所に、文醜急に追かけ、速に降らば命を扶んと呼はる聲、耳根に響きければ、弓矢をかなぐり捨て逃けるに、乘たる馬岩に跌き、膝を折て倒れければ、公孫瓚すでに討れぬべく見えける所に、誰とは知ず甲盔をも披ざる大將只一騎、槍を提て馳來り、文醜と火を散して戰ひければ、公孫瓚不思議の命を扶かりて山の

心得たりとて蒐ふさがり、了に耿武を斬ければ、關純も文醜に討れにけり。袁紹すでに冀州に入て、太守韓馥を奮武將軍に封じ、民を安んじ賢を招き、田豐、沮授、許攸、逢紀等を重く用ひて國の政を治めさせければ、權柄こと〴〵く袁紹に歸して、韓馥は在ども無が如に成果、いまこそ耿武が諫を思ひ知て後悔すれども及ばず、心の内日夜苦で、了に妻子をも打棄、只一人陳留に行て太守張邈を賴んで居たりける。北平の公孫瓚は、此時すでに勢を揃て打出けるが、冀州早袁紹が手に入たると聞て、弟の公孫越を遣し、約束の如く冀州を二つに分んと云。袁紹對面して申けるは、國を分つは重き事なり、人傳には爭か致さん、公孫瓚自ら來られば我必ず國を分たん。此に依て公孫越空く回る所に、半途にて一手の軍馬傍より打て出、われは董卓に仕し者共なり、今日比の仇を雪と呼はりて、四方より雨の降ごとく矢を放ちければ、公孫越つひに亂矢に射殺さる。士卒わづかに命を扶かり、公孫瓚に見えて右の趣を語りければ、公孫瓚怒て申けるは、袁紹さきに書簡を以て共に冀州を分ち取んと云送り、却て我を欺て國を奪ひ、今又董卓が勢と號して吾弟を射殺せり、我なんぞ坐ら辱を受るに忍んとて、直ちに冀州を指て推よせたり。袁紹これを聞て、さらば打て出て蹴散さんとて、三手に配て磐河の橋より東にぞ陣を取ける。公孫瓚は橋より西に馬を控て、自ら大音あげて、義に背の賊いづくに居

御用心あるべしと告たりしかば、韓馥大に驚き、荀諶、郭圖等を召て如何せんと議す。荀諶申けるは、公孫瓚燕代の兵を起し、長く驅て攻きたる、其鋒あたり難し、殊に劉玄德、關羽、張飛とて、世に懼き三人の兵あり、若合戰に及びなば、我國の破れんこと目前にあり、今袁紹は智勇人に超て、手下の名將その數を知ず、殊に四代三公に昇て、恩德を四海に施し、萬民の望ところ此人に係れり、早く袁紹を御頼ありて、共に國を守り玉はば、公孫瓚手ざす事も候まじ。韓馥然るべしと同じければ、長史耿武と云もの大に諫て曰、袁紹いま勢ひ窮り力盡て、偏に我鼻息を仰ぎ頼む、譬ば小兒の母の懷に抱かれて、若乳を飲しめざれば、立どころに餓死するが如し、焉ぞ國を授て頼と云の理あらんや、是まことに虎を引て群れる羊の中へ入しむるが如し、必ず此事を休玉へ。韓馥が曰、われ本は袁氏の家より出たる者なり、況や才能袁紹に及ばず、古の人だにも才ある者には國を讓る、汝等諫ること勿れとて、別駕、關紀と云ものを使として、袁紹をぞ迎へける。冀州の舊臣これを見て、國の滅亡すでに至れり、不如身を全せんとて、官を捐て遁れ去もの三十人に餘れり。されども耿武は忠義の心深かりしかば、關純と云ものを語らひ、何とぞして袁紹を殺さんと思ひ、半途に出て木陰に藏れ、今や來ると待居たり。數日過て袁紹兵を引て來りければ、二人刀を提て斬て蒐けるを、袁紹が大將顏良

通俗三國志 巻之三

○趙雲大戰磐河

董卓すでに長安へ沒落して、國々の諸侯みな己が領國に回りければ、袁紹も河内郡まで引退、兵粮に事を缺で、冀州の太守韓馥に資を求んとす。手下の大將逢紀と云もの進み出て申けるは、大丈夫の士たる者は、大なる志を立て天下に縱橫すべし、何ぞ區々として人に託て資を求べけんや、夫冀州は富饒の地にして、金銀兵粮きはめて多し、將軍早く此國を奪て身を立るの本とし玉へ。袁紹が曰、いかなる計を用てか之を取ん。逢紀が曰、ひそかに北平の太守公孫瓚が方へ書簡を以て、冀州を共に攻て二つに分ち取んと云つかはさば、彼必ず喜で兵を起べし、將軍又ひそかに韓馥に内通し玉はば、韓馥元より臆病不智の者なり、必ず將軍を賴べし、其時計を用て奪ん事掌の内にあり。袁紹大に喜び、卽時に北平へ書簡を送りければ、公孫瓚ひらいて見るに、共に兵を起して冀州を攻取んとの事なりしかば、願ところの幸かなとて、軈て兵をぞ起しける。袁紹これを聞て、乃ち冀州へ使を遣し、今北平の公孫瓚その國に攻入らんとす、

へ遥かへり、此より劉表と孫堅と互に讐を結んで、軍の絶る隙もなし。

の路に出ければ、蒯越兵を引て馬を出す。孫堅驚て問て曰、蒯越いかなれば兵を引て道を遮る。蒯越あざ笑て曰、汝は是漢の舊臣、なにとて傳國の玉璽を奪て謀叛せんとはたくむぞ、早々に玉璽を還せ、快く路を開かん。孫堅大に怒り、憎き奴原が狼藉かな、蹴ちらして通れと下知すれば、黄蓋槍を撚て突て蒐る。蔡瑁刀を舞して馬を出し、火を散して戰ひけるに、黄蓋鐵の鞭を振あげ力を出して打けるが、打はづして蔡瑁が心當を微塵に打碎きければ、蔡瑁此に怕れ馬を回して逃はしる。孫堅追討に進んで、日すでに西山に傾ける時、山の後より一手の勢打て出ければ、之を見るに眞先なるは荊州の太守劉表なり。孫堅馬上より禮を施して曰、足下いかなるゆゑに袁紹が詐を聞て、鄰國の交を忘玉ふぞ。劉表答て曰、汝傳國の璽を盗は叛逆の企なり、我なんぞ討ざらん。孫堅誓ひを成て曰、われ玉璽を盗ざるは天地神明の照覽あり、若詐らば必ず運命盡て、人手に掛りて亡ぶべし。劉表あざ笑て曰、汝少兒の戯をなすが如く、左樣の誓を成たればとて、容易こゝを通べきか、汝が軍中を明に我に捜させなば快く通べし。孫堅腹を立て、汝いかなれば我を輕ずるぞとて、馬を飛して切て蒐る。劉表急に退きければ、孫堅兵を引て走らんとするに、四方の伏勢一度に起り、蔡瑁蒯越兵を下知して餘さじと攻ければ、孫堅が勢こと〴〵く討れ、程普、黄蓋等も命を棄て圍を出、わづかに六七騎に成て這々江東

安に向ふの計を議せんとするに、曹操すゝみ出て曰、われ始め大義を起して天下の爲に害を除く、國々の諸侯も皆忠義に仗て來り玉へり、然るに我計を用ひ玉はず、事みな相違して日比の心に背き、今又疑を爲て兵を進めず、大に天下の人に笑ひ罵る、我甚だ將軍の爲に之を羞と云ければ、袁紹等答ふべき詞なく、無興げにして退散す。曹操わが陣に回り、袁紹等みな私の心を懐て始終よかるべしとも思はざりしかば、自ら手下の勢ばかりを引て楊州へ引退く。公孫瓚これを見て、劉玄德を呼て申けるは、我袁紹を見るに、無能にして用ふるに足ず、後必ず變あらん、暫く本國へ引回り、時の至るを相待べし、御邊も平原に回り玉へとて、諸共に陣屋を收て去にけり。兗州の刺史劉岱は、東郡の太守喬瑁に兵糧米を借けるに、喬瑁さらに從はざりければ、劉岱大に怒り、夜中に攻入て喬瑁を斬殺す。箇樣に國々の諸侯心離て散亂しければ、袁紹かくては叶まじ、暫く洛陽を引てこそ又計をも致さめとて關東へ退きければ、國々の諸侯も思ひ／＼に回りける。荊州の太守劉表は字は景升とて、身の長八尺、乃ち漢室の宗親なり。時に延平の蒯越、襄陽の蔡瑁と云もの二人、國の政を攝りけるが、或日袁紹が方より早馬來り、孫堅玉璽を盜んで江東へ逃下る、路を塞で討止よと告ければ、聽て一萬餘騎の勢を調へ、路々に關を居て、今や來ると待かけたり。孫堅は斯ることとも知ず、已に荊州

るか、我知ざる所は天地神明も照覧あるべし、我もし果して玉璽を匿さば、弓矢の運盡て人手に掛て亡べしとて、天を指て誓を成ければ、國々の諸侯みな告て曰、孫堅かくの如く誓を成うへは、定めて詐は候まじ、必ず人の虚言ならん。袁紹大に怒て、向に告知せたる軍士を呼出し、昨夜井の中より取出す時この人は無りけるかと云ければ、孫堅大に怒て曰、さしも己は斯る大事の詐を申て、我を害せんと巧けるかとて、劍を拔て斬んとす。袁紹も劍を拔、汝この者を斬たらば我を欺き得んやと云て、孫堅に立向ふ。孫堅も劍を提げ小跳して蒐りければ、二人の氣色を見て、袁紹が後には顔良、文醜なんど云る荒者共、刀を拔て立騒ぎ、孫堅が後には程普、黄蓋、韓當等、手ごとに刀を執て、此間の欝氣ばらしに一軍せんと臂を張。すはや大事出來ぬと見る所に、滿座の諸侯一同に推止め、此は何なる同士軍ぞや、日比の血を歃り盟を成たりしは、浩る爲の故ならずや、この事外に聞えなば、天下の人の嘲を取のみならず、董卓必ず喜ぶべしとて、兩方へ引分ければ、孫堅は馬に飛のり、本國を指て馳かへる。袁紹大に怒り、天下の寳を盗で本國に回る者は、その謀叛疑なしとて、荊州へ早馬を打て、太守劉表に此由を告知せ、途を塞で孫堅を討取しむ。其のち曹操手勢一萬餘騎にて董卓を追蒐、滎陽にて夥しく討れ、今この處へ逃來れりと告ければ、袁紹酒宴を設て諸侯を盡く呼あつめ、長

ば一方の角缺たりしを、金を以て鑲ひ、光武これを宜陽より得玉ひて、位を當今に傳玉へり、適に十常侍が天子を刧して北邙山へ走る時、この玉璽にはかに失たりしが、今天これを君に授玉ふ、必ず九五の位に登て國を子孫に傳へ玉ふべき祥瑞ならん、此處を退いて早く本國に回り、遠大の計を運し玉へと云ければ、孫堅大に喜び、さては明日虚病して本國に回るべし、此事もし外に泄す者あらば、必ず首を斬んとぞ觸たりける。其内に袁紹が同國の者あり、密に行て、孫堅こそ傳國の玉璽を得て、明日本國へ下り候と告ければ、袁紹好ぞ知せたりとて、其者に重く恩賞を與て留めおきけり。夜明ければ、孫堅自ら本陣に來り、袁紹に見えて申けるは、某量らざるに病おこりて軍中の務なり難し、暫く長沙に回りて身を養、重て又馳のぼらんと云ければ、袁紹笑て曰、われ汝が病を能知れり、必ず傳國の玉璽ならん。孫堅色を失て曰、これ如何なる事を宣ふぞ。袁紹が曰、いま國々の諸侯義兵を起して董卓を誅せんとするは、漢の天下を扶て社稷を安んぜんが爲なり、玉璽は乃ち漢朝の寶、汝すでに之を得ば先我に告て、天下靜て後朝廷に還し獻るべきに、密に藏して本國へ下らんとするは、必ず謀叛の心ならん。孫堅が曰、某この事曾て知ず、何ゆゑに疑ひ玉ふぞ。袁紹が曰、建章殿の井の中より得たるは何ものぞ、早く明に出さるべし。孫堅が曰、わが知ざる事を强て責るは、汝謀叛の心起りた

孫堅井中より女の屍を揚る

孫堅
程普

り起り候。孫堅怪みて火炬を燃させ、井の中を捜させければ、一人の女を引擧たり。已に死して日を經たりと見えけるが、其屍すこしも爛ず、裝束まことに尋常の人とは見えず、錦の嚢を項に掛て兩の手にて抱へたりしかば、嚢を取てよく〳〵見るに、紫の糸を以て龍を繡せり。乃ち開き見れば、内に朱き匣あり、鎖を拑開て見れば一つの玉璽あり。方圓四寸にして上に五龍を鐫、一方の角缺たるを黃金にて鑲ひ、受命于天既壽永昌と篆字にて書たりしかば、孫堅いか樣にもこれは尋常の物ならじとて、程普を召て之を問に、程普が曰、これ乃ち傳國の玉璽なり、この玉は昔卞和と云し人、荊山の下にて鳳凰の石の上に棲を見て、其石を楚國の文王に獻る、文王之を見て璞玉なりとて寶とし玉ふ、其のち秦の始皇帝二十六年に良工を擇で琢せ、方圓四寸の璽となし、李斯に命じて受命于天既壽永昌と云篆字を書せ、名づけて傳國の玉璽と號す、二十八年始皇帝巡狩して洞庭湖を渡り玉ふ時、俄に惡風吹起て、御舟すでに覆らんとせしかば、始皇帝この玉璽を水中へ投入玉ふに、忽ち風休浪平に成れり、三十六年又巡狩して華陰に到り玉ふに、怪げなる人玉璽を持て出きたり、帝の從者に與へて、之を祖龍に還せと云て行方しらず失ぬ、此より又秦に復り傳て子嬰に至る、秦の世すでに滅る時、子嬰これを漢の高祖に獻る、後に王莽が漢の天下を奪んとせし時、孝元皇太后これを人に投付玉ひしか

敵の大將徐榮河上より渡して此處に相待ける也。その勢四方より取圍で、曹操を生捕んとする所に、夏侯惇、夏侯淵、十騎餘を引て馳來り、徐榮が勢に斬て入。徐榮大に怒り、馬を打て突て蒐れば、夏侯惇槍を提げて馬を交へ、二三合戰ひけるが、徐榮かなはずして走りけるを、夏侯惇追付て刺殺。曹操心を安じ馬を早めて馳る所に、曹仁、李典、樂進等追々に尋ね來り、又五百餘騎に成ければ、河内郡に陣を取て、諸方の勢を集めける。

○袁紹孫堅奪二玉璽一

國々の諸侯洛陽に入りて皆燒跡に陣を取。孫堅は兵を下知して火を滅させ、建章殿の舊跡に假屋を構へ、士卒を分て内裏の燒跡を掃ひ淸めさせけるに、先帝代々の宗廟みな掘崩して目も當られぬ體なりければ、漸々に取收め、假に三間の宮を建て諸侯ことごとく集り、太牢を具て祭をなし、皆わが陣に回りけり。孫堅その夜、一天雲晴て星月の光り露冷なりしかば、自ら劍を帶て建章殿の階の上に坐し、天文を仰ぎ見るに、紫微垣の中白氣漫々たりしかば、大に嘆て曰、帝星明ならず、賊臣國を亂り萬民塗炭の苦を受て、洛陽の宮殿此の如くに成果たりとて、坐に淚を流しければ、傍なる軍士告て曰、あれに見たる殿の南に、五色の光り井の下よ

が弟の曹洪月影に之を見付て飛が如くに馳きたり、二人の敵を斬殺して馬より飛下、曹操を扶け起しけるが、肩を射られたる矢の瘡重して、馬より墜たる時胸を踏れしかば、已に人心地も無なりにけり。曹洪大に驚て兎角する間に、曹操すこし生出て申けるは、我すでに深手を負たれば、此處にて亡ぶべし、汝は早く落のびて生殘れと云ければ、曹洪が曰、なにとて甲斐なき事を仰せ候ぞ、早く某が馬に乘玉へ。曹操が曰、敵すでに近付ぬらん、汝もし馬に離れば何如して逃ることを得ん、我を打棄早々に落行け。曹洪申けるは、夜いたく深て追かくる敵もなし、かほどに云甲斐なき御心にて、何とて天下の大事を思食立たるぞ。曹操が曰、如何せん我頻に昏迷して動こと能ず。曹洪が曰、いまの天下に曹洪は無とも、一日も主公なくんば有べからずとて馬の上に抱へのせ、我身は甲盛をも脱棄、輕々として走りけり。已に四更の比に至て、敵の喊の聲此彼に聞て、追手の勢すでに近付、前に大河流れて白浪天に漲りければ、曹操大に嘆て曰、わが命こゝに至れり、又活ること能ず。曹洪が曰、早く馬より下て鎧を脱玉へとて、自ら肩に引かけ大河を易々と渡り超、岸の稜に摑み付て這々に上りければ、追手の兵馳きたり、河を隔て矢を放つ。曹操必死を逃れて走りければ、夜も若々と明はなれ、二十里ばかり落ちける所に、小高き岡の上より喊を吶と造りて一手の勢打て蒐る。曹操驚きて之を見れば、

兵を留めて陣勢を張ければ、曹操自ら馬を出し、大音あげて申けるは、逆賊董卓天子を刧して何くへか行、早く此處にて回さずんば、一人も遺さず討止ん。呂布あざ笑ひ、主に背く匹夫、ちかく寄て首を失なと罵りければ、曹操が勢の中より、夏侯惇槍をひねりて突て蒐り、呂布と火を散して戰ふ所に、董卓が大將李傕一軍を引て横合に進む。曹操これを見て、夏侯淵に命じて戰はしむる所に、又西の方より喊を咄と造りて、董卓が大將郭汜兵を引て討て出ければ、曹操又曹仁に命じて防しむ。兩方の軍勢たがひに命を惜ず、矢叫の聲天に響、入みだれて攻戰ひけるが、夏侯惇つひに呂布に打まけ散々に走りければ、呂布馬を驅て短兵急に追蒐、首を斬こと數を知ず。曹操が一萬餘騎、心を一にして戰ふと云ども、敵の猛勢に打やぶられて、滎陽を指て北けるが、殘る勢四千人には過ざりけり。されども敵長追をもせざりしかば、荒たる山の傍に下居て、人馬の息を休め兵粮を使んとする所に、夜の二更のころ、月の光白日の如くにして、山の四面に喊の聲をあげ、徐榮が伏勢こと〴〵く起りければ、曹操魂を失ひ、馬に乘て走りけるを、徐榮急に趕かけ、よく挽て兵と射る。其矢曹操が肩に中りしが、矢を拔べき隙もなく、一命を助からんと馬を拍て叢の中を走るに、徐榮が歩立の兵草の陰に待ちうけ、馬の太腹を二槍突て眞倒に驅落させ、二人ひし〳〵と馳より、已に首を取んとするに、曹操

りける。曹操は自ら袁紹に見えて申けるは、今董卓西國を指て落下れり、早く勢ひに乘て趕かけ玉ふべきに、何とて皆緩々として居玉ふぞ。袁紹が曰、御方諸國の勢ことぐく疲たれば、追掛るとも益あるまじ、先二三日人馬を休めて其のちに沙汰すべし。曹操が曰、董卓洛陽を燒盡し、天子を奪て長安に走る、四海震ひ動て歸するところを知ず、此天董卓を滅し玉ふ也、一戰して天下太平ならん、早く追討に𦲷り玉へ。諸國の太守みな疑を含んで追掛んと云ふもの無、默然として居たりければ、曹操大に腹を立、豎子不レ足ニ與謀一、と云ふに甲斐なき人々とこの大事を謀けることそ越度なれ、よしく人は兎も角もあれとて我陣に馳回り、夏侯淵、曹仁、曹洪等と一萬餘騎を率し、董卓を討止んとて跡を追てぞ馳たりける。去ほどに董卓洛陽を落て帝の御車を早め、長安を指て急ぐ所に、滎陽の太守徐榮と云もの、兵を引て出むかひ、再拜して見えければ、董卓喜んで重く賞す。李儒が曰、某量るに、追手の勢跡を慕て來るべし、先徐榮が新手を滎陽城の傍なる山の後に伏おき、若追かくる敵あらば、其ゆき過るを待て跡を塞がせ、前後より打破るべし。董卓尤とて徐榮に計を授て山の間に深く藏し、呂布に精兵を付て、遙に引さがりて後陣に打せ、御車を守護して徐々と落ゆきけり。案の如く曹操が一萬餘騎飛が如に追かけしかば、呂布これを見て大に笑ひ、さればこそ李儒が計に泄ざりけりとて、

て精兵五千人を擇つかはし、洛中に走り散て、さもある人の家と見れば、先四方を圍で老少男女一人も餘さず斬殺して、家財をこと〴〵く取運しむ、目も當られぬ行裝なり。次の日李傕郭汜二人、洛陽の民を盡く驅立て先長安へ赴かしむ。皆五千三千を一隊として、後より畏しげなる武士共手に刀を提げ、遲なはる者をば路にて切殺し、追立々々急ぎければ、互に推殺され踏ころされ、溝壑に倒れ轉ぶ者いく千萬と云數を知ず。殊さらうたてかりしは、勇猛の武士共、人の妻子を是非なく奪ひ取て、白晝に姦淫し糧食を掠とりければ、啼號聲天地を動す。董卓すでに打立んとして先禁門に火を掛させ、人民の家を燒拂ひ、主上皇族を車に取のせ奉り、又呂布に命じて先帝代々の宗廟、后妃大臣の墓までも、一つも殘さず掘撥せ、其重寶を數千輛の車に積でこと〴〵く長安へ運ばしめ、其のち虎牢關へ人を遣し、關を棄て回り來れと下知しければ、大將趙岑諸所の兵を引拂ひ、關を棄てぞ走りける。國々の諸侯これを見て、すはや敵こそ落たれとて、取ものも取あへず我さきにと込入、汜水關へは孫堅一番に馳入、虎牢關へは玄德一番に馳のぼり、國々の大勢相つゞいて亂れ入。孫堅は馬を飛して洛中を望むに、火焰天を焦し黑烟地を包み、三百餘里が間、さしも繁華なりし洛陽城片時が間に灰燼となりければ、坐に淚を流して淺猿く思ひ、兵を下知して火を滅させ、國々の諸侯は皆燒跡に陣を取てぞ居た

らず燒盡して、久しく瓦礫の地となれり、殊に人民流落して、二百餘年廢れたる所へ、此繁華なる都を棄て遙々と下り玉はんこと、努々然るべからず存ずる也。董卓大に怒て曰、汝等いかなれば國家の大事を妨ぐる、關東は今亂起て、逆徒しきりに攻入んとす、長安は崤函の固ありて隴右に近く、天下第一の要害なり、久しく荒たりとも、彼地に行て宮殿官府を造らんに、何の難か有べきぞ、汝等みだりに舌を動こと勿れ。司徒荀爽すゝみ出て曰、丞相もし都を遷し玉ひなば、洛陽の百官こと〴〵く滅亡すべし。董卓怒て申けるは、われ天下の計をなす、何ぞ少ばかりの百官を憐まん。荀爽又曰、民は是邦の本なり、若都を遷し玉はば、人民盡く恨を含で天下の亂に及ぶべし。董卓以ての外に怒り、憎き己等なにとて我心に背ぞとて、即時に楊彪、黃琬、荀爽三人の官職を剝、自ら車に乘て出ければ、忽ち外より二人きたりて地に跪く。董卓これを見れば、尙書周毖、城門校尉伍瓊也。なに事かあると問ば、周毖が曰、いま都を遷玉ふと聞て諫を申さん爲に來りたり。董卓いよ〳〵怒り、汝二人は敵に內通の心ありけるな、若生ておかば必ず後日の害たるべしとて、武士に命じて首を斬せければ、聞人みな淚を流す。軈て明日都を遷と觸させければ、李儒來り見て曰、今金銀の用意少く候に、洛中の富貴なる家を盡く沒收して、一人も殘さず斬殺し、其財寶を集め玉はば不足なる事候まじ。董卓同心し

我死すとも目を塞じ、安んぞ逆賊と好を結んや、今汝が頸を斬べけれども暫は預け置、早く回て降人に出よ、若遅なはらば微塵に成んとて追立て出しければ、李傕頭を抱へ、鼠の竄が如に去にけり。董卓この由を聞て心怒り、李儒を呼で計を議するに、李儒が曰、呂布既に破れてより兵みな戰ふ心なし、不レ如兵を收て洛陽に回り、天子を長安に遷し奉り、時を待て戰ふべし、近ごろ都の内にて小兒の謠ふ歌の詞を聞ば、西頭一箇漢、東頭一箇漢、鹿走入二長安一、方可レ無二斯難一と云り、この歌の意は、丞相始長安富饒の地に居玉へり、西頭一箇漢とは、高祖西の方長安に都し玉ひ、十二代傳れり、東頭一箇漢とは、光武東の方洛陽に都し玉ひて、今に至るまで又十二代なり、天の運數此の如し、丞相もし長安に遷り玉はば、危き事候まじ。董卓大に喜び、大將趙岑を留て堅く要害を守らせ、急ぎ都に回り、朝廷の百官を集めて申けるは、漢東の方洛陽に都すること二百餘年、氣運すでに衰たり、我天文を考るに、盛氣いま長安にあり、早く都を遷して太平の基を成べし、汝等宜く其用意あるべしと云ければ、司徒楊彪すゝみ出て曰、いま關中零落して人民安き心なきに、又ゆゑ無して都を遷し、代々の宗廟を棄て荒果たる長安に行玉はば、恐らくは百姓鼎の如く沸て、天下の亂止時候はじ。太尉黃琬が曰、いま楊彪が申如く、遷都の事必ず然るべからず、其ゆゑは、王莽が簒逆の時長安一字も殘

○董卓燒長樂宮

呂布打負て逃入たる由本陣へ聞えければ、袁紹大に喜び、檄文を以て孫堅に命じ、兵を引て攻かゝらしむ。孫堅命を受て、自ら程普、黃蓋等を伴ひ、袁術が陣に行て對面し、誓を成て申けるは、我董卓と元より讐なし、今兵を興して自ら矢石を冒し、命を惜ず戰て激ものは、上は國家の爲に忠を盡し、下は百姓の苦を救はん爲なり、然るに足下人の讒を信じて兵粮を送らず、某に敗軍させ玉ふは如何なる故ぞと責ければ、袁術答ふべき言なく、大に怖れて向に讒言したる者を引出し、其首を斬て謝しければ、孫堅これに心足て酒宴をなして居たる所に、手下の兵走り來り、虎牢關より騎馬の客二人きたり、孫將軍に逢んと申し候と告ければ、孫堅乃ち袁術に別て我陣に回り、誰人ぞと問ふに、乃ち董卓が大將に李傕と云もの也と答ふ。孫堅呼よせて問て曰、汝なにとて此に來れる。李傕が曰、丞相董卓つねに將軍の德を望み、今某を以て使として、永く好を結しむ、董卓幸に一人の女あり、將軍の子を壻として、一門の子弟ことごとく郡守刺史に封ずべし。孫堅大に怒て曰、董卓天に逆ひ道に背き、君を弑して惡を成、われ常にその九族を滅して首を都門に斬梟て、天下の人に謝せんと欲す、若しからざる時は、

し眞横樣に蒐出、呂布はしること叨れ、燕人張飛こゝに在と呼はりければ、呂布屹と見て公孫瓚を打棄、張飛と時うつるまで攻戰ふ。國々の諸侯、張飛が槍の次第に亂るゝを見て心の內危ところに、張飛心を激し一聲大に喚きければ、關羽これを見て、今は救ずんば叶ふまじと思ひ、八十二斤の青龍刀を打ふり、馬を飛して切てかゝる。呂布は此にも畏れず、關羽、張飛と又三十餘合戰ひければ、玄德これを見て左右の手に劍を提げ、馬を交へて兄弟三人呂布を取まき、火を散して戰ひければ、國々の諸侯これを見て、心みな酒に醉たるが如し。呂布いよ／＼氣を勵し、戟を指のべ玄德の面を突んとしけるが、突はづれたる所を關羽張飛すき間も無切つけしかば、呂布叶じとや思ひけん、馬を飛して引退くを、玄德勢ひに乘て追かけしかば、國々の諸侯相がかりに攻かゝり、喊の聲大に震ふ。呂布が勢大半討れて虎牢關へ逃入ければ、關羽、張飛關門の前まで推寄て遙に望ば、青羅の傘蓋風に隨て動搖す。張飛大に音を擧、あれなるは董卓と見るぞ、呂布を追て手柄を露したり、董卓を生取ば、是乃ち草を斬て根を除なり、續けや人人とて、馬を拍て登んとするに、櫓の上より大石を投かけ、射下矢雨の如なりしかば、張飛のぼるべき樣なく、齒を切り城を睚て徒にぞ立たりける。此を世に傳て虎牢關の三戰と云ふ。

岡の上に登りて望み見るに、呂布が一軍虎狼の如く錦の旗を閃かし、進み出て打て蒐る。上黨の太守張揚が内に穆順とて名を得たる大將あり。呂布が來るを見て槍を提げて馬を出し、只一合にして馬より下に斬落されければ、八ヶ國の諸侯みな膽を冷す。又北海の太守孔融が内に武安國と云る大力あり。進み出て申けるは、某太守の恩を受ること十年に餘れり、呂布が首を取て忠を致さんとて、重さ五十斤に造りたる鐵の鎚に五尺あまりの柄をつけて輕げに打ふり、馬を飛して進ければ、呂布これを見て、やさしくも見ゆる敵かなとて、戟を舞して十合あまり戰ふと見えし、武安國腕を斬落され、彼鎚を地に投すて、馬を拍て走りければ、八ヶ國の諸侯相蒐りに蒐て武安國を救ひ回る。袁紹この由を聞て如何せんと議しければ、曹操が曰、呂布が英雄天下に敵なし、十八ヶ國の諸侯を一手になし、一齊に蒐りて呂布を生捕玉へ、呂布もし誅せられれば、董卓自ら滅べし。時に早馬きたり、呂布又兵を引て推よせたりと告ければ、袁紹急ぎ八人の諸侯に命じて防しむ。呂布直に公孫瓚が陣に討て蒐りければ、公孫瓚槊を舞して戰はんとするに、呂布眼を怒らし喚て蒐りければ、公孫瓚膽を冷して一支も支へず、馬を拍て走りけるを、呂布急に追來る。呂布が乘たる赤兎馬は一日に千里を走り、其疾こと猛風の如なれば、已に追付んとしける所に、一人の大將大の眼を怒らし、虎鬚みな倒に竪りて、丈八の矛を舞

鮑信、喬瑁、袁遺、孔融、張揚、陶謙、公孫瓚、八ヶ國の諸侯を分ち虎牢關を守らしめ、曹操を遊兵と成て弱からん方を救しむ。八ヶ國の諸侯兵を引て推寄、一番に河内の太守王匡備を立て進みければ、呂布これを見て直に三千餘騎を引て出向ふ。王匡馬を駐めて敵の陣を見渡せば、呂布まつ先に進み出、三叉の束髪に紫金冠を戴き、朱地の錦の百花袍を著て連環の鎧を重ね、獅子皮の帯に弓箭を掛、手に畫桿の方天戟を提げ、無双の名馬赤兎と云るに打騎、往來馳騁する行裝いか樣よの常の者とは見えず。呂布は武士の中にて第一、赤兎は馬の中にて第一なれば、世の人の口ずさみに、人中の呂布馬中の赤兎と云ひけるも理かなと覺たり。されば寄手の大勢も此に氣を吞れて、進まんとする者なかりければ、王匡左右を顧て誰か出て戰はんと云けるに、河内の猛將方悅と云もの、槍を提て蒐出、二三合戰ふと見えしが、呂布に馬より斬て落さる。王匡大に怖れ、馬を回して走りければ、呂布勢ひに乘て追かけ、左に突右に撞大勢の中を斬て廻りければ、寄手の勢討るゝ者數を知ず。王匡すでに危く見えければ、喬瑁袁遺が二手の勢一度に蒐りて防ぎ戰ひ、王匡を救ひ出す。呂布は大に打勝、ながら追なせそとて徐徐と本陣に回る。寄手は敗軍を收めて三十里退き、呂布が英雄敵すべき者なし、如何せんと議する所に、斥候の兵走り來り、呂布又兵を引て此處へ寄ると告ければ、諸人大に驚き、急ぎ

○呂布大戰虎牢關

去ほどに華雄すでに討れて、敗軍こと〴〵く汜水關に逃かへりければ、李肅大に驚き、早馬打て洛陽へ急を告。董卓以ての外に仰天し、李儒を召て計を議するに、李儒申けるは、今御方大將を討れて、寄手いよ〳〵勢ひに乘、これ皆袁紹を盟主として諸方の惡黨を集むるが故也、袁紹が叔の袁隗大傅の官にて都の中にあり、若內應なんどせば由々しき大事なり、不如まづ之を除て後、丞相自ら御馬を出し玉はば、逆徒の退治踵を回べからず。董卓大に喜び、李傕、郭汜に五百餘騎を授け、太傅袁隗が家を圍んで、男女一人も殘ず切殺させ、其のち二十萬の勢を起して二手に分つ。一手は李傕、郭汜を大將として其勢五萬餘騎、汜水の關を堅めて、出て戰ふこと無からしむ。一手は董卓自ら十五萬の勢を率して李儒、呂布、張濟、樊稠等を從へ、虎牢關をぞ固めける。此關は洛陽を離こと五十二里にして、若兵を進むる時は國々の諸侯の通路を塞ぐ第一の要害なれば、呂布に三萬の精兵を付て、關より外に陣を取しむ。此よし傳て袁紹が陣に聞えければ、急ぎ國々の諸侯を集めて計を議するに、曹操が曰、董卓自ら虎牢關を堅く守て、御方諸侯の通路を塞ぐ、御方も二手に配て之を攻べし。袁紹しかるべしとて王匡、

二斤の青龍刀を提げ、馬を飛して馳てゆく。國々の諸侯この勝負いかゞと危ところに、遙に鼓の聲喊の聲天地を響し、山川動搖しければ、諸人みな色を失ふ。關羽は馬を飛して少もためらはず、敵の大勢を八方に追ちらし、猛虎の千羊の群に入が如く、直に中軍に蒐入て、只一刀に華雄を斬て落し、首を取りて引かへすに、數萬の敵軍その威風に畏れて近付ものゝ無りける。關羽徐々と本陣に回り、華雄が首を座の眞中に投出して、適の酒を飮けるに、其酒なほ溫なり。國々の諸侯大に喜び、一度に聲を擧てのゝめきければ、忽ち玄德の後より長八尺ばかりなる男の、虎鬚みな倒に竪、眼の光星の如くなるが、雷の如き聲にて叫で曰、關羽すでに華雄を斬玉へり、此時に乘て洛中に攻入、董卓を生捕ずんば、何の時を期すべきぞとて、一丈八尺の蛇矛を提げ馬に乘て出んとす。諸人これを見れば張飛なり。袁術大に怒て曰、國々の諸侯高官の名將も自ら讓りて口を緘るに、汝等縣令の手下に居て、爭かさる事有べき、追立て打出せと罵ければ、曹操諫て曰、すでに功あらば恩賞すべし、何ぞ貴賤の別あらん。袁術が曰、もし此奴原を用ひ玉はば、我は必ず本國に回るべし。曹操が曰、爭か一言に依て此ほどの大事を廢べけんやとて、密に公孫瓚に告て玄德、關羽、張飛を伴て退しめ、其のち國々の諸侯おのおの陣中に回りければ、曹操ひそかに玄德の方へ酒肴を送て其怒を慰めける。

関羽華雄が首を取て本陣に回る
関羽
雑卒

色を失ふ。袁紹股を拍て嘆じて曰、惜かな我大將顔良、文醜二人は、勢を催していまだ來らず、若一人なりとも此に在ば、華雄を討んこと手の内にあり、國々の諸侯多くの大將ありと云ども、華雄に敵する大將ひとりも無、天下の嘲り後代の羞ならずやと云ければ、一座默然として答ふる者なし。時に階下より一人すゝみ出て、某ねがはくは華雄が首を取て獻らんと呼はる。其聲鐘のひゞくが如くなりければ、諸人驚て之を見るに、其人身の長九尺五寸、髯の長さ一尺八寸、丹鳳の眼臥蠶の眉、面は重棗の如なり。袁紹問て曰、これ如何なる人ぞ。公孫瓚答へて曰、これは玄德の弟に關羽と申もの也。袁紹が曰、いかなる官職かある。公孫瓚が曰、玄德に從て馬弓手なり。袁術これを聞て大に怒り、汝は國々の諸侯に大將なきを欺か、馬弓手の分として爭か進み出て舌を動す、寄や者共、この曲者を亂棒に打出せと罵りければ、曹操急に諫て曰、暫く怒を止玉へ、此人すでに大言を吐出せる上は、定めて其身の覺あらん、試に出向はしめ、若勝ずんば罪を正し玉へ。袁紹が曰、馬弓手なんどを出して戰はしめば、必ず華雄に笑はれん。曹操が曰、この人の體よの常にあらず、華雄よも馬弓手とは思ふまじ。關羽が曰、某もし華雄が首を取ずんば、必ず軍法に行ひ玉へ。曹操が曰、早敵も近付たり、此酒を飲で戰へとて、暖めたる酒を與ければ、關羽申けるは、まづ華雄が首を取來て此酒を飲べしとて、八十

て申けるは、鮑將軍の弟拔懸して、其身も討れ若干の軍馬を失ひ、今又孫堅も破れて御力みな氣を隕す、如何すべきと云ければ、一人も言を出す者なし。袁紹あまねく座中を見るに、公孫瓚が後に立たる三人、その貌尋常ならず、冷笑て居たりければ、乃ち問て曰、公孫太守後に立たるは何人ぞ。公孫瓚答て曰、これは某幼より同窓の朋友にて、平原の令、劉備字は玄德にて候。曹操が曰、黃巾の賊を破りたる人か。公孫瓚が曰、しかり。袁紹が曰、玄德は漢室の宗親なり、座を與よ。玄德辭して曰、某は小縣の令なり、安んぞ坐することを得ん。袁紹が曰、われ御邊の名爵を敬にあらず、元帝室の宗親にして國の爲に功多を敬なり。玄德拜謝して末座に著玉へば、關羽、張飛その後に立。しばらく有て斥候の人きたり、華雄兵を引て推よせ、長き竿に孫堅の朱き盔を指あげ、様々に罵り候と告ければ、袁紹が曰、たれか行てこの敵を破らん。忽ち袁術が後より、武勇の譽取たる俞涉と云る大將すゝみ出、某ねがはくは行んとて、兵を引て打て出、戰ひ三合ならざるに、華雄に一刀に斬て落されけり。敗軍走り回て其由を告ければ、一座の諸侯大に驚く。時に太守韓馥申けるは、われに一人の名將潘鳳と云ものあり、華雄を容易討とるべし。袁紹喜てそれ呼と云ければ、潘鳳聲に應じて、手に大なる斧を提げ馬を飛して出にけり。暫くありて人來り、潘鳳も一刀に斬れたりと告ければ、滿座興を醒して

華雄汜水関の討手となる
華雄
李儒

董卓
呂布

まり戰ひ、又馬を打て走りけるに、華雄つゞいて追ければ、孫堅弓に矢をはげ、引返して二筋まで放ちけるに皆中らず。第三の矢を番ひ、餘りに強く挽て弓二つに折ければ、射のこしたる矢をかなぐり棄て、林の内へ逃入ける。祖茂走り著て申けるは、君の著玉へる盔の符は甚だ朱して人の目に掛り候ゆゑ、華雄いづくまでも追かけ候、早く脫で某に與へ玉へ。孫堅げにもとて、馬上にて祖茂が盔と著かへ、左右に分れて走りければ、案の如く朱き盔を著たる者が東の方へ走るを見て、華雄兵を下知して飛が如くに追かくる。祖茂いまは是まで也と思ひ、著たる盔を卸で、傍なる在家の燒のこりたる柱の立たるに掛おき、身を潛て大木の後に隱れければ、追手の兵月影に朱き符を見て、初の程は雨のふる如く矢を放ちけるが、暫ありて、此は人にては無ぞ、孫堅のがすな討取と聲々に呼はり、華雄馬を飛して林の中へ尋ね入。祖茂は大木の陰に隱れ、華雄が來るを見て不意に討んとしけるが、華雄屹と見つけて雷の落かゝるが如く喚て蒐り、一刀に祖茂を斬、その首を取て徐々と引回す。孫堅はこの間に辛き命を扶かり、敗軍を集けるに、討れたる者數を知ず。殊に祖茂が命に易いて討死したるを見て、しきりに涙を流してなげき悲む。袁紹は本陣に在てこの注進を聞、いま孫堅大に破れて其儘にて外にあらば、敵必ず勝に乘て討て出べし、早く陣を退かしめよとて、人を馳て呼かへし、國々の諸侯を集め

孫堅自ら戰んとするに、程普矛を舞して打て出、戰ひ二三合にして胡軫喉を突透され、馬より落て死ければ、孫堅勢に乘て汜水關を打やぶらんと、逃ぐる敵に追すがつて攻かゝりけるに、華雄兵を下知して雨のふる如く射させければ、孫堅も兵を收て梁東に陣をとり、胡軫が首を袁紹が本陣に送り、袁術に告て兵粮を求む。或人孫堅を恨むる事ありて、袁術に私語けるは、孫堅は江東の猛き虎なり、若洛陽を破て董卓を殺しなば、必ず又禍を成ん、是狼を除て虎を得る也、不如いま兵粮につまらせて、自ら亂れ散やうにし玉へと讒言しければ、袁術げにもと思ひ、了に兵粮を與へざりけり。是に因て孫堅が陣には兵粮に事を缺で、軍中自ら亂れ、疲れ怠て居たりしかば、華雄が勢この體を見て、急に李肅に報ず。李肅聞て華雄に向て曰く、われ一軍を引て小路を廻り、孫堅が陣の後を攻べし、御邊は夜半の比關前より推よせ玉はば、孫堅必ず擒とならん。華雄喜て其夜の半に、月ことに明なりければ、鼓を打喊を作て驀地暗に斬て下る。孫堅大に驚き、兵を下知して戰ふ所に、後より李肅が勢走り散て火を掛ければ、孫堅が勢前後に度を失ひ、殊さら飢つかれて弓をも墓々しく挽得ず、火の中烟の内とも云ず、上を下へと騷動す。孫堅這々に逃れ出、馬を打て走りければ、程普黃蓋等も蒐隔てられて、祖茂一人相從へり。後より華雄兵を驅て飛が如に追かけ、已に近く成ければ、孫堅取て回して十合あ

と、嚢を探て物を取出すが如くならんと呼はりければ、諸人これを見るに、身の長九尺あまりなる男の一荒あれて、面は血を洒たるが如く、虎體狼腰、豹頭猿臂、關西の人に華雄と云る猛將なり。董卓大に喜び、好くも申たりとて驍騎校尉に封て五萬の勢を授け、李肅、胡軫、趙岑を副將とし、行て汜水關を守らしむ。この由袁紹が方へ聞えければ、濟北の相鮑信と云もの、密に弟の鮑忠を呼で申けるは、長沙の太守孫堅すでに先手を望みぬる上は、我等いつも後陣に在て功名する事有べからず、汝小路を廻て汜水關に推よせ、一攻せめて敵を試よと云ひければ、鮑忠三千餘騎を率して潛に小路より推よせ、喊の聲を揚る程こそあれ、拔つれて攻上りければ、今參の華雄が勢、すはや敵こそ寄たるはと云もあへず、五百餘騎轡を双べて驀地暗に切て下る。鮑忠が三千餘騎眞倒に蒐落され、散々に成て走りければ、華雄馬を飛して追かけ、一刀に鮑忠を斬て落し、首を取て洛陽へ上せければ、董卓甚だ喜び、又千餘騎を指そへて重く恩賞を與へ、關の前に陣を取て、出で戰ふこと無らしむ。長沙の太守孫堅は、鮑忠が拔懸して討れたるをも知ず、程普、黃蓋、韓當、祖茂四人の大將を從へ、汜水關に推よせ、逆臣を扶くる匹夫なんぞ早く降らざると呼はりければ、華雄が副將胡軫これを見て討て出で、孫堅が首を取んと望みければ、華雄乃ち五千餘騎を分あたふ。胡軫眞先に馬を出し、關を下りて向ひければ、

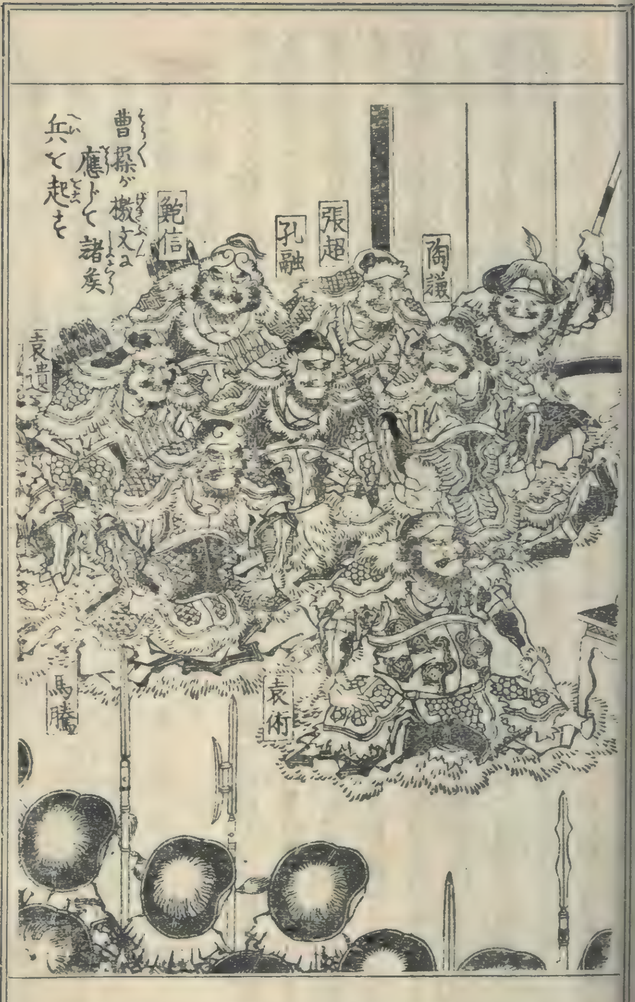
盟ひ了て血を歃り、諸將及び國々の軍勢までも慷慨して、涙を流し齒を切て踴り揚り、逆臣を討んと勇み進む。其のち袁紹壇を下り大將の座に著ければ、國々の諸侯みな禮を施して次第に列坐す。酒宴數刻に及て袁紹申けるは、われ諸人を歴心なし、汝等われを以て盟主とす、功ある者は必ず賞し、罪ある者は必ず罰せん、國に常刑あり、軍に紀律あり、各愼て怠ること勿れ、我弟の袁術は兵粮を奉行して諸大將に分つべし、誰か又先手に進んで汜水關を攻やぶらん。長沙の太守孫堅が曰、某不才に候へども、願くは先鋒たらん。袁紹が曰、御邊の勇烈まことに先手の職に當るべしとて、盃を勸て祝しければ、孫堅まづ手勢を引て汜水關に殺奔す。關を守る者共いそぎ此由を報じて相府に訴ければ、李儒乃ち董卓に見えて曰、天下の諸侯曹操に語はれ、兵を起して汜水關に攻かゝる、早々に討手を向ずして敵に難所を超られなば、由々しき大事にて候はん。此時董卓は酒色に溺れて居たりしが、大に驚きていかゞせんと議するに、呂布あざ笑て曰、少しも御心を苦め玉ふな、某敵の大勢を見て芥の如くに存ずる也、國々の諸侯の首を一々に討取て、大地に梟双べんことはこの呂布が願にて候、早く兵を率して打向はん。董卓喜で曰、われ呂布が有ん限は、枕を高して安臥すべし。時に一人進み出て、鷄を割に焉んぞ牛の刀を用ん、この度の軍には呂布を用玉ふまでもなし、某罷向て國々の諸侯の首を取こ

さん。張飛が曰、適に某が董卓を殺さんと云し時、若止め玉はずんば今日の亂は出來候はじ。關羽が曰、無用の事な云玉ひそ、早く支度あるべしとて、用意一々に備りければ、玄德五六騎を引て公孫瓚と共に打立玉ふ。角て十八ヶ國の諸侯ことぐ\く會合して、掛双たる陣は二百餘里に續き、數十萬の兵尺地ものこらず充滿たり。曹操大に喜び、牛を殺して計を議しければ、太守王匡が曰、いま共に義兵を起して逆賊を伐んとす、宜く盟主を立て惣軍の首將とし、其のちに進むべし。諸人この義しかるべしとて、誰彼と相讓ければ、曹操が曰、袁紹は四代まで三公に昇り、門下に故吏多く、漢の名將の後胤なれば、宜く盟主と定べし。袁紹再三辭退しけれども、諸人みな一同に勸ければ辭するに詞なく、次の日三重に壇を築き、五方の旗を立て、上には白旄黃鉞兵符印綬を連ね、袁紹衣冠を整へ劍を帶て壇にのぼり香をたき、再拜して誓て曰、

漢室不幸、皇綱失統、賊臣董卓乘釁縱害、禍加至尊、虐流百姓、大懼淪喪社稷、剪覆四海。紹等糾合義兵、並赴國難、凡我同盟、齊心戮力、以致臣節、殞首喪元、必無二志。有渝此盟、俾墜其命、無克遺育、皇天后土、祖宗明靈、實皆鑒之。

第十三鎭　西涼太守馬騰字壽成
第十四鎭　北平太守公孫瓚字伯圭
第十五鎭　上黨太守張楊字稚叔
第十六鎭　烏程侯長沙太守孫堅字文臺
第十七鎭　祁鄕侯渤海太守袁紹字本初

右の人々その勢、或は二萬或は三萬、思ひ〳〵に洛陽を指て馳のぼる。中にも北平の太守奮武將軍公孫瓚は、一萬五千餘騎にて馳のぼり、德州平原縣を通る所に、一村茂りたる桑の樹の中より、黃なる旗を指たる兵四五騎が程かけ出、ちかく成て盡く馬より下ければ、能々見るに劉玄德なり。何とて此に居玉ふぞと問に、玄德の曰、某黃巾の賊を平げたる勸賞に、平原の縣令と成れりとて、迎て城中に入。しばらく人馬の足を休め、公孫瓚問て申けるは、これなる二人はいかなる人ぞ。玄德の曰、これは關羽張飛とて某が弟にて候。公孫瓚が曰、かの黃巾の賊を破りたる人か、今いかなる官職かある。玄德の曰、關羽は馬弓手、張飛は歩弓手なり。公孫瓚が曰、惜いかな大丈夫を埋おく、今董卓亂を成て、天下の諸侯これを誅せんとす、御邊この微職を捨て一同に逆臣を討玉はば是大なる忠義ならん。玄德の曰、われ願くは行て忠を盡


曹操が檄文に應じて諸侯兵を起す
鮑信
張超
孔融
陶謙
袁遺
馬騰
袁術

劉岱
王匡
張邈
喬瑁
公孫瓚
袁紹
孔伷
張楊
韓馥

義之師、來赴忠烈之會、扶持王室、拯救黎民。檄文到日、速可奉行。

これを見て國々の諸侯兵を起す人々には、

第一鎭　後將軍南陽太守袁術　字公路

第二鎭　冀州刺史韓馥字文節

第三鎭　豫州刺史孔伷字公緒

第四鎭　兗州刺史劉岱字公山

第五鎭　河内郡太守王匡字公節

第六鎭　陳留太守張邈字孟章

第七鎭　東郡太守喬瑁字元偉

第八鎭　山陽太守袁遺字伯業

第九鎭　濟北相鮑信　字　允誠

第十鎭　北海太守孔融字文擧

第十一鎭　廣　陵太守張超字孟高

第十二鎭　徐州刺史陶謙字恭祖

衛國の人に、樂進字は文謙と云もの也、ねがはくは共に董卓を伐んと云ければ、乃ち用ひて帳前の吏とす。又兄弟二人、夏侯惇字は元讓、夏侯淵字は妙才と云もの、沛國譙郡の人なり、屈強の兵三千餘騎にて馳加る。元來曹操が父曹嵩は、夏侯氏の子たりしが、曹氏に養はれて姓を改む。今この二人も皆ちかき一族なりしかば、共に心中の計を議す。數日すぎて、曹操が兄弟曹仁字は子孝、曹洪字は子廉、千餘騎を引て來り加る。曹操これより毎日軍馬を調練するに、又一人鎗を提て出來り、將軍に從て逆臣を誅せんと云ければ、其名を問に、山陽鉅鹿の人にて、李典字は曼成と答ふ。曹操衛弘大に喜び、家財を惜ず太刀、薙刀、甲、盔の類を造り、一齊に備ければ、五千餘騎の兵を調て陳留に陣を取、なほ國々の勢を待。これを見て金銀を送り兵糧を運んで、忠義を扶る者も多かりけり。この時袁紹は渤海郡に在て、曹操が義兵を興よしを聞、いそぎ麾下の大將を集め、兵を集むる計を議しけるに、年來の大將に、田豐、沮授、許攸、審配、郭圖、顏良、文醜なんど云もの共、みな忠義の志を激し、卽時に三萬餘騎を起し、曹操に力を協せんとて夜を日に繼で馳のぼる。曹操が諸國へ觸たる檄文に曰、

操等謹以㆓大義㆒布㆓告天下㆒、董卓欺㆑天罔㆑地、滅㆑國弑㆑君、穢㆓亂宮禁㆒、殘㆓害生靈㆒、狼戾不仁、罪惡充積。今奉㆓天子密詔㆒、大集㆓義兵㆒、誓欲㆘掃㆓淸華夏㆒、勦㆗戮群凶㆖。望興㆓仁

義なるべしとて、叉劍を鞘に收め、夜いまだ明ざるに馬を飛して東郡に落ゆきけり。曹操夢さめて陳宮を尋ぬれども見えざりしかば、扨は我不義を疾で捨たるならんとて、急に馬に打乘り、夜を日に繼で陳留へ馳てゆく。

○曹操起レ兵伐二董卓一

曹操すでに陳留に下着して、父を尋ねて對面し、事の樣ありの儘に語りて、義兵を發さんと議しければ、父曹嵩が曰、わが家貯たる物なければ、大義の計略かなひ難し、此處に衞弘と云ものあり、家あくまで富榮て、本より忠義の志深し、此人を語らひ、共に大義を思ひ立べし。曹操乃ち酒宴を設て衞弘を請じ、再拜して申けるは、董卓いま逆威を振ひ、天子を廢して民を害し、某忠を盡して再び天下を治めんと存ずれども、力足ずして大義を思ひ立こと能ず、足下は元來忠義の心深き丈夫なるを知て、此ゆゑに告申なりと云ければ、衞弘が曰、われ久しく義兵を起さんと思へども、力を協べき人なきを恨む、御邊まことに忠義の心あらば、我家財を以て助べし。曹操大に喜び、先詔を受たりと號して四方に觸を廻し、與力の兵を催し、白き旗を造て忠義の二字を書つけしかば、次の日より來り集まる者雨の如し。一人すゝみ出て、某は

操卒爾に科なき人を殺せり。曹操が曰、悔るとも及ばじ、早く馬に乗て逃去ん、いざさせ玉へとて、飛が如くに二里ばかり來りければ、呂伯奢驢馬に打乘り、酒樽二つ鞍につけ、手に菓を持て回り來り、二人の走るを見て、何ゆゑに早く回り玉ふぞ、すでに一疋の猪を用意せり、平に一宿し玉へと呼はりければ、曹操答て、片時も急ぐ路にて候と云すて、馬を打て走りけるが、屹と心づいて取て回し、呂伯奢を呼で馬より引下し、一刀に胷板を突透す。陳宮驚て曰、知で殺すは是非もなし、今なにゆゑに呂伯奢を殺せる。曹操が曰、この人家に回りて、妻子の殺されたるを見ば、我をよもたゞ置べきか。陳宮が曰、然らず、罪なきを知て殺は大なる不義なり。曹操が曰、寧使我負天下之人、休教天下之人負我と云ければ、陳宮默然としてものも云す。曹操が一言の内、つひには天下を奪んと思ふ心ありければ、千載の後までも、この言を聞て曹操を疾すと云ものなし。其夜月の光に路を求めて、五六里ばかり落行き、傍なる家に宿し、馬より下て休ければ、曹操は此間の疲にや、前後も知ず寐入たり。陳宮心に思ひけるは、我はじめ曹操を天下の忠臣なりと見て、官を棄て伴ひ來りしに、元來この人も狼虎の野心を挾む不當人なり、今日もし殺さずんば、後には必ず天下の禍を成ん、不如いま刺殺んとて、劔を拔て立よりけるが、いや／＼我伴ひ來れるは天下を正さん爲なり、今これを殺すは不

かんとて、夜いまだ明ざるに二人打つれ、日夜を分たず路を急ぎ、三日と申すに成皐と云ところまで到り、已に暮に及びければ、曹操が曰、あれなる林の中に呂伯奢と云ものあり、昔某が父と兄弟の如く交れり、今夜は此家に一宿して、明日又路を急がん。陳宮然るべしとて、二人馬より下て彼宅に行きければ、家主の呂伯奢大に驚て曰、朝廷繪圖を以て緊く汝を尋玉ふ、此ゆゑに汝が父も陳留へ逃隱たり、汝なにとて此に來れる。曹操委く右の事共語りければ、呂伯奢乃ち陳宮を再拜して、足下もし曹操を助玉はずんば、曹氏の一門こと〲く此時に滅べし、殊に官を棄て朝敵を誅伐せんどの御志こそ有難候へとて、曹操に向て申けるは、汝よく陳宮を持成て、心やすく休息せしめよ、我は西の村に行て美酒を沽來るべしとて、自ら驢馬に乗て出にけり。曹操と陳宮と共に休息して居たりしが、夜少し深て、家の後に刀を磨音しければ、曹操怪く思ひ、密に陳宮に私語、この呂伯奢は我まことの叔父にも有ず、今夜自ら酒を沽んとて出たるも覺束なし、もし我等を捕て恩賞を望む心もや有んとて、二人ひそかに立聞するに、刀を磨音なほ休ず、二三人の聲にて縛て殺せと云ければ、曹操が曰、さては疑なし、此方より斬て蒐れとて、二人劍を拔て馳入、男女を嫌ず八人まで切殺し、其のち厨の傍を見るに、生たる猪を縛おきたりしかば、陳宮甚だ後悔して曰、この猪を殺して我等を持なさん爲なるを、曹

連ゆきければ、曹操が曰、われは他國の者なるぞ、卒爾ばし仕玉ふな。奉行申けるは、われ都にて先年曹操を見知たり、況や衣服模様こと〴〵く繪圖に違はずとて、車の上に縛つけ、さらば明日都に送り上せて、萬戸侯に封ぜられ、千金を得て諸人に分ち與んとて、酒宴を設て喜をなし、暮に及で退散せり。夜に入ければ奉行ひそかに曹操を引出して曰、汝は都に在て重く董丞相に用ひられしと聞しが、何故に斯の如なる。曹操が曰、燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知ん、汝すでに我を生取たり、早く都に送て恩賞を被れ。奉行笑て曰、汝われを輕んずる事勿れ、我も沖天の志あり、常に志を同する者なきを恨む。曹操が曰、われは相國曹參が後にして、四百餘年が間漢の祿を食へり、恩を知ざるは禽獸なり、我なんぞ身を屈て董卓に事ふべき、實に忠を盡して國の爲に賊を伐んと思ひしに、天運いまだ時至らず、何ぞ嗟ことをせん。奉行問て曰、御邊いま何くへか行んとする。曹操が曰、われ故郷に回り、天下の諸侯を集めて義兵を起し、董卓を誅せんと思ひしに、運盡て生取れたり、汝再び問こと勿れ。奉行いそぎ自ら其繩を解、席に請じて酒を進め再拜して申けるは、御邊はさしも忠義の士なり、我ねがはくは官を棄て相伴ひ、共に義兵を起べし。曹操大に喜び其姓名を問ば、奉行答て曰、われは陣宮字は公臺と云ものなり、老母妻子こと〴〵く東郡にあり、共に志を合せ衣服を代、馬を改めて落ゆ

を加へて行方しらず失にけり。呂布が曰、適に曹操が刀の献りやうは不思議なる體なり、何さま仔細あるべく候。董卓が曰、われも心の内深く怪む、今又急に逃たるは必ず事の故あらん。時に李儒外より來りければ、董卓右の趣をくはしく語るに、李儒が曰、曹操が妻子一族みな都の外に候へば、必定君を狙こと候はん、早く人を遣して呼玉へ、彼二心なくば參べし、參ずんば忽ちに生取て拷問すべし。董卓これに從ひ、番の兵六七騎に命じて、急ぎ曹操を呼返さしむるに、暫く有て其人囘りて曰、曹操適に黄なる馬に乘て、飛が如く東門に來る、門を守る者共いづくへ出玉ふぞと尋ねければ、某急なる御使に出る也とて關所を超て走り去れり。李儒が曰、これ必ず本國に下て事を發さん爲なるべし。董卓大に怒て曰、われ曹操を愛して深く恩を施す、今却て我を害せんとするは何事ぞ、急ぎ其模樣を畫に描し、國々に觸て生取しめん、若生取きたる者には、千金を與へ萬戸侯に封ずべし。李儒が曰、一人にては候はじ、必ず同謀の者あらん、生取て拷問すべしとて、衣服模樣を詳に繪に寫し、日夜を分たず州郡へ觸まはす。曹操は追手さだめて蒐らんと思ひ、譙郡を志て落行けるが、中牟縣を過る所に關守推住て曰、朝廷より曹操を捕よと觸玉ふ、汝よく繪圖に似たり、名を聞んとて取卷ければ、曹操が曰、われは皇甫の氏なり、今泗州より此に來れり。關守共兎角この者に扮なしとて、奉行所に

○曹操謀殺董卓

曹操家に回りて夜すでに明ければ、直に相府に出て、董丞相は何くに居玉ふぞと問に、曉より書院に居玉ふと申す。乃ち行て見れば、董卓床の上に坐して、呂布側に侍立せり。董卓が曰、曹操なにとて晩く來れる。曹操答て曰、馬瘦て路遲候。董卓が曰、われ西涼州の名馬を得たり、呂布一匹えらび來て曹操に與よ。呂布承はりて出ければ、曹操心の内、これこそ天の助よと思ひ、已に刀を拔んとしけるが、いや／＼董卓は元來大力なり、卒爾には爲がたからんと思ひ、暫く窺ひ居たる所に、董卓は一身肥ふくれて、常に久しく坐すること能ず。良ありて横になり、背を向て臥ければ、曹操すはや好時分ぞと思ひ、急に刀を拔ければ、董卓そばなる鏡の影にて其體を見つけ、がはと起あがり、曹操なに事をかすると云ける時、呂布も已に回り來れり。曹操し損じて刀を收べき樣なく、少も騷ぬ體にて柄を取直し、跪て捧て曰、某ちか比名譽の刀を求て候ゆゑ、獻つらん爲に帶來れり。董卓手に取て、天晴よき刀かな、此見よとて呂布に渡す。曹操又鞘を與へければ、呂布見了て鞘に收む。董卓馬を引せければ、曹操拜謝して曰、ねがはくは御前にて試に乘候はん。董卓しかるべしとて鞍を置せければ、曹操急に飛乘り、鞭

の群臣これを聞て、皆涙を流ところに、忽ち末座より手を打て大に笑ひ、朝廷の大臣達の、夜は泣て曉に至り、晝は哀んで暮に及び、涙の乾間も無見え玉ふが　董卓を泣殺玉ふ計やあると呼はる者あり。諸人驚きて之を見れば、驍騎校尉曹操なり。王允大に怒て曰、汝は漢の相國曹參が後胤にして、四百餘年大恩を被り、國の爲に害を除事を思はず、却て逆賊を助るは何ごとぞ、汝もし今夜の計を董卓に訴ば、吾等たとひ死して後も、鬼神と成て漢家を守らん。曹操が曰、某別事を笑ふにあらず、さしもの大臣達の董卓を殺べき計は無て、女童の如く日夜涙にのみ咽玉ふを笑ふ也、某不才に候へども、願はくは計を廻して董卓が首を都の門に切梟て、萬人の患を救べし。王允喜て申けるは、曹操もし忠義の心あらば、此まことに天の助なり、願くは計を聞ん。曹操が曰、某ちか比董卓に諂ひ仕るは、よき隙も有ば殺さん爲なり、董卓いま甚だ某を愛して、大小の事こと〴〵く問議る、王司徒は昔より、希代の刀を持玉ふと承はる、ねがはくは某に借玉へ、容易く董卓を斬殺すべし。王允が曰、もし此計成就する時は天下の大幸なりとて、軈て刀を取出して曹操に渡す。この刀は希代の名物にて、長さ一尺あまり、七寳を嵌て飾をなし、其利こと云べからず。曹操これを受取て、其夜の酒宴は休にけり。

董卓が悪逆の由を傳へ聞き、密に人を上せて司徒王允に書簡を送る。其書に曰、
卓賊欺レ天廢レ王、人不レ忍レ言、入二亂禁宮一、神亦不レ祐、公反二恣其跋扈一、如レ不二聽聞一、豈爲二報レ國效レ職之臣一哉。紹今集レ兵練レ馬欲レ圖二掃二清帝室一、未二敢輕擧一。公想レ食二祿於漢朝一、當レ乘レ間圖レ之、如有二驅使一、卽當レ奉レ命。書不レ盡レ言、請宜二照察一。

王允この書を得てより、日夜心を苦めけれども、董卓を討べき計なし。或日參內して、一座の公卿みな朝廷の舊臣にて、忠義の志ある人々なりければ、是こそ願ふところと喜び、座中に向て申けるは、今日は某が誕生日にて候間、今夜は私の宅に駕を枉られ候へ、酒を勸め申さんと云ければ、人々必ず參りて壽を祝せんと答ふ。王允大に喜び、其夜後堂に席を設て酒肴とりきらめき、燭を多く燒させて待ければ、群臣ことごとく來り集まる。酒宴數刻に及びける時、王允俄に哭きければ、群臣みな驚て曰、かゝる祝の折に何事を哭玉ふぞ。王允が曰、眞は今日わが誕生日にては候はず、常に參り會んと存ずれども、人の疑ひを憚て今夜かく計を成せり、我哭は漢の天下なり、董卓が勢ひ如何とも爲べき樣なし、某等いかなる憂目を見んも知がたし、昔漢の高祖三尺の劍を提げ、白蛇を斬て天下を保ち玉ひてより、子孫相ついで四百餘年、なんぞ料ん今日董卓が爲に喪されんとは、我等命を失ふとも空く之を見るに忍ず。一座

ませ、いよ〳〵憚ところなく、毎夜宮中に入て宮女に姦淫し、自ら龍床の上に宿して、禁裏の皇女公主を犯し汚す、前代未聞の悪逆なり。常に兵を引て城外に横行しけるが、或日陽城に出て、二月の事なるに村の貴賤みな社日の祭を成て多く集りければ、兵を下知して四方より圍み、一人も殘ず斬死て、婦女を奪ひ財寶を掠とり、殺せる者の首を車に載て城中に回り、董相國こそ今日賊徒を討玉ひたれと云沙汰させて、其首を市に曝させ、婦女財寶を恩賞なりとて人に施す。此に因て人民の哭き日に增て、家業を安んぜざりければ、越騎校尉伍孚字德瑜と云ものあり、如何にもして董卓を殺さばやと思ひ、出仕の衣裳の下に鎧を被て、懷に短き刀を藏し、董卓が朝に出る時走掛りてむずと捉へ、刀を拔て胸の邊を突んとす。董卓本より力勝りのしたゝか者なれば少とも騷ず、伍孚を抱きすくめて動さず。時に呂布走り來て、伍孚を眞倒に曳仆しければ、董卓申けるは、汝われを突んとするは、必ず叛逆の與黨あらん、汝たれにか賴れたる、明かに白狀せよ。伍孚目を怒らし牙を嚼で曰、汝わが君にあらず、我汝が臣にあらず、何の叛逆と云事あらん、汝國を亂り位を奪て悪逆天に滔る、今日は我死する日なり、只恨べし汝を市に拖出して微塵に成ざることを。董卓大に怒り、呂布に命じて首を斬しめ、此より常に用心して、出入必ず緊く甲たる兵を從へ、四方を圍せて横行しけり。袁紹は渤海郡に在て、

勸め、汝速に飲ずんば、我よく飲し樣を知されと叫びければ、弘農王御涙を推て宣ひけるは、斯る上は暫の命を許して、母に暇乞をさせよとて、聲を擧て哭き玉ひ、歌を造て哀み玉ふ、其歌に曰、

天道易兮我何安　棄萬乘兮退守藩
爲臣逼兮命不久　勢將去兮空淚潸

唐貴妃も悲に堪ず、弘農王を抱き奉り、泣々一首の歌を作る。

皇天將崩兮后土頹　身爲帝姬兮命不隨
生死異路兮從此畢　奈何煢速兮心中悲

歌ひ了りて共に悲み悶え玉へば、李儒怒て申けるは、董卓今はさこそ待かね玉はん、汝等なに故に命を惜んで誰が助を待ぞと責ければ、何太后聲をあげ、國賊董卓、天道豈汝を祐んや、必ず罰を被るべし、李儒匹夫、己等みな紂を助て惡をなす、忽ちに滅亡すべきぞと罵り玉へば、李儒大に怒り、左右の手を執て何太后を樓の上より倒に投落す。弘農王悲み玉ひ、李儒が袖に取つき玉ふを、武士共鴆毒を灌て打倒し奉る。唐貴妃はつと喚て起ところを、李儒引捉へて絞ころし、軈て馳囘りて董卓に告ければ、董卓大に喜び、三人の屍を城外へ拖出して一處に埋

何人仗忠義　寫我心中怨

董卓つねに宮女を附て其體を窺はせけるが、この詩を傳へ聞て申けるは、この人深く我を怨る意おはしけり、生て置ば後の害を成ん、不如早く弑さんとて、李儒を召て其趣を語りければ、李儒元來情なき武士なるゆゑ、自ら兵十餘人を引て永安宮へ馳て行く。此時何太后は弘農王と樓上に居玉ひしが、宮女きたり、李儒が參て候と云ければ、何事にかと驚き玉ふ所に、李儒自ら毒の酒を携へ來り、弘農王に進めて申けるは、春の日融々として面白き折にて候ゆゑ、御心をも慰め奉れとて、董卓より此酒を送られて候とて盃を捧げしかば、弘農王泣て宣ひけるは、此はよも酒にては有じ、必ず命を縮る毒なるべし。李儒が曰、これは壽酒と申て命を延る藥にて候、速かにきこし召るべし。何太后の宣く、汝まことに壽酒ならば、自ら試てのち獻れ。李儒眼を怒らして曰、汝なんぞ早く飲ざる、この酒を飲ずんばこの二色を受よとて、兵に命じて練帛の繩と短き刀とを取出しければ、唐貴妃涙に咽で曰、妾ねがはくは此酒を飲で二人の御命に代るべし。李儒聲を荒らげ叱て曰、汝なに者なれば彼等が命に代んと云るぞとて、盃を取て何太后に勸め、汝まづ早く飲と責ければ、何太后胸を打て宣ひけるは、我兄何進は計なき匹夫にて、董卓を都の內へ引入れ、かゝる禍をし出せり。李儒又盃を弘農王の前に

ば、董卓つひに首を斬しむ。是に於て陳留王劉協を請じて天子の位に即奉り、百官みな萬歳を唱へ、こと〴〵く禮了りければ、何太后と弘農王とを永安宮に推こめ奉り、參り仕ふる者とては、唐貴妃と二人の官女より外は無りけり。其外に若ゆく者あらば、必ず三族を滅さんと觸ければ、志ある老臣も徒に悲ばかりなり。痛ましい哉この君、四月に御位に即玉ひて、九月に至て董卓が爲に廢られさせ玉へば、聞人淚を流さずと云ものなし。陳留王劉協字は伯和、時に御年わづかに九歳にて、已に御位に登り玉ふ、此を獻帝と申し奉る。乃ち董卓を相國に封じ、黃琬を太尉に進め、楊彪を司徒とし、荀爽を司空とし、韓馥を冀州の牧とし、張留を陳留の太守とし、張資を南陽の太守とし玉ふ。董卓いよ〳〵逆威を震ひ、贊拜に名を云ず、朝に入て趨ず、劍を帶履を着ながら殿に上り、萬づ心の儘に行ひ、庚午の年改元して初平と號す。この時永安宮にて、何太后と弘農王と久しく推こめられて居玉ふ上、朝夕の供御衣服なんどをも墓々しく獻つらねば、日夜憂ひ悶させ玉ひて、御淚さらに乾く間もなし。折ふし春風に意を得たる一双の燕、庭の内へ飛來りければ、弘農王一首の詩を作り玉ふ。其詩に曰、

嫩草綠凝烟　裊々雙飛燕　洛水一條青
陌上人呼義　遠望碧雲深　是吾舊宮殿

文武の百官きたらざる者は皆斬んと觸ければ、一人も殘らず來り集まる。董卓劍を拔て申ける
は、少帝闇弱にして全く威儀なし、天下の君とするに堪ず、今郊天の策文あり、宜く之を讀べ
しと云ければ、李儒たからかに讀で曰、

孝靈皇帝不究高宗眉壽之祚、早棄臣子、皇帝承紹海内側望、而帝天資輕佻威儀不恪、在喪慢惰、衰如故焉、凶德既彰、淫穢發聞、損辱神器、忝汚宗廟。皇太后教無母儀、統政荒亂、永樂太后暴崩、衆論惑焉、三綱之道、天地之紀、而乃有闕、罪之大者。陳留王協、聖德偉茂、規矩邈然、豐下兌上、有堯圖之德表。居喪哀戚、言不以邪、岐嶷之性有成周之懿、休聲美譽天下所聞、宜承洪業爲萬世統、可承宗廟、廢皇帝爲弘農王、皇太后還政、應天順人、以慰生靈之望。

策文すでに讀了ければ、董卓まづ天子を御座より引おろし、其璽綬を解、北面して臣下の列に即しめ、何太后を引出して其衣服を剝で平衣となしければ、少帝も何太后も御涙に咽び玉ふ。これを見る人みな面を掩て悲みける所に、一人大音聲をあげ、賊臣董卓いかなれば天を欺て聖明の君を廢する、不如汝と死を共にせんとて、象簡を揮て董卓に打て蒐る。董卓大に怒り、武士に命じて引出さしむるに、此乃ち尚書丁管なり。聲を揚げて君に背く逆賊と呼はりけれ

るは、汝が劍よくきれば、我劍も能きれん。董卓いよ〳〵腹を立、すはや大事に及んと見る所に、蔡邕急に止めて曰、事いまだ定らず、かる〴〵しく殺し玉ふ事勿れ。袁紹は此間に百官を長揖し、劍を提て外に出、節を東門に懸おき、馬に飛のりて冀州を指て下りければ、董卓乃ち太傅袁隗に向て曰、汝が姪甚だ無禮なり、我いま汝に對して之を殺さず、廢立の事汝が心いかん。袁隗が曰、まことに尊命の如し。董卓が曰、百官の心いかん、我命に背くものは、軍法を以て事を行はん。百官みな震ひ怖れて曰、たれか尊命に從ざるべき。董卓又侍中周毖、校尉伍瓊、議郎何顒三人を呼で曰、袁紹いま本國を指て逃下れり、是謀反の心にあらずや。周毖が曰、廢立の事尋常の人の及ぶ所に有ず、袁紹大體を知ず、恐怖して出はしる、何ぞ野心を起すべき、今もし急に逼らば、已ことを得ずして變を生ぜん、その上彼は四代まで三公に昇りて恩德を四方に布、門下に故吏多く候へば、若兵を集めて事を興す時は、山東の國々こと〴〵く從ひ屬せん、不レ如これを赦して一郡の太守に封じ、其心を安からしめ玉へ。蔡邕が曰、某が向に推止めしも此ゆゑなり、袁紹は計を好めども決斷なし、只これを一郡に封じ玉ひて、諸人の心を安堵せしめ玉へ。董卓この義しかるべしとて、卽時に人を遣して袁紹を渤海郡の太守とす。此より内外の政こと〴〵く董卓が料ひと成ければ、九月朔日、帝を嘉德殿に請じて、

通俗三國志　巻之二

○廢漢帝董卓弄權

呂布すでに董卓に降りしかば、董卓その勢を合せて威風いよ〳〵大なり。乃ち自ら前將軍を領して、弟董旻を左將軍鄠侯に封じ、呂布を騎都尉中郎將都亭侯に封ず。時に李儒しきりに當今を廢して陳留王を立玉へと勸めければ、董卓これに從ひ、省中に酒宴を設て百官を集め、手に劍を執て申けるは、大なる者は天地、次は君臣、これ治をする本なり、上禮を失する時は下みな背く、今上皇帝闇弱にして天子とするに足らず、我いま伊尹霍光が例に順ひ、帝を廢して弘農王とし、陳留王を立て君とせん、汝百官その心如何んと云ければ、群臣みな怕れて答ふる者なかりし所に、中軍校尉袁紹すゝみ出て曰、むかし太甲不明なりしかば伊尹これを放ち、昌邑罪ありしかば霍光これを廢す、當今の天子德ありて罪なし、汝いま嫡子を廢て庶子を立んとするは、必ず謀反の心なるべし。董卓大に怒り、天下の大事みな我に在り、たれか我に順ざらん、汝わが劍をきれまじと思うて廣言を出すかと云ければ、袁紹も大に怒り、劍を拔て申け

わて起て、なに故に俄に心の變じたるぞと云も果ぬに、走りかゝりて一刀にその首を斬り、大音あげて申けるは、丁原不仁なりしゆゑ我すでに斬殺せり、志ある者は吾に從へ、志なき者は早く囘れと呼はりければ、落去もの大半に及べり。李肅大に喜び、先囘りて董卓に報じければ、董卓酒宴を設け、自ら出て呂布を迎へ、馬より下て申しけるは、今呂奉先を得て旱苗の雨を得たるが如し。呂布再拜して曰、某いま暗を棄て明なるに事ふ、願くは父として力を盡さん。董卓喜に忍ず、内に入て酒宴をなし、李肅に重く恩賞を與へ、呂布に金の甲錦の袍をぞ賜ひける。

呂布丁建陽をころす

呂布

呂布が曰、われ大に其能を展んと思へども、恨らくは然るべき君なし。李肅が曰、良禽は相レ木棲、賢臣は擇レ主而佐とこそ承はれ、日月は遷りやすし、空く年老果る時は、後悔すとも益なかるべし。呂布が曰、御邊いま朝廷の内にて誰をか英雄と思ひ玉ふぞ。李肅が曰、われ遍く百官を見るに、董卓に及ばず、董卓は賢を敬ひ士に下り、寛仁にして德あつく、賞罰きはめて明なれば、了には大業を成玉ふべし。呂布が曰、われ元より董卓に仕へんことを願へども、その緣なきを恨る也。李肅きゝもあへず金珠玉帶を取り出しければ、呂布驚て曰、これ如何なる仔細ぞ。李肅あたりの人を退けて曰、これは董卓久しく御邊の德を慕て、某を使として此禮物を送玉ふなり、向の赤兎も皆董卓の賜なり。呂布が曰、董刺史かくの如く某を愛し玉ふ、何を以てか德に報ぜん。李肅が曰、我等をだにも用ひて虎賁中郎將とし玉ふ、御邊もし仕へ玉はば、富貴心の儘なるべし。呂布が曰、いかゞせん、此を報ずべき功なし。李肅が曰、掌を反内にあり、御邊なにとて之を爲ざる。呂布しばらく思案して申けるは、この處に御待候へ、我中軍に入て丁原が首を取、ゆいて董卓に獻るべし。李肅が曰、恐らくは御邊能はじ。呂布刀を提げ、走て中軍に馳入ければ、此時丁原燈を挑げて書を見けるが、驚て問て曰、わが子なに事か有て夜中に來れる。呂布が曰、われは當世の大丈夫、安んぞ汝が子とならん。丁原あ

しを報ず。呂布よび入て對面しければ、李肅禮を施して曰、賢弟別てより恙なきか。呂布怪を成て申けるは、御邊はいかなる人ぞ。李肅が曰、同郷の友なるを何とて忘玉へる、某は李肅なり。呂布驚て手を拍問て申けるは、御邊いま何くに居玉ふぞ。李肅が曰、われ漢朝に仕へ、虎賁中郎將の職を受、いま御邊社稷を扶るの意ありと聞て喜に勝ず、名馬あり一日に千里を走る、水を渡り山を超ること平地を行が如し、名づけて赤兎と稱す、之を御邊に贈て、虎威を助ん爲に來れりとて引出させければ、呂布これを見るに、其馬全身火よりも赤く、頭より尾まで長さ一丈、蹄より鬃まで高さ八尺、嘶聲空に騰り、海に入の狀ありければ、呂布大に喜び、斯る名馬を賜る、某なにを以てか報ぜんと云ければ、李肅申けるは、某義の爲に來る、豈報を望んや。呂布酒宴を設て持なしければ、半酣に至て李肅申けるは、今御邊と適相逢、御邊の父この馬をよく知玉へり、若又見玉はば必ず奪ひ玉ふべし。呂布笑て曰、御邊は酒に醉玉ふか。李肅が曰、われ更に醉ず。呂布が曰、某が父は世を辭して久し、何ぞ此馬を見る事有ん。李肅大に笑て曰、某が申は丁原なり。呂布が曰、われ久しく丁原が處に在て、今さら出べき様候はず。李肅が曰、御邊は擎天架海の才あり、四海たれか知ざらん、功名富貴嚢を探て物を取よりも易し、何ぞ出べき様なしと云ひ玉ふぞ、豈いつまでも人の下に居て、區々として過し玉はんや。

み見るに、呂布金の盔を戴き、百花戰袍を被て、唐猊の鎧に獅蠻の寶帶をかけ、手に方天戟を執て馬を躍せ往來する行裝、恰も天神の如なりければ、心の內怕れ驚く。時に丁原馬を出し、大音あげて叫けるは、漢の天下不幸にして內官權を專らにし、萬民みな塗炭の苦を受、汝は是涼州の刺史、國に於て一寸の功なし、安んぞ妄りに廢立の事を議する、是まことに簒逆の賊なりと呼はりければ、董卓答ふべき言なく、呂布が討て蒐るを見て陣中へ逃入けるを、丁原急に攻たりしかば、大に破れて三十里引退く。董卓もろ〳〵の大將を集め、呂布が勇猛なるを見るに、我敵すること能まじと思ふ也、もし此者を御方になさば、我なんぞ天下を慮らんと云ければ、一人すゝみ出て曰、某は呂布と同鄕の友なり、其心をよく知れり、勇ありて計なく、利を貪て義を忘る、某ゆいて利害を說ば、必ず御方に來るべし。諸人これを見れば虎賁中郎將李肅なり。董卓喜で問て曰、汝いかゞして呂布を降らしめん。李肅が曰、君の秘藏し玉ふ赤兎馬竝に金銀を與玉へ、その心を結んで御方となさん。董卓これを李儒に問に、天下を得んと思ひ玉はば、何ぞ一匹の馬を惜まんと云ければ、董卓げにもとて軈て彼馬を引せ、黃金千兩明珠玉帶を渡しければ、李肅これを得て從者二人を引つれ、夜中に呂布が陣に行ければ、番の兵共なに者ぞと問。李肅が曰、われは呂將軍の舊き友なり、早く報ぜよと云ければ、急ぎ此よ

尹これを桐宮に放ち、漢の昌邑王位に登て、纔に二十七日が間に三千餘條の罪を犯し玉ひしかば、霍光これを大廟に告て廢せり、當今の天子御年幼と申せども、聰明仁智にして毫髮も過なし、足下は元外國の刺史にして、國の政に預ず、又伊尹霍光が才なし、安んぞ廢立の事を論すべき、古人も云り、有二伊尹之志一則可、無二伊尹之志一則簒也と、足下強て此事を議し玉ふ時は、天下を奪んとの企に似たり。董卓大に怒り、劍を拔て斬んとしけるを、侍中蔡邕、議郞彭伯二人推止めて曰、盧植は海内の大儒なり、人これを知ずと云ものなし、今もし之を殺し玉はば、天下必ず震ひ怖ん。董卓これに因て其命を扶け、官を剝で追出しければ、盧植は此より世を遁れ、上谷に入て閑居せり。司徒王允これを見て、長居せんこと悪かりなんと思ひければ、進み出て曰、廢立の大事は箇樣の時に論ずべきに有ず、別に日を定めて議せんとて、百官こと〴〵く退散しければ、董卓、それならば一人も殘さず斬て捨んとて、劍を拔て轅門の傍へ出ける所に、呂布馬に打のり、戟を提て門外に往來す。董卓その氣色を見て、李儒に問て曰、彼はいかなる人ぞ。李儒が曰、これ丁原が父子の約を成たる五原の呂布と云ものにて、其勇天下に双ぶ者なし。董卓いよ〳〵怕れ、園を廻て避ければ、百官これに依て無事なることを得たり。次の日丁原兵を引きて董卓が陣に推寄ければ、董卓大に怒り、自ら出て望

むるに威儀なき時は、宗廟社稷を保こと能はず、況や先帝の密詔あり、劉辨は輕浮にして君とするに足ず、次の子劉協は聰明にして學を好む、漢の基業を繼べしと宣へり、我當今の天子を廢して、舊の如く弘農王とし、陳留王劉協を帝位に即奉んと思ふ也、面々この事如何思ひ玉ふぞ。百官これを聞て大に驚き、默然として居たる所に、忽ち一人前なる卓几を推のけ、昂然として曰、無用々々、汝なに者なれば左様なる言を吐出せる、朝廷に人は無と思ふか、當今の天子は漢の靈帝の嫡子、つひに德に負玉はず、安んぞ妄に廢することを得ん、我よく汝が野心を知る、たれか從ふ者あらんと、憚ず呼はりければ、諸人汗を流して之を見るに、幷州の刺史丁原字は建陽なり。董卓怒て叱けるは、朝廷の大臣だも尚いまだ言を出さず、汝なに者なれば妄りに舌を搖ぞとて、劍を拔て斬んとす。時に丁原が後に、身の長一丈ばかりなる男の、腰の太さ十圍にして眉目清秀、五原郡の呂布字は奉先とて、天下に双なき弓馬の達者にて、幼より丁原と父子の約を成たるが、手に方天戟を提げ、怒れる眼星の如くにして立たりければ、李儒これを怕れ、急に董卓を推止め、國家の大事は酒後に論ずべからず、明日朝廷にて公論し玉へと云ければ、百官も丁原を勸て回らしむ。董卓又百官に向て、我云ところ公論にあらずや、如何思ひ玉へると問ければ、盧植席を起て曰、足下の論相違せり、昔し殷の太甲無道なりしかば、伊

喬瑁、河内の太守王匡、并州の刺史丁原も、兵を引て上りけるが、何進が已に亡びたるを聞て、喬瑁王匡は徒に回りける。董卓これより志を得て、常に内裏に出入して憚るところなく擧動ければ、後軍校尉鮑信安からぬことに思ひ、密に袁紹に私語、いま董卓大軍を引て都の内に縦横す、必ず野心を挟べしと云けるに、袁紹申けるは、朝廷ちか比少し靜りたれば、輕々しく兵を動べからず。鮑信又司徒王允に語るに、王允も從はざりければ、斯ては天下の亂と成ん、不如身の難を免かれんとて、鮑信は手勢ばかりを引具し、泰山へ遁去れり。此より董卓が勢ひ日々に盛なりければ、初め何苗に從ひし軍勢も盡く其手に屬す。董卓ひそかに李儒に問て申けるは、我いま當今の天子を廢して、陳留王を位に卽んと思ふは如何に。李儒答へて曰く、いま朝廷主なきの時に乘て、早々に計玉へ、遲き時は變あらん、明日溫明園の内にて酒宴を設け、百官を集めて此事を云出し、從はざる者をば斬殺し玉へ、指鹿の計今日にあり。董卓大に喜び、次の日溫明園に酒宴を設て百官を請じければ、誰か肯て從はざらん、其威を怕れて盡く來る。董卓人を出して、百官の集り了れるを窺せ、其のち徐々と馬を打て、轅門の前にてゆらりと飛下、劍を帶て内に入、一々相見て樂を奏し酒を勸む。已に半酣に及て、董卓百官に向て申けるは、今一つの大事を議せん、諸官よく聞玉へ、夫天子は萬民の主なり、天下を治

大將、錦の旗の陰より、天子は何くに居玉ふぞと呼はりければ、帝を始め奉り、御供の百官ことごとく膽を冷して、再び言ばを出す者なし。陳留王馬を出して、來る者は何ものぞ、其名を聞んと問玉へば、彼大將答て曰、われは西涼の刺史董卓なり。陳留王宣ひけるは、汝是に來るは、帝を守護し奉らんが爲か、又奪奉ん爲か。董卓が曰、われ天子を輔佐奉らん爲なり。陳留王の宣く、汝佐奉んとならば、還幸に參り遇て、なんぞ早く馬より下ざる。董卓あわて驚き、馬より飛で下て地の上に拜伏しければ、陳留王ちかく寄て、好言を以て慰勞し玉ふに、董卓心の內、この人の才覺よの常にあらずと驚き、共に御駕を守護して宮中に入奉る。帝は何太后に見えて、共に御淚に咽玉ひ、傳國の玉璽を失ひぬとて大に哭き哀玉ふ。この玉璽は、秦の始皇より以來、相傳りて代々の帝國を保玉へる印なるに、此時に失たるは漢の世の衰たるゆゑにやとて、聞人眉をぞ顰ける。

○呂布刺殺丁建陽

董卓すでに洛陽に入、城外に陣を取りて每日緊甲たる數千騎の兵を引て城內に打入、街市の邊に橫行しければ、人民惶々として驚かずと云ものなし。此時始めて詔書を見て、東郡の太守

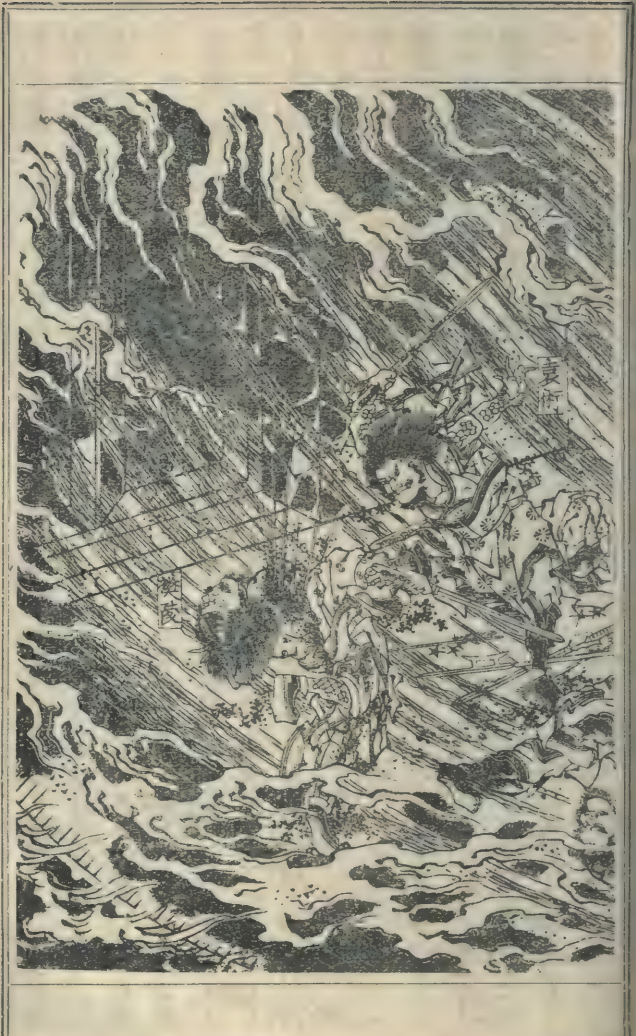
賁賢を妬みて、世を逃れて此處に隱れたりとて、帝を扶て茅屋に入奉り、跪て酒食を進む。帝御心を安んじ玉ひ、陳留王と崔毅が家に隱れてぞ御座ありける。河南の掾吏閔貢は、段珪が逃るを追て了に生取、帝をいづくへか隱し奉りたると問ふに、段珪答て、事急なりしゆゑ道の傍に捨たりと云ければ、閔貢にくしとて、其首を斬て馬の鞍につけ、終夜帝を尋ねて崔毅が家に來り、餘りに飢つかれたり、一飯を賜はれと乞ければ、内より崔毅出向ひ、鞍に拴たる首を見て仔細を問に、閔貢しか〳〵と語る。崔毅喜に忍ず、引て帝に見えさせければ、君臣聲を揚て大に哭く。閔貢が曰、天下一日も君なくんば有べからず、早く都に回り玉へとて、崔毅が飼たる一匹の瘦馬を備て帝を乘奉り、我馬に陳留王を乘しめ、已に家を離て三里ばかり出ければ、向より司徒王允、太尉楊彪、左軍校尉淳于瓊、右軍校尉趙萌、後軍校尉鮑信、中軍校尉袁紹等、數百騎を引て馳きたり、帝に見えて大に哭き、先段珪が首を都に上せて市に曝させ、還幸の儀式を取繕ふ。是より先に洛陽の小兒の謠の諺に、侯非侯王非王、千乘萬騎走北邙と謠ひしは、今日の事に思ひ合されたり。斯て御駕路を急で二三里も過ける所に、向うより旌旗天を蔽ひ、馬烟大に起て、甲たる軍勢野に漫り山に滿て出きたりければ、百官色を失ひ、皆茫然として怕れわなゝく。袁紹馬を出して、何ものなれば還幸の路を塞ぞと問に、太く逞しき

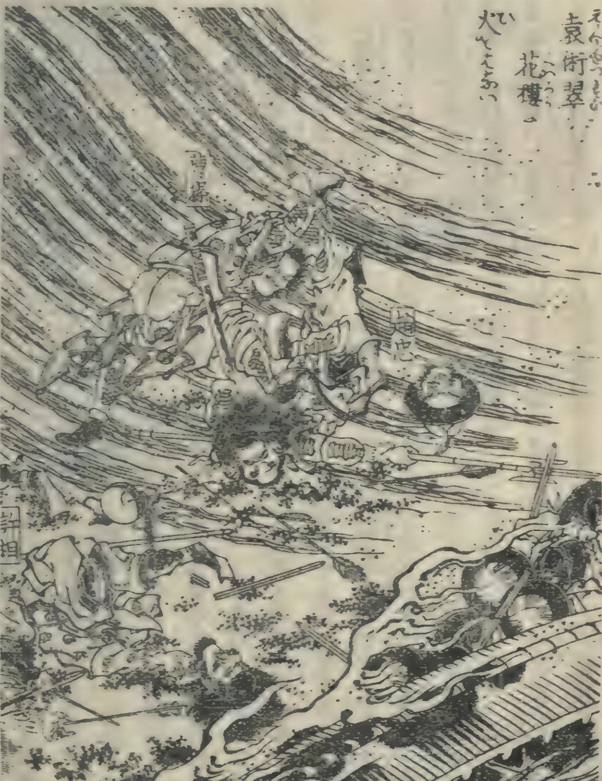
崔毅

帝劉協と草路にさまよふの圖
帝劉辨
劉協

兄弟聲を飲で御涙に咽び玉ふ。時に中平六年八月二十四日の夜なれば、已に四更の比に至て、露冷に御衣を濕し、殊更今朝より飢疲玉ひければ、二人手を取て草莽の中に伏し轉び玉ふ。陳留王宣ひけるは、此所に斯て在んも然るべからず、只路を尋ねて命を扶かり候はんとて、帝の御衣を我衣と結び合せ、草を分て出玉ふ。目ざすとも知ぬ暗き夜に、荊棘路に滿たりしかば、御足も傷れ損じて進むべき様なかりしかば、天を仰で泣哀み玉ふ所に、不思議や數萬の螢、いづくともなく飛あつまり、光を放て帝の御前に來りける。陳留王大に喜び、是天の助なり、これを指南に出候はんとて、螢火に道を引れて漸に歩み出玉ひ、是こそ人の通ふ山路と思ぼしき處まで出て、二人手を執、一たび歩では顚倒れ、五更の比に至ては一寸も動玉はず、岡の前なる草の上に倒伏て哭玉ふ。この所に、世の濁れるを厭て年久しく閑居せる者あり、夜深方のことなれば、能寐入て居たりしが、俄に紅の日輪二つ、家の後へ落たりと夢を見て、驚て起あがり、餘りの不思議さに戸を開て望み見れば、深き草の中より火の光天にあがる。家主大に怪み、走り出て見れば、二人倒て伏たる者あり。家主問て曰、これなる少年は誰家の子にてあるぞ。陳留王答て宣く、是なるは大漢の皇帝なり、十常侍が亂に逢て、夜中に此まで出玉へり。家主大に驚き、地に再拜して曰、臣は先朝に仕へたる司徒崔烈が弟の崔毅なり、十常侍が官を

ありと思ひ、引返して走ける時、何太后窓の中より跳り出玉ふ。盧植急に馳きたり、何太后を救ひければ、段珪これを奪に及ばず、跡をも見ずして逃たりけり。呉匡は餘りに腹を立て、已に内庭まで攻入けるが、何進が弟何苗が劍を拔て出るを見つけ、この何苗は十常侍が賂を受て、骨肉の兄を殺したる曲ものぞ、逃すな、首を取て主の讐を報ぜよと罵り、刀を舞して追掛ければ、續く兵二三十人、われ先にと馳來り、爭ひ斬て微塵になす。袁紹は四方の門をとぢて、内官と見れば大小を論ぜす殺さしむ。此に因て暫時の間に、宮中死する者二三萬人、鬚なき人は誤て内官なりとて斬れけり。曹操兵を下知して内裏の火を滅させ、袁紹と何太后を請じて燒のこりたる宮中に入れ、勢を四方に分て天子を尋ねしむ。此時張讓段珪二人は帝並に陳留王を刧て、火の中烟の内とも云す、後宰門より出て北邙山へと志て落けるが、日すでに暮て、初の間は二十四人有ける者共盡く逃失て、夜の二更の比、いづくともなく喊の聲大に響き、河南の掾吏閔貢と云もの大勢にて追かけ、已にあはひ近く成て、張讓いづくへ逃るぞと呼はりければ、張讓は事の急なるを見て、頭を以て地を叩き、帝に向て申けるは、臣すでに逃るべき路なし、陛下よく龍體を保ち玉へとて、河中に飛入て亡ければ、段珪只一人路を尋ねて走りけり。帝は陳留王と追手の虚實も知がたければ、河の畔なる草の中に伏し隱れさせ玉ひ、




袁術翠花樓
火

を抜て走り出、何進を引張て寸々にぞ砍たりける。張讓乃ち太尉樊陵を大將軍として、何進が職に代しめ、宮門を盡く開かせければ、袁紹曹操あまりに待かね、大將軍早く回らせ玉へと呼はる所に、黄門官壁の上より何進が首を投出し、何進が謀叛あらはれて、詔を承て誅し了れり、其餘は盡く赦玉ふと呼はる。袁紹これを聞て大に怒り、内官なにとて大將軍を殺したるぞ、寄や者共、悪黨を逃すなと罵りければ、何進が大將に呉匡と云もの、青瑣門に火を掛たり。此を見て袁術が五百の勢ことごとく宮中に亂れ入、老小男女を分たず、當るを幸に切てまはる。袁術曹操二人、劍を抜て深宮に入ければ、樊陵、許相、内より走り出、狼藉するなと呼はる所を、袁術飛かゝりて斬ころす。趙忠、程曠、夏惲、郭勝四人は、緊く追れて翠花樓の上に走りけるを、袁術追かけて火を放ちければ、四人こらへ兼て樓の上より飛けるを、一々に斬殺せり。去ほどに火焔天に漫りて、武士共宮中に攻入ければ、張讓、段珪、曹節、侯覽、もしや助かるとて、何太后その外劉辨劉協を啗ひ奉り、内省の官人を引つれ、後の路より北宮へ走る。此時尚書盧植は、官を棄て隱遁せんとていまだ去ずして居たりしが、宮中の騷動を聞て鎧取て投かけ、戈を提て閣下より望めば、段珪自ら何太后を引て出はしる。盧植聲を舉て、逆賊段珪なほ死することを知ず、太后を引て何くへ行ぞと言を掛ければ、段珪前に伏勢

いま宮中に入りて何事を議せんと思ひ玉ふぞ、早く心を決して事を起し玉へ、延引せば害あらん。何進が曰、すでに我掌の内にあり、何の害と云こと有ん。曹操が曰、これ程まで用意して外に隠なき事なれば、先十常侍の奴原を宮中より引出して、其のちに行玉へ。何進あざ笑て曰、これ小兒の見なり、我天下の兵權を執、たれか我に近付もの有ん。袁紹が曰、將軍固く行んと思し食ば、我等みな兵を引て相從はん、曹操も來り玉へとて、二人緊く甲て、精兵五百餘人を弟の袁術に領せしめ、青瑣門外に陣を取せて、袁紹と曹操とは百余人を從へ、何進を守護して内裏に入時に、長樂宮より黄門官出きたり、太后深宮の奥に御座ありて、將軍と密に一大事を議せんと宣ふ、只一人入玉へと云ければ、何進從もの共を宮門の外に留め、一人昂然として傍に人なきが如く、進んで嘉德殿の門に入ければ、十常侍みな出むかへて四方より打かこみ、張讓聲を勵して曰、董太后いかなる罪ありてかこれを殺したる、國母の喪葬に虚病して出ざるは何ゆゑぞ、汝元來屠沽の家より出て、我等が薦に因てこそ箇樣に富貴を極たれ、今その恩を思はず、却て害せんとするは如何なる理ぞ、我等をみな濁れりと云るが、清き者は何くに在と責ければ、何進答べき言なく、路を求めて出んとするに、宮門こと〴〵く閉て走るべき樣なし、張讓聲を揚て出よや〳〵と呼はりければ、門の陰より五十餘人の士卒手ごとに刀

その從はざるを見て大に哭き、此必ず天下の亂と成べし、不如この處に居て禍を被らんより、身の難を逃れて閑居せんとて、二人官を辭して去ければ、荀攸を始として同く官を辭する者大半に及べり。何進なほも心に曉ず、人を出して董卓を迎へければ、董卓すでに澠池に兵を屯して、いまだ都の内へは入ず。去ほどに十常侍は、何とも無國々より勢の上る由を聞て、いかなる故ぞと相議するに、張讓が曰、これは何進が計にて我等を討ん爲なり、我等早く手を下さずんば、必ず三族を滅されんとて、密かに屈強の兵五十人をすぐり出して、長樂宮の嘉德門に伏せ置、みな何太后に見え哀んで申けるは、今大將軍勅命と號して諸國の勢を呼上せ、臣等が三族を滅さんとし玉ふ、願くは太后憐を垂て救玉へとて、頭を以て地に叩き、聲を放て哭きければ、何太后の曰、汝等自ら大將軍の府下に行きて、直にこの事を哭き候へ。張讓が曰、臣等もし自ら行ば盡く微塵にせらるべし、願くは太后この處へ大將軍を召て、臣等が命を乞て助玉へ、若この事諧まじきにて候はば、力なくみな此處にて首を刎て死せん。何太后乃ち詔を下して、何進を宮中に召れければ、何進いそぎ行んとするを、主簿陳琳諫て曰、この詔は必ず十常侍が計ならん、決して輕々しく行玉ふこと勿れ。何進が曰、太后詔して我を呼玉ふ、如何んぞ行ざらん。袁紹が曰、事の用意すでに具りて、勢ひ早かくれなく外に知れたり、將軍

を以て天子に奏し、其のちに大軍を引て都に入玉はば、名正く言順て、事必ず成就すべし。董卓此に從ひ、乃ち李儒に表を造らせ、飛脚を馳て都に送らしむ。何進これを得て開き見るに、其文に曰、

臣伏惟、天下所以有逆不止者、皆由黃門常侍張讓等侮慢天常、操擅王命、父子兄弟並據州郡、一書出門、便獲千金、京畿諸郡、數百萬膏腴美田、皆屬讓等、至使怨氣上蒸妖賊蜂起。臣前奉詔討於扶羅將士、饑乏不肯渡河、皆言、欲詣京師、先誅閹豎、以除民害、從臺閣乞求資直、臣隨撫慰、以至新安。臣聞揚湯止沸、不如滅火去薪、潰癰雖痛、勝於養毒成。懲、及溺呼船、悔之無及。昔趙鞅興晉陽之兵、以逐君側之惡、臣輙鳴鐘鼓入洛陽、誅讓等、則社稷幸甚、天下幸甚。

何進表を披見して群臣に示しければ、侍御史鄭泰が曰、董卓は虎狼なり、若いま都の中に入ば、必ず人を食べし。何進が曰、汝少しも疑こと勿れ。盧植すゝみ出て曰、われ能董卓が心を知れり、面は善を現して心は大に狠り、常に不仁の心を挾む、若禁廷に引入なば、必ず大なる禍を成ん、早く人を遣して本國に回らしめ、簒逆の患を免れ玉へ。何進叱て申けるは、汝等は志なき者共なり、枉て君の祿を食ふ、妄に舌を動して人の心を惑こと勿れ。鄭泰、盧植

を招く、其詔に曰、

朕聞、敗紀亂常、不日無誅、害國傷時、豈能彌久。切惟、常侍張讓段珪等濫叨寵榮、恣生強逆、不思報本之恩、復造滔天之禍、意喜者、一門榮貴、心怒者、九族誅夷。令諸侯於畿甸之外、挾天子於宮闈之中、上下切齒、咸思殄滅。朕素知卿等心懷忠義、討戮奸邪、速提雄虎之師、剋定蕭墻之禍。詔書到日、火速奉行、宜體朕懷遐邇知悉。

先詔書を發して速に四道の軍馬を召、第一東郡の太守橋瑁、第二并州の刺史丁原、第三河内の太守王匡、第四前將軍鰲鄉候領西涼州の刺史董卓なり。此董卓は字は仲穎、隴西臨洮の人にて、身の長八尺腰の太さ十圍、肌肉肥重潤面方口、向に黄巾の賊を討時、さまでの功も無りしが、十常侍に賂を與て此の如く大官を得たり。時に西國の軍勢二十萬を集め、より〱謀反の企ありける所に、天子詔を下して、都に上るべき由を勅し玉ひければ、天の助哉と喜び、其婿中郎將牛輔を留て陝西を守らせ、自ら李傕、郭汜、張濟、樊稠を伴ひ、都を指て上りけり。其内に中郎李儒と云ものあり、計深くて是も董卓が婿たりしが、すゝみ出て申けるは、今天子詔を下して將軍を招玉へども、今の世は君臣禮を亂て、箇樣の事にも詐多し、先表

侍を殺んも憚あれば、他國の諸侯を呼で殺さしむべし。主簿陳琳すゝみ出て曰、この事甚だ無用なり、世の諺にも、自掩其目去捕燕雀、是自欺なりと云り、微の物だにも尙欺ことを得ず、況や國家の大事、詐を以て成べけんや、將軍いま皇威を總て、天下の兵權を手に握り玉へば、龍驤虎步心の儘に計を成玉ふべし、今又內官なんどを誅し玉はんことは、炭火を熾にして毛を燎よりも易し、但事を決斷して自ら征伐し玉へ、天人共に順て即時に誅に伏すべし、若外に兵を招き、他國の武士を都の內へ入玉はば、英雄おの〳〵心を生じて大亂の基と成ん、是所謂倒持干戈授人以柄の譬に似たり、事必ず破るべし。何進笑て、これ懦夫の見なり、汝無用の舌を動こと勿れと云ける時に、一人手を鼓て大に笑ひ、この事きはめて易し、長穿議無用なりと云ものあり、諸人これを見れば曹操なり。何進問て曰、汝いかなる計かある。曹操答て、內官の禍は古今みな此の如し、只人主の寵幸して常に近侍せしむる故に、自ら權を執て浸潤の疾をなす、今もし其罪を正さんと思ひ玉はば、惡人の張本を除き、典獄の官に命じて誅せしめ玉へ、何ゆゑに他國の武士を呼で盡く誅せんと宣ふぞ、事必す敗るべしと云に、何進大に怒り、汝二心あるかと云ければ、曹操外に出て哀哭き、天下を亂る者は必ず何進ならんとぞ申ける。何進つひに諸人の諫を用ひず、剰へ詔を降して武士

昔し竇武計を成こと密ならず、反て其身を亡せり、今將軍兄弟御林の軍を統玉ひ、手下に英雄の大將多し、事すでに掌の内にあり、此天の贊る所なり。何進が曰、わが心も此の如し、日を定めて之を誅せん。十常侍この事を傳へきゝ、急ぎ何苗に賂を贈て頼ければ、何苗乃ち何太后の宮中に入、奏して申けるは、大將軍いま新君を扶ながら、仁慈を以て天下を治むることを思はず、專ら人を殺すことを好玉ふ、今四海太平なるに、又十常侍を誅せんとし玉ふ、此亂を招の道なり、早く諫玉へと云ければ、何太后乃ち何進を招き、内官の權を執は漢家の舊規なり、先帝ちかごろ崩じ玉ふ、汝いま内官を盡く誅せんとす、是社稷を重ずるの道にあらず、決してこの事を行こと勿れと宣ひければ、何進元より外には大名を好と云ども内に決斷なき者なりければ、兎角の返事も無て退出せり。

○董卓起ㇾ兵入ニ洛陽ㇾ

何進退いて家に回りければ、袁紹問て曰、事いかゞ定まれる。何進が曰、十常侍を殺す事は、太后さらに許し玉はず。袁紹が曰、諸國より英雄の武士を召のぼせ、大に兵を集めて、威勢を成て十常侍を誅せん。何進が曰、この計わが心に合へり、我太后の命を承ながら、推て十常

に怒て曰、汝荒淫にして色を妬み、王美人を鴆毒にて殺し、今汝が子を天子とす、これ皆何進が妄りに大將軍に任ぜられて、威を專にする故なり、汝みだりに舌を動さば、我必ず驃騎將軍に命じて、汝が兄の首を斬しめん。何太后も聲を怒して曰、われ言を恭しうして汝に勸む、汝いかなれば無禮の荒言を吐出せる。董太后の曰、汝は元來猪を屠沽したる家に產れ、何の智惠ありて口をばきくぞとて、二人さま〴〵に惡口して、摑みあへる風情なりければ、張讓等董太后を引て宮中に回る。何太后その夜何進を招き、此事を如何にも計へと宣へば、何進退て大臣を集め、この事を相議するに、董太后を河間に遷べしと云ものありければ、此儀しかるべしとて、董太后州郡に交通して財利を貪り、女の身にて政を聞、多く私を成玉ふと沙汰して、董太后を河間に遷しおき、三千餘騎を以て、驃騎將軍董重を討んとて其家を圍ければ、董重自ら頸を縊て後堂に死す。十常侍事の諧ざるを見て、金銀珍寶をひそかに何進が弟の何苗に與へ、其母舞陽君などに賂を成て、何太后に用ひられんことを賴み、巧言を以て無事なる事を得たり。其年の六月に、何進ひそかに鴆毒を以て董太后を殺し文陵に葬る。司隸校尉袁紹ひそかに告て申けるは、十常侍等この比諸所に云傳て、將軍の董太后を殺し玉へるは、天下を奪の企なりと沙汰す、此時に乘て內官を一人も殘さず殺し玉へ、然らずば後大なる害を成ん、

ず。袁紹が曰、今日草を刈て根を除ずんば、後大なる害を成ん。何進叱て曰、わが心すでに決せり、再び云ものは首を斬んとて、百官を引てこと／＼く退出す。次の日何太后朝に出て、何進を錄尙書事に進め、百官おの／＼封賞ありて、幼君を扶て政を治めければ、董太后この事を聞てひそかに十常侍を宮中に招き、我はじめ何進が妹を取擧て先帝に薦む、今日その子劉辨帝位に即て、内外の群臣みな彼に心をよす、勢ひ甚だ盛なり、我王美人が腹に出來たる劉協を養て子とす、先帝も常に劉協に位を嗣しめんと宣へり、今これを如何すべきと問玉へば、張讓等奏して曰、太后自ら朝廷に出て簾を垂て政を聞玉ひ、國舅董重を武官に進め、某等を重く用ひ玉はば、次第に權柄を執て何進等が威勢を奪べし。董太后此に從ひ、次の日朝廷に出て自ら政を聞、劉協を陳留王に封じ、董重を驃騎將軍に封じ、十常侍に皆高官を授け、共に天下の政を決して何進等に綺せざりければ、一月ばかり過て、權柄こと／＼く董太后に歸して、天下の政その裁斷に出ずと云ことなし。何太后この事を安からず思ひ玉ひ、宮中に酒宴を設て董太后を招き、半酣に至て自ら盃を捧げ、再拜して申されけるは、我等みな女の身なれば、朝廷に出て政を聞こと其宜きにあらず、昔し呂后權を執て却て九族を滅せり、我等は只九重の内に深く居して朝廷の政を大老元臣に任せなば、四海自ら太平なるべし。董太后大

袁逢が子に、袁紹字は本初、時に司隷校尉なり。何進大に喜びければ、袁紹きびしく鎧て御林の勢五千餘騎を率し、直に内裏に推よせ、四方を圍で人を通さず。何進は何顒、荀攸、鄭泰なんど云る大臣三十餘人を作ひ、相ついで宮中に入、靈帝の柩の前にて太子劉辨を帝位に卽奉り、百官みな萬歲を祝しければ、袁紹兵を下知して内官を捕しむ。蹇碩とても逃れぬ所と思ひ、自ら打て出て防けるに、袁紹劒を舞して蒐りければ、其威に怕れて園の内へ逃入、花の陰に藏けるを、中常侍郭勝追付て斬ころし、首を取て指擧たり。袁紹乃ち何進にすゝめて、内官みな黨を結んで禍をなす、一人も殘さず殺し玉へ、然らずば後又大なる害を成んと云ければ、十常侍事の急なるを見て、急ぎ何皇后の宮中に行、聲を放て哀哭き、元來計を設て大將軍を殺んとせしは、蹇碩一人が所爲なり、某等が知ところに有ず、然るに大將軍いま讒者の言を聽て、某等を盡く誅せんとし玉ふ、願くは憐んで助玉へと云ければ、何皇后の曰、汝等患ること勿れ、我必ず救べしとて、急ぎ何進を宮中に招き、我と汝と貧賤の家より出て、此の如に榮華を得るは、且は十常侍が常に薦申せし故なり、今蹇碩すでに誅せらる、汝又他人の讒を聞きて盡く内官を殺んとするは何事ぞ、必ず千載の笑を得んと宜へば、何進外に出、百官に申けるは、蹇碩われを害せんと計りし故、いま已に誅せらる、其餘の内官本より罪なし、一人も殺べから

董太后

何太后
董太后と
何太后

御悩已に危し、此に事を託、跡の事を云置んとて何進を宮中に召し、兵を伏て之を殺し、其のち劉協を立玉はば、後の禍あるべからず。帝これに因て了に何進を召されければ、何進急ぎ宮門へ入らんとする所に、司馬潘隠きたり、密に私語て、内へ入玉ふな、十常侍兵を伏て殺さんと謀れりと告ければ、何進大に驚き、急ぎ門前より引回し、百官を私宅に集めて十常侍を誅せんと議す。時に末座より一人すゝみ出、内官の勢ひを得たる、仲帝、質帝の時より相ついで朝廷に滋蔓す、何ぞ盡く滅ことを得ん、若計を仕損じなば、却て大なる禍を成ん、よく〳〵仔細にし玉へと云ければ、諸人これを見るに、典軍校尉曹操なり。何進笑て申けるは、汝小輩安んぞ朝廷の大事を知らん、妄に多言すること勿れ。時に潘隠走り來り、天子いま嘉德殿に崩じ玉へり、十常侍これを隠して人に知せず、先何進を宮中へ召て後の禍を除き、劉協を立て御位を繼しめんとす、定めて使來るべしと云ける所に、忽ち勅使來り、天子すでに危し、早く何進を召て後の事を託し玉ふと云ければ、曹操が曰、今日の計まづ君の位を正して、其後に賊を討玉へ。何進が曰、たれか我ために君を正して賊を討ん。時に一人すゝみ出て曰、ねがはくは五千の精兵を率し、新君を册立て盡く内官を誅せん。諸人これを見れば、其人貌相魁偉行歩威ありて、四世三公に登り門下故吏多く、武藝羣を超、汝南汝陽の人にて、漢の司徒袁安が孫

を宥して、下密の丞に封じ玉ひ、又高堂の尉に遷さる。公孫瓚も表を上て玄徳の前々抜群の功ある由を奏聞しければ、即時に別部司馬に任じて、平原縣の令に封ぜらる。玄徳恩を謝して平原に到り、此所は錢粮の用意澤山にして、軍馬の備も有けるゆゑ、日比の氣を直して喜びけり。劉虞は漁陽を平げたる功に依て、太尉に任ぜらる。中平六年夏四月、帝御不例の事ありて日々に重り、今は已に危くなりければ、密に何進を召て、欺て殺さんと謀玉ふ。其故を委く尋れば、此大將軍何進は、元來その身きはめて賤き者なりしが、其妹天子に寵せられて貴人と成ける故に、其身は大將軍に上て天下の兵權を取、弟の何苗も執金吾に封ぜらる。去ぬる光和三年、何進が妹何貴人太子劉辨を産り、是に因て了に皇后に立らる。何進は皇后の兄たるに因て、彌權柄を取けり。其のち帝又王美人を深く愛し玉ひて、此腹に劉協と云る皇子出來たりしかば、何皇后これを妬で了に王美人を鴆毒にて殺せり。此故に劉協は董皇后に養れ玉ふ。すでに太子劉辨御年九歳に成せ玉ふ時より、帝いかゞ思し食れけん、弟の劉協に天下を禪んとて、常々近侍の臣に宣ひければ、十常侍并に黄門蹇碩等ひそかに奏して申けるは、若劉協に天下を禪んと欲し玉はゞ、先何進を除き玉へ、太子劉辨は何進が妹の腹に出來たれば、何進兵權を專にして、了には劉辨を君とすべし、今陛下

る理ぞ、十常侍は身一寸の功も無くして皆列侯に封ぜられ、況や封諝、徐奉等は、黄巾の賊に賂を受て內應せんとしたる者なり、陛下早く之を誅し玉はずば、漢の天下必ず滅ぶべし。帝の宣く、封諝等が賊と內應したりと云は皆實なきことなり、十常侍の內に一二の忠臣なきことは有じ、汝みだりに讒することと勿れ。陳耽なほ再三諫ければ、帝大に怒り玉ひ、陳耽をも引出して、劉陶と共に獄に下し玉ひけるを、十常侍その夜ひそかに人を遣して二人を殺させけるこそ哀けれ。其のち趙忠使を以て、孫堅を長沙の太守に封じ、謀叛の賊を誅せしむるに、五十餘日を經て、長沙の逆徒區星すでに滅たりと奏しければ、十常侍勅命を傳へて孫堅を烏程侯に封じ、又劉焉を益州の牧に封じて、四川の賊徒を誅せしめ、劉虞を幽州の牧に封じて、漁陽の張擧等を追討せしむ。劉焉まづ兵を引て四川を攻ければ、賊徒盡く降參して、乃ち倉廩を開き、百姓を賑に、國中その德に服して、不日に皆平定す。劉虞は兵を起して漁陽へ向はんとする所に、代州の劉恢書簡を添て玄德を薦む。劉虞大に喜び、玄德を都尉とし、丘毅を先鋒として漁陽に下向し、數日戰うて勝負を分たざる所に、賊將張純凶暴を專にして、漫に士卒を鞭打ける故、諸軍心を變じて張純が首を取、ことごとく降人に出ければ、張擧も事の諧ざるを見て、自ら頸を縊て死けるゆゑ、漁陽忽ちに平定せり。劉虞表を上て、玄德の勳功ある由を奏し

漁陽には張擧と云もの謀叛して自ら天子と稱し、弟の張純は大將軍と號す。其外長沙、江夏の賊徒諸所に蜂起して、遠近急を告ること雪の飛が如なれども、十常侍これを隱して天下太平なりとのみ奏しける。或日帝後園に出て十常侍と酒宴し玉ひければ、諫議大夫劉陶御前に來て大に慟く。帝その故を問玉へば、劉陶が曰、漢の天下危き事旦夕にあり、陛下なほ內官と樂玉ふか。帝の宣く、今天下太平の日、いかなる危き事かある。劉陶が曰、四方の逆徒蜂の如に起て州郡を掠亂る、其禍みな十常侍が官を賣民を害するに因り、朝廷の德ある人は隱れ去て、諂佞の人臂を張、その禍日の前にあり。十常侍これを聞て、皆冠を卸で淚を流し、大臣此の如く臣等を疾で害せんとす、願くは一命を乞受て故鄕に回り、官を棄て身を全せんと哀みければ、帝大に怒て劉陶に向て宣ひけるは、汝が家にも近侍の人を用ふ、朕なんぞ常侍の官なからんやとて、武士に命じて首を斬せらる。劉陶哀叫び、臣死すとも何ぞ怕れん、惜べし漢朝四百年の天下、今日忽ちに滅ん事をと云て、門外に引出さる。時に司徒陳耽外より來りけるが、劉陶を斬んとするを見て急に之を止め、宮中へ入て天子に見え、劉陶いかなる罪ありて誅し玉ふぞと問ければ、帝の宣く、妄に十常侍を讒して朕が心を冐す、此ゆゑに誅せしむ。陳耽が曰、天下の民みな十常侍が肉を啖んことを願ふ、然るに陛下これを敬て父母の如し玉ふ、此いかな

族を車にのせ、代州に行て劉恢を頼み、暫くは此處に隱てぞ居られける。

訴ふ。太守この由を朝廷に奏し、兵を指向て玄德を捕んとしければ、玄德事の急なるを見て一

へぞ回られける。其のち百姓共來集り、督郵を柳の上より下しければ、督郵回て定州の太守に

を刎んずれども、我心に忍ざる所あり、此ゆゑに官を棄て回るぞと云て、關羽張飛を作て涿郡

○何進謀殺二十常侍一

去ほどに黃巾の賊滅て、天下又靜なりければ、十常侍いよ〳〵君に咫尺して、專に權柄をとり、共に胥議して、己が心に從はざる者は科なきに誅殺す。趙忠、張讓二人は、今度の軍功に依て恩賞に預たる人々の方へ、密に人を遣して賂を求む。されども皇甫嵩、朱儁二人は、曾て與ざりける故、軈て天子に讒して、彼等が黃巾の賊を平げて功勞ありと申は、更に實なき事にて候、天威四方に及で、官軍招ざるに集り、賊徒自然に滅びたる也と奏しければ、帝これを信じて、卽時に皇甫嵩、朱儁が官を剝で、趙忠を車騎將軍に封じ、張讓等その外の內官十三人を、同時に列侯に封じ玉ふ。又司空張溫大尉に昇り、崔烈司徒に任ぜられ、皆十常侍に阿り附て、萬私のみ多して公なる政道なかりしかば、箇樣の事ども日に長じて、上下こと〴〵く恨を含み、

堂中に入て見れば、督郵高坐して縣吏を責。張飛雷の如なる聲を勵して、民を害する逆賊、この張飛を見知ずやと叫び、虎鬚倒に上りて、怒れる眼百練の鏡の如なりければ、督郵大に驚き、左右を下知して捕んとするに、張飛力足を出して近附奴原を踏倒し、飛かゝりて督郵が髻を摑で中に提げ、憎き己はよくも此處へ來れると云て、門外に曳て出、傍なる柳の木に綁あげ、自ら柳の下枝を折て、督郵が腿のあたりを續けて二百打ければ、柳の大枝數十本を打折てけり。玄德は浩る事をも知ず、俄に物さわがしく成ければ、何事ぞと問に、一人走り來りて曰、張飛酒を過し、人を縛て痛く鞭うつ、今は定めて打殺してや候はん。玄德きゝも肯ず走り行て之を見れば、張飛が怒り叫聲休ず、督郵を柳の梢に釣あげたり。玄德大に驚て色を失ひ、こはそも如何なる故ぞと問に、張飛大息ついて曰、これ等の賊は民を害する曲者なり、打殺さずんば心飽ずとて、又大なる枝を振あげ散々に打擲す。督郵木の上より玄德を見つけ、苦げなる聲にて申けるは、玄德公ねがはくは一命を救玉へ。玄德仁慈の心深ければ、急に張飛を推止むる所に、關羽つと馳來て曰、兄すでに莫大の功を立ながら一縣の尉に除せられ、今又督郵に無禮せらる、某思ふに、枳棘叢中は非㆓鸞鳳之所㆒㆑棲、不㆑知督郵を殺して故鄕に囘り、別に遠大の計を成ん。玄德これに從ひ、印綬を解て督郵が頸にかけ、汝は民を害するの賊、いま首

出さず、相隨て館中に到る。督郵すこしも讓ず正面に高坐しければ、玄德愼で階下に侍立す。二時ばかり有て督郵問て申けるは、玄德は由來いかなる人ぞ。玄德答て曰、某は中山靖王の後胤にして、涿郡より黃巾の賊を平げ、三十餘度の戰を經て、此縣の尉に除せらる。督郵大に叱り、汝が如き賤き者が詐て天子の宗族と稱し、功勞も無て妄に官爵を盜む、これに因て天子我に勅して沙汰し正させ玉ふと云ければ、玄德默然として退き、下吏を呼で、督郵威を成て人を畏すはいかなる故ぞと問に、下吏答て曰、これ賂を取ん爲なり。玄德の曰、われ民を治めて秋毫も犯ことなし、焉んぞ彼に賂ふ錢あらんやとて、了に賂を與ざりしかば、次の日督郵その賂なきを怒、下吏を召て、玄德みだりに民を害すと訴狀を書せて請とりけり。玄德自ら館門に到り內へ入んとすれば、番の者共許ずして徒らに退き回り、心の內安からず。折境張飛は酒を飲で後、只一人馬に打のり、館門の前を過けるに、年老たる百姓共五六十人泣居たりければ、如何なる故ぞと問に、答て曰、督郵賂を取ん爲に、縣吏を召て訴狀を書せ、天子に奏して罪なきに玄德を害せんとす、我等こゝに來り、その事を告て玄德の恩德を露さんとすれば、門より內に入こと能ず、却て散々に打出されたり。張飛これを聞て大に怒り、牙を嚙で馬より飛おり、直ちに館門に走り入ば、番の者共之を入じとて盡く集りけるを、張飛四方へ追ちらし、

は、近年黄巾の賊しきりに起りて、所々を亂りし本を尋ぬれば、十常侍が君を欺て、人の賂を受ては功なきに官祿を與へ、賂なき者は罪なきに官を貶す、此故に人民の恨ついに天下の亂と成れり、早く十常侍が首を刎て、一々に南郊に梟双べ、遍く天下に告て功ある者には恩賞を賜ひなば、四海自ら平安ならんと憚るところなく申ければ、十常侍御傍に在て驚怒り、張均君を欺て人を讒す、武士に命じて首を斬しむべしと云ければ、張均氣を失て絶入り、その儘やがて死にけり。帝これに御心つき、何さま黄巾の賊を破りて、功あれども恩賞に預ぬ者あればこそ張均かくは諫めつれとて、功ある者を御尋ありて、玄德も中山府の安喜縣と云所の尉に除せらる。玄德恩を謝して卽時に關羽張飛と二十餘人を從へ、安喜縣の官所に行て縣中の政を治めらるゝに、一月ばかり有て人民みな其德に懐き、今まで強盜惡逆の名を取たる者己と羞て心を改、良民と成て服しけり。玄德は關羽張飛と、食する時は卓を共にし、寐る時は床を同うして、四月ばかりを過ける所に、天子州郡に詔を下し、此度黄巾の賊を平げたるに軍功ありと詐て、内緣なんど賴み、濫りに官爵を受たる者多し、能々これを正すべしと觸られければ、安喜縣へも督郵來れり。玄德遠く出迎へて地の上に禮を成ければ、督郵馬の上より鞭を指揮して回答す。關羽張飛傍に立、その無禮なるを見て齒を切と云ども、敢て詞には

彪の軍馬はせ來る。眞先に進は廣額濶面、虎體熊腰、吳郡富春の人に、孫堅字は文臺とて、
古の孫子が末葉なり、しばらく邊功ありて、此時下邳の丞たりしが、黄巾の蜂起を聞て、淮泗の精兵千五百騎を引て官軍に力を協す。朱儁斜ならず喜び、便ち孫堅に南門を攻させ、玄德に北門を攻させ、自ら西門を攻て態と東一方を圍ず、此は敵の心を一になさで、心易く走しめんと計りし者なり。孫堅は此日新手なれば、目を醒ほどの一軍せんとて、自ら馬より飛で下、易々と壕を超て城中に登り入。これを討んとて城中の勢ひしくと集りけるを、孫堅刀を舞して目の前の敵二十餘人を斬ころし、殘る勢を八方へ追ちらしければ、賊將趙弘大に怒り、馬を飛して討て蒐る。孫堅これを事ともせず、敵の槊を甲の袖に受て趙弘が腕を握りすくめ、了に槊を引奪て趙弘を刺殺、其馬に乘て渦まいたる大勢の中へ喚て蒐入、左に突右に撞、勇を振て蒐たりしかば、賊將孫仲慄かねて北門より逃げはしる。玄德急に追かけ、一矢に孫仲を射落しければ、官軍我先にと城中へ攻入、首を取こと數萬級、南陽の諸郡ことごとく平定しければ、朱儁都に回て車騎將軍、河南の尹に封ぜられ、孫堅は內緣ありて別部司馬に除せらる。然るに玄德一人いまだ恩賞の沙汰なかりしかば、心欝々として樂ず。或時禁門の前にて郎中張均に出あひ、功勞あれども恩賞なき由を語りければ、張均大に驚き、急ぎ朝に出て奏聞して申ける

して降参せんことを願ふ。朱儁大に怒て彌急に城を攻ければ、玄徳諫て曰、むかし漢の高祖の天下を得玉ひしは、能降参の人を用ひ玉ふ故なり、今賊軍降んことを望む、將軍なんぞ許し玉はざる。朱儁笑て曰、しからず、此まことに天の時に依もの也、むかし秦の世亂れて、項羽が如き輩たがひに爭うて、天下に定れる君なし、高祖この故に降る者は如何なる讐ありても懐玉へり、今四海一統の世に黄巾の賊のみ禍をなす、若その降参を許せば、何を以てか善を勸ん、賊徒ほしいまゝに悪逆を成て、利を失ふ時は即ち降参して身を恙なくせんとならば、是寇を長ずるの道ならん、吾この故に根を絶んとす。玄徳その論に服し、又告て申されけるは、今この城を四方より密く圍み、一人も餘さず討んとせば、彼必ず一圖に志を合せて討死すべし、萬人「心を一にして戰はば御方も若干亡ぶべし、大敵をば開いて攻るにこそ利は候へ、其逃る時追打にして勝ことを得ん。朱儁尤と同じ、東南の圍を解て西北より攻たりしかば、案の如く城中の軍勢、われ先にと東南の門より逃はしる。官軍勢ひに乘て追かけ散々に攻ければ、賊將韓忠すでに朱儁に射殺さる。活る所に趙弘、孫仲、大勢を引て馳來り、追手の官軍を支へて火を散して戰ふ。朱儁賊の大勢なるを見て、少し引退んとしければ、賊軍これに氣を得て潮の如くに進み、又宛城を取かへす。官軍若干討れ、十里退て陣を取ければ、其日暮方に東の方より一

を洛陽に上せしかば、降人に出る者十五萬、討れたる者は數を知らず、此功に依て、皇甫嵩は車騎將軍益州の牧に封ぜられ、武騎校尉曹操も、今度の忠戰に依て濟南の相に封ぜられたりと語りければ、朱儁これを聞て、早く此城を攻落して人々みな恩賞に預れとて、大軍力を合せ、切ども射れどもかへりみず、喚き叫で攻ければ、城中すでに色めき立て、すはや落んと見えける所に、賊の勢に嚴政と云もの、張寶が首を取、城を開て降りしかば、朱儁これを平定して洛陽に奏聞す。朝廷の百官これを聞て、朱儁に官爵を賜らんとて相議する所に、忽ち南陽より早馬きたり、黄巾の餘黨に趙弘、韓忠、孫仲と云もの三人、十萬餘騎の溢ものを集め、州郡を動亂すと告ければ、群臣帝に奏して曰、朱儁いま陽城を平げて其勢六萬に餘れり、之を用ひて討しめ玉へとて、卽ち詔を下しければ、朱儁直ちに宛城に到る。賊の大將趙弘この由を聞、まづ韓忠を出して之を防しむ。兩方の勢みな廣野に出て陣を張、玄德眞先に進み、鼓を鳴し喊を造て大に戰ひ、辰の刻より午の刻まで勝負の色見えざりければ、朱儁自ら精兵をすぐり出して、二千餘騎城の東北の方より蒐りけるに、賊軍後を塞れじと思ひ、急に引退く所を、玄德大に進み夾んで攻ければ、賊軍討るゝ者數を知ず、皆われ先にと宛城へ馳入ければ、官軍四方を圍できびしき事水も通ぜず。城中すでに兵粮盡て、援勢なかりければ、賊將韓忠人を出

上に伏置て、次の日兵を進ければ、賊將張寶、叉髪をさばき文を唱けるに、風雷天地を震動して、沙を飛し石を走らせ、黑雲の中より人馬潮の湧が如に討て出ければ、玄德急に引退く。賊軍これを追て已に山そばの路を通る所に、一聲の鐵砲ひゞき、五百の官軍ひとしく出てかの穢たる者を洒ければ、忽ち空中より或は紙にて造れる人形、草を束たる馬なんど紛々として地に落、風雷自ら息にける。賊軍法の破れたるを見て退かんとすれば、山の左より關羽一軍を引て討て出、右より張飛が一軍討て出、散々に揉だりしかば、討るゝ者數を知ず、張寶は一方を打やぶり、路を奪て走けるを、地公將軍と書たる旗を目に掛、矢ごろ近く成ける時、玄德弓を挽て射たりければ、張寶左の臂を射られながら陽城へ逃こもり、堅く守て出ざりけり。此日の合戰に、賊の勢三萬餘人討れ、降る者數を知ず。官軍つゞいて陽城を圍み、日夜息をも繼ず攻けれども、要害堅固にしていまだ落ず。一月あまりに及びければ、曲陽へ使を馳て、皇甫嵩が賊將張梁と戰ふ勝負を聞しむるに、使やがて回り來り、董卓勅命を受、久く張梁と戰ひけるが、官軍毎度に利を失ひければ、帝又皇甫嵩に命じて董卓と代しめ玉ふ。皇甫嵩兵を引て打向ひければ、賊の首將張角すでに死して、弟張梁王者の禮を以て之を葬る、皇甫嵩新手を引て速に攻かゝり、七度まで戰ひ勝て、遂に張梁を曲陽にて切殺し、張角が墳を掘て其首

を流して大敵を破り、彼が辛き命を救たるに、假令恩賞こそ無とも、何とて芥の如に輕んずるぞ、我この賊を殺さんとて、矛を舞して入んとするを、關羽急に引留め、玄徳諫て申されけるは、彼は官高き朝廷の臣、殊に許多の軍馬を領す、我等もし之を殺さば、必ず謀叛人と呼るべし、不如この處に留るべからずとて、其夜兵を引具して朱儁が陣へ趣ける。

○安喜縣張飛鞭督郵

玄徳兵を引て朱儁が陣に加りければ、朱儁大に喜び、軈て先陣として賊將張寶が陣へ寄けるに、賊の大將に高昇と云もの、馬を出して斬て蒐りければ、張飛矛を舞して二三合戰ひ、馬より下に斬て落す。官軍これに氣を得て、一度に喊を作て攻入ければ、賊將張寶、馬の上にて髮をさばき、手に劍を執て口に文を唱けるに、俄に風雷なりはためき、黑雲の中より人馬夥しく出きたり、勢ひに乘て討て蒐る。官軍大に驚き散々に走りければ、賊軍勝に乘て掩殺す。玄徳敗軍を收め、朱儁と此事を議するに、朱儁が曰、これ妖術なり、何ぞ怪に足ん、明日羊猪の血を携へて、兵を山の頂に伏おき、賊の勢の追きたる時、一度に洒ぎかけさせなば、此法必ず破るべし。玄徳これに從ひ、五百の勢に羊猪の血を持せ、其外多く穢はしき物を用意し、山の

廣宗に在て張角を取圍み、度々戰ひ勝けるが、張角あやしき術を成けるゆゑ、いまだ盡く破り得ず、近ごろ黃門左豐と云もの勅使として來り、我に賂を與よと云しゆゑ、我軍中には金銀乏して、勅使に獻るべき物候はずと答ふ、此に依て左豐ふかく我を恨み、帝に讒して枉て我を罪に落し、此の如く召捕て、董卓を大將として廣宗の賊を退治せしむ。張飛きゝもあへず大に怒り、守護の武士を殺して盧植を救はんとひしめきければ、玄德急に止めて曰、これ天子の勅命なり、汝なんぞ躁しき。關羽が曰、いま盧植官を罷らる、我等不ㇾ如涿郡に回るべし。玄德これに從ひ、兵を引て進む所に、忽ち山の後に喊の聲きこえて、馬烟夥しく起りしかば、岡の上に登て之を望に、廣宗にて官軍戰ひ負ぬと覺えて、黃巾の軍勢天公將軍と書たる旗を先に進め、官軍を追蒐るなりければ、玄德の曰、これは張角が勢なり、官軍を救ずんば叶まじとて、關羽張飛と馬の鼻を双べて討て出れば、張角が勢大に驚き、すはや敵の伏勢の蒐るは、後を塞れなとて、我先にと引回しければ、玄德いよ／＼進んで賊の勢を四角八方へ打ちらし、五十里あまりぞ追蒐たる。董卓は廣宗の戰に負て賊軍に追れけるが、誰とも知ず一手の勢打て出、賊軍を蒐ちらしぬと報じければ、立回りて玄德に對面し、禮了て今いかなる官職ぞと問。玄德官位なき由を答へられければ、董卓甚だ輕んじて、了に恩賞をも與ず。張飛大に怒り、我等血

の後に廻し、諸軍に投火把を持せ、夜の二更の比四方より推よせて、一度に火を掛賊を造て攻ければ、折ふし風急にして火焔天を焦し、賊の勢共上を下へと騒ぎ立て、馬に鞍おく隙もなく、人は甲を被るにも及ばず、十方に散亂せり。張梁、張寶、這々のがれて走りければ、向うより一彪の軍馬みな紅の旗を指て打出、眞先に進むは又これ一人の英雄、身の長七尺、細眼長髯、膽量人に過、謀衆に超、つねに齊桓、晉文、匡扶の才なきを笑ひ、趙高、王莽、縱橫の策少きを嘲り、兵法は吳子、孫子に劣ず、沛國譙郡の人に、曹操字は孟德、小字を阿瞞と稱し、又吉利とも云り。乃ち漢の相國曹參より二十四代の後胤にして、大鴻臚曹嵩が嫡男なり、官騎都尉に封ぜらる。今黃巾の賊を破んとて、官軍五千餘騎にて馳きたり、路を塞いで攻戰ひ、首を取こと一萬餘級、馬物の具を奪取。皇甫嵩、朱儁に見え、一手に成て逃る敵を追蒐る。玄德は此時潁川に來り、賊の破たるを見て、入て皇甫嵩に見え、盧植が牒狀を出しければ、皇甫嵩が曰、いま賊軍大に破れて走りたれば、必ず廣宗に行て張角と一手に成べし、御邊早く馳歸り、盧植に力を合せて怠ること勿れ。玄德これに因て又廣宗を指て引回す所に、向より二三百人の兵共、罪人を車に載て出きたる。玄德たれやらんと怪み、近くなりて之を見れば、乘たる罪人は中郎將盧植なり。大に驚き馬より下て其ゆゑを問ば、盧植淚を流して曰、われ久しく

三方より取巻たり。賊軍大に破れて四角八方へ逃ちりければ、玄德勢ひに乘て靑州の城下に殺到す。城中より之を見て、太守龔景門を開て打て出ければ、賊軍前後に度を失ひ、右往左往に落失て、靑州の圍忽ちに解にけり。太守大に喜び、重く諸軍を賞しければ、鄒靖軍を收めて幽州に回らんとす。時に玄德申されけるは、近ごろ中郞將盧植、勅命を受て賊の首將張角と廣宗にて戰ふと聞り、我昔し公孫瓚と共に盧植を師とせり、今ゆいて力を合せ、共に賊を平ぐべし。鄒靖が曰、某いまだ主の命を受けざれば、輕々しく行ことは叶まじ、足下もし行玉はゞ、兵粮は心の儘にし玉へ、幽州の勢は某ことなく收め回らん。玄德これに依て、手勢五百餘騎を引て廣宗に到り、盧植に見えて右の趣を語りければ、盧植大に喜び、重く賞して手下に留む。此時賊の首將、十五萬の勢にて廣宗に屯し、官軍五萬の兵と日久しく攻戰ひ、いまだ墓々しき勝負も無りければ、盧植乃ち玄德に向て曰、此所は賊軍みな要害に引こもりたれば、急に勝負はあるべからず、今賊の弟張梁張寶二人、潁川に在て、官軍皇甫嵩、朱儁と相戰ふ、今御邊に千餘騎の官軍を借べし、急ぎ是より潁川に行て戰を扶玉へ。玄德乃ち牒狀を請取、千五百餘騎にて、潁川に向はる。この時皇甫嵩朱儁は、賊將張梁張寶と挑み戰ふこと數度に及び、賊の勢打負て長社と云ところに引退き、草木の深き所に陣を取ければ、皇甫嵩一手の勢を忍で敵

羽これを見て、八十二斤の青龍刀を提げ、馬を躍らせて出ければ、程遠志その勢ひに畏れ、退んとする所を、關羽一刀に斬て落す。賊軍大將を討れて皆降人に出ければ、玄德打取たる首を路の岐に梟させ、功を收て幽州に回る。太守劉焉喜で出むかへ、諸軍を厚く賞する所に、青州より早馬きたり、太守龔景急を告ると報じければ、大に驚き牒文を披き見るに、黃巾の賊徒城を圍で事すでに急なり、兵を興して後攻をせよと也。劉焉乃ち玄德を呼でいかゞせんと議するに、玄德の曰、某ねがはくは行て救はん。劉焉大に喜び、鄒靖に五千餘騎を授け、玄德を先手として青州を救しむ。玄德の一軍すでに賊の陣ちかく推よせ、其體を窺見れば、盡く髪を亂して黃なる絹にて額をつゝみ、八卦の文を書て證とし、救の來るを見て引分れて之を拒ぐ。玄德五百餘騎にて入亂れて戰へども、賊は目に餘る大勢にて、新手を入かへ〳〵防ぎしかば、玄德戰ひ屈して三十里引退き、關羽張飛と相議し、御方勢寡して勝こと能はず、明日奇兵を出して賊を破らんとて、關羽に千餘騎を附て山の左に伏おき、張飛に千餘騎を附て右に伏おき、皆金を鳴すを相圖と約し、次の日鄒靖玄德一手に成て推よせければ、賊の大勢潮の湧が如に競ひ蒐り、喊の聲大に震ふ。玄德しばらく戰ふ體にて詐て退きければ、賊軍急に追きたる。已に山の邊に近づき、玄德の勢一度に金を鳴しければ、左に關羽右に張飛、二手に分れて討て出、

人なり、毎年北國に行て馬を商ひけるが、賊徒路を塞で往來を惱しけるゆゑ、空く故郷に回るなり。玄德迎へ入て酒宴をなし、逆賊を退治して漢室を助るの由を語りければ、張世平、蘇雙その志を感じ、駿馬五十匹、金銀五百兩、鐵一千斤を贈る。玄德これを受て、良巧に二振の劍を打せ、關羽は重さ八十二斤に青龍の偃月刀を作り、冷艶鋸と名づく。張飛は一丈八尺の蛇矛を造りて、甲盔までも一齊に備りければ、さらば時を廻さず打立んとて、其勢五百餘騎にて幽州に到る。太守劉焉大に喜び、其姓名を問に、漢室の宗親なりとて家の系緒を語られければ、劉焉甚だ敬ひ、相親むこと叔姪の如し。時に黃巾の賊徒大方程遠志と云もの、五萬餘騎にて涿郡を犯しければ、太守劉焉乃ち校尉鄒靖を大將とし、玄德を先陣として打向て戰はしむ。

〇劉玄德破二黃巾賊一

玄德五百餘騎にて直ちに大興山の麓に推寄ければ、賊軍五萬餘騎にて陣勢を張。玄德は關羽張飛を左右に備へ、反國の逆徒なんぞ早く降ざると呼はりければ、賊の陣より副將鄧茂と云もの、馬を飛して打て蒐る。張飛眼を怒して虎鬚倒に竪、丈八の矛を舞して出迎へ、只一合にして鄧茂を馬より突落し、首を取て徐々と回りければ、賊の大將程遠志、大に怒て斬て蒐る。關

玄徳天地て
祭て桃園ヨ
義でむすぶ
張飛

劉玄德
関羽

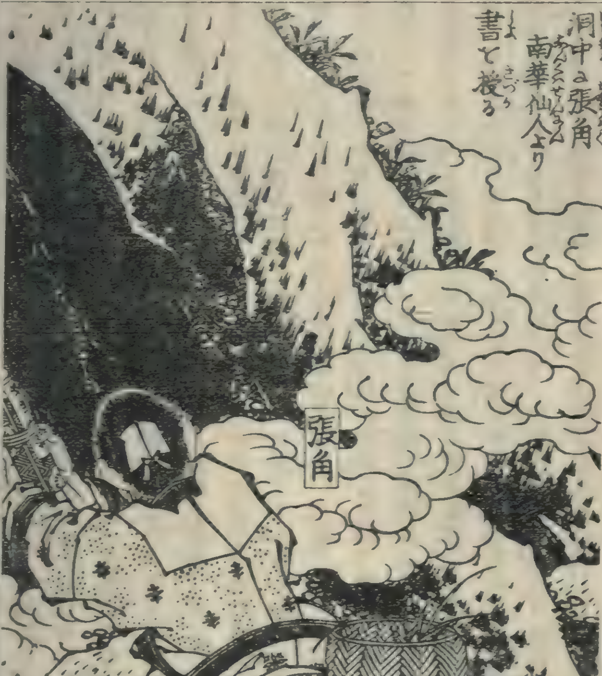
雲長、始め壽長と云へり、先年鄕の豪雄、勢ひに依て我を侮しゆゑ、我之を殺して江湖の間に逃れ、流浪すること五六年なり、今黄巾の賊蜂起して、國々の守護英雄の士を招く、我この故に來りたり。玄德大に喜び我志の程を詳に語りければ、關羽天の助なりと喜び、共に張飛が家に行て義兵を起さん事を議し、三人の内に玄德年長じたればとて、二人再拜して兄とす。張飛が曰、わが宅の後なる桃の園、幸に花の盛なり、明日白馬を宰て天を祭り、烏牛を殺して地を祭り、三人生死の交を結ばんは如何に。玄德關羽しかるべしと同じ、次の日桃の園に出て金紙銀錢を列ね、牛馬を殺して天地を祭り、共に再拜して誓て曰、いま此三人姓氏異なりと云ども、結んで兄弟となり、心を合せ力を協せて漢室を扶け、上は國家に報じ下は萬民を救ふべし、同年同月同日に生ることを望まず、願くは同年同月同日に死ん、皇天后土この心を照鑒し、若義に背き恩を忘ば、天人共に誅戮すべしとて、祭り了て玄德を兄とし、關羽を次とし、張飛を其次とし、共に玄德の母を拜して、其のち鄕の内にて腕立する若者共を集、桃の園にて酒宴し、三百餘人に及びければ、明日より旗を擧んと議するに、馬一匹も無れば、如何せんと案ずる所に、誰とは知ず、數十人打つれて多く馬を引せたる人々、この處へ向ひ來ると申す。玄德の曰、これ天われを助る也とて、共に出て之を見れば、中山の大商人に、張世平、蘇雙と云ふもの二

李定と云ふ人これを見て、この舍より必ず貴人を出さんと云へり。時に年二十八歳なりけるが、天下に黄巾の賊蜂起して、國々より忠義の士を招と聞て、自ら出て州郡に立たる高榜を讀、長嘆して歸んとするに、後より大なる聲を揚て、大丈夫の士、國の爲に力を出さずして、何事をか長嘆するぞと詞を掛る者あり。玄德後を屹と見れば、その人身の長八尺、豹頭環眼、燕頷虎鬚、聲雷の如く、勢ひ奔馬に似たり。乃ち立回てその名を問ば、答て曰、某は張飛字は翼德と云もの也、世々涿郡に住居して少の田地を持、酒を賣猪を屠て家業とし、專ら名ある人と相交る、今この處を過るに、足下の高榜の下にて長嘆し玉ふを見る、是いかなる故ぞ。玄德の曰、われ今は流落たれども、本は漢室の宗族にて、劉備字は玄德と云もの也、近ごろ黄巾の賊、しきりに州郡を掠劫す、我これを平げて社稷を扶んと思へども、力の足ざるを恨る也。張飛が曰、よくも我心に合へり、其義ならば我に相從ふ者四五人あり、共に志を合せて大儀の計略を成んとて、伴て玄德の家に來り、酒を飲で相議する所に、又一人の男きたり、一輛の車を酒店の門外に留め置、內に入て桑の木の下に坐し、家主を呼て酒を買ふ。玄德その體を見れば、身の長九尺五寸、髯の長さ一尺八寸、面は重棗の如く、唇は抹硃の如し、丹鳳の眼臥蠶の眉、相貌堂々威風凜々たりしかば、迎へ入て名を問に、答て曰、われは河東解良の人にて、關羽字は

張角事の現れたるを見て速に兵を興し、自ら天公將軍と號し、張梁を地公將軍と號し、張寶を人公將軍と號し、百姓を集めて申けるは、今漢の運氣すでに盡て、大聖人世に出たり、汝等宜く天に順て太平を樂めと云ければ、四方の愚民われもくと來り集り、皆黃なる絹を以て其頭を包ければ、世の人これを黃巾の賊と號す。張角すでに四五十萬の勢を得て、在々所々に火を放ち、人の財寶を掠め取る。これに依て地頭官吏も防べき樣なく、盡く逃かくれて、其騷動斜ならず。大將軍何進これを誅せんとて帝に奏し、諸所守護職に命じて軍勢を催促せしめ、盧植、皇甫嵩、朱儁三人を大將とし、三手に分て追討せしむ。此時張角が一軍、幽州燕州の界を手痛く犯しければ、太守劉焉これを防ん爲に、校尉鄒靖と云ものに命じ、諸處に高榜を立て忠義の兵を集しむ。其ころ涿縣の樓桑村と云ところに、一人の英雄あり、此人つねに言少して、禮を以て人に下り、喜怒色に形さず、天下の名ある人を友として、其志きはめて大なり。身の長七尺五寸、兩の耳肩に垂、左右の手膝を過、よく目を以て其耳を顧る。漢の中山靖王劉勝の後胤にして、景帝の玄孫なり。劉備、字は玄德、父を劉弘と云しが、幼して喪しかば、母に事て孝を盡し、自ら履を售、蓆を織て家業とす。舍の東南の方に大なる桑の木あり、高さ五丈あまりにして、遙に望ば重々して車蓋の如し、往來の人この木を見ては尋常にあらずと云。

張角あまねく符水を施すに驗を得ずと云ものなく、盡く張角が座前に來て、自ら其過を懺悔し、皆立どころに平復す。張角これより大賢良師と號し、五百餘人の弟子を四方に分て病を救しめ、三十六の方を立て大小を分ち、皆將軍の名を以て方に名づく。此故に大方を行もの一萬餘人、小方を行もの六七千人、みな一部の長を立て、蒼天已死黃夫當立、歳在甲子天下大吉と云はやらせ、甲子の二字を書て遍く施與へ、郡縣、市鎭、宮觀、寺院、盡く之を推ずと云こと無し。その後青州幽州徐州冀州荊州楊州兗州豫州の間には、家々に大賢良師張角と書て、敬ひ貴こと鬼神を禮するが如なりければ、張角心の内に非分の望を發し、先大方の馬元義と云ものに金銀を持せ、禁裏に入て密に十常侍が心を結しめ、封諝徐奉等に内通の事を賴み、二人の弟張梁張寶を呼で申けるは、至て得がたきは民の心なり、今民の心われに歸す、若この時に乘て天下を取ずんば、萬人の望を失ん、ねがはくは二人の本意を聞ん。張梁張寶、これ元より望ところ也と云ければ、張角大に喜び、一樣に黃なる旗を造り、三月五日に一同に事を起んとて、唐州と云弟子に書簡を持せ、禁裏に入て内々たのみ置たる封諝、徐奉等に告知さしむるに、唐州にはかに心を變じ、直ちに奉行所に行て事の子細を訴へければ、帝大に驚き玉ひ、大將軍何進に命じて、まづ馬元義を生取て首を刎させ、内應せんとしたる者ども千餘人を獄に下し玉ふ。

南華老仙


洞中ニ張角
南華仙人より
書を授る
張角

は、みなこれ亡國の兆なり、天なほ漢朝をすてず、變を示して君臣を戒め給ふ、古より天子怪を見れば、すなはち德を修むといへり、いま内官猥に權を執て天下の禍を成す、早く是を除き玉はゞ天災自ら消すべしと、ひそかに奏聞しければ、其事乍ちもれて、楊賜、蔡邕等、内官の爲に殺されんとせしを、呂强といふもの蔡邕が才を惜み、命を乞ひて助けり。其後内官に、張讓、趙忠、封諝、段珪、曹節、侯覽、蹇碩、程曠、夏輝、郭勝といふもの十人、みな君に諂ひ事へて、專ら天下の政を掌る。このゆゑに是を十常侍と號して、朝廷敬ひ重んずること師父の如し。諸の官人其門下に伺候し、阿り服せんことを欲す。こゝに中平元年甲子の歳、鉅鹿郡張角と云ものあり。二人の弟を張梁張寶と云り。元來不第の秀才たりけるが、或日山中に入て藥を採、一人の翁に逢。この翁眼の內碧にして、顏は童子の如く、手に藜の杖を携へ、張角を呼で怪き洞の中に到り、三卷の書を授て申けるは、これを太平要術と名づく、汝よく此書を讀で、唯つねに道を行て善を施し、天に代りて普く世の人を救ん事を思へ、若惡心を起しなば、必ず身を亡べきぞと云ければ、張角再拜して其名を問に、我は南華老仙なりと答て一陣の風ふき起り、行方しらず飛去にけり。張角この書を讀で晝夜怠らず學び、遂に雨を呼風を呼の術を得て、自ら太平道人と號す。其ころ天下大に疫癘行はれて、死する人多かりければ、

して計洩聞え、反て其身を害せらる。此より内官いよ〳〵志を得て、放に朝綱を手に握れり。建寧二年四月十五日、帝溫德殿に出御なりて、已に御座に著んとし玉ふ時、俄に殿角より狂風おこりて、其長二十餘丈の青蛇、梁の上より飛下りて椅子の上に蟠りければ、帝大に驚せ玉ひ、地の上に昏倒し玉ふ。殿中の騷動斜ならず、百官みな上を下へ反して、武士を召てこれを搜出さんとするに、大蛇は消が如くに失て、雷の鳴こと天地を碎が如く、雹まじりの大雨夜半に至て靜まり、洛陽城中の民家數千軒崩れ壞れて、死するもの多かりけり。これをこそ希代の珍事かなとあやしむ處に、同じき四年の二月に、洛陽おびたゞしく地震して、禁門省垣ことごとく倒れ、海水あふれわきて、登萊、機密の海ちかき國は、人家皆大波にまかれて、百姓死するもの數を知ず。是徒事にあらずとて、改元ありて熹平と號す。これより邊境時々謀反するものあり。熹平五年又あらためて光和と號す。諸處に怪異の事ありて、雌鷄化して雄となる。六月朔日十餘丈の黑氣地より起りて、飛で溫德殿に入る。秋七月玉堂の內に虹現はれて、五原山の岸こと〴〵く崩る。そのほかさま〴〵の怪しきことども、數を知らずおこりければ、これ誠に一人の愼、天下の大事ならんとて、勅して群臣を金商門に集め、災を除くの術を問給ふときに、光祿大夫楊賜、議郎蔡邕、二人表を上りて申けるは、近年打續き怪異の事ども起り候

通俗三國志

巻之一

○祭天地桃園結義

熟邦家の興廢を視るに、古より今に至るまで、治極則入亂、亂極則入治。その理、陰陽の消長寒暑の往來せるが如し。此故に人君小心ことと兢々業々として須臾も敢て不忘焉。堯舜も猶病矣とす、況や庸人をや。漢の高祖、三尺の劍を提て秦の亂を平げ給ひしより、哀帝の御時まで二百餘年、天下よく治りしに、王莽漫に位を簒て、海宇又大に亂る。然るを光武これを平げて、後漢の世を興し玉ひ、質帝桓帝の御時まで、已に二百年に及べり。光武帝より十二代の天子を靈帝と申奉る、桓帝の讓を受て、御年十二歳にて帝位に卽玉ふ。この時大將軍竇武、太傅陳蕃、司徒胡廣、三人相共に天下の政務を攝て、君を輔佐し奉る。其のち内官に曹節王甫と云ものあり、諂佞にして君を欺き、漫に權柄を專にせしかば、竇武陳蕃これを誅せんと

吉死、倭諸屯悉皆撤去、此亦理之難測者也、豈偶然耶。昔苻堅入寇、晉謝安以旌節旗鼓禱於蔣子文廟、謝玄以八萬偏師、勝強秦六十萬、如八公山草木風聲鶴唳說者、皆以爲神助。況關王以英雄剛大之氣、其扶正討賊之志、貫萬古如一日、死而不滅、安知無神應乎。嗚呼烈哉、京師廟前立二長竿懸兩旗、一書協天大帝、一書威震華夷、字大如椽、因風飄拂半空、遠近皆仰而見之、其帝號亦皇朝所追崇云、可見其尊崇之至也。

これを以て見る時は、神を現すこと何ぞ怪むことをせん。

問て曰、張飛強暴にして、空く匹夫の手に死す、是血氣の勇なり、何ぞ人傑と稱するに足ん。答へて曰、張飛稟性こと躁暴なりと云ども、桃園に生死を誓て、義氣の盛なること關羽に亞ず、蜀に入りて嚴顏を釋し、來陽に鳳雛を薦め、人の賢なるを見ては敬ふこと師父の如し、眞に國士の風あり、豈血氣の勇ならんや、昭烈蓆を販より身を起して、了に漢の正統を繼玉ふは、孔明が智、關羽、張飛が勇に因れり、世の人これを高祖の三傑に擬すること、眞に宜哉。

通俗三國志或問　止

と號して、所乘の舟みな像を設く、近來その廟の記を見るに曰、

余往年赴燕都、自遼東至帝京、數千里名城、大邑及閭閻衆盛處、無不立廟宇以祀漢將壽亭侯關公。至於人家、亦私設畫像、掛壁置香火於其前、飲食必祭。凡有事必祈禱、官員新赴任者、齋宿謁廟甚肅虔。余怪之問於人、不獨北方爲然、在々如此遍天下云。萬曆壬辰、我國爲倭賊所破、國幾亡。天朝發兵救之、連六七載未已、丁酉冬、天將合諸營兵、進攻蔚山賊壘不利、戊戌正月初四日退師。有遊擊將軍陳寅、力戰中賊丸、載還漢都調病、廼於所寓崇禮門外山麓、創起廟堂一座、中設神像以奉關王。諸將楊經理以下各出銀兩助其費、我國亦助之。廟成上亦往觀之。余與備邊司諸僚隨駕詣廟庭、再拜其像。塑土爲之、面赤如重棗、鳳目髯垂過腹、左右塑二人、持大劍侍立、謂之關平周倉、儼然如生。自是諸將每出入參拜皆曰、爲東國求神助却賊。五月十三日大祭廟中云、是關王生日、若有雷風之異、則神至矣。是日天氣清明、午後黑雲四起、大風自西北來、雷雨竝作。有頃而止、衆人皆喜曰、王神下臨矣。既而又於嶺南安東星州二邑建廟。安東則斲石爲像、星州土塑。而星州甚著靈異之跡云。未幾、倭酋關白平秀

陣は、高平廣大にして、守る時は不レ可レ攻、攻る時は不レ可レ依、進時は不レ可レ禦、退く時は不レ可レ追、是所レ謂先據二不レ可レ勝之地一、以待二敵之可レ勝者也、仲達よく兵法に通ず、孔明が必ず五丈原に出んことを知て此言を出せり。

問て曰、關羽臨沮に亡て後、往々に神を現、是可レ怪の事なり、恐くは妄言ならん。答て曰、關羽は本解良の武夫、昭烈と生死の交を結で、恩如二骨肉一、險難の中に相從て無二慢易之失一、一毫も信義を背ずして天下の奸賊を誅し、了に王業を扶成り、此故に曹操が奸雄なるも、關羽を屈すること能はず、其義を感じて不レ得レ追、是まことに天下の義士也と稱せり、すでに臨沮に亡と云ども、英雄剛大の氣彌二綸四海一、何ぞ神應なきことを得ん、玉泉山に禪を談じて普靜長老を師とし、唐の儀鳳年中に、六祖神秀と雲霧の間に遇て道場を鎭守し、宋の崇寧年中に、多く聖を顯して崇寧眞君に封ぜられ、解州鹽池に蚩尤神の邪をなせるを破りて、累に義勇武安王に封ぜらる、其より帝に封ぜられ天尊と稱せられ、國を護し民を祐て、蠻夷の國までも仰尊ずと云ことなし、世に傳ふる我日本の軍神と稱するも、將軍塚に埋し像も皆關羽なりと、予異域の人に遇て關王の事を問しに、安南、琉球、女直、朝鮮、呂宋、暹羅の諸國も、盡く廟宇を建て祭をなし、凡そ事不レ祈と云ことなく、關爺々

襲んと、此を以て見る時は、此計可レ用こと明なり、兵不レ厭レ詭、求レ勝而已、孔明これを用ざるは、魏延を疑へる故か、其才國を治るに長じて、計を用るに長ぜざるか。答て曰、みな非なり、曹操すでに死して、天下又孔明に敵する者なし、天もし漢を昌にせんとならば、孔明いづくより出たりとも、曹叡を擒にし仲達を馘に足ん、魏延が計は甚だ危し、若子午谷より出て僥倖に勝ことを得るとも、魏の勢谷の口を塞なば、五千餘騎こと〴〵く谷の中に餓死すべし、是敵を欺の計なり、此故に孔明用ひず、孔明は節制の師を用ふ、何ぞ僥倖を以て勝ことを望ん、是まさに明レ道正レ義の人と論ずべし、近功小利を急にする人の知ところにあらず。

問て曰、仲達渭水に出て蜀の勢を防ぎ、孔明もし武功に出、山に依て東の方に陣を取らば、御方の大なる患なり、若西の方五丈原に陣を取ば、御方少しも患ること無と云へり、然るに孔明果して五丈原に陣を取たるは、武功に出ることを知ざる故か。答て曰、是みな仲達が詐の謀なり、仲達深く孔明を怕れ、出て戰ふこと無して巾幗の辱を受、これに因て魏の將士怒ずと云もの無、必ず孔明が五丈原に出んことを怕れ、諸人の心を穩にせん爲に譎て此言を出せり、凡そ用レ兵の道は、好レ高而惡レ下、貴レ陽而賤レ陰、孔明が五丈原の

此を見ず、豈半毫も詐を用ひんや、曹操が病亡する時に至ては、妾婦子弟に別を惜み、伊嬰として涕泣し、平生の奸邪ことゞゝく露る、昭烈の如きは漢を思ふの心猶不休、孤を孔明に託して力を盡して輔させ、太子に勅して、勿以惡小而爲之、勿以善小而不爲、惟賢惟德可服人と、此言みな千載の師法なり、昔太甲德を失ひしかば伊尹これを放ち、過を改るに至て又位に復しむ、是昭烈の所以託孤於孔明なり。

問て曰、孔明自ら隴畝に耕して天の時を樂む、若昭烈の三たび顧るに非んば、岩穴に老死して草木と共に腐果べきか。答て曰、世衰へ道廢れて、士の能ある者ことゞゝく名利の爲にせずと云ものなし、孔明が如きは、能出處の正を得たりと云べし、此故に一世の人龍と號す、能時に從て變化す、苟も其主に非ば仕ず、常に膝を抱て長吟し、天の時を樂で人の聘禮に應せずと云ども、昭烈の三顧を得て義氣奮發し、坐ら三分の策を定め、一たび出て功名事業彪炳顯著、王業を輔成り、豈まことの人龍にあらずや。

問て曰、孔明が初めて魏を伐時、魏延五千餘騎を率して秦嶺を超、子午谷より北に向て十日の内に長安に出、夏侯楙を擒にせんと云り、然れども孔明用ず、魏延身を終るまで此計の不見用うらむ、仲達も云り、我もし孔明に代て兵を用ひば、先子午谷より長安を

助者順也、この故に雎水の風滹沱の氷、みな是天の高祖光武を助る所以なり、孔明たとひ風を祈ずとも、天もし正を助ば、曹操が罪逆を疾で昭烈の大順を助ざらんや。

問て曰、鳳雛が來り見る時、昭烈その容を喜ず、來陽の令として却て罪を正んとす、是何ぞ能用人と云ん。答て曰、龐統は南州の冠冕、久く呉に仕て用られず、此故に江を渡て昭烈に見ゆ、昭烈常に賢を思こと渴するが如と云ども、龐統新に敵國より來る、才藝いまだ試ず、焉ぞ輕々しく心腹を委せん、故に縣中の政を理せしめ、其才を知時は擢で用て孔明が副とす、是に因て驥足を展て益州を取、漢業を輔成り、魯肅呉の臣と云ども、昭烈の能用賢に急なるを知て、龐統を薦て來らしむ、昭烈もし賢を知ずんば、龐統初めより江を渡らじ。

問て曰、堯舜は其子の不肖を知て、了に天下を他人に禪玉へり、昭烈永安宮にて孤を孔明に託する時、すでに太子の不肖なるを知て、如其不才君可自取と宣り、太子この時年十七歲、昭烈の睿明を以ては、定めて國家を治むる子に非るを知玉はん、然らば何ぞ明に天下を孔明に禪玉はざるぞ。答て曰、嗚呼是なんの言ぞ、小人の腹を以て焉ぞ君子の心を度ん、昭烈は胷次豁然、磊々落々、孔明と君臣師友の契を結て、三代より以還いまだ其

を領する者、罅を窺て王室を奪はんと謀る、荊州の劉表、益州の劉璋、偃然として不臣の心を挾み、險阻を恃で兵威に憑、つねに神器を竊んと謀る、此實に漢の奸賊なり、董卓、袁術が輩と又なんぞ異ん、昭烈信義に仗て羣盜を攘ひ、漢室を恢復せんことを欲して、若この二國を匡さずんば、焉ぞ能王室を興さん、是正に所ニ以爲ㇾ義なり、況や劉表が讓を辭して、身の艱難に遭ことを顧ず、劉琦を扶て嫡庶を正し、曹操を赤壁に破りて、後つひに荊州を保ち玉へり、劉璋が暗弱なる、張松法正が輩よき主を得んことを思ひ、久く昭烈を臣とせんことを欲す、然れども同宗の國を無ㇾ故して奪に忍びず、堅く從ひ玉はざりしが、後に劉璋が害逆の心を生ずるを見て、已ことを得ずして益州を得玉へり、是みな天の與ふる也、自ら取るにあらず。

問て曰、曹操を赤壁に破る時、西北の風俄に東南に變ず、天なんぞ私なるや、孔明が風を祈るは、是婦女の妄言、なんぞ信とするに足ん、天もし東南の風を私せずんは、昭烈必ず曹操が爲に擒とならんか。答て曰、孔明周瑜が赤壁に戰ふ、火を發せずんば曹操に勝ことを得がたし、火は風の力に非ば用ふべからず、時冬の末に至て北風烈とは申ながら、風雲の盤旋須臾の間に變ず、況や大江の上颶風測がたし、焉ぞ北風のみならん、易に曰、天之所

通俗三國志或問

或問て曰、漢の高祖は、張良、蕭何、韓信が三傑を用て、四百年の基を開き玉へり、昭烈皇帝の孔明、關羽、張飛を得玉へる、世の人これを蜀の三傑と號す、然れども海宇を混一する事能はずして、纔に劉禪に至て滅たるは、昭烈の德教高祖に及ばざる故か、三傑の才力、張良蕭何韓信に及ばざる故か。予答て曰、漢室すでに衰て奸雄きそひ起り、曹操孫權が徒、位を潛し威を震て、天下みな漢あることを知ず、昭烈皇帝は漢室の皇叔、涿郡より義兵を揚、姦黨を誅して王業を蜀都に開き、炎燼を扇で漢運の將傾を扶け、再社稷を興して漢の統を繼玉ふ、其功至て大也、豈高祖の得時乘運興れるに同からんや、是所謂易地則皆然る者なり、何ぞ優劣を論ずることをせん。

問て曰、荊州の劉表、益州の劉璋、共に漢室の宗親、つひに帝命に背ず、然るに昭烈二國を奪て、劉璋を外に移す、是正を得たりと云んや。答て曰、取之以仁義、守之以仁義者周の武王なり、天下これを非なりとせず、董卓が亂より豪雄きそひ起て、一州を保ち一郡

張楊　字稚叔雲中人官至大司馬晉陽侯
張超　字孟高官至廣陵太守
王匡　字公節官至河內郡太守
司馬懿　字仲達河內溫人諡宣帝
司馬師　字子元懿長子諡景帝
司馬昭　字子尙懿次子諡文帝
司馬炎　字安世昭長子受魏禪即正位號晉在位二十六年壽五十五歲諡武帝

通俗三國志姓氏　止

韓徳　程武　許儀　裴秀　樂綝

王雙　秦良　車冑　郝昭　司馬望

張虎

○雜傳

董卓　字仲穎隴西臨洮人官拜大將軍

袁紹　字本初汝南汝陽人官至大將軍

袁術　字公路官至左將軍

劉表　字景升山陽高平人官至鎭南將軍荊州牧成武侯

呂布　字奉先五原郡九原人官至奮威將軍封溫侯

張邈　字孟卓東平壽張人官至陳留太守

公孫瓚　字伯珪遼西定支人官至前將軍易侯

陶謙　字恭祖丹陽人官至安東將軍徐州牧

張魯　字公祺沛國豐人官至鎭南將軍閬中侯

劉璋　字季玉武陽人官至振威將軍益州牧

華陀　字元化沛國譙人善醫

杜夔　字公良河南人官至軍謀祭酒參太樂事

朱建平　無字沛國人官至五官將善相

周宣　字仲和樂安人官至中郎屬太史善圓夢

管輅　字公明平原人官至少府丞善卜

○附傳

韓浩　曹爽　鄧颺　胡昭　陳琳　唐咨　徐庶　張繡

史渙　曹彥　丁謐　孔融　楊修　文欽　蔡瑁　蔣幹

曹純　曹訓　畢軌　禰衡　李浮　文鴦　張允　陳珪

曹肇　曹義　李勝　王肅　婁圭　鄧忠　師纂　陳登

公孫淵　何晏　桓範　劉資　夏侯玄　夏侯楙　夏侯惠　夏侯霸

田豫　字國讓漁陽雍奴人官至大中大夫
牽招　字子經安平觀津人官至鴈門大守
郭淮　字伯濟太原陽曲人官至車騎將軍陽曲侯
徐邈　字景山燕國薊人官至司空
胡質　字文德楚國壽春人官至征東將軍
王基　字伯興東萊曲城人官至征南將軍
王昶　字文舒太原晉陽人官至征南將軍
王淩　字彥雲太原祁人官至司空
毋丘儉　字仲恭河東聞喜人官至鎭東都督
諸葛誕　字公休瑯琊人官至司空
司馬芝　字子華河內溫人官至河南尹
司馬朗　字伯達河內溫人官至兗州刺史
鄧艾　字士載義陽棘陽人官至太尉
鍾會　字士季潁川長社人官至司徒

常林　字伯槐河内温人官至光祿大夫

楊俊　字季才河内獲嘉人官至南陽太守

杜襲　字子緒潁川定陵人官至大中大夫

趙儼　字伯然潁州陽翟人官至司空

裴潛　字文行河東聞喜人官至光祿大夫

韓暨　字公至南陽堵陽人官至司徒

崔林　字德儒清河東武城人官至司空安陽侯

高柔　字文惠陳留圉人官至太尉

孫禮　字德達涿郡容城人官至司空大利亭侯

王觀　字偉臺東郡廩丘人官至司空陽鄉侯

辛毘　字佐治潁州陽翟人官至衛尉

楊阜　字義山天水冀人官至少府卿

高堂隆　字昇平泰山平陽人官至散騎常侍

滿寵　字伯寧山陽昌邑人官至太尉

龐德　字令明南安桓道人官至立義將軍關內亭侯

龐淯　字子廙酒泉表氏人官至中散大夫

閻溫　字伯儉天水西城人官至上邽令

王粲　字仲宣山陽高平人官至侍中

衛覬　字伯儒河東安邑人官至尚書閺鄉侯

劉廙　字恭嗣南陽人官至侍中關內侯

傅嘏　字蘭石北地泥陽人官至尚書僕射陽鄉侯

陳羣　字長文潁州許昌人官至司空

桓楷　字伯緒長沙臨湘人官至侍中尚書安鄉侯

陳矯　字季弼廣陵東陽人官至司徒

徐宣　字寶堅廣陵海西人官至侍中光祿大夫

衛臻　字公振陳留襄邑人官至司徒長垣侯

盧毓　字子家涿郡人官至司空容城侯

和洽　字陽士汝南西平人士至太常卿

鄭渾　字文公河南開封人官至將作大匠
倉慈　字孝仁淮南人官至燉煌太守
張遼　字文遠鴈門馬邑人官至前將軍晉陽侯
樂進　字文謙陽平衛國人官至右將軍
于禁　字文則泰山鉅平人官至安遠將軍
張郃　字儁乂河間鄚人官至征西車騎將軍
徐晃　字公明河東陽人官至右將軍陽平侯
李典　字曼成山陽鉅野人官至破虜將軍
李通　字文達江夏平春人官至汝南太守
臧覇　字宣高泰山華州人官至執金吾扈城侯
文聘　字仲業南陽宛人官至後軍將軍新野侯
呂虔　字子恪伍城人官至萬年亭侯
許褚　字仲康譙人官至武衛中郎將牟鄉侯
典韋　無字陳留巳吾人官至都尉

王朗 字景興東海郯人官至大司徒蘭陵侯

郭嘉 字奉孝潁州陽翟人官至司空軍祭酒

董昭 字公仁濟陰定陶人官至衛尉樂平侯

蔣濟 字子通楚國平阿人官至領軍將軍

劉曄 字子陽淮南成德人官至大中大夫

劉放 字子棄涿郡人官至侍中光祿大夫方城侯

劉馥 字元穎沛國相人官至揚州刺史

梁習 字子虞陳郡拓人官至大司農

張既 字德容馮翊高陵人官至西鄉侯

溫恢 字曼基太原祁人官至涼州刺史

賈逵 字梁道東阿襄陵人官至建威將軍

任峻 字伯達河南中牟人官至長水校尉

杜畿 字伯侯京兆人官至尚書僕射豐樂亭侯

蘇則 字文師扶風武功人官至都亭侯

國淵　字子尼樂安蓋人官至太僕卿

田疇　字子泰右北平無終人官至議郎

王修　字叔治北海營陵人官至大司農郎中

管寧　字幼安北海朱虛人官至光祿勳

邴原　字根矩北海朱虛人官至五營將長史

崔琰　字季珪淸河東武城人官至中尉

毛玠　字孝先陳留平丘人官至尚書僕射

徐奕　字季才東莞人官至中尉

何夔　字叔龍陳郡陽夏人官至太僕成陽亭侯

鮑勛　字叔業泰山陽平人官至御史中丞

邢顒　字子昂河間鄭人官至司隷校尉關內侯

鍾繇　字元常潁州長社人官至太傅定陵侯

華歆　字子魚平原高堂人官至太尉博平侯

程昱　字仲德東郡阿人官至衛尉安鄉侯

曹仁　字子孝操拜大司馬謚忠侯
曹洪　字子廉操從弟
曹休　字文烈操族弟
曹眞　字子丹操族子
夏侯尚　字伯仁淵從子
曹彰　字子文操次子封任城威王
曹植　字子建操次子封陳思王
曹熊　字子威操次子封蕭王
荀彧　字文若潁川潁陰人官至侍中光祿大夫
荀攸　字公達彧之姪官至尙書令
賈詡　字文和武威姑藏人官至太尉壽鄕侯
袁渙　字曜卿陳郡扶樂人官至郞中令
張範　字公儀河內修武人官至諫議大夫
涼茂　字伯方山陽昌邑人官至太子太傅

環氏　生沖據宇
杜氏　生林袞
秦氏　生玹峻
周氏　生均
宋氏　生徽
孫氏　生上彪勤
李氏　生乘整京
劉氏　生棘
趙氏　生茂

○文帝九男

甄氏　生叡
潘氏　生蕤
仇氏　生霖
蘇氏　生邕
宋氏　生儼
李氏　生協
朱氏　生鑒
徐氏　生禮
張氏　生貢

○列傳

夏侯惇　字元讓沛國譙人官至大將軍諡忠侯
夏侯淵　字妙才惇族弟官至征西將軍諡忠侯

文帝　諱丕字子桓操之子在位七年壽四十歳
明帝　諱叡字元仲丕之子在位十三年壽三十六歳
齊王　諱芳字蘭卿叡之養子在位十四年壽四十三歳廢爲王
高貴卿公　諱髦字彦士丕之孫東海定王霖之子在位七年壽二十歳司馬氏弑之
陳留王　諱奐字景明操之孫燕王宇之子在位九年壽五十八歳禪位于晉

○后

武宣卞皇后　丕之母瑯琊陽縣人
文昭甄皇后　叡之母中山無極人
文德郭皇后　叡之繼母安平廣宗人
明悼毛皇后　叡之妻河内人
明元郭皇后　叡之次妻西平人

○武帝二十四男

卞后　生丕彰熊植　　尹氏　生矩
劉氏　生昂鑠　　王氏　生幹

賀邵　字は興伯、會稽山陰の人、官中書令太子太傅に至る
華覈　字は永先、呉郡武進の人、官中書丞に至る
韋曜　字は弘嗣、呉郡雲陽の人、官中書僕射に至る

○附傳

劉基　士徽　士燮　吳景　徐眞
徐隣　徐現　張承　張林　張奮
顧邵　顧譚　顧承　步闡　張玄
張尚　裴玄　唐國　薛羽　薛瑩
陳表　朱績　朱變　呂據　虞紀
虞中　虞聳　虞芮　陸宏　陸容
徐詳　劉讃　諸葛誕　張布

【魏】

○帝

武帝　姓は曹、諱は操、字は孟德、沛國譙の人　壽六十六歲

周魴　字子魚陽羨人官至裨將軍關内侯

鍾離牧　字子幹山陰人官至前將軍

潘濬　字承明武陵漢壽人官至太常卿

陸凱　字敬風吳郡吳人官至征西大將軍

吳范　字文則會稽上虞人官至騎都尉太史令

是儀　字子羽北海人官至尚書僕射

趙達　無字河南人官至大中丞

劉惇　字子仁平原人官至太史令

滕胤　字子蒯北海劇人官至左衛將軍

胡琮　字偉則汝南固始人官至偏將軍

王蕃　字永元廬江人官至散騎常侍

樓玄　字承先沛國蘄人官至大司農

諸葛恪　字元遜瑾之長子官至太子太傅

濮陽興　字子元陳留人官至丞相

呂範　字は子衡汝南細陽の人官大司馬に至る
朱桓　字は休穆呉郡呉の人官前將軍に至る
虞翻　字は仲翔會稽餘姚の人官騎都尉に至る
陸績　字は公紀呉郡呉の人官偏將軍に至る
張溫　字は惠恕呉郡呉の人官太子太傅に至る
駱統　字は公緒會稽烏程の人官建安都尉に至る
陸瑁　字は子璋陸遜之弟官義郎に至る
吾粲　字は孔休烏程の人官太子太傅に至る
朱據　字は子範呉郡呉の人官驃騎將軍に至る
陸遜　字は伯言呉郡呉の人官丞相に至る
陸抗　字は幼節孫策外孫官偏將軍毘陵侯に至る
賀齊　字は公苗山陰の人官後將軍に至る
全琮　字は子璜錢塘の人官右衛大司馬左將軍に至る
呉岱　字は定公廣陵海陵の人官大司馬に至る

程普　字德謀右北平土垠人官至盪寇將軍

黄蓋　字公覆零陵泉陵人官至偏將軍

韓當　字公義遼西令支人官至昭武將軍

蔣欽　子公奕九江壽春人官至昭武將軍

周泰　字幼平九江下蔡人官至奮威將軍

陳武　字子烈廬江松滋人官至偏將軍

董襲　字元代餘姚人官至偏將軍

甘寧　字興霸巴郡臨江人官至折衝將軍

凌統　字公績琅琊莒人官至偏將軍

徐盛　字公嚮琅琊莒人官至安東太守

潘璋　字文珪東郡發干人官至振威將軍

丁奉　字承淵廬江安豐人官至右司馬左將軍

朱治　字君理丹陽故彰人官至安國將軍毘陵候

朱然　字義封朱治姊之子官至右司馬右軍師

太史慈　字子義東萊黃縣人官至建昌都尉
士燮　字威彥蒼梧廣信人官至衛將軍龍編侯
張昭　字子布彭城人官至輔吳將軍
顧雍　字元歎吳郡吳人官至尚書令陽遂鄉侯
諸葛瑾　字子瑜瑯琊人官至左將軍宛陵侯
步隲　字子山臨淮上陰人官至右將軍臨湘侯
張紘　字子綱廣陵人官至長史
嚴畯　字曼才彭城人官至尚書
程秉　字德樞汝南南頓人官至太傅
闞澤　字德潤會稽山陰人官至少傅
薛綜　字敬文沛郡竹邑人官至太子少傅
周瑜　字公瑾廬江舒人官至偏將軍領南郡太守
魯肅　字子敬臨淮東城人官至橫江將軍益州牧
呂蒙　字子明汝南富陂人官至南郡太守孱陵侯

孫輔　字伯儀賁之弟官至平南將軍

孫翊　字叔弼權之弟官至丹陽太守

孫匡　字季佐翊之弟官至定威中郎將

孫韶　字公禮策賜姓官至鎭北將軍

孫登　字子高權之長子黃龍元年立爲太子三十而卒

孫慮　字子智登之弟封建昌侯

孫和　字子孝慮之弟赤烏五年爲太子太和年爲陽侯

孫桓　字武叔和之子官至建武將軍丹徒侯

孫霸　字子威和之弟封魯王

孫奮　字子揚霸之弟封齊王

孫峻　字子遠靜之曾孫官至丞相大將軍

孫琳　字子通峻之外弟官至大將軍承寧侯

○列傳

劉繇　字正禮東萊辨平人官至振武將軍

徐后　呉郡富春人權之妻
步后　臨淮淮陰人亮之母
王后　瑯琊人和之母
潘后　會稽句章人權之妻
全后　全尙之女亮之妻
朱后　朱據之女休之妻
滕后　太常胤之族皓之妻
何姬　丹陽句容人和之妻

○宗室

孫靜　字幼臺堅之弟官至昭義中郎將
孫瑜　字仲異靜之子官至奮威將軍
孫皎　字叔朗瑜之弟官至征虜將軍
孫奐　字季明皎之子官至揚威將軍
孫賁　字伯陽堅之姪官至征虜將軍

劉豹　向擧　殷純　趙祚　何宗
張爽　呉班　王諶　陳習　陳幾
張南　傅肜　趙景　馮習　黄皓
何平　黄崇　閻宇

呉

○帝

武烈皇帝　姓孫名堅字文臺呉郡富春人前破虜將軍後謚帝

長沙桓王　諱策字伯符堅之長子前討逆將軍後謚帝

太皇帝　諱權字仲謀策之弟在位三十一年壽七十歳

會稽王　諱亮字子明權之少子在位六年壽十七歳

景帝　諱休字子烈權之第六子在位七年壽二十歳

烏程侯　諱皓字元宗權之孫在位十七年壽四十一歳

○后

呉后　呉郡人權之母

張翼　字伯恭武陽人官至左車騎將軍
宗預　字德艷南陽安衆人官至征西大將軍
呂凱　字季平永昌人官至雲南太守
廖化　字元儉襄陽人官至右車騎將軍
楊戲　字文然武陽人官至射聲校尉

○別傳

劉焉　字君郎江夏竟陵人官至大將軍
劉泌　長沙人樊城縣令則劉封之叔父也

○附傳

諸葛喬　諸葛瞻　諸葛尚　董厥　張松
馬謖　陳祗　周倉　馬岱　尚寵
蔣斌　傅僉　劉敏　蔣顯　衛繼
關平　張苞　關興　常播　孟達
關索　趙戲　吳懿　射受　賴恭

來敏　字敬達義陽新野人官至光祿大夫

尹默　字思潛梓潼涪人官至大中大夫

李譔　字欽中梓潼涪人官至三郡太守

譙周　字允南巴西充國人官至中散大夫

郤正　字令光河南偃師人官至巴西大夫

黃權　字公衡巴西閬中人官至車騎將軍

李恢　字德昂建寧俞元人官至安漢將軍

馬忠　字德信巴西閬中人官至鎭南大將軍

王平　字伯岐巴西南充國人官至盪寇將軍

張嶷　字子均巴西岩渠人官至鎭北將軍

蔣琬　字公琰零陵相鄕人官至大將軍錄尙書事

姜維　字伯約天水冀人官至大將軍

費禕　字文偉義陽新野人官至大將軍尙書令

鄧芝　字伯苗義陽新野人官至車騎將軍

劉琰　字は威碩魯國の人官車騎將軍に至る
魏延　字は文長義陽の人官前軍師征西大將軍に至る
楊儀　字は威公襄陽の人官綏中軍師に至る
霍峻　字は仲邈南郡枝江の人官梓橦太守に至る
王連　字は文儀南陽の人官江陽の太守に至る
向朗　字は巨達襄陽宜城の人官左將軍に至る
張裔　字は君嗣蜀郡成都の人官長史に至る
楊洪　字は季休武陽の人官蜀郡の太守に至る
費詩　字は公擧南安の人官諫議大夫に至る
杜微　字は國輔梓橦の人官諫議大夫に至る
杜瓊　字は伯瑜蜀郡成都の人官太常に至る
周群　字は仲直巴西閬中の人官儒校尉に至る
許慈　字は仁篤南陽の人官太常に至る
孟光　字は孝裕雒陽の人官大司農に至る

孫乾　字功祐北海人官至秉中將軍

簡雍　字憲和涿郡人官至昭德將軍

伊籍　字機伯山陽人官至昭文將軍

秦宓　字子勅廣漢緜竹人官至大司農

董和　字幼宰南郡枝江人歷官中郎將

劉巴　字子初零陵烝陽人官至尚書令

馬良　字季常襄陽宜城人官至侍中

陳震　字孝起南陵人官至尚書令

董允　字休昭南郡枝江人官至侍郎

劉封　無字羅候寇氏子官至副將軍

呂艾　字季陽南陽人官至尚書令

彭義　字永年廣漢人官至江陽太守

李嚴　字正方南陽人官至前將軍

廖立　字公淵武陵臨沅人官至長水校尉

○後主の七男

劉璿　字は文衡太子　劉瑤　封安定王　劉琮　劉瓚

劉諶　封北地王　劉恂　劉璩

○列傳

諸葛亮　字は孔明瑯琊陽都の人官至丞相武鄕侯諡忠武

關羽　字は雲長河東解良の人官至壽亭侯前將軍

張飛　字は翼德涿郡の人官至車騎將軍

馬超　字は孟起扶風茂陵の人官至驃騎將軍

黃忠　字は漢升南陽の人官至關内侯

趙雲　字は子龍常山眞定の人官至鎭東將軍

龐統　字は士元襄陽の人官至副軍師中郎將

法正　字は孝直扶風郿人官至尚書令護軍將軍

許靖　字は文休汝南平輿の人歷官至太傅

糜竺　字は子仲東海朐の人官至安漢將軍

通俗三國志姓氏

蜀

○帝

先主劉備　字は玄德涿郡涿縣の人漢の景帝の玄孫在位三年壽六十三歳

後主劉禪　字は公嗣先主の子在位四十二年壽六十五

○后

昭烈皇后甘氏　沛縣の人先主の妾

穆皇后吳氏　陳留の人先主の繼室

敬哀皇后張氏　後主の妻張飛が長女

皇后張氏　後主の繼室張飛が次女

○先主の三男

後主劉禪

劉永　字は公壽封ず魯王に

劉理　字は奉孝封ず梁王に

關羽遺書辭曹操……五一〇

卷之十一

關羽千里獨行……五一九
關羽五關斬大將……五二七
關羽擂鼓斬蔡陽……五三六
劉玄德古城聚義……五五〇

卷之十二

孫策殺于吉仙人……五五九
孫權領衆據江東……五六七
曹操官渡戰袁紹……五七七
曹操烏巢燒兵糧……五八七
曹操倉亭破袁紹……五九八

卷之十三

玄德敗走荊州……六〇七
袁譚袁尚爭冀州……六一七
曹操決漳河淹冀城……六二七
曹操引兵取壺關……六三八
郭嘉遺計定遼東……六四九

卷之十四

玄德赴襄陽會……六五九
玄德躍馬跳檀溪……六六六
玄德到司馬徽山庄……六七三
玄德新野遇徐庶……六八〇
徐庶定計取樊城……六八四

卷之十五

徐庶薦諸葛孔明……六九一
玄德三顧草廬……七〇〇
玄德風雪訪孔明……七〇八
定三分孔明出茅廬……七一五

曹操定陶破呂布……二四一
李傕郭汜亂長安……二四八
楊奉董承救御駕……二五八
遷鑾輿曹操秉政……二七一

卷之六

呂布月夜奪徐州……二八五
孫策大戰太史慈……二九六
孫策大戰嚴白虎……三〇六
呂布轅門射戟……三一五

卷之七

曹操起兵伐張繡……三二三
袁術七路攻徐州……三四三
曹操會兵伐袁術……三五三
決勝負賈詡談兵……三五九

卷之八

夏侯惇拔矢啖眼……三六九
呂布敗走下邳城……三八一
白門樓曹操斬呂布……三九〇
曹操許田射鹿……四〇八
董承密受衣帶詔……四一三

卷之九

青梅煮酒論英雄……四二七
關羽襲斬車冑……四三七
曹操分兵拒袁紹……四四二
關羽張飛擒劉岱王忠……四四七
禰衡赤裸罵曹操……四五六

卷之十

曹操三勘吉平……四六七
曹操勒殺董貴妃……四七三
玄德匹馬奔冀州……四七七
張遼義說關羽……四八五
關羽白馬刺顏良……四九三
關羽延津斬文醜……五〇四

通俗三國志上卷 目錄

姓氏……一
或問……二七

卷之一

祭天地桃園結義……三五
劉玄德破黃巾賊……四六
安喜縣張飛鞭督郵……五一
何進謀殺十常侍……五九
董卓起兵入洛陽……六九
呂布刺殺丁建陽……八三

卷之二

廢漢帝董卓弄權……九三
曹操謀殺董卓……一〇二
曹操起兵伐董卓……一〇七
呂布大戰虎牢關……一一五
董卓燒長樂宮……一二九
袁紹孫堅奪玉璽……一三六

卷之三

趙雲大戰磐河……一四五
孫堅浮江戰劉表……一五三
司徒王允說貂蟬……一六二
鳳儀亭呂布戲貂蟬……一七三
王允定計誅董卓……一八二

卷之四

李傕郭汜寇長安……一九三
李傕專權殺樊稠……二〇〇
曹操興兵報父讐……二〇五
劉玄德北海解圍……二一二
呂布大戰濮陽……二一九
陶謙再讓徐州……二二三

卷之五

焉。而其眞僞曲直炳然於百千載之後者乎。故暇日本於東原羅貫中之說、參考陳壽之傳、而講演文義、分爲五十卷、目之曰通俗三國志。始于漢建寧、終于晉大康。雖俚詞蔓說不足以發蘊奥、要使幼學易解焉而已。洛汭有嘉長翁、淳樸而好古、與予結方外之交、累次請予録諸梓而流後昆矣。實雖不免剡藤可憐之誚、讀之者、苟有善以爲勸、惡以爲警、則幸予之原志也哉。

元祿己巳孟夏　　湖南　文山識

通俗三國志序

夫史所以載道垂鑒於後世也。故君臣之善惡、政事之得失、邦家之治亂、人才之可否、無不一而錄焉。凡讀史者、讀至其忠處、便思自己忠與不忠、讀至其孝處、便思自己孝與不孝、而不忘勸懲警懼之心、則修身之要、豈外焉哉。嗚呼漢室傾頹之日、宦官弄權、而壞亂國經、奸雄鷹揚、而割據州郡。偉哉昭烈、身起于涿郡、結義桃園、顧賢草廬、創成大業、而使天下猶知有漢、其功可謂大也矣。痛哉、後主失德、而讒佞毀忠、遂爲亡虜、而社稷一旦休、豈不惜哉。予每讀史、未嘗不嘆息痛恨於此間也。況三國人才之盛、後世鮮及

て巻を措く能はざらしむ。古來漢楚軍談と共に支那軍談物の雙璧と稱せられしは人の普く知る所にして、玄德、關羽、張飛の名を俗間に流布せしめ、世人をして當時の歷史に通曉せしめたるは蓋し本書の力なるべし。今本書を出版するに當り、流布古版本を原とし、句讀點及び假名遣を一定し、振假名を補ひて通讀の便を圖れり。文字語句の疑はしきは例によりて恣に改竄を加へず。插畫は名匠葛飾北齋の手に成れるもの、筆端生氣躍動、本文を助けて大に讀者の感興を惹くものあらん。

明治四十五年一月

校訂者　石川　核

緒言

通俗三國志五十卷は、漢の建寧より晉の大康に至る百餘年間の治亂を記せるものにして、著者の自序によれば、元の羅貫中が說に本づき、晉の陳壽が三國志を參考し、之を修飾敷衍して一部の歷史小說を成せるものなり。作者文山は元祿時代の人、傳詳ならず。

漢末王室傾頽の頃より三國鼎立して天下大に亂るゝに當り、征戰攻伐殆ど寧日なく、忠奸勇怯幾多の人物集散離合し、互に思慮を傾け智謀を盡して相爭へり。されば事件の錯綜して興味の饒多なる、史上多く其の比を見ず。著者の之を敍するや、勸善懲惡の意を寓し、其の筆致或は婉柔、或は遒勁、讀者をし

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

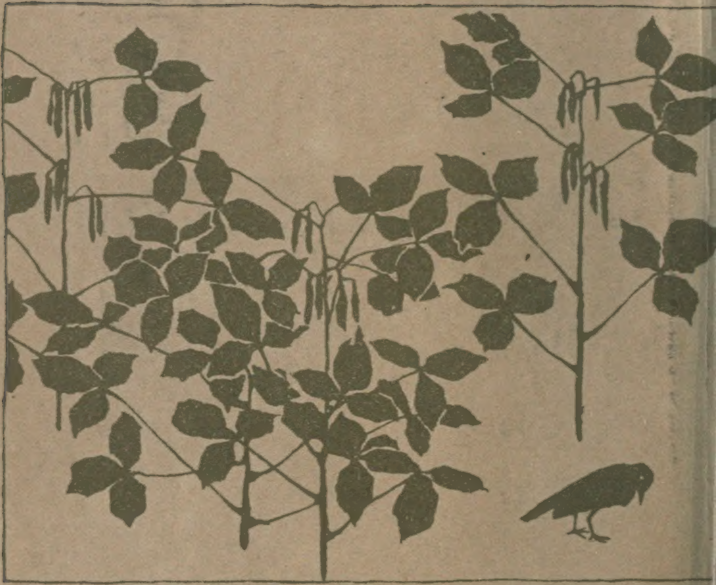
ジョンソン

DS
748
.2
C3614
1912
v.1

LIBRARY
SEP 03 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

通俗三國志

上卷



DS
748
.2
C3619
1912
v.1

East Asia

Ch'en, Shou
Tsuzoku sangokushi

n

Tsuzoku sangokushi

EAS

VOL:

DATE CHARGED: Sept. 10/69

有朋堂文庫